

国立国語研究所学術情報リポジトリ

方言の諸相：『日本言語地図』検証調査報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-06-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001271

国立国語研究所報告 84

方言の諸相

『日本言語地図』検証調査報告

DIVERSITY IN DIALECTS

——An inquiry into the reliability of the
Linguistic Atlas of Japan——

© 1985 The National Language Research Institute

刊 行 の こ と ば

国立国語研究所は、昭和 41（1966）年から昭和 49（1974）年にかけて、『日本言語地図』（全 6 巻）を刊行しました。担当研究室では、言語地図作成のための研究・作業と並行して、同書の性格を明らかにするために、さまざまな視点からの検証調査を全国各地で実施しました。本書は、この検証調査の成果を報告書としてまとめたものです。

本書には 8 篇の報告が載っております。それらは、すべて『日本言語地図』で調査の対象とした言語層とその周辺の層との関連をみるための調査であり、方法論としては、当研究所がこれまでに行なってきた社会言語学研究の一つに位置づけられるものを多く含んでおります。

調査には当研究所の 15 人のほか、下野雅昭氏（当時東北大学大学院生、現在金城学院大学助教授）が参加しました。また、調査に際しては、当研究所地方研究員、各地の教育委員会、市役所、役場、公民館、学校、ならびに、900 人を越える被調査者の方がたのご協力をいただきました。厚く御礼を申し上げます。

なお、この報告書の執筆には、目次に掲げた 8 人が当たり、また、概要の英訳には、当研究所非常勤研究員の W. A. グロータース神父の協力を得ました。

昭和 60 年 3 月

国立国語研究所長

野 元 菊 雄

目 次

刊行のことば

研究の概要	佐藤亮一	1
被調査者の人数・条件，質問方法による差	加藤正信	9
—— 高知市における調査から ——		
1. 目的と調査の概要		9
1.1. 目的		9
1.2. 調査地点		10
1.3. 調査時期・調査者		10
1.4. 被調査者		11
1.5. 調査項目		12
1.6. 調査方法		13
2. 結果と考察		20
2.1. 『日本言語地図』収載語形と検証調査結果との比較		20
2.2. 『日本言語地図』の被調査者グループと他グループの差		27
2.3. 調査方法による差		40
3. おわりに		47
一地点における年齢差と地理的分布	高田 誠	49
—— 宇都宮市における調査から ——		
1. 目的と調査の概要		49
1.1. 目的		49
1.2. 調査時期・調査者		49
1.3. 調査地点		50
1.4. 被調査者		50
1.5. 調査項目		51
1.6. 調査方法		52
2. 結果と考察		53
2.1. 作表の方法		53
2.2. 各表の説明		54

3. おわりに	89
参考文献	90
地域差と年齢差	徳川宗賢 91
——新潟県糸魚川市早川谷における調査から——	
1. 目的と調査の概要	91
1.1. 目的	91
1.2. 調査地域	92
1.3. 被調査者	93
1.4. 調査項目	96
1.5. 質問形式	97
1.6. 調査時期・調査者	97
2. 結果と考察	98
2.1. 年齢差が顕著で地域差が目立たぬもの	98
2.2. 地域差が顕著で年齢差が目立たぬもの	105
2.3. 地域差と年齢差がともに現れるもの	113
2.4. 地域差と年齢差がともに現れ、特にこの地域で発生したと考え られる表現の認められるもの	138
2.5. 複数語形の対立はあるが、地域差も年齢差も目立たぬもの	143
2.6. まとめ	146
3. 資料と補足	148
参考文献	155
地域差と場面差	佐藤亮一 157
——熊本県球磨川沿岸地域における調査から——	
1. 目的と調査の概要	157
1.1 目的	157
1.2. 調査地域	157
1. 第一次調査（語彙編）	159
2.1. 調査の方法・内容	159
2.1.1. 調査項目・調査対象場面	159
2.1.2. 調査時期・調査者	163
2.1.3. 調査地域・被調査者	163
2.2. 結果と考察	164
2.3. まとめ	202
3. 第二次調査（表現法編）	204
3.1. 調査の方法・内容	204
3.1.1. 調査項目・調査対象場面	204
3.1.2. 調査時期・調査者	206

(4) 目 次

3.1.3. 調査地域・被調査者	206
3.2. 結果と考察	207
3.3. まとめ	226
参考文献	227
地域差と世代差と場面差	沢本幹栄 229
—— 八丈島における調査から ——	
1. 目的と調査の概要	229
1.1. 目的	229
1.2. 調査地域・調査時期・調査者・被調査者	229
1.3. 調査項目・調査方法	231
2. 結果と考察	236
2.1. 語彙項目	236
2.2. 文法項目	254
2.3. まとめ	260
3. おわりに	261
参考文献	261
言語地図における意味の問題	小林 隆 263
—— 中国山地と瀬戸内海での調査から ——	
1. 目的と調査の概要	263
1.1. 目的	263
1.2. 調査地域・被調査者	264
1.3. 調査時期・調査者	267
1.4. 調査項目	267
1.5. 質問方法	271
2. 結果と考察	272
2.1. 調査結果	272
2.2. 調査項目と実際の語の意味	272
2.3. 語の意味の地域差	281
2.4. 分布境界における語の意味の様相	286
3. おわりに	291
3.1. 研究の経緯	291
3.2. その後の発展と今後の課題	292
参考文献	293
同一被調査者の10年後の再調査	佐藤亮一 白沢宏枝 295
—— 九州各地における調査から ——	

1. 目的と調査の概要	295
1.1. 目的	295
1.2. 調査者・調査時期	296
1.3. 調査項目	296
1.4. 調査地点・被調査者	297
1.5. 調査方法	298
2. 結果と考察	299
2.1. 調査結果の事例	299
2.2. 調査結果の分析	304
2.3. まとめ	316
参考文献	319
語アクセントの地域差と個人差	真田信治 321
— 南予地方での事例研究から —	
1. 目的と調査の概要	321
1.1. 目的	321
1.2. 調査地域・被調査者	323
1.2.1. 1973 (昭和 48) 年調査について	323
1.2.2. 1975 (昭和 50) 年調査について	325
1.3. 調査項目・調査方法	326
2. 結果と考察	329
2.1. 資料の作成・資料の性格	329
2.2. 代表 5 地点におけるアクセント相	330
2.3. アクセント型と「類」の統合パターン	337
2.4. アクセントの系譜関係	339
2.5. 地理的差異を示す語群のアクセント分布図 — “ゆれ” と音相 —	340
2.6. アクセント移行の実態	343
2.7. アクセントの個人差とその地点差	345
3. 今後の課題	355
参考文献	356
英文概要	381
索引	387

CONTENTS

Introduction

1. Variations according to the number of informants and the survey's methods	9
(a survey done in Kôchi city)	
2. Variations according to age inside one locality and the influence of the geographical distribution	49
(a survey done in the vicinity of Utsunomiya city)	
3. Variations according to age and locality	91
(a survey done in the Hayakawa valley, Itoigawa city, Niigata Prefecture)	
4. Variations in space (diatopic) and in situation (diaphasic) ...	157
(surveys done along the Kumagawa river in Kumamoto Prefecture)	
5. Variations according to locality, to age and to situation	229
(a survey done on Hachijôshima island, 290 Kms. south of Tokyo)	
6. The lexical field of the LAJ items	263
(a survey done in central west Japan)	
7. The same informant ten years later	295
(a Kyûshû survey)	
8. Geographical and individual tone variations	321
(a survey done in the southwest of Ehime Prefecture)	
Summary	381
Index	387

研究の概要

国立国語研究所では、1955（昭和 30）年度から語彙を中心とする分野に関する全国的方言分布調査を開始し、準備調査期間 2 年、本調査期間 8 年を経て、1964（昭和 39）年度に、全国 2400 地点での調査が完了した。調査は、当研究所員および当研究所地方研究員、あわせて 65 名の手によって行なわれた。そして、1965（昭和 40）年度から「日本言語地図作成のための研究」の題目の下に調査結果の整理・分析を行ない、1973（昭和 48）年度までに『日本言語地図』全 6 巻を刊行した。

この研究の目的は、方言の全国的分布を言語地理学的に調査・研究することによって、現代日本標準語の基盤とその成立過程、ならびに、日本語の地理的差異の成立と各種方言語形の歴史を明らかにすることにあった。その資料を得るために、調査では、マスメディアの発達や教育の成果によって標準語が全国に浸透する以前の伝統的な方言を可能な限り採集しようと意図し、したがって、被調査者は各地生えぬきの老年層の中から選ばれた。被調査者の具体的条件は「1903（明治 36）年以前出生の男子」であり、「1887（明治 20）年以降生まれの人が望ましい」とされた。被調査者として男性を選んだのは、性別を一定にするためであり、女性に統一しなかったのは、女性は結婚のために複数の地での居住歴をもつ場合が多いと考えられたためなどであった。居住歴についての条件は「生まれてから満 15 歳（言語形成期）まではよその土地（他の市町村やよその^{ちやうど}字）で生活したことがなく、それ以後よそで生活したとしても、その期間が 3 か年までの人」とされた。

伝統的な方言を採集しようとして、生えぬきのお年寄りを被調査者としても、その人達が日常生活で方言ばかりを話しているわけではない。現実には、話す

相手や話す場所などによって方言と共通語が使い分けられたり、両者が混合した表現が使われたりしている。そこで、調査では、被調査者の年齢や居住歴だけでなく、被調査者の用いることばの文体的側面にも条件をつけ、調査の対象とすることばは「被調査者自身が、くつろいだとき、親しい人たち（家族たちや幼なじみなど）と話し合うとき使うことば（いわゆる方言）」であるとした。

そのほか、言語地理学的な調査では最も基本的なことであるが、それぞれの調査項目の意味範囲を厳密に限定し、調査の際には一定の調査票を使用して、そこに掲載された質問文および付図によって調査を行なうことを各調査者に求めた。たとえば、「恐ろしい」に当たる表現は、東京地方などでは、コワイ、オッカナイ、オソロシイなどが、微妙な文体差・意味差を伴いつつ併存しているが、この項目における質問文は「大きな犬が何匹もはえかかって、いまにもかみつきそうになる。そんなときの感じをどんな다고言いますか」であり、この質問文の範囲で得た回答に基づいて全国的分布図を作成し、それに言語地理学的解釈を加えた。

以上のように、『日本言語地図』は調査の時点で全国で用いられていた日本語の中から、特定の意味範囲について、特定の年齢層・性・居住歴の者が特定の場面で話すときの表現形式を切り取って採集し、これを分布地図として描いたものである。言うまでもないことであるが、その一枚一枚の言語地図が、複雑多様な現代日本語の地域差のすべてを（あるいはその大部分を）映しているわけではない。

そこで、『日本言語地図』作成の担当研究室では、言語地図作成の仕事と並行して、『日本言語地図』の性格を明らかにするために、様々な視点からの小規模な調査を全国各地で実施した。それらは、いずれも『日本言語地図』で調査の対象とした言語層とその周辺の層との関連をみるための調査であり、これらは「日本言語地図の検証調査」として位置づけられた。

本書は、この検証調査の成果を報告書としてまとめたものである。以下、本書での掲載順に従って、それぞれの概要を記す。

『日本言語地図』では1地点につき1人の被調査者について調査しているが、その調査結果が、その土地の現実の言語をどの程度代表しているものか、言い

かえれば、『日本言語地図』の調査では、その土地の複雑な言語のどのような面を切り取っているのかという点についての検証が、加藤正信「被調査者の人数・条件、質問方法による差——高知市における調査から——」、および、高田誠「一地点における年齢差と地理的分布——宇都宮市における調査から——」である。

高知調査では、在外歴、性、年齢が『日本言語地図』調査の条件には合わない者を含む55名の被調査者を対象に、『日本言語地図』と同一の項目について調査し、『日本言語地図』の調査と同一条件の被調査者10名の結果と、〔A〕性が異なるもの（すなわち女性を調査）、〔B〕在外歴が超過（すなわち3年以上）する者、〔C〕年齢層が中年（1914～1928年生まれ）、〔D〕同若年（1951と1952年生まれ）の各10名を調査した結果とを比較すると、A、B、C、Dの順に差が大きくなること、すなわち、性による差は最も小さく、年齢による差が最も大きいという結果などを得た。なお、『日本言語地図』の高知市所載の語形と、同一条件の被調査者10名の結果とを比較すると約80%の項目が一致したが、この数値は、後述の、佐藤・白沢「同一調査者の10年後の再調査」の結果と関連するところがある。

宇都宮調査では、『日本言語地図』上の1地点（宇都宮市駒生）において、他地域からの転入者を除いた居住者のほぼ全数を調査し、そこで得られた語形と『日本言語地図』に示された地理的分布との関係を見ようとした。この地理的分布の視点を加えたことは高知調査と異なる点の一つであり、この視点は、さらに次の糸魚川調査へと発展する。

徳川宗賢「地域差と年齢差——新潟県糸魚川市早川谷での調査から——」は、方言の地域差と年齢差とを組み合わせて「グロットグラム」として表示し、方言の地理的変化と時代的変化の連動して現れる様相を明らかにしようとしたものである。調査地域は日本海に注ぐ早川に沿った集落27地点を直線上に採り、各地点平均6.5歳きざみで、計274人の生えぬきの男女を調査した。調査の結果、〔A〕方言の分布や変化が多様であること、共通語化もすべての項目に一様に圧倒的ではないこと、〔B〕変化の傾向も、河口方向からの外的影響のほか、地域中心（旧村役場所在地など）の影響力の認められるものがあること、〔C〕この地域で独自に新しい表現が生み出された例があること、〔D〕複数表現の抗

争過程で、双方の表現が新しく意味用法の分担を行なうケースがあること、などが明らかにされた。

グロットグラムは糸魚川調査において新しく開発された方言研究の手法・用語であるが、この手法を場面差研究に応用したものが、佐藤亮一「地域差と場面差——熊本県球磨川沿岸地域における調査から——」である。この研究は、熊本県南部の球磨川沿岸地域をフィールドとして、老年層を対象とし、『日本語地図』と同一の場面（親しい人たちとくつろいで話すとき）、および、それより上位の（あらたまった）いくつかの場面におけることばの地理的分布を調査し、地域差と場面差の交錯する状況を明らかにしようとした。その結果として、〔A〕下位場面には方言形、上位場面には共通語形が使われる項目が多い、〔B〕共通語形の下位場面での使われ方の程度は項目によって異なる、〔C〕上位場面で京都・大阪地方の方言形が使われるケースがある。〔D〕調査地域の中の文化的中心地で使われている方言形が、隣接地域の上位場面で使われるケースがある、などの点が明らかにされ、また、『日本語地図』の分布と、地域差と場面差とを組み合わせたグロットグラムにおける分布とは、密接な関係を有することもわかった。

糸魚川調査と球磨川調査とを組み合わせたものが、沢木幹栄「地域差と世代差と場面差——八丈島における調査から——」である。この調査では、八丈島の5つの集落のそれぞれで、祖父、父、息子の3世代がそろった家族を被調査者とし、対者（同じ家族の他の2世代、友人、恩師、島外の人）が変わると表現がどのように変わるかを調べた。結果として、〔A〕地域差は祖父・父の世代でははっきりしていることが多いが、子の世代では共通語化のために不明瞭になる項目が多い、〔B〕子の世代は祖父・父の世代よりも共通語化が進んでいるが、祖父と父の世代間の差は小さい、〔C〕場面差については、島外から来た人に対して共通語形を使うことが多く、また、祖父・父が子に話しかけるときに方言形を避ける傾向がある、〔D〕文法項目では、共通語形と方言形との混交による新しい方言形が子の世代を中心に使われるケースがある、などの点が明らかにされた。

『日本語地図』所収の多くの地図では、意味を一定にし、それを表わす語

形の変種を調査して地図化している。したがって、語形について論じられることはあっても、その語形と対応する意味については注意が払われることが少ない。小林 隆「言語地図における意味の問題——中国山地と瀬戸内海での調査から——」では、標記の2地域で、それぞれ線状に連続する60～70地点の老年層各1名を被調査者として、『日本言語地図』の「背負う」「担ぐ」などの項目に関連する支持動作の項目について細かく調査し、地点と意味とを組み合わせたグロットグラムを作成して分析した。その結果、〔A〕言語地図には被調査者の回答がばらばらであったり、分布の不鮮明なものがあり、その理由の一つとして、その言語地図の項目の意味が、複数の語の重複意味領域にあるために、被調査者が回答に迷ったということが考えられること、したがって、言語地図に載せられた語は、かならずしもその項目と意味の焦点が一致する語ばかりではない点に注意する必要があること、〔B〕同じ語形を用いる地域でも、その意味に注目すると、意味範囲の広い地域や狭い地域があったり、異なった意味で使用されている地域があったりすること、〔C〕語と語の分布境界を地点・意味ともに詳しく見ていくと、言語地図でははっきりした境界が引けるにもかかわらず、複雑で連続的な状態を示す場合も見られること、したがって、一つの項目における分布境界を、両語の境界として単純に受けとめることは危険な場合もあること、などの知見を得た。

一般に、方言調査は一定の時間的制約の下に行なわれるから、すべての質問項目について、被調査者から完全な回答を引き出すことは困難である。佐藤亮一・白沢宏枝「同一被調査者の10年後の再調査——九州各地における調査から——」では、1960年に調査した九州各地の19地点（19人の被調査者）について、1970年に再調査を実施、2回の調査の間にどのような相違が見られるかを明らかにし、相違した事例について、その要因を考察した。再調査の結果、前回調査と完全に一致した項目の率は、19地点を平均して64.0%、音声的な差の認められたものは10.9%、音声差以上の語形の差が認められたものは25.1%であった。

以上の調査研究は、いずれも『日本言語地図』と直接関連し、調査項目も、その多くを同書に求めている。しかし、本書の最後に掲げた、真田信治「語ア

クセントの地域差と個人差——南予地方での事例研究から——」は、『日本言語地図』では扱わなかった分野についての研究である。この調査の主な目的は、まず、将来の音韻を対象とする本格的な言語地理学的調査にむけての問題点をさぐることで、そして、言語地理学が体系のなかの「要素」しか扱えないとする批判に答えて、はじめからアクセントの「体系」の分布を取り上げ、構造言語地理学的立場からの解釈を試みることにある。その点で、この研究は、中国山地・瀬戸内海調査に通じる視点をもつとともに、『日本言語地図』の発展的研究とも言えるものである。調査の結果、〔A〕それぞれのアクセント体系は一本の境界線によって区画されうものではなく、互いの間に緩衝地帯が存在すること、〔B〕異なった体系が交錯する地帯では、個人差や個人のなかでの発話ごとの“ゆれ”が著しいこと、〔C〕異なった語アクセントの接触地域では、具体的なアクセント形に関して、両形の間隔的な微妙なピッチ相が観察されること、などが明らかにされた。

日本における言語地理学的研究は、『日本言語地図』作成のための調査を契機に著しく進展した。この調査と並行して柴田 武氏らによって行なわれた糸魚川市を中心とする地域の言語地理学的調査も学界に大きな刺激を与えた。広戸 惇『中国地方五県言語地図』（1965）、藤原与一『瀬戸内海言語図巻』（1974）、大橋勝男『関東地方域方言事象分布地図』（1974～1976）のような広域言語地図集が次々に刊行され、小地域を対象とする微細言語地図集の作成も相次いだ。

『日本言語地図』の刊行後は、それ自体を資料とする言語地理学的、あるいは区画論的研究や、文献との対比研究も行なわれた。このような言語地理学の隆盛には、国立国語研究所非常勤研究員として『日本言語地図』作成の仕事に参加してきたW. A. グロータース神父の力に依るところが大きい。

一方、国立国語研究所では、創立以来、地域言語の社会言語学的研究を行ってきたが、『日本言語地図』の検証調査は、その視点が言語地理学に及んだものと見ることができる。年齢差と地域差を組み合わせた糸魚川調査や、場面差と地域差を組み合わせた球磨川調査は社会言語地理学とも呼ぶべき新しい研究分野であるが、この分野の研究はその後各方面で進展しつつある。とくに地域差と年齢差とを組み合わせたグロットグラムを用いる糸魚川型調査の手法は、井

上史雄氏らによって各地の調査で用いられ、新方言の研究などへ展開した。

中国山地・瀬戸内海調査と南予調査は、西欧で興った構造言語地理学の流れを汲むものであるが、日本におけるこの分野の研究は、ようやく緒についたばかりであり、今後の発展が期待される。

以上に述べたように、『日本言語地図』の検証調査は、当面の目的は同書の性格を明らかにすることにあつたが、方法論的には、従来の言語地理学の領域を越えて、新たな世界に足を踏み入れたものと言えよう。

『日本言語地図』の検証調査は、同書の第1巻が刊行された1965（昭和40）年度に、当時の担当研究員、徳川宗賢（現大阪大学教授）、加藤正信（現東北大学教授）によって企画され、第1回の高知調査が実施された。当初は「日本言語地図作成のための研究」の付随的研究であつたが、その後、「日本言語地図の検証調査」という独立した研究課題の下に各種の調査が行なわれた。『日本言語地図』全6巻の刊行終了後、ただちにこれらの調査についての報告書を公刊すべきであつたが、担当者の大部分が他に転じたこともあって今日に延引した。

本書の執筆者は次のとおりである（掲載順）。

加藤正信（東北大学教授。元第一研究部地方言語研究室研究員）

高田 誠（日本語教育センター第一研究室長。元言語変化研究部第一研究室研究員）

徳川宗賢（大阪大学教授。元言語変化研究部第一研究室長）

佐藤亮一（言語変化研究部第一研究室長）

沢木幹栄（言語変化研究部第一研究室主任研究官）

小林 隆（言語変化研究部第一研究室研究員）

白沢宏枝（言語変化研究部第一研究室研究員）

真田信治（大阪大学助教授。元言語変化研究部第一研究室研究員）

なお、調査を担当した者は、上記のうち、小林を除く7名のほか、下記の8名である（五十音順）。

飯豊毅一（昭和女子大学教授。調査当時言語変化研究部長）

江川 清（言語行動研究部第二研究室長。調査当時同研究室研究員）

斎賀秀夫（言語計量研究部長。調査当時第三研究部長）

下野雅昭（金城学院大学助教授。調査当時東北大学大学院生）

杉戸清樹（言語行動研究部第一研究室長。調査当時同研究室研究員）

野元菊雄（所長。調査当時第一研究部長）

本堂 寛（文部省初等中等教育局教科調査官。調査当時第一研究部方言語研究室主任研究官）

宮島達夫（言語体系研究部第二研究室長。調査当時第一研究部書きことば研究室研究員）

本書の執筆に際して、1982（昭和 57）年と 1983（昭和 58）年度に企画会議、ならびに原稿読み合わせ会を東京で開催し、内容についての検討を行なった。なお、調査結果の整理については、白沢宏枝、中野文子（旧姓山本、元方言語研究室研究補助員）、湊豊子（旧姓芥川、元第二資料研究室研究補助員）および、アルバイターの方がたが担当した。本書の編集（事務連絡・原稿整備）に関しては、真田信治（現大阪大学助教授）と小林隆の努力によるところが大きい。また、英文概要執筆については、非常勤職員 W. A. グロータース神父の協力を得た。

調査に際しては、国立国語研究所地方研究員、各地の教育委員会、市役所、役場、公民館、学校、ならびに被調査者の方がたの協力を得た。ここに記して、厚く御礼申し上げる。

被調査者の人数・条件、 質問方法による差

——高知市における調査から——

1. 目的と調査の概要

1.1. 目 的

『日本言語地図』は、1957（昭和 32）年から 1965（昭和 40）年までの間、全国 2400 地点で、原則として 1903（明治 36）年以前の生まれの男性で、3 歳から 15 歳までの、いわゆる言語形成期をその集落で過ごし、以後、他集落に居住しても 3 年以内である土着の人 1 名について、主として謎々式質問方法により調査したものである。そして、この結果によって得られた情報が地図上に符号化して示されているのである。この地図中の、ある地点における、1 つないし 2 つの語形というものが、はたして現実の方言の全貌、ないし真の姿を表わしているものであろうか、言いかえれば、地図上の符号は、その土地の複雑な言語現象のどのような断面を切り取っているものであろうかという疑問が起こる。

1965（昭和 40）年に『日本言語地図』の第 1 集を作成するにあたって、このような疑問に関係者自身が答えねばならぬことを痛感し、大きく、次の 3 点を目的として調査を行なったものである。

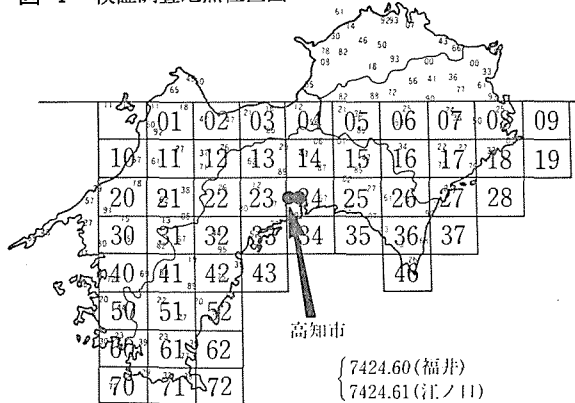
- (1) 「日本言語地図作成のための調査」のような 1 地点 1 人の被調査者というものは、同じ土地の同じ条件の人多数を調べた場合の優勢語形とどの程度一致しているか。
- (2) 被調査者に年齢、性別、居住歴の条件をつけて調査した結果は、これらの条件からはみ出る人達の言語とどのような差があるのか。

(3) 質問方法を変えた場合、回答結果はどのように違ってくるか。

1.2. 調査地点

高知市福井町(『日本言語地図』の地点番号 7424. 60)を北に含み、南に高知市街地の西端を含む約 1.5 km 四方の範囲(図 1, 2 参照)とした。ここは高知駅から国鉄土讃線で 3 つ西になる旭駅の裏側と表側にまたがる。北に

図 1 検証調査地点位置図



福井町という高知市郊外の農村集落、南に高知市街地の端を含む、ということは都市と農村の両方にわたり、日本の平均的な職業構造をもった区域と見なすことができよう。なお高知市を選んだのは、周囲を山にかこまれ、社会的、言語的にも落ちついており、分析に便利であると予想されたことによる。

1.3. 調査時期・調査者

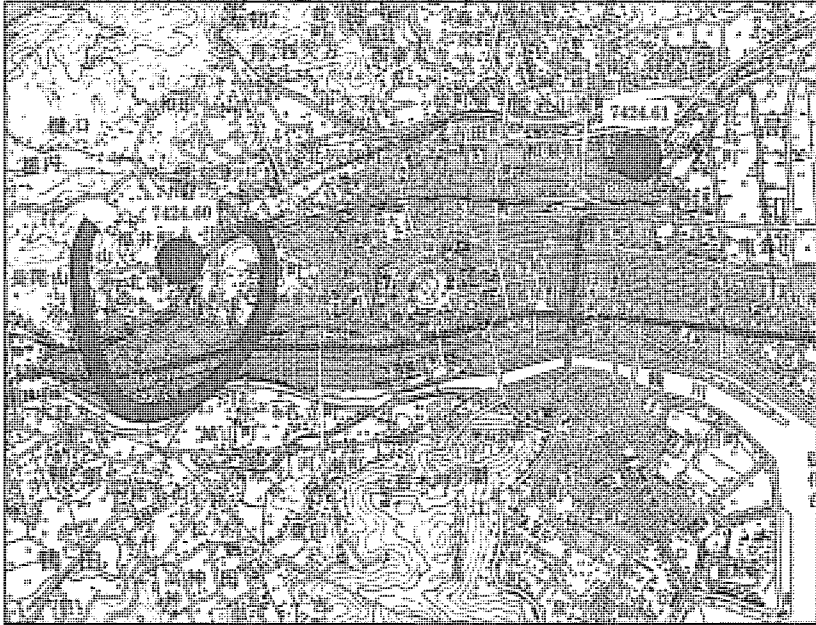
調査を行なった時期は 1965 (昭和 40) 年 6 月 12 日から 6 月 18 日までの 6 日間である。

調査者は次の 2 名 (所属は調査当時) である。

徳川宗賢 (第一研究部地方言語研究室研究員), 加藤正信 (同)。

なお、この区域北端の福井集落については、すでに「日本言語地図作成のための調査」として、国立国語研究所地方研究員の土居重俊氏 (当時、高知大学教育学部教授) が、1959 (昭和 34) 年に、調査している。

図 2 検証調査地点範囲図



●は『日本言語地図』調査地点 ○は検証調査区域

1.4. 被調査者

次の5種類のグループから合計55名を調査した。

1. 『日本言語地図』の条件に合致する男性（以下、「老男適」または「老」と略称する）。……………15名

ただし、このうち10名を通常の調査の対象とし、5名は翻訳式調査の実験のためとした。

2. 上記と同じ老年男性であるが、在外歴が、前記『日本言語地図』の規定を超過しているもの（以下、「老男不適」または「不」と略称する）。……………10名

3. 居住歴・年齢とも『日本言語地図』の条件と同じであるが女性（以下、「老女」または「女」と略称する）。……………10名

4. 居住歴・性別は『日本言語地図』と同じであるが、年齢がそれより若く、大正生まれて当時40歳代の中年男性（以下、「中男」または「中」

と略称する)。……………10名

5. 在外歴のない昭和26・27年生まれで当時中学2年生の男子生徒(以下,
「若男」または「若」と略称する)。……………10名

被調査者全員の生年、職業(場合によっては家庭の職業)、在学年数、在外年数、両親の出身地を表1(15ページ)に示した。

1.5. 調査項目

「日本言語地図作成のための調査」の285項目の中から、高知市において方言的な語形が得られそうなもの、人によって違いの出そうなものを、高知市およびその付近数地点の『日本言語地図』用カード(地方研究員が提出したもの)、宮地美彦『土佐方言集』(1937)、高知県女子師範学校『土佐方言の研究』(1936)、土居重俊『土佐言葉』(1958)を参照して90項目を選び、それに「肥える」を加え、予想語形をも付した検証調査票を作成した。上記の資料で共通語と同じ1語形しか得られなかった項目は、検証調査で多数を調べても差が出ないと思われるので調査を省略した。以下、調査項目を調査票の順に掲げる。各項目の左側に、「日本言語地図作成のための調査票」の番号をくゝ内に、印刷された『日本言語地図』の巻数をローマ数字で、地図番号を算用数字で()内に示した。

- | | |
|-----------------------------------|------------------------------------|
| 1. かまきり(蟻螂)<001>(V, 229・230) | 15. ふけ(靈脂)<075>(III, 105) |
| 2. くものす(蜘蛛の巣)<004>(V, 234) | 16. ものもらい(麦粒腫)<036>(III, 112) |
| 3. かたつむり(蝸牛)<005>(V, 236・237・238) | 17. においをかく(匂いを嗅ぐ)<042>(II, 85・86) |
| 4. なめくじ(蛞蝓)<006>(V, 239) | 18. きなくさい(きな臭い)<040>(I, 34・35) |
| 5. かえる(蛙)<008>(V, 218) | 19. よだれ(涎)<045>(III, 119) |
| 6. へび(蛇)<010>(V, 226) | 20. した(舌)<048>(III, 117) |
| 7. まむし(蝮)<011>(V, 228) | 21. しおからい(鹹い)<049>(I, 39) |
| 8. おそろしい(恐ろしい)こわい(怖い)<237>(I, 42) | 22. すっぱい(酸っぱい)<053>(I, 41) |
| 9. とかげ(蜥蜴)<012>(V, 224) | 23. せきをする(咳をする)<055>(II, 87・88) |
| 10. かなへび(金蛇)<013>(V, 225) | 24. あざ(痣)<058>(III, 132) |
| 11. さかな(魚)<254>(V, 216) | 25. あぎができる(痣ができる)<059>(II, 80) |
| 12. いくつ(何歳)<014>(VI, 293) | 26. ほくろ(黒子)<060>(III, 133) |
| 13. いくら(幾ら・値段)<015>(I, 50) | 27. きゅうをすえる(灸を据える)<022>(II, 83・84) |
| 14. つむじ(旋毛)<032>(III, 102) | 28. せなか(背中)<260>(I, 7) |

29. おんぶする(幼児を負う) <261> (II, 64)
30. しょう(包みを背負う) <262> (II, 65)
31. かつぐ(材木を担ぐ) <264> (II, 66)
32. かつぐ(天秤棒を担ぐ) <265> (II, 67)
33. かつぐ(二人で担ぐ) <266> (II, 68)
34. なかゆび(中指) <065> (III, 123)
35. くすりゆび(薬指) <066> (III, 124)
36. しもやけ(凍傷) <068> (III, 127)
37. かかと(踵) <069> (III, 129)
38. くすぐったい(揉ったい) <070> (I, 32・33)
39. くすぐる(揉る) <234> (II, 81・82)
40. あぐらをかく(胡座をかく) <071> (II, 52)
41. おんな(女) <081> (III, 137)
42. ふとる(肥る) <『日本言語地図』になし>
43. やしゃご(玄孫) <241> (III, 140)
44. かたぐるま(肩車) <086> (III, 149・150)
45. おにごっこ(鬼ごっこ) <088> (III, 147)
46. きのう(昨日) <103> (VI, 278)
47. おととい(一昨日) <104> (VI, 276)
48. ききおととい(一昨昨日) <105> (VI, 275)
49. やのあさって(明々後日) <111> (VI, 286)
50. まぶしい(眩しい) <115> (I, 30・31)
51. こおる(水が凍る) <127> (II, 96)
52. こおる(手拭が凍る) <128> (II, 97)
53. つゆ(梅雨) <118> (VI, 254)
54. ゆうだち(夕立) <119> (VI, 255)
55. かみなりがおちる(雷が落ちる) <123> (II, 95)
56. じしん(地震) <135> (VI, 263)
57. にわ(庭) <247> (IV, 193)
58. いど(井戸) <147> (IV, 197)
59. ゆげ(湯からの湯気) <152> (VI, 266)
60. ゆげ(御飯からの湯気) <153> (VI, 267)
61. けむり(煙) <271> (VI, 265)
62. すりこぎ(掃粉木) <157> (IV, 163)
63. せともの(瀬戸物) <157> (IV, 161)
64. かかみ(鏡)〔音声〕 <280> (I, 1)
65. かりる(借りる) <099> (II, 71)
66. おおきい(大きい) <158> (I, 17・18・19)
67. ちいさい(小さい) <159> (I, 22・23)
68. ふとい(太い) <160> (I, 20)
69. ほそい(細い) <161> (I, 24)
70. かかし(案山子) <185> (IV, 190)
71. もみがら(粃殻) <178> (IV, 171)
72. むか(糠) <179> (IV, 172)
73. じゃがいも(馬鈴薯) <186> (IV, 174・175)
74. さといも(里芋) <187> (IV, 177・178)
75. きつまいも(甘藷) <188> (IV, 176)
76. とうもろこし(玉蜀黍) <190> (IV, 182)
77. かぼちゃ(南瓜) <191> (IV, 180)
78. なす(茄子) <282> (IV, 181)
79. たんぽぽ(蒲公英) <193> (V, 241)
80. つくし(土筆) <194> (V, 244)
81. すぎな(杉菜) <195> (V, 243)
82. きのこ(茸) <079> (V, 245)
83. とげ(裂片) <199> (V, 249)
84. とげ(刺・棘) <200> (V, 250)
85. おうま(牡馬) <214> (V, 202)
86. めうま(牝馬) <215> (V, 203)
87. おうし(牡牛) <219> (V, 207)
88. めうし(牝牛) <220> (V, 208)
89. もぐら(土竜) <223> (V, 211)
90. ふくろう(梟) <224> (V, 212)
91. とさか(鶏冠) <230> (V, 215)

1.6. 調査方法

各項目とも、『日本言語地図』の調査票と全く同じ質問文と付図(絵)を用いた「謎々式」で質問して、いったん回答が得られるなり、また、まれに無回答であったものをまず調査票に記入する。次に、前記の資料によって得られている予想語形を各項目、1～3語調査票に用意しておき、「誘導式」により質問し、それらの回答状況を、

14 被調査者の人数・条件、質問方法による差

- a. そういえば、自分もその語を使う（「昔、使ったことがある」は注記）。
- b. 聞いたことはあって知っているが、自分は使わない。
- c. 聞いたことがなく、意味もわからない。

の3段階に分けて調査票に記入した。これらについての各項目、各語形を被調査者別に一覧表にしたのが表1（項目6，9，10と26以降は省略）である。

また、これとは別に、『日本言語地図』の条件に合う老年層男性5名について、たとえば、

1. 虫のカマキリのことを何と言いますか。
2. クモノスのことは？
3. カタツムリは？
4. 台所などに出るナメクジは？
5. カエルは？
6. ヘビのことは？
7. マムシは？
8. オソロシイという意味のコワイというのに当たることばは？
9. 虫のトカゲのことは？
10. では、カナヘビは？
11. 川や海にいるサカナのことは？
12. 年などを聞くときのイクツということばは？

<以下省略>

のような調査票を作成し、特別説明を加えず、機械的に共通語の方言訳を求める「翻訳式」により調査を行なった。

16 被調査者の人数・条件、質問方法による差

被調査者		2.くものす			3.かたつむり			4.なめくじ		5.かえる		7.まむし		
グループ	番号	共	クモノエ	クモノエバリ	共	ナメクジ	ンデムシ	共	ナメクジラ	共	ヒキ	共	ハメ	ハミ
1 老男適	10	○			○		○	○	a	○	○	○	a	○
	11	○	○	a	○		○	○	○	○		○	a	○
	12	○	○	b	○		○	○	b	○	○		a	○
	13	○	○	b	○		○	○		○	○		b	○
	14	○	○		○	○	○	○		○	○			○
	15	○	a		○		○	○	○	○		○	○	○
	16	○	○		○		○	○		○	a	○	○	○
	17	○	a	b	○		○	○	a	○	○	○	a	○
	18	○			○		○	○		○	a			○
	19	○	a		○	a	○	○	a	○	a			○
2 老男不適	20	○	a		○	a		○		○	○		b	a
	21	○			○			○		○		○		○
	22	○	○		○	b		○		○	b	○	a	○
	23	○	a		○	b		○		○		○		○
	24	○	○		○			○	b	○	○	○	b	○
	25	○			○			○		○	○	○	○	b
	26	○	○		○			○		○	a	○	a	b
	27	○	○		○	○		○	b	○	○	○	○	○
	28	○	b	b	○			○	b	○	a	○	b	○
	29	○	○		○			○		○		○	○	○
3 老女	30	○	○		○		○	○		○	○		b	○
	31	○			○			○		○	a		b	○
	32	○	a	b	○		○	○	a	○	○	○	○	b
	33	○	○	b	○		○	○		○	a	○	b	○
	34	○	b	b	○		○	○		○	○	○	b	○
	35	○	○		○	a		○	a	○	○		○	b
	36	○	○		○			○		○	a	○	a	○
	37	○	a	a	○			○	b	○	○	○	○	○
	38	○	a	a	○			○		○	a	○	○	○
	39	○	b	b	○			○	○	○	a	○	b	○
4 中男	40	○	○		○	a	○	○	a	○	a	○	b	○
	41	○			○		○	○		○	○	○	○	b
	42	○	b		○		○	○		○	○	○		○
	43	○			○		○	○		○	a	○	b	○
	44	○			○		○	○	a	○	a	○		a
	45	○	○		○			○		○	a	○	b	○
	46	○			○			○		○		○	b	○
	47	○	b		○			○		○	a	○	b	○
	48	○	a		○		○	○	a	○	○	○	b	○
	49	○			○			○		○	a	○	b	○
5 若男	50	○			○			○		○		○	b	
	51	○			○			○		○	○	○	○	b
	52	○			○		○	○	a	○	a	○	a	
	53	○			○		○	○		○	a	○		
	54	○			○		○	○		○	a	○		
	55	○			○			○		○		○	a	
	56	○			○		○	○		○	b	○		b
	57	○		b	○		○	○		○		○		
	58	○			○			○		○		○	b	b
	59	○			○			○		○		○		

被調査者		8.こわい			11.さかな			12.いくつ		13.いくら		14.つむじ			
グループ	番号	共	オトロシイ	シオソロ	共	イオ	ウオ	共	ナンボ	共	ナンボ	共	マイツジ	マイマイ	マイ
1 老男通	10	○	a			○	○	○	a	○	a			a	○
	11		a			a	○	○	b		b		a		○
	12	○	○			b	○	○			○			a	
	13		a			b	○	○	b		○			a	○
	14	○	b				○				○			a	
	15	○	a		○	b		○	a	○	○		b	a	○
	16	○	b		○			○	b		○			○	
	17	○	a		○	a		○		○	○	a		○	○
	18	○	a		○	b		○	a		○	a		○	
19	○	a		○	b		○	a	○	a		b	○		
2 老男不通	20	○	○		○	a		○	a		○				
	21		a		○	a		○			○		○	○	○
	22		b				○	○	a		○		a	a	
	23	○	a		○	a		○	b		○				○
	24	○	a		○	b	b				○			○a	○
	25	○	a		○	a	○	○	b		○				
	26	○	a		○			○	b		○		b	○	
	27			○	○		○	○		○	b				○
	28	○	b		○	b	○	○	a		○		b	b	○
29	○	a		○		○	○	a		○		a		○	
3 老女	30	○	○		○		○	○	b		○			○	
	31	○	a		○		○	○		○	○				○
	32	○	a		○		○	○	b	○	a			b	
	33	○	a		○	a		○			○		○	a	
	34	○	a		○	b	○	○	b	○	○		b	○	
	35	○	a		○	b		○	a		○		a	○	
	36	○		○		b	○	○			○			a	○
	37	○	a				○	○	a		○		b	a	○
	38			○	○		○	○			○			○	○
39		b	○	○	b		○		○	a			b	○	
4 中男	40	○	a		○		○	○			○		b	a	○
	41	○	b	○	○		○	○		○	a			○	
	42	○	a		○		○	○	a		○			○	
	43	○	a		○		○	○	a		○			○	
	44	○	b		○		○	○			○		a	a	○
	45	○	b		○	b	○	○			○			a	○
	46	○	a		○		○	○		○	○			○	
	47	○	b		○	a	○	○	a	○	a			○	
	48	○	a		○		○	○			○			a	
49	○	a		○	b		○			○			○		
5 若男	50	○	a		○		○	○		○	○			b	○
	51		○		○	a		○		○	○			b	
	52		a				○	○	a		○			○	
	53	○			○			○	a	○	a			b	
	54	○	a					○	a		○				
	55	○			○		b	○		○	○	○		a	
	56	○	a		○			○	a		○				
	57	○	b		○		b	○		○	○			○	
	58	○		○	○			○			○				
59			○	○			○	a		○					

18 被調査者の人数・条件、質問方法による差

被調査者	15. ふけ		16. ものもらい		17. (においそ) かぐ			18. きなくさい				19. よだれ		
グループ	番号	共	クケ	共	メボ	共	～カザム	～カム	共	ケブラ クサイ	クケサ ムライ	クコサ ゲイ	共	ヨーグレ
1 老男適	10	○	○		○		a	○		a			○	a
	11		○		○			○		○			○	a
	12		○		○			○		○			○	a
	13	○		b		○		a		○			○	
	14	○			○			b		b			○	
	15	○	a		○		○	○		a	○		○	
	16		○		○		○	○					○	
	17	○	a		○	a	a	○		○			○	
	18		○		○		a	○		a			○	
19	○			○		a			a			○		
2 老男不適	20	○	○		○	○		a		○			○	
	21		○		○			○		○			○	
	22		○		b	○	b			a			○	a
	23		○		a			○					○	b
	24		○		○			○		○			○	
	25		○		○		b	○		○			○	
	26	○	a		○			○					○	a
	27		○		○		b	○		a			○	
	28		○		a	○	b	b		○			○	
29		○		○			○		○			○	a	
3 老女	30		○		○			○		○			○	b
	31		○		○		b	○		a	○		○	a
	32	○	a		○			○					○	
	33		○		○	○	a	a		○			○	
	34		○		○		a	○		○			○	
	35	○			○			○		b	○		○	
	36	○	b		○		a	a		○			○	
	37		○		○		○	a		○			○	b
	38		a		○		b	○		○			○	b
39	○			○		b	○		a			○	b	
4 中男	40	○	○		○		a	○		a	○		○	
	41	○			○	○	b	a				○	○	b
	42	○			○	○		b		a			○	
	43	○			○	○		a					○	
	44		○		○	○	a	a		a		○	○	a
	45	○	a		○		b	○		○			○	
	46	○			○			○				○	○	a
	47		b		○		b	○		a			○	
	48		○		○		b	○		○			○	
49	○	b		○		b	b		b		○	○		
5 若男	50	○			○			○					○	
	51	○	a		○		b	b				○	○	a
	52	○			○	○		a					○	
	53	○			b	○		a					○	
	54	○			a	○		a				○	○	
	55	○			○		b	b					○	
	56	○			○	○		b				○	○	
	57	○			○			○					○	
	58	○			○	○							○	
	59	○			○	○							○	

被調査者		20.した		21.しおからい		22.すっぱい		23.せきをする		24.あざ		25.あざができる			
グループ	番号	共	ペロ	共	カライ	シオハイイ	共	スイ	共	タゴル	共	ウミジルシ	共	クチミル	ナアロ
1 老男通	10	○	○		○	a		○		○		a		○	
	11	○	a		○	a		○	○	a		○		a	
	12	○	a		○	a		○		○		○		○	
	13	○	a		○	a		○		○		○		○	
	14		○		○	a		a		○		a		a	
	15	○	a		○	a		○	○	○		a		a	
	16	○	b		a	a		○	○	○		○		○	
	17	○	a		○	a		○	○	a		○		a	
	18	○	○					a	○	a		a		b	○
	19	○	a		○	○		○	○	a		a		○	
2 老男不通	20	○	a		○	a		○		○		○		○	
	21	○	a		○	a		○	○	○		a		○	
	22	○	a		○	b		○	○	a	○	b		○	
	23	○	a		a	a		○		○		○		○	
	24	○	a		○	b		○		○		○	○	○	
	25	○	a		○	a		○	○	a		○		a	
	26	○	○		○	a		○		○		○		○	
	27	○	b	○	a	b		○	○	a		○		○	
	28	○	○		○	b		○		○		○		○	
	29		b		○	a		○		○		○		○	
3 老女	30	○	b		○			○	○	a		a		○	
	31	○	○		○	a		a	○	a		○		○	
	32	○	○	○	a	a		○		○		○		○	
	33	○	a		○	a		○	○	a		○		○	
	34	○	○		○	a		○		○		○		○	
	35	○	b			a		○	○	○		○		○	
	36	○	b			○		○	○	○		○		○	
	37	○	○		○	a		○	○	a		○		○	
	38	○	b		○	○		a	○	a		○		a	
	39	○	a		○	a		○	○	a		○		a	
4 中男	40	○	○		○	b		○	○	○		○		○	
	41	○	a		a	b		○	○	○		○		○	
	42	○	○		○	a	○	a		○		○		a	
	43	○	a		a			○	○	a	○	a		a	
	44	○	○		○			○		○		○		○	
	45	○	a		○	○		○		○		○		○	
	46	○	○		○			○		○		○		○	
	47	○	a		○	○		○		○		○		○	
	48	○	a		○	a		○		○		a		○	
	49	○	○		○	b	○	a		○	○			○	
5 若男	50	○	○		○	b		○		○				b	○
	51	○	a	○	a	b	○	a		○	○			b	
	52	○	a		○			○	○	○	○				○
	53	○	a		○		○	a		○					
	54	○	a		○			○	○	a					
	55	○	a		○			○		○	○				
	56	○	○		○			a		a					
	57	○	a		○			b		b	○				
	58	○	a		○			a		a					
	59	○	a		○			a		a	○				

2. 結果と考察

2.1. 『日本言語地図』収載語形と検証調査結果との比較

『日本言語地図』は、高知市で、

7424. 60 高知市福井町 楠瀬照美氏（明治 21 年生まれ、在外歴 1 か月）

1959（昭和 34）年調査

7424. 61 高知市江の口 小川清彦氏（明治 24 年生まれ、在外歴なし）

1963（昭和 38）年調査

の 2 地点を当時高知県地方研究員の土居重俊氏が担当している。検証調査を行なった地域は図 2 に示してある通り、福井町を北端に含む農村から市街地にかけてであり、江の口はこの区域の東隣の梓外にあるので、ここでは、まず 7424. 60 の福井町の楠瀬氏に対する調査結果と、この検証調査の「老男適」10 名の謎々式のみによる結果とを比較したいと思う。

検証というものが、『日本言語地図』のある地点だけに関する再確認のためであれば、調査地点そのものであった福井町からだけ 10 名とか、江の口からだけ 10 名とか調べることも考えられた。しかし、今回の検証の目的は、『日本言語地図』が全国 2400 地点で、5 万分の 1 地形図から 2 ないし 3 地点しか選ばれていないが、そこに収蔵されている語形が、その周囲を含むある範囲の多くの人々に使われている代表的な言語を正確に反映しているかどうかということにもあった。そこで福井町そのものは農村集落、江の口は高知駅裏の市街地ということもあって、それらの一方だけによる特殊性の出ることを避け、郊外農村である福井町から高知市街地の一部にかけての日本の代表的な職業を適宜含む地域で、しかも同一の小・中学校の学区内である「図 2」の区域を定め、そこでの 10 名の結果と『日本言語地図』の福井町収載語形との比較を行なったのである。

1名対10名というテーマの一般論から言えば、土居氏の福井町調査と関係なく、今回の調査の10名の中のある1人の結果と、それを含む全体の結果とをつき合わせて分析し、ある1人だけ選んだ結果の确实性の度合いを論ずる方法も当然ありうる。しかし、今回は『日本言語地図』の調査地点を区域内に含んでいるので、直接にその結果と同地域における同条件10名についての我々の調査の結果とをつき合わせることにした。

土居氏による1959(昭和34)年の調査は、この年度ではまだ「日本言語地図作成のための調査」の第3・第4調査票が追加されていなかったもので、地図と検証の両方にある90項目から第3・第4調査票の15項目が除かれ、75項目について対照することになる。それらは表2の一覧表に示した。

表2は、それら75項目について、まず左側に、『日本言語地図』7424.60(高知市福井町)で得られている語形を併用処理(併用の場合の一方が共通語と同形でそれに〈新しい〉、〈共通語的だ〉という注のある場合はそれをカットし方言特有語だけの単用扱いとする)等を行なって地図に登載した形をカタカナで示し、その語形を今回の検証調査10名中何名が謎々式調査で答えたかを示した。左側には『日本言語地図』の福井町には登載されていないが、今回の検証調査で得られた語形を掲げ、10名のうち何名が回答したものを語形ごとに数字で示した。

もし、この区域全体を1地点として10名調査の結果を総合して地図に載せるとしたらどうなるかについては、いろいろな方式があろうが、単純に、その項目で10人中最多回答のあった語形、および、半数の5人以上からの回答があった語形は複数でも採用すべき「優勢語形」と認定し、それらを表2で太字で示してみた。

その結果、項目として吟味すれば、

地図収載語形が、検証でも優勢語形としてそのまま認定されたもの

(「1. かまきり」等、表2「判定」欄で○印) 38項目

地図収載語形のほか、検証で他のもう1つの優勢語形が出てきたもの

(「5. かえる」等、表2で◎印) 16項目

地図収載の併用2語形のうち、検証で一方のみが優勢語形と認められたも

表 2 『日本言語地図』(高知市福井町 7424.60) 収載語形との一致状況

凡例 太字は検証調査の回答数からみた優勢語形。ただし10名中5名以上からの回答のあった語形が2つある場合は両形を併用で優勢語形とみなした。判定欄の○印は『日本言語地図』収載語形が上記優勢語形と一致する項目、●印は一致していない項目、◎印は併用で半分一致する項目。

項 目	『日本言語地図』収載語形		非 収 載 語 形		判 定
	回答者	語の内訳	回答者	語 の 内 訳	
1 かまきり	7	カマキリ 7	6	エンボーシ 3 イボーシ 2 カマタテ 2 エンボ 1	○
2 くものす	8	クモノス 8	2	〜エ 2	○
3 かたつむり	9	カタツムリ 9	5	デンデンムシ 4 ナメクジ 1	○
4 なめくじ	9	ナメクジ 9	2	ナメクジ 2	○
5 かえる	5	ヒキ 5	5	カエル 5	◎
6 へび	10	ヘビ 10	1	ミーサン 1	○
7 まむし	8	ハミ 8 ハメ 2	3	マムシ 3	◎
9 とかげ	0	〜トカゲ 0 オンバゴゼ 5	10	トカゲ 8 オンバ 1 エシマオンバ 1	◎
10 かなへび	5	オンバゴゼ 5	7	トカゲ 7 オンバ 1	◎
12 いくつ(何歳)	9	イクツ 9			○
13 いくら	6	ナンボ 6	6	イクラ 6	◎
14 つむじ	3	マイマイ 3	6	マイ 5 ウズマキ 1	◎
15 ふけ	5	クケ 5	6	フケ 6	◎
16 ものもらい	9	メボ 9			○
17 かぐ(臭いを)	2	〜カグ 2	8	〜カム 7 〜カザム 1 ニオウ 1	◎
18 きなくさい	4	ケブラクサイ 4	6	ケムラクサイ 1 クサイ 2 ケブタクサイ 1 キブタイ 1 ケムリクサイ 1	○
19 よだれ	10	ヨダレ 10			○
20 した	3	ベロ 3	9	シタ 9	◎
21 しおからい	8	カライ 8	4	シオガライ 2 シオハイイ 1 シワイ 1	○
22 すっぱい	8	スイ 8	4	スッバイ 3 スッポイ 1	○
23 せきをする	6	タゴル 6	6	セキオスル 6	◎
24 あざ	5	ウミジルシ 5	1	シミ 1 ハンテン 1	○
25 あざができる	5	クチミル 5	2	アオナル 1 フクロウニナル 1	○
26 はくろ	9	アザ 9	1	ウミジルシ 1	○
27 きゅう	6	モグサ 4 ヤイト 3	7	キュー 7 オキュー 2 センコー 1	◎
34 なかゆび	7	タカタカユビ 7	4	ナカユビ 4	○
35 くすりゆび	5	ベニサシユビ 5	3	クスリユビ 2 ベニユビ 1	○

項 目	『日本言語地図』収載語形		非 収 載 語 形		判 定
	回答者	語の内訳	回答者	語 の 内 訳	
36しもやけ	5	シモバレ 5	6	シモヤケ 5 トーショー 1	㊦
37かかと	4	キビス 4	9	カガト 8 カカト 1	㊦
38くすぐたい	9	コソバイ 9	1	クスバイ 1	○
39くすぐる	6	コソバス 6	4	クスバス 1 コソバカス 1 サグル 1 カク 1	○
40あぐらをかく	8	ヒザクム 8	3	ヒザオカク 2 アグラオカク 1 ヤグラオカク 1	○
41おんな	8	オンナ 8	2	オナゴ 2	○
44かたぐるま	5	カタクマ 5	6	クビンマ 3 カタグルマ 1 カタクミ 2 カタクンマ 1	○
45おにごっこ	0	オニ 0	9	オニゴッコ 4 オニサン 4 オニゴト 1	㊦
46きのう	5	キニョー 5	6	キノー 6	㊦
47おととい	5	オトツイ 5	6	オトトイ 6 イッサクシツ 1	㊦
48きおととい	1	サキオトツイ 1	8	サオトツイ 4 サオトトイ 3 サイツイ 1	㊦
49やのあさって	4	NR 4	6	サシアサッテ 5 ゴアサッテ 1	㊦
50まぶしい	0	マバイ 0	10	ババビイ 4 バババイ 3 マバヒイ 2 ババユイ 2 マバイー 1	㊦
51こおる(水が)	10	コール 10			○
52こおる(手拭が)	8	コール 8			○
53つゆ	10	ナガセ 10 ナガシ 0	2	ツユ 2	○
54ゆうだち	6	サダチ 6	6	ニワカアメ 5 サグチアメ 1	㊦
55おちる(雷が)	4	～アマル 4	6	～オチル 5 ～コケル 1	㊦
56じしん	10	ジシン 10			○
58いど	10	インド 10			○
59ゆげ(お湯の)	6	ユゲ 6	6	ホケ 5 ジョーキ 1	㊦
60ゆげ(御飯の)	6	ホケ 6	5	ユゲ 5	㊦
62すりこぎ	10	レンギ 10			○
63せとの	6	カラツ 6	4	カラツモン 2 ヤキモノ 1 トーキ 1	○
64かがみ	9	カンガ〔～〇〕ミ 9	1	カンガ〔～ヰ〕ミ 1	○
65かりる	10	カル 10	1	カリル 1	○
66おおい	8	フトイ 8	3	オーキイ 3	○
67ちいさい	2	コマイ 2	10	ホソイ 6 チーサイ 6 チンマイ 2 チマイ 1	㊦
68ふとい	7	フトイ 7	5	オーキイ 5	㊦
69ほそい	6	ホソイ 6	7	チーサイ 5 チマイ 2 コマイ 2 チサイ 1	㊦
70かかし	0	オドロカシ 0	10	カガシ 8 オドラカシ 3 カカシ 1 オドラカシ 1 デコ 1	㊦
71もみから	6	スリヌカ 6	6	モミガラ 5 コメガラ 1	㊦
72ぬか	9	ヌカ 9	1	コメヌカ 1	○
74さといも	9	タイモ 9	3	サトイモ 3	○
75さつまいも	7	カライモ 7	5	サツマイモ 5	㊦
76とうもろこし	7	キビ 7	7	トーキビ 6 トーモロコシ 1	㊦
77かぼちゃ	1	ボフラ 1	10	ボーフラ 5 カボチャ 4 ボブラ 2 ナンキン 1 トーサマ 1	㊦
79たんぼぼ	10	タンボボ 10			○
80つくし	5	ヒガンボーズ 5	1	ツクシ 1	○

24 被調査者の人数・条件、質問方法による差

項 目	『日本言語地図』収載語形		非 収 載 語 形				判 定	
	回答者	語の内訳	回答者	語 の 内 訳				
81すぎな	0	スギナ 0	8	NR 5	マツナグサ 3	ツギマツ 2	マツバグサ 1	●
82きのこ	5	ナバ 5	1	タケ 1				○
83とげ(竹の)	7	バラ 7 ノギ 0	4	トゲ 2	ササリ 1	モギ 1		①
84とげ(いばらの)	10	バラ 10	1	トゲ 1				○
87おうし	8	コットイ 8	2	オン 1	オンツ 1			○
88めうし	1	メンウシ 1	7	メウシ 2	メスウシ 1	メシ 1	メンツ 2	メス 1
89もぐら	0	オゴロ 0	9	オゴロモチ 7	モグラ 2	ムングラモチ 1	ムグラモチ 1	●
90ふくろう	8	フルツク 8	4	フクロー 3	フロツク 1			○
91とさか	0	トサカ 0	7	カムト 4	カプト 3			●

表 3 『日本言語地図』(高知市福井町 7424.60) 収載語形の回答率別項目分布
凡例 () 内は扱った75項目における%

収載語形 項目	100% <10人>	90%	80%	70%	60%	50%
項目数	10(13.3)	10(13.3)	9(12.0)	6(8.0)	10(13.3)	12(16.0)
累計項目数	10(13.3)	20(26.7)	29(38.7)	35(46.7)	45(60.0)	57(76.0)
項 目 内 訳	6へび 14よだれ 51こおる(水が) 53つゆ 56じしん 58いど 62すりこぎ 65かりる 79たんばば 84とげ(いばらの)	3かたつむり 4なめくじ 12いくつ(何歳) 16ものもらい 26ほくろ 38くすぐったい 64かがみ 72ぬか 74さといも 90ふくろう	2くものす 7まむし 21しおからい 22すっぱい 40ひざくむ 41おんな 52こおる(手拭が) 66おおい 87おうし	1かまきり 34なかゆび 68ふとい 75さつまいも 76とうもろこし 83とげ(竹の)	13いくら 23せきをする 27きゅう 39くすぐる 54ゆうだち 59ゆげ(お湯の) 60ゆげ(御飯の) 63せともの 69ほそい 71もみから	5かえる 10かなへび 15ふけ 24あざ 25あざができる 35くすりゆび 36しもやけ 44かたぐるま 46きのう 47おととい 80つくし 82きのこ

の（「7. まむし」等、表2で㊦印）

4項目

地図収載形が、検証の結果優勢語形と認定されなかったもの

（「14. つむじ」等、表2で㊧印）

17項目

のようになる。これによって、土地において何らかの資料によって方言特有語の存在の可能性が考えられる75項目のうち、地図と検証とが全く一致するもの38項目、50.7%でほぼ半数であり、併用に関係して半分一致するもの20項目をたすと、58項目、77.3%に達する。地図と検証が一致しないものは17項目、22.7%となる。

ちなみに、この区域の同じ検証調査資料を、この区域の東隣の7424.61（江の口）についても上記のようにして優勢語を認定し、それをその地図収載語形・非収載語形とつき合わせを行なって「判定」すると、地図の24.61（江の口）と検証の共通する77項目中、全く一致するものが43項目（55.8%）、併用で半分一致するもの17項目をたすと60項目（77.9%）となり、全くの不一致が17項目（22.1%）となった。この一致度は区域内の24.60（福井町）と比べて有意味な差と言えず、両地点がほぼ同じということになるうか。

表2左側に24.60（福井町）での地図収載語形を回答した人数を示したが、それらを合計して、10人中の回答者の一致率ごとにどの項目が該当し、どの率のあたりに項目が多く分布するかを示したのが表3である。これによると、全員が一致した項目は共通語と同形になっているものは当然としても、62番のレンギ、65番のカル、84番のバラ等が方言形でありながら10名全員が答えているのが注目される。方言形でありながら9名、8名という一致を見せる項目もかなりある。たとえば8名以上つまり80%以上の人数が収載語を回答した項目は累計29で75項目中の38.7%であることがわかる。半数（5名）以上が収載語を回答した場合、地図収載が検証調査によって裏付けられたと仮定すると、それは表3で累計57項目となり、全体の76.0%つまり8割近くということになる。逆に、地図非収載語形が検証で半数（5名）以上の人によって回答されている場合を、地図に更にプラスすべきこととして表2の項目を拾うと27項目（36.0%）となる。このことは、地図はかなり高い割合でその地域の優勢語形

を収載しているということになる。しかし、やや広い範囲から多数の人を調べると、併用等を主として更に加えるべき語形もあるらしいという現実をも示してくれるようである。

表は割愛したが、この検証調査結果を、東隣の24.61(江の口)の地図収載語形とつき合わせてみると、収載語形を半数(5名)以上が答えた項目が57項目で、全体の74.0%となり、24.60(福井町)とほぼ同じかやや下まわることになる。逆に、非収載語形の中に検証で半数(5名)以上が回答した項目は29項目(37.7%)となり、24.60(福井町)とほぼ同じ率になる。

上記のような優勢語形認定という、検証によって地図作成を行なったという仮の操作から離れて、全く機械的に集計すると、表2から、全75項目10名の延べ812語形(回答数)のうちの24.60(福井町)収載語形は延べ455語形(56.0%)、非収載語形は延べ357語形(44.0%)となる。

この東隣の24.61(江の口)と共通する77項目について10名の延べ語数ならば853語形(回答数)で、うち、24.61(江の口)での地図収載語形が480語形(56.3%)、非収載語形は延べ373語形(43.7%)となる。この近い2地点の相違は認められず、むしろ、一般論として、1名を調べて得た語形というものは、ほぼ同じ区域の同条件の人達10名を調べて得られる種々の延べ語数の56%程度を覆うものであると言えるものであろうか。

高知市の中の24.60(福井町)と24.61(江の口)は『日本言語地図』で隣り合って多少の相違を見せてはいるが、福井町を含むこの検証調査結果を基準とすると、統計的には、ほとんど有意な差は見られない。この程度の距離では土地をへだたることによる方言差はほとんどなく、むしろ、農村対市街地という差であり、それが、検証では両者の区域にまたがったため、農村の福井町と市街地の江の口とに共通性が等分されたため、その差も統計的には現れなくなってしまったものと思われる。

『日本言語地図』24.60(福井町)の結果と、この地点を含む検証調査結果の上述のような若干のずれは、

1. 地図は点であるが、検証は約1.5km四方の面である。

2. 地図は農村集落（被調査者は農業）であるが、検証は農村と市街地で職業が多様である。

3. 地図の被調査者は 1888（明治 21）年生まれであるのに対して、検証の被調査者は 1890（明治 23）年から 1905（明治 38）年であって、平均 8 歳ほど若い。

4. 調査時期が、地図は 1959（昭和 34）年、検証は 1965（昭和 40）年で 6 年差がある。

5. 調査者は、地図が地元の土居氏、検証が外来の徳川、加藤である。

等に起因するものもあると思われ、もし、上記の諸条件を同じにしたうえでの 1 名対 10 名の違いであればこの差はもっと縮まるものと想像される。もっとも、このテーマの研究は、前述のように、検証調査資料の中での 1 名対 10 名の違いを分析することにより可能ではある。

2.2. 『日本言語地図』の被調査者グループと他グループの差

『日本言語地図』の被調査者の条件は、前述のように年齢、性別、居住歴の 3 つであった。そのような条件をつけて選んだ被調査者の言語は、これに合致しない人々、つまり他の条件を持った人々の言語とどのように異なっているかを確認し、『日本言語地図』の位置づけを行ないたい。

『日本言語地図』に合うグループは、先の表 1 での「老男適」10 名である。ただし、19 番の被調査者は明治 38 年生まれで厳密には条件外となるが、この程度の例外はじつは実際の『日本言語地図』の被調査者の中に数名見られているので（cf. 『日本言語地図』第 1 集付録「日本言語地図解説——方法——」25 ページ）、今回は採用しておくことにする。なお、16 番の被調査者の在外歴が 5 年で 2 年分超過するが、言語形成期以後のみであるので、このグループに入れておくことにする。

「不」グループ 10 名の中でも 29 番が正確な年齢では条件外になるが、採用しておく。このグループでの大切なことは、全員在外歴が 6 年以上で、長い者は 43 年（27 番）、32 年（23 番）などが目立つことである。居住先はさまざまで

あるが、比較的高知県内が多く、また、両親の出身地も県内の郡部である場合が大半である。東京や大阪から転勤してきた人はこの年輩では少なく、大部分が、県内の郡部から高知市への流入である。学歴は、「老」の平均7.0年と比べ、「不」は7.7年でそれほどの水準差はない。

「女」は、明治19年生まれがいるものの、明治37年以降生まれが4名もあり、これらは条件から外れるかもしれないが、被調査者「老」の妻を調査したもの4～5名があったためという事情もある。しかし、これらを「女」(老女)として採用したことは、男女の差を同じ家にいる夫婦のようなペアで対比してみることに意味がありそうだという積極的な理由もある。それにしても、「老」の平均年齢(生まれ年)が、明治29年であるのに対し、この「女」の平均は明治35年生まれとなり、6年の差が出てしまっていることを断っておく。

「中」は、大正3年から14年におさまっている。平均、大正10年生まれで、「老」より25歳若く「老」の息子に当たる世代である。この層は働き盛りで時間をさいてもらいにくかったことと、土着の人の割合が少ない事情もあって、在外歴が1、2年オーバーしているもの4名を含んで採用した。彼等の学歴は平均8.4年で「老」や「不」に比べて特別高いというわけでもない。

「若」は全員が学歴7年あまりの中学2年生で、「中」の平均より30歳若く、彼等の息子、「老」の孫にあたる世代となる。また、全員が在外歴がなく、両親もほとんどが土着である。

考察の際は、規定の条件のほか、上記のような状況については考慮しておく必要もあろう。

まず、全項目の語形別回答数をグループに対比したものを表4(29～35ページ)として示した(紙面の都合等で2、3の項目を割愛してある)。

純粋な社会言語学的発想であれば「老」「不」「女」「中」「若」の各グループ相互の違いや関連を分析することになろうが、『日本言語地図』検証調査の立場では、地図が「老」によっているので、あくまでも「老」を基準として、それと「不」、それと「女」、それと「中」、それと「若」というふうに比較し、それらの各々の増減を()内に示した。たとえば、「1. かまきり」では、「老」10名中7名がカマキリと答えているのに対して、「不」はカマキリが9名で「老」

項目	回答	グループ	老	不	女	中	若
21	シオカライ	シオカライ	0	1(+1)	1(+1)	0	1(+1)
22	シカライ	シカライ	8	8	8	8	9(+1)
23	シオカハイ	シオカハイ	1	1	2(+1)	2(+1)	0(-1)
24	シオカライ	シオカライ	2	1(-1)	0(-2)	1(-1)	0(-2)
25	シオカハイ	シオカハイ	0	0	0	1(+1)	1(+1)
26	シオカハイ	シオカハイ	0	0	0	シオカライ	ニガイ
27	シオカハイ	シオカハイ	4	3(-1)	3(-1)	2(-2)	9(+5)
28	シオカハイ	シオカハイ	8	10(+2)	8	8	4(-4)
29	シオカハイ	シオカハイ	6	4(-2)	7(+1)	3(-3)	5(-1)
30	シオカハイ	シオカハイ	6	7(+1)	4(-2)	9(+3)	5(-1)
31	シオカハイ	シオカハイ	0	1(+1)	0	1(+1)	5(+5)
32	シオカハイ	シオカハイ	5	8(+3)	8(+3)	7(+2)	0(-5)
33	シオカハイ	シオカハイ	4	0(-4)	1(-3)	1(-3)	5(+1)
34	シオカハイ	シオカハイ	0	0	0	0	0
35	シオカハイ	シオカハイ	5	7(+2)	8(+3)	7(+2)	0(-5)
36	シオカハイ	シオカハイ	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	2(+1)
37	シオカハイ	シオカハイ	0	2(+2)	0	0	0
38	シオカハイ	シオカハイ	0	シミル	ウツタ	アトガノコ	アトガノコ
39	シオカハイ	シオカハイ	3	0(-3)	0(-3)	0(-3)	5(+2)
40	シオカハイ	シオカハイ	0	0	0	1(+1)	7(+7)
41	シオカハイ	シオカハイ	9	10(+1)	8(-1)	8(-1)	3(-6)
42	シオカハイ	シオカハイ	ウミジルシ		ヨミアザ	ヨミアザ	ヨミアザ
43	シオカハイ	シオカハイ	ウミジルシ		イビラ(誤解)	イビラ(誤解)	イビラ(誤解)
44	シオカハイ	シオカハイ	NR				1(+1)

項目	回答	グループ	老	不	女	中	若
14	ツムジ	ツムジ	0	0	0	0	1(+1)
15	マイツ	マイツ	3	1(+1)	1(+1)	0	0
16	マイマイ	マイマイ	3	4(+1)	6(+3)	2(-1)	2(-1)
17	マイ	マイ	5	3(-2)	1(-4)	1(-4)	1
18	ウズマキ	ウズマキ	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	1
19	他の語形	他の語形	2	0(-2)	0(-2)	0(-2)	5
20	NR	NR	6	2(-4)	5(-1)	8(+2)	10(+4)
21	フケ	フケ	5	10(+5)	5	3(-2)	0(-5)
22	クケ	クケ	0	0	0	0	0
23	モノモライ	モノモライ	9	8(-1)	10(+1)	10(+1)	8(-1)
24	メボ(含メボ)	メボ(含メボ)	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	2
25	他の語形	他の語形	2	2	1(-1)	5(-3)	7(+5)
26	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
27	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
28	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
29	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
30	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
31	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
32	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
33	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
34	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
35	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
36	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
37	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
38	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
39	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
40	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
41	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
42	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
43	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
44	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
45	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
46	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
47	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
48	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
49	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
50	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
51	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
52	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
53	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
54	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
55	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
56	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
57	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
58	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
59	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
60	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
61	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
62	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
63	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
64	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
65	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
66	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
67	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
68	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
69	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
70	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
71	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
72	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
73	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
74	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
75	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
76	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
77	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
78	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
79	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
80	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
81	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
82	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
83	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
84	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
85	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
86	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
87	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
88	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
89	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
90	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
91	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
92	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
93	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
94	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
95	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
96	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
97	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
98	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
99	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
100	NR	NR	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	0(-1)

項目	回答	グループ	老	不	女	中	若
34 な か ゆ び	ナカユビ タカタユビ 他の諸形	NR	4 7	6(+2) 7	4 5(-2) オトサンユビ	10(+6) 1(-6)	8(+4) 0(-7)
35 ゆ く び すり	クスリユビ ベニサンユビ ヘニユビ	NR	2 5 1	2 5 1	4(+2) 6(+1) 0(-1) 0(-2)	9(+7) 0(-5) 0(-1) 1(-1)	4(+2) 0(-5) 0(-1) 6(+4)
36 し や け	シモヤケ シモハレ 他の諸形	NR	5 5 1	7(+2) 4(-1)	8(+3) 3(-2)	8(+3) 2(-3)	8(+3) 1(-4)
37 か か た と	カカト キリアサ カガト キビス	NR	1 0 8 4	1 2(+2) 7(-1) 2(-2)	0(-1) 2(+2) 7(-1) 2(-2)	1 0 8 1(-3)	2(+1) 1(+1) 2(-6) 0(-4)
38 く た く た い	クスグッタイ コソバ コソバ コショバ 他の諸形	NR	0 9 1 0	0 9 1 0	0 10(+1) 0(-1) 0	0 10(+1) 0(-1) 0	1(+1) 7(-2) 0(-1) 1(+1) オカシー 1(+1)
39 た く く る	クスグル コソバ コソバ 他の諸形	NR	0 6 1	0 10(+4) 0(-1)	0 10(+4) 0(-1)	1(+1) 9(+3) 1	0 9(+3) 0(-1) コショバ

項目	回答	グループ	老	不	女	中	若
27 ま か う	キュー オキュー ヤイト モグサ 他の諸形	NR	6 2 3 4	7(+1) 1(-1) 3 6(+2)	2(-4) 3(+1) 2(-1) 6(+2)	6 1(-1) 1(-2) 8(+4)	4(-2) 1(-1) 1(-2) 1(-3)
28 か せ な	セナカ セナ	NR	9 3	9 1(-2)	9 1(-2)	10(+1) 0(-3)	3(+3) 10(+1)
29 お ん ぶ する	オンブスル オウ セオウ オンボスル 他の諸形	NR	2 4 2 3	1(-1) 6(+2) 0(-2) 3	5(+3) 3(-1) 1(-1) 2(-1)	2 8(+4) 1(-1) 3	5(+3) 5(+1) 0(-2) 2(-1)
30 し う う	ショウ オウ セオウ カウ 他の諸形	NR	0 6 3 3	0 9(+3) 0(-3) 0(-3)	0 4(-2) 5(+2) 0(-3)	0 5(-1) 5(+2) 1(-2)	0 3(-3) 5(+2) 3
31 か た く く る	カウ カウ カウ 他の諸形	NR	3 8	2(-1) 7(-1)	6(+3) 6(-2)	8(+5) 4(-4)	9(+6) 2(-6)
32 か た く く る	カウ カウ カウ 他の諸形	NR	1 0 10	0(-1) 0 10	0(-1) 0 10	2(+1) 0 9(-1)	5(+4) 2(+2) 2(-8) 1 オウ
33 か た く く る	カウ カウ ニナウ 他の諸形	NR	1 1 1 8	0(-1) 0(-1) 0(-1) 10(+2)	0(-1) 0(-1) 0(-1) 10(+2)	3(+2) 0(-1) 2(+1) 8	5(+4) 2(+1) 1 0(-8) セオウ ハコ

項目	回答	グループ	巻	不	女	中	著
47	オトイ オトツイ 他の語形 NR	6 5 イッササツツ	6 5 イッササツツ	6 5	5(-1) 7(+2)	6 4(-1)	3(-3) 5
48	サキオトイ サオトツイ サオツイ サオトイ サキオトツイ NR	0 4 1 3 1 NR	0 4 1 3 1 NR	0 6(+2) 1 1(+2) 0(-1) 1	0 4 1 0(-3) 2(+1) 3(+2)	1(+1) 5(+1) 0(-1) 0(-3) 1 2(+1)	0 4 0(-1) 0(-3) 0(-1) 6(+5)
49	ヤノアサツチ サノアサツチ ゴアサツチ 他の語形 NR	0 5 1 4	0 8(+3) 1 4	0 8(+3) 1 1(-3)	0 7(+2) 0(-1) 3(-1)	0 5 0(-1) 5(+1)	0 1(-4) 0(-1) 8(+4) サラアサツチ
50	マブシイ マバヒイ マババヒイ マババ マバヒイ マババ マババヒイ マババヒイ 他の語形	0 1 1 3 1 0 5 0 0	0 0(-1) 1 0 0(-3) 1 2(+1) 1(+1) 4(-1) 0	0 1(+1) 0 1(-2) 1 2(+1) 1(+1) 8(+3) 0	1(+1) 1 0 1(-2) 1 1(+1) 3(-2) 0	3(+3) 0(-1) 1(+1) 2(-1) 1 1(+1) 3(-2) 3(+3)	9(+9) 0(-1) 0 0(-3) 1 1(+1) 0(-5) 1(+1) マバヒイ
51	コル 他の語形	10	10	10	10	10	10 カチカチニ ナツチユ カチマ カチマ
52	コル 他の語形	8	8 カチマ	10(+2)	9(+1)	9(+1) コバ ゴ コ ゴ	6(-2) カチマ コ カチマ ナツチユ
53	NR	1	1	0(-1)	1	0(-1)	1

項目	回答	グループ	巻	不	女	中	著
40 か							

項目	回答	グループ	老	不	女	中	若
61 つね	カムリ ケブリ クスリ 他の諸影		9 1 2	7(-2) 1 2 エン	9 1 0(-2)	10(+1) 0(-1) 0(-2)	10(+1) 0(-1) 0(-2)
62 すけ	スリコギ レンギ 他の諸影		0 10	2(+2) 8(-2)	2(+2) 9(-1)	3(+3) 7(-3)	1(+1) 0(-10) スリバチノホー スリボ<?> 6(+6)
63 せとも	NR セトモノ セトモン カラツモノ カラツ カラツ ヤキモノ トーキ		0 0 0 2 6 ヤキモノ トーキ	4(+4) 0 0 2(+2) 1(-1) 5(-1)	3(+3) 1(+1) 0 3(+1) 5(-1)	3(+3) 1(+1) 0 1(+1) 1(-1) 5(-1)	0 0 0 1(-1) 6 ヤキモノ 1(+1)
64 かがみ	NR Kagami Ka-gami Kagami		0 10 0	1(+1) 9(-1) 0	1(+1) 9(-1) 0	1(+1) 8(-2) 2(+2)	0 0(-10) 10(+10)
65 かり	カリル カル		1 10	0(-1) 10	0(-1) 10	1 9(-1)	4(+3) 7(-3)
66 おさ	オーキー フトイ デ(ツ)カイ		3 8 0	2(-1) 9(+1) 0	5(+2) 8 0	4(+1) 7(-1) 1(+1)	7(+4) 3(-5) 2(+2)
67 ちい	チーサイ チヤイ チヤイ コマイ コンマイ ホワイ チンマイ 他の諸影		6 0 1 2 0 6 2	2(-4) 1(+1) 2(+1) 3(+1) 1(+1) 3(-3) 0(-2)	5(-1) 0 0(-1) 3(+1) 0 3(-3) 2	4(-2) 0 1 3(+1) 1(+1) 3(-3) 3(+1)	7(+1) 2(+2) 3(+2) 2 0 1(-5) 1(-1) チツチヤイ

項目	回答	グループ	老	不	女	中	若
53 つね	ツユ ナガサ ナガシ 他の諸影		2 10 0	2 6(-4) 2(+2) バイウ	5(+3) 7(-3) 0	3(+1) 10 0	6(+4) 1(-9) 0 3(-3)
54 ゆめ	ユンダチ サダチ サダチアメ ニワカアメ トリアアメ 他の諸影		0 6 1 5 0	0 7(+1) 1 0(-5) 0 ムラサメ	2(+2) 6 2(+1) 1(-4) 0	5(+5) 6 0(-1) 1(-4) 0 ライウ	5(+5) 0(-6) 0(-1) 3(-2) 2(+2) 1
55 かお み	NR ニワ オニワ ツキヤマ ツボ 他の諸影		3 1 8 0	4(+1) 0(-1) 5(-3) 0 ハナバタ	3 1 4(-4) 2(+2) シラス	6(+3) 0(-1) 4(-4) 1(+1)	9(+6) 0(-1) 1(-7) 0
57 にお	NR イフ イント		0 10	0 10	1(+1) 9(-1)	4(+4) 6(-4)	10(+10) 1(-9)
58 いど	ユケ ホケ 他の諸影		6 5	6 3(-2) ジョーキ	6 4(-1)	10(+4) 2(-3)	8(+2) 2(-3)
59 おけ	ユケ ホケ 他の諸影		5 6	4(-1) 5(-1) カムリ	2(-3) 8(+2)	3(-2) 3(+2) ホノキ	5 4(-2)
60 けい おの	NR ユケ ホケ 他の諸影		5 6	1(+1)	1(+1)	1(+1)	1(+1)

項目	グループ 回答	巻	不	女	中	若
77 かはちや	カボチャ ボウフラ ナンキン ボウフラ トナリ 他の諸形	4 5 1 3 1 1	6(+2) 4(-1) 1 1(-2) 2(+1) 1 ボウラ	9(+5) 3(-2) 0(-1) 1(-2) 2(+1) 0(-1) 2(+1)	9(+5) 0(-5) 2(+1) 0(-3) 3(+2) 1 0(-1)	10(+6) 0(-5) 0(-1) 0(-3) 0(-1) 0(-1) 0(-1)
78 なす	ナス ナスビ 他の諸形	7 5	8(+1) 3(-2) 3(+1)	8(+1) 3(-2) 3(+1)	8(+1) 3(-2) 3(+1)	10(+3) 1(-4)
80 つくし	ツクシ ヒギンボ- ツクシボ(-) ツクツクボ- 他の諸形	1 5 0 0	3(+2) 3(-2) 0 1(+1) ツクツクボ- ツギツギボ- ツギンボ- ツギンボ-	7(+6) 2(-3) 2(+2) 0 ツクツクボ- ツギツギボ- ツギンボ- ツギンボ-	8(+7) 3(-2) 0 1(+1) ツクツク ツクツク ツクツク ツクツク	6(+5) 0(-5) 0 0 ツクツク ツクツク ツクツク ツクツク
81 すまな	NR スギナ ツギツク マツツクサ マツツクサ 他の諸形	4 0 2 3 1 スギマツ	0 0(-2) 1(-2) 0(-1) ツギツクボ- ツギンボ-	0 1(+1) 2 1(-2) 2(+1) 7(+2)	0 0(-2) 0(-3) 0(-1) ツギツクボ- ツギンボ-	3(-1) 2(+2) 0(-2) 0(-3) 0(-1) 8(+3)
82 きのこ	NR キノコ ナバ 他の諸形	3 5 タケ	1(-2) 10(+5) 0(-1)	2(-1) 8(+3) 1	4(+1) 2(-3) 2(+1)	7(+4) 0(-5) 1
83 竹	トゲ ハラ モソロ 他の諸形	2 7 0 モギ	2 4(-3) 2(+2) サソリ	2 5(-2) 3(+3) サソリ	4(+2) 4(-3) 1(+1) ツク	5(+3) 6(-1) 0

項目	グループ 回答	巻	不	女	中	若
69 ふとい	フトイ オーキ- デカク	7 5 0	8(+1) 2(-3) 0	9(+2) 3(-2) 0	10(+3) 2(-3) 0	6(-1) 3(-2) 1(+1)
69 はせい	ホソイ コマイ チサイ チーサイ チーサイ 他の諸形	6 2 1 5 2	6 2 0(-1) 2(-3) 0(-2)	7(+1) 1(-1) 0(-1) 3(-2) 1(-1)	6 4(+2) 0(1) 1(-4) コンマイ(2)	3(-3) 1 2 5 チチイ
70 かかし	カガシ カガシ オドラカシ 他の諸形	1 8 3 オドラカシ、デコ	0(-1) 8 4(+1) モミ	3(+2) 7(-1) 3 モミ	1 9(+1) 4(+1)	5(+4) 5(-3) 0(-3)
71 もみ	モミガラ スリスカ モミカス 他の諸形	5 6 0 コメガラ	0(-5) 8(+2) 1(+1) モミ	2(-3) 8(+2) 0 モミ	5 5(-1) 1(+1)	3(-2) 2(-4) 0 スリカス、モミ
72 ぬか	スカ 他の諸形 NR	9 コメスカ	10(+1)	10(+1)	8(-1) スリスカ 1(+1)	8(-1) スリスカ 1(+1)
74 さといも	サトイモ タイモ 他の諸形 NR	3 9 1	1(-2) 9 モミ	2(-1) 10(+1)	1(-2) 10(+1) カライモ	2(-1) 6(-3) 3(+3)
75 まついも	サツマイモ カライモ (オ)イモ 他の諸形	5 7 0	1(-4) 8(+1) 2(+2) カンシヨ	5 5(-2) 3(+3)	2(-3) 7 5(+5)	6(+1) 1(-6) 5(+5)
76 しんじょう	ト-モロコシ キビ ト-キビ	1 7 6	1 9(+2) 4(-2)	0(-1) 8(+1) 5(-1)	1 9(+2) 1(-5)	6(+5) 7 0(-6)

項目	回答	グループ	老	不	女	中	若
89 い は と ら	モツカ		2	0(-2)	2	7(+5)	10(+8)
	オフロモチ		7	6(-1)	8(+1)	3(-4)	0(-7)
	モツカモチ		0	2(+2)	1(+1)	1(+1)	1(+1)
	オフロ		0	1(+1)	1(+1)	2(+2)	0
	他の語形	ムグラモチ(2)	1		ムグラ		オツカモチ
90 く う	フクロー		3	2(-1)	6(+3)	10(+7)	10(+7)
	フルツク		8	8	4(-4)	1(-7)	0(-8)
	他の語形	フツツ					
91 い そ か	トサカ		0	0	0	5(+5)	4(+4)
	カブト		3	5(+2)	1(-2)	3	1(-2)
	カムト		4		7(+3)	2(-2)	0(-4)
	他の語形			トサカン		カンムリ	サカ
	NR		3	0(-3)	2(-1)	1(-2)	トリカブト 4(+1)

項目	グループ 回答	老	不	女	中	若
84 はたらき	トゲ	1	2(+1)	0(-1)	2(+1)	5(+4)
	ハラ	10	9(-1)	10	8(-2)	6(-4)
85 めうま	オウマ	0	0	0	0	0
	コマ	0	1(+1)	0	0	0
	オスウマ	0	0	1(+1)	0	6(+6)
	オンマ	2	6(+4)	2	0(-2)	0(-2)
	オン	3	1(-2)	5(+2)	2(-1)	1(-2)
	他の語形	オンツ	2(-1)	2(-1)	6(+3)	3
86 めうま	NR	3	2(-1)	2(-1)		
	メウマ	0	0	0	0	0
	ゾーヤク	0	2(+2)	0	0	0
	メスウマ	0	0	0	0	7(+7)
	マンウマ	0	0	3(+3)	1(+1)	0
	メンマ	1	3(+2)	0(-1)	0(-1)	0(-1)
87 めうし	メン	3	3	4(+1)	3	1(-2)
	他の語形	メスノウマ マンツ	1(-3)	3(-1)	6(+2)	2(-2)
	NR	4	1(-3)			
	オウシ	0	0	0	0	0
	コットイ	8	6(-2)	2(-6)	5(-3)	0(-8)
	オスウシ	0	0	0	0	6(+6)
88 めうし	オンウシ	0	3(+3)	3	1(+1)	1(+1)
	オシ	1	0(-1)	1	2(+1)	0(-1)
	他の語形	オンツ	1(+1)	2(+2)	4(+4)	3(+3)
	NR	0	0(-2)	1(-1)	0(-2)	1(-1)
	メウシ	2	5(+4)	3(+2)	3(+2)	1
	マンウシ	1	0(-1)	0(-1)	0(-1)	4(+3)
89 めうし	ウナメ	0	3(+3)	0	0	0
	メン	1	1	4(+3)	2(+2)	0(-1)
	メンツ	2	0(-2)	0(-2)	0(-2)	0(-2)
	他の語形	メス	コトー	ナメウシ	メスノウシ	メスノウシ
	NR	2	0(-2)	0(-2)	5(+3)	3(+1)

より2名増えるので(+2)とそのわきに示した。「女」のカマキリの回答者は7名なので増減がなく()にその表示をしていない。イボージに関しては、「老」が2名、「不」も2名で増減なし、「女」はイボージ1名だけで「老」と比べて1名減で(-1)の表示となる。

「老」から「若」まで合わせても1回答だけの弱小ないし散発語形と、誤解に基づくと思われる語形は、その語のための欄をとらず、「その他の語形」として、該当のグループの場所に語形を記入した。

表4から、個々の項目を例として説明すれば、「7. まむし」でハミは「老」では8名あるものが、「女」7名、「中」で6名に減り、「不」は4名で「老」の半数になり、「若」ではついにゼロとなり、世代による変化がいちじるしい。「若」はマムシというように共通語になるというより、ドクヘビ2名、NR(無回答)2名等という不確かな表現が多くなり、「老」と対照的な「若」の迷いや、無知も指摘される。

「89. もぐら」は「老」での優勢語形オグロモチが「不」「女」でも保たれているが、「中」「若」となると共通語と同形のモグラが優勢になっている。

表4は、いわば原簿のようなものであるが、それを共通語形と方言形とにまとめてそのグループ差を示したものが表5である。たとえば、「1. かまきり」では、「老」で、〈共〉が4名、〈方〉の数語形をまとめた合計3名であり、〈共〉と〈方〉の併用が3名ということである。こうして対比すると、「老」と比べて他グループに、やや〈共〉が増え、〈方〉の減っていることがわかる。このようにして、88項目10名からの回答の差をプラス・マイナス付きで合計すると、下の総計のように共通語の方向に向かって、「老」から「不」ではほぼ変わらず、「女」になると+41で、やや共通語寄りになり、「中」は「老」より更に+105でもっと共通語の勢力が大きくなり、「若」は+228でもっと共通語色が濃厚になっていることを示す。これを項目で割ると、「若」の場合1項目当たり平均「老」よりも2.5名(10名中)が共通語化していることになる。

「共通語的表現」とは、ぴったりした共通語形そのものではないが、方言ではなく何らかの共通語的表現を用いる現象である。これは資料数が少ないので大きな傾向を論ずることはできないが、やはり「老」に少なく「若」に多くな

表 5 グループ別の共通語・方言への方向づけ

凡例 <共>共通語形単用の人数。<方>方言特有語形のみ回答の人数。
 方言同士の併用も含まれる。<併用>上記の<共>と<方>を併用で
 回答した人数。() は表 4 に同じ。

項目	回答	グループ	老	不	女	中	若
1 かまきり	<共>カマキリ <方>カマタチ・エンボ イボ・ジ・エンボージ <併用> <NR>		4 3 3 0	4 1(-2) 5(+2) 0	6(+2) 3 1(-2) 0	8(+4) 0(-3) 2(-1) 0	9(+5) 0(-3) 0(-3) 1(+1)
2 のくすも	<共>～ス・～アミ <方>～エ・～エバ <併用> <NR>		7 1 1 1	4(-3) 5(+4) 1 0(-1)	6(-1) 3(+2) 0(-1) 1	7 2(+1) 1 0(-1)	10(+3) 0(-1) 0(-1) 0(-1)
3 ひかむら	<共>カタツムリ <方>ナシデムシ・ナメクジ <併用>		5 1 4	9(+4) 0(-1) 1(-3)	7(+2) 0(-1) 3(-1)	5 1 4	7(+2) 1 2(-2)
4 くまじめ	<共>ナメクジ <方>ナメクジラ <併用>		8 1 1	9(+1) 1 0(-1)	8 2(+1) 0(-1)	10(+2) 0(-1) 0(-1)	10(+2) 0(-1) 0(-1)
5 かえる	<共>カエル <方>ヒキカヘル・オンビキ・ アヒ・ヒキントー・トンビキ <併用>		4 5 1	2(-2) 8(+3) 0(-1)	4 5 1	5(+1) 2(-3) 3(+2)	9(+5) 0(-5) 1
7 まむし	<共>マムシ <方>トクヘビ <方>ドクムシ・ハナハミ・ ハム・ハブ <併用> <NR>		2 0 7 1 0	2 0 7 1 0	1(-1) 1(+1) 8(+1) 0(-1) 0	1(-1) 0 8(+1) 1 0	1(-1) 2(+2) 5(-2) 0 2(+2)

項目	回答	グループ	老	不	女	中	若
8 こわい	<共>コワイ・オソロシイ <方>オトロシイ・コンジル・シンド イ・オタル・ビツタリスル <併用> <NR>		7 1 1 1	7 2(+1) 1 0(-1)	8(+1) 0(-1) 2(+1) 0(-1)	10(+3) 0(-1) 0(-1) 0(-1)	8(+1) 2(+1) 0(-1) 0(-1)
9 とかけ	<共>トカゲ <方>オンバゴゼ・オンバ エジ・オンバ・トカギ・トカジ <併用> <NR>		4 2 4	4 5(+3) 1(-3)	2(-2) 4(+2) 4	6(+2) 2 2(-2)	9(+5) 0(-2) 0(-4) 1(-1)

88 項目 10 名の回答差(+, -)の総計による方向づけ

方向	グループ	不	女	中	若
共通語へ		(-2)	(+41)	(+105)	(+228)
共通語的表現へ		(0)	(+1)	(0)	(+5)
方言特有語へ		(+47)	(-9)	(-109)	(-253)
共通語と方言の併用へ		(-39)	(-11)	(+4)	(-41)
NR(無回答)		(-48)	(-42)	(-19)	(+49)

るようである。

方言特有語を使う方向は「老」よりも「不」が+47で方言色の濃いことは意外に思われようが、前述のようにこのグループは県内郡部の出身者ということで説明ができそうである。「女」は-9で「老」とほぼ同じとすべきであろうか。「中」の-109はかなり方言が減っていることを示し、「若」の-253は方言が更に減っている方向性と程度を示している。

共通語と方言の併用の傾向は、「中」の+4が一番高く、あとは「老」より「女」「不」「若」がマイナス、つまり、方言か共通語かの単用の傾向がある。

無回答は、「老」よりも「若」に圧倒的に多いことは、人生経験、言語習熟の不足を示すことと、「老」のための調査項目の内容である物や事柄自体が過去のものとなって消えかけているためでもであろう。「老」よりも「不」「女」「中」が無回答方向にマイナスの数が多い、つまり語を豊富に持っていて適切に回答してくれるということになる。これは、「不」は移住によって言語の関心が高まり反省が利くため、「女」は男性より言語能力があるため、「中」は活動している年輩のためであろうか。

次は、共通語、方言という方向ではなく、とにかく、「老」と比べて、ある語形がどれだけ増減するかという差だけを求めてみたい。具体的には、表4の()のプラス・マイナスを無視して、差の絶対値だけをたしたものが表6である。

「1. かまきり」で言えば、「不」は5回答分、「女」は7、「中」は9、「若」は11で、この順で差が大きくなっていく。〈 〉はNRを除く有効回答数である。〔 〕は「老」から「若」までの間で1回しか出現しなかった「孤立的語形」ないし「ばらつき語形」という不確実なものとの一致や差を求めても無意味と思われるので、それらを除いた、一応確かなものについて、他の「不」～「若」と比較したものである。

これら全項目を総計した表6の下のとおりで、88項目平均値は、(1)全回答、(2)有効回答、(3)2人以上の確実語形について、三者とも、「老」と最も差の少ないものは同年齢、同経歴である「女」、次が同年齢層で居住歴の異なる「不」、次が年齢が違う「中」、そして最も差の大きいのは年齢の大変へだたっている「若」であると言える。言いかえると、年齢が差を示す一番の要因

表 6 回答差のグループ別比較

凡例 () 内は「老」を基準とした、各グループの回答差。ただし表 4 の () 内の絶対値の和、 $< >$ は同上でNRを除いた場合、[] は同上で孤立的回答を除いた場合。

グループ		不	女	中	若
項目					
1 かまきり		(5)	(7)	(9)	(11)
		<5>	<7>	<9>	<10>
		[4]	[6]	[8]	[9]
2 くものす		(8)	(3)	(2)	(5)
		<7>	<3>	<1>	<4>
		[8]	[3]	[2]	[4]
3 かたつむり		(5)	(3)	(2)	(2)
4 なめくじ		(1)	(1)	(3)	(3)
5 かえる		(4)	(2)	(9)	(10)
		[3]	[1]	[6]	[10]

項目	グループ	不	女	中	若
7 まわし		(5) [5]	(5) [5]	(4) [3]	(15) [13]
8 こわい		(6) ＜5＞ [3]	(6) ＜5＞ [3]	(6) ＜5＞ [3]	(6) ＜5＞ [3]
9 とかげ		(8) ＜8＞ [4]	(7) ＜7＞ [5]	(3) ＜3＞ [1]	(9) ＜8＞ [6]
10 かなへび		(6) ＜5＞ [5]	(4) ＜3＞ [2]	(18) ＜17＞ [13]	(12) ＜11＞ [10]
11 さかな		(4)	(5)	(7)	(9)
12 いくつ		(2) ＜1＞ [1]	(2) ＜1＞ [1]	(2) ＜1＞ [1]	(7) ＜6＞ [5]
13 いくら		(7)	(4)	(5)	(7)

グループ		不	女	中	若
項目					
14 つむじ		(5)	(5)	(9)	(9)
		<3>	<3>	<7>	<6>
		[5]	[4]	[9]	[8]
15 ふけ		(9)	(1)	(4)	(9)
		(3)	(1)	(3)	(2)
16 ものもらい		<2>	<1>	<2>	<1>
		[1]	[1]	[1]	[1]
		(2)	(2)	(9)	(14)
17 かぐ(臭いを)		[1]	[1]	[8]	[12]
		(6)	(9)	(14)	(15)
		<6>	<9>	<14>	<12>
18 きなくさい		[2]	[5]	[9]	[12]

88 項目 10 名の回答差の総計と項目平均の差

採用レベル	グループ		不	女	中	若
	{ 総計 { 平均					
(1) 全回答	{ 総計 { 平均		(468) (5.32)	(429) (4.88)	(558) (6.34)	(866) (9.84)
(2) NRを除く	{ 総計 { 平均		<421> <4.78>	<394> <4.48>	<509> <5.78>	<786> <8.93>
(3) 孤立回答を除く	{ 総計 { 平均		[385] [4.38]	[359] [4.08]	[482] [5.48]	[772] [8.77]

となり、次が居住歴であり、あまり差として利いていないのが性別であるということになるうか。

表7は、「老」と他グループの各々との回答の差にどのような項目がどのようにかわっているか分布を示したものである。どのグループに対しても回答差ゼロの「19. よだれ」, 「56. じしん」等は表4で省略してある。「不」や「女」は5回答分のあたりを中心に分布しているが、「女」の方が少差の方に片寄っているようである。「中」とで差のある項目は0から11回答差あたりにまんべんなく分布しており、項目による違いの多様性を示している。「若」と違いのある項目は差の多い方に重心を移して分布している。

「老」とこれらのグループの間で差の大きい項目が、どういう分野のものに多い傾向があるかは、この表を見てもなかなか断言できない。しかし、「老」と「若」で大変違う項目の中には58, 64のような音声項目、近代生活では密接な関係がなくなった動植物があると言えるかもしれない。

2.3. 調査方法による差

『日本語語地図』は、共通語形を与えず、謎々だけによって調査し、予想語形による誘導はしてはならないことになっていた。

被調査者の条件や数を同じにして、つまり「老」の人達だけについて、謎々だけで得られた回答と、用意した予想語形を誘導によって、a「使う」 b「聞いたことがある」 c「全く知らない」の3段階に分けて採録した。この誘導は同じ被調査者のその項目の謎々式調査で、共通語形しか出なかったり、予想以外の方言形しか出なかったり、無回答だったりした場合、その直後に予想した準備語形について必ず確かめたものである。

これらの回答状況は先の表1の各項目の各語形の欄の○, a, bなどの印を見るとわかるようになっている。

これらに対して、翻訳式は同条件の別人をほかに10名用意して、共通語形からの翻訳を機械的にさせて、特別説明も加えないという方式で調査して比較しなければならないが、このような不十分な調査法にせっきくの貴重な適格被調

表 7 グループ差別項目分布

凡例 各欄とも、右下隅の()中の左上は該当する項目数。右下は項目数の累計。

グループ 差別の程度	老・男・不適	老・女	中・男	若・男
0 回答分 (内訳が 全く一致)	19. よだれ 35. くすりゆび 38. くすりぐつたい 51. こおる(水が) 56. じしん 58. いど 79. たんぽぽ (7/7)	19. よだれ 51. こおる(水が) 56. じしん (3/3)	19. よだれ 51. こおる(水が) 56. じしん 79. たんぽぽ (4/4)	19. よだれ 56. じしん 79. たんぽぽ (3/3)
1 回答分	4. なめくじ 6. へび 32. かつく(天びん棒を) 47. おととい 65. かりる (5/12)	4. なめくじ 6. へび 15. ふけ 32. かつく(天びん棒を) 41. おんな 59. ゆげ(御飯の) 65. かりる 84. とげ(いばらの) (8/11)	6. へび 46. きのう 53. つゆ 65. かりる (4/8)	6. へび 20. した (2/5)
2 回答分	12. いくつ 17. かぐ(においを) 21. しかからい 26. ほくら 34. なかゆび 46. きのう 59. ゆげ(お湯の) 64. かがみ 66. おおきい 72. ぬか 84. とげ(いばらの) 90. よくらう (12/24)	5. かえる 12. いくつ 16. ものもらい 17. かぐ(においを) 20. した 22. すつばい 38. くすりぐつたい 52. こおる(手拭が) 58. いど 61. けむり 64. かがみ 66. おおきい 72. ぬか 79. たんぽぽ(14/25)	2. くものす 3. かなたつむり 12. いくつ 20. した 32. かつく(天びん棒を) 38. くすりぐつたい 49. やのあきって (7/15)	3. かなたつむり 16. ものもらい 51. こおる(水が) (3/8)
3 回答分	16. ものもらい 20. した 22. すつばい 23. せきをする 31. かつく(林木を) 41. おんな 61. けむり 74. さといも 78. なす (9/33)	2. くものす 3. かなたつむり 34. なかゆび 62. すりこぎ 74. さといも 78. なす 76. とうもろこし (7/32)	4. なめくじ 9. とかげ 16. ものもらい 21. しかからい 22. すつばい 37. かがと 47. おととい 55. おちる(雷が) 66. おおきい 71. もみから 72. ぬか 78. なす 84. とげ(いばらの) (13/28)	4. なめくじ 23. せきをする 60. ゆげ(御飯の) 63. せともの (4/12)
4 回答分	5. かえる 11. さかな 36. しもやけ 52. こおる(手拭が) 60. ゆげ(御飯の) 62. すりこぎ 68. ふとい 70. かがし 76. とうもろこし (9/42)	10. かなへび 13. いくら 21. しかからい 23. せきをする 26. ほくら 40. あぐらをかく 47. おととい 49. やのあきって 55. おちる(雷が) 68. ふとい (10/42)	7. まむし 15. ふけ 26. ほくら 33. かつく(二人で) 41. おんな 61. けむり 70. かがし (7/35)	41. おんな 61. けむり 68. ふとい 72. ぬか (4/16)
5 回答分	1. まむし 3. かなたつむり 7. まむし 14. つむじ 27. きゅう 33. かつく(二人で) 37. かがと 43. やしやこ 55. おちる(雷が) (9/51)	7. まむし 11. さかな 14. つむじ 31. かつく(林木を) 33. かつく(二人で) 44. かなたぐまき 45. おにごっこ 46. きのう 70. かがし 75. かつまいも 82. きのこ (11/53)	13. いくら 30. しょう 52. こおる(手拭が) 60. ゆげ(御飯の) 64. かがみ 74. さといも (6/41)	2. くものす 30. しょう 59. ゆげ(お湯の) 69. ほそい (4/20)
6 回答分	8. こおい 10. かなへび 18. せなくさい 49. あぐらをかく 48. さきおととい 69. はそい 57. にわ 69. ほそい 91. とさか (9/60)	8. こおい 35. くすりゆび 36. しもやけ 37. かがと 53. つゆ 60. ゆげ(御飯の) 69. はそい 81. すきな 89. もぐら 91. とさか (10/63)	8. こおい 23. せきをする 44. かなたぐるま 45. おにごっこ 62. すりこぎ 68. ふとい 82. きのこ (7/48)	8. こおい 47. おととい 65. かりる 74. さといも 83. とげ(竹の) (5/25)

グループ 差の程度	老・男・不通	老・女	中・男	若・男
7 回答者	13. いくつ 29. おんぶする 53. つゆ 77. かほちや (4/64)	1. かまさり 9. とかげ 48. さきおととい 54. ゆうだち 67. ちいさい 71. もみから 77. かほちや 83. とげ(竹の) 85. おうま (9/72)	11. さかな 24. あざ 29. おんぶする 36. しもやけ 39. くすぐる 43. やしやこ 58. いど 59. ゆけ(お湯の) 63. せともの 76. とうもろこし (10/58)	12. いくつ 13. いくら 21. しおからい 38. くすぐりたい 46. きのう 78. なす (6/31)
8 回答分	2. くものす 9. とかげ 39. くすぐる 54. ゆうだち 75. さつまいも 87. おうし (6/70)	27. きゅう 30. しょう 39. くすぐる 43. やしやこ 57. にわ 90. ふくろう (6/78)	7. 7. きゅう 48. さきおととい 67. ちいさい 75. さつまいも 86. むうま (5/63)	39. くすぐる 52. こおる(手拭か) 84. とげ(いばらの) (3/34)
9 回答分	15. ふけ 81. すきな 82. きのこ 86. むうま 89. もぐら (5/75)	18. きなくさい 24. あざ 29. おんぶする 50. まぶしい 63. せともの 86. むうま (6/84)	1. かまさり 5. かえる 14. つむじ 17. かぐ(においを) 40. あぐらをかく 57. にわ 83. とげ(竹の) (7/70)	9. とかげ 11. さかな 14. つし 15. ふけ 29. おんぶする 36. しもやけ (6/40)
10 回答分	30. しょう 63. せともの 71. もみから 85. おうま (4/79)	25. あざができる 87. おうし (2/86)	25. あざができる 31. かつぐ(材木を) 85. おうま 87. おうし 91. とさか (5/75)	5. かえる 22. すっぱい 40. あぐらをかく 45. おにこつこ 49. やのあざつて 55. おちる(仕か) 88. むうし (7/47)
11 回答分	24. あざ 25. あざができる 83. とげ(竹の) (3/82)	77. かほちや (0/86)	54. ゆうだち 69. ほそい (2/77)	1. かまさり 24. あざ 48. さきおととい 66. おおきい 76. とうもろこし (5/52)
12 回答分	44. かたぐるま 45. おにこつこ 50. まぶしい (3/85)	77. かほちや (1/87)	34. なかゆび 81. すきな 88. むうし	10. かなへび 25. あざができる 27. きゅう 31. かつぐ(材木を) 35. くすりゆび 44. かたぐるま 67. ちいさい 70. かかし 71. もみから 75. さつまいも 80. つくし 81. すきな 82. きのこ 85. おうま (14/66)
13 回答分 1	67. ちいさい .80 つくし (2/87)	80. つくし (1/88)	18. きなくさい 35. くすりゆび 50. まぶしい 80. つくし .89 もぐら 90. ふくろう (6/86)	7. まむし 17. かぐ(においを) 18. きなくさい 26. ほくら 33. かつぐ(二人で) 34. なかゆび 57. にわ 86. むうま 91. とさか (9/75)
15 回答分 1	88. むうし (1/88)	77. かほちや (2/88)	10. かなへび 77. かほちや	32. かつぐ(びびん様を) 37. かかと 43. やしやこ 53. つゆ 54. ゆうだち 77. かほちや 90. ふくろう (7/82)
16 回答分 1	88. むうし (1/88)	77. かほちや (2/88)	10. かなへび 77. かほちや	32. かつぐ(びびん様を) 37. かかと 43. やしやこ 53. つゆ 54. ゆうだち 77. かほちや 90. ふくろう (7/82)
18 回答分 1	88. むうし (1/88)	77. かほちや (2/88)	10. かなへび 77. かほちや	32. かつぐ(びびん様を) 37. かかと 43. やしやこ 53. つゆ 54. ゆうだち 77. かほちや 90. ふくろう (7/82)
19 回答分 1	88. むうし (1/88)	77. かほちや (2/88)	10. かなへび 77. かほちや	32. かつぐ(びびん様を) 37. かかと 43. やしやこ 53. つゆ 54. ゆうだち 77. かほちや 90. ふくろう (7/82)
23 回答分 1	88. むうし (1/88)	77. かほちや (2/88)	10. かなへび 77. かほちや	32. かつぐ(びびん様を) 37. かかと 43. やしやこ 53. つゆ 54. ゆうだち 77. かほちや 90. ふくろう (7/82)

査者を使うのはもったいないので、これは5名にとどめ、統計で2倍にして計算することとした。この5名の様子は欄の都合で表1には示していない。

この「老」10名の謎々式、これと同じ「老」10名の誘導式、そして、同一条件の他の「老」5名（それを2倍した）の翻訳式の3方式の結果を項目ごとに示し(途中から省略)、最後に項目全体としての統計表を添えたのが表8である。

表8で、「1. かまきり」を例にして説明すると次のようになる。10名中、謎々式調査では7名がカマキリと答えた。この語形は共通語と同形であるから、残る3名も誘導されれば当然何らかの場合に使うことを反省するはずであり、少なくとも意味がわからないなどということはあるえないので、誘導するだけ無意味である。しかし、自発的にまずカマキリと答えた人数が7名ということは、「5. かえる」のカエル5名や、表では割愛したが「35. くすりゆび」のクスリユビ2名などと違った位置づけが考えられよう。謎々でエンボージ3名、カマタテ2名がこの調査で出現したが、予想語形を準備していなかったのもので、これらを回答しなかった被調査者に対して組織的に誘導・確認の調査をすることができなかった。ただし、まれに注で加えられた場合はbとして採用しておいた。イボージは2名が答えたが調査票に誘導・確認のa, b, cの欄が用意されているので、最初にこの語形を答えなかった8名に対して誘導でたずねたところ、うち2名がa「自分もイボージと言う」と認めた。この2名とも、最初は謎々で共通語と同形のカマキリとしか答えなかったものである。これでイボージは合計4名から回答が得られたことになる。そして、残りの6名のうち3名はb「自分は使わないが聞いたことがあり、意味も分かる」と答えた。これで、イボージをとにかく知っている人は10名中7名ということになった。そして、残りの3名に更に確認を求めたが、彼らは最後まで、そういうことばは聞いたことがないと答えたのである。この様子は、むしろ、表2の方でもっとリアルに表示されている。オガミは方言集等にあったので調査票の誘導形に掲げて確かめたが、結局どの方式でも、誰からも回答してもらえなかった。

さて、同じ条件の「老男適」の被調査者5名について、本稿の1.6.「調査方法」で述べたような翻訳式調査票によって得た結果を倍にして、謎々式の10名と対比しやすくした数が表8の「翻訳」欄に掲げてあるが、カマキリが8と

表 8 調査方法と語形の現れ方

凡例 ()は、左の数のうち、いったん共通語形を答えたのち、誘導により該当語形を答えたものの内数。()は謎々に誘導を足した数。「対謎々」は謎々と対比した回答数の増減。「共」は翻訳で方言形より共通語形が出やすかった項目。「方」はその逆。「同」は両方の場合で差がないもの。

項目	語形	調査法	謎々	誘導			翻訳			得られた異なり語形数			
				a,使	b,間	c,不	数(×2)	対 謎々		謎々	誘導	翻訳	
1 か ま き り	カマキリ	7					8	+1	+1	共	4	0 (4)	2
	エンボージ	3					9	+3					
	カマクテ	2					0	-2					
	イボーシ	2	2(2) (4)	3 (7)	3	0	-2	-1					
	オガミ	0	0	0	10	0	0						
	計	14	2(2) (4)	3		14							
2 く も の す	クモノス	8					8		0	同	2	1 (3)	2
	クモノアミ	0					2	+2					
	クモノエバ	0					0	0					
	クモノエ	2	3(2) (5)	1 (6)	3	0	-2	0					
	クモノエバリ	0	1(1) (1)	1 (2)	7	0	0						
	計	10	4(3) (6)	2 (8)		10							
	NR	1				10	-1	-1					
3 か た つ む り	カタツムリ	9					0	+1	+1	共	3	0 (3)	1
	デンデンムシ	4					0	-4					
	ナメクジ	1	1(1) (2)	0 (2)	8	0	-1	-5					
	計	14	1(1) (2)	0 (0)		10							
4 な め く じ	ナメクジ	9					10	+1	+1	方	2	0 (2)	2
	ナメクジラ	2	3(3) (5)	1 (6)	4	6	+4	+4					
	計	11	3(3) (5)	1 (6)		16							
5 か え る	カエル	5					0	-5	-5	方	2	0 (2)	2
	ヒキンビョー	0					2	+2					
	ヒキ	5	3(2) (8)		1	10	+5	+7					
	計	10	3(2) (13)	0 (13)		12							
6 へ び	ヘビ	10					10	0	0	方	2	1 (3)	2
	ミーサン	1					0	-1					
	ナガムシ	0	1(1) (1)	1 (2)	8	2	+2	+1					
	クチナー	0	0 (0)	0 (0)	10	0	0						
	計	11	1(1) (12)	1 (13)		12							
87 項目の 総 計			946 ほか NR47	297 [147] (1243)	99 (1342)		892 ほか NR56		共-54 方+9	共=59 同= 8 方=23	249	16 (265)	192

いうことになり(5名のうち4名)、謎々の7より1回答分多くなっているの、その右に+1と表わした。エンボージは6となり、謎々の3より3回答分多いので+3で表示してある。カマタテは謎々では2名であったが翻訳式では何も現れず、2名減で-2と表示した。

翻訳式の中で、エンボージ、カマタテ、イボージのような方言特有語形の回答数を合計して、謎々式との増減を見ると結局-1となる。共通語形のカマキリは+1であるから、総合すると、「1. かまきり」という項目については、わずかではあるが、翻訳式にすると共通語形の方が出やすいことになり、そのことを<共>で示した。

延べ回答数の多少や増減について総計したものが、表1の最下欄である。これによると、謎々で946回答(1項目1人平均1.09語形)であるが、そのほかに誘導するとa「使う」が297回答(1項目1人平均0.34語形)増えることになる。謎々式の回答を100%とすれば、誘導aによって、その上に31%が追加されたことになる。逆に、誘導aまでが土地の本来の方言であると仮定してそこまでの合計の1243回答を100%とすれば、謎々式ではそれらの76%までを覆うことになる。b「聞くだけで使わない」の99回答は、個人ごとの差を統計する社会言語学的情報というより、漠然と方言集などに載せる語の追加の意味しかないかもしれない。それも、この中には必ずしも高知市の方言ではなく、隣接地のことばや、親の出身地、場合によっては遠くからの外来者の使ったことばが不正確な記憶として混入している恐れもある。しかし、これまで入れれば、謎々だけより、396回答、41.9%の回答が追加されたことにはなる。

次に謎々式と翻訳式とを対比する。翻訳式の総計892回答は、謎々式の946よりやや下回っており、翻訳の方が出現語数の少なくなることを物語るようである。謎々はいろいろ考えめぐらす機会が与えられるのに対して、翻訳は発想が単純になるためであろうか。謎々式と翻訳式では、一般には、後者が共通語で示されるので、それにつられて共通語形が出やすいと思われているようである。ところが、回答数を共通語と方言の合計とに分けて、謎々に対比した翻訳の増減を見ると共通語が-59、方言が+9で、翻訳の結果、共通語回答が減り、方言回答が増えていることが読みとれる。もっとも、その半面、翻訳での各項目

の方言形対共通語形の優劣は、＜共＞の強い項目 59 に対して、＜方＞の強い項目 23 で、＜共＞が優勢になっている。これらのことは、翻訳式が安易に共通語のまま回答するというより、共通語からを何らかの努力をして方言に置きかえてみようという意識が働いているものと解釈される。

最後に、10 名という一定の人数から異なる語がどれだけ得られるものかについて表 8 の右側に示した。たとえば、「1. かまきり」は謎々ではカマキリ、エンボージ、カマタテ、イボージの 4 語形が得られている。そして、そのうえ誘導によって新しい語を追加するには至っていない、4 語形のままである（「2. くものす」ならばクモノエバリ 1 語形を誘導によって新たに追加している）。一方、翻訳はカマキリとエンボージの 2 語形だけを得るにとどまっている。これを最下欄の総計で見ると、謎々 249 語形で、それに誘導で 16 語形をたして 265 語形になるが、翻訳はそれらより少ない 192 語形を得るにとどまっているのである。

以上により、『日本言語地図』で採用した謎々だけの方式は、考えられるすべての語形のある程度のところまでを掘り出していること、また翻訳と比べて多くの情報が得られているが、それは必ずしも非共通語的語形を多く採ったものでもないことなどが位置づけられたと言えようか。

3. おわりに

これは、今から見れば20年前の初歩的な企画と調査であり、たとえば、被調査者の年齢によって差が開く項目はどういう分野のものかなど、本稿でも断っている通り、傾向がつかめていない面もあったが、言語地図を作成するにつれ、近くに等語線が走っているものにその傾向があるらしいことに気付きはじめるなど、種々の発展を生み出すことができた。古いことで、反省点が多くあるものの、あえてこれを公表したのは、これが我々の間で検証調査の原点となり、更に『日本言語地図』にこだわらず、方言の実態をある方法により検証する研究の発展の踏み台になったのではないかという研究史的な意義を考えたからである。それらの具体的な成果は他論文にゆづらざるを得ない。

この内容は、調査後、徳川宗賢と検討を重ね、1965(昭和40)年11月の国立国語研究所地方研究員全国協議会で口頭発表したものである。

高知市検証調査に当たっては、地方研究員の土居重俊氏に種々御高配を賜り、また、今回、同氏の調査結果との比較を含む報告書の公表にも理解を示されたことを心から感謝申しあげる。

今回まとめ直すに当たり東北大学大学院の佐藤貴裕、三井はるみ、大西拓一郎の諸君に資料整理をお願いした。

(以上、加藤正信執筆)

一地点における年齢差と地理的分布

——宇都宮市における調査から——

1. 目的と調査の概要

1.1. 目 的

『日本言語地図』の被調査者は、原則として1903（明治36）年以前の生まれの人である。調査が終了すると考えられた1963（昭和38）年に満60歳に達する人というわけである。したがって、『日本言語地図』には、それぞれの地点の老年層のうちのある1人の持っている方言形が示されていることになる。

しかし、それぞれの調査地点には、さまざまな年齢の人が生活しており、それらの人々が常に同じ方言形を共有しているとは考えられない。ある一つの地点を例にとり、若い人から老人まで各年齢の人がどのような方言形を持っているかを調べ、『日本言語地図』に示された方言形が、それら各年齢層で行なわれている方言形のどのような側面をとらえているかを見ようとするのが、ここで報告する調査の目的であった。

さらに、各年齢の間で異なった方言形が見られる場合、それらの語形と『日本言語地図』に示された地理的分布との関係を見ようとする観点もこれに加えた。すなわち、その地点と周辺の地点とで、異なった語形が分布しているとき、それらの諸語形がその地点の年齢差による語形の分布の上にどのように反映しているだろうかという観点である。

1.2. 調査時期・調査者

上に述べたような観点に立って、地方言語研究室（当時）では、1968（昭和

43) 年 3 月, 以下に述べるような調査を行なった。調査者は, 野元菊雄 (第一研究部長), 徳川宗賢 (同部地方言語研究室長), 加藤正信 (同室研究員), 高田誠 (同) の 4 名であり, 計画立案には高田が当たった。

1.3. 調査地点

『日本言語地図』の地点番号 5649.53, 栃木県宇都宮市駒生^{こまにゆう}を調査地点とした。比較的大きな都市の近郊にある農村という観点からこの地点を選んだ。すなわち, その地域の方言的特徴を残しながら, その地方の中心地からの言語的影響を受けやすいと考えられる地点である。この地点は, 1958 (昭和 33) 年に『日本言語地図』の地方研究員多々良鎮男氏によって調査が行なわれている。被調査者は, 1881 (明治 14) 年生まれの杉浦延蔵氏であった。

1.4. 被調査者

宇都宮市駒生の住民台帳から, 駒生生まれで他に転出していない人を選び, 1878 (明治 11) 年生まれから 1953 (昭和 28) 年生まれまでの各年齢にわたって被調査者を得た。実際には, 駒生に転入して来た人を除いたほぼ全員を調査の対象とすることになった。

調査が終了した時点で, 男 46 名, 女 31 名の計 77 名の方がたより回答を得た。これらの中には, 同性同年齢で 2 名以上の被調査者を得た場合もあった。この場合, 整理の便宜上, 無作為に 1 名のみを選んで資料とした。最終的に本報告に示した資料は, 男 32 名, 女 25 名の計 57 名の被調査者から回答を得たものということになった。最年長は, 男では 1878 (明治 11) 年生まれ, 女では 1881 (明治 14) 年生まれであり, 最年少は, 男が 1952 (昭和 27) 年生まれ, 女が 1953 (昭和 28) 年生まれで, ともに卒業直前の中学 3 年生であった。

以下に, 本報告に示さなかった方がたも含めた被調査者 77 人の名を掲げる。なお, 生年は元号で示した。調査者の略号は次のようである。Nom—野元菊雄, Tok—徳川宗賢, Kat—加藤正信, Tak—高田 誠。

(男性)

被調査者	生年	調査者	被調査者	生年	調査者	被調査者	生年	調査者
相場清平	大 4	Nom	上沢金吉	明 35	Tak	鳥取邦正	明 39	Tok
相場啓二	昭 23	Nom	枝 嘉市	明 45	Tak	鳥取義雄	昭 7	Tok
相場精一	大 13	Tak	枝 宏二	昭 18	Tak	中島一男	昭 18	Tok
相場徳次郎	明 26	Nom	枝 正夫	昭 23	Tak	中島講字	昭 27	Tok
相場 実 ^{あしひと}	明 35	Tok	金田一郎	明 45	Nom	中島秋一	大 7	Tok
相場克元	昭 21	Nom	金田周作	明 28	Tak	中村梅吉	昭 42	Kat
阿部 茂	明 44	Kat	金田 一	昭 11	Nom	中村信時	昭 3	Kat
阿部全作	明 29	Tak	栗坪寅之	大 15	Kat	橋本由太郎	明 44	Kat
阿部順行	昭 27	Kat	栗原道夫	大 10	Tak	宮内章作	昭 10	Nom
阿部 操	昭 22	Kat	坂井憲雄	昭 27	Kat	保田清英	明 25	Nom
飯村順作	明 44	Kat	杉浦克郎	明 11	Tok	渡辺居守	大 12	Kat
伊沢要充	明 29	Tok	杉浦壮夫	大 3	Kat	渡辺金一	昭 27	Kat
伊沢欽一	昭 14	Nom	杉浦寅吉	明 35	Tak	渡辺昭一	昭 4	Tok
伊沢時一郎	明 39	Tok	杉浦 久	大 4	Tak	渡辺太蔵	明 13	Tok
伊沢広己	昭 16	Tok	杉浦英夫	明 39	Tok	渡辺仁志	昭 26	Nom
						渡辺正仁	大 14	Tom

(女性)

被調査者	生年	調査者	被調査者	生年	調査者	生年	調査者	被調査者
相場勝子	昭 17	Tok	倉松ミキ	明 38	Tak	杉浦ヤス	昭 14	Tok
相場キイ	大 12	Tak	坂井幸子 ^{さけい}	昭 3	Kat	玉置フミ	大 13	Tak
阿部 孔 ^{こう}	昭 2	Tak	坂井マス	明 38	Kat	中島キチ	明 30	Tok
阿部ヒナ	明 31	Tak	佐藤美紗子	昭 16	Nom	中村則子	昭 12	Kat
阿部充子	昭 15	Kat	杉浦 栄	昭 26	Tak	橋本タニ	明 42	Tak
飯村澄子	昭 8	Kat	杉浦とし子	昭 23	Tok	橋本千代子	昭 24	Kat
枝 久江	昭 19	Tak	杉浦利子	昭 23	Kat	宮内サク	明 36	Nom
大川フミイ	昭 8	Nom	杉浦紀子	昭 21	Tak	麦島タケ	明 34	Tok
大島ミツ	明 42	Nom	杉浦久子	昭 20	Tok	山口美江	大 6	Tok
金田チヨ	大 6	Nom	杉浦光子	昭 26	Kat	山本タカ	明 41	Nom
						渡辺恵子	昭 28	Nom

1.5. 調査項目

この調査が行なわれた 1968 (昭和 43) 年 3 月の段階では、『日本言語地図』は作成の途中であり、調査項目の選定も、すべてを分布図を参照しながら行なうというわけにはいかなかった。調査カードを見て、周辺の地点で異なった語形が見られる項目を調査項目として選んだ。項目数は全部で 51 項目とし、これ

に若干の関連項目を加えた。

1.6. 調査方法

調査は、言うまでもなく、面接による聞き取り調査である。

調査は二つの段階からなる。第1段階は、『日本言語地図』の調査と全く同じものである。質問文も回答記入方式もすべて同一とした。『日本言語地図』にない項目については、できる限り、『日本言語地図』の質問方法に似た方式を採用した。

つぎに、それぞれの項目について、前もって予想語形を用意し、それぞれの語形について、「知っているか」をまず聞き、知っていると答えた場合、「昔から使っているか」、「昔は使ったが今は使わないか」、「昔は使わなかったが今は使うか」についてさらに質問をした。後の調査は、こちらから語形を提示し内省を求めるものであるから、音声的な詳細は求められない。関東北部の方言音であるから、調査者の再現した音が実際の方言音からそれほどかけはなれてはいなかったとは思われるが、被調査者の記憶を呼び起こすまでに至らなかった再現音が皆無であったということは、もちろん、断言できない。

2. 結果と考察

本報告では、調査した項目全てを掲げることは紙幅の都合上できなかった。以下に掲げるような22項目についてその結果を示すことにする。

2.1. 作表の方法

各表は、縦軸に西暦による生年を目盛りにとり、方言形を横軸にとって、それぞれの語形について当該年齢の被調査者の回答を符合をもって示してある。

生年は、西暦の下2桁で示してある。いちばん下の78は、1878(明治11)年生まれを示し、上に上がるにしたがって生年が下がってくる。98までは1800年代の生まれであり、01から上が1900年生まれである。調査当時の年齢は、1968から当該生年を差し引けばよいので、目盛りには特に示さなかった。また、元号による生年も、煩雑さを避けるため表には示さなかった。必要な場合は何らかの方法で換算されたい。以下、説明の中では、この2桁の数字でもって生年を示すことにする。

それぞれの生年について、男女のうち片方に被調査者が得られなかった場合は「-」(ハイフン)をもって示した。

全体をいくつかの年齢層に分けて分布を見ることもできよう。ちなみに、30歳以下、31歳から60歳、61歳以上と分けるとすると、この表では、39(昭和14年生まれ、29歳)、08(明治41年生まれ、60歳)のところに境目を設定することになる。以下の各表の説明で、この年齢で切って考察する場合がある。

なお、目盛りは等間隔に切ってあるが、実際の生年の間隔は等しくはない。とくに、下の方の81と92の間には9年の開きがあることを承知されたい。

語形は、片仮名表記で示し、細かな音声的差異は示さなかった。音声的変種は、必要に応じて各表の説明の中で示すことにする。

前節 1.6. で述べた「提示語形」は、肩に「*」印を付して示した。

「提示語形」については、同じく前節 1.6. で述べた、被調査者の内省に関する情報を符号によって次のように示した。すなわち、

- (1) 知っている（しかし、使わない）…………… ○
- (2) 昔使った（今は使わない）…………… ◎
- (3) 昔も今も使う…………… ●
- (4) 今使う（昔は使わない）…………… ⊙
- (5) 知らない…………… ×

の5種類の回答を符号によって示した。なお、以下の各表の凡例は省略した。上の符号を以て以下の各表の凡例とされたい。

「提示語形」でなく、調査の第1の段階で、『日本言語地図』の調査方法で得られた第1回答についても、上の方法にならって表示した。この場合、1.6. で述べたような被調査者への内省は求めているないので、多くの場合(3)の「昔も今も使う」という符号が与えられていることが多い。また、この第1回答語形が、用意した「提示語形」と一致した場合も、上の内省を求めなかった。従って、その場合も、(3)の「昔も今も使う」という符号で示されている。

それぞれの語形についての男女の回答の別は、符号の列を2列示することによって示した。左側の列に男の回答、右側の列に女の回答を示した。

2.2. 各表の説明

2.2.1 表1「あぐらをかく」（『日本言語地図』52図）

表1は、『日本言語地図』52図「あぐらをかく」に当たる方言形の分布を示したものである。ビタグラ(オ)カクとアグラ(オ)カクの2語形を掲げた。この項目では、ビタグラ(オ)カクを提示語形とした。アグラ(オ)カクは、質問文に対する回答として得られた語形である。表に示さなかったものに、96男ラクザニ

スル、24 男ヒザグラカク、42 女ヤグラオカクが見られた。

ビタグラ(オ)カクは、06 までの年齢の高い層で比較的多く用いられているが、「昔は使った」という回答が多く、現在はあまり用いられなくなっている様子がかがわれる。08 から 37 までの層（60 歳～31 歳）で見ると、「使う」より「知っている」の方が多くなり、とくに女では「昔使った」が 27 にあるのみであとは全く使われていない。男女合わせて見ると、使用する、あるいは、使用したという人より、知っているだけという人の方がやや多いということになる。

39 より若い（30 歳以下）層で見ると、「使う」というのは 41 男と 46 男に見られるだけである。それぞれ被調査者の注によれば、「まれにしか使わない」ということである。「知らない」が最も多く、「知っている」がこれに次ぐ。この年齢層では、ほとんど用いられない語形ということになろう。

アグラ(オ)カクは、全年齢層にわたって用いられている。78 から 37 までの層（80 歳から 31 歳）で見ると、合わせて 6 人が「知らない」と答えているが、39 より若い層では全員が「使う」と答えている。

『日本言語地図』52 図に示されたこの地点の方言形は、ビタグラ(オ)カクである。老年層のさらに古い層を代表していると言えようか。『日本言語地図』の分布を見ると、ビタグラ(オ)カクは、北関東から福島にかけて散在するのみで、この地域の大勢はアグラ(オ)カクである。分布図からも、ビタグラ(オ)カクは古いものの残存のよう見え、表 1 の分布は『日本言語地図』の分布と軌を一にしていると言えよう。また、『日本言語地図』では、

表 1

性別	男	女	男	女
53	—	×	—	●
52	×	—	●	—
51	×	○	●	●
49	—	×	—	●
48	○	×	●	●
47	×	—	●	—
46	●	○	●	●
45	—	○	—	●
44	—	×	—	●
43	○	—	●	—
42	—	×	—	◎
41	●	○	●	●
40	—	×	—	●
39	×	—	●	—
37	—	○	—	●
36	●	—	×	—
35	●	—	●	—
33	—	○	—	●
32	◎	—	●	—
29	○	—	●	—
28	×	○	●	●
27	—	◎	—	●
26	○	—	●	—
25	○	—	●	—
24	○	○	×	●
23	◎	○	●	●
21	◎	—	●	—
18	◎	—	●	—
17	—	○	—	●
15	●	—	●	—
14	○	—	●	—
12	●	—	×	—
11	●	—	×	—
09	○	×	●	●
08	—	×	—	●
06	●	—	●	—
05	—	●	—	×
03	—	◎	—	●
02	◎	—	●	—
01	—	◎	—	●
98	—	●	—	×
97	—	◎	—	●
96	◎	—	●	—
95	●	—	●	—
93	●	—	●	—
92	●	—	●	—
81	—	●	—	●
80	◎	—	●	—
78	×	—	●	—
生年 語形	カク ビタ グラ (オ)	カク ア グラ (オ)		

表 2

性別	男	女
53	—	×
52	×	—
51	×	×
49	—	×
48	×	×
47	×	—
46	×	×
45	—	×
44	—	○
43	×	—
42	—	×
41	×	○
40	—	×
39	×	—
37	—	×
36	×	—
35	×	—
33	—	○
32	×	—
29	×	—
28	×	×
27	—	×
26	×	—
25	×	—
24	○	○
23	×	●
21	×	—
18	×	—
17	—	×
15	×	—
14	×	—
12	×	—
11	●	—
09	●	×
08	—	×
06	×	—
05	—	×
03	—	×
02	×	—
01	—	×
98	—	×
97	—	×
96	×	—
95	●	—
93	●	—
92	×	—
81	—	●
80	●	—
78	×	—
生年	(裁縫する)	
語形		

この地点にアグラ(オ)カクは見られないが、周辺には広く分布している。本表で見られるアグラ(オ)カクの全年齢層にわたる分布は、『日本言語地図』に見られる広い分布を背景として、この地点にも、ピタグラ(オ)カクとの2形併存として、さらに、若い層ではピタグラ(オ)カクと交替するかたちで浸透している様子を示すものと言えよう。

2.2.2. 表2「センタクスルを“裁縫する”の意味で使うか」(『日本言語地図』59図)

『日本言語地図』59図では、栃木県に計7地点「言う」があり、駒生(5649.53)では「古くは言った」となっている。分布からは、「言う」は古形の残存と言うべきであろう。

この項目の回答を全年齢にわたった分布として示したものが表2である。23より上の年齢層に「使う」がわずかに計7人見られるだけで、それより下の層には「知っている」が散見されるだけである。消滅寸前の語ということは明らかである。

2.2.3. 表3「あざになる」(『日本言語地図』80図)

『日本言語地図』では、動詞部分にも注目して作表し、符号が与えられているが、本調査では前半の名詞部分のみに注目し、動詞部分は記録しなかった。表3には三つの語形を掲げた。クロナジミとブチミは提示語形であるが、アザは『日本言語地図』式質問で得られた語形である。提示語形としては、上の二つのほか、クロジ、ブチを用意したが、クロジについては「知っている」という内省がだれからも得られず、また、ブチについても、「使う」というのが95男ただ1人で、

「知っている」が06男, 48男, 51男の3人だけだったので、表には示さなかった。さらに、『日本言語地図』方式の質問の回答として、78男, 06男, 23男, 25男, 29男でドドメイロニナルという表現が得られた。うち、25男は「古いことば」という内省を示してくれた。

クロナジミは、いちばん若い層を除いてほぼ全年齢層で用いられている。この地点で強固な地位を占めている語形であると言えよう。78男, 06男, 29男と45女, 51男とで「今使う」という回答が見られる。一見「新しい」侵入のようにも見えるが、前の3人については、上で述べたように、ドドメイロニナルと併用している。25男の「ドドメイロは古い」という回答と合わせて考えて、この三つの「今使う」は、ドドメイロとの対比で「新しい」ということであろうと推測される。45男と51男については、ブチミの方が「知っている」であるから、「昔使った」という語形はないことになる。従って、この「今使う」というクロナジミは古い何かを追放して新しく侵入したものとは限らないということになり、この2人の被調査者(23歳と17歳)が、大人の仲間入りをした後覚えた方言形であるという見方も可能である。

49女, 53女の2人は、クロナジミもブチミも「知っている」けれど使わない。目下のところ使用語形はないわけである。52男も使用語形がない。このいちばん若い3人については、今のところ「あざになる」という現象を表わす語を持っていない。こののち、どのような語を採用するか興味のあるところである。上の年代の人が広く用いているクロナジミを採用か、後に述べるアザ、あるいは、ブチミを習得するかという少なくとも三つの可能性が考えられるわけである。

表3

性別	男	女	男	女
53	—	○	—	○
52	×	—	×	—
51	●	●	○	○
49	—	○	—	○
48	●	●	○	×
47	●	—	×	—
46	●	●	○	●
45	—	●	—	○
44	—	●	—	○
43	●	—	●	—
42	—	●	—	●
41	●	●	×	●
40	—	●	—	○
39	×	—	○	—
37	—	●	—	○
36	●	—	●	—
35	●	—	●	—
33	—	●	—	●
32	●	—	●	—
29	●	—	●	—
28	○	—	○	○
27	—	●	—	○
26	●	—	●	—
25	●	—	●	—
24	●	●	○	○
23	●	—	●	●
21	●	—	●	—
18	●	—	●	—
17	—	●	—	○
15	●	—	○	—
14	●	—	○	—
12	●	—	●	—
11	●	—	●	—
09	●	●	●	●
08	—	●	—	●
06	●	—	×	—
05	—	●	—	○
03	—	●	—	●
02	—	●	—	○
01	—	●	—	—
98	—	●	—	○
97	—	●	—	—
96	●	—	○	—
95	●	—	●	—
93	●	—	●	—
92	●	—	●	—
81	—	●	—	●
80	●	—	×	—
78	●	—	○	—
生年 語形	クロナジミ		ブチミ	

ブチミは、全年齢層にわたって、「知っている」という回答が多く、「使う」という回答の分布がクロナジミに比べて全般にやや薄い。とくに、39より若い層では少ない。若い層には伝承されていない古い語形かとも考えられるが、逆に「新しい」とするものも見られる。計8人から得られた「今使う」という情報である。この表からはどちらとも判断できないと言うべきであろう。

このほか、『日本言語地図』方式による質問で得られた形にアザがあったが、98女と28男の2人だけだったため表示はしなかった。

『日本言語地図』の分布を見ると、本調査地点の駒生はクロナジミニナルである。動詞部分に多少の変種が見られるものの、栃木県北半には広くこのクロナジミが分布し、駒生がその分布領域の南縁に位置している。すぐ南隣に位置する5659.42の下都賀郡壬生町、西隣の5648.96の上都賀郡粟野町は、すでに関東の中心部に広く分布するアザの分布領域である。また栃木県北半のクロナジミの分布領域内にもアザが数地点見られる。分布のすがたからは、このクロナジミは、南に分布するアザに押されその侵入を許し、二、三の地点では等語線を飛びこしたアザの侵食を受けているということが言える。

アザの勢力の最前線に接している駒生では、クロナジミの分布が後退していることが年齢層を軸とした分布の上にそのすがたを反映しているのではないかと予想されたが、表3に示すように、実際には、クロナジミはほぼ全年齢層にわたって使われ、衰退の徴候は見られない。いちばん若い49、52、53の3人の回答にその徴候を求めるのはいささか強引であろう。一方、アザは南に強い分布を持ち、この駒生にも何らかのかたちで侵入しているかと予想したが、先にも述べたように、ほとんどその兆しは見られない。

等語線のすぐ近くに分布しながら、新しい勢力の侵入をほとんど受けず、その地点本来の方言形を全年齢層にわたって守っている状態を示す一つの例であろう。

ブチミは、広い分布領域は持たず、一、二地点おいた東隣に数地点見られるだけである。地理的分布からは強い勢力とは思われない。しかし、駒生では表に示すようにかなりの分布を示している。アザをおさえてクロナジミの領域に侵入しようとしているすがたであろうか。あるいは、少し違った意味領域で用

いられているものの反映であろうか。03で「黒くならないもの」という注記が得られたが、いわゆる「打ち身」のうち「あざ」にならないものとの境目がややあいまいになっていることの反映かもしれない。いくつかのことが考えられるが、この資料から言えることはここまでであろう。

2.2.4. 表4「においをかぐ」——後部分——（『日本言語地図』86図）

「においをかぐ」の動詞部分について質問した結果を表に示したものである。カムは提示語形として用意したもので、カグは『日本言語地図』方式の質問で得られた語形である。ただ、カグの分布はまばらで、カムの分布が密である。多くの場合、『日本言語地図』方式の質問で得られた回答がカムであったことを示している。

さらに、関連項目として、『日本言語地図』にはない項目を加えた。音便形である。質問文は『たとえば、「落ちる」ということについて言うと、落ちてしまったことは「落ちた」ですね。もしそういうふうに言うと、においを嗅いでしまったことはにおいをどうしたと言いますか。』というものであった。質問文中に「カイデ」という形を示してしまったことは適切でなかったと今となっては反省される。表にはカムないしはカイダの音便形としてカンダ、カイダの使用状況が示してある。

カムは、ほぼ全年齢層にわたって「使う」となっているが、46より若い層では、「知らない」が多い。「知っている」というのも全体で4人しかなく大きな勢力ではない。

カグは、全体として分布が薄いですが、若い層では多く、とくに、45（23歳）より若い層では11人中10人が「使う」と答えている。若い層へ新しい勢力として浸透していると見てよかろう。カグを「使う」と答えた人の多くは、カムを「知らない」か「知っている（が使わない）」としているが、51女（17歳）では、カムを「今使う」と答えている。いちどは、新勢力のカグを習得し、その地点本来の方言形カムは受け継がなかったものが、最近になって周囲の大人から改めて方言形を伝承したということであろうか。

表 4

性別	男	女	男	女	男	女	男	女
53	—	×	—	●	—	×	—	●
52	×	—	●	—	●	—	×	—
51	×	◎	●	—	×	×	●	—
49	—	●	—	●	—	●	—	×
48	●	×	×	●	×	●	●	×
47	○	—	●	—	×	—	●	—
46	●	×	●	●	●	●	●	×
45	—	●	—	●	—	●	—	×
44	—	●	—	×	—	●	—	×
43	●	—	×	—	●	—	×	—
42	—	●	—	◎	—	●	—	●
41	●	○	×	●	●	×	×	×
40	—	◎	—	●	—	●	—	×
39	●	—	×	—	●	—	×	—
37	—	●	—	×	—	●	—	×
36	●	—	×	—	●	—	×	—
35	●	—	×	—	●	—	×	—
33	—	●	—	×	—	●	—	×
32	○	—	×	—	●	—	×	—
29	●	—	×	—	●	—	×	—
28	●	—	×	●	●	×	×	×
27	—	●	—	×	—	●	—	×
26	●	—	×	—	●	—	×	—
25	●	—	●	—	●	—	×	—
24	●	—	×	×	●	—	×	×
23	●	●	×	×	●	●	×	×
21	◎	—	●	—	●	—	×	—
18	○	—	●	—	●	—	×	—
17	—	●	—	×	—	●	—	×
15	●	—	×	—	●	—	×	—
14	○	—	●	—	●	—	×	—
12	●	—	×	—	●	—	×	—
11	●	—	×	—	●	—	×	—
09	◎	—	●	×	×	●	×	×
08	—	●	—	×	—	●	—	×
06	—	—	×	—	●	—	×	—
05	—	×	—	●	—	●	—	×
03	—	●	—	×	—	●	—	×
02	●	—	×	—	●	—	×	—
01	—	◎	—	×	—	●	—	×
98	—	●	—	×	—	●	—	×
97	—	◎	—	×	—	●	—	×
96	●	—	×	—	●	—	×	—
95	●	—	×	—	●	—	×	—
93	●	—	×	—	●	—	×	—
92	●	—	●	—	●	—	×	—
81	—	●	—	×	—	●	—	×
80	●	—	×	—	●	—	×	—
78	●	—	×	—	●	—	×	—
生 年 語 形	カ ム [*]		カ グ		カン ダ		カイ ダ	

音便形については、ほとんどがカンダであり、カイダは若い層にやや多く見られるが、45 (23 歳) 以上では、わずかに 3 人にしか見られない。カグ—カイダという組み合わせを持つ人は若い層の 53 女, 51 男の 2 人だけである。51 女, 47 男ではカグ—カイダにカムが新しい形,あるいは,知っているという程度で加わっている。さらに, 09 男でもカグ—カイダにカムが「古い形」として加わっている。48 男ではカム—カイダである。規範的な文法的パラダイムとしては,カム—カンダ, カグ—カイダという組み合わせであろう。この 48 男では,音便形の方だけ先に新しい形に取り替えたということであろうか。46 男, 42 女, 40 女では,カム/カグ—カンダ/カイダと二つずつ持っている。変化の途中というべきであろうか。残念ながら, このカンダ, カイダが, それぞれカム, カグのどちらの音便形であるかについては質問していない。

上に述べたカイダ以外はみなカンダである。従って, ほとんどは, カム—カンダという組み合わせを持つことになるが, 52 男, 48 女, 46 女, 05 女ではカグ—カンダとなっている。このほか, カムを「知っている」とする 41 女, 18 男, 14 男を加え, 計 8 人がカグ—カンダとい

う組み合わせを持っていることになる。上のカム——カイダとは逆に、音便形はそのままにして、終止形だけ新しい形に取り替えたものと言えよう。このほかカム／カグ——カンダという組み合わせが49女、45女、28女、25男、21男、92男の6人に見られる。カグ——カンダへ変化する一步前のすがたと見るべきものかもしれないが、この表だけからはなお不明と言わざるを得ない。

『日本言語地図』86図の分布を見ると、関東から西の日本の中央部にカグが広く分布し、関東東半から東北地方にかけてカムが分布している。栃木南部は、この2勢力の接する地域となっており、本調査の調査地点駒生(5649.53)にはカグが分布するが、すぐ東隣の5649.65の宇都宮市戸祭ではカム、すぐ北の5639.80の今市市大沢でもカムがそれぞれ見られる。明瞭な等語線は引けないが、駒生はカグとカムとの分布の境界地帯になっていると言えよう。分布のすがたからは、カグが北上してカムの領域に侵入しているように見える。

表4に示したカムの分布はかなり強固なすがたを示していると言えるが、「昔使った」とする4人、「知っている」という4人、さらには「知らない」という6人が、地理的分布からカグがカムの領域に侵入しているように見えることを反映していると見るのであろうか。

さらに、カグが若い層に多く見られることも、地理的にカグが北上していることと関係付けて見るべきであろうか。すなわち、優勢な地理的背景を持った語が侵入して来た場合、まず、若い層に受け入れられるというわけである。

また、上の年齢層にもカグは散在する。若い層だけでなく、他の年齢層にも侵入している様子がうかがわれる。カグの分布がこのように広い年齢層に散在することと、『日本言語地図』の駒生近辺の分布がやや入り組んでいることとの関係はどうであろうか。分布が入り組んでいることは、新しい勢力の侵入活動が活発で、いわば、相手のすきまを見つけては弱いところから侵入しているという見方がありうる。「すきま」や「弱いところ」が何かは一応措くとして、そのような侵入の場合、まず若い層に受け入れられてそれがだんだんに年上の層に及ぶとか、受け入れた若い層がその語形を持ったまま年上の層に老いていくといった、いわば、静的な変化が起こるのではなく、いろいろな年齢層で同時に変化がおき、じわじわとした交替ではなく、全年齢層における一斉取り替え

表 5

性別	男	女
53	—	×
52	×	—
51	×	×
49	—	×
48	×	×
47	×	—
46	×	×
45	—	×
44	—	×
43	×	—
42	—	×
41	×	×
40	—	×
39	×	—
37	—	×
36	×	—
35	×	—
33	—	×
32	×	—
29	×	—
28	×	×
27	—	×
26	×	—
25	×	—
24	●	×
23	×	×
21	×	—
18	×	—
17	—	×
15	×	—
14	×	—
12	×	—
11	×	—
09	○	×
08	—	●
06	×	—
05	—	×
03	—	×
02	○	—
01	—	×
98	—	×
97	—	×
96	◎	—
95	×	—
93	○	—
92	×	—
81	—	×
80	×	—
78	×	—
生 年 語 形	ク サ ル	

が行なわれるといった図式は考えられないだろうか。

ここに示した表と、『日本言語地図』の分布を見ながら「思いついた」ことであって、何の証査も示すことができないが、地理的分布と年齢層における分布とを合わせて考えようとした本調査の動機の一つに上のような観点があったわけである。

2.2.5. 表5「クサルを“濡れる”の意味で使うか」(『日本言語地図』93図)

雨に降られて着物が濡れることをクサルと言うかという項目である。「使う」という回答は24男、08女の2人だけで、96男の「昔使った」には「まれに使った」という注が付けられている。「知っている」というのが、09男、02男、93男の3人である。全体では、ほとんど消滅しかかっていると言べきであろう。

『日本言語地図』の分布を見ると、関東にはかなりの分布が見られ、栃木西半では「使う」という地点の方がはるかに多い。駒生でも「使う」という回答が得られている。この『日本言語地図』の分布の「濃さ」と比較して、表5に示した「使う」の分布の「薄さ」が注目される。地理的な分布から推して、少なくとも老年層にはもう少し「使う」が分布してもいいように思われるところであるが、実際にはそのようになっていない。なぜこのような不つりあいが見られるのか、この資料だけでは分からない。

表の分布を見ると、08女を除いては、あとの肯定的な回答5人はすべて男である。使用場面などに、男に特有な状況でもあるのであろうか。

2.2.6. 表6「<雷が>おちる」(『日本言語地図』95図)

『日本言語地図』方式による質問で得られた語形はオチルとオッコチルである。表ではこの両語形はまとめて扱った。41 男がオッコチル, 35 男がボッコチルという形を答えている。サガルを提示語形として示した。03 女, 09 女でオサガリニナルという形を答えているがサガルにまとめた。

サガルについて, 「昔も今も使う」という回答の分布はやや薄い。「知っている」の分布が多いことと, 「今使う」がかなり見られることが注目される。「使う」という積極的反応がやや薄いわりには, 「知らない」という否定的反応が少ないことも特徴的である。ほとんどの人が知っているがあまり使われない語形ということであろうか。分布全体から見ると衰退しつつある語形のように見えるが, 点々と見られる「今使う」という回答と矛盾する点, 不可解でもある。

オチルは, 96 男, 06 男, 03 男, 12 男の 4 人が「知らない」と答え, 45 女が「知っている」と答えているほかは, みな「昔も今も使う」という回答を示している。

『日本言語地図』95 図の分布を見ると, オチル, オッコチル類が全国に広く分布し, 関東北半も完全にこの類の領域である。関東北半を見ると, このほか, サガルが分布している。分布のすがたとしては, それほど強固な領域を持っているとは言えず, 栃木の分布もそれほど濃くはない。一見して残存分布と考えられる様相を呈している。駒生にはサガルが分布し, すぐ隣に分布するオチルと接していて, オチルの侵入を今や受けつつあるように見受けられる。

表6と『日本言語地図』95図との分布は, それぞれサ

表6

性別	男	女	男	女
53	—	×	—	●
52	×	—	●	—
51	○	○	●	●
49	—	○	—	●
48	○	×	●	●
47	●	—	●	—
46	○	●	—	●
45	—	◎	—	○
44	—	○	—	●
43	○	—	●	—
42	—	●	—	●
41	●	○	—	●
40	—	○	—	●
39	●	—	●	—
37	—	○	—	●
36	●	—	●	—
35	○	—	—	—
33	—	●	—	●
32	●	—	●	—
29	●	—	●	—
28	○	●	●	●
27	—	○	—	●
26	●	—	●	—
25	○	—	—	—
24	●	◎	●	●
23	●	●	●	—
21	○	—	●	—
18	●	—	●	—
17	—	○	—	—
15	●	—	●	—
14	●	—	●	—
12	●	—	×	—
11	◎	—	●	—
09	●	●	●	●
08	—	—	—	●
06	●	—	×	—
05	—	●	—	●
03	—	●	—	×
02	●	—	—	—
01	—	●	—	●
98	—	○	—	●
97	—	●	—	—
96	●	—	×	—
95	●	—	●	—
93	●	—	●	—
92	●	—	●	—
81	—	●	—	●
80	×	—	●	—
78	●	—	●	—
生年 語形	サ* ガル		オチル	

表 7

性別	男	女	男	女
53	—	○	—	●
52	●	—	●	—
51	●	○	●	●
49	—	○	—	●
48	○	○	○	●
47	○	—	●	—
46	●	○	●	●
45	—	●	—	●
44	—	○	—	●
43	●	—	●	—
42	—	●	—	●
41	—	○	●	●
40	—	○	—	●
39	○	—	●	—
37	—	○	—	●
36	○	—	●	—
35	●	—	●	—
33	—	○	—	●
32	●	—	●	—
29	○	—	●	—
28	○	—	●	—
27	—	●	—	●
26	○	—	●	—
25	●	—	●	—
24	●	—	●	—
23	●	●	●	●
21	●	—	●	—
18	●	—	●	—
17	—	○	—	●
15	○	—	●	—
14	○	—	●	—
12	○	—	●	—
11	○	—	●	—
09	●	—	●	●
08	—	○	—	●
06	○	—	●	—
05	—	●	—	●
03	—	●	—	●
02	●	—	●	—
01	—	●	—	×
98	—	○	—	●
97	—	●	—	×
96	●	—	●	—
95	●	—	●	—
93	●	—	●	—
92	●	—	●	—
81	—	●	—	●
80	○	—	●	—
78	○	—	●	—
生 年 語 形	ツ*		カオ	

ガルが衰退しつつあることを示している。しかし、表中に散在するサガルに「今使う」という、一見新しい侵入のように思える回答がある点の解釈は、今のところ不明と言わざるを得ない。『日本言語地図』の解説にもふれているように、このサガルには一種の敬意がこめられていて、オチルとはその使われ方が違っていると思われる。単なる新旧の対立とは異なった関係も予想されるわけである。上の矛盾とこのような使われ方の違いなどについては、さらに詳しい資料と検討とが必要であろう。

2.2.7. 表 7 「かお」(『日本言語地図』106 図)

提示語形として用意したのはツラである。カオは『日本言語地図』方式質問で得られた回答である。

ツラは、老年層ではかなり用いられているが、中年層から若年層にかけては使われ方が少ない。「昔使った」が18 から 32 にかけてまとまって見られ、96, 03, 05, 09 にも見られる。「古い」と意識されているようである。若い層で「使う」という回答が少ないにもかかわらず、「知らない」という回答は、最年少に至るまで全く見られない。みんなが知っている語形だが、若い人はあまり使わないということであろう。52 男と 45 女とは「今使う」と言う。子供のころは知らないかあるいは使わなかったものを、大人の仲間入りをするようになって使いだした語形ということであろうか。52 男 (16 歳) は、「けんかのとき」などという注を付けている。また、男女の別を見ると、全体的に「使う」という回答が女に少ない。若い層では極端に少ない。若い女性には好まれない語というわけである。ツラは「下品だ」、「悪口に使う」といった注

が02男, 25男, 35男, 43男から得られたことと関連が
あろう。他方, 81女から「昔はみんなツラ」といった注
記も得られた。カオが新しい侵入であることをうかがわ
せるものである。

カオは, 81女の「今使う」, 97女の「知らない」
を除き, みな「昔も今も使う」という結果となっている。

『日本言語地図』106図の分布を見ると, 関東一帯には
カオが広く分布し, その間にツラ, カオ併用の地点が散
在している。栃木はほとんどカオの領域であり, ツラ,
カオ併用の地点は多くない。関東のツラは衰退しつつあ
る語形と言うことができよう。駒生はツラ, カオ併用の
地点となっている。周囲がカオとなり, ツラが消えてい
く中で, ツラがカオと併用というかたちで踏みとどまっ
ているというところであろうか。

表7の分布と『日本言語地図』106図の分布とからは,
カオが勢力を持ち, ツラが衰退していくという点で同方
向の解釈が得られたと言うことができよう。ただ, その
変化は, 老年層ではそれほど顕著ではなく, 中年から若
年層にかけておこっているということであろう。

2.2.8. 表8「まゆげ」(『日本言語地図』111図)

マギメを提示語形として用意した。マユゲは『日本言
語地図』方式の質問で得られた語形である。

マギメは, 若い層ではあまり用いられず, 中・老年層
では広く用いられていると言えよう。29(39歳)あたり
を境にしていることになる。29より上の層では17女
が「知っている」と答えているほかは, みな「使う」と
いう回答を示している。ただ, 05女, 18男, 24女, 25男

表8

性別	男	女	男	女
53	—	○	—	●
52	×	—	●	—
51	●	●	×	●
49	—	×	—	●
48	○	○	●	●
47	○	—	●	—
46	○	●	●	×
45	—	×	—	●
44	—	×	—	●
43	◎	—	●	—
42	—	○	—	●
41	●	○	●	●
40	—	○	—	●
39	●	—	●	—
37	—	○	—	●
36	●	—	×	—
35	○	—	●	—
33	—	○	—	●
32	×	—	●	—
29	●	—	×	—
28	●	●	×	×
27	—	●	—	×
26	●	—	×	—
25	◎	—	●	—
24	●	◎	●	●
23	●	●	×	×
21	●	—	×	—
18	◎	—	●	—
17	—	○	—	×
15	●	—	●	—
14	●	—	●	—
12	●	—	×	—
11	●	—	×	—
09	●	●	×	×
08	—	●	—	×
06	●	—	●	—
05	—	◎	—	●
03	—	●	—	×
02	●	—	●	—
01	—	●	—	×
98	—	●	—	×
97	—	●	—	×
96	●	—	×	—
95	●	—	×	—
93	●	—	×	—
92	●	—	×	—
81	—	●	—	×
80	●	—	×	—
78	●	—	×	—
生年 語形	マギメ		マユゲ	

で「昔使った」となって、「現在使わない」が中年層でやや増えかかっていることを示している。32より下の若い層では、「知っている」が多く、44より下では「知らない」も増える。

マユゲはマギメとは逆に、若い層で広く用いられ、中年から老年にかけてはほとんど用いられていない。細かく見ると、上で述べたマギメの分布の境目である29(39歳)が、マユゲでも使用、不使用の境目を示していると見ることでできよう。39歳を境にして、それより年上の層はマギメを用い、年下の層はマユゲを用いて、マギメは知っている程度であるということになろうか。マユゲが若い層への新しい侵入であり、マギメは若い層から失われかけていると言えよう。

『日本言語地図』111図の分布を見ると、関東北半にはマギメが分布しているが、マユゲもその間をぬって分布を広げていることが分かる。栃木は宇都宮を中心とする中央部にマユゲが分布し、周辺部、とくに、北半にマギメが多く分布している。駒生はすでにマユゲの領域となっている。

表8の最年長の層にマユゲは見られないが、中・老年層に点々と見られるマユゲと同じくたまたま、『日本言語地図』の被調査者が新来のマユゲを受け入れていたということであろうか。しかし、全体的に見れば、この表の解釈と『日本言語地図』の分布の解釈とは、マギメが古い形で新来のマユゲに押されているという点で方向を同じくしていると言えよう。

2.2.9. 表9「ものもらい」(『日本言語地図』112図)

提示語形としてはメカイゴを用意したが、実際の方言形はいくつかの音変種を含む。メケーゴ、メケゴなどである。『日本言語地図』112図の語形のまとめ方に合わせてメカイゴとした。なお、メカゴは『日本言語地図』では分出してあるが、ここでは、14男、21男、28女に現れただけなのでメカイゴに含めた。

モノモライは『日本言語地図』方式の質問で得られた語形である。03女ではモライモノという形の回答があったが、モノモライには含めなかった。

メカイゴは、老年層ではかなり用いられているが、「昔使った」という回答も

多く、やや衰退の色が濃いと見られる。中年層も 15 から 28 くらいまでの層(53 歳～40 歳)で、「昔使った」に「知っている」を加えると、「今は使わない」という勢力が半数を占める。29(39 歳)より若い層になると、「知っている」が増え、「昔使った」と合わせると「使う」をはるかにしのぎ、いちばん若い 3 人の「知らない」と合わせると、その衰退の度合いはいちばん強い。

モノモライはメカイゴとは逆に、若い層で多く用いられ中老年層ではやや少ない。新しいモノモライが若い層から侵入している様子がうかがえる。ただ、中年層に「知らない」が多いのに対して、08(60 歳)より上の世代になると「使う」が逆に増えている点注目される。

メカイゴとモノモライの共存の状態を一人ひとり見ると、新旧の分布の様相がよりいっそうはっきりとしてくる。メカイゴのみというのは 48 男、51 女と若い層にはなれて 2 人見られるのは例外として、28 より上(40 歳以上)の層に集中している。最も古形を保っている層と言えるが、28 から 09 という中年層にむしろ多く見られるのは注意を要する。メカイゴ・モノモライを併用し、新古の情報等の注記のないものの分布を見ると、42 から 33 までの集団 6 人と 23 より上の中年の上と老年の 9 人の集団とに分けられよう。メカイゴを同等に保ちながらモノモライを受け入れた層ということになり、メカイゴ単用の層のつぎに古いと言うことができよう。年齢層としても、下限がメカイゴ単用より下がっている。つぎに、メカイゴは「昔使った」、モノモライは「昔も今も使う」あるいは「今使う」という併用のグループで、使用語形の重点がすでにメカイゴからモノモライに移っている層である。さらに、モノモライを使ってメカイゴは「知って

表 9

性別	男	女	男	女
53	—	×	—	●
52	×	—	×	—
51	×	●	●	×
49	—	◎	—	●
48	●	○	×	●
47	◎	—	●	—
46	○	○	●	●
45	—	◎	—	●
44	—	○	—	●
43	◎	—	●	—
42	—	●	—	●
41	●	●	●	●
40	—	○	—	●
39	●	—	●	—
37	—	○	—	—
36	○	—	×	—
35	●	—	—	—
33	—	●	—	●
32	○	—	×	—
29	○	—	—	—
28	●	◎	×	●
27	—	●	—	×
26	●	—	×	—
25	◎	—	—	—
24	◎	○	●	●
23	●	●	×	●
21	●	—	×	—
18	●	—	●	—
17	—	○	—	●
15	◎	—	●	—
14	●	—	×	—
12	●	—	●	—
11	●	—	×	—
09	●	—	×	●
08	—	●	—	●
06	●	—	●	—
05	—	◎	—	●
03	—	◎	—	×
02	●	—	×	—
01	—	◎	—	●
98	—	●	—	×
97	—	◎	—	●
96	●	—	●	—
95	●	—	×	—
93	●	—	●	—
92	●	—	●	—
81	—	●	—	×
80	○	—	—	—
78	◎	—	●	—
生 年	メ* カイ ゴ		モノ モ ライ	
語 形				

いる」だけという層がある。中年層の下の方から若い層にかけて増えている。メカイゴが消えかかっているということになる。そして、数は少ないが、モノモライだけ用いて、メカイゴは「知らない」という 51 男と 53 女の 2 人の少年少女に至って、メカイゴが失われモノモライだけになっているというわけである。これらメカイゴを失いかけているか、知らない層が、将来古形であるメカイゴを再び習得し、使用しはじめるという可能性はもちろん残されているが、大勢としては、メカイゴは失われていく方向にあるということであろう。

『日本言語地図』112 図の分布を見ると、関東北西部にメカイゴの類がまとまった領域を示し、その南側、東側をとりまくように、モノモライが分布している。駒生はメカイゴの分布領域の東のへりに当たり、すぐ東隣の宇都宮市戸祭 (5649. 65) はモノモライの最前線となっている。駒生の南、西の数地点では両形の併用となっていて、メカイゴは明瞭な領域を持ちつつも、周辺からモノモライの侵入を受けている様子がうかがえる。

地理的分布から得られる変化の方向と、表 9 から得られる傾向とは一致すると言えよう。ただ、メカイゴのみ使うという最も古い形が最老年層でなく、むしろ中間の年齢層にやや多く見られる点については、適当な解釈が見当たらない。問題の指摘だけにとどめておく。

2.2.10. 表 10「つば」(『日本言語地図』118 図)

「唾液」を表わす方言形を求めた。提示語形として用意したのはキタキとシタキとであった。後述するように、『日本言語地図』118 図では、この両語形は駒生からはやや離れて分布するが、あえて提示語形とした。しかし、調査の結果、シタキは駒生では全く知られていなかった。従って、表にはキタキのみを示し、シタキは削除した。キタビ、ツバ、ツバキは『日本言語地図』方式による質問で得られた語形である。

キタキは老年層でわずかに「使う」とされるほかはあまり用いられない語形である。古形の残存と思われるが、24 男と 36 男の「今使う」という回答はどういうことであろうか。他からの侵入とは思えないから、年をとってから古形を

伝承したということなのであろうか。

キタビについては、「使う」という回答の分布は濃くないが、若い層で比較的多く用いられている点が注目される。ここだけ見ると新しく若い層で取り入れられた語形のように見えるが、それより年上の層に、「昔使った」という回答が点々と見られ、こちらでは古い形のように考えられることと矛盾する。このキタビという形は、後述するように、『日本言語地図』の分布の上には全く現れないものである。駒生にだけ見られる孤立した形なのか、他の地点にも見られる形なのかは不明である。また、『日本言語地図』にも現れないほどの古い形なのか、何かの事情で局地的に新しく生まれた形なのかも不明と言わざるを得ない。

ツバ、ツバキのうちでは、ツバの方が広く用いられている。ツバキは年齢の高い層にやや多いかとも思えるが、全体としては分布は強くない。

『日本言語地図』118図の分布を見ると、ツバ、ツバキが関東一円をおおっているが、ツバキの方がツバよりやや分布の密度が高いように見える。駒生では、ツバとツバキの併用となっている。表10の81女、92男などと同じタイプというわけである。

キタキの類は、茨城にキタケとしてわ

表 10

性別	男	女	男	女	男	女	男	女
53	—	×	—	●	—	●	—	×
52	×	—	●	—	●	—	×	—
51	×	×	●	●	●	—	×	×
49	—	×	—	×	—	●	—	×
48	×	×	●	×	●	●	×	×
47	×	—	●	—	●	—	×	—
46	×	×	●	○	●	●	×	×
45	—	×	—	×	—	●	—	●
44	—	×	—	◎	—	×	—	◎
43	×	—	◎	—	●	—	×	—
42	—	○	—	×	—	●	—	●
41	×	×	●	—	●	●	×	×
40	—	×	—	×	—	●	—	×
39	×	—	●	—	●	—	×	—
37	—	×	—	×	—	●	—	×
36	◎	—	○	—	●	—	●	—
35	×	—	○	—	●	—	×	—
33	—	×	—	◎	—	●	—	×
32	×	—	×	—	—	—	×	—
29	○	—	×	—	●	—	×	—
28	○	×	×	◎	—	●	×	●
27	—	×	—	—	●	—	×	—
26	×	—	×	—	●	—	×	—
25	×	—	○	—	●	—	×	—
24	◎	×	×	◎	×	×	×	●
23	×	×	◎	●	●	×	×	×
21	×	—	◎	—	×	—	—	—
18	×	—	×	—	●	—	×	—
17	—	×	—	○	—	●	—	×
15	×	—	◎	—	●	—	×	—
14	◎	—	×	—	●	—	×	—
12	●	—	●	—	×	—	●	—
11	×	—	×	—	●	—	●	—
09	×	×	×	●	—	—	●	●
08	—	×	—	●	—	●	—	×
06	×	—	×	—	●	—	●	—
05	—	×	—	◎	—	—	—	×
03	—	×	—	◎	—	●	—	×
02	×	—	◎	—	×	—	●	—
01	—	●	—	×	—	●	—	●
98	—	×	—	●	—	●	—	×
97	—	●	—	×	—	●	—	●
96	◎	—	×	—	—	—	×	—
95	×	—	×	—	●	—	×	—
93	●	—	×	—	●	—	×	—
92	×	—	×	—	●	—	●	—
81	—	×	—	×	—	●	—	●
80	○	—	×	—	●	—	×	—
78	◎	—	●	—	●	—	×	—
生年 語形	キ* タキ		キ タビ		ツ バ		ツ バ キ	

表 11

性別	男	女	男	女
53	—	×	—	●
52	×	—	●	—
51	×	×	●	—
49	—	×	—	●
48	●	×	●	○
47	×	—	●	—
46	×	×	●	●
45	—	×	—	●
44	—	○	—	●
43	●	—	×	—
42	—	●	—	●
41	○	○	●	●
40	—	○	—	●
39	×	—	●	—
37	—	×	—	●
36	●	—	●	—
35	×	—	●	—
33	×	●	—	●
32	×	—	—	—
29	○	—	●	—
28	○	●	●	—
27	—	○	—	×
26	×	—	●	—
25	○	—	●	—
24	●	●	●	×
23	●	●	●	●
21	●	—	●	—
18	●	—	—	●
17	—	○	—	●
15	×	—	●	—
14	○	—	●	—
12	●	—	×	—
11	—	—	×	—
09	◎	◎	●	●
08	—	●	—	●
06	●	—	●	—
05	—	●	—	●
03	—	◎	—	●
02	●	—	●	—
01	—	—	—	●
98	—	●	—	×
97	—	◎	—	●
96	●	—	●	—
95	—	—	×	—
93	●	—	●	—
92	●	—	●	—
81	—	●	—	×
80	●	—	×	—
78	×	—	●	—
生 年 語 形	ホ ソ ビ		ホ ク ロ	

ずかに分布が見られるが、栃木では、5659. 46 の河内郡上三川町上三川に1地点キタケが見られ、キタキは5750. 31 真岡市東郷に1地点見られるのみである。分布としてはいずれも弱いと言うべきであろう。表に示したキタキの分布と合わせて考え、古形の残存であると言えるが、先にも述べた24男と36男の「今使う」という回答については、やはりよく分からないと言わざるを得ない。

シタキは、福島から東北地方南部にかけて分布領域を持ち、栃木北部はその領域の南端に当たっている。駒生からはやや距離があり、シタキは、駒生にその痕跡を全く残していないということである。

キタビについては、先にも述べたように、『日本言語地図』上に全く現れない形である。地理的分布と年齢差という観点からは、どのように扱うべきか目下のところ不明と言うほかはない。

2.2.11. 表 11「ほくろ」(『日本言語地図』133 図)

『日本言語地図』の二つの「ほくろ」の項目のうち、「小さいほくろ」の方を質問したものである。ホソビを提示語形として用意した。ホクロは『日本言語地図』方式の質問で得られた語形である。

ホソビは、中年層の中ごろを境にして使われ方の分布を異にする。年齢の上の層では広く使われているのに対して、若い層ではあまり用いられず、「知っている(けど使わない)」が多く、45(23歳)より若い層では、48男1人を除いて他はみな「知らない」と答えている。若い層から徐々に失われつつある語形であると言うことがで

きょう。

ホクロは全年齢層にわたって用いられているが、中年層の中ごろから上の年齢層では、「知らない」という回答が点々と見られる。ホソビだけを用いて、ホクロの侵入を受けていない層ということになる。

『日本言語地図』133 図の分布を見ると、ホソビは茨城から福島にかけて分布し、栃木にはさほど多く分布していない。栃木に広く分布するのは、関東中央部に分布の中心を持つホクロである。駒生もホクロの領域の中にあり、ホソビの分布する地点にはやや距離がある。分布からは、ホソビは衰退している語形であり、駒生にかつてはホソビが分布していたとしても、ホクロがホソビを駆逐したのはしばらく前のことのように見える。

しかし、表 11 に示すように、地理的な分布からは消えてしまったホソビも、年齢層を軸にとって使うかどうかと改めて聞いてみると、老年層ではまだ失われてはいないというわけである。

2.2.12. 表 12 「おてだま」(『日本言語地図』145 図)

調査では、『日本言語地図』の項目番号 084 の「おてだまあそび」の名だけを質問し、085 の「おてだま」そのものの名を聞く質問はしなかったが、比較する『日本言語地図』の分布図は 145 図「おてだま」を当てる。「遊び」の名と「道具」の名とをまとめて扱うことの事情については、『日本言語地図』の解説を参照されたい。提示語形として用意したのはオヒトツである。オテダマは『日本言語地図』方式の質問によって得られた語形である。

オヒトツは、39 より若い層 (20 歳代以下) ではほとん

表 12

性別	男	女	男	女
53	—	⊙	—	⊙
52	×	—	⊙	—
51	○	○	⊙	⊙
49	—	○	—	×
48	⊙	×	×	⊙
47	○	—	⊙	—
46	○	○	⊙	⊙
45	—	⊙	—	⊙
44	—	⊙	—	⊙
43	×	—	⊙	—
42	—	⊙	—	⊙
41	⊙	⊙	⊙	⊙
40	—	⊙	—	⊙
39	×	—	⊙	—
37	—	○	—	⊙
36	⊙	—	⊙	—
35	⊙	—	×	—
33	—	⊙	—	×
32	⊙	—	×	—
29	⊙	—	×	—
28	⊙	⊙	×	×
27	—	⊙	—	×
26	⊙	—	×	—
25	⊙	—	⊙	—
24	⊙	⊙	×	⊙
23	⊙	⊙	×	⊙
21	⊙	—	⊙	—
18	⊙	—	×	—
17	—	⊙	—	⊙
15	⊙	—	×	—
14	⊙	—	⊙	—
12	⊙	—	⊙	—
11	⊙	—	×	—
09	⊙	⊙	×	×
08	—	⊙	—	⊙
06	⊙	—	×	—
05	—	⊙	—	⊙
03	—	⊙	—	⊙
02	⊙	—	×	—
01	—	⊙	—	×
98	—	⊙	—	×
97	—	⊙	—	×
96	⊙	—	⊙	—
95	⊙	—	×	—
93	⊙	—	×	—
92	⊙	—	×	—
81	—	⊙	—	⊙
80	⊙	—	×	—
78	⊙	—	⊙	—
生年 語形	オヒトツ		オテダマ	

ど用いられていない。30 歳代より上の層では広く用いられている。48 男と 53 女はオヒトツを「今使う」とし、新しく習得した形のものである。これも、少年が上になって、古い形を改めて知ったものであろうか。オヒトツを「昔使った」として、古い形だとするものが、各年齢層にわたって点在する。全体として、オヒトツは衰退しつつある語形であると言えよう。

オテダマは 20 歳代以下の層で広く用いられ、それより上の層ではさほど多くは用いられていない。失われつつあるオヒトツと相補的な分布を示していると言うことができよう。オテダマを「知らない」とする中・老年層の中に点在する、「今使う」という回答を見ても、オテダマは、若い層に浸透し、中・老年層の間にも新しく受け入れられつつあるということになる。

『日本言語地図』145 図の分布を見ると、全体として非常に入り組んだ分布となっているが、栃木ではオヒトツが多く、駒生もオヒトツとなっている。すぐ東隣の 5649. 65, 宇都宮市戸祭にはオテダマが孤立して見られる。表 12 で新しい侵入と見られるオテダマは、この東隣のオテダマを勢力の背景に持っているのであろうか。

『日本言語地図』では、駒生はオヒトツとなっていて、周囲に分布するオヒトツとともに一つの領域の中にあるが、年齢層に投影してみると、若い層から侵食が始まっているということを表 12 は示していると言えよう。

2.2.13. 表 13「かたぐるま」(『日本言語地図』149 図)

提示語形として用意したものは、カタウマとテングルマである。カタウメとカタグルマは『日本言語地図』方式の質問で得られた語形である。『日本言語地図』には「かたぐるま」の図は 2 枚あるが、149 図の方を参照されたい。

カタウマは老年層ではやや少ないが、総じて広く用いられている語形である。老年層に「知らない」がやや目立つことから、カタウマが用いられるようになったのは、それほど古いことではないようである。

カタウマを「知らない」とする人のうち、98 女、03 女、06 男、09 男、15 男の 5 人は、カタウメという形を答えている。この 5 人だけで他にはいない。こ

の語形はどのような経歴を持ったものであろうか。後に述べるように、カタウメは『日本言語地図』では駒生にだけ見られる語形である。古形の残存か、新しく生じた形なのか、この表からはどちらとも言いがたい。80 男の回答にカタマイがあった。表には示さなかったが、後部分のマイがメと変化しうるとすれば、カタメとなるわけであり、カタウメとの語形上の類似が想定される。

テングルマは、96 男が「使う」と答え、「昔使った」が 05 女、42 女に見られるほかには、「知っている」が少々見られるだけで、ほとんど用いられていない語形である。

カタグルマも、「使う」という人が計 17 人点在するだけで、さほど広く用いられている語形ではない。

『日本言語地図』149 図を見ると、先にも述べたように、駒生にはカタウメが見られ、他とは孤立した分布を呈している。先にも述べたように、カタマイ (80 男) が関係をしているとすると、5639. 13 の塩谷郡塩谷町に見られるカタンマイが関連すると思われるが、確かなところは不明と言わざるを得ない。

駒生の東側と南側には、テングルマがかなり濃い分布を示している。すぐ東隣にまで分布しているにもかかわらず、表

表 13

性別	男	女	男	女	男	女	男	女
53	—	○	—	×	—	×	—	×
52	⊖	—	×	—	×	—	⊖	—
51	⊖	—	×	×	×	×	×	×
49	—	⊖	—	×	—	×	—	×
48	⊖	×	×	×	×	×	×	⊖
47	⊖	—	×	—	×	—	×	—
46	○	⊖	×	×	×	×	⊖	×
45	—	⊖	—	×	—	○	—	⊖
44	—	—	×	×	—	×	—	×
43	⊖	—	×	—	×	—	×	—
42	—	⊖	×	—	—	⊖	—	×
41	⊖	○	×	×	×	×	⊖	—
40	—	×	—	×	—	○	—	⊖
39	⊖	—	×	—	×	—	×	—
37	—	⊖	—	×	—	×	—	×
36	⊖	—	×	—	○	—	⊖	—
35	⊖	—	×	—	×	—	×	—
33	—	⊖	—	×	—	○	—	×
32	⊖	—	×	—	×	—	×	—
29	○	—	×	—	×	—	⊖	—
28	⊖	⊖	×	×	×	×	×	×
27	—	⊖	—	×	—	×	—	×
26	⊖	—	×	—	×	—	×	—
25	⊖	—	×	—	×	—	×	—
24	⊖	⊖	×	×	×	×	⊖	×
23	⊖	⊖	×	×	○	×	×	×
21	⊖	—	×	—	×	—	⊖	—
18	×	—	×	—	×	—	⊖	—
17	—	○	—	×	—	×	—	⊖
15	×	—	⊖	—	○	—	×	—
14	⊖	—	×	—	×	—	×	—
12	⊖	—	×	—	○	—	×	—
11	—	—	×	—	×	—	×	—
09	×	⊖	⊖	×	○	×	⊖	×
08	—	⊖	—	×	—	×	—	×
06	×	—	⊖	—	×	—	⊖	—
05	—	×	—	×	—	⊖	—	⊖
03	—	×	—	⊖	—	×	—	×
02	⊖	—	×	—	×	—	×	—
01	—	⊖	—	×	—	×	—	×
98	—	×	—	⊖	—	×	—	×
97	—	⊖	—	×	—	×	—	×
96	×	—	×	—	⊖	—	×	—
95	⊖	—	×	—	×	—	×	—
93	⊖	—	×	—	×	—	×	—
92	○	—	×	—	○	—	⊖	—
81	—	⊖	—	×	—	×	—	×
80	×	—	×	—	×	—	×	—
78	⊖	—	×	—	×	—	×	—
生年	カタウメ		カタウメ		テングルマ		カタグルマ	
語形								

表 14

性別	男	女	男	女
53	—	×	—	●
52	×	—	×	—
51	○	×	×	●
49	—	×	—	●
48	×	×	×	●
47	×	—	●	—
46	×	×	×	●
45	—	×	—	●
44	—	×	—	●
43	×	—	◎	—
42	—	×	—	●
41	●	○	●	●
40	—	×	—	●
39	×	—	●	—
37	—	○	—	●
36	○	—	●	—
35	×	—	●	—
33	—	○	—	●
32	×	—	●	—
29	×	—	●	—
28	○	○	●	●
27	—	○	—	●
26	○	—	●	—
25	×	—	●	—
24	○	●	●	—
23	○	×	●	●
21	×	—	●	—
18	×	—	●	—
17	—	×	—	●
15	◎	—	●	—
14	●	—	×	—
12	●	—	●	—
11	●	—	●	—
09	○	●	●	—
08	—	●	—	●
06	—	×	—	—
05	—	●	—	●
03	—	◎	—	●
02	●	—	●	—
01	—	×	—	●
98	—	○	—	●
97	—	×	—	●
96	●	—	●	—
95	●	—	●	—
93	●	—	●	—
92	—	—	●	—
81	—	●	—	●
80	×	—	●	—
78	○	—	●	—
生 年 語 形	ヒキワタ*		マワタ	

13 では、テングルマはほとんど用いられていない。地理的分布の濃さのわりには他へ侵出する力が弱いということであろうか。

カタグルマは、テングルマに比べて、分布の領域は大きくなく、駒生の付近には二、三地点しか見られない。それにもかかわらず、年齢層への投影で見ると、点々と分布し、テングルマより強い浸透力を見せている。標準語形という意識が働いているのであろうか。

駒生のすぐ北に分布するカトウマという語形が、本調査では全く得られなかったことも注目してよいと思われる。

2.2.14. 表 14「まわた」（『日本言語地図』159 図）

提示語形として用意したものはヒキワタである。マワタは『日本言語地図』方式の質問で得られた形である。

ヒキワタの使われ方の分布は、大きく三つに分けてみることができよう。老年層の「使う」というグループと、中年層の「知っている（けど使わない）」のグループ、それに、若い層の「知らない」というグループである。中年層の「知っている」は、年齢の高い方に多く見られたものが、低い方ではやや少なくなると同時に「知らない」が増え、若い層の「知らない」ばかりの分布へと続いていると見ることができよう。老年層には、「知らない」、「知っている（けど使わない）」も見られ、中・若年層の分布と合わせ考えて、ヒキワタは若い世代から失われ衰退している語形と考えられる。

マワタは、ごく若い層の、それも男性の間に「知らない」という回答があるほかは、ほぼ全年齢層にわたって

用いられている形である。マワタを「知らない」若い世代を見ると、46 男、48 男、52 男ではヒキワタも「知らない」となっている。「まわた」に対して、語形を持っていないことになる。「まわた」そのものを知らないのかもしれない。また、43 男では、ヒキワタは「知らない」、マワタは「昔使った」、51 男では、ヒキワタは「知っている（けど使わない）」、マワタは「知らない」という回答である。上の 3 人のように「まわた」に当たる語形を持たないというほどではないが、やはり、「まわた」そのものに対する表現を失いかけているのではないかと考えられる。

『日本言語地図』159 図を見ると、栃木一円はマワタの領域となっている。駒生にもマワタが分布している。ヒキワタは、福島から宮城、岩手南部にかけて連続した分布を持っており、関東には少ない。栃木では北半に 3 地点、駒生の西隣の 5658. 96、小山市稲葉郷に 1 地点の計 4 地点見られるのみである。これら関東に点在するヒキワタは、かつては福島、宮城に分布するヒキワタに連続していたものが、マワタの侵入を受け、その分布を分断されたものの残存だと考えられる。栃木には計 4 地点しか見られず、駒生の付近は 1 地点のみであるから、マワタの侵入はかなり強力で、ヒキワタは完全に駆逐されたかに見えるが、表 14 に見るように、語形を提示して内省を求めると、老年層ではまだ記憶に残っていて完全には消えていないということが分かる。

2.2.15. 表 15 「ぬか」（『日本言語地図』172 図）

コヌカを提示語形として用意した。ヌカ、コメヌカは『日本言語地図』方式による質問で得られた語形である。

コヌカは、「昔も今も使う」という人が少ない。80 男、05 女、15 男、21 男、24 女の 5 人だけである。「昔使った」というのは、02 男、06 男の 2 人が答えている。97 女、01 女、08 女、12 男、24 男の 5 人からは「今使う」という回答が得られた。「昔は使わなかった」というわけである。「知っている（けど使わない）」という回答は、ほぼ全年齢層にわたって見られる。「知らない」の分布は若い層にやや多い。

表 15

性別	男	女	男	女	男	女
53	—	×	—	●	—	×
52	○	—	○	—	×	—
51	○	×	●	●	×	×
49	—	×	—	×	—	×
48	×	×	●	●	×	×
47	○	—	×	—	●	—
46	×	×	●	●	×	×
45	—	○	—	○	—	×
44	—	×	—	●	—	×
43	×	—	●	—	×	—
42	—	○	—	●	—	×
41	×	×	●	●	×	×
40	—	×	—	●	—	×
39	×	—	●	—	●	—
37	—	×	—	●	—	×
36	○	—	●	—	×	—
35	×	—	×	—	●	—
33	—	×	—	●	—	●
32	×	—	●	—	×	—
29	○	—	×	—	●	—
28	×	○	×	●	×	×
27	—	○	—	●	—	×
26	×	—	●	—	●	—
25	○	—	●	—	×	—
24	●	—	●	—	×	×
23	○	○	●	●	×	×
21	●	—	●	—	×	—
18	×	—	●	—	●	—
17	—	○	—	●	—	×
15	●	—	●	—	×	—
14	○	—	●	—	×	—
12	●	—	●	—	×	—
11	○	—	●	—	×	—
09	○	×	●	●	×	●
08	—	●	—	●	—	●
06	◎	—	●	—	●	—
05	—	●	—	●	—	×
03	—	×	—	×	—	●
02	◎	—	●	—	×	—
01	—	●	—	●	—	●
98	—	○	—	●	—	×
97	—	●	—	●	—	●
96	×	—	●	—	●	—
95	○	—	×	—	●	—
93	×	—	●	—	×	—
92	○	—	×	—	●	—
81	—	○	—	●	—	●
80	●	—	●	—	×	—
78	○	—	●	—	●	—
生年 語形	コヌカ		ヌカ		コメヌカ	

このコヌカの分布は何と見るべきものであろうか。「今使う」が多いことから、古形の残存と簡単に言ってしまうわけにはいかない。といって、若い世代が新しい形を取りこんでいるすがたも見えない。「知っている」が全年齢層に分布しながら「使う」という人が少ないことと合わせ、この分布はやや不可解と言わざるをえない。

ヌカは、ほぼ全年齢層にわたって分布する。コメヌカはさほど密に分布はしていないが、中年層から上で用いられている。質問で「玄米について白くするとき」に出るものについて聞いたため、ヌカにコメ-を付けたものであろう。玄米以外にもヌカを生じる穀物があるというわけである。

『日本言語地図』172 図の分布を見ると、東日本一帯に広く分布するコヌカの領域を、関東東南半に分布するヌカが埼玉東部、群馬東南端、栃木にかけて侵食している様子がうかがえる。駒生はヌカであるが、すぐ西側でコヌカの領域と接している。駒生付近の分布からも、言語地理学的にはヌカがコヌカの領域に侵入していると考えられる。

上のように考えるとき、表 15 のコヌカの分布はどうであろうか。地理的には、駒生のすぐ隣に分布を持つコヌカであるから、駒生でヌカの侵食を受けたとしても、本調査の方式で内省を求めれば、「使う」という回答がもう少し得られることが、他の例から推して期待されるところである。

言語地理学的にヌカがコヌカを駆逐しているとするのが誤りなのか、表に示したコヌカの分布はやはり古形の衰退しているさまを映していると考え

えるのか、考え付くことはいくつ
かあるが、ここに得られた資料だ
けからは、断定的なことを言うべ
きではなからう。

2.2.16. 表16「とうもろこし」 (『日本言語地図』182図)

提示語形としては3語用意した。
トームギ、トーミギ、トーギミで
ある。トーモロコシ、トーキビは、
『日本言語地図』方式の質問によ
り得られたものである。

トームギは、全年齢層で用いら
れている。「昔使った」、「知ってい
る」とする9人はすべてトーモロ
コシを用いている。トームギはこ
の地点で強固な基盤を持ちながら
も、ところどころでトーモロコシ
の侵入を受けているというところ
であろう。

トーミギ、トーギミの2形は、
わずかに「知っている」という人
が計8人と、「昔使った」という人
が1人(09女)あるのみで、ほと
んどその痕跡が見られない。09女
のトーミギを昔使ったという回答
一つから、トーミギが古形の残存
であるとするには無理があろう。

表16

性別	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
53	—	◎	—	×	—	×	—	●	—	×
52	●	—	×	—	×	—	●	—	×	—
51	●	●	×	×	×	×	●	●	×	×
49	—	—	×	×	—	×	—	×	—	×
48	●	●	×	×	×	×	●	●	×	×
47	●	—	×	—	×	—	×	—	×	—
46	●	●	×	×	×	×	—	—	×	×
45	—	●	—	×	—	×	—	●	—	×
44	—	●	—	×	—	×	—	●	—	×
43	●	—	×	—	×	—	●	—	×	—
42	—	●	—	○	—	×	—	●	—	×
41	●	●	×	×	×	×	●	●	×	×
40	—	◎	—	×	—	×	—	●	—	×
39	●	—	×	—	×	—	●	—	×	—
37	—	○	—	×	—	○	—	●	—	×
36	●	—	×	—	×	—	●	—	×	—
35	●	—	×	—	×	—	×	—	×	—
33	—	●	—	×	—	×	—	●	—	×
32	○	—	×	—	×	—	×	—	×	—
29	●	—	×	—	×	—	●	—	×	—
28	●	◎	×	×	○	×	×	●	×	×
27	—	●	—	×	—	×	—	●	—	×
26	●	—	×	—	×	—	●	—	×	—
25	●	—	×	—	×	—	—	—	×	—
24	◎	●	×	×	×	×	●	●	×	×
23	●	●	○	×	×	×	×	●	×	×
21	●	—	×	—	○	—	×	—	×	—
18	●	—	×	—	×	—	×	—	×	—
17	—	●	—	×	—	×	—	●	—	×
15	●	—	×	—	×	—	×	—	×	—
14	●	—	×	—	×	—	×	—	×	—
12	●	—	○	—	×	—	●	—	×	—
11	●	—	×	—	○	—	●	—	×	—
09	●	×	×	◎	×	×	×	●	×	×
08	—	○	—	×	—	×	—	●	—	×
06	●	—	×	—	×	—	×	—	×	—
05	—	●	—	×	—	×	—	●	—	×
03	—	●	—	×	—	×	—	×	—	×
02	◎	—	×	—	×	—	●	—	×	—
01	—	●	—	×	—	×	—	×	—	×
98	—	●	—	×	—	×	—	×	—	×
97	—	●	—	×	—	×	—	×	—	×
96	●	—	×	—	×	—	×	—	○	—
95	●	—	×	—	×	—	×	—	×	—
93	●	—	×	—	×	—	●	—	×	—
92	●	—	×	—	×	—	●	—	●	—
81	—	●	—	○	—	×	—	●	—	×
80	○	—	×	—	×	—	●	—	×	—
78	●	—	×	—	×	—	●	—	×	—
生年	トームギ		トーミギ		トーギミ		トーモロコシ		トーキビ	
語形										

何かの折に近隣の語形を耳にして知っているといったところと一応考えておく。

トーモロコシは、若い層ではかなり受け入れられているが、中・老年層では、まだ大勢を占めるには至っていない。トーモロコシを「今使う」とし、新しい勢力であることを示す回答が中・老年層にやや多い点にも注目すべきであろう。トームギとトーモロコシの併用という型が若い層に多く、中・老年層にはトームギ単用とトームギ、トーモロコシの併用とが混在するということになる。トームギの強固な地盤の上に若い層からトーモロコシが侵入し、トームギとの共存を図っているというのが現在のすがたであろうか。

トーキビは1人だけ92男が「使う」と答えていて、「知っている」が96男に見られる。他では全く得られなかった。

『日本言語地図』182図を見ると、駒生を含む栃木中央部にトームギの分布領域があるが、領域としてはさほど広くない。このトームギの分布に分断されるように、その北東側と南東側とにトーギミが分布する。最も近いのは、塩谷郡阿久津町宝積寺5649.29に見られるトーギミである。トーミギはトーギミのさらに外側に分布し、東側の茨城、北側の福島へと連続した領域へつながっている。トーモロコシは関東南半に広い領域を持つが、栃木には3地点しか見られない。駒生からはやや遠いと言えよう。

これらの地理的分布と表16の分布とをつき合わせてみると、トーミギ、トーギミが近くに分布するにもかかわらず、駒生にはほとんど影響を及ぼしていない点に注目される。地理的分布からは、トーギミ、トーミギをトームギが分断することから、トームギの地域にもかつてはトーギミ、あるいは、トーミギが分布していたと考えられるが、駒生ではその痕跡は年齢層の上に投影されていない。この老年層よりさらに古い年齢層で古い時代に生じた変化であって、現在までそれが跡をとどめていないのか、あるいは、トームギの領域にかつてはトーギミ、トーミギがあったとする仮説が誤りなのか、さらに別の可能性を考えるべきなのか、問題点として提起するにとどめておく。

トーモロコシは、地理的には駒生からかなり離れて分布する。表に現れたトーモロコシは、地理的に連続した隣接地から侵入したものとは考えにくい。標準語形であることもあって、何か別の筋道を通して侵入したものであろう。

トーキビは、栃木には北部に2地点のみ孤立的に見られる。この分布と、表に見られる「使う」1人, 「知っている」1人を関連させて考える手はかりは今のところないと言うほかはない。

2.2.17. 表17「うろこ」(『日本言語地図』217図)

コケラとコケとを提示語形として用意した。ウロコは『日本言語地図』方式の質問で得られた語形である。

コケラは、ごく若い層を除いて、ほぼ全年齢層にわたって用いられている。コケは、最年長の層で「使う」が2人見られるほか、97女と01女で「今使う」という回答が見られる。年齢の低い層では用いられなく、高い層で「昔は使わなかった」という内省が得られるということが何を意味するかは分からない。

ウロコは、ごく若い層では多く用いられているが、それより年齢が上になるとさほど多く用いられてはいない。

全体としては、ごく若い層ではコケラが失われウロコが優勢を占めているが、そのほかの年齢層ではコケラが強固な地位を占めていると言えよう。ウロコの分布も、若い層ではコケラを「知っている(けど使わない)」という地位へ追いやる力を見せているものが多いが、老年層では、コケラと併用というかたちをとっており、コケラを駆逐するには至っていない。

『日本言語地図』217図の分布を見ると、東日本

表 17

性別	男	女	男	女	男	女
53	—	×	—	×	—	●
52	●	—	×	—	●	—
51	×	×	×	×	●	●
49	—	●	—	×	—	×
48	○	○	×	○	●	●
47	○	—	×	—	●	—
46	●	○	×	×	×	●
45	—	×	—	×	—	●
44	—	●	—	×	—	×
43	●	—	×	—	×	—
42	—	●	—	○	—	×
41	●	●	×	×	×	×
40	—	●	—	×	—	●
39	×	—	×	—	●	—
37	—	○	—	×	—	●
36	○	—	×	—	●	—
35	●	—	×	—	×	—
33	—	●	—	×	—	×
32	◎	—	×	—	×	—
29	●	—	×	—	×	—
28	×	●	×	×	×	×
27	—	●	—	×	—	●
26	●	—	○	—	×	—
25	○	—	×	—	●	—
24	●	●	×	○	×	●
23	●	●	×	×	×	×
21	●	—	×	—	×	—
18	●	—	×	—	×	—
17	—	●	—	×	—	×
15	●	—	×	—	×	—
14	●	—	×	—	×	—
12	●	—	×	—	●	—
11	●	—	×	—	×	—
09	●	●	×	×	●	×
08	—	●	—	×	—	●
06	●	—	×	—	×	—
05	—	●	—	×	—	●
03	—	●	—	×	—	×
02	●	—	×	—	×	—
01	—	●	—	◎	—	×
98	—	●	—	×	—	×
97	—	●	—	◎	—	×
96	●	—	×	—	×	—
95	●	—	×	—	×	—
93	●	—	×	—	×	—
92	●	—	×	—	×	—
81	—	●	—	●	—	×
80	●	—	×	—	●	—
78	○	—	●	—	×	—
生 年 語 形	コ ケ ラ		コ ケ		ウ ロ コ	

に広くコケラ、コケが領域を持っている。栃木一円には、コケラが優勢な領域を持ち、コケは少ない。ウロコは標準語形とされているにもかかわらず、関東には分布領域を持たない。駒生には、コケラとコケとが併用のかたちで分布している。コケラはその分布領域の中にあるが、コケは他とはやや離れている。ウロコは、すぐ東隣に単独で分布するが、広い分布領域を背景にしたものではない。駒生のコケラは『日本言語地図』では分布領域の中にあり、安定しているように見えるが、表 17 の分布を見ると若い世代から失われはじめる兆しが見えている。コケは、地理的に他と遠くて孤立しているが、表で最年長の層にかすかに見られるものを古形の残存と見れば、さらに古い年齢層ではかつて今よりも多く用いられ、地理的にも他と連続した分布を見せていたのではないかという仮説が考えられようか。

表で、ウロコが若い層に侵入しているということと、駒生の東隣にウロコが分布することとは関連があろうか。このウロコは分布領域を持たずに存在する。地面を這って伝播したというより、この地方の中心地に飛び火のように伝わった新しい勢力なのであろう。そのような力を背景に若い層に侵入していったものと言えようか。

2.2.18. 表 18「とかげ」(『日本言語地図』224 図)

『日本言語地図』では「とかげ」のほか、「かなへび」も質問項目に加えているが、本調査では「とかげ」だけについて質問した。関連質問として、「とかげ」と種類の違うものについて名称の別があるかどうかを聞いたが、区別して別の名を与えるという回答はほとんど得られなかった。提示語形としては、カマギッチョとカガミッチョとを用意した。トカゲ、カマヘビ、カナヘビは『日本言語地図』方式の質問で得られたものである。

カガミッチョについては、02 男「使う」、15 男「昔使った」、35 男「黒いもの」、46 女「知っている」という回答がそれぞれ得られたが、調査の際の音のとりちがえという疑いのあるものも含まれるため、あえて表には示さなかった。

カマギッチョは 15 男 (53 歳) あたりを境にして、それより年上の層ではかな

り広く用いられている。それより若い層では、「使う」は少なくなり、急速に衰退している様子がうかがえる。なお、93 男の回答はカマゲッチョであった。

トカゲは若い層では広く用いられているが、32 男あたりから「知らない」が増加する。

カマヘビとカナヘビはおもしろい分布を見せている。若い層にひとかたまり、カマヘビ、カナヘビが分布し、中年層の中間あたりにまたひとかたまり、そして、最年長の層にさらに小さなひとかたまりとなって分布する。それぞれを「かたまり」として見るのはやや無理があるかもしれないが、他に多く見られるような若い層とか老年層とかの一方に寄った分布を示していない点には注目すべきであろう。

『日本言語地図』224 図を見ると、関東東半から福島にかけてトカゲが分布している。関東の中央部には帯状にカマギッチョの類が分布している。栃木には広くトカゲが分布しているが、駒生には孤立してカナヘビが見られる。カナヘビは茨城に点々と見られるもので、栃木には少ない。カマヘビは、5750. 30 真岡市田町に1地点離れて見られる。カマギッチョの分布は栃木の南の端であり、いちばん近いのが、5648. 96 上都賀郡栗野町口栗

表 18

性別	男	女	男	女	男	女	男	女
53	—	×	—	●	—	×	—	×
52	×	—	—	●	—	×	—	×
51	×	×	—	●	×	×	×	×
49	—	×	—	●	—	×	—	×
48	×	×	●	●	×	×	×	×
47	×	—	—	●	×	—	—	●
46	×	×	●	×	●	●	×	×
45	—	×	—	×	—	×	—	●
44	—	●	—	×	—	×	—	×
43	×	—	●	—	×	—	×	—
42	—	○	—	●	—	×	—	●
41	●	×	●	●	×	×	●	●
40	—	×	—	●	—	×	—	×
39	×	—	—	●	×	—	×	—
37	—	×	—	●	—	×	—	×
36	○	—	●	—	×	—	×	—
35	×	—	—	●	×	—	×	—
33	—	○	—	●	—	×	—	●
32	●	—	×	—	×	—	×	—
29	×	—	×	—	×	—	×	—
28	◎	×	×	×	×	●	×	×
27	—	◎	—	×	—	●	—	×
26	○	—	—	●	×	—	×	—
25	×	—	—	●	×	—	×	—
24	◎	●	●	×	×	●	×	×
23	○	●	●	×	×	●	×	×
21	×	—	×	—	×	—	●	—
18	○	—	×	—	×	—	●	—
17	—	×	—	×	—	×	—	●
15	—	—	×	—	×	—	×	—
14	●	—	—	●	×	—	×	—
12	●	—	—	●	×	—	×	—
11	●	—	×	—	×	—	×	—
09	●	×	●	●	×	×	×	×
08	—	●	—	●	—	×	—	×
06	●	—	—	●	×	—	×	—
05	—	◎	—	●	—	×	—	×
03	—	●	—	●	—	×	—	×
02	●	—	×	—	×	—	×	—
01	—	●	—	×	—	×	—	×
98	—	◎	—	×	—	●	—	×
97	—	●	—	×	—	×	—	×
96	—	●	—	●	—	×	—	×
95	○	—	●	—	×	—	×	—
93	●	—	●	—	×	—	×	—
92	●	—	—	●	×	—	×	—
81	—	●	—	×	—	×	—	●
80	◎	—	×	—	●	—	×	—
78	×	×	—	●	×	—	×	—
生年	カマギッチョ*		トカゲ		カマヘビ		カナヘビ	
語形								

表 19

性別	男	女	男	女	男	女
53	—	×	—	×	—	◎
52	×	—	×	—	◎	—
51	×	×	×	×	◎	◎
49	—	×	—	×	—	×
48	○	×	×	×	◎	◎
47	×	—	×	—	◎	—
46	×	×	×	×	◎	×
45	—	×	—	×	—	◎
44	—	×	—	×	—	◎
43	×	—	×	—	◎	—
42	—	×	—	×	—	◎
41	×	×	×	×	◎	◎
40	—	×	—	×	—	◎
39	×	—	×	—	◎	—
37	—	×	—	×	—	◎
36	○	—	◎	—	◎	—
35	×	—	×	—	◎	—
33	—	×	—	×	—	◎
32	×	—	×	—	◎	—
29	○	—	×	—	◎	—
28	×	○	×	×	◎	◎
27	—	×	—	×	—	◎
26	×	—	×	—	◎	—
25	◎	—	×	—	◎	—
24	◎	×	×	×	◎	◎
23	◎	◎	×	×	◎	×
21	◎	—	×	—	◎	—
18	○	—	×	—	◎	—
17	—	×	—	×	—	◎
15	◎	—	×	—	◎	—
14	○	—	×	—	◎	—
12	◎	—	×	—	◎	—
11	○	—	×	—	◎	—
09	◎	○	×	×	◎	◎
08	—	◎	—	×	—	◎
06	×	—	◎	—	◎	—
05	—	○	—	×	—	◎
03	—	○	—	×	—	◎
02	◎	—	×	—	×	—
01	—	×	—	◎	—	◎
98	—	×	—	◎	—	◎
97	—	◎	—	◎	—	◎
96	◎	—	×	—	◎	—
95	◎	—	×	—	◎	—
93	◎	—	×	—	◎	—
92	◎	—	×	—	◎	—
81	—	◎	—	×	—	×
80	×	—	×	—	—	×
78	×	—	×	—	◎	—
生 年 語 形	クチ* ハビ		クチャ ヘビ		マム シ	

野のカマゲッチョである。これらの分布の言語地理学的解釈は容易でない。カマギッチョが広がりつつあるのか、トカゲがカマギッチョを追っているのか、分布図からは何とも言えない。トカゲが標準語形であることから、勢力を持っていて他の語を圧迫していると考えるのが穏当であろうか。表 18 のカマギッチョの分布が、この語形の衰退しつつある様子を示していることと照応することにもなるわけである。

『日本言語地図』で駒生に見られるカナヘビは、分布としては、やや孤立したものとなっている。これを年齢層との関係で見るとき、どのように考えられるものなのであろうか。先にも述べたように、表に示したカナヘビの分布は不可解であるが、『日本言語地図』の被調査者の 1881 年生まれと同年齢層である最年長の数人をとってみると、カナヘビは有力な語形であって、『日本言語地図』に採用されたにはそれ相当の根拠があるわけである。しかし、新旧の関係や変化の方向については、目のところでは何も言うことはできない。

2.2.19. 表 19「まむし」(『日本言語地図』228 図)

提示語形として用意したものはクチハビであり、クチャヘビ、マムシは『日本言語地図』方式の質問で得られた語形である。

クチハビは、老年層ではある程度用いられているが、中年層になると「昔使った」、「知っている」が増え、「使う」という回答は減る。39 より下の若

年層だと、「知っている」が1人だけで、あとはみな「知らない」と答えている。かなり衰退している語形と言うことができよう。

クチャヘビは、全体で5人が「使う」あるいは「昔使った」と答えているが、その他の人たちは全く知らないようである。5人のうち4人が老年層に集中している。古形の残存であろうか。

マムシは、ほぼ全年齢層にわたって用いられている。若い層の46女、49女の2人は、マムシを「知らない」だけでなく、他の語も持っていない。若い女性でもあり、「まむし」そのものを知らないのかもしれない。80男の老人も「まむし」に当たる語形を答えていないが、こちらは、「クチナワはいない」という回答をしている。表には示さなかったが、クチナワという語形は持っているわけである。

『日本言語地図』228図の分布を見ると、栃木北半から茨城、千葉にかけて、クチハビ、クッチャメという方言形が分布領域を持ち、その西に広い領域を持つマムシと境を接している。駒生はマムシの領域に入るが、すぐ東にはクチハビの分布が見られ、マムシの領域の最前線にあると言うことができよう。地理的にもマムシがクチハビを東へ追っていった、クチハビは衰退しつつある語形であることがうかがわれる。

表のクチハビが若い層ですでに完全に失われ、中年層でもあまり用いられない衰退語形であることと、『日本言語地図』の分布の様相とは方向を同じくすると言える。

クチャヘビは茨城の南部に孤立して1地点見られるもので、栃木との地理的な関係はちょっと考えにくい。本調査で得られたクチャヘビは、どのような性格を持つものであろうか。目下のところ不明と言わざるを得ない。

2.2.20. 表20「かまきり」(『日本言語地図』229図)

『日本言語地図』では「かまきり」の図は2枚あるが、229図の「—— 一般的な名称 ——」の方を参照されたい。

提示語形としたのは、カマギッチョとカガミッチョの2語形である。カマキ

表 20

性別	男	女	男	女
53	—	×	—	●
52	×	—	—	—
51	×	×	●	●
49	—	×	—	●
48	×	×	●	●
47	×	—	●	—
46	×	×	●	●
45	—	×	—	●
44	—	×	—	●
43	×	—	●	—
42	—	×	—	●
41	×	×	●	●
40	—	×	—	●
39	×	—	●	—
37	—	×	—	●
36	×	—	●	—
35	×	—	—	—
33	—	×	—	●
32	×	—	●	—
29	○	—	●	—
28	○	×	●	●
27	—	×	—	●
26	×	—	●	—
25	×	—	—	—
24	×	×	●	●
23	×	×	●	●
21	◎	—	●	—
18	◎	—	●	—
17	—	×	—	●
15	○	—	—	—
14	×	—	●	—
12	×	—	●	—
11	●	—	—	—
09	◎	◎	●	●
08	—	×	—	—
06	×	—	●	—
05	—	×	—	●
03	—	×	—	●
02	×	—	●	—
01	—	×	—	×
98	—	×	—	●
97	—	×	—	×
96	×	—	●	—
95	○	—	●	—
93	×	—	●	—
92	×	—	●	—
81	—	×	—	●
80	×	—	—	—
78	×	—	●	—
生年 語形	カマギッチョ*		カマキリ	

りは『日本言語地図』方式の質問で得られたものである。

カガミッチョという語形には全く反応が得られなかった。従って、表にも示さなかった。カマギッチョも、わずかな反応しか得られなかった。「使う」というのが11男ただ1人であり、「昔使った」が、09男、09女、18男、21男の4人で、「知っている」が95男、15男、28男、29男の4人だけであった。少しでも使った、あるいは、使うという回答が、「知っている」をはさんで09と21の間の狭い年齢層に集まっていることになる。どのような意味を持つのであろうか。

カマキリは97女、01女を除いて全員に用いられている。この2人からは、オガマカッキリという形が得られた。『日本言語地図』にはない語形であり、他のだれからも得られなかっためずらしい語形である。この形との関連で、オカマという形が93女、08女の2人から得られた。これも『日本言語地図』には見られない語形である。

『日本言語地図』229図を見ると、駒生にはカマキリが見られ、それほど広い占有領域は見られないが周辺に点々と広がっている。表で全年齢層にわたって分布していることの背景となる分布ということであろう。

カマギッチョは、栃木の西のへりから茨城にかけて点々と見られる。『日本言語地図』224図「とかげ」のカマギッチョとは分布の領域が異なることに注意すべきであろう。駒生からはやや離れた地点に分布している。この離れた分布と、表に示したカマギッチョの分布との関連は、興味があるがその解釈はよく分からないと言わざるを得ない。

『日本言語地図』には、駒生の付近に、イボカキ(ムシ)、オガミッチョ、オガミムシ、トーロー(ムシ)など

が見られるが、本調査では
いずれも現れなかった。

表 21

2.2.21. 表 21 「かたつむり」(『日本言語地図』

236, 237, 238 図)

提示語形として用意したものは、マイプロ、ツプロ、ダイロ、ダイロンボ、マメクジの5語である。このうち、表に示したのは、マイプロ、ツプロの2形のみである。ネープロ、ネープロツプロ、デンデンムシ、カタツムリの4語は、『日本言語地図』方式の質問で得られたものである。

マイプロ、ネープロ、ツプロ、ネープロツプロの4語は、いずれも老年層に「使う」あるいは「知っている」が見られる。少し離れて、24男にマイプロ、ツプロが1人、41女、42女にマイプロ、ツプロを「知っている」が2人見られる。これらには、多少の語形の変種が見られた。メーブル(24

性別	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
53	—	×	—	×	—	×	—	×	—	×	—	●
52	×	—	×	—	×	—	×	—	×	—	●	—
51	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	●	●
49	—	×	—	×	—	×	—	×	—	●	—	×
48	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	●	●
47	×	—	×	—	×	—	×	—	●	—	●	—
46	×	×	×	×	×	×	×	×	●	×	●	●
45	—	×	—	×	—	×	—	×	—	●	—	●
44	—	×	—	×	—	×	—	×	—	●	—	×
43	×	—	×	—	×	—	×	—	●	—	●	—
42	—	○	—	×	—	○	—	×	—	●	—	●
41	×	○	×	×	×	○	×	×	—	●	●	●
40	—	×	—	×	—	×	—	×	—	●	—	女
39	×	—	×	—	×	—	×	—	●	—	●	—
37	—	×	—	×	—	×	—	×	—	×	—	●
36	×	—	×	—	×	—	×	—	●	—	●	—
35	×	—	×	—	×	—	×	—	●	—	●	—
33	—	×	—	×	—	×	—	×	—	●	—	●
32	×	—	×	—	×	—	×	—	●	—	×	—
29	×	—	×	—	×	—	×	—	●	—	×	—
28	×	×	×	×	×	×	×	×	●	—	●	●
27	—	×	—	×	—	×	—	×	—	×	—	●
26	×	—	×	—	×	—	×	—	●	—	×	—
25	×	—	×	—	×	—	×	—	●	—	●	—
24	●	×	×	×	×	×	×	×	×	●	●	×
23	×	×	×	×	×	×	×	×	●	●	●	●
21	×	—	×	—	×	—	×	—	●	—	×	—
18	×	—	×	—	×	—	×	—	●	—	×	—
17	—	×	—	×	—	×	—	×	—	●	—	×
15	×	—	×	—	×	—	×	—	●	—	×	—
14	×	—	×	—	×	—	×	—	●	—	×	—
12	○	—	×	—	○	—	×	—	●	—	×	—
11	×	—	●	—	×	—	×	—	×	—	×	—
09	×	×	×	×	×	×	×	×	●	●	●	●
08	—	×	—	●	—	●	—	×	—	×	—	×
06	×	—	●	—	×	—	×	—	×	—	●	—
05	—	×	—	×	—	×	—	×	—	●	—	×
03	—	○	—	●	—	×	—	×	—	×	—	●
02	×	—	●	—	×	—	×	—	●	—	●	—
01	—	○	—	×	—	○	—	×	—	×	—	×
98	—	×	—	×	—	●	—	×	—	●	—	×
97	—	○	—	●	—	○	—	×	—	×	—	×
96	×	—	×	—	×	—	●	—	×	—	●	—
95	×	—	×	—	×	—	●	—	●	—	×	—
93	×	—	●	—	×	—	●	—	×	—	×	—
92	×	—	×	—	×	—	×	—	●	—	●	—
81	—	●	—	×	—	○	—	×	—	×	—	×
80	●	—	×	—	×	—	×	—	×	—	×	—
78	×	—	×	—	×	—	×	—	×	—	●	—
生年 語形	マイ* プロ		ネー* プロ		ツ* プロ		ブ* ネー プロ		デン デン ムシ		カタ ツム リ	

男), ネーブル, ネーブルツブル (93 男), ネーボロ (97 女), ネーボロツブル (01 女), ネーブル (03 女), ネーブル (08 女) などであるが, それぞれ表の語形のようにまとめて示した。さらに, これらの語形のほかに, マイブロツブル (「使う」81 女, 「昔使った」09 男, 「知っている」23 男), ダイロメ (「昔使った」14 男), デーロメ (「昔使った」23 女), ツノダセ (「使う」96 男), ナメクジ (「使う」80 男, 「昔使った」14 男) が見られたが, 数が少ないこともあって表には示さなかった。

デンデンムシとカタツムリは, いずれも中年層から上の年齢層で使われる度合いが少なくなり, 若い層で広く用いられていると見ることができよう。カタツムリの方がデンデンムシよりやや使われる度合いが低いと言えよう。デンデンムシが, いちばん若い層で現れていない点が注意を引く。デンデンムシの実際の語形に, デンデンムシムシという形があった。95 男, 05 女, 09 男, 09 女, 15 男, 24 女, 25 男, 28 女, 33 男, 35 男, 39 男, 41 女, 43 男, 44 女, 46 男, 49 女, 51 男の計 17 人に見られた。

『日本言語地図』の分布はやや複雑である。詳しくは, 236, 237, 238 の 3 図を見られたい。駒生にはマメクジが見られ, すぐ北の 5639. 80 今市市沢町のマメクジとともに小領域を作っている。駒生の北西側にはデーロ, ハダカデーロの類が分布し, 南側には, ネーボロ, ネーボロツブル, ナイボロ, ダイボロなどが見られる。マイブロはさらにその南側, 茨城に入ったあたりに見られる。カタツムリ, デンデンムシともに周辺に散在する。デンデンムシムシが, 栃木南端に 2 地点見られ, 上で付記したデンデンムシムシとの関係が想起される。ツブルは『日本言語地図』には採録されていない。

表 21 に示したマイブロ, ネーブロ, ネーブロツブルは, 多少の音変種は捨象するとして, 『日本言語地図』の上では駒生より南の地域に分布していることが分かる。他に提示語形として用意したダイロ, ダイロンボなど, 駒生の北東側に見られる語が, 本調査では「使う」という回答がほとんど得られなかったことと対照的で興味を引く。

『日本言語地図』では駒生にマメクジがあるが, 本調査ではマメクジは得られなかった。ナメクジという形は, 先にも述べたように, 2 人の人から回答を

得ていて、このマメクジと何か関係があるかもしれない。

2.2.22. 表 22「なめくじ」(『日本言語地図』239 図)

提示語形として用意したものは、ダイロ (メ)、マメクジ、マメクジリ、マメクジラ、ハダカダイロの 5 語である。このうち、マメクジリ、マメクジラ、ハダカダイロについては、すべての人が「知らない」と答えたので表から除いた。ナメクジは『日本言語地図』方式の質問で得られた語形である。

ダイロ (メ) は多くの音変種を含む。ダエロ、デーロ、デロ、ダイルなどの音変種に、接尾辞のメが付くか付かないかという変種である。これらをすべてまとめてダイロ (メ) として示した。中・老年層には多く用いられているが、若い層には少ない。

マメクジは、老年層に多少多く見られる他は、中年層の数人を除いて全く用いない層が広い。

ナメクジは、若い層に多いが、中年層の年の上の層から老年層にかけては「知らない」という人が多い。

このほか、09 女でネープロ、42 女でネーロメという形が得られた。また、15 男では、ドロンボという形が「昔使った」として答えられた。語形としてはダイロと関連があるのかもしれない。

『日本言語地図』239 図を見ると、駒生にはダイ

表 22

性別	男	女	男	女	男	女
53	—	○	—	×	—	●
52	○	—	×	—	●	—
51	×	×	×	×	●	●
49	—	●	—	×	—	×
48	●	×	×	×	×	●
47	○	—	×	—	●	—
46	○	×	×	×	●	●
45	—	○	—	×	—	●
44	—	●	—	×	—	●
43	—	—	×	—	×	—
42	—	×	—	×	—	●
41	●	×	×	×	●	●
40	—	×	—	×	—	●
39	○	—	×	—	●	—
37	—	×	—	×	—	●
36	●	—	×	—	●	—
35	●	—	×	—	●	—
33	—	○	—	×	—	●
32	×	—	×	—	●	—
29	×	—	×	—	●	—
28	●	●	×	×	●	—
27	—	●	—	●	—	×
26	●	—	×	—	×	—
25	○	—	×	—	●	—
24	●	●	●	×	×	●
23	●	●	×	×	×	●
21	—	—	×	—	×	—
18	●	—	×	—	●	—
17	—	●	—	×	—	●
15	●	—	×	—	●	—
14	×	—	×	—	●	—
12	●	—	●	—	×	—
11	●	—	×	—	×	—
09	●	●	×	—	●	×
08	—	●	—	●	—	×
06	●	—	×	—	×	—
05	—	●	—	×	—	●
03	—	●	—	●	—	×
02	●	—	×	—	●	—
01	—	●	—	●	—	×
98	—	●	—	●	—	×
97	—	●	—	×	—	●
96	●	—	×	—	●	—
95	●	—	×	—	×	—
93	●	—	●	—	×	—
92	●	—	×	—	●	—
81	—	●	—	○	—	×
80	●	—	×	—	×	—
78	●	—	×	—	●	—
生年 語形	ダイ* ロ(メ)		マ* メクジ		ナメクジ	

ロがあり、5649.65 のダイロとともに小領域を作っている。その東側にはマメクジがやや広い領域を持って分布している。駒生の西側にはハダカダイロが点々と見られる。ナメクジは、栃木南部にやや広く分布しているが、上記のハダカダイロ、ダイロの領域には少ない。

『日本言語地図』でのダイロの分布はそれほど強固とは思われない。表 22 のダイロ（メ）の分布も若年層で急速に失われつつあることとあわせ考えて、衰退の方向にある語であろうと考えられる。

マメクジは、駒生の東側にやや広い領域を持つが駒生での影響力はわずかである。老年層にわずかに見られるマメクジが古い層の残存か、ある時期侵入したものの名残かは分からない。

地理的に見たときのナメクジの分布はそれほど強固な領域を持っていないが、若い層への浸透の状況を見ると、相当な力で他を押しやっている様子がうかがえる。

3. おわりに

ある一地点の言語変化の状況を考えたとき、ある語が他から侵入して旧来の語を駆逐するとして、その変化はその地点の成員すべてについて同時に生じるのだろうか。それとも、はじめは一部の人に生じ、徐々に全体に広がっていくものであろうか。その変化の一時点では、すでに新しい語を取り入れた人、旧来の語を守り、新しい語の採用を拒んでいる人、中をとって両方を同時に受け入れている人といった、さまざまな言語使用、変化の過程が一つの地点の言語社会の中には混在しているのではなかろうか。それを「年齢」という軸からながめたらどのような様子になっているのだろうかというのが本調査を企画した動機であった。

若い人は新しいものを受け入れやすく、老年層は自分がかつて若いころ受け入れたものを持って老年に至るということを仮定して、このような調査を行った。かなりの項目で、老年層は「使い」、若年層は「知っている（けど使わない）」ないし「知らない」、あるいはその逆に、若い人は使うが老年層は使わないという分布が見られたが、上のような仮説を支持するものと見てよいだろうか。本報告では、強いて一般化はせず、ただ資料のみを提供するに止めたいと考える。

地理的な分布との関係でも一つの仮説を立てた。1本の等語線を境に二つの語が対峙しつつ、一方が他方を押しているとき、押している語の等語線のすぐ内側に位置する地点では、その等語線はごく最近通ったことになる。そのとき、その地点での言語変化、語の入れ替えは、やはり、上に述べたようなかたちで生じるのではないだろうかと考えた。すなわち、等語線のすぐ内側の地点では、等語線の通過によって分布上からは消えた語、つまり、等語線の向こう側の語

が何らかのかたちで痕跡をとどめてはいないか、また、逆に、等語線の向こう側の地点には、分布上はこちら側の新しい勢力は入っていないように見えるが、その地点の言語社会のどこかに何かの形ですでに侵入し先遣隊としての働きをしているということはないだろうかということを考え、その一種のずれを年齢層の上に投影しようとしたわけである。

これまで見てきたように、『日本言語地図』では他の地点に分布する語形が、この調査の方法で内省を求めると「使う」、「昔使った」云々といった肯定的な回答を得ることが分かった。上の仮説は一応実例を得たわけであるが、これらの例がこの仮説以外の要因によって生じたのではないという証明がなされたわけではないので、上の仮説が一般化されるというわけにはいかない。本報告では、上の仮説にもとづいて集めた資料を示すということにとどめたい。

参 考 文 献

1. 徳川宗賢「等語線をめぐって」(日本方言研究会編『日本の方言区画』1964, 東京堂出版)
2. 柴田武『言語地理学の方法』(1969, 筑摩書房)
3. W. A. グロータース『日本の方言地理学のために』(1976, 平凡社)

(以上, 高田 誠執筆)

地域差と年齢差

——新潟県糸魚川市早川谷における調査から——

1. 目的と調査の概要

1.1. 目 的

言語地図は、ことばの変異相のうち、特に地域差の側面をとりだして明示しようとする。そのため、調査にあたって、被調査者の年齢、性別、階層などを統一すべく気を配り、またどういう時に使うことばに焦点をあてるかに留意する。いうまでもないが『日本言語地図』もその例にもれない。しかし、ことばの変異相には、地域差（被調査者の生育地）のほか、被調査者のその他の種々の属性にかかわるもの、また話し相手の違いや場面の違いや話題の違いによるものなど、さまざまなものが考えられる。

一方に、たとえば『日本言語地図』のように単一の変異相をできるだけ純粋な形でとりだそうとする研究があるとすれば、他方に、複数の変異相を関連づけつつとらえようとする研究があつてよい。

ここでは、ことばの使用者の属性にかかわる変異相のうち、地域差と年齢差にかかわるものを、実態調査によって連動的に明らかにしようとする。そこには、言語地図上に痕跡として示される変化が、立体的に、ダイナミックな形で現れてくることが期待される。

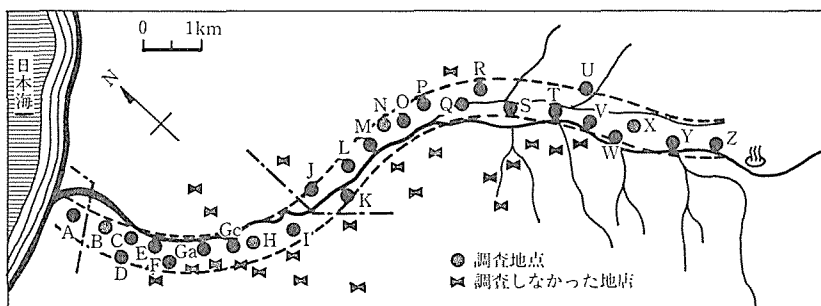
関連先行研究としては、特定地点における各年齢層別調査とその地点を含む特定年齢層についての地理的分布調査の組み合わせ（1961年実施の糸魚川地方における梨ノ木調査や、本報告の宇都宮調査など）や、異なった年齢層別の複数の言語地図の対照（参考文献1,2が古いか）などがある。なお、ここで報告する研究に続くものでまとまっておりもっとも早いものは、参考文献3であろ

うか。ことばの地域差と、同一個人のことばの場面（相手）の違いに応ずる使い分けを組み合わせる研究（本報告の球磨川調査など）も、この研究の発展と考えることができる。

1.2. 調査地域

新潟県の西端、糸魚川市にある行きどまりの谷、早川の流域を選んだ（下図参照）。

早川谷略図



この地域を選んだ根拠は次の通り。

(1) 地域差の軸と年齢差の軸とを組み合わせるためには、結果整理の便宜から、地域差は単純化して線化することが望ましいと考えた。たとえば、線の東端に A という表現があり、西に移るにつれて B という表現が現れ、ついに西端では B のみになるといった分布イメージを描いた。

(2) 一方、結果の明確な理解のためには、その地域への他の地域からの影響が単純であることが望ましいと考えた。東端あるいは西端からの影響はありうるとして、内容を複雑化する地域の中点への南あるいは北からの影響の予想される事態は、なるべく避けたいと考えた。具体的には、河口部だけが外界に通じる、つまり他地域からの影響が一方向のみの、行きどまりの谷間といった地域がもっともふさわしいと考えた（ついで、山間の街道筋などが候補にのぼるであろう）。

(3) また、すでに当該地域に関する方言情報がかなり集まっている地域が、調

査にとって好都合である。さらにいえば、地域のスケールが、われわれの力量に応じたものであることが望ましい、などと考えた。

調査にあたっては全集落調査を目標とし、早川の流域の河口部から最奥の集落までは約 13.5 km の間に、道路沿いの線上に 27 地点を選んだ。『日本言語地図』の調査地点間の距離は平均約 12 km といわれているが、ここでは約 0.5 km となる。この調査では、『日本言語地図』作成のための調査では果たしえなかった濃密調査を試みようという副次的意図もあった。なお、シラミツブシ（全集落調査）とはいえ、線からはずれた集落は調査地点から除いてある。

各地点に A から Z までの略号を与えて整理の便宜とした。G はこの地域の中心、^{あらまち}新町である。新町のうち川下の農家の多い地点を Ga とし、川上の商業地域の地点を Gc とした。

現在は全域が糸魚川市に属しているが(1954 年 6 月市制施行)、合併以前は三つの村に分属していた。まず A のみが北陸道沿いの^{やまとがわむら}大和川村に属していた。以下 B から I までが^{しもはやかわむら}下早川村、J から Z までが^{かみはやかわむら}上早川村に属していた。下早川村の中心は既述の G の新町であり、上早川村の中心は Q の音坂（オトザカ、表では土塩音坂ツッチョオトザカという名で示してある）である。

1.3. 被調査者

調査地点ごとに、各年齢層の被調査者を万遍なく選ぶことが望ましいと考えた。多ければ多いほど好ましいといえようが、われわれの力量から考えて 10 歳きざみを目標とした。次の地点一覧からもわかるように、大集落もあり小集落もあったが、結果としては、各地点平均 10 人、平均 6.5 歳きざみの被調査者を得ることができた。各地点の被調査者は 3.2. に示す通りであり、その調査時の年齢と分布を表 1 に掲げた。

当然ながら各地点で生まれ育った人を選んだ。性別は無視し、在外歴や学歴なども特に問題としなかった。資料が混雑化して結果が乱雑になるおそれなしとしないが、条件を厳しくして適任者が得られないために、結果が歯抜け状態になるよりましと考えた。

[illegible]

結局 274 人（男性 170 人，女性 104 人。最高 92 歳，最低 7 歳）の方がたに調査の相手をしていただいた。これは，調査地域全体の人口の約 5 % にあたる。

地点一覧（被調査者数を含む）

略号	地名	地点番号	被調査者数	訪問戸数	備考
A	梶屋敷	5611.6685	11 人	6 戸	215 戸。〈旧大和川村〉
B	大稲場	.7606	11	7	} 下田屋 } 89 戸。田屋区。
C	中島	.7637	8	4	
D	お田屋	.7646	11	6	
E	ひばの木	.7659	10	5	
F	中野	.7678	11	7	} 上田屋
Ga	新町（農業）	.7791	10	8	80 戸
Gc	新町（商業）	.8703	11	8	100 戸
H	新道区	.8714	12	10	100 戸 } この谷の中心。旧 村役場所在地。
I	滝川原	.8737	12	9	18 戸。〈以上旧下早川村〉
J	岩本・谷内	.8821	10	9	20 戸
K	越川原	.8843	9	8	40 戸（新しく開けた所）。
L	旧越	.8825	10	7	60 戸 } 越。
M	宮平	.8827	12	7	35 戸。
N	中野	.8829	9	6	12 戸。
O	中林	.8931	8	5	13 戸。
P	坪野	.8933	10	6	15 戸。
Q	土塩音坂	.8955	11	10	75 戸。旧村役場所在地
R	吹原	.8957	8	7	40 戸。
S	寒谷	.8988	15	9	20 戸。
T	大平	5612.9020	11	8	24 戸。
U	岩倉	.9023	9	6	20 戸。
V	土倉	.9052	11	7	40 戸。
W	中川原新田	.9083	9	5	20 戸。
X	猪平	.9094	3	2	4 戸。
Y	下湯	5622.0035	9	6	34 戸。 } 湯川内。
Z	上湯	.0067	13	7	39 戸。 } 〈以上旧上早川村〉
			計 274 人	185 戸	1113 戸，5500 人（調査範囲 に含めなかった地区も含め ると，下早川村，上早川村 全体と梶屋敷で 1890 戸， 9250 人）

1.4. 調査項目

40 項目を選んだ。

調査の目的から、この狭い地域の範囲内で地域差と年齢差とが連動的に現れる項目が望ましいと考えた（そのためどうしても基本語ではなく、特殊な項目にかたよる）。また、老年層と若年層のいずれもがさほどの抵抗なく答えうる項目を中心とした。

一方、この種の調査として最初期のものであることから、さまざまな性質の項目を含めようと考えた。『日本言語地図』作成のための調査項目は関連するものとしていうまでもないが、柴田武・グロータース・徳川宗賢・馬瀬良雄の糸魚川調査（1957～1961 年）によって集められているこの地域の老年層に関する方言情報をも参照して、結局次のようなものを選んだ。

(1) 地域差の観点から

- a. 老年層において、単一の非共通語形が全域で使われているもの — 在来語形はどのように共通語形などの新語形へと変わっていくのであろうか。
蹲る、鱗、搦ったい、搦る、中指、齒莖など。別に音声 kwa の項目。
- b. 老年層において、複数の非共通語形が地域を分けて使われているもの — 複数の語形間の葛藤は、若年層にかけてどのように現れるのであろうか。共通語形などの新語形への交替は、どのように進行するのであろうか。蝌蚪、女の座、蛙、踵、肩車、傾く、間食、自在鉤、下座、馬鈴薯、旋毛、麦粒腫、藁帽子など。
- c. 老年層において、すでに共通語形と非共通語形の対立のみられるもの — 両者の葛藤は若年層にかけて、どのように現れるのであろうか。茸、踝、虹、松笠など。別にアクセント、音声 r の項目、{e} の項目。

(2) 内容の観点から

- a. ことばのさす事物自体に盛衰の考えられるもの — 若年層の回答はどうなるか。囲炉裏のまわりの座名、自在鉤、自在鉤の横木、藁帽子など。
- b. 若年層にはあまり親しみのないと思われる事物 — 若年層の回答はどうなるか。踝、（農作業の）間食など。
- c. 音声項目 — アクセント、kwa, ʌ, {e}。

なお、3.1.に調査票全体の輪郭を示しておいた。

1.5. 質問形式

面接質問調査によった。まず、絵を示したりナゾナゾ式などによって自由回答を求め、ついで、すでにこの地域の老年層について情報を得ている表現を与えて、誘導・確認する方法を併用した。

1.6. 調査時期・調査者

『国立国語研究所年報 20』(14 ページ) にもあるように、1969 (昭和 44) 年 2 月 2 日～11 日と 3 月 18 日～27 日の 2 回にわけて実施した。さきだって同年 1 月 29 日～31 日に現地準備調査を行なった。

参加者は、徳川宗賢 (第一研究部方言言語研究室長)、本堂寛 (同室研究員)、佐藤亮一 (同)、高田誠 (同)、W.A.グロータース (非常勤職員、ただし 3 月のみ) であった。

2. 結果と考察

ここでは、調査結果の全体を分類して展望する。

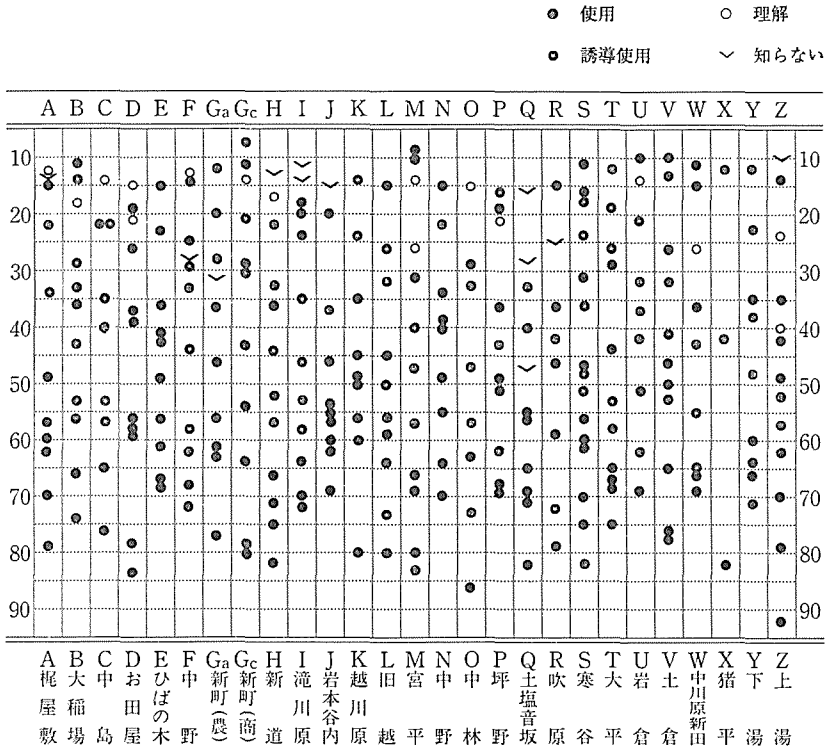
2.1. 年齢差が顕著で地域差の目立たぬもの——古い表現と新しい表現の交替の中で、地域差のほとんど認められないもの。

ここに示す表2から表7までの例は、一見、年齢差と地域差が連動していないものといえるかもしれない。しかし、連動しつつ一方の動きがゼロとみることができるなら、高い立場からは、両者が連動しているものの中に含めることも許されよう。また、狭い地域範囲での調査だから、このように地域差の目立たぬものが現れるのは当然とするむきもあろうが、いうまでもなく別のタイプのものも多い。

表2（歯茎）では、この地域で在来語形のハギシが、どんな状態で存在しているかを示した。巨視的には、ハギシが全域、全年齢層にわたって認められるといい。そこで、地域差も年齢差も認められない例のようにみえるかもしれない。しかし詳しくみると、在来語形のハギシが、徐々に退潮していく様子を見てとることができる。

すなわち、老年層では〈使用〉（ナゾナゾ式質問に対する直接の回答——黒丸符号で示す）が圧倒的なのに対して、中年層になると〈誘導使用〉（ナゾナゾ式質問に対しては別の語形を答えるが、ハギシを与えると「使う」と答える——蛇目符号で示す）が混じるようになり、若年層になると〈理解〉（ナゾナゾ式質問に対しては別の語形を答え、ハギシを与えると「使わないが知っている」と答える——白丸符号で示す）や〈知らない〉（ハギシを与えても「知らない」と答える——折線符号で示す）が混じるようになる（明らかに〈使用〉の人がいる集落内に〈知らない〉と答える若者がいることに注意。以下この種の注記省略）。

表2 歯茎 (ハギシ)



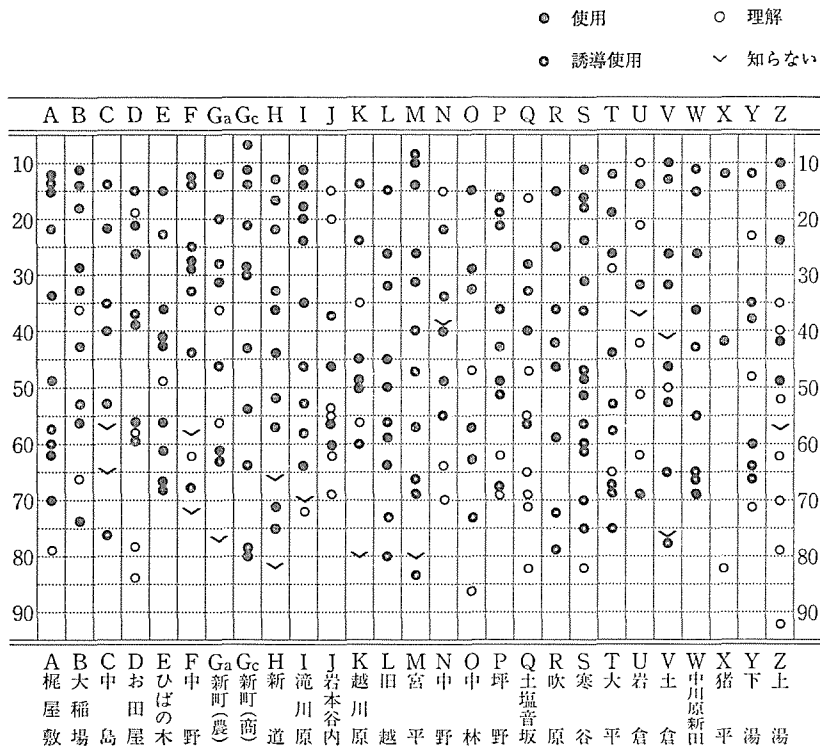
そしてこの老年層から若年層へかけての変化は、おおまかにいって、地域全体ではほぼ同時に進行していると認められる。

ハギシにかわる新しい表現はハグキであり、80歳代を除く各年齢層から回答を得ているが、そこでも地域差は認められなかった(表は省略)。

表3(隣る)では、表2とは逆に、在来形のハジクナルに対する新形のシャガムの分布状態を示してみた。ただし、表2と同じく、使用、誘導使用、理解、知らないを区別して示した。70歳代以上になると使用が減る(まだ、この層では全面的にシャガムを使う状態に至っていない)が、ここでもほとんど地域差は認められない。

表示を省略した在来形のハジクナルの分布は、表2のハギシのそれと似ており、そこでも地域差は認められなかった。老年層でハジクナルを言わないとし

表3 蹲る (シャガム)



たのは、T 53 (地点Tの53歳の人の略、以下同じ)、これはツクナルと答え、R 59、これはシャガムと答えた、だけであった。若年層ではA 14、A 15、Gc 7、Gc 12、I 11、I 14がシャガムと答えてハジクナルとは言わないとしたが、一方、10歳代、あるいは10歳未満の者でもハジクナルを使うと答えた者が多かった。

なおこの質問に関して、ツクナルが地点Q、T、V、Zの中・老年層の9人に使用として現れ、地点DからOにかけての老年層、PからZにかけての中・老年層の43人に誘導によってツクナルを使用するという者が現れた。この点からツクナルは、あとで示す2.3.の類型に属するといえることができるかもしれない。もっともツクナルは、ここでのシャガムとは違う別の姿勢とする者が、全域にわたって多かった(84人)ことにも注意せねばならない。さらに詳しく考察すべき点である。

表4 鱗 (コケラ)

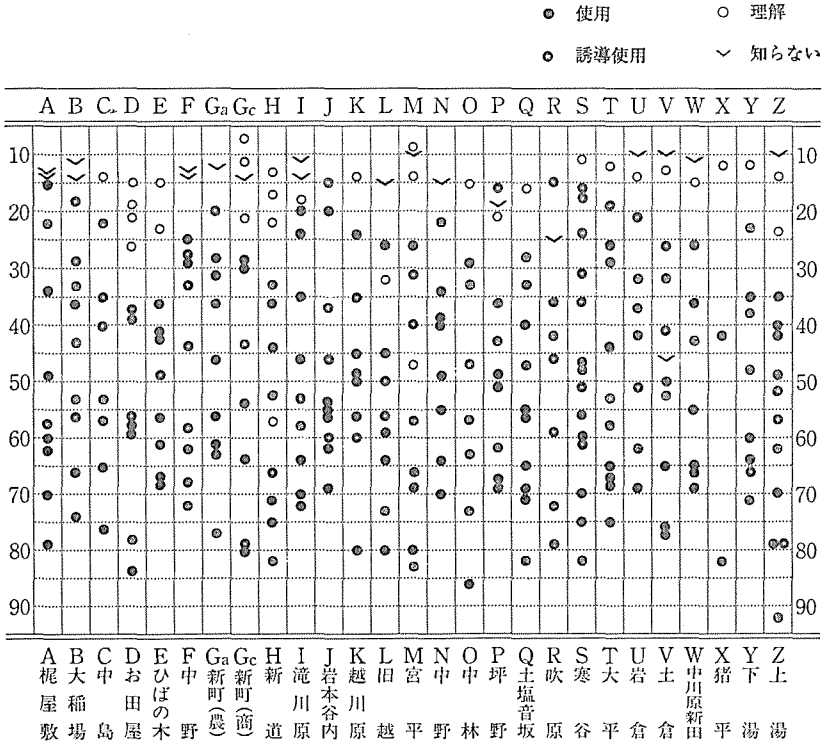


表4 (鱗) の在来語形コケラは、表2 (歯茎) の場合とよく似ている。違っている点を強いて挙げれば、表2の場合は、最若年層で在来語形を知らないとするものがかなりずしも万遍ないとはいえない (地域を中心であるFからJにかけてとQあたりに集中している) のに対して、表4の場合は、ほぼ万遍ないこととか、表2の場合は、在来語形を知らないとするものが20代、30代、40代にかけて見られるのに対して、表4の場合は、在来語形を知ってはいるが使わないとするものが30代、40代、50代にかけてわずかながら見られることとかであろうか。コケラを圧倒する新形はウロコであるが(表は省略)、これも表3 (蹲る) とよく似ていた。

なお、T 68 はコケラでなくコケを、Z 49 はコケラとともにコケを答えたが、ここではコケラを答えたように示してあるので注意してほしい。

表5 中指 (ナカタカユビ)

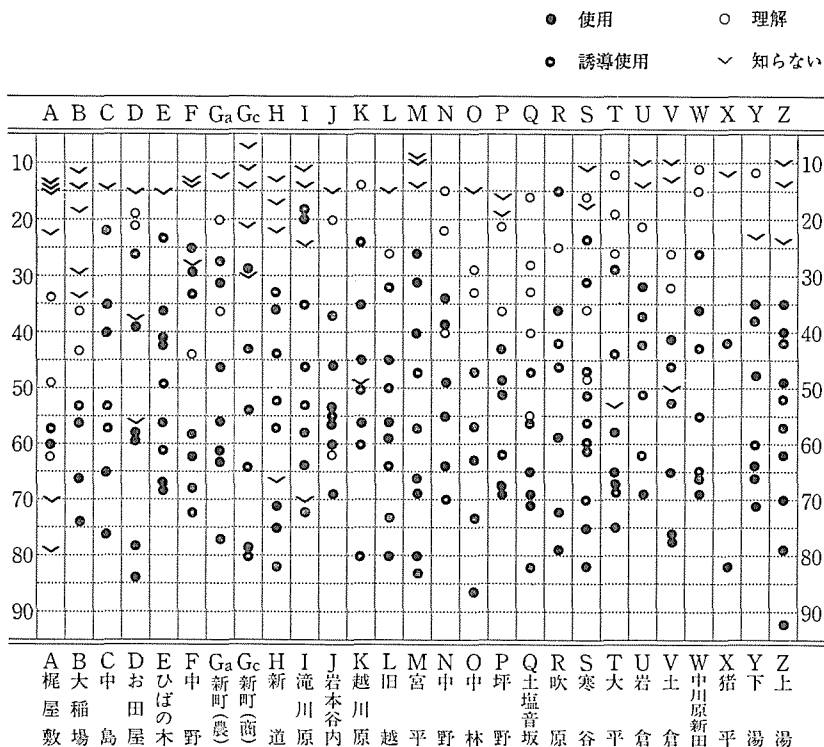


表5 (中指) は、表2 (歯茎) や表4 (鱗) の場合と比較すると、在来語形のナカタカ (ユビ) の退潮がやや早いことを指摘することができる。しかしここでも、その退潮にきわだった地域差は認められない。つまり、下流域で特に在来語形が早く退潮している、などということはない。なお、ナカタカユビではなくナカタユビと答えた者が4人あったので記録しておく (H 82, L 80, M 26, X 82)。

一方、ナカタカユビにかわるナカユビにも、表3の場合と同じく、地域差を認めることができなかった (表は省略)。なお10代または10歳未満の最若年層の8人 (B 14 女, Ga 12 女, H 13 女, M 9 男, M 10 女, T 12 女, U 10 女, Z 10 男, 主として少女) は、オニーサンユビ、ニーサンユビなどと答えたが、これにも地獄的なかたよりは認められない。

表6 蜘蛛 (クボ)

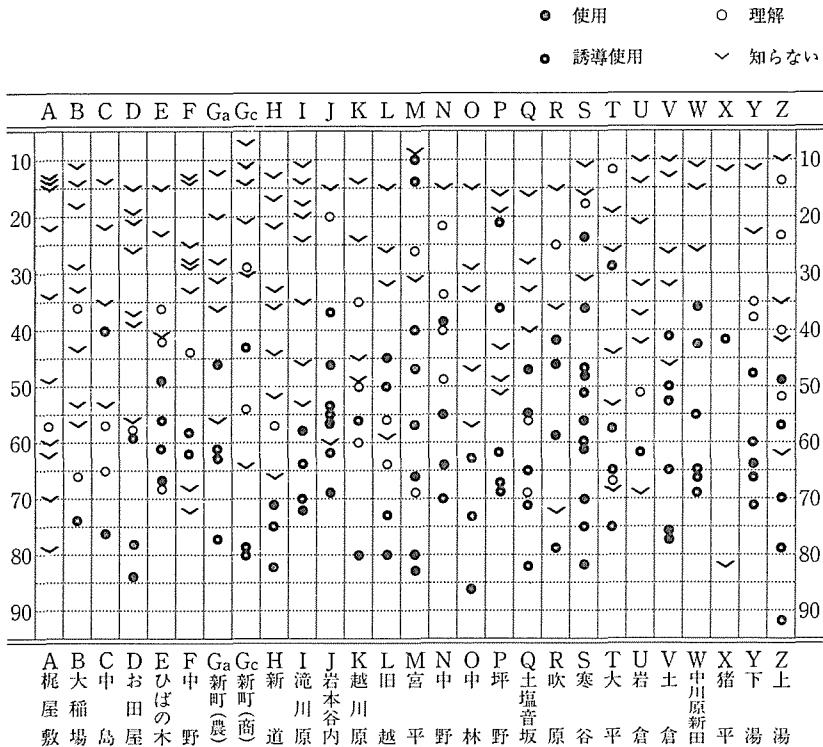
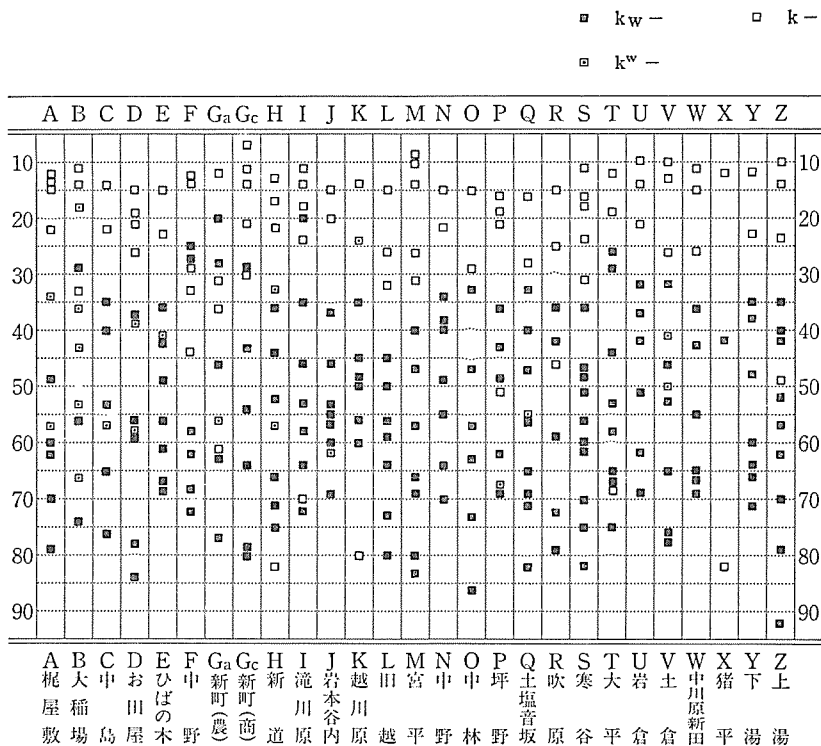


表6 (蜘蛛) の場合は、在来形のクボの退潮が、下流域において、上流域と比較して、こころもち早く進行している例といえる。ただし上流域においても在来形クボがすでに理解ないし誘導使用となっている地点（すなわちまずクモと答える地点）が多いから、傾斜は顕著でないということが許されよう（クモの表は省略）。

一方、クモを与えて知らない、あるいは知っていても使わないとする者が15人あったことにも注意したい。50代以下6人、60代1人、70代3人、80代5人であったが、ここでも地域差は認められなかった。

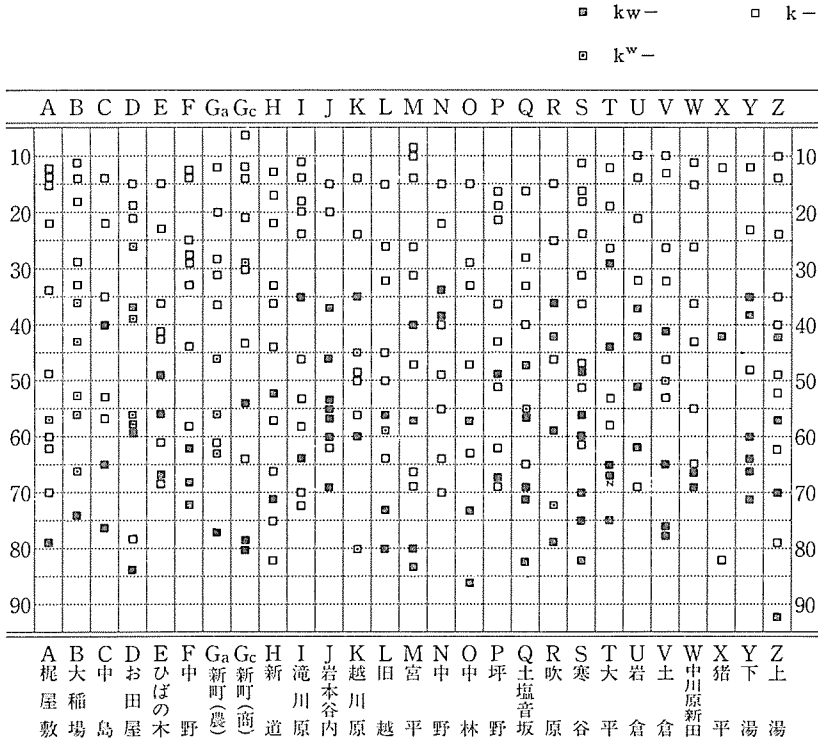
表7 (火事) と表8 (缶詰) は、[kw] をめぐる音声項目である。ここでは、それぞれの人がどんな音声を発したかを表示した。なお、調査にあたって誘導は行っていない。

表7 火事 (kw)



いずれの場合も在来音の [kw] の退潮が認められるが、地域差は認められない。両表を比較してまず相互間に認められる違いの大きさが注意をひく。缶詰がこの地に古くからあったものでないことは、いうまでもあるまい。[kw] をめぐっては別に、菓子、西瓜、正月の項目があった（表は省略）。菓子の場合は、表7（火事）と酷似していた。西瓜の場合は、缶詰の場合よりいっそう [kw] の力が弱かった（[kw] の位置が母音間であること、西瓜という作物は、この地域で古くは作られていなかったことなどに関係があろう）。正月の場合は、[kw] でなく [gw] の問題となるが、この場合 [gw] はほとんど現れず、[g^w] がわずかに認められる程度であった。缶詰や西瓜よりいっそう変化が急速に進行している例とも考えられようが、正月の場合元来 [gw] がこの地域で優勢であったかどうか（缶詰や西瓜で元来 [kw] が優勢だったかを含めて）、さらに考

表8 缶詰 (kw)



えるべきであろう。

当系魚川地方の〔kw〕音については、参考文献4があるので付記する。

2.2. 地域差が顕著で年齢差の目立たぬもの — 各年齢層とも同じような地理的対立を保っているもの。別のことばでいえば、在来形が新形の影響をほとんど受けていないもの。

2.1.と同じくこれも年齢差と地域差が連動していないものといえるかもしれないが、これらも連動しつつ一方の動きがゼロと見ればよからう。はじめから地域内に対立のあるものを中心に選んだのだから当然かもしれないが、狭い地域範囲なのに、比較的きれいな分布が現れるものである。等語線が直立すると

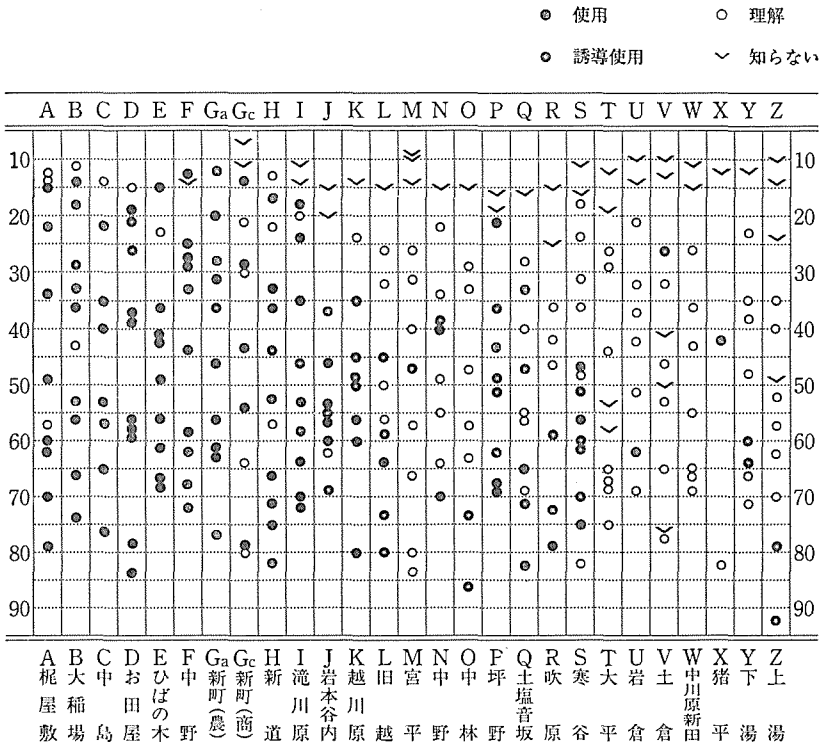
A	B	C	D	E	F	G _a	G _c	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z
10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20
30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30
40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40
50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50
60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60
70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70
80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80
90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90

A 梶屋敷
B 大田
C 中島
D お田
E ひの木
F 野
G_a 新町(農)
G_c 新町(商)
H 新道
I 澁川原
J 岩本谷内
K 越川原
L 旧越
M 宮平
N 中野
O 中林
P 坪野
Q 土塩音坂
R 吹原
S 寒谷
T 大平
U 岩倉
V 土倉
W 中原新田
X 猪平
Y 湯下
Z 上湯

10
20
30
40
50
60
70
80
90

なお、囲炉裏の自在鉤は、この地域で、調査時点においてすでにならずし

表10 間食 (コビリ)

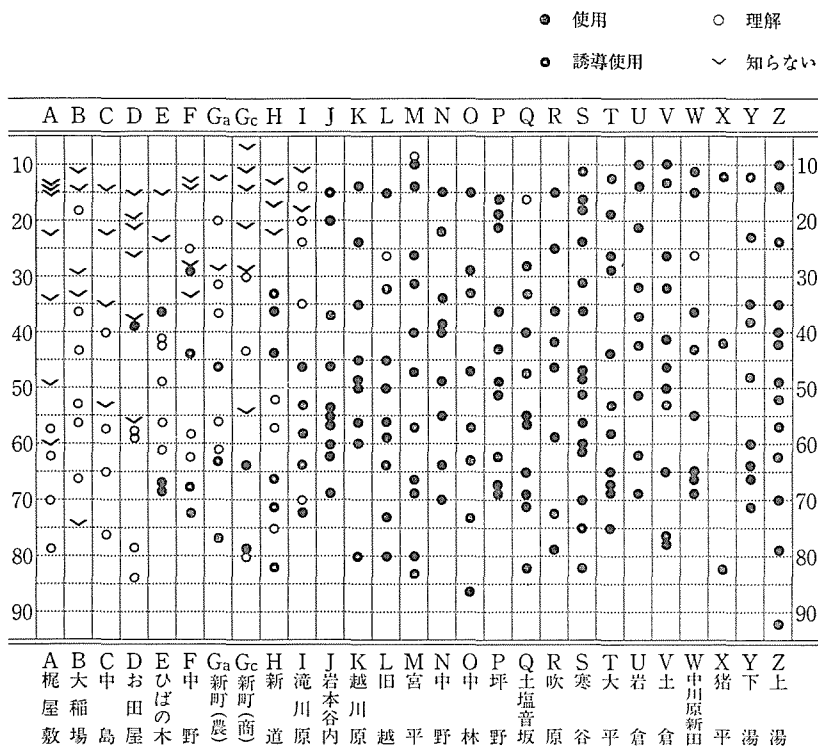


も一般的なものでなくなっていたことを注意しておこう。自分の家にはない、夏だけ使う(冬にはストーブやこたつを置く)などという回答が、全域で多かった。Gc, M, U, V の各地点では、自在鉤が自宅に現存すると答えた人は1人もなく、C, D, J, O, X, Y, Z の各地点では、自在鉤が現存すると答えた人は各1人に限られた。もっとも、数年前までは使っていたという回答を含めて、現在も自宅に存在するという回答も少なくなかったから、調査時点において地域の生活から極端にかけはなれた質問というわけではなかった。

表10(間食)と表11(間食)は、それぞれ地点AからIまでの下流域(旧大和川村と旧下早川村)で優勢なコビリと、地点JからZまでの上流域(旧上早川村)で優勢なナカマの分布状況を示している。

下流と上流の対立の例外となるものは、(1)コビリが上流域の最若年層に知ら

表11 間食（ナカマ）



れていないこと、同じくナカマが下流域の若年層に知られていないこと、(2)コピリが上流域のどちらかというとは老年層でナカマとともに使われる場合があること、同じくナカマが下流域のどちらかというとは老年層でコピリとともに使われる場合があることを指摘することができる。実は(1)と(2)とは関連することをしていっているのであって、表を対比しながらまとめると、若年層は自分の地域のことばかり使わないし知らない、中年層は自分の地域のことばかりに他地域のことばかりも知っている、老年層は自分の地域のことばかりに他地域のことばかりも使うことがある、となろう。

そしてこれは、上流域下流域の区別を問わない。以上の指摘を強調すれば、この表においても年齢差が認められるということになろうが、この2枚の表が、2.1.の類と断然違っていることは、いうまでもない。

表12 旋毛

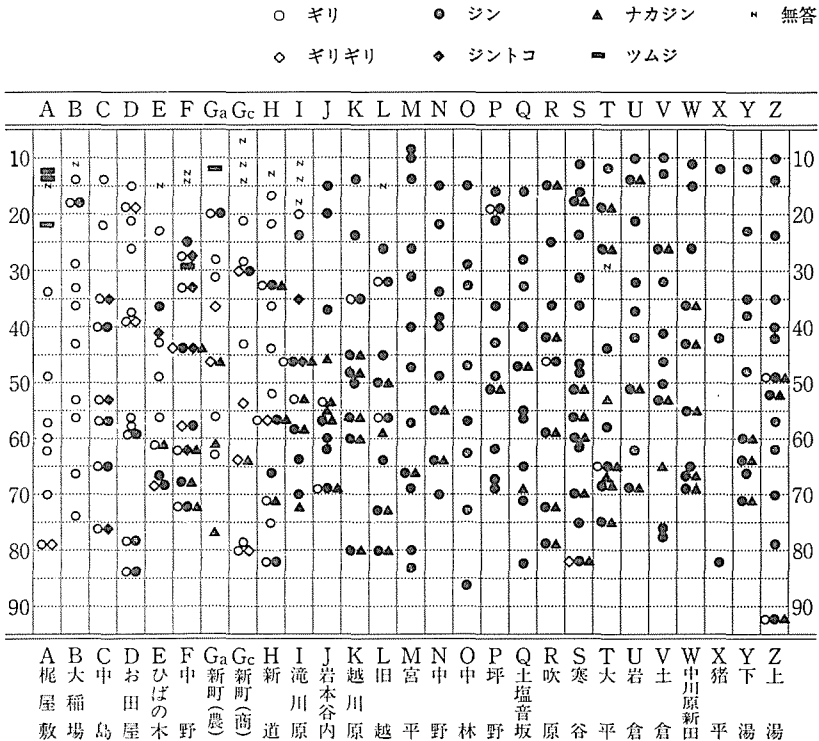
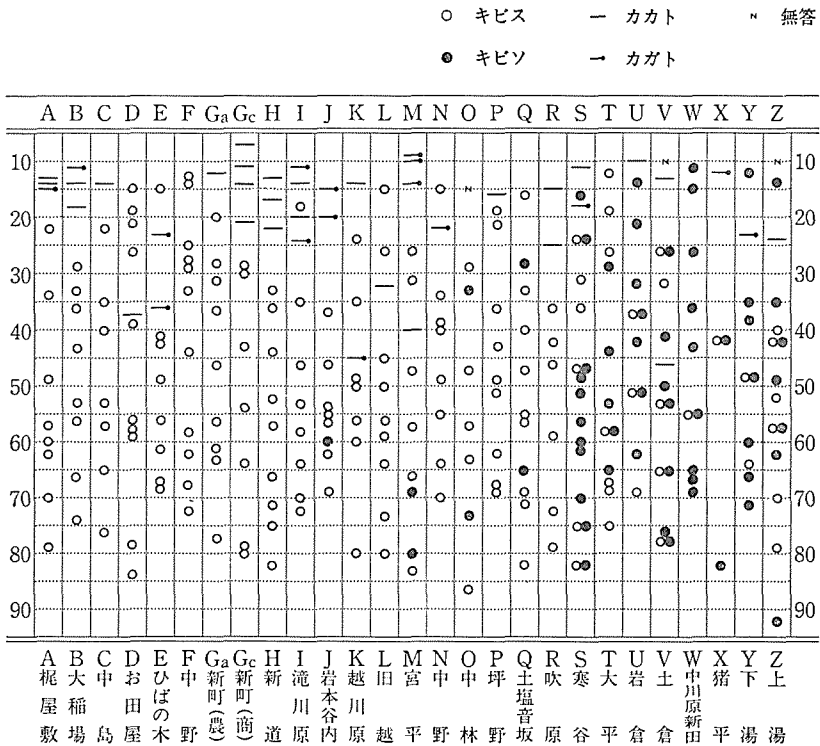


表12(旋毛)では、表10や表11と違って、相互に対立する複数の語形を総合的に表示した表9と似ている。ここでは各語形について〈使用〉と〈誘導使用〉とを一括して表示し、〈理解〉と〈知らない〉は掲載を省略している。ただし新形のツムジに関しては他語形との併用の場合は表示を省略し、またすべての語形について知らないと答えたものは無答として示した。

概略、下流域は白ヌキ符号のギリの類(ギリギリを含む)、上流域は黒ベタ符号のジンの類(ジントコ・ナカジンを含む)といえることができる。そしてギリとジンは、地点CからIあたりにかけて混在しているといえよう。同一人物が両形を答える場合も多い。

しかしその混在状態には年齢差は関係がないようである。年齢差は、そこではなくて、地点AからIあたりにかけての最若年層に無答ないし共通語形ツム

表13 踵



ジが現れること、ジンの類の中のナカジンがどちらかというと老年層にかたよって現れることなどに、わずかに認められる。

なお、ここでジンとして表示したもののうちB 66とF 68で得た回答はシンであり、C 35とF 33で得た回答はシントコであったので付記しておく。

当糸魚川地方全域の老年層における分布には、参考文献5があるので付記する。

表13(踵)は、表12と同じ方針によって作成した。ここでは下流域のキビスと上流域のキビソが対立して分布している。そして在来語形のキビス、キビソの上に侵入している共通語形はカカトないしカガトであるが、その侵入状況にきわだった地域差は認められなかった。

この表を詳しくみると、下流域方面にもキビソが、また上流域にもキビスが

表14 蹠

○ クルブシ	◇ クルボシ	● クルンブシ	♢ クルンボシ	▽ 無名
□ クロブシ	△ クリブシ	■ クロンブシ	◐ クルミブシ	
⊕ クロボシ	⊙ クルル	⊞ クロンボシ	⊞ クルミ	

A	B	C	D	E	F	G _a	G _c	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z
10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20
30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30
40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40
50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50
60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60
70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70
80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80
90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
A 梶 屋 敷	B 大 中 島	C 中 田	D お 田 屋	E ひ ば の 木	F 中 野	G _a 新 野 (農)	G _c 新 野 (商)	H 新 道	I 滝 川	J 岩 本 谷 内	K 越 川	L 越 原	M 宮 越	N 中 野	O 中 野	P 坪 野	Q 土 塩 音 坂	R 吹 原	S 寒 谷	T 大 平	U 岩 倉	V 土 倉	W 中 川 原 新 田	X 猪 下	Y 湯 上	Z 湯

認められ、両者間の葛藤の様相をうかがうことができる。ことに上流域にキビスの多いことが目立つが（キビスはこの地域でカクトないしカगतにつぐ第二次共通語としての性格を帯びているのであろうか）、さりとてたとえば若年層においてそれが特に目立つというようなことはなく、年齢層との関係はきわだっていない。

なお、アクトという語形を与えるとそれを使うとした人が4人（I 35, Q 65, Q 82, S 82）いたので、念のため付記しておく。

表14（蹠）では、表12や表13に準じて下流域の白符号クルブシの類と上流域の黒符号クルンブシの類の対立を総合的に示した。クルブシの類としたものの中にはクロブシ、クロボシ、クルボシ、クリブシ、クルルが含まれ、クルンブシの類としたものの中にはクロンブシ、クロンボシ、クルンボシ、クルミブ

シ、クルミが含まれているが、図からもわかるように、それぞれにはっきりした分布は見出されない。

上に下流域はクルブシの類、上流域はクルンブシの類としたが、上流域にもクルブシの類が混在している。もっともその混在状況に年齢差は認めにくく、上流域が下流域のクルブシの類に次第に侵食されつつあるといったふうでもない。

クルブシは共通語といえようが、この項目では最若年層に蹠の名を知らない者が多い点に特色がある。蹠の名を知らない者の分布には地域差が認められず、この点年齢差だけが目立つ1の類と共通するが、ここではクルブシの類とクルンブシの類の対立に注目して分類した。

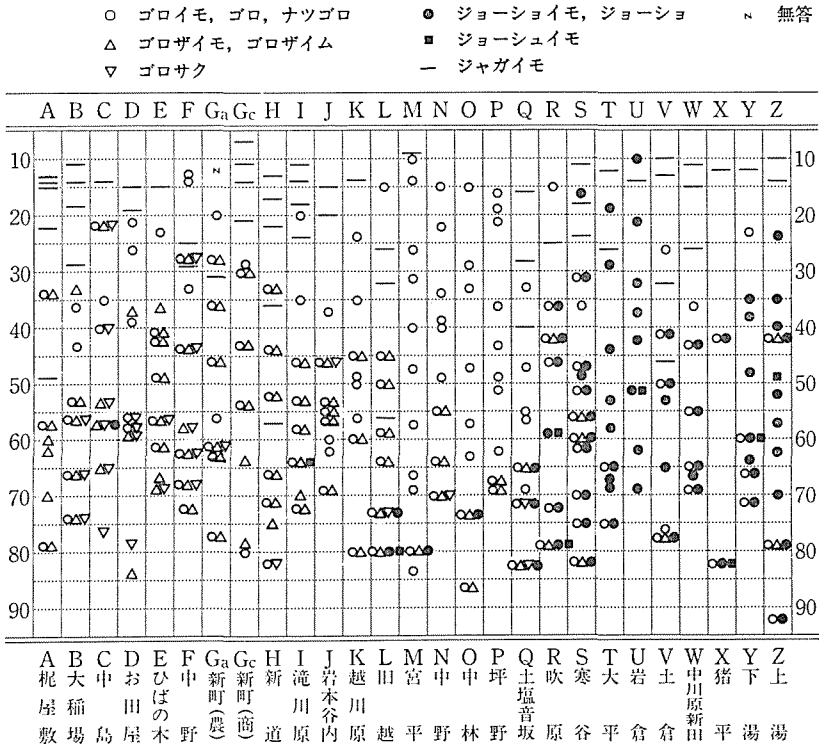
なお、クルブシの類の各語形のアクセント（ピッチ）は、概略次の通りだったので付記しておく。地点Aでは $\bar{0}000$ 、地点BからJあたりの10～30代は $0\bar{0}00$ 、同40代以上と地点KからZまでの全年齢層は $0\bar{0}\bar{0}0$ 。もっともそれに反する例も少なからずあった。すなわち地点Aの最若年層は $0\bar{0}00$ であり、地点BからQあたりまでの14人は $\bar{0}000$ と回答した。また地点BからJの10～30代でも7人が $0\bar{0}\bar{0}0$ と答え、逆にさきに $0\bar{0}\bar{0}0$ とした範囲内にも $0\bar{0}00$ と回答した者が26人、 $0\bar{0}\bar{0}0$ と回答した者が4人含まれていた。したがってさきに概略として示した総括も、文字通り概略の域を出ないもの、ということになる。

表15(馬鈴薯)も、表12以下の方針にしたがって作成した。下流域の白ヌキ符号ゴロイモなどと上流域の黒ベタ符号ジョーショイモなどとの対立にまず注目したい。

ゴロイモの類の中では、ゴロザイモが中流域から上流域にかけて若年層で勢力がなく等語線が傾いてみえ、ゴロサクは地点BからFにかけて目立っている。ゴロサクもゴロザイモに通ずるといえるかもしれない。また、よくみると地点MからPあたりでゴロイモが他の諸語形を排除して優勢にみえるが、その意味するところは、明らかでない。ジョーショイモの類の中ではジョーシュイモが老年層に多いが、さしてきわだつてはいない。

これらの在来語形にかわる新形はジャガイモであり、その侵入状況は下流域

表15 馬鈴薯

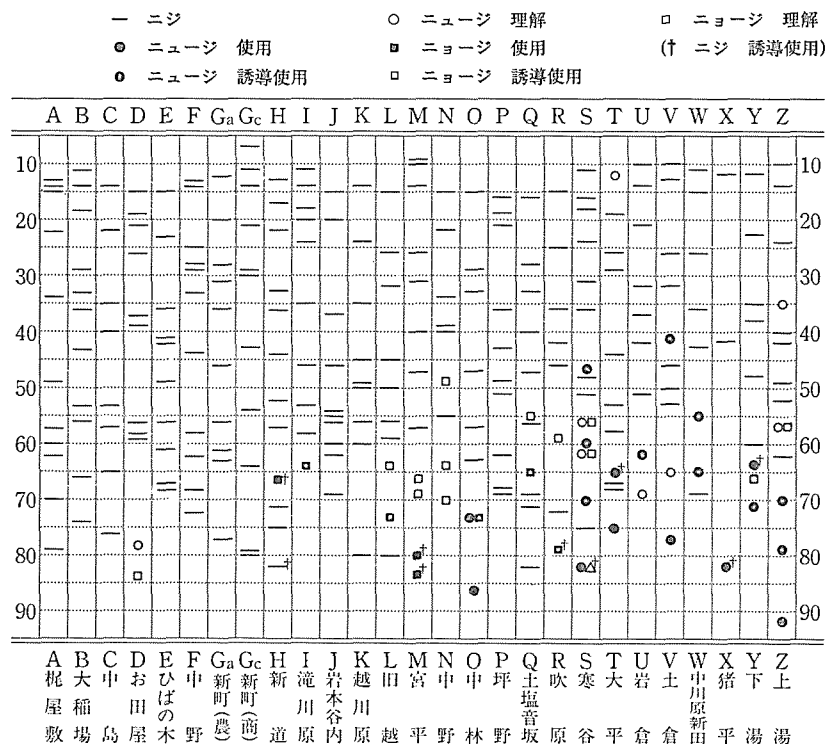


でやや顕著である。しかし上流域の地点QからVあたりでもジャガイモが優勢である点は注目している。すなわち在来形がゴロイモであるかジョーショイモであるかは、ジャガイモの侵入に影響を与えていない、ということになる。したがってジャガイモの分布は地域差が認められず、この点年齢差が目立つ2.1.の類と共通するが、ここではゴロイモの類とジョーショイモの類の対立に注目した。

2.3. 地域差と年齢差がともに現れるもの — 古い表現と新しい表現の交替の中で、地域差の認められるもの。

ここに至って、「ことばの使用者の違いに対応する変異相のうち、地域差と年

表16 虹



「年齢差とに関する二つの変異相」が積極的に連動して現れる例をみることとなった。

表16(虹)では、古形のニュージやニョージは、すでに上流域の老年層にしか残存していないことが明らかになる。この古い在来形を圧倒する新形はニジであるが、全地域、全年齢層に認められる。ニジを誘導使用ないし理解でしか答えなかった人は、60歳以上の層に、†印で表示したようにわずか8人しかいなかった(つまりあとの人はすべてノーヒントでニジと答えたことになる)。

なお表には示さなかったが、ミョージを誘導使用ないし理解のレベルで回答した人が11人いた。誘導使用——B 74, G_a 77, O 86, 理解——F 62, F 72, G_c 80, H 71, N 70, P 62, Y 66, Z 57。表の上に示さなかったわけは、ミョージをノーヒントで答えた人が1人もいなかったことによる。

表17 自在鉤の撞木

● チュージ 使用	■ チョージ 使用	∨ チュージ,
○ チュージ 誘導使用	□ チョージ 誘導使用	チョージ不使用(無名)
○ チュージ 理解	□ チョージ 理解	

A	B	C	D	E	F	Ga	Gc	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z
10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20
30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30
40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40
50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50
60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60
70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70
80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80
90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
A	B	C	D	E	F	Ga	Gc	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z
梶	大	中	お	ひ	F	Ga	Gc	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z
屋	稲	田	田	の	中	新	新	新	新	岩	越	田	宮	中	中	坪	土	吹	寒	大	岩	土	中	猪	下	上
敷	場	島	屋	木	野	新	新	新	新	本	川	原	越	平	野	林	塩	音	原	谷	平	倉	倉	原	湯	湯

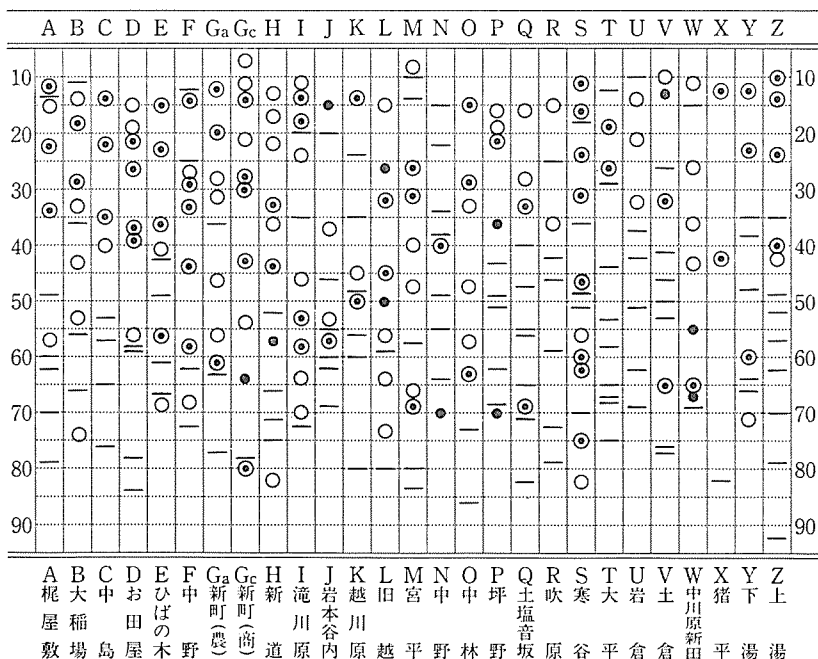
表 17(自在鉤の横木)では、表 16 のニュージやニョージの場合と似て、古形のチュージやチョージはすでに上流域の老年層にしか残存していない。もっともチュージやチョージは、ニュージやニョージがニジに移行していくのとは違って、新しい共通語形へと移行していくわけではなく、表からもわかるように無名状態へと移行していくのであるから、その点では表 16 とは違っている。

この表におけるチュージやチョージの不使用は、ほとんどがもの名を知らないゆえの不使用であるが、おそらく苦しまぎれであろう、カギ、ソラカギ、ソリカギ、ナマリカギ、またジザイ、ジザイカギ、ツリ、ツルなどと答えた被調査者が、それぞれ 1～2 名ずつあった。個別的、臨時的な回答と考えられるので、表示は省略した。

調査時点における当地方の自在鉤それ自体の存在については、すでに表 9 の

表18 搦ったい、搦る (クスグッタイ、クスグル)

- クスグッタイ ⊙ クスグッタイとクスグルとの併用
● クスグル — クスグッタイ、クスグル不使用

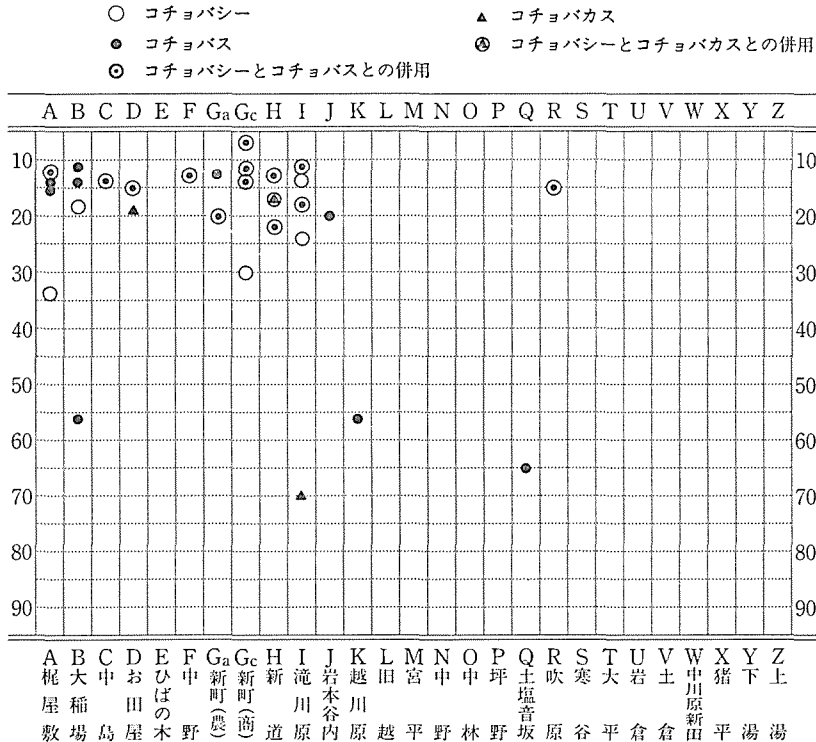


説明で言及したところがあるので参照してほしい。もとより、自在鉤の調節用の横木が存在しないというわけではない。当糸魚川地方全域の老年層における分布研究には参考文献6があるので付記する。

表18(搦ったい、搦る)では、共通語形のクスグッタイとクスグルが、どのようにこの地域で勢力を拡張しつつあるか、2項目あわせて表示してみた。クスグッタイの場合もクスグルの場合も、下流域、若年層で共通語形の勢力の強いことがみてとれる。クスグッタイとクスグルをとにも使わない人の分布からこのことは明らかとなる。共通語はこの場合下流域方向から侵入し、時の経過につれて次第に谷の奥へと深く侵入していった、ということになる。

もっともこの地域では、現在(調査時点)も形容詞についてはクツバシーが、動詞についてはクツバスが、全地域、全年齢層でひろく使われているので(表

表19 掬ったい, 掬る (コチョバシー, コチョバス)



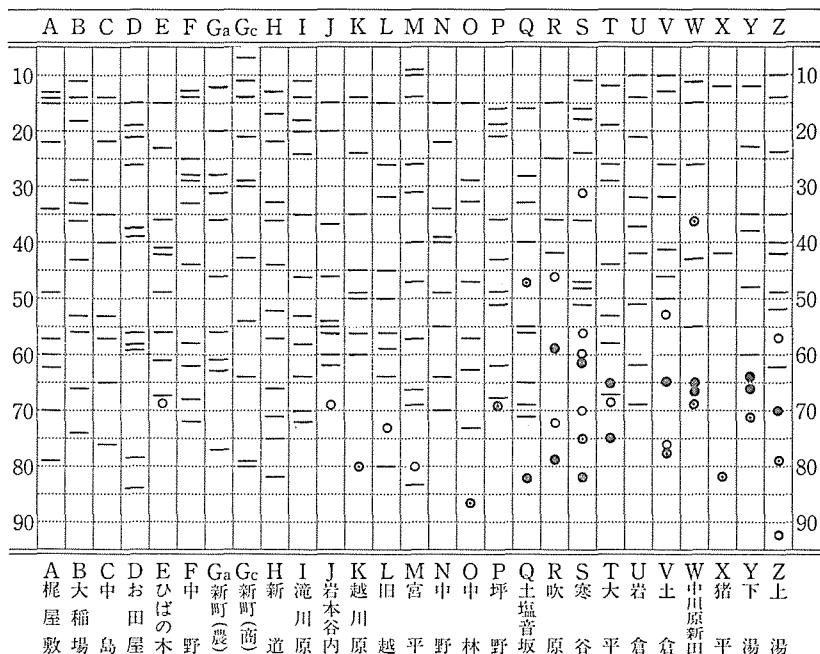
は省略), 在来語形を中心にすれば, 地域差も年齢差もほとんど目立たない例となる。

在来語形としてはクツバシー, クツバス以外に表 19 に示すもののほか, 別にクツバカシーとクツバカスがわずかに認められた。またクツバシーからクスグッタイへの過渡的語形としてのクツブッタイ, クスブッタイ, クツグッタイ, クツガシーがわずかに認められ, クツバスからクスグルへの過渡的語形としてのクスブル, クツガスがわずかに認められたが, いずれもまとまった分布を示さなかったので, 表示は省略した。

表 19 (掬ったい, 掬る) では, この地域において, コチョバシーとコチョバス (コチョバカス) という表現が, 表 18 でわかるように共通語形としてのクスグッタイとクスグルの普及しつつある状況下で, 特に下流域の若年層にその勢

表20 蟬, 背中, 汗 (j)

- 3項目とも [s~ʃ] ○ 1項目のみが [s~ʃ]
 ◐ 2項目が [s~ʃ] — 3項目とも [s]



力を拡大している様子をうかがうことができる。

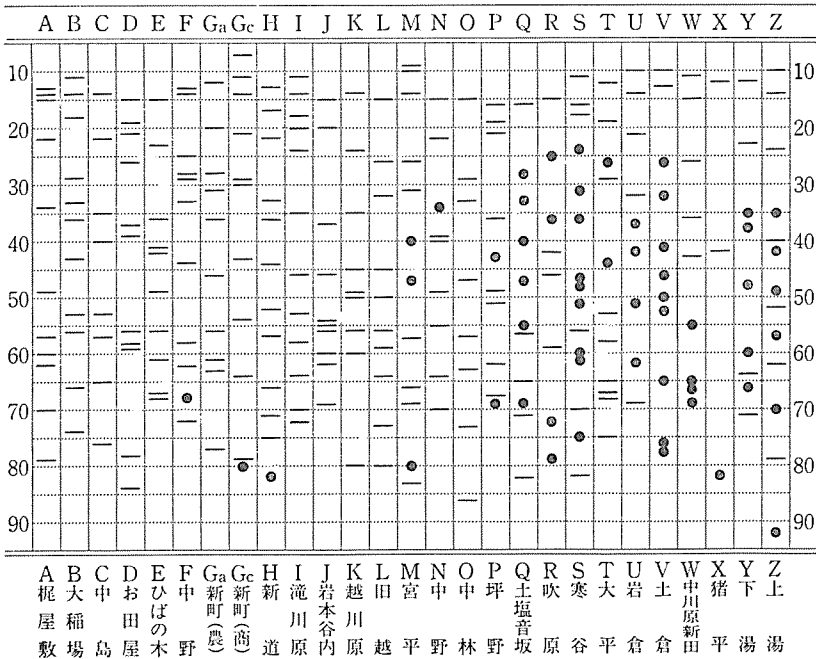
この表現はあらかじめ予測できなかったため（老年層についての手持ちの資料は、クツバシーとクツバスであった）、ノーヒントで得たもののみを表示してあるが、地域社会における方言状態は、いつもひたすらに共通語形へと傾斜していくとは言えない例となる。もっともコチヨバシーやコチヨバスは擬態語との関係が考えられ（この地域における撥る場合の擬態語は未調査）、また幼児語的な匂いもするところから、さらに深い考察が望ましい。今後老年年齢層へこの表現が勢力をひろげていくかどうかは、かならずしもはっきりしない。

表20（蟬，背中，汗）は，〔ʃe〕をめぐる音声項目である。ここでは3項目に関する回答を総合して示した。それぞれの人がどんな音声を発したかを表示した。なお，調査にあたって誘導は行っていない。

表21 波が (アクセント)

● 平板型

— 中高校



古いタイプの〔s, 〕が上流域の老年層に残存しており、それが新しい〔s〕へと移っていく様子がみてとれる。

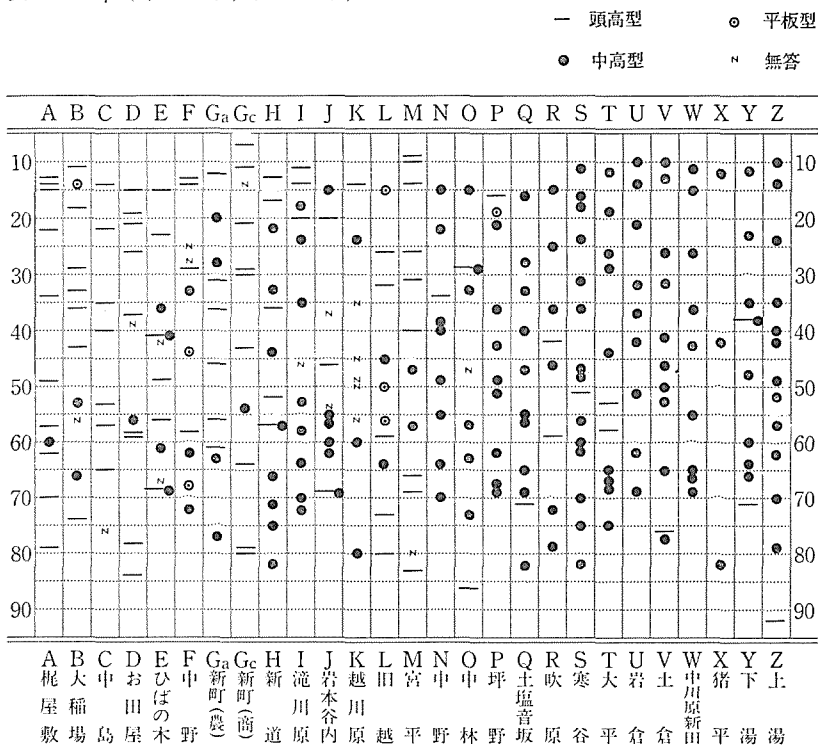
3項目ともに〔s〕あるいは〔〕となる人、2項目が〔s〕あるいは〔〕となる人、1項目のみが〔s〕あるいは〔〕となる人の区別があるが、語頭の蟬、背中の場合と比較して、語中の汗の場合は、〔s〕あるいは〔〕となるケースがやや少なかったようである。

同じ古いタイプが新しいタイプに移る音声現象ながら、表7、表8の場合とは様相がかなり違っている。

表21 (波が) は、アクセント項目である。それぞれの人がどんなピッチで発音したかを表示した。調査にあたって誘導は行なっていない。

表20 と似て、ここでも古いタイプが新しいタイプへと交替していく場合、地

表22 茸 (キノコのアクセント)



域差が認められる。古いタイプとしての平板型は、上流域の中年層と老年層を中心に残存しているが、その層にもすでに起伏型を答えたものがあり、若年層は、全域新しいタイプとしての起伏型に移っている。

なお、アクセントについては、関連して表 14 をめぐってすでに言及するところがあった。次の表 22 も、アクセントに関する表である。

表 22 (茸) は、茸をめぐる得た、キノコという語形のアクセント (ピッチ) を表示した。アクセントに関しては、調査にあたって、特に種々のピッチを誘導したわけではない。

下流域の若年層を中心に頭高型が目立ち、下流域の老年層から上流域にかけて中高型が目立っている。頭高型が下流方面から勢力を拡大しつつある新しいタイプ、中高型が在来の古いタイプと認められる。

この地域における茸を表わす表現は、概略、下流域はコケ、上流域はキノコである。すなわち地点AからPまでの範囲では、コケの勢力が各年齢層を通じて強く、地点Qから上流にかけては、コケを使わない（理解するが使わない、知らない）が急速にふえてくる。これに対して、キノコは、地点AからPの範囲では、使う人もあるが、使わない（理解するが使わない、知らない）が目立っている。キノコを知らない人はさすがにD 39 と M 80 のみであったが、使う人も、まずコケと答え、キノコは誘導してはじめて使うとする人が、各年齢層を通じて多かった。かくて、コケとキノコの対立に注目するなら、2.2.の類（地域差が顕著で年齢差が目立たぬもの）に分類すべき項目であった。

この表では、上流域を中心とする在来のキノコと、それとは別に、コケを使用する範囲に新しく侵入した共通語としてのキノコがあるのではないか、その対立をアクセントの観点から明らかにできないか検証してみた。

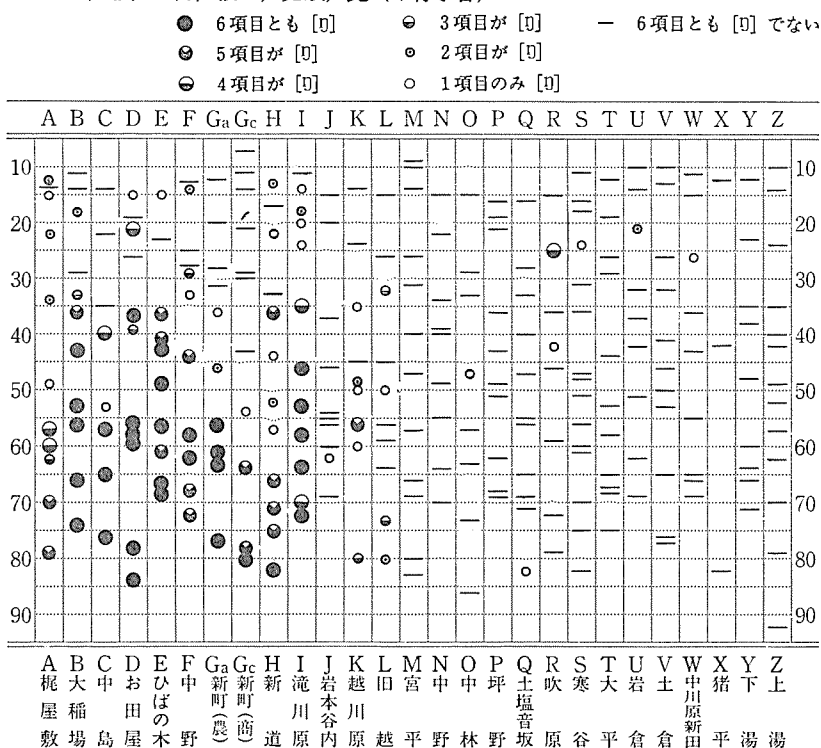
ただし、ここでは、使用のキノコと誘導使用のキノコと理解のキノコ（キノコですか、わかるけれど使わない）とを、同じレベルにならべて比較している点に注意しなければならない。誘導の際に調査者は頭高型を示すことが多かったかと思われる。しかし、そうしたことを超えて、このような分布が現れたと認められる。誘導によらないのに頭高型を得た場合も結構多く、地点AからPの範囲を例にとると、誘導によらない頭高型と誘導による頭高型の実数は45対43（地点AからGに限っても25対27）、一方、誘導によりながら中高型を得た場合も結構多く、地点AからPの範囲を例にとると、誘導によらない中高型と誘導によりながら中高型を得た実数は33対39（地点AからGに限っても8対12）であった。

当糸魚川地方全域の茸をめぐる諸語形の分布研究としては、参考文献5, 6があるので付記する。

表23（鏡、影、正月、波が、禿頭、髭）は、語中のガ行子音が鼻音となるか非鼻音となるかについての音声項目に関する表である。ここでは6項目に関する回答を総合して示した。それぞれの人がどんな音声を発したかを表示した。調査にあたって誘導は行っていない。

鼻音の現れるのは下流域であり、地点Jから上流では、K 56, R 25 の例外を

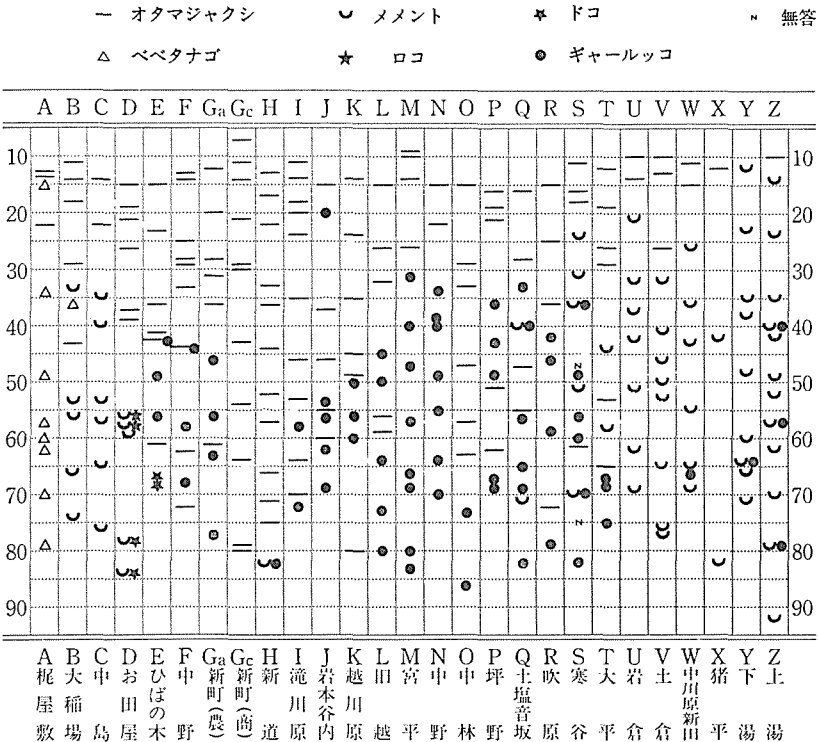
表23 鏡, 影, 正月, 波が, 禿頭, 髭 (ガ行子音)



除いて、鼻音はまれである。また若年層は、地域を問わず鼻音が少ない。

下流域においては、表からもわかるように、A 57, B 36, C 40, D 21, E 36, F 44, Ga 56, Gc 64, H 36, I 35 より高い年齢層で特に鼻音が盛んに現れる。このうち地点Aは国道・国鉄沿いの地点、Gはこの川の流域の中心地であることを考えれば、この下流域でも、外界からの影響を受けやすい地点で、この鼻音の衰退が速やかに進行していることがわかる。鼻音の存在が下流域に限られることから、過去のある時期に、非鼻音地帯であったこの地域に、下流方向から鼻音が侵入してきたことがある（そして現在は再び退潮に向かっている）とみることができるかもしれない。音声現象についても伝播（外界からの影響）が認められるという立場に立つが、しかし鼻音というそれまでなかった音が新しくその地域の音として定着していく方向と、在来の鼻音が消えていく

表24 蛸蚪



方向とは、その自然さに程度の差があると考えられる。上流域にももと鼻音があったが、現在はすでに消滅しているとみるか、上流域には元来鼻音はなかったとみるかは、今後の問題となる。

当糸魚川地方全域に関するガ行子音の分布研究には、参考文献5および8があるので付記する。

表24(蛸蚪)では、表9、表12～表15などに準じて諸語形を総合的に示した。ただしここでは、ナゾナゾ式質問に対する直接の回答のみをとりあげて、誘導によって使うとした回答は省略した。表が複雑になるのを避けようとしたためである。なおこの表では、同様の理由から、共通語形のオタマジャクシについて、他の語形との併用の場合、表示を省略してある。

それでもなお、新しい共通語としてのオタマジャクシが、他の在来諸語形の

退潮のあとを埋めて、ことに地点Gあたりに強力に侵入している様子がみとれる。

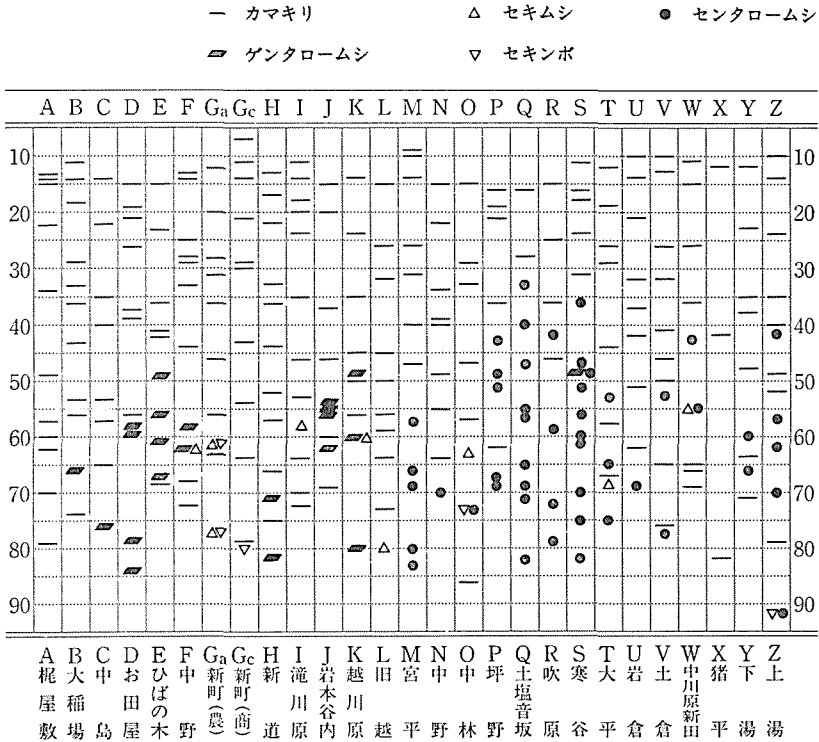
これまでみてきたものとしては、まず表3が共通語の侵入状況を示していたが、そこでは地域差が認められなかった。表13や表15なども準ずるものといえる。表16～表18あたりでは、新しい共通語形の侵入状況に地域差が認められたが、ただ下流域の方で共通語化が速く進行しているといった程度のものであった。表12,あるいは表20～表22の音声項目もこれに準ずるものであった。そしてここに至って、共通語化に関して、地域内の微細な地域差を反映する例が現れた。いままでのものの中では、表23における新しい非鼻音の進展状況(古い鼻音の退縮状況)がこれに通ずるものであった。

さて、このオタマジャクシに圧倒されていく在来語形は、さまざまである。地点Aのベベタナゴ、地点BからDと地点SからZあたりのメメント、地点DとEのドコ、ロコ、地点EからRあたりのギャールッコがそれであるが、これらの在来語形相互間にはさしたる葛藤はみられないようである。等語線はほぼ直立しているから、在来語形相互間の対立に注目すれば、この表は2.2.の類としてもよかったことになる。

この表では、すでに述べたように誘導使用や理解の回答を省略している。これらについて補足しておこう。ベベタナゴは、B以下の地点にほとんど現れない。メメントは地点EからQあたりで、ほとんど知られていない。これに対してギャールッコは、15歳以下の最若年層を除いて、使わないまでも、全域のほとんどの人が理解していて、ベベタナゴやメメントの場合と非常に違っている。蛙の子という語源意識によるものであろう(蛙をさすギャールについては表26をみてほしい)。なお、ドコ、ロコは、地点AからKあたりで別の小さな淡水魚(鰍)として理解されている場合が多かった。

ギャールッコの分布は、現在、地点Gc, Hで断絶しているが、以前は連続していたとみるのが自然であろう。これに準じて、メメントの領域も、現在は分断されているが、地点EからQの範囲でも(現存者の意識の中にはほとんどその痕跡は残っていないが)、以前はメメントが使われていたと推定することができる。100年以上前のことであつたろう。そしてロコ、ドコは、メメントとギャー

表25 蟠郷



ルッコの接触面に、隣接意味分野から臨時的に導入されたものと推理される。

なお、当糸魚川地方全域の分布研究には、柴田武（1963 年）があるので付記する。

表 25（蟠郷）は、表 24 の作図方針に準じて作った（ただしここでは誘導使用も使用に含めてある。つまり厳密には表 9、表 12～表 15 と同じである）。

共通語形としてのカマキリが、他の在来諸語形に対して、オタマジャクシの場合よりいっそう強力に侵入している様子がみてとれる。地点 G 付近以外でも、地点 A から C のあたり、地点 L から N のあたり、地点 U から X のあたりでカマキリの勢力が強い。この傾向がさらに拡大されれば、共通語の侵入に地域差が認められない状態、つまり 2.1. の類に分類すべき状態に達するのかもしれない。

カマキリに圧倒されていく在来語形は、下流からゲントロームシ、セキムシ（セキンボ）、セントロームシである。このうちゲントロームシとセキムシ（セキンボ）の領域は、地点FからKにかけて、さらに地点Sでも重複している。またゲントロームシの領域とセントロームシの領域は、地点Sの例外を除いて重複していないが、セキムシ（セキンボ）の領域とセントロームシの領域は、地点MからT、さらには地点WとZで重複している。つまりゲントロームシとセントロームシの分布はほぼ相補的であるが、それを結ぶようにセキムシ（セキンボ）の領域がひろがっている、ということになる。つまりここにみられる在来諸語形間の関係は、たとえば表24の場合とやや違っている（表24では誘導使用を表示していない点に注意）。

この表では、すでに述べたように、諸語形の理解状況について表示を省略しているので、その概略を補記する。当然のことながら、ゲントロームシは、地点AからLの範囲と地点S（ゲントロームシの使用範囲）で、理解する者があった（17人）。ただし地点Aと地点FからLにかけて、O、P、S、W、Yの各地点で、別種の昆虫（水かまきり?）の名であるとした人があった（24人）。セキムシ（セキンボ）は、地点DからSにかけての範囲（ほぼセキムシ〈セキンボ〉の使用範囲）で、理解する者が点在した（12人）。セントロームシは、地点MからZの範囲（セントロームシの使用範囲）で、理解する者が点在した。例外的に、地点Aと地点K（ゲントロームシの使用、理解範囲といえる）に、セントロームシを理解する者が各1名現れた（A 60, K 80）。概略的には、理解者は使用地域の範囲を出ないということができよう。

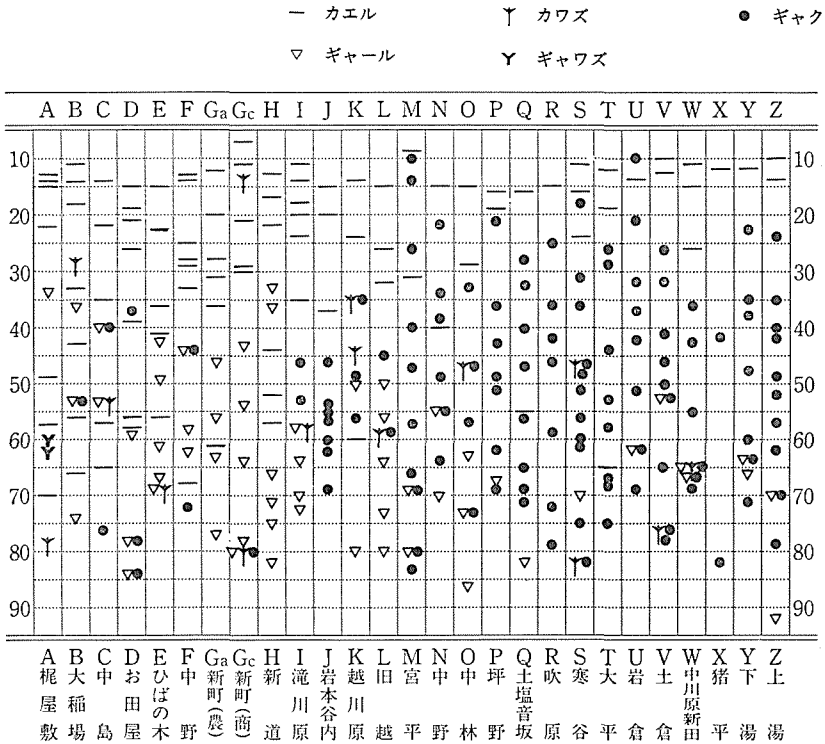
当糸魚川地方全域の分布研究には、参考文献10があるので付記する。

表26（蛙）は、表24に準じて作成した。

共通語形としてのカエルが、在来語形を圧倒しつつ、下流域を中心に勢力を拡大している様子がみてとれる。

このカエルに圧倒されていく諸語形は、下流域のギャール、主として上流域にみられるギャクを中心として、そのほかに、地点Aのみのギャワズ、点在するカワズが認められる。表24の蝌蚪の場合と違い、表25の蟾螂と似て、ギャールとギャクの分布領域は、かならずしもはっきりと分かれていない。

表26 蛙



ギャールとギャクとの間の葛藤に関しては、表から次のような経過があったと推定される。古くこの地域には、ひろくギャクが使われていた。調査時点から50～60年ほど前（大正期？）に、ギャールが地点Gあたりの勢力を背景に上流方向にもその領域をひろげはじめた。しかしその後、共通語のカエルの力が強まると反比例してギャールの影響力は弱まり、方言の世界ではかえってギャクが勢力をもちかえし、共通語カエルに対して、在来語としては上流域のギャクと下流域のギャールが対峙するようになった。そしてギャワズは地点Aのみの語、カワズは諸語形の葛藤の中で一種の共通語形（文語形？）として、ある時期にこの地域にひろがriかけたものではなかったか。

この表では、諸語形の誘導使用や理解を省略しているので、その点を補記する。

ギャールは、全域にわたって、誘導使用や理解が認められる。たとえば地点 I では、ギャールの使用は 72, 70, 64, 58 の 4 人に限られるが、誘導使用によって 53, 46 がこれに加わり、さらに 35, 24, 20, 18 の 4 人が理解する。地点 Q では、使用は 82 の 1 人に過ぎないが、誘導使用によって 71 がこれに加わり、56, 47 の 2 人が理解すると答えた。以下ギャールについて数地点の状況を示して、全体の様子を知るよすがとする。

地点	使用	誘導使用	理解
B	74, 53, 36	66	43, 33, 18, 14, 11
E	68, 67, 61, 49, 42	56	
M	80, 66	66	57, 47, 40, 26
U	62	69, 51	42, 32

ギャクは、地点 A, Gc, H で劣勢なほかは、かなりの人が、使用でなければ誘導使用ないし理解すると答えている。たとえば地点 P では、使用 69, 62, 51, 49, 43, 36, 21, 誘導使用 68, 19, 理解 16 である。地点 F では、使用 72, 44 のみであるが、誘導使用では 68, 62, 58, 33 が加わり、さらに理解 29, 28, 25, 14 が加わる。以下ギャクについて数地点の状況を示して、全体の様子を知るよすがとする。

地点	使用	誘導使用	理解
C	76, 40	57	—
D	84, 78, 37	—	59, 58, 56
Gc	80	—	64
I	53, 46	72, 64, 58	—
M	83, 80, 69, 66, 57, 47, 40, 26, 14, 10	31	9
U	69, 62, 51, 42, 37, 32, 21, 10	—	14

以上の誘導使用と理解の分布は、上記のギャールとギャクとの間の葛藤の推定を支持しているといえよう。

当糸魚川地方全域の蛙をめぐる諸語形の分布研究としては、参考文献 9, 11 があるので付記する。

表27 囲炉裏

- ジロ 使用 ○ ジロ 理解 ☆ イルイ 誘導使用 — ジロもイルイも不使用
 ● ジロ 誘導使用 ★ イルイ 使用 ☆ イルイ 理解

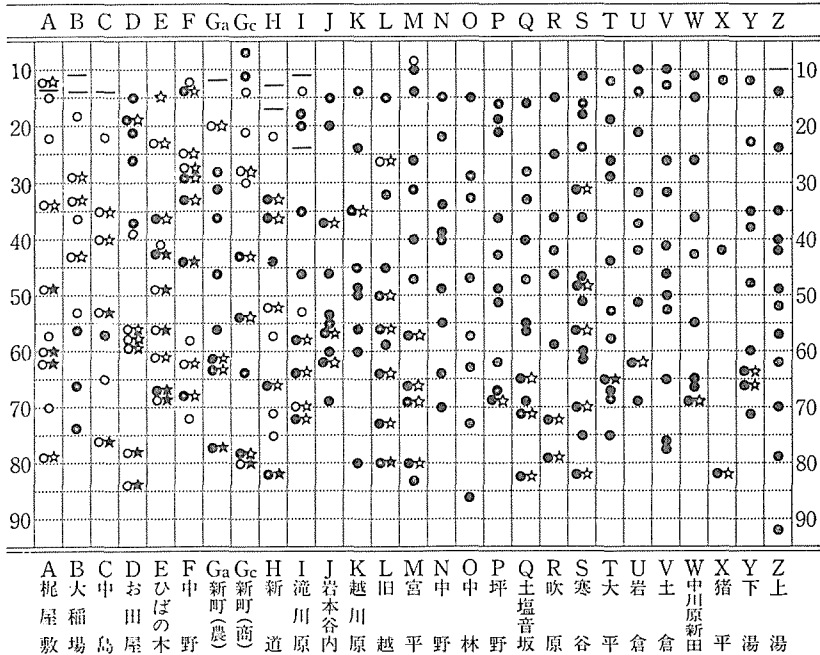


表27（囲炉裏）ではイルイとジロの対立を示したが、この表では各語形の使用と誘導使用と理解とを区別して示したところに特色がある。

まず、在来語形のジロが下流域で勢力を失っていく様子がみてとれる。下流域に元来ジロが存在していたことは、たとえば現在使用者のいない地点Aにも理解者が多く、また地点BやDなどのように誘導によって使用者が現れることからうかがうことができる。

下流域でジロにかわって登場してくるのは、まずイルイである。地点AからH、地点L、地点Tに使用者がおり、誘導使用者ないし理解者はさらに多い。イルイが、以前は上流方向へ勢力を拡大していたが、ある時期以降その影響が弱まったようにみえる点は、表26のギャールの場合と似ている。

イルイもジロもともに知らないとする者は、地点AからIまでの範囲の若年

層にわずかに現れるだけで、これらの人々の使用語は、共通語イロリである。イロリの実際の出現状況は(表示は省略しているが)、まず地点AからIあたりではほとんど全員がイロリを使用、ついで地点JからRあたりでは使用対誘導使用・理解の割合は3対2程度となり、地点QからZでは逆に5対9程度となる、といった状態であった。年齢差についていえば、地点JからZの範囲に関して、若年層ではイロリの使用が誘導使用・理解とほぼ同程度であるが、老年層となると、使用対誘導使用・理解の割合は、4対7程度となっている。以上の分布状況は、共通語イロリが下流、若年層に力強くその勢力をひろげていることを示している。したがって、イロリの侵入状況に着目するなら、表17の次あたりに配置すべき項目であった。

なお、囲炉裏そのものの存在については、表9や表17の自在鉤と違って、特に問題はなかった。

表28(松笠)は、表9、表12～表15などに準じて作図した。

まず、新しい共通語形としてのマツボックリが、下流域の若年層に侵入している様子が目につく。ただし、別に尋ねた松そのものの有無に関する質問の回答を参照すると、地点AからJあたりでは松がないと答えた人は1人もいないのに対して、地点KからRあたりになると集落内に松を見ないとする人が混じりはじめ、地点SからZとなると松がないとする人が圧倒的になるという事情が明らかになるので、併せて考慮する必要が生ずる。つまりマツボックリの侵入に関しては、それなりの言語外的事情(物の有無)があったらしい、ということになる。

中年層以上に目を転ずると、マツカサとマツ(ノ)ボボの共存状態となる。このうちマツ(ノ)ボボがかならずしも急速に退縮しているようにみえないのはおもしろい。地点TからZあたりまではマツ(ノ)ボボがまれになり、無答が目立つようになる。この傾向は、おそらくすでに述べたこの地域では、松そのものがまれなことと関係があろう。物の非存在は表現の多様性を抑制し共通語を普及させやすいという論があるが、この考え方を適用すれば、この表に現れた分布も理解しやすい。つまりこの地域では、元来マツカサが共通語的表現と考えられてきた、ということになる(その共通語的表現としてのマツカサの

表28 松笠

		— マツカサ		✦ マツボックリ	△ マツコボシ																								
		✓ マツガサ	● マツ(ノ)ボボ	* 無答																									
	A	B	C	D	E	F	G _a	G _c	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z		
10																													10
20																													20
30																													30
40																													40
50																													50
60																													60
70																													70
80																													80
90																													90
	A	B	C	D	E	F	G _a	G _c	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z		
	梶	中	中	お	ひ	中	新	新	新	滝	岩	越	田	宮	中	中	坪	土	吹	寒	大	岩	土	中	猪	下	上		
	屋	稲	中	田	ば	野	新	新	新	川	本	川	越	平	野	野	塩	音	原	谷	平	倉	倉	新	田	湯	湯		
	敷	場	島	屋	の		農	商	道	原	谷	内	原	越	平	野	林	坂	原	谷	平	倉	倉	新	田	湯	湯		

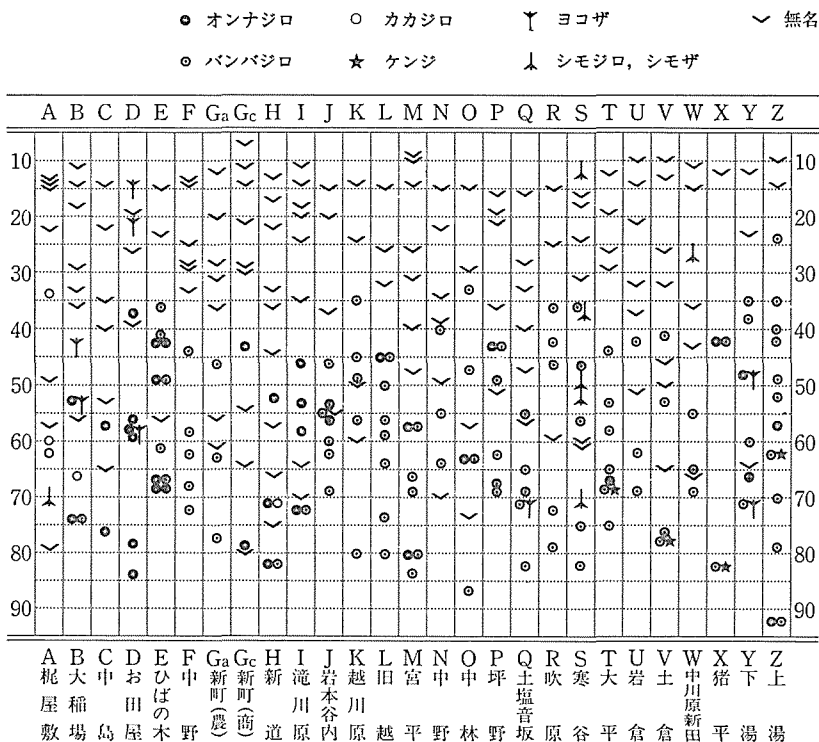
中では、上流域の老年層を中心にマツガサが目立つ。おそらく共通語的表現の内部で、古いマツガサと新しいマツカサの抗争があったのであろう)。

この表では理解について表示を省略したので、補足しておく。

マツボックリの理解は、年齢層による違いが目立つ。理解者は20歳代以下18人、40歳代以下12人、50歳代以上2人であった(このうち童謡で覚えたと積極的に指摘する者が、20歳代以下に2人、40歳代以下に4人含まれていた)。この数字は、若年層でもマツボックリを知らない人が、依然としてかなりいることを示している。

マツ(ノ)ボボの理解者は全体で66人あったが、大体は使用者の散在している範囲に含まれていた。例外は、地点LからZの範囲の20歳代以下の7人と、Z 42, Z 52の9人であった。一方、マツ(ノ)ボボを知らない人もかなり多かつ

表29 主婦の座



た。使用者の分布する範囲内にも、知らないとする人がかなり混在している。

これに対してマツカサは、使用でなければほとんどの人が理解していた。知らないと答えた人は約30人であるが、うちマツボックリを答えた人8人、マツ(ノ)ボボを答えた人5人が含まれていた。ほかは松笠に関してまったくの無答(マツボックリに対してもマツ(ノ)ボボに対しても知らないという)であった(20歳代以下に多かった。13人)。対象物が存在しないというわけでもないのに、注意が向かないためか、若年層に無名状況が現れるものとしては、別に表14(蹠)、表17(自在鉤の横木)があった。

表29(主婦の座)は、次の表30とともに、囲炉裏のまわりの座名に関する項目である。この表も、表9、表12～表15などに準じて作成した。

中年層と老年層では、まず、オンナジロとバンバジロが混在しているといえ

る。下流域ではオンナジロが、上流域ではバンバジロがやや優勢であるが、その境界ははっきりしない。最上流の老年層にケンジが認められる。この地域の最古層と考えられ、その衰退のさまは、表 16 (虹) のニュージなど、表 17 (自在鉤の横木) のチュージなどと似ている。カカジロは、オンナジロ、ないしはバンバジロの臨時的な言いかえではあるまいか。

元来は主婦の座名ではなかったヨコザやシモジロなどが、地点 B, D, Q, S, W, Y にみられるが、席次に関する社会制約がゆるみはじめたために混入したものであろう。

若年層が全域で無名状態に移行していく点は、地域差の認められない 2.1. の類とすることができたかもしれない。囲炉裏のまわりの席次についての社会制約がゆるみはじめて、無名状態が発達しつつあるのであろう (中年層、老年層にも、すでに無名状態がかなり認められる)。若年層は、席次といった社会制約にまだなじんでいないので現在無名、といった事情もあるかもしれない (若年層が無名となるものには、表 14 (踝)、表 17 (自在鉤の横木)、表 28 (松笠) があった)。なおこの地域における囲炉裏の存在、非存在については、表 27 の説明の末尾でふれている。

この表では各語形の理解を表示していないので、その分布を補記する。

オンナジロは、使用範囲以外では、A 49, 地点 C から M の 30~40 歳代 (12 人)、地点 R から W の範囲では、R 79, S 48, U 32, W 43, W 69 で理解されていた。

バンバジロは、使用範囲以外では、A 49, F 28, F 29, Gc 29, Gc 31, Gc 54, Gc 64, H 33, I 53, I 64, 地点 J から Y の 40 歳代以下 (15 人) で理解されている点が目につく。

ケンジは、T 65, U 62, Z 57, Z 70 で理解されていてなるほどと思われるが、T 29, さらに Gc 29 でも理解されているのはおもしろい。また、S 82, T 58, T 65, W 65, W 69, Y 60 でケンジは客座のこと (主婦の座の向かい側 = 長男の座) として主婦の座ではないとしたのは、今回の資料の範囲では何ともいえないが、さらに深く考えるべき問題である。

表 30 (下座) は、表 29 とともに、囲炉裏のまわりの座名に関する項目である。この表も、表 9, 表 12~表 15 などに準じて作成した。

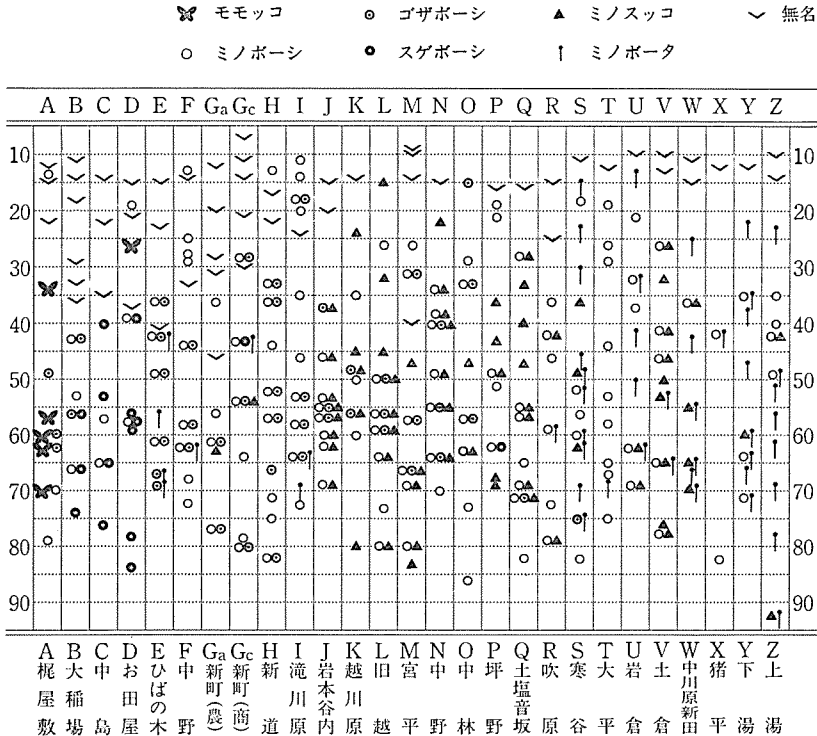
	A	B	C	D	E	F	G _a	G _c	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z
10	>>	*					>>		>					*>						<		*					<
20	*		<			*		<		<											*	*					
30	<	<	<				<									<											
40		*																									
50	<																										
60	*	*					*																				
70	<	*																									
80	<																										
90																											

A B C D E F G_a H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z

A椋屋敷 B大稲場 C中島 Dお田屋 Eひばの木 F野 G_a新町(農) G_c新町(商) H新道 I滝川原 J岩本谷内 K越川 L旧田 M宮越 N中平 O林中 P坪野 Q土塩音坂 R吹雪 S寒谷 T大原 U岩石倉 V土倉 W中川原新田 X猪平 Y下湯 Z上湯

表 29 の場合は、元来は主婦の座名ではなかったと思われる表現が混入していたが、この項目には、そのようなことはなかった。わずか 1 人からの回答であるキジロは、いわゆる木尻の座ということであろう。

表31 藁帽子



この表では、各語形の理解の分布を表示していないので、補記する。

シモザは、下流域の老年層では、理解されているという報告は、特に認められなかった。これに対してシモジロは、Q 28, S 11, S 16, T 26, Y 12 で理解されており、やや状況が違っている。スエザ、スエジロについては、使用者の分布範囲をこえて、E 61, Ga 20, Gc 80, M 83, O 47, P 51 で理解されており、以前はもう少しひろい範囲で使われていたことを思わせる。

表 31 (藁帽子) は、降雪時の防寒具 (かぶりもの) の名称である。表 24 に準じて作成した。つまりナゾナゾ式質問に対する回答のみを示し、誘導使用は表示していない。

まず無名の回答が、下流域の若年層にまとまって分布していることが注目される (ただし無名がその範囲にとどまらないのは、表の示す通りである)。

在来語形はまことに多彩である。モモッコは、地点Dの例外を除けば、地点Aに集中的に現れた。中には、調査時に提示した表と違うもの（シュロの皮で編んだもの、など）とする回答もあった（B 53, E 56）。元来は、モモッコはこの地方では化け物を意味することばであり（上流から下流Cまで、20歳代から80歳代の各層の26人がそう答えた）、このかぶりものに転用されたものと推定される。

ミノボーシは、まずはこの地域の共通語的表現としていいものであろう。全流域に、ほぼ万遍なく分布している。これに対して、ゴザボーシの類は下流域から中流域にかけて分布し、地域的なかたよりがみられる。また年齢層からみても、若年層ではミノボーシの方が勢力が強い。スゲボーシは、地点BからDの範囲にかたまっている（地点GcとPに例外がある）。ミノボーシとゴザボーシ、スゲボーシは、併用される場合が多い。ここでも、物自体に区別の認められる場合があるようである（別にワラボーシという回答がA 70, B 53, E 61, E 68, Gc 43, H 57, I 64, K 60, L 73, R 25, R 36からあったが、まとまった分布とは認められず、ミノボーシとの併用がほとんどであったので、表示を省略した）。

スッコの類は、地点Jから上流にかけて分布している。年齢的には、やや老年層にかたよっている（ミノスッコには、スッコやスッコボーシという回答を含めた。地点Ga, Gc, V, Yではすべてスッコであった。地点Sはスッコボーシであった。しかしミノスッコが圧倒的に多かったので、それに代表させた）。

ミノボータの類は、かなりまとまった分布を示している（ただし地点E, F, Gc, Iなどに例外がある。なお、ミノボータにはボータ、ワラボータも含めた。ボータやワラボータはほとんどはミノボータとの併用であった）。地点JからQの範囲で領域が分断されているところから、古くはこの表現がひろく使われていたとみることができるかもしれないが、元来ボータは、藁を束ねて端を縛り、雨よけのために薪などを覆うために使うものとする回答が別にいくつかあり、人間の防寒具（かぶりもの）以外で、ボータが広範囲で使われている蓋然性が強い。したがって、領域が分かれているからといって、人間の防寒具（かぶりもの）の名として、現在よりひろい範囲で確実に使われていたと、すぐに断定

することはできない。

調査票作成の段階では、別に、ハゴザ、モンス、ガンドーボーシなどの語形
の存在を予想したが、知らない、違うものであるとする回答が圧倒的に多かつ
たので、表示は省略した。調査の際に示した絵によってこうなったのであろう
か。

この項目については、調査時にかなりの苦心のあったことを告白せねばなら
ない。同一人がいろいろの表現を回答する原因の一つは、この防寒具（かぶり
もの）に、材料、形の点でさまざまな変種があったためであった。調査時に、
同じものの名を調べているのかどうか、いささか不安になる時さえあった。

表からは、在来語形間の葛藤は、あまりはっきりと読みとることはできない。
名を知らないとする回答に、地域差と年齢差の交差がみられることが、そうし
た中でここ 2.3.の類に分類した根拠といえよう。在来語の分布が錯綜する例と
しては、すでに表 24（蝌蚪）などがあった。

この表では、各語形について誘導使用ないし理解について表示を省略してい
るので、補記する。

モモッコについては、地点 B から I の範囲で理解者がある（19 人、別に N 70）。

ミノボーシについては、使用者の現れる範囲内に誘導使用者や理解者が認め
られるのは当然ながら、使用者のほとんどみられない範囲、たとえば地点 M か
ら Z の最若年層（15, 16 歳以下）にも、誘導使用者（2 人）や理解者（8 人）
が現れる。しかし一方、使用者の現れる範囲内にも、わずかながらミノボーシ
を知らないという人がいるのも確かである（K 24, K 45, K 49, K 56, K 80
など、K には特に多い）。コザボーシについては、地点 R から地点 Y の範囲の中
年層、老年層に、誘導使用者（13 人）や理解者（4 人）が現れた。ただしこの
うち、これは夏の雨の時に使うのだとする人もあった（5 人）。スゲボーシにつ
いては、使用の情報しかない。

ミノスッコの類については、使用者の分布する範囲にわずかに理解者が認め
られるだけで（8 人）、誘導使用者は 1 人もいなかった。

ミノボータの類についても、使用者の分布する範囲に、わずかに、これは誘
導使用者（9 人）と理解者（5 人）が認められるに過ぎなかった。

現在退縮しつつある語形では、使用者の分布する範囲の外側に誘導使用者や理解者が認められることはまれであるといわれているが、スッコやミノボータの状況は、その論を支持するものといえよう。

2.4. 地域差と年齢差がともに現れ、特にこの地域で発生したと考えられる表現の認められるもの——諸表現間の葛藤という観点からは2.3.の類に含めて考えることもできよう。

以下に示す表からもわかるように、等語線は直立しているものが多いから、その点を強調すれば、2.2.の類とすることもできよう。しかし一方、在来の表現が新しい表現と交替していくさまも見てとれる。そして新しい表現の誕生という点では、すでに表19などに関連する例があった。なお、表23の〔ɾ〕から〔g〕への変化は、上流方向で早く進行していることを強調すれば、この変化もこの地域範囲内で発生したことになる(もっとも、地点AやGcなどでの変化が早く進行している点を強調すれば、表23にみられる〔ɾ〕から〔g〕への変化は、外界からの影響を考えることになり、この地域範囲内で独自に進行したものとはしにくいことになる)。

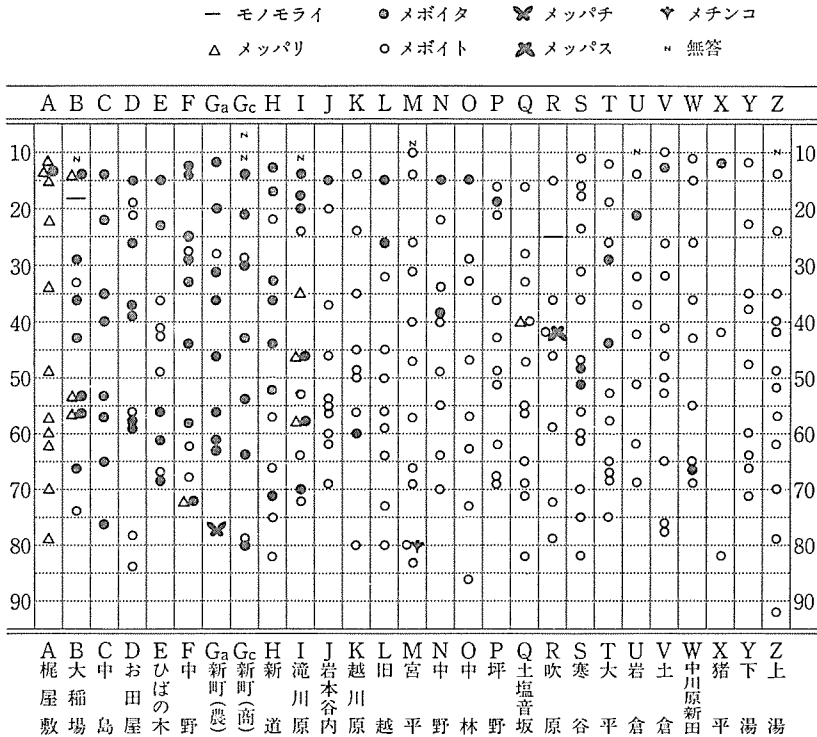
表32(麦粒腫)は、表24の方式で作成した。共通語形モノモライは単用の場合だけ表の上に示し、ほかとの併用の場合は表示を省略してある。したがってたった2人からしか得られなかったようにみえるが、実は、全地域、全年齢層を通じて使用者83人(別に誘導使用者が83人)が点在していた(他方、モノモライを知らない者は33人。これも全地域、全年齢層にわたって認められた)。

在来語形の分布は、概略、地点Aがメッパリ、地点BからIあたりまでがメボイタ、地点JからZまでがメボイトということが出来る。そしてメッパリとメボイタはそれぞれ上流域に点在しているし、メボイトも、地点BからIあたりのどちらかというところ老年層に多く点在している。

その他、それぞれ1名からの回答ではあるがメッパチ、メッパス、とメチンコがあり、別に無答が最若年層にわずかにみられた。

この地域における老年層の表現は、参考文献12によって知ることができる。

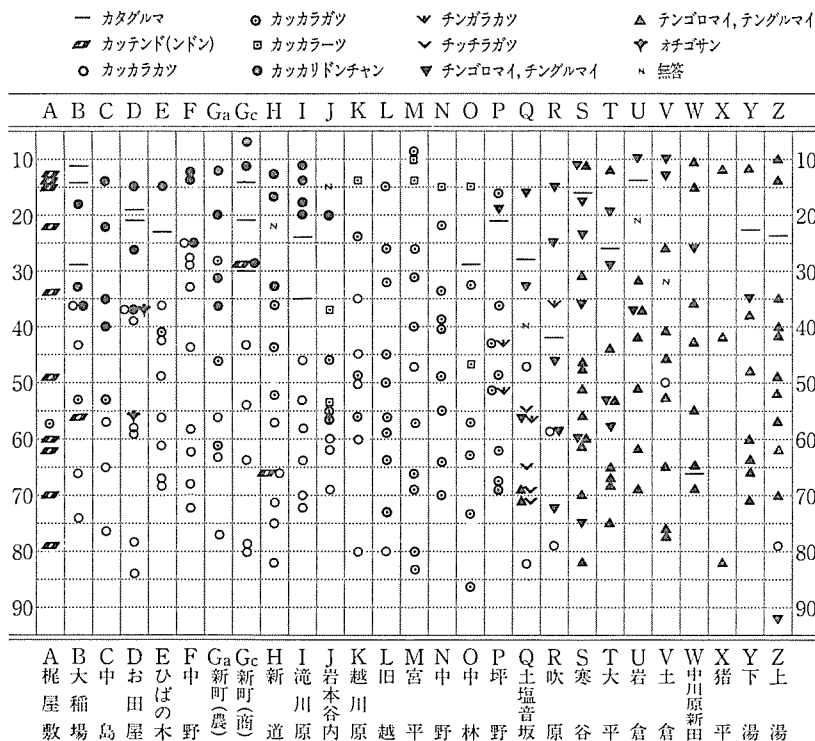
表32 麦粒腫



そこでは、河口部のメツマリを除いて、この早川流域はまず全域がメボイトであった（わずかにメボイタが混在していたのかもしれないが、ごくまれだったのであろう）。そのためメボイタは調査票作成時には予想しにくい表現であったが、今回はこのように多量に出現した。このメボイタは、おそらく調査時点をさかのぼる50～60年以前に、新しい方言語形としてこの地域で発生し、一方で共通語形モノモライが普及しつつある状況下で、主として地点BからIの範囲（旧下早川村）に普及したものと思われる。地点Aがメツマリ領域であるから、他地域から流入してきた表現とは思えない。メ・ボイト（乞食）という語構成の意識が薄れ、メボ・イタ（痛）という語源意識のもとに発生したものと考えられる。

諸語形の誘導使用や理解の分布について付記すると次の通りである（モノモ

表33 肩車



ライについては、すでに言及した)。メッパリは、地点BからIの範囲で、誘導使用者・理解者が多かった(各11人, 44人)。地点JからZの範囲では、ずっと少なくなる(各3人, 24人)。メボイタとメボイトとをあわせればほとんど全員が使用となるので、メボイタとメボイトについては、地点Aを除いて、誘導使用者、理解者、さらには知らない人は、当然ごくまれということになる。B 18, Ga 77, R 25はメボイトの理解者であり、最若年層では無答となっているもののうちI 11, M 9もメボイトの理解者であった(ほかはメボイトを知らないという)。地点Aでは、A 34がメボイトの誘導使用, A 57, A 60が理解のほか, A 15を除く7人がメボイトを知らないと答えた。この地点が特別な地点であることがわかる。

表33(肩車)は、表24の方式で作成してある。ただし共通語形カタグルマに

については、他の表現と併用の場合は表示を省略してある。表 32 と似て、この表の場合も、共通語形カタグルマの侵入状況はまことに曖昧である。もっとも、ノーヒントでカタグルマと答えても、併用ゆえに表では割愛されたものが、若年層を中心に、実はかなり多かった (58 人。なお誘導使用者は 1 人、理解者は 14 人。ほかは知らないであった)。

さて、在来語形の分布は、非常に複雑である。地点 A がカッテンドないしカッテンドンドン、地点 B から I あたりまでが若年層はカッカリドンチャン、中年層以上はカッカラカツである。地点 J から P あたりまでは全体がカッカラガツ、地点 Q から Z までは、若年層はチンゴロマイ、チングルマイ、中年層以上はテンゴロマイ、テングルマイというのが大局である。そのほか下流域のカッテンドないしカッテンドンドン、カッカラカツは上流域にもわずかに点在し、一方、カッカラガツは、下流域にも見出される。そのほか、地点 J から O のあたり、主として若年層に、カッカラガツの変種とみられるカッカラーツがあり、地点 P、Q には、わずかながら、チンガラガツ、チッチラガツと答えるものがあつた。別に、肩車の名を知らないというものが主として若年層に点在し、またオチゴサンという答えが、1 名からではあつたが、見出された。

この地域における老年層のことばの地理的分布は、参考文献 5 によって展望することができる。その図によれば、河口部カッテンドンドン、下流域カッカラカツ、上流域テングルマとなっていた。しかし今回の調査によって、その実態はさらに複雑であることがわかった。

まず地点 B から J あたりに見出されるカッカリドンチャンが珍しい。地点 A のカッテンドないしカッテンドンドンと、地点 B から上流にかけて広いカッカラカツ、カッカラガツとの混交によって、おそらく調査時点から 20～30 年ほど前に、この地で発生し、一方で、共通語形カタグルマが勢力を拡大している状況下で、普及していったものと認められる。地点 A がカッテンドンドンであるから、この語形が他地域で発生しこの地域へ伝播してきたものとは考えにくい。地点 Gc などへ飛び火的に流入してきたものという考えもありえようが、周囲に分布している語形から、この地で発生、定着、そして勢力をひろげた表現である蓋然性が強い。

地点P、Qにみられるチンガラガツ、チッチラガツもおもしろい。下流域のカッカラガツと上流域のチングルマイの分布状況からみて、おそらく調査時点をさかのぼる60～70年前に、この地で誕生した表現と考えられる。ただしこの表現は、下流域のカッカリドンチャンとは違ってその後あまり普及せず、若年層に根をおろしているといえないから、早晩消滅していくものと考えられる。

上流域のチンゴロマイ、チングルマイも、老年層のみの分布調査の際には注目されなかったものである（わずかに記録されていたかもしれないが、ごくまれだったのであろう）。若年層ほどこの形が好まれているようであるが、この語形は糸魚川市街地の表現であるオチゴサン（この地域でも1人ながら回答者があった）、さらにはその裏にある祭礼時の稚児の肩車に乗る振る舞いが意識下にあり、在来のテンゴロマイ、テングルマイと混線して、これまたこの地域で発生し、定着し、普及していった表現と認められる。

共通語形が徐々に浸透してくる状況下にもかかわらず、地域的な新しい方言形が発生しその勢力を拡大する場合のあることは、すでに表19や表32の説明で述べたところであるが、この表にいたって、その多彩さには驚かされることとなった。そして諸語形が、周囲の他の表現の分布と関連して、おそらくこの地で誕生したものと推定できることは（他地域からの流入でないと推理できることは）、まことに興味深い。

なお、以上の説明ではふれなかったが、カッカラガツに対するカッカラガツも、参考文献5では注目されない表現であった（わずかに記録されていたのかもしれないが、ごくまれだったのであろう）。おそらく新しい表現なのであろう。なおここでカッカラガツとしたものの中には、カッカリカッチャ(B 36)、カッカラカス(B 66)、カッカラカエ(E 49)、カッカラガツとしたものの中には、カッカラガシ(Ga 28, K 24, M 26, M 31, P 51)やカッカラガツチョ(H 44)、カッカラバツ(Ga 46)などが含まれている。また、テンゴロマイ、テングルマイとしたものの中には、テングルマ(Q 69) テンゴロバイ(W 42)、テングルマイ(Y 60)、チンゴロマイ、チングルマイとしたものの中には、チンガラマイ(P 19)、チンゴロマイ(Y 35)などが含まれていたので付記する。いずれも語形変化の芽ともいえるべきものであろう。これらを通じて方言世界というもの

の多彩さ、そしてそれらのうちの一部分が定着、普及していくのだということが、いまさらのように感じられる。

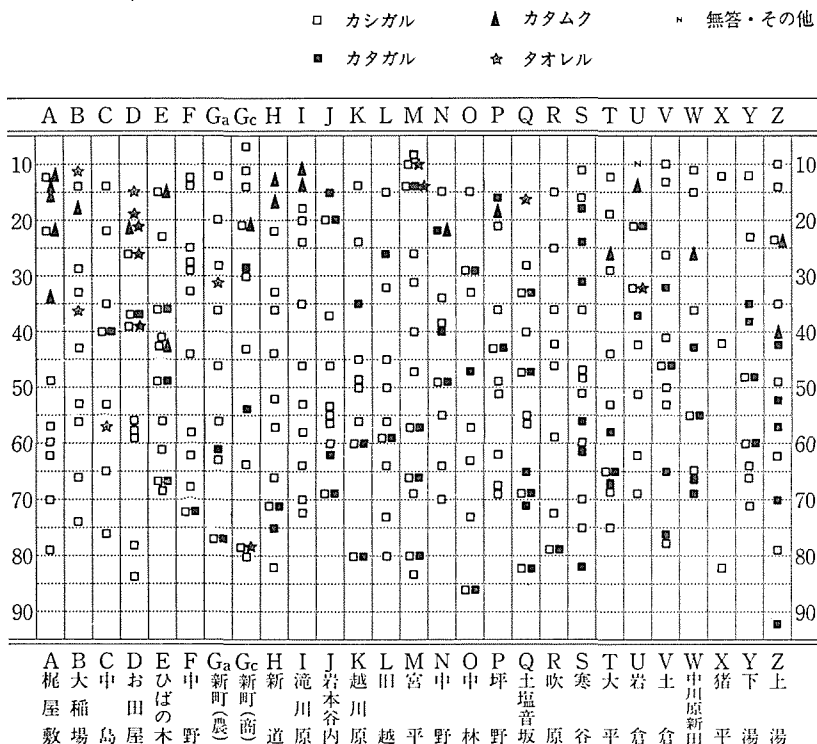
表 33 では、各語形の誘導使用や理解についての表示を省略しているので、補記しておく（ただしカタグルマについては、すでに言及したところがあった）。カッテンド、カッテンドンドンは、上流方面での誘導使用者や理解者は、ほとんどいなかった（各 0 人、2 人）。カッカラカツ、カッカラガツについては、まず地点 A、B では、使用者を除いて、知らないと答えたものが多かった。地点 E から J までの若年層に、理解者が 4 人いる。上流域では、40 歳代以上に誘導使用者や理解者がわずかにいるが（各 6 人、7 人）、若年層では 30 歳代に各 1 人のほか、知らないと答える者ばかりであった。テンゴロマイ、テングルマイ、またチンゴロマイ、チングルマイについては、下流域での理解者はほとんどなく（D 78、D 84、J 20、K 14、O 63 のみ）、誘導使用者は絶無、他はすべて知らないと答えるものばかりであった。

2.5. 複数語形の対立はあるが、地域差も年齢差も目立たぬもの——複数語形の混在といていい。強いていえば分布の〈傾向〉は認められるが、むしろ語間に微妙な意味用法の分担が認められて注目される。

表 34（傾く）は、分布の観点からは、結果のあまりはつきりしない例となった。ここではノーヒント回答を中心として作成し、ノーヒントの答えのない場合に限って誘導使用をあわせて表示したが、表のように分布はすつきりしない。はじめは、老年層は下流域でカシガル、上流域でカタガルとみて相互間の領分争いを予想したものであった。

もっとも、誘導使用のすべて、理解をも含めて、その全体を展望すると（表は省略）カシガルは全地域、全年齢層が使用ないし誘導使用となっているのに対して、カタガルは下流域のことに若年層では使用ないし誘導使用が減少し、カシガルの場合にはわずか 1 例しかなかった知らないがかなり現れてくる、とはいえそうである。その点を強調すればカタガルは下流域で衰退しているということになろうが、そうかといって上流域の老年層にはっきりした領域がある

表 34 傾く(カシガル・カタガルほか)



かといえは、そうでもないことは表の示す通りである。

それよりも、この項目に関しては被調査者の中に、カシガルとカタガルの間に微妙な用法上の差があると報告したものがあつた点に注目したい。このようなコメントは他の 39 項目に関してはほとんどみられず、この項目の特徴となっている。以下列記してみる（表の上で併用となっていない場合が多いが、理由はこの表がノーヒント回答を中心に作成されているためである）。

B 33 カシガルは動作の進行を、カタガルは結果を表わす。

D 37 カタガルは動作の進行を表わす。

E 41 カタガルは大きな長いものについて。カシガルは小さなものについて。

F 28 カタガルは鍋などが傾くこと。

- Gc 29 カシガルは動作の進行を表わす。
- H 36 カタガルは建物の傾くこと。
- I 64 カシガルは傾きが小さい時、カタガルは 45 度ぐらいの時に使う。
- K 45 カタガルは建物が傾くこと。
- K 50 カタガルは傾きが大きいこと。
- N 39 カタガルは倒れてしまうぐらい。
- R 25 カシガルは建物が傾くこと。
- R 42 カシガルは建物が傾くこと。
- R 59 カタガルは建物が傾くこと。
- T 65 カタガルは建物が傾くこと。
- W 43 カシガルは稲架（ハサ）が傾くこと、カタガルは固定したものが傾くこと。
- W 65 カタガルは建物が傾くこと。電柱などには使わない。

この項目に多量に現れたこの種のコメントは、カシガルとカタガルが元来この地域で類義的別語として存在していたことを示すと考えられるかもしれない。I 64, K 50, N 39 の回答などは確かに通ずるところがある。しかし B 33, Gc 29 と D 37 を比較し、H 36, K 45, R 59, T 65, W 65 と R 25, R 42 を対比すれば、その回答は相互に矛盾して、ここで報告されたコメントが〈臨時的〉なものであることを推定させる。同義語が共存する時何らかの規準から意味用法について分担を行なわせようとするのは珍しくない言語変化の流れであり、小地域ごとに、厳密に言えば個人ごとにその変化を生み出し育てていくとしても不自然ではなく、相互に矛盾が生じてむしろ自然ということになろう。

有力な語形間で葛藤が生じた場合、一方が他方を圧倒する例の多いこと、これはいうまでもないが、ここでは地理的分布領域のひろさの争いではなく、意味用法の分野における分割、分担の争いが行なわれたものと思われる。

なお、表には、主として若年層に現れるタオレルとカタムクを表示した。これらは、カシガルとカタガルの抗争の上に共通語形として導入されつつあるものと考えられる。カタガルが消滅せずに残存していることの一つの支えとして、この共通語形カタムク（カタガルの類音語）の存在を考慮することができるか

もしれないので、付記しておく。ただしカシガルとこのカタクとの混交によってこの地でカタガルが発生したとする考え方は、地理的分布の観点から成り立つとは思えない。

2.6. まとめ

この研究によって明らかになった点を摘記すれば次の通りである。

- a. 33 枚の表を対比することによって、ことばの分布や変化が、項目ごとにそれぞれ特色を持っていることがわかる。旧村界などが分布と密接に関連する場合がある一方、ほとんど関連のない場合もある。共通語化も、すべての項目に一様に圧倒的なわけではない。
- b. しかしいくつかのグループに分類することができなくはない。すでに示した 2.1. から 2.5. までの分類をさらに細分すれば、次表のようになりうか。もっとも諸語形の葛藤に際して現れるべきタイプが、これですべて出現したのかどうか、本当はわからない。項目を変えたり、地域（またそのスケール）を変えたりしてみる必要がある。

なお、表の番号を〔 〕で囲んだものは、その表の説明時に言及はしているが具体的な表の提示は省略した例を示す。

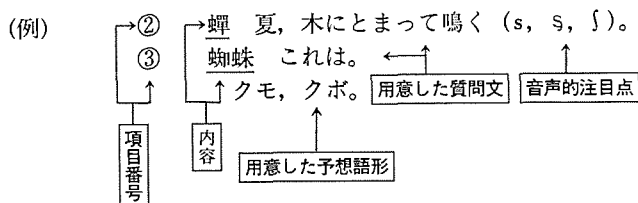
変 化 老年層		年齢差のあるもの		年齢差のないもの
		若年層は全体が共通語(無名)になっているもの。いっせいに共通語化(無名化)の進行しているもの	変化が単純でないもの	変化のほとんどみられぬもの
ない 差 の もの	全域に単一の非共通語(ときに共通語)形の使われているもの	表 2～表 8	表 18, 表 19	〔表 18〕
地域 差 の ある もの	複数の非共通語形が使われているもの	表 15	表 24～表 34	表 9～表 13
	共通語形(無名)と非共通語形の対立がみられるもの	表 16, 表 17 表 20～表 22	表 23	表 14

- c. 変化には、下流方向からの外的影響によるものが当然多かったが、地域的中心地の影響力をみることのできるものがあり(表 23, 表 24 など)、また、この地域で独自に新しい表現が生み出されたとみうる例もあった(表 19, 表 32, 表 33 など)。別に、複数の表現の抗争において、一方が他を圧倒するもののほか、両表現が新しく意味用法を分担していくケースもあった(表 34)。
- d. ことばは地理的に伝播するとされる。今回の調査結果から、確かに伝播のあとをダイナミックな形で見える思いのする表もあったが、最初にひそかに予想した等語線が斜めになって現れる例は、ほとんど見られなかった。地点の幅(地域のスケール)を、もう少しひろげてみる必要があろう。
- e. 各項目の性格と分布パタンの関係の解明は、今後の課題となる。各表現の地域生活における位置づけ(生活分野、使用頻度など)、各表現の他の言語層における使用状況(あらたまった時はどうかなど)、各表現の周辺地域での使用状況(ことにこの地域の中心糸魚川市街部の状況、それも老年層ばかりでなく若年層を含めた各年齢層の使用状況)などが、さしあたり知りたくなる。

3. 資料と補足

3.1. 調査票

ここに調査票の形をそのまま示すことはできないが、項目番号、内容、用意した質問文、予想語形を以下に示しておく。



なお、予想語形に関する音声的注目点(たとえばセキムシの s, s, s)は、ここでは省略した。

また、16, 21, 22, 32, 33 の 5 項目以外には、すべて絵 (11 には文字も) を用意してあったので付記する。

- ① 蟻螂 こういう虫 (水の中にいるのではない)。
カマキリ, セキムシ, ゲンタロームシ, センタロームシ。
- ② 蟬 夏, 木にとまって鳴く (s, s, s)。
- ③ 蜘蛛 これは。
クモ, クボ。
- ④ 蝌蚪 夏のはじめ, 水の中にたくさんいる。
オタマジャクシ, ドコ, ロコ, ベベタナゴ, ギャールッコ, メメント。
- ⑤ 蛙 大きくなったもの。いろいろな種類があるが、ひっくるめて。
カエル, ギャワズ, ギャール, ギャク。
- ⑥ 鱗 魚の肌についている, 薄い爪のようなもの。

ウロコ, ウルコ, コケラ。

- ⑦ 西瓜 これは (k, k^w, kw)。

- ⑧ 馬鈴薯 こういうもの。

ジャガイモ, ゴロイモ, ゴロザイモ, ゴロサク, ジョーショイモ, ジョー
シュイモ。

- ⑨ 茸 種類がいろいろあるが, ひつくるめて。

コケ, キノコ (o^h, o^o)。

- ⑩ 松笠 松の実。松はこの集落にあるか。

マツカサ, マツガサ, マツノボボ, マツボックリ。

- ⑪ 波 読んでみてください (o^h, o^o, g, γ, η)。

- ⑫ 虹 空にかかる七色の帯のようなもの。

ニジ, ミョージ, ニョージ, ニュージ。

- ⑬ 影 光の反対側にうつる黒いもの (g, γ, ʃ)。

- ⑭ 鏡 顔をうつすためのガラス (k, k^w, kw)。

- ⑮ 火事 家に火がついて燃えてしまうこと (k, k^w, kw)。

- ⑯ 囲炉裏 こういう所。

ヒンナカ, イルイ, イロリ, ジロ。

- ⑰ 女の座 お母さん (主婦) の座る所。

オンナジロ (ザ), バンバジロ (ザ), ケンジ, 無名。

- ⑱ 下座 横座の向かい側。

シモジロ (ザ), セイジロ (ザ), スエジロ (ザ), 無名。

- ⑲ 自在鉤 ぶらさがっているもの。自在鉤はあるか。

カギサン, カギサマ。

- ⑳ 自在鉤の横木 これは。

チョージ, チュージ, キュージ, 無名。

- ㉑ 正月 一年の最初の月 (g, γ, η; g, g^w, gw)。

- ㉒ 間食 忙しい時, 三度の食事のほかに食べる食事。午前中か, 午後か。

コビリ, ナカマ。

- ㉓ 缶詰 こういうもの (k, k^w kw)。

- ②④ 菓子 飴や饅頭など甘いもの (k, kʷ, kw)。
- ②⑤ 傾く 台風で電柱が、どうなる (倒れるのではない)。
カシガル, カタガル。
- ②⑥ 藁帽子 こういうもの, 形は, 原料は。藁帽子はあるか。何年前まであったか。
ガンドボーシ, モモッコ, モンス, ボータ, ミノボーシ, ゴザボーシ, ワラボーシ, ハゴザ。
- ②⑦ 肩車 子どもをこういうふうにする。
オチゴサン, カッテンドンドン, カッカラカツ, テングルマ。
- ②⑧ 背中 ここの広い所 (s, s, ʃ)。
- ②⑨ 蹲る こういう姿勢になる。どうする。
シャガム, ハジクナル, ツクナル。
- ③⑩ 踵 足のこういう所。
アクト, カカト, カガト, キビソ, キビス。
- ③⑪ 踝 ここの骨。
クロボシ, クロブシ, クルブシ(ㇿーㇿー, ㇿーㇿー, ㇿーㇿー, ㇿーㇿー), クルミブシ, 無名。
- ③⑫ 擦ったい 足の裏や腋の下などをさわられたときの感じ。どんなだ。
クスグッタイ, クツバカシイ, クツバシイ。
- ③⑬ 擦る そんな感じを起こさせて, 子どもなどを笑わせる。どうする。
クスグル, クツバカス, クツバス。
- ③⑭ 中指 この指。
ナカユ(イ)ビ, ナカタカユ(イ)ビ。
- ③⑮ 禿頭 こういうふうに, つるつるになった頭。やけどではない (g, γ, ɳ)。
- ③⑯ 汗 暑いとき体から流れ出るもの (s, s, ʃ)。
- ③⑰ 旋毛 髪の毛のうず。
ギリギリ, ジン, ナカジン, ツムジ。
- ③⑱ 髭 ここに生えるもの (g, γ, ɳ)。

③⑨ 歯茎 ここの赤い肉。

ハギシ、ハキシ、ハグキ。

④⑩ 麦粒腫 まぶたにできる小さなできもの。

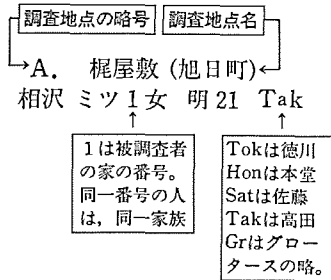
モノモライ、モノムライ、モノグライ、メッパリ、メボイト。

3.2. 被調査者一覧

以下に調査に協力して下さった被調査者の一覧表を掲げる。

表示法は次の通り。

(例)



なお、われわれが予定した条件から多少はずれる被調査者（4人）には*印を付した。

名と家と性	生年	調査者	名と家と性	生年	調査者	名と家と性	生年	調査者
A. 梶屋敷 (旭日町)			相沢義栄	4 男	大 5 Hon	相沢光太郎	4 男	昭 29 Tok
相沢ミツ	1 女	明 21 Tak	小竹敏夫	5 男	大 14 Hon	D. お田屋 (下田屋)		
小竹東九郎	2 男	明 31 Sat	相沢啓三郎	6 男	昭 7 Hon	樋口笹次郎	1 男	明 17 Tok
伊藤和蔵	3 男	明 39 Sat	倉又 繁	3 男	昭 10 Tok	樋口ヨイ	1 女	明 23 Tok
伊藤アイ	3 女	明 41 Tak	相沢高光	7 男	昭 14 Tok	樋口清始	1 男	明 42 Tok
小池仙蔵	4 男	明 44 Hon	相沢久代	2 女	昭 25 Hon	上谷カズ	2 女	明 43 Hon
藤田ヒサコ	5 女	大 8 Sat	相沢美千代	7 女	昭 29 Tok	上谷ヨシエ	3 女	明 45 Tok
伊藤フサエ	3 女	昭 9 Tak	相沢由幸	6 男	昭 32 Hon	上谷信義	4 男	昭 4 Hon
小竹フミエ	6 女	昭 21 Sat	C. 中島 (下田屋)			上谷 茂	3 男	昭 6 Tok
小竹和男	6 男	昭 28 Sat	上谷キサ	1 女	明 25 Tok	小竹 猛	5 男	昭 17 Hon
相沢晃夫	1 男	昭 29 Tak	相沢伝次	2 男	明 36 Hon	小竹照代	5 女	昭 22 Hon
小竹正江	2 女	昭 30 Sat	相沢 清	3 男	明 44 Hon	樋口幸子	6 女	昭 24 Hon
B. 大稲場 (下田屋)			* 相沢富貴	4 女	大 4 Tok	樋口博子	6 女	昭 28 Hon
相沢一二三	1 男	明 27 Tok	上谷正行	1 男	昭 3 Tok	E. ひばの木 (上田屋)		
相沢オー	2 男	明 35 Hon	相沢久光	4 男	昭 8 Tok	関本千代	1 女	明 33 Sat
倉又三治郎	3 男	明 45 Tok	相沢幸雄	2 男	昭 21 Hon	斎藤甚左衛門	2 男	明 34 Sat

名と家と性	生年	調査者
山本弥三吉	3男 明40	Tak
馬場勝治郎	4男 大1	Tak
馬場コウ	4女 大8	Tak
山本政義	5男 大15	Sat
関本一平	1男 昭2	Sat
斎藤 曉	2男 昭7	Tak
山本八重子	3女 昭20	Tak
関本恒雄	1男 昭28	Sat
F. 中野 (上田屋)		
渡辺儀郎	1男 明29	Sat
伊藤与三郎	2男 明33	Sat
渡辺滝蔵	3男 明39	Tak
伊藤弘之	4男 明43	Tak
伊藤善勝	5男 大13	Sat
伊藤武夫	4男 昭10	Sat
伊藤和矩	6男 昭14	Sat
渡辺繁治	3男 昭15	Tak
渡辺敏昭	7男 昭18	Tak
伊藤建介	5男 昭29	Sat
伊藤 豊	4男 昭30	Tak
Ga. 新町 (農業)		
磯貝三郎	1男 明24	Hon
磯貝三治郎	2男 明38	Hon
高橋豊太郎	3男 明40	Hon
山崎一郎	4男 明45	Hon
磯貝伸雄	5男 大11	Hon
磯貝庄司	6男 昭7	Hon
山崎 勇	4男 昭12	Hon
佐藤正入	7男 昭15	Hon
田村 治	8男 昭23	Hon
磯貝美鈴	5女 昭31	Hon
Gc. 新町 (商業)		
磯貝キク	1女 明21	Tok
佐藤八造	2男 明22	Tok
関沢次郎	3男 明37	Tok
縄綱太郎	4男 大3	Tok
斎藤岩雄	5男 大14	Tok
佐藤寿美江	2女 昭13	Tok
縄 征治	4男 昭14	Tok
山川ヨシエ	6女 昭22	Tok
斎藤勝雄	5男 昭29	Tok
山川謙次	7男 昭31	Tok
関沢宏樹	8男 昭36	Tok
H. 新道区		
小川りえ	1女 明19	Sat

名と家と性	生年	調査者
佐藤末吉	2男 明26	Sat
樋口福之助	3男 明30	Sat
渡辺新四郎	4男 明35	Sat
松村 誠	5男 明44	Sat
小川千代	1女 大5	Sat
近藤市郎	6男 大13	Sat
古畑一郎	7男 昭7	Sat
五十嵐健吾	8男 昭10	Sat
古淵世津子	9女 昭21	Sat
渡辺 久	10男 昭26	Sat
渡辺由子	10女 昭30	Sat
I. 滝川原		
青木千代松	1男 明29	Tak
竹内昌治	2男 明31	Tak
五十嵐守	3男 明37	Tak
天池和三郎	4男 明43	Tak
近川宗一	5男 大4	Tak
* 猪股キヨ	6女 大11	Sat
* 五十嵐正	7男 昭8	Gr
竹内智恵子	2女 昭19	Tak
青木春義	1男 昭23	Tak
立尾敏子	8女 昭25	Sat
近川洋子	5女 昭29	Tak
近川正人	5男 昭32	Tak
J. 岩本・谷内 (越)		
伊藤千代	1女 明32	Sat
伊藤午之助	2男 明39	Gr
加藤清行	3男 明41	Gr
加藤徳治郎	4男 大1	Tak
加藤寛一郎	5男 大2	Sat
加藤ちう	5女 大3	Sat
加藤慶紀	6男 大11	Hon
加藤信隆	7男 昭6	Tak
加藤 進	8男 昭23	Gr
加藤 茂	9男 昭28	Gr
K. 越川原		
吉原多喜治	1男 明21	Tak
小池幸雄	2男 明40	Tak
加藤正明	3男 大1	Tak
伴 嘉寿	4男 大7	Tak
大島トミ	5女 大8	Tak
岡田仁栄	6男 大12	Tak
斎藤儀三治	7男 昭8	Tak
加藤チエ	8女 昭19	Tak
島田明子	9女 昭29	Tak

名と家と性	生年	調査者
L. 旧越 (上越・下越)		
斎藤ツギ	1女 明21	Sat
斎藤優治	2男 明28	Sat
島田助右衛門	3男 明37	Sat
斎藤マサ	4女 明42	Sat
島田一郎	5男 大1	Sat
島田千代	5女 大7	Sat
斎藤市太郎	2男 大12	Sat
斎藤寿子	4女 昭11	Sat
倉又マサル	6女 昭17	Sat
倉又秀三	7男 昭28	Sat
M. 富平		
五十嵐イヨ	1女 明18	Tok
倉又コン	2女 明21	Tok
大島春吉	3男 明32	Tok
五十嵐巳代吉	1男 明35	Tok
山本美恵	4女 明44	Tok
大島朝二	5男 大10	Tok
倉又昭子	6女 昭3	Tok
山本富美子	4女 昭12	Tok
倉又嘉一郎	7男 昭17	Tok
倉又正博	2男 昭29	Tok
倉又富士枝	2女 昭33	Tok
山本 元	4男 昭34	Tok
N. 中野		
大島善代	1男 明31	Hon
大島源作	2男 明37	Hon
大島治世	3男 大2	Hon
大島ツタ	4女 大8	Hon
大島護雄	5男 昭3	Hon
大島宗一郎	6男 昭4	Hon
大島勇作	2男 昭9	Hon
大島久雄	4男 昭21	Hon
大島順一	6男 昭28	Hon
O. 中林		
渡辺辰次郎	1男 明15	Tok
石塚伝吉	2男 明28	Tok
石塚甚兵衛	3男 明38	Tok
渡辺フジ	4女 明44	Tok
菰沢千草	5女 大10	Tok
石塚昌子	3女 昭10	Tok
渡辺義数	4男 昭14	Tok
菰沢雅俊	5男 昭28	Tok
P. 坪野		
那須重吉	1男 明32	Sat

名と家と性	生年	調査者
-------	----	-----

渡辺ナオ	2女	明33	Sat
*那須巖長次	3男	明39	Sat
渡辺サクエ	4女	大6	Sat
渡辺千枝	5女	大8	Sat
那須正彦	6男	大14	Sat
那須長兵	3男	昭7	Sat
渡辺初枝	5女	昭22	Sat
渡辺久美子	4女	昭24	Sat
渡辺喜代一	2男	昭27	Sat
Q. 土塩音坂			
五十嵐久作	1男	明19	Hon
原安太郎	2男	明30	Hon
五十嵐平三郎	3男	明32	Hon
五十嵐キイ	4女	明36	Hon
五十嵐保治	5男	大1	Hon
原 サン	6女	大2	Hon
原権次郎	7男	大10	Hon
五十嵐五治郎	8男	昭3	Hon
五十嵐一太郎	9男	昭10	Hon
五十嵐修剣	5男	昭15	Hon
五十嵐イツ	10女	昭27	Hon
R. 吹原			
近藤繁蔵	1男	明22	Tak
渡辺スエ	2女	明29	Tak
渡辺新吉	3男	明42	Gr
渡辺毅夫	2男	大11	Gr
渡辺一郎	4男	大15	Gr
笠原英道	5男	昭7	Tak
渡辺和子	6女	昭18	Gr
渡辺信太郎	7男	昭28	Tak
S. 寒谷			
恩田忠海治	1男	明19	Tak
恩田義三郎	2男	明26	Tak
恩田三作	3男	明31	Tak
恩田仁太郎	4男	明40	Tak
恩田助義	5男	明41	Tak
恩田竹江	1女	大1	Tak
恩田ヨキ	6女	大6	Tak
恩田リカ	4女	大9	Tak
恩田ミツエ	2女	大10	Tak

名と家と性	生年	調査者
-------	----	-----

恩田スミ	7女	昭7	Tak
恩田フミエ	8女	昭12	Tak
恩田松枝	9女	昭19	Tak
恩田五月	1女	昭25	Tak
恩田みき子	5女	昭27	Tak
恩田三重子	4女	昭32	Tak
T. 大平			
恩田仁太郎	1男	明26	Gr
恩田龍蔵	2男	明33	Gr
恩田藍次郎	3男	明34	Hon
恩田キヨノ	4女	明36	Hon
恩田ヤス	5女	明43	Gr
恩田よの	6女	大4	Gr
小竹清一	7男	大13	Hon
恩田武久	5男	昭13	Hon
恩田良夫	8男	昭17	Hon
恩田憲一	1男	昭24	Hon
恩田孝子	2女	昭31	Hon
U. 岩倉			
恩田チヨ	1女	明32	Tok
樋口ツキ	2女	明39	Tok
恩田源作	3男	大6	Tok
恩田ミヨ	4女	大15	Tok
恩田ミチ	1女	昭6	Tok
恩田助一郎	5男	昭11	Tok
恩田トシエ	6女	昭22	Sat
恩田マリ子	3女	昭29	Tok
恩田栄子	1女	昭33	Tok
V. 土倉			
関原幸次郎	1男	明24	Sat
関原タイ	2女	明25	Gr
関原正博	3男	明36	Sat
関原 利	4女	大4	Sat
関原達伊	2男	大7	Gr
園田喜一郎	5男	大11	Sat
関原昭夫	6男	昭2	Gr
関原弘夫	3男	昭11	Sat
関原紀子	7女	昭17	Sat
関原幸江	1女	昭30	Sat
園田 進	5男	昭33	Sat

名と家と性	生年	調査者
-------	----	-----

W. 中川原新田			
白井力三	1男	明32	Tak
木島惣次郎	2男	明35	Tak
木島恒治	3男	明36	Tak
木島ハルノ	3女	大2	Tak
木島サチ子	4女	大14	Tak
木島みえ子	5女	昭7	Tak
木島藍子	3女	昭17	Tak
木島久子	5女	昭28	Tak
木島健治	5男	昭32	Tak
X. 猪平			
平内イエ	1女	明19	Sat
平内義造	2男	大15	Sat
平内祥子	1女	昭31	Sat
Y. 下湯(湯川内)			
樋口スワ	1女	明30	Hon
原 角一	2男	明35	Tak
樋口シイ	3女	明37	Sat
樋口千代松	4男	明41	Tok
樋口ウメ	1女	大9	Hon
樋口安栄	5男	昭5	Tok
樋口ミハル	5女	昭8	Hon
樋口英一	6男	昭20	Tok
樋口秀則	5男	昭31	Hon
Z. 上湯(湯川内)			
樋口キノ	1女	明9	Hon
原 チヨ	2女	明22	Hon
原 栄治	3男	明31	Tok
原 シモ	4女	明39	Tok
原 保雄	5男	明44	Tok
原 ミセ	2女	大5	Hon
原ミノル	6女	大8	Hon
原 直造	7男	大15	Tok
原 ツル	7女	昭3	Hon
原 弥作	4男	昭8	Tok
原 洋子	6女	昭19	Tok
原 欽治	6男	昭29	Hon
原 義郎	3男	昭33	Tok

(以上27地点, 274人)

3.3 口頭発表

1969（昭和44）年5月24日の国語学会（京都毎日ホール）において、40項目中9項目の調査結果について、「語の盛衰」という題目のもとに、共同研究発表を行なった。記録によって一部引用したい。「……最後に、標題に掲げた〈語の盛衰〉ということ、その中でもっとも典型的と思われる語の誕生の姿、語の死滅の姿というものを、お手元の資料の中に示した図表によって示したいと思います。すなわち、誕生のありさまは〈麦粒腫〉のメボイタとか〈肩車〉のカッカリドンチャンにおいて認められ、死滅のありさまは〈螻蛄〉のゲンタローとかセンチロー、あるいは〈肩車〉のチッカラガツに認められます……」。

3.4. グロットグラム

その後の研究で示される地域差×年齢差の表（グロットグラム）は、年齢差を示す縦軸において、上を老年齢、下を若年齢とする例が多い。年上とか高年齢層ということば、また系図や年表で上を古い時代、下を新しい時代とすることなどから当然ともいえるがここでは、新しい表現が古い言語層の上に被さるという言語地層学の比喩にならって、老年齢を下に、若年齢を上位置づけている。どちらでもいいことであるが、誤解のないようにしてほしい。

なお、グロットグラムなる呼称は、1969（昭44）年3月27日の朝、われわれが宿泊していた糸魚川市新町の山川旅館で、資料整理を行っていた際にはじめてわれわれの口のにぼったことを思い出す。口火を切ったのは高田誠であったと記憶する。グロータースが調査の中間的資料を持って糸魚川市のロータリークラブで講演するために、みんなで大きな紙に資料を転記している時のことであった。

3.5. 調査の夜

雑誌『言語生活』213号（1969年6月号）の「録音機」欄に、同年3月20日の旅館での夜の風景の一端が記録文字化されている。佐藤亮一の手になるもの

であるが、調査時の雰囲気を知るよすがとなろう。

参 考 文 献

1. 宮城県角田女子高等学校郵便友の会『宮城県伊具群における方言の分布と生活言語上の地域的変動の状況について』(1960, 私家版)
2. 伊東市史編纂委員会『伊東市史 資料編』(1962, 伊東市教育委員会)
3. 永瀬治郎「方言から標準語へ」(『月刊言語』7月号, 1974)
4. 柴田武「kwaの分布と変化」(『ことば・なごや』25, 1961)
5. 柴田武『言語地理学の方法』(1969, 筑摩書房)
6. 柴田武「言語地理学資料と国語史資料との接点」(『国語学』76, 1969)
7. 柴田武「方言の古い層と新しい層」(『言語生活』83, 1958)
8. 井上史雄「ガ行子音の分布と歴史」(『国語学』86, 1971)
9. 柴田武「オタマジャクシの言語地理学」(『国語学』53, 1963)
10. 徳川宗賢「カマキリの方言分布を解釈する」(『ことばの研究』1, 1959)
11. 徳川宗賢「ヒキガエル方言の歴史(下)」(『学習院大学国語国文学会誌』15, 1972)
12. W.A.Grootaers「Etymology through maps」(Folklore Studies XV 11, 1958)
グロータース『日本の方言地理学のために』(1976, 平凡社)に再録

(以上、徳川宗賢執筆)

地域差と場面差

——熊本県球磨川沿岸地域における調査から——

1. 目的と調査の概要

1.1 目 的

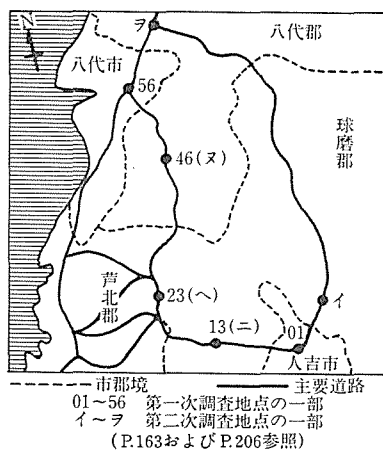
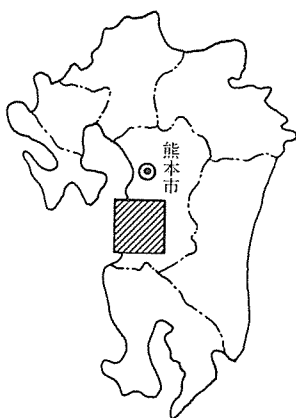
『日本言語地図』は、「被調査者が、くつろいだとき、親しい人たち（家族たちや幼なじみなど）と話し合うとき使うことば」を調査の対象としたものである（『日本言語地図解説—方法—』132 ページ）。しかし、人は、話し相手、話す場、話すときの心理状態等によって、意識的、または無意識的に表現形式を変える。すなわち、広い意味での「場面」によることばの使い分けを行なっている。

この研究は、特定地域の老年層を対象として、『日本言語地図』と同一の場面、および、それより上位の（あらたまった）各場面におけることばの地理的分布を調査し、場面を変えると分布がどのように変わるか、そして、上位場面における分布が下位場面（『日本言語地図』で対象とした場面）の分布の解釈とどのように関連するかについて考察し、対象地域における方言の地理的変化の様相を重層的に把握することを目的とした。

1.2 調査地域

調査は大きく二つの部分に分かれる。第一次調査（語彙項目中心）では、熊本県八代市から同県人吉市に至る約 50 km の球磨川沿岸地域を直線状にとり、56 の集落（選定地域の全集落に近い）で、各 1 名の老年層被調査者を調査した。

第二次調査（表現法中心）では、第一次調査地域を含んで、その両端を少し長めにとり、八代郡宮原町から球磨郡相良村に至る地域で 12 の集落を選び、各



集落で複数の被調査者について調査を行なった。(調査地域略図参照)

この地域は、肥筑方言区域の南端で、薩隅方言、および豊日方言との接触地域に当たり、そのためか、『日本言語地図』を見ると、複数の表現形式が錯綜分布し、同一地点における併用も多い。この地域を調査の対象として選定した理由は、このような複数の表現形式が、場面差と地域差の両方を伴って分布することがありうるのではないかと考えたためである。具体的には、たとえば、A地域で下位場面（くつろいだ場面）に使われる形式aが、隣接するB地域では、より上位の場面（あらたまった場面）で使われるような事例を予想した。

以下、第一次調査と第二次調査のそれぞれについて記す。

2. 第一次調査(語彙編)

2.1 調査の方法・内容

2.1.1 調査項目・調査対象場面

調査項目は『日本言語地図』（参考文献1）の項目を中心に35項目。一部、熊本方言研究会編『熊本県言語地図集』（参考文献2）から項目を採った。項目の具体的内容および質問文は次のとおりである（以下、括弧内に「絵」と記したものは、絵を示して質問した項目であるが、絵の内容を掲げることは省略する）。

1. きのこと（茸） まつたけやしいたけなど、こういうものをひっくるめて naba と言いますか。kinoko と言いますか（絵）。
2. とげ（刺） いばらやさんしょうの木などの枝についているとがった針のようなものを ige と言いますか。toge と言いますか（絵）。
3. とげ（裂片） よく削っていない板をこすったときに何か手に刺さることがあります。「何が刺さった」と言いますか。
4. 寒い 冬、気温が下がって体がふるえるようなとき、「今日はどんなだ」と言いますか。
5. 暑い 夏、汗がダラダラ出るようなとき、「今日はどんなだ」と言いますか。
6. いくら 店に買い物に行って品物の値段をたずねるとき、do{iko,nambo, ikura のうち、どのことばを使いますか。
7. ください 人から煙草（または「飴」）を1本（1個）もらおうとすると、き、「たばこをヤレ」と言いますか。「たばこをクレ」と言いますか。

8. やる（与える） 人に煙草（または「飴」）を1本（1個）与えるとき、
「これをヤル」と言いますか。「これをクルル」と言いますか。
9. 頭 風邪をひいて、ここ（指さす）が痛むとき、「goraノイタカ」と言いますか。「bintaノイタカ」と言いますか。ほかの言い方をしますか。
10. つむじ（旋毛） 頭の上に毛がうずになっている所があります。このことを何と言いますか（絵）。
11. ものもらい（麦粒腫） まぶたのへりにぶつっとできる小さなできものです。うみをもって赤くはれると、むずむずしてかゆいのですが、間もなく治ります（絵）。
12. ほほ（頬） このへん（実物）の柔らかい所のことを何と言いますか。
13. くちびる（唇） ここ（実物）のことを tsuba と言いますか。kutʃibiru と言いますか。
14. つば（唾） 切手をはるとき、べろっとなめることがあります。そのときつける水のようなもの（指先に少しつけてみせて）、これを tsuzu と言いますか。tsuba と言いますか。
15. はぐき（歯茎） ここ（実物）を何と言いますか。歯の生えぎわの肉の部分です。
16. かかと（踵） 足のこの辺のことを何と言いますか（絵）。
17. 灸をすえる こういうふうにすることを、どうすると言いますか。もぐさの小さな固まりに火をつけて皮膚にのせます（絵）〈この項目は「灸」と「すえる」の二か所を考察の対象とした〉。
18. 土間 家の中の床の張っていない所を niwa と言いますか。do:zi と言いますか。doma と言いますか。
19. 前庭 家の前の仕事場で、脱穀したり、豆を干したりする所のことを mae と言いますか。niwa と言いますか。
20. 昼食 昼の食事のことを何と言いますか。
21. 食べたい たとえば、「天ぷらが食べたい」と言うとき、「テンピラノ kʷo:gotaru」と言いますか。それともほかの言い方をしますか。
22. 晩酌 夜、ごはんを食べるときに酒を飲むことを何と言いますか。

23. 煮る 大根をなべに入れて、みそやしょうゆを入れて火にかける。こうすることを大根を niru と言いますか。大根を taku と言いますか。
24. おたまじゃくし（蝌蚪） これを何と言いますか。夏の初め、水の中に群がって泳いでいます。大きくなるにつれて手足が生えてきます（絵）。
25. 蛙〔前項おたまじゃくしの方言形〕が大きくなるとこうなりますが、これを何と言いますか（絵）。
26. ひきがえる（蟄） これを何と言いますか。体が大きくてのろのろしています。背中は茶色、腹は白くて黒い紋があります（絵）。
27. かたつむり（蝸牛） これを何と言いますか。からを背負ってのろのろはって歩きます（絵）。
28. なめくじ（蛞蝓） これを何と言いますか。〔前項かたつむりの方言形〕に似ていますが、からは背負っていません（絵）。
29. まむし（蝮） 毒をもっている蛇です。色は茶色で銭形の紋があります。この蛇を hirakutʃi と言いますか。mamutʃi と言いますか（絵）。
30. はえ（蠅） 夏たくさん出て食物にたかる虫です。これを hja: と言いますか。hai と言いますか。hae と言いますか（絵）。
31. くも（蜘蛛） しりから糸を出して網を張る虫です。何と言いますか（絵）。
32. とんぼ（蜻蛉） いろいろ種類がありますが、こういう虫をひっくるめて jembo と言いますか。tombo と言いますか（絵）。
33. こおろぎ（蟋蟀） この虫を何と言いますか。色は濃い茶色で、夏から秋にかけて鳴きます（絵）。
34. かたぐるま（肩車） こういうふうには、こどもを首にまたがらせて肩にのせることを何と言いますか（絵）。
35. めんこ（面子） 男の子の遊びですが、厚紙で作った、これぐらい（手で示す）の大きさのまる形または四角のもので絵がかいてあり、床や地面にたたきつけて遊びます。これを何と言いますか（絵）。

以上の 35 項目のうち、本稿では後に掲げる 18 項目についての分析結果を記す（紙幅の都合で、代表的な項目しか採り上げることができなかった。割愛した項目で興味深い結果が得られたものについては、別に報告する予定である）。

次に、調査対象場面としては、原則として、どの項目についても次の5場面における使用語形をたずねた。まず、文体的に最も下位の語形が出ると予想される場面として場面Aを設定し、次に最も上位の場面として場面Eを設定、中間段階として場面B・C・Dを設定した。ABCは同じ集落内、Dは同じ県内の中心地、Eは全国の中心地であり、また、ABはくつろいだ場面、CDEはあらたまった場面として設定した。

- A 同年配の土地の人とくつろいで話すとき。
- B 土地の若い人とくつろいで話すとき。
- C 村の会合の席などであらたまって話すとき。
- D 熊本で初対面の人と話すとき。
- E 東京で初対面の人と話すとき。

質問の順序は、まず、質問文により語形を求め（その際に共通語形のみが回答されたときには、予備調査で得た俚言形を提示してその使用の有無をたずねる）、ついでABCDEの順に、それぞれの場面における使用語形の有無をたずねた。ある項目について5場面の使用状況を質問してから次の項目へ進んだ。

なお、項目6・7・8では、設定場面を次のように変えた。

項目6 「いくら」（値段をたずねるとき）

- A 店番が同年配の土地の人の場合。 B 店番が土地の若い人の場合。
- C 役場で抄本などをもらって手数料をたずねる場合。 D 熊本で買い物をする場合。 E 東京で買い物をする場合。

項目7 「ください」（括弧内は項目8「やる《与える》」）

- A 同年配の土地の人からもらう（同年配の土地の人に与える）場合。
- B 土地の若い人からもらう（～に与える）場合。 C 土地の目上の人からもらう（土地の村長《市長》さんに与える）場合。 D 熊本で初対面の人からもらう（～に与える）場合。 E 東京で初対面の人からもらう（～に与える）場合。

2.1.2 調査時期・調査者

予備調査を1971（昭和46）年11月、本調査を1972（昭和47）年4月に実施した。本調査における調査者は、次の4名であった（所属は調査当時）。徳川宗賢（第一研究部方言言語研究室長）、本堂寛（同室主任研究官）、佐藤亮一（同室研究員）、高田誠（同）。

2.1.3 調査地域・被調査者

別表参照。調査地域は、八代市と人吉市の中間に位置する球磨郡球磨村と八代郡坂本村が大部分を占め、一部に芦北郡芦北町を含む。往時の交通路は、人吉・八代間の河川交通のほか、球磨村神瀬藪（地点番号20）付近から芦北町佐敷へ通ずる街道が多用されたらしいが、現在は調査地域沿いの鉄道および道路の利用が著しい。調査地域は相良・熊本両藩にまたがり、また、調査地域の南寄りの部分は、隣接する鹿児島・宮崎両方言の影響を強く受けている。調査地域のうち、文化的中心地とみられる地点は、人吉・八代両市のほか、球磨村一勝地柳詰（地点番号13）付近、同村神瀬（同22・23付近）、坂本村坂本（同46）などである。

被調査者は、それぞれの地点について、その土地で生まれ育った老年層の男性1名。ただし、適格者が得られず、50歳未満の者や、女性を調査した地点もある。

調査地点・被調査者一覧

地点番号	調査地点	被調査者	生年	調査者	地点番号	調査地点	被調査者	生年	調査者
8302					11 E 5654	〃-渡-馬場	馬場 真	大 2	Sat
01 E 6995	人-下林町-前村	前村敏行	明 43	Sat	12 E 4692	〃-〃-中国	中国定通	大 3	Sat
02 E 6991	〃-中神町-城本	元田 進	明 36	Sat	13 W 5549	〃-一勝地-柳詰	柳詰佐太郎	明 35	Tak
03 W 6854	〃-〃-大柿	大柿農田信	明 41	Sat	14 W 5508	〃-〃-池下	東 磨	大 6	Tak
04 E 6832	球-渡-地下	井口鶴雄	大 6	Hon	15 W 4573	〃-〃-淋	淋 弘市	明 22	Hon
05 E 6820	〃-〃-今村	内布敏之	明 39	Hon	16 E 4552	〃-〃-向淋	淋 隆義	明 37	Tok
06 E 6801	〃-〃-峯	山口好松	明 39	Tok	17 W 4434	〃-〃-大坂間	水本市太郎	大 5	Hon
07 E 5799	〃-〃-島田	宮本政則	大 10	Tok	18 W 3455	芦-告-鎌瀬	鎌倉二義	明 32	Tak
08 E 5777	〃-〃-小川	宮原尚兵	明 35	Tok	19 E 3423	球-神瀬-大瀬	大瀬政喜	明 34	Tak
09 E 5786	〃-〃-茶屋	東 勝喜	明 42	Hon	20 E 2441	〃-〃-藪	藪 定義	明 37	Hon
10 W 5688	〃-三が浦-那良	那良改蔵	明 35	Tak	21 E 2404	〃-〃-堤	大童武雄	明 35	Hon

地点番号	調査地点	被調査者	性別	生年	調査者	地点番号	調査地点	被調査者	性別	生年	調査者
22 E 1447	〃-〃-木屋角	上原高喜	大	6	Sat	39 E 5548	〃-葉木	* 藤田キノ	明	26	Tok
23 E 1446	〃-〃-神瀬	刈尾猪熊	明	32	Hon	40 E 5610	〃-〃-佐瀬野	杖先国政	明	28	Tok
24 W 0492	芦-蘆瀬-蘆瀬	鶴尾 均	大	3	Tok	41 W 4578	〃-荒瀬-荒瀬	後藤定雄	明	34	Tak
25 E 0432	球-神瀬-伊高瀬	伊高袈男	大	13	Sat	42 E 4548	〃-葉木-大門	荒川 寛	明	40	Sat
	7392					43 E 4640	〃-〃-藤本	有田一彦	大	3	Sat
26 W 9481	芦-蘆瀬-上蔭	山本健太	明	33	Tok	44 W 4621	〃-荒瀬-合志野	本村安次郎	明	43	Tak
27 E 9463	球-神瀬-上蔭	上蔭長蔵	大	8	Sat	45 E 4604	〃-坂本-松崎	西 高喜	大	7	Hon
28 W 9427	芦-海路-平谷	木村広見	大	11	Hon	46 E 3676	〃-〃-坂本	坂田 隆	明	43	Hon
29 E 9502	球-神瀬-多武除	* 多武ヤス子	大	3	Tak	47 W 3654	〃-中谷-下代瀬	宮坂義徳	明	45	Tok
30 W 8576	芦-海路-高田辺	淵上長寿	明	43	Tak	48 W 3621	〃-〃-瀬高	遠山清二	大	7	Tok
31 E 8600	球-神瀬-楮木	犬童袈男	大	3	Hon	49 E 3612	〃-〃-生名子	久保田大吉	大	2	Hon
32 W 7671	坂-川岳-瀬戸石	富崎奎太郎	明	39	Tak	50 E 2656	〃-西部-川口	山田徳丸	明	28	Hon
33 E 7642	坂-中津道-中津道	小松末喜	明	36	Hon	51 E 2631	〃-〃-横石	山下竹次	明	22	Tak
34 E 6695	〃-〃-三坂	石坂慶助	明	34	Sat	52 E 2519	〃-〃-段	山下千八	明	33	Tak
35 W 6694	〃-川岳-燈瀬	宮坂八郎	明	33	Tok	53 W 1585	〃-〃-下今泉	坂田誠造	大	5	Sat
36 E 6673	〃-〃-下総瀬	吉村一馬	大	4	Sat	54 E 1553	〃-〃-古田	杉永安明	大	6	Sat
37 W 5589	〃-川岳-与奈久	中川豊信	明	32	Tok	55 E 0565	八-宮地町	畑中富次郎	明	40	Tok
38 W 5537	〃-〃-破木	三島季信	明	40	Sat	56 E 0516	八-古麓町	埴崎卯作	明	23	Tok

地点番号：2桁-地点通し番号，E-川の東岸・W-川の西岸，8桁-方言調査基礎図システムによる番号。ただし01～25は上4桁がすべて8302であり，26～56は上4桁が7392である。

調査地点：人-人吉市，球-球磨村，坂-坂本村，芦-芦北町，八-八代市

被調査者の生年：明-明治，大-大正 *は女性を表わす。

調査者：Tok-徳川宗賢，Hon-本堂寛，Sat-佐藤亮一，Tak-高田誠

2.2 結果と考察

調査結果は項目ごとにグロットグラム（横軸に場面，縦軸に地点）の形に整理し，その分布を，次のいくつかのパターンに分類した。

I 場面差が顕著に現れ，地域差が目立たないもの。

<I a> 下位場面（くつろいだ場面）に俚言形，上位場面（あらたまった場面）に共通語形が多いもの。

<I b> 上位場面に地方共通語形（西日本共通語形）が多いもの。

<I c> 下位場面で用いた俚言形1を，上位場面では俚語形2（より上品な表現）に言いかえる例が多く見られるもの。

＜I d＞ 下位場面で用いた共通語形 1 を、上位場面では共通語形 2（より待遇価の高い表現）に言いかえる例が多く見られるもの。

II 地域差が顕著に現れ、場面差が目立たないもの。

＜II a＞ 全場面で俚言形 1 を用いる地域と、全場面で俚言形 2 を用いる地域に分かれるもの。

＜II b＞ 全場面で共通語形を用いる地域と、全場面で俚言形を用いる地域に分かれるもの。

III 場面差と地域差の両方が認められるもの。

＜III a＞ 下位場面に俚言形、上位場面に共通語形が多く、主として、下位場面の俚言形に地域差が認められるもの。

＜III b＞ 下位場面に俚言形、上位場面に共通語形が多く、俚言形または共通語形の場面分布に地域差が認められるもの。

＜III c＞ 全場面、全地域とも俚言形で占められ、俚言形の場面分布に地域差が認められるもの。すなわち、下位場面で用いた俚言形 1 を、上位場面では、隣接地域で広く用いる俚言形 2 に言いかえる地域があるもの。

以下、上記のパターン別に、代表的な項目をグロットグラムならびに帯グラフの形で示し、それぞれの特徴について記す。

なお、帯グラフは地域差を捨象し、場面差のみを示したものである。このグラフは、場面ごとに、出現語形の総数を分母とし、各語形の出現度数を分子として、それぞれの語形の出現率（使用率）をパーセンテージで示したものである。その際に、「稀」「古」「新」などの付加情報は一切無視してカウントした。たとえば、次に掲げる「刺」の場合次ページに示すような表にもとづいて帯グラフを作成した。

①とげ（刺）——項目番号（2）・パターン＜I a＞——

●場面差が明瞭である。場面 A ではすべての地点の被調査者が俚言形のイゲを答えている（地点番号 47 でイゲとトゲの両方を答えたので、場面 A における

	A	B	C	D	E
イゲ	56 98	54 92	50 82	33 51	25 40
トゲ	1 2	5 8	11 18	32 49	37 59
アレ	0 0	0 0	0 0	0 0	1 2
計	57 100	59 100	61 100	65 100	63 100



パーセントは小数点以下を四捨五

* 入して示してあるので、合計が必ずしも100にならない。

イゲの使用率は98%となる)が、上位場面になるほど、少しずつ共通語形トゲの使用が増える。ただし、上位場面における共通語化の程度はそれほど大きくなく、最上位場面のEでも、共通語形の使用率は59%にとどまる。なお、全場面イゲでトゲを全く答えなかった者(例、地点番号2)が56人(56地点)中18人(32%)見られる。

- 各場面における共通語形トゲの使用率は、Aが2%, Bが8%, Cが18%, Dが49%, Eが59%であり、CとDとの差が31%で最も大きい。すなわち、帯グラフにも見られるように、場面差については、 $A B C / D E$ (地域内と地域外)の傾向が顕著である。
- 地域差はほとんど見られないが、上位場面(とくに場面D)において、人吉寄りの地域(地点番号1~11付近)および八代寄りの地域(地点番号43~54付近)では共通語形を比較的多く使用し、その中間の地域では共通語形の使用がやや少ないという傾向がわずかながら認められる(中間地域では、共通語形のトゲに「稀に使用」と注が付いたものがいくつかある点も、この傾向を裏づける)。
- 『日本言語地図』との関係。同書では九州北部と西部(福岡・佐賀・長崎・熊本など)にイゲが、九州南部と東部(鹿児島・宮崎南部・大分南部など)にクイが分布する。調査地域(熊本南部)はイゲ一色であり、トゲは熊本県北部を含む九州北部地域に、イゲに混じってわずかに散在するにすぎない。グロットグラムの場面Aにおける分布は、『日本言語地図』の熊本南部の分布と一致する。グロットグラムの上位場面における分布状況と『日本言語地図』の九州におけるトゲの分布状況を総合すると、共通語形トゲは九州北部の上位場面にまず侵入し(その一部が九州北部の下位場面、すなわち『日本言語

表1 とげ(刺)

	A	B	C	D	E
1	●			(●)	
2	●	●	●	●	●
3	●	●	●		
4	●	●	●		
5	●		●		
6	●	●	●	●	●
7	●	●	(●)		
8	●	●	●	●	●
9	●	●	●		
10	●	●	●	●	●
11	●	●	●		
12	●	●	●	●	●
13	●	●	●	●	▲
14	●	●	●	(●)	(●)
15	●	●	●	●	●
16	●	●	●	●	●
17	●	●	●	●(I)	●(I)
18	●	●	●	●	●
19	●	●			
20	●	●	●		
21	●	●	●	●	●(I)
22	●	●(I)	●(I)	●(I)	
23	●	●	●		
24	●	●	●	●	●
25	●	●	●	●	
26	●	●	●	●	●
27	●	●	●	●	●
28	●	●	●	●	
29	●	●	●		
30	●	●	●	●	●
31	●	●			
32	●	●	●	●	●
33	●	●	●	●(I)	●(I)
34	●	●	●	●	●
35	●	●	●	●	
36	●	●	●	●	●
37	●	●	●(I)		
38	●	●	●		
39	●	●	●	●	●
40	●	●	●	●	●
41	●	●	●		
42	●	●	●	●	●
43	●	●	●		
44	●	●	●		
45	●	●			
46	●	●	●		
47	(●)	(●)	(●)	(●)	
48	●	●	●		
49	●	●	●	●	●
50	●	●			
51	●	●	●	●	●
52	●	●	●		
53	●	●			
54	●	●	●		
55	●	●	●	●	
56	●	●	●	●	●

凡 例

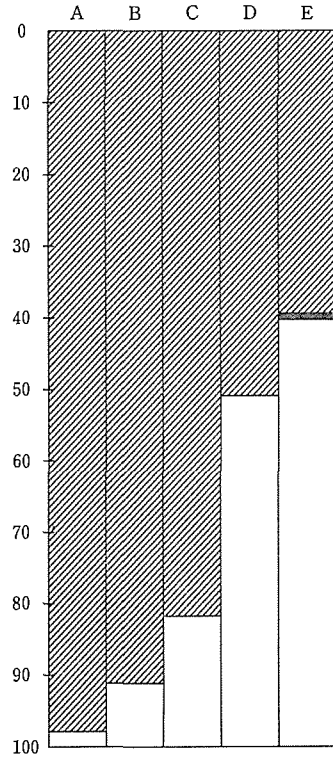
● イゲ

▲ アレ

| トゲ

() 稀

< > 古



イゲ

アレ

トゲ

地図』の場面ににじみ出ているのであろう), さらに九州南部の上位場面に侵入しつつあるものと解釈される。グロットグラムでは上位場面でもトゲの勢力がそれほど大きくないが, この事実と, 『日本言語地図』の九州北部におけるトゲの勢力の弱さは並行的関係にあると言えよう。

②くも(蜘蛛) —— 項目番号 (31)・パターン〈I a〉 ——

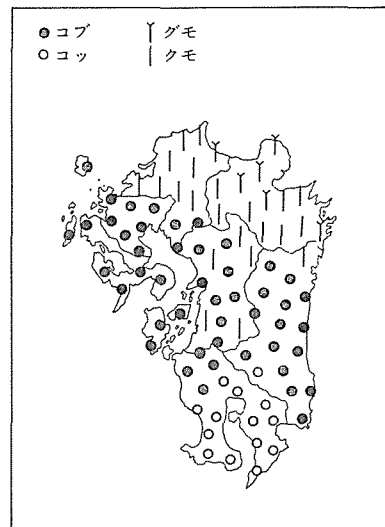
- 場面差が顕著である。①の「刺」と同様に, 場面Aでは俚言形コブが大部分であり, 上位場面になるほど共通語形クモの使用が増加する。ただし共通語化の程度は①よりも進んでおり, 共通語形の使用率は, 場面Aが14%, Bが33%, Cが49%, Dが77%, Eが80%で, どの場面についても①より数値が大きい。全場面で俚言形しか答えな

かった者は7人(地点番号2・18・32・34・41・42・51)にすぎない。

- ①と同様にCとDとの間の場面差が最も大きい(差は28%)。しかし, A B間の差(19%), B C間の差(16%)もかなり大きく, この点は①の項目と若干異なる。D E間の差はほとんど認められない。

- 地域差はどの場面についてもほとんど認められない。場面Aで八代寄りの地域(地点番号35~56付近)に共通語形がやや多いようにも見えるが顕著なものではない。

図1 くも(蜘蛛) 『日本言語地図』
233図の一部(略図)



- 『日本言語地図』との関係。九州では福岡・大分両県がクモ(一部にグモ), それ以外の各県がコブ(鹿児島はコブの変化形のコッ)であるが, 熊本県各地では, 調査地域(熊本南部)を含めてコブの中にクモが多くは併用で散在している(略図参照)。すなわち, 『日本言語地図』でも場面Aのクモの侵入が認められるわけであり, グロットグラムの場面Aの分布と一致する。グロッ

表2 くも(蜘蛛)

	A	B	C	D	E
1	(●)				
2	●	●	●	●	●
3	●	●	●		
4	●	●	●		
5	●				
6	●	●	●		
7	● ()	● ()			
8	●	● ()			
9	●	●			
10	●	●	●		
11	●	●	●		
12	●	●	●		
13	●				
14	●	●	●	●	●
15	●	●			
16	●				
17	●	●			
18	●	●	●	●	●
19	●	●			
20	●				
21	●	●			
22	●	●	●	●	●
23	●	●			
24	●	●			
25	●		●		
26	●	●	●		
27	●	●	●	●	
28	●	●			
29	●	●			
30	●	●	●		
31	●				
32	●	●	●	●	●
33	●	●	●		
34	●	●	●	●	●
35	《●》	(●)			
36	●		●		
37	<●> ()	(●)			
38	●	●	●		
39	●	●	●	●	●
40	<●> ()	● ()	● ()	● ()	● ()
41	●	●	●	●	●
42	●	●	●	●	●
43	●		●		
44	●				
45	●	●	●		
46	●	●	●		
47	● ()	● ()	(●)		
48	● ()	● ()			
49	●	●	●	(●)	
50	●	●			
51	●	●	●	●	●
52	●	●			
53	●	●			
54	●	●	●		
55	●	●	(●)	● ()	● ()
56	<●> ()				()

凡 例

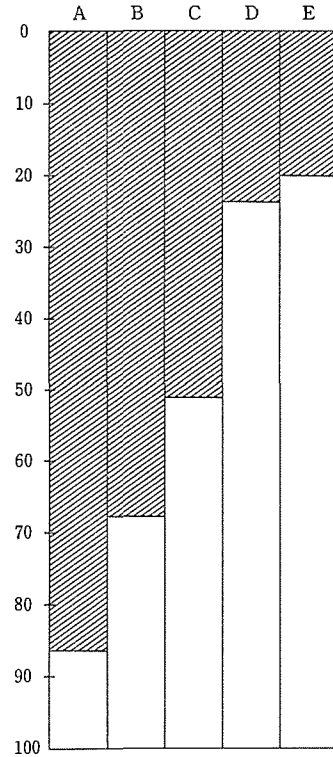
● コブ

| クモ

() 稀

< > 古

[] 新



コブ

クモ

トグラムで上位場面における共通語形の使用率が「刺」の項目より大きい点についても、『日本言語地図』の九州北部の分布と並行的関係にあると言える。

③にる(大根を煮る) — 項目番号(23)・
パターン〈I b〉 —

- 一定の場面差が認められ、上位場面になるほどタクの使用率が増加し、ニルの使用率が減少する。すなわち、上位場面では非共通語的表現(大根をタク)が多く、下位場面では共通語的表現(大根をニル)が多いという、常識とは一見逆の様相を示す。

- 『日本言語地図』により、この項目の全国的分布を見ると、タクは近畿を中心に中国・四国を経て、さらに九州北部に広がっている(略図参照)。この分

布から、熊本県南部は、一昔前にはニルの分布地域であったが、現在は、北から関西方言形タクの侵入を受けつつあるものと推定される。調査地域において、タクが上位場面に、より多く使われるという事実は、この地域の人々が、関西方言に言語的なあこがれ(prestige)を感じていることを示すものであろう。すなわち、この地域においては「大根をニル」が方言的表現であり、「大根をタク」は地方共通語(西日本共通語)的な性格をもつものと考えられる。

- 各場面におけるタクの使用率は、Aが22%、Bが23%、Cが34%、Dが47%、Eが48%である。場面間の差はなだらかであるが、A B / C / D Eの傾向が認められる。
- 地域差はほとんど認められない。調査地域の間中部(地点番号23~28付近)でタクの勢力が弱いように見えるが地域差とよべるほどのものではない。
- 「その他」としたものの内容(地点番号47のB)は調査もれである。

図2 煮る 『日本言語地図』
58図の一部(略図)

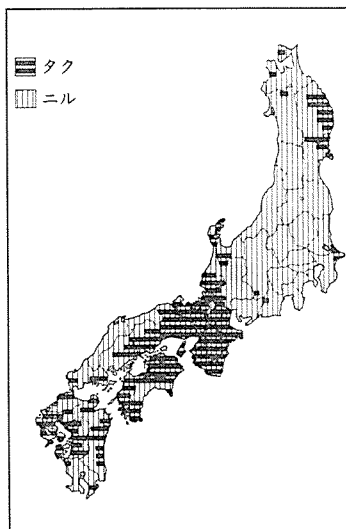


表3 煮る(大根を)

	A	B	C	D	E
1	○	○	○	○	○
2	○	○	○		
3				○	○
4	○	○	○	○	○
5			○	○	○
6			○	○	○
7					
8			○	○	○
9					○
10	○ (l)	○ (l)	○ (l)	○	○
11					
12	⟨○○⟩				
13		○	○	○	○
14			○	○	○
15				○	○
16			○	○	○
17					
18					
19			○	○	○
20	○ (l)	○	○	○	○
21		○			
22				○	○
23					
24					
25					
26					
27					
28					
29				○	○
30				○	○
31			○	○	○
32					
33			○	○	○
34				○	○
35	⟨○○⟩				
36					
37		○ (l)	○ (l)	○	○
38		○		○	○
39					
40	○ (l) (l)	○	○	○	○
41				○ (l)	○ (l)
42				○	○
43	○	○	○	○	
44					
45	○				
46					
47	○ <l>	*	○ (l)	○ (l)	○ (l)
48					
49					
50					
51	○	○		○	○
52				○	○
53	○	○	○	○	○
54	○	○	○		
55	○	○	○		
56			○		

凡 例

○ タク

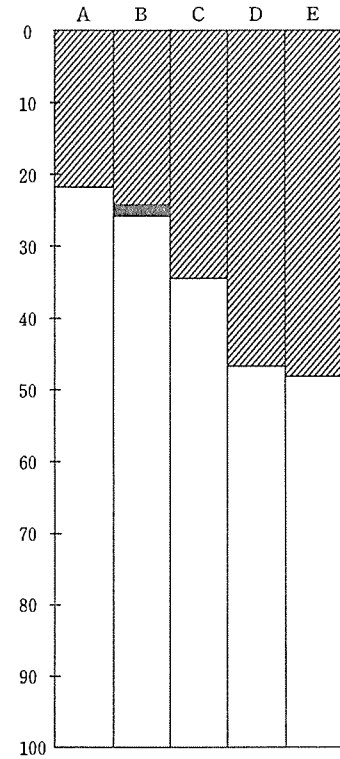
| ニル

* その他

() 稀

< > 古

[] 新



タク

その他

ニル

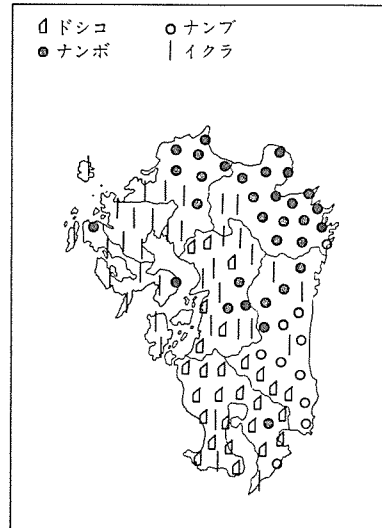
④いくら(値段をたずねるとき)——項目

番号(6)・パターン〈I b〉——

図3 いくら(値段をたずねるとき)
『日本言語地図』50図の一部(略図)

- 前項と同様に、上位場面になるほど非共通語形のナンボが増加し、共通語形のイクラが減少する。ドシコは主として場面Aで見られ、場面B以降ではほとんど使われない(なお、この項目では設定場면을若干変更して調査した。162ページ参照)。

- 『日本言語地図』によれば、ナンボは北海道・東北のほか、近畿以西から九州東部(福岡・大分・宮崎など)にかけて分布し、さらに熊本南部に侵入している。すなわち、西日本におけるナンボの分



布模様は、前項のタクに類似する。ドシコは主として鹿児島県に分布し、熊本県にも散在する(略図参照)。この全国的分布、ならびにグロットグラムにおける場面分布から、ナンボは前項のタクと同様に、地方共通語(西日本共通語)的な性格をもつものと考えられる。熊本県にはかつてはドシコが広く分布していたが、まず九州北西部(佐賀・長崎)からイクラが侵入し、次いで九州東部からナンボが侵入した結果、現在の錯綜分布に至ったものであろう。ドシコは場面Aでも大部分が「稀」または「古」の注記つきであり、衰退寸前と見られる。

- 場面間の差は、ナンボの使用率についてみると、Aが4%, Bが3%, Cが8%, Dが35%, Eが44%で、C D間の差が比較的大きい。イクラの使用率は、Aが73%, Bが93%, Cが89%, Dが65%, Eが56%で、A B間およびC D間の差が比較的大きい。全体的には、帯グラフにも見られるようにA/B C/D Eの傾向が認められる。
- 各場面を通じて、地域差はほとんど認められない。

表4 いくら

	A	B	C	D	E
1					
2					
3				●	●
4	(●)			●	●
5					●
6	<d>			● (l)	● (l)
7					
8					
9	<d>	<d>	<d>	(●)	(●)
10					
11					
12				●	●
13			(●)	●	●
14	(d)				
15				●	●
16			●	●	●
17	(d)				●
18					
19				●	●
20	(●)			●	●
21	(d)		(●)	(●)	● (l)
22			(●)	●	●
23	d				
24					
25					
26					
27					
28					●
29	d (l)				
30	(d)				●
31	<d>				● (l)
32	(d)				
33					● (l)
34	(●)	(●)	~	●	●
35					
36	<d>				
37				● (l)	● (l)
38	<d>			●	●
39				●	●
40			(●)	(●)	(●)
41				(●)	(●)
42					
43				●	●
44	<d>	●		●	●
45	d				
46	d (l)	d			
47					
48	<d>				
49					
50				●	●
51	d			●	
52					(●)
53					●
54					
55				● (l)	● (l)
56				● (l)	● (l)

凡 例

d ドシコ

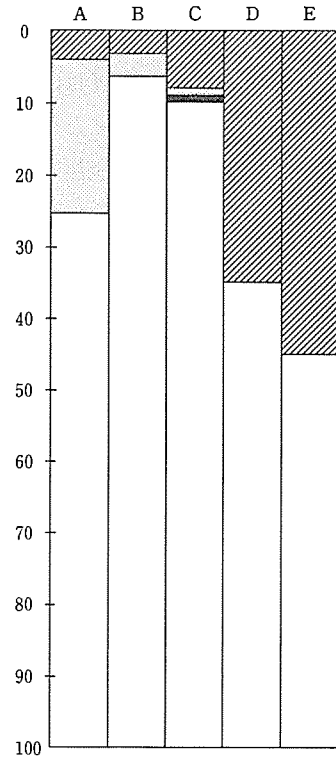
● ナンボ

l イクラ

~ 無回答

() 稀

< > 古



ナンボ

ドシコ

無回答

イクラ

⑤ものもらい(麦粒腫) — 項目番号 (11)・パターン〈I c〉 —

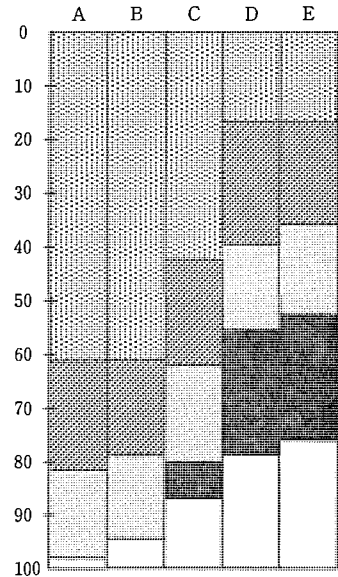
- 下位場面にはインノクソ, 上位場面にはモノモライとオヒメサンが比較的多く見られる。
- 下位場面の俚言形インノクソを上位場面でオヒメサンと言いかえた地点がかなり見られる。これはインノクソ(犬の糞)という語感を忌んで、これを対蹠的な語感をもつ別の俚言形(非共通語形)と言いかえたものであろう。なお、場面Aでインノクソとオヒメサンの両形を答えた地点がかなりあり、その場合、オヒメサンを「新」(より新しい形式)とした地点が多いことが注目される。このことから、インノクソをオヒメサンと言いかえる傾向は、日常の方言的場面(親しい人たちとの会話)で新しく生まれたものと考えられる。
- 共通語形のモノモライは、上位場面でもそれほど多く用いられてはいない。おそらく、モノモライという語形を知らない人が、この地域で多いのであろう。このことが、上位場面でオヒメサンという一種の俚言形を使わせる要因の一つになっていると考えられる。上位場面でオデキというモノモライの上位概念の語形を答えたり(地点番号9・17・20・21・33),「病状を具体的に説明する」と言ったり(地点番号22・38・53),全場面をインノクソやインノメで押し通したり(地点番号2・6・13・14・15・34・46)するのも、共通語形を知らないための、言わば苦しまぎれの回答であろう。上位場面が無回答になる(地点番号7・16・35・40・41)のも同様の事情によるものと思われる。
- 各語形の地域差は目立たないが、オヒメサンは八代寄りの地域(地点番号47~56)に比較的多く現れる。
- 場面間の差は、語形インノクソについて見ると、A B / C / D Eの傾向が認められる。
- 『日本言語地図』との関係。『日本言語地図』では、モノモライは福岡の一部にわずかに分布するほかは、九州地方にはほとんど見られない。熊本県では、インノクソとオヒメサンが多くは併用で分布するほか、南部にメガサとメネブトが点在する。これらの分布は、いずれも調査地域におけるグロットグラムの分布と並行的関係にあると認められる。なお、メガサとメネブトは、『日

表5 ものもらい(麦粒腫)

	A	B	C	D	E
1	<◎> △	△	△	△	△
2	◎	◎	◎	◎	◎
3	◎	◎	□	□	□
4	◎ (□)	◎	◎	◎	◎
5	<◎X□> ☒	☒	☒	☒	☒
6	◎	◎	◎	◎	◎
7	<◎X□>	□	(□)	〃	〃
8	◎ (□)	□	□	□	□
9	◎	◎	□	(□) ?	?
10	◎	◎	◎	〃	〃
11	◎	◎	◎	〃	〃
12	(□) ☒ □ ☒	☒	☒	☒	☒
13	◎	◎	◎	◎	◎
14	◎	◎	◎	◎	◎
15	◎	◎	◎	◎	◎
16	<◎> (□)	◎	◎	〃	〃
17	◎	◎	?	?	?
18	☒	☒	☒	☒	☒
19	◎	◎	〃	〃	〃
20	◎	◎	◎	?	?
21	◎	◎	?	?	?
22	◎	◎	◎	〃	〃
23	◎	◎	◎ (〃)	〃	〃
24	◎ (□)	◎	〃	〃	〃
25	<◎>				
26	◎	◎	◎ ☒	☒	☒
27	(◎) △	△	△	△	△
28	◎	◎	◎	〃	〃
29	◎	◎	□	□	□
30	◎	◎	*	*	*
31	◎ (q)	◎	◎	◎	◎
32	☒	☒	☒	☒	☒
33	◎ (□)	◎	◎	?	?
34	◎	◎	◎	◎	◎
35	<◎> (□) (◎) □	◎	◎	〃	〃
36	☒	☒	☒	〃	〃
37	◎	◎	◎ ☒	◎	◎
38	(◎)	◎	(◎)	〃	〃
39	◎ (□)	□	□	□	□
40	◎	◎	〃	〃	〃
41	◎	◎	◎	〃	〃
42	☒	☒	☒	☒	☒
43	◎	〃	◎	〃	〃
44	☒	□	〃	〃	〃
45	◎	◎	〃	〃	〃
46	◎	◎	◎	◎	◎
47	<◎> □	□	□	□	□
48	◎ (□)	◎	(◎) □	□	□
49	☒	☒	☒	☒	☒
50	▽	□	□	□	□
51	◎	◎	◎	□	□
52	◎	◎	◎	□	□
53	◎ (□) (◎) □	□	□	〃	〃
54	<◎> □	□	〃	〃	〃
55	<◎> (□)	(◎) □	□	□	□
56	◎ (□)	◎	□	□	□

凡 例

- ◎ インノクソ □ オヒメサン
 ■ ヒメコゾ ☒ メネプト
 △ メガサ ▽ メカンチョ
 ☒ インノメ q ガネンメ
 | モノモライ ? オデキ
 〃 具体的に説明
 〃 無回答 * その他
 () 稀 < > 古
 [] 新



- インノクソ
 ▨ オヒメサン
 ▩ その他1(ヒメコゾ～ガネンメ)
 ■ その他2(オデキ・具体的に・無回答・その他)
 □ モノモライ

本言語地図』の分布から見て、隣接意味分野の語形（類似する他の眼病などの名称）の意味のずれによる「しみ出し」の可能性も考えられる。

⑥やる（煙草または飴を与える）——項目番号（8）・パターン〈I d〉——

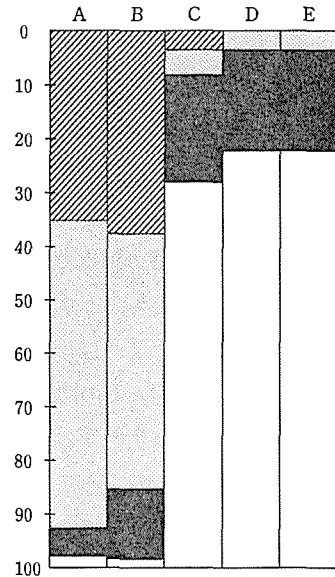
- 場面差がきわめて明瞭であり、地域差はほとんど見られない。場面A Bではクルル類（大部分がクルル、一部にクレル・クレマショー）とヤルが用いられ、場面C D Eではアゲル類（アゲル・アゲヨー・アゲマショーなど）が多く用いられている。すなわち、帯グラフに見られるように、A BとC D Eとの間に明瞭な断層があり、くつろいだ場面（A B）では俚言形のクルルまたは待遇価の低い共通語形ヤルが、あらたまった場面（C D E）では待遇価の高い共通語形のアゲル類が用いられる。場面A Bに分布する形式とC D Eに分布する形式とはほとんど完全に分離しており、これは他の項目には見られない特色である。
- 場面Aのクルルが場面Bで消える地点が若干あり（地点番号7・20・39・40・45）、クルルに「稀」の注記が多いこととあいまって、この地域におけるクルルの衰退の傾向がうかがえる。
- 上記とは逆に、クルルが場面Aには見られず、場面Bにのみ用いられる地点が若干ある（地点番号4・10・23・37・54・55）。この項目における場面設定は、煙草または飴を「同年輩の土地の人に与える場合」（場面A）、「土地の若い人に与える場合」（場面B）となっており、上記の地点では、被調査者が場面Bとして、「子どもに飴を与える場面」などを想定した結果、ヤルよりも待遇価の低い語形と意識しつつクルルを用いたものかもしれない。
- 『日本言語地図』との関係。ヤルは主として九州北部に、クルルは九州南部に専用地域をもち、熊本県南部は両形の混在地帯である。『日本言語地図』の「解説」では、クルル（クレル）はヤルよりも古く、九州ではヤルがクルルを駆逐しつつあると解釈しており、この図におけるクルルの衰退傾向と並行する。
- 「その他」の内容。10 C（ドーデスカ）・12 A B D（ノマンナ・スワンナ）・12 C E（1本ドーデスカ）・13 C D E（ドーズ）・14 A B（ドーダイ）・14 C

表6 やる(煙草または飴を与える)

	A	B	C	D	E
1	☒	☒	☒		Y
2	●	●	●	Y	Y
3	☒	☒			
4	●	☒	Y	Y	Y
5	●	●			
6	☒	☒			
7	☒	●	Y	Y	Y
8	☒	☒	☒	[Y]	[Y]
9	☒	☒			
10	●	☒	*	Y	Y
11	●	*	Y	Y	Y
12	*	*	*	*	*
13	●	●	*	*●	*●
14	(●)*	*	*	*	*
15	☒	☒			
16	☒(●)	☒(●)			
17	●	●	Y	Y	Y
18	*	*	*	*	*
19	●	●	Y	Y	Y
20	☒	●	Y	Y	Y
21	●	●	Y	Y	Y
22	☒	*	*	*	*
23	●	☒	Y	Y	Y
24	☒	☒	☒	●	●
25	●	●	Y	Y	Y
26	☒	☒			
27	●	●	Y	Y	Y
28	☒(●)	☒(●)	Y	Y	Y
29	☒	*	*	*	*
30	☒	☒	Y	Y	Y
31	☒	☒	Y	Y	Y
32	●	●	Y	Y	Y
33	☒	☒			
34	☒	☒	*	*	*
35	●	●	Y	Y	Y
36	☒	☒		*	*
37	●	☒	*	*	*
38	☒	☒	*	Y	Y
39	☒	●	Y	Y	Y
40	☒	●	Y	Y	Y
41		●	Y	Y	Y
42	●		Y	Y	Y
43	●	●	Y	Y	Y
44	●	●	Y	Y	Y
45	☒	●			
46	☒	☒	Y	Y	Y
47	☒	☒			
48	☒	☒	Y	Y	Y
49	☒	☒	*	*	*
50	●	●			
51	●	*	*	*	*
52	●	*	Y	Y	Y
53	●	●	Y	Y	Y
54	●	☒	Y	Y	Y
55	●	☒	Y	Y	Y
56	●	●	Y	Y	Y

凡 例

- ☒ クルル ☒ クレマショー
 ☒ クレル □ クレテヤル
 ● ヤル | アゲル
 Y アゲヨー, アゲマショー
 | アゲル * その他
 () 稀 < > 古
 [] 新



- 斜線 クルル類
 点線 ヤル
 黒 その他
 白 アゲル類

DE (ドーデスカ) など。

⑦とげ (裂片) — 項目番号 (3)・パターン<II a> —

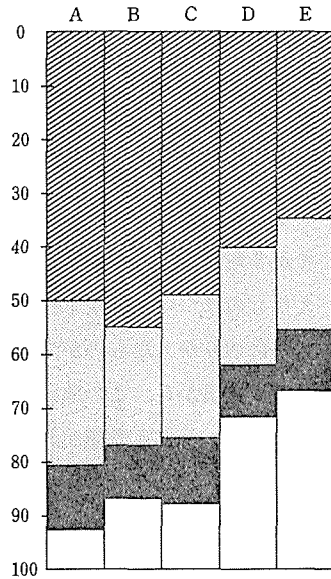
- 人吉寄りの地域では全場面でセバリまたはセビラを、八代寄りの地域では全場面でシェラを用いる傾向が認められる。すなわち、地域差が顕著で場面差が目立たない。
- 帯グラフを見ると、共通語形の使用率には、ABC/DEの傾向が認められるが、それぞれの俚言形の各場面における使用率に、顕著な差は認められない。
- 全場面で同一の俚言形を用いると答えた地点は28地点である(地点番号2・6・10・12・13・14・15・16・18・19・26・28・30・31・32・33・34・36・38・40・41・42・49・50・51・52・53・55)。これに対して、下位場面の俚言形を上位場面で共通語形に言いかえた地点は15地点である(地点番号3・5・7・11・17・22・25・27・29・37・43・44・45・46・54)。そのほか、1・24・48・56の地点にも俚言形→共通語形の傾向が認められる。
- クイは人吉市付近の地域(地点番号3・4・5)では比較的下位の場面に用いられるが、23の地点ではシェラよりも上位の場面で用いられており、注目される(すなわち、より文化的な地域の俚言形を上位場面に採り入れたという点で、後述の「つむじ」や「めんこ」の項目に通ずるところがある)。
- 『日本言語地図』との関係。九州北部には各種の語形が錯綜分布する。熊本県南部では、八代寄りの地域でシェラが優勢であり、人吉寄りの地域には、クイ、セビラ、シェバリ、ソゲラ、イゲ、ヘゲなどが一定の領域をもたず点在する。鹿児島県はほぼソゲ一色である。なお、「刺」の図では、熊本県はイゲ、鹿児島県はイゲまたはクイであり、両県では「裂片」と「刺」が、ほぼ明確に区別されている。これに対して、調査地域に隣接する宮崎県南部では「裂片」と「刺」の両方にクイが見られ、両者の区別が曖昧であることがわかる。グロットグラムにおいて、人吉寄りの地域で各種の語形が混在する傾向があるのは、『日本言語地図』における「裂片」の図の分布状況と並行的関係にあると言える。

表7 とげ(裂片)

	A	B	C	D	E
1	☞				
2	Y	Y	Y	Y	Y
3	☞	☞	☞		
4	Y	☞	Y	Y (☞)	Y (☞)
5	☞		☞		
6	Y	Y	Y	Y	Y
7	☞ []	☞ []	(Y)		
8	Y	Y	Y	Y	Y
9	(Y)	Y	Y	Y	Y
10	Y	Y	Y	Y	Y
11	Y		Y		
12	Y	Y	Y	Y	Y
13	Y	Y	Y	Y	Y
14	Y	Y	Y	Y	Y
15	Y	Y	Y	Y	Y
16	Y	Y	Y	Y	Y
17	Y	Y			
18	[]	[]	[]	[]	[]
19	Y	Y	Y	Y	Y
20	☞	☞	(Y)	☞	☞
21	☞ ☞	☞	☞	☞	☞
22	☞	☞	☞		
23	☞	☞		☞	☞
24	☞	☞	☞	☞	☞
25	☞	☞	☞	☞	☞
26	Y	Y	Y	Y	Y
27	☞	☞			
28	☞	☞	☞	☞	☞
29	Y				
30	☞	☞	☞	☞	☞
31	☞	☞	☞	☞	☞
32	☞	☞	☞	☞	☞
33	☞	☞	☞	☞	☞
34	☞	☞	☞	☞	☞
35	☞	☞	☞	(☞)	n
36	☞	☞	☞	☞	☞
37	☞	☞	☞		
38	☞	☞	☞	☞	☞
39	☞	☞	n	n	n
40	☞	☞	☞	☞	☞
41	☞	☞	☞	☞	☞
42	☞	☞	☞	☞	☞
43	☞	☞	☞		(☞)
44	☞	☞	☞		
45	☞ ()	(☞)	☞		
46	☞	☞	☞		
47	☞	☞	☞	☞	n
48	☞	☞	☞	☞ ()	☞ ()
49	☞	☞	☞	☞	☞
50	☞	☞	☞	☞	☞
51	☞	☞	☞	☞	☞
52	☞	☞	☞	☞	☞
53	☞	☞	☞	☞	☞
54	☞	☞	☞	☞	
55	☞	☞	☞	☞	☞
56	☞	☞	☞	☞ ()	☞ ()

凡 例

- シェラ Y セバリ
 Y セビラ ☞ ソゲラ
 ☞ ソゲ [] シェガレ
 ☞ クイ ☞ トウイ
 | トゲ n 無回答
 () 稀 < > 古
 [] 新



- シェラ
 セバリ・セビラ
 その他
 トゲ

⑧はぐき(歯茎) — 項目番号(15)・パターン〈II b〉 —

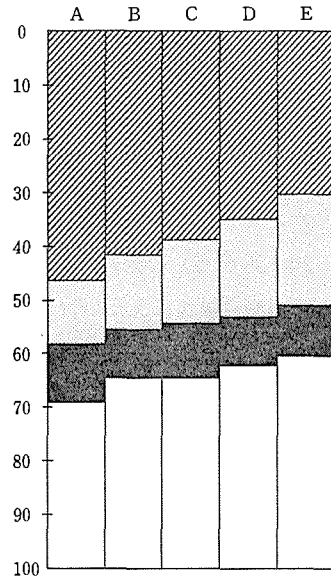
- 人吉寄りの地域では全場面ハグキまたはハブキを、八代寄りの地域では全場面ハギシを用いる傾向が認められる。すなわち、「とげ」(裂片)の項目と同様に、地域差が顕著で場面差が目立たない。
- 帯グラフに見られるように、俚言形、共通語形ともに場面差はほとんど認められない。しかし、きわめてわずかではあるが、俚言形ハギシは上位場面に進むにしたがって使用率が減少し、かわって共通語形のハグキの使用率が増加する。一方、ハブキは俚言形でありながら上位場面に進むにつれて使用率がわずかずつ増加し、注目される(A-12%・B-15%・C-17%・D-19%・E-21%)。
- 全場面ハグキのみを答えた地点数は12、全場面ハブキのみが3、同ハグチのみが1(地点番号13)、同ハクギが1(地点番号31)、また、全場面ハギシの地点数が14である。すなわち、全場面を同一の語形のみでとおした地点数は合計31である。それ以外の25地点については、何らかの場面差が認められるが、このうち、最も多いのは下位場面のハギシを上位場面でハグキと叫いかえたもので計9地点、次いでハギシ→ハブキの4地点、以下、ドテ→ハブキが2地点、その他のタイプが各1地点である。すなわち、場面間で叫いかえたものについては、下位場面のハギシをより上位の場面でハグキまたはハブキに切りかえたものが大部分となる。
- 以上の結果から、この地域では、ハギシよりもハグキまたはハブキの文体的価値が高いという意識がわずかに認められると言える。一方、ハグキとハブキの関係については、両語形の地理的・場面的分布状況から見て、この地域では両形を別々の語形と意識する傾向がきわめて弱いのではないかと考えられる(わずかに、地点37と48とで両形の識別意識が認められる)。
- ハギシが俚言形でありながら多くの地点で上位場面にも用いられる要因として、一つにはハギシが共通語形のハグキと音形が類似しているために俚言臭が少ないのではないと思われること、また、ハギシが「歯の生えている岸」であるとの語源意識に支えられてハグキよりも安定性を有しているのではないかと考えられること、などを指摘しておきたい。

表8 はぐき(歯茎)

	A	B	C	D	E
1					
2	∠	∠	∠	∠ ∅	∠ ∅
3					
4	(∩) ∅	∅	∅	∅	∅
5	∩				
6	()	()			
7	∅	∅	∅	(∩) ∅	(∩) ∅
8					
9					
10					
11					
12	∅	∅	∅	∅	∅
13	∅	∅	∅	∅	∅
14	●	●	●	●	●
15	∅	∅	∅	∅	∅
16					
17					
18	●	●	●	●	●
19	∅	∅	∅	∅	∅
20	<●> ∅	∅	∅	∅	∅
21					
22	∩				
23	(∩) ∅	∅	∅	∅	∅
24	<(●)> []				
25					∩
26	●	●	●	●	●
27					
28					
29	●	●	● ∩	●	●
30	●	●	●	●	● ∅
31	∩	∩	∩	∩	∩
32	●	●	●	●	●
33	(●)	●	●		
34	●	●	●	●	●
35	●	●	●	●	●
36	●	●	●	●	●
37	●	●	∅	∅	∅
38	●	●	●	●	●
39	●	●	●	●	●
40	●	●	●	●	●
41	●	●	●	●	●
42	●	●	●	●	●
43	●	●	●	(●) ∅	(●) ∅
44	●				
45	●	●	●	●	●
46	●	●	●	●	●
47	● () (●)	(●)	(●)		
48	() ∅	() ∅	∅	∅	∅
49	●	●	●	● ()	● ()
50	●	●	●	●	● ()
51	●	●	●	●	●
52	●	∅	∅	∅	∅
53	<●>				
54	● ∩	∩	∩	∩	∩
55	<●> () (●)				
56	●	●	● ()	● ()	

凡 例

- ハギシ ◆ ハギク
 | ハグキ | ハクキ
 ∩ ハクギ ∩ ハグチ
 ∅ ハブキ ∠ クキ
 ∩ ドテ ∩ 無回答
 () 稀 < > 古
 [] 新



- ▨ ハギシ
 □ ハブキ
 ■ その他
 □ ハグキ

⑨かえる（蛙）——項目番号 (25)・パターン〈III a〉——

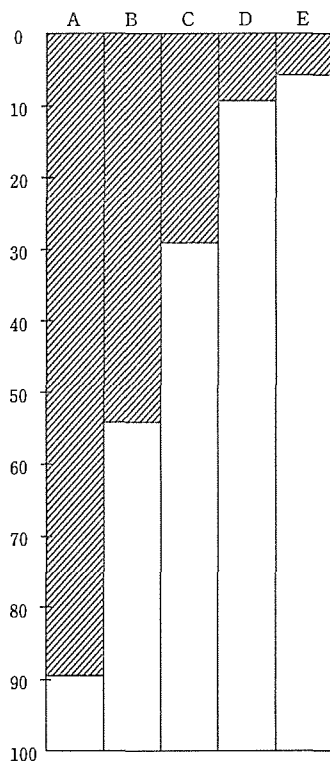
- 場面差が顕著であり、下位場面には俚言形のビキ、ビキズー、ビッカン、ビッカンズー、ビキタンが、上位場面には共通語形のカエルが分布する。俚言形の分布には一定の地域差があり、ビッカン是人吉寄りの地域（球磨村一勝地地区以南）に、ビキタンは八代寄りの地域（球磨村神瀬地区以北）に分布する。ビキは調査地域全域に見られるが、人吉寄りの地域で分布密度が高い。ビッカンズーおよびビキズーは地点番号 6～9 の狭い地域（球磨村渡地区）に見られる。
- 場面 A では大部分が俚言形であり、共通語形のみ の地点は皆無である。場面 A で共通語形は 10 地点（全地点の 18%）であるが、場面 B では 35 地点（63%）に増加する。場面 D・E ではほとんどが共通語形である。すなわち、この項目は下位場面と上位場面との落差が大きいことに特色があり、俚言形と共通語形との場面分布の様相は、②「蜘蛛」の項目に類似する。
- 『日本言語地図』との関係。ビキは調査地域を含み九州各地に広く分布する。ビキタンは坂本村以北の熊本県のほか大分・宮崎などに小領域をもつ。ビッカンズーは見られないが、ビッカンジョが調査地域のうち芦北町付近（地点 26～30 付近）の西方にある芦北町大字計石（8301, 19）の 1 地点にある。共通語形カエルは九州にはわずかに散在するにすぎない。すなわち、場面 A における各語形の分布は『日本言語地図』とほぼ並行する。ただし、同書に 1 地点しか記録されていないビッカン～がこの地域に小領域をもつことがわかる。
- 『日本言語地図』を参考にしつつ、場面 A に見られる俚言形の分布の歴史を推定すると次のようになろう。かつては調査地域の全域にビキが分布していた。次に八代方面からビキタンが侵入してビキを駆逐しはじめた。一方、人吉市、あるいは芦北町付近で生まれたビッカンが人吉市文化圏に広がりはじめた。なお、ビッカン はビキタンを母体として生まれたことも考えられる。その場合、ビキタンは現在よりも、もっと人吉寄りの地域にまで分布していたと見るべきかもしれない。ビキズーとビッカンズーは球磨村渡付近で生まれた最も新しい語形であろう。

表9 (蛙)

	A	B	C	D	E
1	●	■			
2	(●) ■	(●) ■	(●) ■	(●) ■	
3	● (■)	● (■)	● (■)		
4	● ■	●	●		
5	● ■				
6	● (■)	● (■)			
7	□ ()	□ ()			
8	● (○)				
9	■ ■				
10	● ■	● ■	●		
11	■	■			
12	(●) <■>	● ■			
13	■				
14	■ (○)	■	■	■	■
15	● ■	● ■	● ■		
16	■	(■)	(■)		
17	(●) ■	■			
18	●	●			
19	<●>				
20	● 𐄂				
21	● 𐄂				
22	● (○) 𐄂 (○)				
23	● 𐄂				
24	𐄂	𐄂 ()			
25	<●>				
26	(○)				
27	● (○) 𐄂 (○) 𐄂				
28	● 𐄂				
29	● 𐄂				
30	𐄂				
31	● 𐄂				
32	𐄂	𐄂			
33	(●) 𐄂 (●)				
34	𐄂	𐄂	𐄂		
35	𐄂	𐄂	𐄂	𐄂	𐄂
36	(○)				
37	𐄂	(○)			
38	𐄂				
39	(●) ()				
40	(○) ()				
41	● 𐄂 (●) (○) (●) (○)				
42	𐄂				
43	𐄂				
44	● (○)				
45	𐄂				
46	𐄂	𐄂	(○)		
47	(●) 𐄂 (○)				
48	𐄂 ()				
49	𐄂	𐄂			
50	𐄂	𐄂			
51	𐄂	𐄂	𐄂	𐄂	𐄂
52	(○) (○)	(○) (○)			
53	(●) (○) (●) (○)				
54	<●> 𐄂				
55	● 𐄂	𐄂	(●)		
56	●	●	● ()		

凡 例

- ビキ ○ ビギズー
 ■ ビッカン □ ビッカンズー
 𐄂 ビキタン | カエル
 () 稀 < > 古
 [] 新



ビキ類

カエル

⑩おたまじゃくし（蝌蚪）—— 項目番号（24）・パターン〈III a〉——

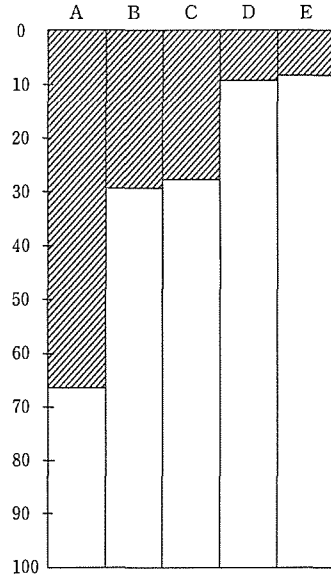
- 下位場面には各種の俚言形が一定の地域差を見せつつ分布し、上位場面には共通語形が分布する。他の項目に比べて下位場面への共通語形の侵入の程度が著しく、場面Aでも共通語形の使用率が30%を超える。
- 帯グラフに見られるように、場面間の差はA／BC／DEの傾向が顕著であり、AB間の差がCD間の差よりも大きい。グロットグラムにより地点別の場面差を見ると、A／BCDE（場面Aのみに俚言形を用いるもの）が32地点で最も多い。これに対して、ABC／DE（場面ABCに俚言形を用いるもの）は8地点（地点番号3・12・14・16・22・23・25・47）にすぎない。
- 地点4・29・38・43ではAC／BDEという場面差を示す。これは同じ土地の人の中でも若者だけは別扱いにする（共通語形を用いる）ものであって、若者を特別視する点でA／BCDEに通ずるところがある。
- 地点34と38では下位場面のガンノコを上位場面でカエルノコに言い替えている。これはガンノコの語源をカエルノコと意識（事実そういう語源であろう）して前部要素を共通語形にしたものと考えられる。
- ギャール、ギャーロ、ギャロン、ギャーリなどの語形は、ギャルコ、ギャーロンコなどの後部要素が脱落した形であろう。このような形が生まれる背景として、この地域の「蛙」の俚言はビキ類であり（前項参照）、ギャールなどの形が「蛙」を意味するものとの意識が弱いということがあげられよう（34・38のような例外もある）。
- 『日本言語地図』では、調査地域付近に、ギャールノコ、ギャーノコ、ギャリコ、ギャレンコ、ゲーノコ、ギャーリ、ビキノコ、オロロンコ、オロロン、コゴリヤなどが、それぞれ1地点ずつ錯綜分布しており、グロットグラムの場面Aの分布にほぼ並行する。ただし、共通語形オタマジャクシは、『日本言語地図』では（熊本県北部を含む）九州北部にかなり見られるものの、調査地域を含む熊本県南部には皆無であり、グロットグラム場面Aの方が、やや共通語化の進んだ姿を見せている。

表10 おたまじゃくし(蝌蚪)

	A	B	C	D	E
1	⟨○⟩				
2	○(1)	○(1)	○(1)	○(1)	
3	○	○	○		
4	○		○		
5	○				
6	[1]○(○)				
7	○	○			
8	○(1)				
9	○				
10	○				
11					
12	○	○	○		
13	○				
14	○	○	○		
15	○(1)				
16	○(○)○(1)	○(1)	○(1)		
17	○	○(1)			
18					
19	○				
20	○				
21	○				
22	○	○	○		
23	○	○	○		
24	○(○)	○			
25	○	○	○		
26	○(○) [1]				
27	○				
28	○				
29	○		○		
30	○				
31	○				
32	○				
33	○				
34	○	○	○	○	○
35	○(○) [1]				
36	○	○	○(○)	○	○
37	○(○)				
38	○	○	○	○	○
39	○(○)				
40	○(○) [1]				
41	○(○) [1]				
42	○	○			
43	○		○		
44	○				
45	○				
46	○				
47	○(1)	○	○		
48	○(1)				
49	○				
50	○				
51	○	○	○	○	○
52	○				
53	○				
54	○				
55	○				
56	○	○	○	○	○

凡 例

○	オロロン	○	オロロンコ
○	ゴゴリヤ	○	ゴゴロジャ
○	ビキノコ	○	ビキタンノコ
○	ビッキンソ	○	ワクドンコー
○	ギャール	○	ギャーロ
○	ギャロン	○	ギャーリ
○	ギャルコ	○	ギャーロンコ
○	ジャルコ	○	ジャリコ
○	ジャンコ	○	ギャンノコ
○	ゲンノコ	○	カエルノコ
○	オパンジャクシ	○	オタマジャクシ
()	稀	○	古
[]	新		



○ 偶言形

○ オタマジャクシ

⑪つば(唾) — 項目番号 (14)・パターン〈Ⅲa〉 —

- 共通語形の勢力がきわめて大きく、ツバは全場面ではほぼ全地域に分布する。
俚言形ツズは人吉寄りの地域で主として場面Aに見られるが、ほとんどが「稀」「古」の注記つきであり、衰滅寸前の状態にある。

- 人吉寄りの地域では、主として場面A 図4 つば(唾) 『日本言語地図』
118図の一部(略図)

で俚言形を用いることがあるという形で、場面差および地域差が認められる。

- 『日本言語地図』との関係。ツズ類(鹿児島県のツズを含む)が佐賀・長崎と大分・宮崎・鹿児島などにあり、福岡・熊本を中心とするツバをとりかこむように分布する(略図参照)。なおツズは山口などにも領域をもつ。この分布から、九州全域にはかつてツズが分布していたが、その後北部にツバ類が広がり、現在の状態になったと推定される。

『日本言語地図』を見ると、ツズは熊本県では南部にわずかに分布するにすぎないが、この分布は、グロットグラムで人吉寄りの地域にツズがあることと並行する。なお、『日本言語地図』の「唇」の図では九州の大部分がツバ類であるが、九州北部にはクチビルもかなり見られる。すなわち、ツバは「唾」の図では九州北部に多く、「唇」の図では九州北部以外に多いという相補的分布を示す。

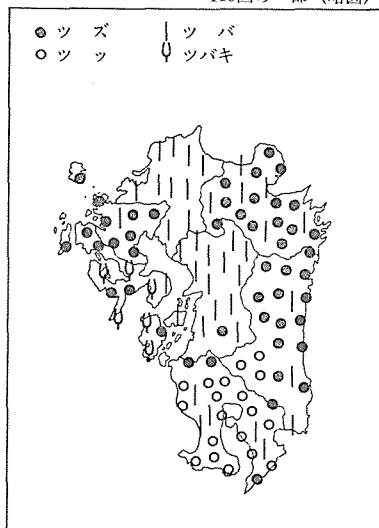
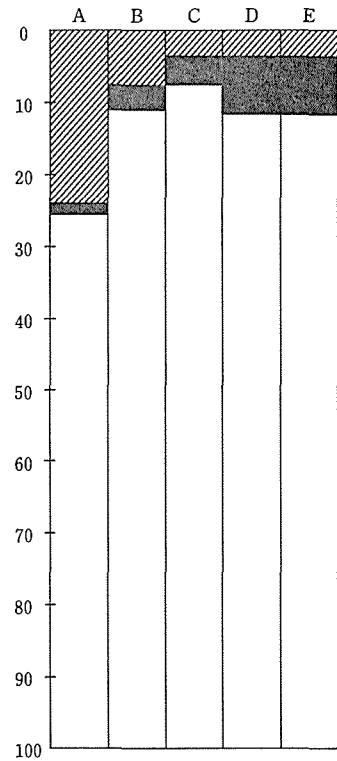


表11 つば(唾)

	A	B	C	D	E
1					
2					
3	<◎>			♪	♪
4					
5	(◎)				
6	<◎◎>				
7					
8	◎ (())				
9	<◎>				
10	(◎)	(◎)	(◎)	(◎)	(◎)
11	<◎>				
12	(◎)				
13					
14					
15	◎ ()	◎ ()			
16	<◎◎>				
17	(◎)				
18	∟	∟	∟	∟	∟
19	<◎>				
20	◎				
21	(◎)				
22	(◎)	(◎)			
23	(◎)				
24					
25					
26					
27					
28					
29					
30					
31					
32					
33	◎	◎	◎	◎	◎
34					
35					
36					
37					
38					
39					
40		*	*	*	*
41					
42					
43					
44					
45					
46					
47					
48					
49					
50					
51					
52					
53				♪	♪
54					
55					
56					

凡 例

- ◎ ツズ
 | ツバ
 ∟ ツワ
 ♪ ツバキ
 ♪ ダエキ
 * その他

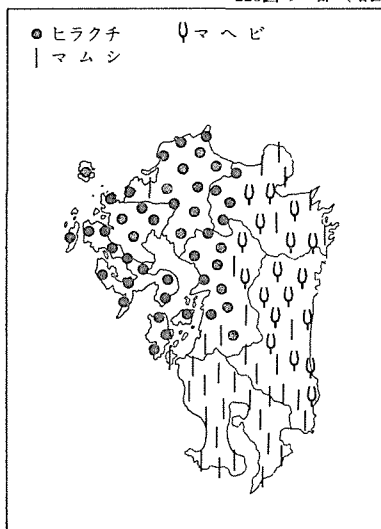


- 〰 ツズ
 〰 ツワ・ツバキ・ダエキ・その他
 □ ツバ

⑫まむし（蝮）——項目番号 (29)・パターン〈Ⅲb〉——

- 下位場面に俚言形ヒラクチが多く、上位場面に共通語形マムシが多いという傾向は一応認められる。しかし、下位場面への共通語形の侵入が著しく、場面Aでも俚言形(マヘビを含む)の使用率は43%にすぎず、それも多くは「古」「稀」の注記付きでマムシとともに用いられている。
- 場面間の差はゆるやかであるが、共通語形の使用率ではA/Bの差が22%で比較的大きい。Bより上位の場面ではほとんど共通語化しているとも言える。
- 『日本言語地図』との関係。九州北西部がヒラクチ、南部がマムシであり、調査地域で両語形が接触・混在している(略図参照)。この分布から見て、グロットグラムにおける下位場面への共通語形マムシの侵入の大きさは、単なる共通語化ではなく、鹿児島地方の方言形マムシ（共通語形と形が一致する方言形）の分布が背景にあると解釈される。
- 地域差は目立たないが、八代寄りの地域では上位場面にもヒラクチが分布する傾向がうかがえる。すなわち、ヒラクチの場面分布に地域差が認められる。

図5 まむし（蝮） 『日本言語地図』
228図の一部（略図）



この分布傾向も『日本言語地図』の分布と並行する。『日本言語地図』とグロットグラムとを総合すれば、熊本県南部は以前はヒラクチの専用地域であったが、そこに鹿児島県地方のマムシが上位場面から侵入し、現在の場面Aにおける錯綜分布を形成するに至ったものと推定される。

- 地点34ではヒラクチがマムシよりも上位の場面で用いられ、しかもヒラクチを「新」と意識している。また、地点10と22ではマムシに「古」の注が付いている。これはマムシがヒラクチ

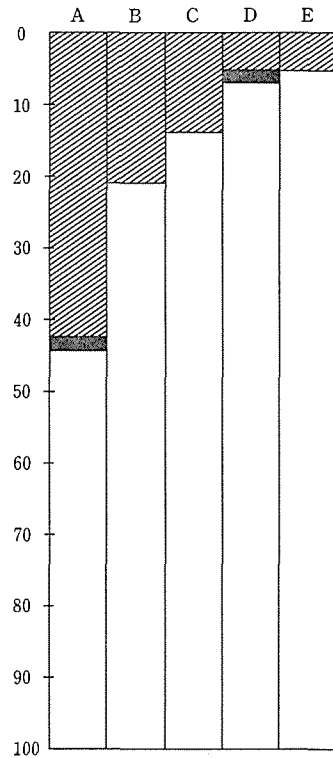
よりも新しいとする上記の推定と一見矛盾する。熊本県南部地方では、北部から南部へ進もうとするヒラクチの勢力と、南部から北部へ進もうとするマ

表12 まむし(蝮)

	A	B	C	D	E
1					
2					
3					
4	(I) ♀				
5	(◎)				
6	◁◎▷ [I]	(◎)			
7					
8	◁◎▷ ([I])	(◎)			
9	◎				
10	(◎) <I>	(◎) <I>	<I>	<I>	<I>
11					
12					
13					
14					
15	◁◎▷				
16	◎				
17					
18	◁◎▷				
19					
20					
21	◁◎▷				
22	(◎) <I>	(◎) <I>	(◎) <I>	<I>	<I>
23	(◎)				
24	(◎)				
25					
26	(◎)				
27					
28	◁◎▷				
29					
30					
31	(◎) [I] ♀				
32					
33	◎				
34			[◎]	[◎]	[◎]
35	(◎)	(◎)			
36	◁◎▷	(◎)	(◎)		
37	◁◎▷ ([I])	(◎)			
38	(◎)				
39	(◎)				
40	(◎) [I]				
41	(◎) [I]	◎	◎ (I)		
42	(◎)				
43	◎		◎	*	
44	◁◎▷				
45	◁◎▷				
46	◎ (I)	◎ (I)			
47	◎ [I]	◎	(◎)		
48	(◎) (I)	(◎)			
49	◎	◎	◎	◎	◎
50	◎ (I)				
51	◎	◎	◎	◎	◎
52	◁◎▷ <I>				
53	◎ [I]	[I]	[I]	[I]	[I]
54	(◎)				
55	◎ [I]	(◎)			
56	(◎)				

凡 例

- ヒラクチ | マムシ
 ♀ マヘビ * その他
 () 稀 < > 古
 [] 新



ヒラクチ

マヘビ・その他

マムシ

ムシの勢力とが拮抗しており、それが「新」「古」に関する意識の乱れの一因とも考えられる（全体的に見てマムシの方が優勢なのは、もちろん、それが共通語形だからである）。

⑬きのこ（茸）—— 項目番号（1）・パターン〈Ⅲb〉——

- 下位場面では俚言形ナバが大部分を占め、上位場面に進むにつれて共通語形キノコの使用が漸増する。
- 各場面におけるナバの使用率は、Aが95%、Bが87%、Cが66%、Dが31%、Eが19%であり、C/Dの差がとくに大きい。
- 下位場面のナバを上位場面でキノコに言いかえる地点（地点47・49のように言いかえる傾向の認められる地点を含む）は26地点である。一方、下位場面ではナバ、上位場面では「それぞれの名（マツタケ・シータケ・シメジ）を言う」と答えた地点が19地点ある。これは⑥の「ものもらい」の項目における「オデキ」や「病状を具体的に説明する」と似た性格の現象で、共通語形が普及するまでの過渡的なものと見られる。
- 全場面ナバのみを答えた地点が8地点あり（地点番号2・40・41・43・46・50・51・56）、これに準ずる地点（地点番号36・39・47・49）と合わせ、ナバを上位場面で用いる傾向は、八代寄りの地域でとくに強いことがわかる。すなわち、この項目は俚言形（ナバ）の場面分布に地域差が認められることが特色の一つと言える。これを図式化して示せば下図のようになる（俚＝俚言形ナバ、共＝キノコおよび「それぞれの名」）。
- 『日本言語地図』との関係。ナバは九州全域に分布する。これに対して、キノコは、九州では鹿児島県にナバと混在して勢力をもち、それが、熊本県南部や宮崎県西部などにわずかに侵入している。ナバの勢力が人吉寄りの地域（すなわち鹿児島県寄りの地域）の上位場面で後退している（キノコなどの語形に侵食されている）のは、このような『日本言語地図』における分布と並行的関係にあるものと思われる。

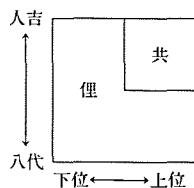
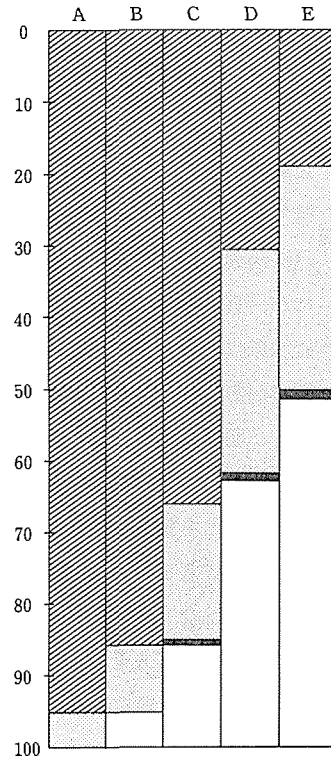


表13 きのか(茸)

	A	B	C	D	E
1	○	○	●	△	
2	○	○	●	○	○
3	○	○	○ (△)	○ △	△
4	○	○	○		
5	○	○	○		
6	○	○	○		
7	○	○	(●) △	○ △	△
8	<○>	<○>	<○> ([])	○	
9	○	○	○	○	
10	○	○ △	△	△	△
11	○	○	○		
12	○	○	△	△	△
13	○	○	○ △	△	△
14	○	○	○	△	△
15	○	○	○		
16	○	○	○	△	△
17	○	○	○	△	△
18	○	○	○ △	△	△
19	○	○	○ △	△	△
20	○	○	○		
21	○	○	○	○	
22	○	○	○	△	△
23	○	○	○ ()	○ ()	
24	○	△	△	△	△
25	○ △	△	△	△	△
26	○	○	○ ()		
27	○	○	○	△	△
28	○	○	○		
29	○	○	○	△	△
30	○	○	○	○	
31	○	○			
32	○	○	○ △	△	△
33	○	○	○		
34	○	○	○		
35	○	○	○ ()		
36	○	○	(●)() △	○	○ () △
37	○	○	○	○ △	△
38	○	○	○		
39	○ △	○	○	○	○
40	○	○	○	○	○
41	○	○	○	○	○
42	(●)	△	△	△	△
43	○	○	○	○	○
44	○				
45	○	○	○		
46	○	○	○	○	○
47	○	○ ()	○	(●)	(●)
48	○	○ ()	○ ()		
49	○	○	○	○	○ ()
50	○	○	○	○	○
51	○	○	○	○	○
52	○	○	○		
53	○	○	△	△	△
54	(●) △	(●) △	△	△	
55	○	○	○		
56	○	○	○	○	○

凡 例

- ナバ
 △ それぞれの名
 * その他
 () 稀
 < > 古
 [] 新



- ▨ ナバ
 ▤ それぞれの名
 ■ その他
 □ キノコ

⑭とんぼ（蜻蛉）——項目番号（32）・パターン〈Ⅲb〉——

- 下位場面に俚言形のシェンボ・ヘンボが多く、上位場面に共通語形のトンボが多い。しかし、「まむし」の項目と同様に下位場面への共通語形の侵入が著しく、俚言形には「古」「稀」の注が付いたものが多い。
- 各場面における共通語形の使用率はAが48％、Bが75％、Cが86％、DとEが94％で、AとBとの差が比較的大きい。
- 共通語形トンボは人吉寄りの地域では全場面を占めているが、八代寄りの地域では上位の場面（主としてBより上）に分布する傾向がある。すなわち、共通語形の場面分布に明瞭な地域差が認められる。
- 『日本言語地図』との関係。シェンボ・シェンブが熊本南部（天草を含む）から鹿児島北西部にかけて、ヘンボ・ヘンブが熊本北部・佐賀南部・長崎南部などに分布し、これに類する語としてエンブ・エンバが福岡の一部や佐賀・長崎の北部などに見られる。トンボは主として福岡北部・大分・宮崎北部に勢力をもち、熊本県にも侵入している

図 6 とんぼ 『日本言語地図』
231図の一部（略図）

（略図参照。なお略図では判然としな
いが、『日本言語地図』の原図を見ると、
熊本県におけるトンボは北部と南部に
領域があり、その中間地域には見られ
ない。北部と南部では南部での勢力の
方が強い）。『日本言語地図』とグロッ
トグラムとを総合すると、グロットグ
ラムにおけるトンボの侵入は単なる共
通語化ではなく、隣接地域のトンボが
熊本県南部に侵入しつつあること、そ
の経路は熊本県北部からではなく、宮
崎地方のものが人吉付近に侵入し、さ
らに北（八代方面）に向かって進みつつあるものと推定される。

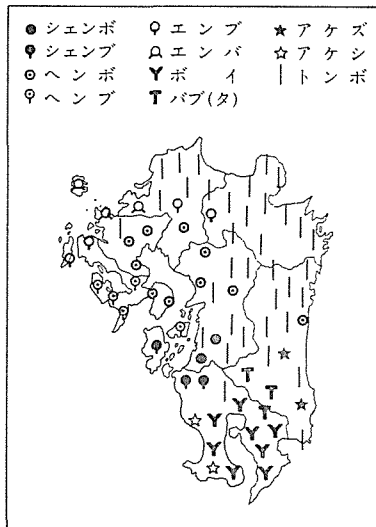


表14 とんぼ(蜻蛉)

	A	B	C	D	E
1					
2					
3					
4					
5					
6					
7					
8					
9					
10					
11					
12					
13					
14					
15					
16					
17					
18	<●>				
19	<●>				
20	●				
21	○ (1)				
22	(●)				
23	● (1)				
24	○	○	○		
25	<●>				
26	(●)				
27	(●)				
28	○	○			
29	○	○			
30	○	○	○		
31	○				
32	○	○	○	○	○
33	○				
34	○	○	○		
35	(●)	(●)			
36	(●)				
37	(●) [1]				
38	<●>				
39	<●>				
40	<●> ((1))	○ (1)			
41	○	○	○		
42	○				
43	○		○		
44	○				
45	<●>				
46	○	○			
47	<●> ((1))	(●)			
48	(●)				
49	○	○			
50	○				
51	○	○	○	○	○
52	○				
53	○				
54	<○>				
55	○	○	○	○	○
56	○((1))				

凡 例

● シェンボ

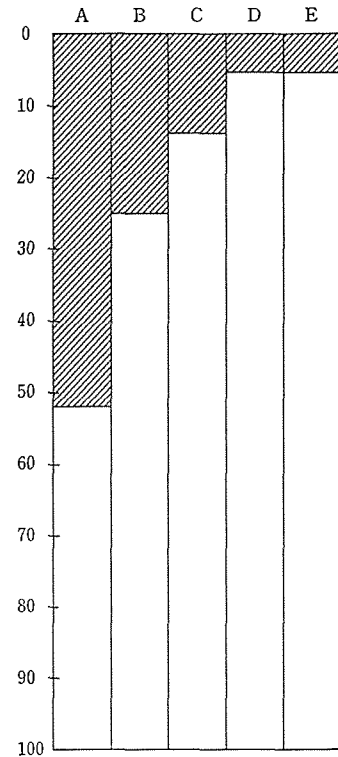
○ ヘンボ

| トンボ

() 稀

< > 古

[] 新



シェンボ・ヘンボ

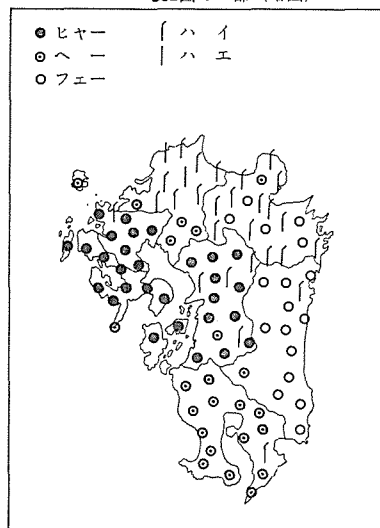
トンボ

⑮はえ（蠅）——項目番号 (30)・パターン〈III b〉——

- 全地域・全場面ともにハエ類であり、他の語種は見られない。しかし、音声的変種として、下位場面にヒャー（一部にヘーを含む）、上位場面にハイ・ハエが分布する。
- ヒャーを俚言形、ハイ・ハエを共通語形と見なすと、場面差が著しく、A／B／CDEとなる。上位場面では完全に共通語化するにもかかわらず、場面Aでは俚言形の勢力が大きい（ヒャーの見られない地点は3地点のみ）のも特徴的である。
- 場面Bを見ると人吉寄りの地域には俚言形が比較的多く、八代寄りの地域には共通語形が比較的多い。すなわち、俚言形・共通語形双方の場面分布に地域差が認められる。ハイとハエに関して、ハエが人吉付近にやや多いようであるが、明瞭な地域差ではない。なお、わずかではあるが、下位場面のハイを上位場面でハエに言いかえた地点（6・8）がある。逆のケース（ハエ→ハイ）はない。

図 7 はえ 『日本言語地図』 232図の一部（略図）

- 『日本言語地図』との関係。音声的変種に関して明瞭な地域差があり、ヒャー〔ɕa:〕が主として佐賀・長崎・熊本に、ヘー〔he:〕が鹿児島ほかに、フェー〔ɸe:〕が大分南部・宮崎に、ハイ〔hai〕が福岡・大分などに分布する。この分布とグロットグラムとを総合すると、調査地域には九州北部（すなわち八代寄りの地域）から共通語形のハイ・ハエが侵入しつつあるものと解釈される。



⑯くちびる（唇）——項目番号 (13)・パターン〈III b〉——

- 下位場面では俚言形ツバが多く、上位場面に進むにつれて、共通語形クチビ

表15 はえ(蠅)

	A	B	C	D	E
1	●				
2	●	●			
3	●	●	(●)		
4	●	●			
5	●				
6	●	●	(f)		
7	●	(l)	●	(l)	
8	(●●)	[f]	(●)	f	
9	●	●			
10	●	●			
11	●	●			
12	●	●			
13	●				
14	●	●			
15	●	●			
16	●	●			
17	●	●			
18		f			
19	●				
20	●				
21	●				
22	●	●			
23	●				
24	●	●			
25		f			
26	●	●			
27	●				
28	●	(f)			
29	●				
30	●	●			
31	●				
32	●	●			
33	(●)	f			
34	●	(f)			
35	(●●)	f			
36	●				
37	●	f	(●)		
38	●	(●)			
39	●	(f)			
40	(●●)	f			
41	●				
42	●	f			
43	●				
44	●				
45	<●>				
46	●	f			
47	(●●)	[f]			
48	<●>	(f)	(●)		
49	●	●			
50	(●)	f			
51	●	●			
52	●	●			
53	<●X(f)>				
54					
55	●	●			
56	(●●)	[f]	(●)		

凡 例

● ヒャー

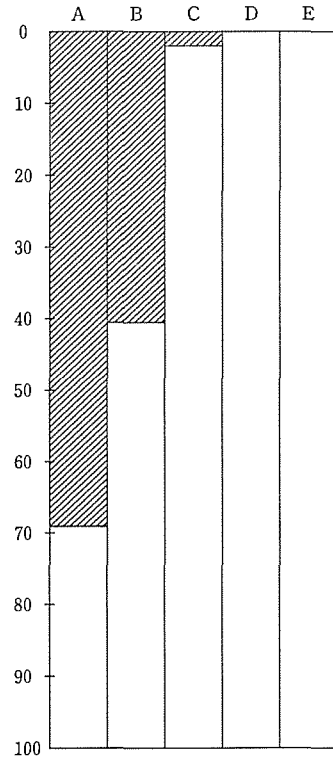
f ハイ

| ハエ

() 稀

< > 古

[] 新



■ ヒャー

□ ハイ・ハエ

ルの使用が増加する。

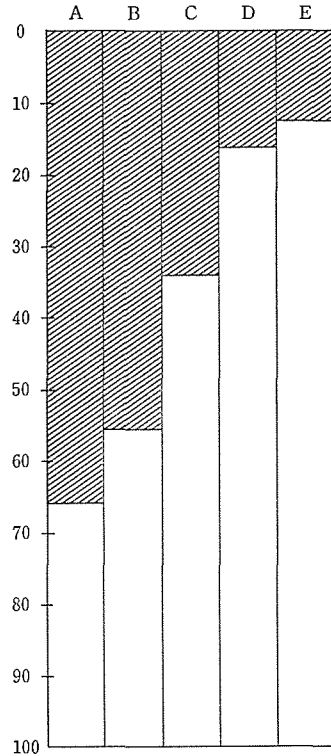
- 各場面におけるツバの使用率は、Aが65%、Bが56%、Cが34%、Dが16%、Eが12%であり、A B / C / D Eの傾向が認められる。
- 上の数字から見ると場面Aにおける俚言形の使用率はそれほど大きくないが、これは共通語形との併用地点がかなりあるためであり、場面Aで俚言形の現れない地点（共通語形のみを答えた地点）は5地点にすぎない。また、場面Aにおける共通語形には「稀」または「新」の注が付いたものが多い。すなわち、場面Aでは俚言形を用いる傾向が根強いと言える。
- 場面Bでは共通語形のみを答えた地点が21地点に増加し、俚言形と共通語形との併用地点は、場面Aに比して著しく減少する。この点からすると、場面A B間の差もかなり大きいと言えよう。
- 地点10～18の地域では、俚言形を全場面で用いる傾向がある。すなわち、俚言形の場面分布に地域差が認められる。
- 『日本言語地図』との関係。九州ではツバ類が優勢であり、このうち、ツバが福岡・佐賀・長崎・熊本付近に、トゥバ（T U B A）が十分に、スバが鹿児島および宮崎南部に分布する。クチビル類は主として福岡および熊本北部に、ツバと混在分布する。この分布は、クチビル類が福岡から熊本北部（すなわち調査地域の隣接地）にまで侵入し、熊本南部（調査地域）をうかがっていることを示すものと解釈される。グロットグラムの場面Aにおける分布は、この『日本言語地図』の分布とほぼ並行するが、場面Aでクチビルもかなり見られる点については、グロットグラムの方が『日本言語地図』よりも、変化が一步進んだ姿を示しているものと言える。八代寄りの地域でクチビルの下位場面への侵入が大きい点も『日本言語地図』における分布（の解釈）と並行する。ただし、クチビルの下位場面への侵入は人吉寄りの地域（地点番号1～9）でも比較的大きいが、この点については共通語形クチビルが、中間地域をとびこえて、人吉市を中心として優勢となったことを示すものと考えられる。

表16 くちびる(唇)

	A	B	C	D	E
1	●	●			
2					
3	●	●	●		
4	●	●	●		
5	●	●	●		
6	● ()	(●)			
7	((●)) []				
8	● (())				
9	●	●			
10	●	●	●	●	●
11	● ()	(●)	●	●	●
12	●	●	●		
13	●	●	●	●	●
14	●	●	●		
15	●	●	●	●	
16	●	●	●	●	●
17	●	●			
18	●	●	●	●	●
19	●	●			
20	● ()				
21	● ()				
22	(●)	(●)	(●)		
23	● ()				
24	● (())	● ()	● ()		
25	●	●	●	●	
26	<●> ()	(●)			
27					
28	●	●			
29	<●>				
30	●	●			
31	●	●			
32	●	●	●	●	●
33					
34	●	●	●	∟	∟
35	((●)) []				
36	● ()				
37	((●)) []				
38	●	●	●		
39	((●)) []				
40	●	●	●		
41	●	●	●		
42	●	●	∟		
43					
44	●				
45	(●)				
46	●	●			
47	<●>	●			
48					
49	(●)				
50	● ()	●			
51	●	●	●	●	●
52	●				
53	((●))				
54	<●>				
55	●	●			
56	((●)) []	(●)			

凡 例

- ツバ
| クチビル
∟ クチビッ
() 稀
< > 古
[] 新



▨ ツバ
□ クチビル・クチビッ

⑰ つむじ (旋毛) — 項目番号 (10)・パターン〈III c〉 —

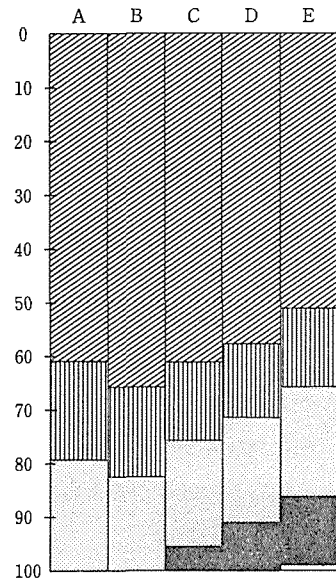
- 人吉寄りの地域にマキ類が、八代寄りの地域にギリ類が、明瞭な地域差を見せつつ分布する。マキ類の中ではケマキとマキとの間に、ギリ類の中ではギリギリ、ギリギシ、ギリギスなどの間に一定の地域差が認められる。
- 共通語形ツムジは地点 28 の場面 E 以外には全く見られない。最上位場面でも共通語形がほとんど認められないという点で、この項目は、次項の「めんこ」とともに異色の存在である。
- 帯グラフに見られるように、どの語形についても場面差はほとんど認められない。すなわち、グロットグラムに見られるように、全場面を同一の語形で通す地点が大部分である。しかし、少数ではあるが、場面によって表現を変えた地点も存在し、帯グラフを見ると、ギリ類（ギリギシ・ギリギス・ギリギリ・ギリ）の使用率が上位場面に進むにつれて減少する傾向が認められる（ただし、場面 A と B とは逆転している）。
- 場面差の認められるもので比較的多いのは、下位場面のギリギリを上位場面でマキに言いかえたもので、地点 12・13 のほか、地点 16 にもその傾向が認められる。すなわち、マキ類は人吉市付近では全場面で、その隣接地域では上位場面で用いられる傾向があり、その場面分布に地域差が認められる。グロットグラムにおけるこの分布は、マキ類が人吉方面から八代方面に向かって、上位場面から侵入しようとする姿を示している（ただし、ケマキではなく、マキという形に変化して侵入しようとしていることに注意したい）。
- 下位場面で俚言形を答え、上位場面では「無回答」となった地点がいくつかある。これは下位場面で答えた語形に方言臭を感じつつも、共通語形を知らないために答えに窮した結果と思われる。
- 『日本言語地図』では調査地域付近に、ギリギス、ギリギシ、ギリギリ、ギリ、マキ、ケマキなどが錯綜分布し、グロットグラムにおける分布状況とほぼ並行する。ギリギスとギリギシとでは前者が優勢であり、ギリギシは 2 地点にしか見られないが、グロットグラムにより、ギリギシがかなりの勢力をもって人吉寄りの地域に多く分布することがわかる。
- 『日本言語地図』で、ツムジは関東を中心とする比較的狭い地域に分布し、

表17 つむじ(旋毛)

	A	B	C	D	E
1	●	○	○	○	○
2	○	○	○	○	○
3	○	○	○	○	○
4	● ▲	○ ▲	○	○	○
5	● ▽	○	○	○	○
6	○	○	○	○	○
7	○	○	○	○	○
8	○ ○	○	○ ○	○ ○	○ ○
9	○ (○) ▽	○	○ ▽	○ ▽	○ ▽
10	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽
11	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽
12	○ ▽	○ ▽	○ ○	○ ○	○ ○
13	○ ▽	○ ▽	○ ○	○ ○	○ ○
14	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽
15	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽
16	○ (○) ▽	○ ▽	○ ○ ▽	○ ○ ▽	○ ○ ▽
17	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽
18	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽
19	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽
20	○ ▲	○ ▲	○ ▲	○ ▲	○ ▲
21	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽
22	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽
23	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽
24	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽
25	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽
26	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽
27	○ ▲	○ ▲	○ ▲	○ ▲	○ ▲
28	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽
29	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽
30	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽
31	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽
32	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽
33	○ ▲	○ ▲	○ ▲	○ ▲	○ ▲
34	○ ▲	○ ▲	○ ▲	○ ▲	○ ▲
35	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽
36	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽
37	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽
38	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽
39	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽
40	○ ▲ ▽	○ ▲ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽
41	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽
42	○ ▲	○ ▲	○ ▲	○ ▽	○ ▽
43	○ ▲	○ ▲	○ ▲	○ ▲	○ ▲
44	○ ▲	○ ▲	○ ▲	○ ▲	○ ▲
45	○ ▲	○ ▲	○ ▲	○ ▲	○ ▲
46	○ ▲	○ ▲	○ ▲	○ ▲	○ ▲
47	○ ▲	○ ▲	○ ▲	○ ▲	○ ▲
48	○ ▲	○ ▲	○ ▲	○ ▲	○ ▲
49	○ ▲	○ ▲	○ ▲	○ ▲	○ ▲
50	○ ▲	○ ▲	○ ▲	○ ▲	○ ▲
51	○ ▲	○ ▲	○ ▲	○ ▲	○ ▲
52	○ ▲	○ ▲	○ ▲	○ ▲	○ ▲
53	○ ▲	○ ▲	○ ▲	○ ▲	○ ▽
54	○ ▲	○ ▲	○ ▲	○ ▲	○ ▽
55	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽
56	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽	○ ▽

凡 例

- ケマキ ○ マ キ
 ⊙ ウズマキ ▲ グルマキ
 ▲ ギリ ▽ ギリギリ
 ▲ ギリギス ▽ ギリギシ
 | ツムジ ~ 無回答
 () 稀 < > 古
 [] 新



- ▨ ギリギシ・ギリギス
 ▤ ギリギリ・ギリ
 ▦ (～)マキ
 ■ 無回答
 □ ツムジ

近畿以西には全く見られない。調査地域で共通語形ツムジがほとんど答えられていない（おそらく知られていない）のは、このような全国分布の状況と関係がある。

⑱めんこ（面子）——項目番号（35）・パターン〈III c〉——

- 人吉寄りの地域にはウチ～類（ウチオコシ・ウチカエシ・ウチハギ・ウチダシ）が、八代寄りの地域にはカッパ類（カッパ・カッタ・カッパウチ）が分布する。ウチ～類の中ではウチオコシの勢力が最も大きい。ウチハギは地点4～13の比較的狭い地域に分布する。ウチカエシは一定の地域性を見せず、ウチオコシの中に散在する。カッパとカッタとでは前者の勢力が大きく、カッタはカッパにはさまれた形で分布する。この分布から、カッタはカッパから変化した、より新しい語形と考えられる。
- 共通語形メンコは地点7にしか見られない。共通語形がほとんど現れない異色の項目であることは、前項の「つむじ」と同じである。
- 場面差は顕著ではないが、ウチ～類の使用率は、上位場面になるほど減少する傾向が認められる。カッパ類の使用率は、Aが25%、Bが35%、Cが35%、Dが36%、Eが36%であり、A／BCDEの傾向が認められる。
- 51・54・55・56の地点ではカッパ類が全場面で用いられているが、それに隣接する49以下の地域では、下位場面のウチオコシを上位場面でカッパに言いかえる傾向が認められる。すなわち、カッパ類とウチオコシの双方の場面分布に地域差が認められる。グロットグラムにおけるこの分布は、カッパ類が八代寄りの地域から人吉方向に（上位場面から）侵入しつつあることを示している。
- 人吉寄りの数地点に見られるウチハギは下位場面でのみ用いられ、また「古」の注が付いたものが多い。すなわち、ウチハギはウチオコシに侵食され、下位場面に残存しているものであろう。八代市の2地点（55・56）の場面Aに見られるウチダシも同様の性格のものと思われる。
- 下位場面で俚言形を答え、上位場面で「無回答」の地点がいくつかある。これは、前項の「つむじ」と同様に共通語形を知らないための結果であろう。

表18 めんこ(面子)

	A	B	C	D	E
1	<㊦>	○	㊦	ㄣ	ㄣ
2	㊦	㊦	㊦	㊦	㊦
3	㊦	㊦	㊦	ㄣ	ㄣ
4		○	○	○	○
5	㊦	○	○	○	○
6	(㊦)(○)(㊦)	㊦(○)(㊦)	㊦	㊦	㊦
7	[㊦] ㊦	㊦	㊦	㊦	㊦
8	[㊦] ㊦	㊦	㊦	㊦	㊦
9	(㊦)(㊦) ㊦	㊦	㊦	㊦	㊦
10	㊦	㊦	㊦	㊦	㊦
11	㊦	㊦	㊦	㊦	㊦
12	㊦	㊦	㊦	㊦	㊦
13	[㊦] ㊦	㊦	㊦	㊦	㊦
14	㊦	㊦	㊦	㊦	㊦
15	㊦	㊦	㊦	㊦	㊦
16	㊦	㊦	㊦	㊦	㊦
17	㊦	㊦	㊦	*	*
18	㊦	㊦	㊦	㊦	㊦
19	㊦	㊦	㊦	㊦	㊦
20	㊦	㊦	㊦	㊦	*
21	㊦ (ㄣ)	㊦	㊦	㊦	㊦
22	㊦ (ㄣ)	㊦ (ㄣ)	㊦ (ㄣ)	ㄣ	ㄣ
23	㊦	㊦	㊦	㊦	㊦
24	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ
25	㊦	㊦	㊦	㊦	ㄣ
26	(㊦) [ㄣ]	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ
27	㊦	㊦	㊦	㊦	㊦
28	○	○	○	○	*
29	㊦	㊦	㊦	㊦	㊦
30	㊦	㊦	㊦	㊦	㊦
31	㊦	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ
32	㊦	㊦	㊦	㊦	㊦
33	㊦ (ㄣ)	ㄣ	㊦	ㄣ	ㄣ
34	㊦	㊦	㊦	ㄣ	ㄣ
35	㊦ (ㄣ)	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ
36	㊦	㊦	ㄣ	ㄣ	ㄣ
37	㊦	(㊦) [ㄣ]	㊦	㊦	㊦
38	㊦ ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ
39	○	○	○	○	○
40	㊦	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ
41	㊦	ㄣ	㊦	ㄣ	ㄣ
42	㊦	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ
43	<㊦>	ㄣ	㊦	ㄣ	ㄣ
44	㊦	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ
45	(㊦) ㄣ	㊦	㊦	㊦	㊦
46	㊦	(㊦) ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ
47	<㊦> (ㄣ) (㊦)	(㊦) ㄣ	(㊦) ㄣ	ㄣ	ㄣ
48	<㊦> [ㄣ]	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ
49	㊦	㊦	(㊦) ㄣ	(㊦) ㄣ	(㊦) ㄣ
50	ㄣ	ㄣ	ㄣ	○	○
51	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ
52	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ
53	ㄣ (ㄣ)	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ
54	<ㄣ> <ㄣ>	ㄣ ㄣ	ㄣ ㄣ	ㄣ ㄣ	ㄣ ㄣ
55	(ㄣ) (ㄣ)	ㄣ ㄣ	ㄣ ㄣ	ㄣ ㄣ	ㄣ ㄣ
56	(ㄣ) (ㄣ)	ㄣ ㄣ	ㄣ ㄣ	ㄣ ㄣ	ㄣ ㄣ

凡 例

㊦ ウチオコシ ○ ウチカエシ

㊦ ウチハギ ㊦ ウチダシ

ㄣ カッパウチ ㄣ カッパ

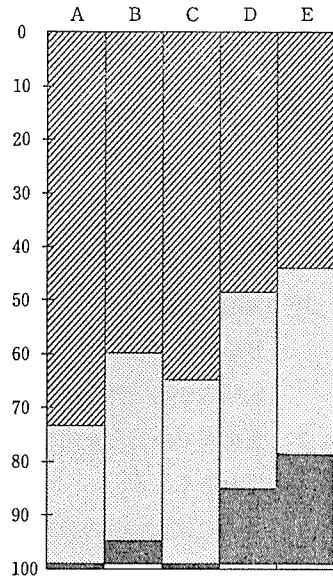
ㄣ カッパ ㄣ バンパン

| メンコ ㄣ 無回答

* その他

() 稀 < > 古

[] 新



ㄣ ウチ〜類

ㄣ カッパ類

ㄣ バンパン・無回答・その他

ㄣ メンコ

2.3 まとめ

以下に、第一次調査で得られた知見の概要を記す。

1. 全体として、下位場面の語形を上位場面では別の語形に言いかえる項目が多い。
 - 1-1 その場合、下位場面には俚言形、上位場面には共通語形が使われる項目が多い。
 - 1-2 共通語形の下位場面への侵入の程度は項目によって異なる。
 - 1-3 共通語形の下位場面への侵入の程度に一定の地域差が見られる項目がある。ただし、その共通語形は調査地域の隣接地に分布する方言形（共通語形と語形が一致する方言形）であることが多い。
 - 1-4 上位場面に西日本共通語（関西方言形）が多く使われる項目がある。これは、九州地方への関西方言の伝播（侵入）の反映と見られる。
 - 1-5 人吉市、または八代市という、地域の文化的中心地で使われている俚言形が、隣接地域の上位場面に侵入しているケースがある。この事実は、隣接地域の俚言形を受け入れる際に、在来の俚言形との場面による使い分けという過程を経ることがあること、すなわち、方言伝播のプロセスとして、場面差の観点も考慮する必要があることを示す。
 - 1-6 場面差については、全体的に見て、C D間の差が最も目立ち、A B間とB C間がそれに次ぐ。D E間の差は最も小さい。すなわち、話し相手が地域内か地域外かによる差が最も大きい。
2. 全場面で俚言形を用い、上位場面でも共通語化のほとんど見られない項目がある。
3. 『日本言語地図』の分布との関係について。全体として、『日本言語地図』の分布とグロットグラムの分布とは並行的関係にある。
 - 3-1 『日本言語地図』で当該地域（人吉～八代地域）に共通語形がほとんど分布していない項目では、グロットグラムでも場面Aに共通語形の分布がほとんど見られない。しかし、その場合でも、グロットグラムの上位場面には共通語形がある程度分布していることが多い。
 - 3-2 『日本言語地図』で当該地域に俚言形と共通語形が混在しているときに

は、グロットグラムの場面Aでも両形が混在し、また、上位場面では共通語化がほとんど完成していることが多い。

- 3-3『日本言語地図』で当該地域の隣接地域（熊本県北部や鹿児島県など）に共通語形（共通語形と形が一致する方言形を含む）が広く分布する項目では、グロットグラムにおける下位場面への同語形の侵入度はとくに大きい（その際に、共通語形の侵入の程度に一定の地域差が認められる場合があることは1-3に記した）。
- 3-4『日本言語地図』で九州地方に共通語形が全く、あるいはほとんど分布しない項目（「麦粒腫」「旋毛」）では、グロットグラムの場面Aに共通語形は全くなく、上位場面でも、ごくわずかしは見られない。
- 3-5『日本言語地図』で近畿を中心に分布する語形が九州北部にまで広がりつつある様相を見せている項目では、当該地域でその語形を上位場面に採り入れている。すなわち、近畿方言（関西方言）の地方共通語化（西日本共通語化）が認められる（1-4でも触れた）。

3. 第二次調査(表現法編)

3.1 調査の方法・内容

3.1.1 調査項目・調査対象場面

調査は標準語の文を示してそれを方言文に翻訳させる方式の項目を中心とし、それに第一次調査との比較のため、若干の語彙項目を加えた。本稿でとりあげた調査項目の文例を以下に掲げる（下線部は考察の対象とする形式）。

1. (今晚テレビを見るかと聞かれて) 私は 見ない (項目番号 2)。
2. きのうテレビを 見たか (項目番号 3)。
3. 雨が降っている から外に出ない (項目番号 6)。
4. おまえは きのう どこに 行ったか (項目番号 7)。
5. (人に呼ばれて返事をするとき) いま行く よ (項目番号 9)。
6. 歩きながら 話そう (項目番号 10)。
7. この字が読めるか (項目番号 14)。
8. 私はもう 飽きた (項目番号 25)。

調査文は全部で 25 文であったが、そのうち、本稿では上に掲げた 8 文(の中の 8 項目)についての分析結果を記す(紙幅の都合で、ごく一部の項目しか採り上げることができなかった。残りについては、別の機会に公表したい)。

調査対象場面は次の A B C D E F の 6 場面。第一次調査とは設定場面を大幅に変更した。なお、括弧内は第一次調査における設定場面で、第二次調査のそれぞれの場面に比較的近いと考えられるものである。

- A 妻に (同年配の土地の人とくつろいで)。
- B 親類の若い人に (土地の若い人とくつろいで)。

- C 友達にいていねいに } (村の会合の席などであらたまって)。
 D 同じ村の目上の人に }
 E 熊本から来たセールスマンに（熊本で初対面の人と話すとき）。
 F 東京から来た初対面の人に（東京で初対面の人と話すとき）。

文体的に最も下位の語形が出ると予想される場面としてAを設定し、最も上位の場面としてFを設定した点は第一次調査における考え方と基本的には同じであるが、場面Aとしては、前回の「友達」よりもより低い待遇価の形式が使われることを予想して「妻」を対象として設定し、待遇表現を考察するためには「目上」と「対等以下」とを分離しておく必要性を考慮してCとDを設定した。また、前回の上位2場面は被調査者がよその土地に出かけていくことを想定したものであるが、実際には調査地域の老年層の大部分は県外に旅行した経験のない人達であったので、現実には体験しうる場面として、「よその土地から来た人と話す」場面に変更した。

以上6場面のうち、A B C Dは（対象が）同一集落内で、E Fは集落外、A B Cは対等以下でD E Fは目上または初対面、A Bはくだけた表現を期待しC D E Fはていねいな表現を期待した場面と言える。

質問順序は、第一次調査では下位場面から上位場面に向かってA B C D Eの順であったが、それでは調査が進むにつれて、被調査者が調査の目的を察知し、場面ごとに意識的に少しずつていねいな形式を答えることもありうると考え、第二次調査では、A→F→C→E→B→Dの順に変更した（すなわち、文体的距離が直近と予想される2場面が連続しないように配慮した）。質問法は、語彙項目等を除き、原則として標準語の文（既出）を口頭で示し、それをカードで提示した各場面（場面ごとに1枚、計6枚のカードを用意）でどのように表現するかをたずねた。

3.1.2 調査時期・調査者

予備調査を1973(昭和48)年3月に、本調査を1975(昭和50)年3月に実施した。本調査における調査者は、徳川宗賢(言語変化研究部第一研究室長)、佐藤亮一(同室主任研究官)、江川清(言語行動研究部第一研究室研究員)ならびに真田信治(梶山女学園大学講師)の4名(いずれも所属は調査当時)であった。

3.1.3 調査地域・被調査者

別表参照。第一次調査では各地点1名について調査したが、第二次調査では各地点数名の被調査者について調査を行ない、同一地点内の個人差についても考察することにした。かわりに調査地点数は大幅に減らした。具体的には、球磨郡相良村から八代郡宮原町に至る地域で12の集落を直線状に選び、それぞれの地点で、その土地に生まれ育った老年層の男性数名について調査を行なった。ただし、やむを得ず女性を調査した場合もある。

調査地点・被調査者一覧

地点番号	調査地点	被調査者	性別	生年	調査者	地点番号	調査地点	被調査者	性別	生年	調査者
イ 8303.62	球磨郡相良村深水	①池田敬一	男	明 28	Sat	ホ 8302.34	球磨郡球磨村大瀬	②池下美義	男	明 33	Tok
		②尾園キクエ	女	明 40	Tok			③柳詰十郎	男	明 37	Tok
		③川辺勝一	男	明 44	Tok			④松江仁寿	男	明 45	San
		④池田松男	男	明 44	Sat			①大瀬政喜	男	明 34	Sat
		⑤川辺うきよ	女	大 9	Ega			②愛甲輝男	男	明 40	San
ロ 8302.68	人吉市中神町大柿	①山上義巨	男	明 33	Ega	ヘ 8302.14	球磨郡球磨村神瀬	③大瀬亀蔵	男	明 45	San
		②大柿重喜	男	明 37	Sat			④川口亀男	男	大 4	Sat
		③大柿藤刀	男	明 40	San			①馬場栄太郎	男	明 20	Tok
		④山上万蔵	男	明 41	Tok			②飯星政太郎	男	明 26	Tok
		⑤大柿益田信	男	明 41	Tok			③糺毛豊市	男	明 32	Ega
ハ 8302.57	球磨郡球磨村渡	⑥尾方 等	男	大 4	Sat, San			④糺毛敬太郎	男	明 38	Sat
		①小川立身	男	明 31	Ega	ト 8302.04	芦北郡芦北町巖瀬	⑤木塚鶴子	女	明 40	Tok
		②東 勝喜	男	明 42	Ega			⑥小橋口隆	男	明 41	Sat
		③長船光喜	男	明 43	Sat			⑦上原はるの	女	明 43	Ega
		④山口ミエ	女	大 6	Sat			⑧木屋高美	男	大 2	Sat
ニ 8302.55	球磨郡球磨村一勝地	⑤船戸成儀	男	大 6	Ega			⑨上原高喜	男	大 6	Sat
		①柏木房喜	男	明 30	San			⑩山本広人	男	明 32	Ega

チ 7392.76 八代郡坂本村中津道	②池田幸平	男 明 38 Tok	ル 7392.05 八代市宮地町	③坂田 隆	男 明 43 Tok
	③湖上真政	男 大 2 Tok		④寺尾 薫	男 大 4 San
	④鶴尾 均	男 大 3 Ega		①角 義行	男 明 40 Sat
	①久保繁恵	男 明 39 Sat		②畑中富太郎	男 明 40 Ega
	②富田正雄	男 明 43 Ega		③山口末太郎	男 明 41 Sat
リ 7392.55 八代郡坂本村川岳破木	③谷下 等	男 明 44 Ega	ヲ 7392.67 八代郡宮原町宮原	④山村祐司	男 大 2 Ega
	④村内富蔵	男 明 44 Sat		①乗本祝平	男 明 28 Tok
	⑤早野敏勝	男 大 7 Sat		②伊藤 弥	男 明 33 Sat
	①湖上市松	男 明 22 Tok		③坂倉惟一	男 明 35 Sat
	②平田 甫	男 明 39 Tok		④塚本 一	男 明 37 Tok
ヌ 7392.36 八代郡坂本村坂本	③谷口七郎	男 明 40 Sat		⑤内田 茂	男 明 39 Tok
	④三島季信	男 明 40 Sat		⑥林田利夫	男 明 40 Tok
	①井口清人	男 明 33 Tok		⑦内田 恵	男 大 4 Tok
	②財津安衛	男 明 34 San			

地点番号：イ～ワは地点略号，6桁の数字は方言調査基礎図システムによる番号。

被調査者：①②③④……は被調査者番号。

被調査者の生年：明一明治，大一大正

調査者：Tok一徳川宗賢，Sat一佐藤亮一，Ega一江川清，San一真田信治

3.2. 結果と考察

第一次調査と同様に，調査結果を項目ごとのグロットグラム（横軸に場面，縦軸に地点）の形に整理し，その分布を下記の三つのパターンに分類した。

〈I〉 場面差が顕著に現れ，地域差が目立たないもの。

〈II〉 地域差が顕著に現れ，場面差が目立たないもの。

〈III〉 場面差と地域差の両方が認められるもの。

ここでは，〈I〉の例として「私は見ない」「いま，行くよ」「この字が読めるか」の3項目，〈II〉の例として「歩きながら話そう」「雨が降っているから外に出ない」の2項目，〈III〉の例として「きのうテレビを見たか」「私はもう飽きた」「おまえはきのうどこに行ったか」の3項目，計8項目を採り上げて分析する。なお，第一次調査の結果については〈I〉〈II〉〈III〉のそれぞれについて下位分類を行なったが，第二次調査では採り上げた項目が少数なので，細部の特徴に関しては，それぞれの項目ごとに触れる。

①9 私は見ない（「テレビを見るか」と聞かれて）——項目番号（2）・パターン
〈I〉——

- 場面差が顕著である。すなわち、場面ABCと場面DEFとの間に明瞭な断層があり、ABCではもっぱらオレが、DEFではワシ、ワタシ、ワタクシが多く用いられる。
- ワタシは大部分の地点（被調査者）で用いられているが、ワシとワタクシは一部の地点（被調査者）にしか見られない。
- 下位場面のオレを、より上位の場面でワシに言いかえた地点がかなり見られる（地点・被調査者番号、イ3・ロ1・ロ3・ロ5・ハ1・ハ5・ニ2・ニ3・ヘ4・ト1・チ5・ヌ1）。すなわち、この地域でワシはオレよりも待遇価の高い形式であると判定される（なお、チ5の被調査者は妻（場面A）を親類の若者（場面B）よりも高く待遇し、ハ1とハ5の被調査者はセールスマン（場面E）を比較的低く待遇したものと解釈される）。
- ワタシとワシの両方を用いる被調査者は、ワタシをワシよりも上位の場面で用いる傾向が認められる（ロ3・ロ5・ニ2・ニ3・チ5・ヌ1・ル1など）。なお、イ4・ヌ3はセールスマン（場面E）を、同じ村の目上の人（場面D）よりも低く待遇したものと解釈される。
- ワタクシはワタシよりも上位の場面で用いられ、原則として最上位場面（場面F）を含む各場面で用いられる（例外、ホ4）。すなわち、オレ、ワシ、ワタシ、ワタクシの各語形の中では、ワタクシの待遇価が最も高い。
- 以上の結果から、この地域では、オレ>ワシ>ワタシ>ワタクシの順で、右側の語形ほど待遇価が高いと認められる。
- この地域では、以前にはもっぱらオレとワシが待遇差を伴いつつ用いられていたが、後に共通語形のワタシ、ワタクシ、その他が侵入し、ワタシがワシの座の大部分を奪った結果が、このグロットグラムにおける分布状況であると推定される。
- 「その他」としてまとめた語形の内容。イ2B（ワイドモァ）・イ2D（ワッチャ）・イ4AB（ウチワ）、ヘ3C（ワラ）、ト2A（アタイワ）、ヲ3B（コッチワ）・ヲ3E（オドマ）

表 19 私は見ない

		A	B	C	D	E	F
イ	1	▲	○	▲	○	○	○
	②	▲	▲ *	▲		* ○	○
	3	▲	▲	▲	◎	◎	●
	4	▲	* ▲	* ▲	○	◎	●
	⑤	▲	○	○	○	○	○
ロ	1	▲	◎	◎	◎	◎	㇏
	2	▲	○	○	○	○	○
	3	▲	◎	○	○	○	○
	4	▲	▲	▲	△	㇏	㇏
	5	▲	▲	◎	○	◎	○
	6	▲		△ ○	○	○	○
ハ	1	▲	▲	▲	◎	▲	●
	2	▲	●		□	●	□
	3	▲	▲	▲	▲	○	○
	④	○	○	○	○	○	○
	5	▲	▲	▲	◎	▲	◎
ニ	1	㇏	▲	○	○	○	○
	2	▲	▲	◎	○	○	○
	3	▲	▲	▲	◎	○	○
	4	▲	▲	▲	○	○	○
ホ	1	▲	▲	▲	▲	○	○
	2	▲	▲	▲	▲	○	○
	3	▲	▲	▲	○	○	○
	4	▲	▲	▲	○	●	○
ヘ	1	▲	▲	▲	○	○	●
	2	▲	○	○	○	○	○
	3	▲	△	△	(*)	△	●
	4	▲	▲	▲	◎	●	●
	⑤	▲	▲	▲	○	○	○
	6	▲	▲	▲	○	○	○
	⑦	▲	▲	▲	○	○	○
	8	▲	▲	▲	○	○	○
	9	▲	▲	▲	○	○	○

		A	B	C	D	E	F
ト	1	▲	▲	▲	◎	○	◎ ○
	2	▲ △ *	▲	▲	○	○	○
	3	▲	▲	▲	○	○	●
	4	▲	▲	▲	○	○	○
チ	1	▲	▲	▲	○	○	○
	2	□	□	□	●	●	● □
	3	▲	▲	△	○ △	△ ○	△
	4	▲	▲	▲	○	○	○
	5	◎	▲	◎	◎	○	○
リ	1	▲	▲	▲	○	○	○
	2	▲	▲	▲	○	○	○
	3	▲	●		㇏	●	●
	4	▲ △	●	●	●	△	●
ヌ	1		▲	▲	◎	◎	○ ○
	2	▲	▲	○	○	○	○
	3	▲	▲	▲	○	◎	○
	4	□	▲	□	●	□	□
ル	1	◎	◎	○	○	○	○
	2	▲	▲	▲	○	○	●
	3	▲	▲	▲	㇏	○	○
	4	▲	▲	▲	▲	○	● △
ヲ	1	▲	▲	▲	○	○	●
	2	▲	▲	▲	○	○	○
	3	▲		*	●	*	●
	4	△	▲	▲	○	○	○
	5	▲	▲	[▲]	△ ○	○	△
	6	▲	▲	▲	○	○	○
	7	▲	▲	▲	○	○	○

- ▲ オラー
◎ ワシャー
○ ワタシワ
● ワタクシワ
□ ボクワ
△ ジブンワ
㇏ 代名詞不使用
* その他

() 稀

< > 古

[] 新

被調査者番号を○でかこんだものは
被調査者が女性。

②⑩いま、行くよ（人に呼ばれて返事をするとき）——項目番号(9)・パターン
〈I〉——

- 場面差が顕著である。前項と同様に場面ABCと場面DEFとの間に明瞭な断層があり、ABCにはクル類（クルゾ・クルタイ・クルワイなど）と一部にイク類、DEFにはキマス類（キマス・キマスヨなど）と一部にイキマス類、マイリマス類などが分布する。
- 下位場面のクル類を上位場面でキマス類に言いかえた者は約25名（解釈によって、若干、数が異なる）と多数存在するのに対し、下位場面のクル類を上位場面でイク類に言いかえた者は非常に少ない。クル→キマスのタイプの被調査者は次のとおり（＊印は若干タイプの異なるもの）。

イ1・イ3・イ4・ロ1・^{*}ロ5・ハ1・ハ3・ハ4・ハ5・ホ1・ホ4・
ヘ1・ヘ4・ヘ5・ヘ6・^{*}ト1・ト2・ト3・チ4・リ3・ル4・ヲ3・
ヲ4・ヲ5・ヲ7^{*}

なお、下位場面のクル類を上位場面でイク類に言いかえた者はヘ7のほか、ホ3・ヘ9もそれに準じ、みかたによっては、チ3・チ5・ヌ3・ヲ6なども、このタイプと認めることができる（いずれにせよ少数である）。

- 一方、クル→キマス→マイリマスや、クル→キマス→アガリマスなどのように、下位場面のクル類を最上位場面でクル類・イク類以外の語類（共通語の敬語動詞）に言いかえた者も一定数見られる（イ5・ロ2・ロ4・^{*}ニ3・ニ4・ヘ2・ル3／ヌ1・ル1・ル2／ヘ3など。なお、＊印はそのタイプに準ずるもの）。

- 最下位場面でもイク類を用い、それを上位場面でイキマス類に言いかえた者は、ロ3・ハ2・ニ1・ヌ2・ヌ4の5名である。
- 以上の結果から、この地域では、多数の者がこの文脈におけるクル（キマスを含む）の用法が方言的なものであることを意識していないと考えられる。
- 「その他」としてまとめたものの内容。イ2A（マットンナーイ）・イ2B（マツトレイ）・イ2C（マツトッテクダーシ）・イ2D（マツトッテクダイナー）・ニ1F（ハイ）・ホ2A（オー）・ホ2A（オイ）・リ1F（マチナッセーとマツトンナハレ）・ヌ4E（ハイハイ）

表 20 いま、行くよ

	A	B	C	D	E	F
イ	1△	△	△	△	△	▲
	②○	*	*	*	*	▲
	3△	△	△	▲	▲	▲
	4△	△	△	▲	▲	▲
	⑤△	▲	▲			
ロ	1△	△	△	ψ	▲	▲
	2△	△	▲	▲	▲	
	3○	●	●	●	●	●
	4△	△	△▲	▲	▲	▲
	5△	△	△	△	▲	▲
	6△	○	△	ψ	ψ	ψ
ハ	1△	△	△	▲	▲	▲
	2○	○	○	●	○	●
	3△	△	△	▲	▲	▲
	④△	△	△	△	▲	▲
	5△	△	△	▲	▲	▲
ニ	1○	○	○	●	●	*
	2△	○	△	●	▲	●
	3△	△	△	△	▲	
	4△	△	△	▲	▲	
ホ	1△	△	△	△	▲	▲
	2	*○	○	●	▲	▲
	3	*△	△	△	●	●
	4△	△	▲	△	▲	▲
へ	1△	△	△	△	▲	▲
	2△	△	▲	▲	▲	
	3△	△	△			∠
	4△	△	△	▲	▲	▲
	⑤△	▲	▲	▲	▲	▲
	6△	○△	△	▲	▲	▲
	⑦△	△	△	●	●	●
	8△	△	△	▲	▲	
	9△	○△	△	●	●	●

	A	B	C	D	E	F
ト	1△	△	△	▲	▲	▲
	2△	△	△	▲	▲	▲
	3△	△	△	▲	▲	▲
	4○	△	△	▲	○	●
チ	1△	○	○	▲	▲	▲
	2△	△	△	▲	△	●
	3△	△	△	○	▲	●
	4△	△	△	▲	▲	▲
	5△	○△	△	●	○	●
リ	1△	○△	△	△	△	△
	2△	○△	○	○	△	●
	3△	△	△	▲	▲	▲
	4△	○△	▲	▲	▲	∠
ヌ	1△	△	▲	▲	ψ	ψ
	2○	○	○	●	●	●
	3△	△	△	▲	▲	▲
	4○	○	○	●	*	●
ル	1△	△	△	▲	▲	▲
	2△	△	△	▲	▲	ψ
	3△	△	△	▲	▲	
	4△	△	△	▲	▲	▲
ヲ	1△	△	△	▲	▲	▲
	2○	○	△	▲	●	●
	3△	△	△	▲	▲	▲
	4△	△	△	▲	▲	▲
	5△	△	△	▲	▲	▲
	6△	△	△	▲	▲	▲
	7△	△	△	▲	△	▲

△ クル類 ψ アガリマス
 ○ イク類 ∠ オイデマス
 ▲ キマス類 ㊦ オウカガイシマス
 ● イキマス類 * その他
 | マイリマス類

被調査者番号を○でかこんだものは
被調査者が女性。

②この字が読めるか——項目番号(14)・パターン〈I〉——

- 場面差が顕著であり、場面ABCには、ヨミキル・ヨミエル・ヨムイ・ヨムル・ヨメルのぞんざい体、場面DEFには、それらの語形の丁寧体または尊敬体が多く用いられる。ただし、上位場面における俚言形の丁寧体・尊敬体は少なく、全体的に言えば、下位場面が主として俚言形のぞんざい体、上位場面が主として共通語形の丁寧体（一部に尊敬体）であると見ることができ。なお、ここで「ぞんざい体」「丁寧体」「尊敬体」としたそれぞれの見出し語形の内容例は下記のとおりである。

ヨミキル（ぞんざい）

ヨミキルカ・ヨミキルカイ・ヨミキルカナ・ヨミキルナ・ヨミキリヤ・ヨミキリカイ・ヨムキルナ・ヨムキルカイなど。

ヨミキル（丁寧）

ヨムキルマスカのみ。

ヨミキル（尊敬）

ヨミキリナハルカ・ヨミキリナハッデスカ・ヨミキンナルデスカ・ヨミキリナハリマスカイ・ヨミキンナンモスカなど。

ヨミエル（ぞんざい）

ヨミエーヤー・ヨミエンナー・ヨミユンナ・ヨミューカイ・ヨミイリヤー・ヨミイーヤ・ヨミインナなど。

ヨミエル（丁寧）

ユミエッデスカーのみ。

ヨミエル（尊敬）

ヨミインナッデスカのみ。

ヨムイ（ぞんざい）

ヨムイヤ・ヨムイカのみ。

ヨムル（ぞんざい）

ヨムルカ・ヨムルカイ・ヨムットネ・ヨムルヤ・ヨムンヤ・ヨムルナイなど。

ヨムル（丁寧）

表 21 この字が読めるか

	A	B	C	D	E	F
イ	1	○	◎	◎	◎	◎
	2 △	△	△	△	△	■
	3 < >			∠	*	*
	4 □	□	□	*	◎	◎
	5 □	□	■	◎	◎	◎
ロ	1 △	*	*	*	*	*
	2 △	□	□	■	◎	◎
	3	○	◎	◎	◎	◎
	4 △	△		△ ▲	▲	▲
	5	□	△ ◎	◎	◎	◎
	6 □	□	□	◎	◎	◎
ハ	1 □	□	□	●	●	●
	2 △ ○ △	○ △	○ ◎	◎	◎	◎
	3 (△)	(△)	□ ◎ (■)	◎ (■)	◎ (■)	◎ (■)
	4 □	○	□	○ ◎	◎	◎
	5 △	△	△ △	◎	◎	◎
ニ	1 ○	○	○	◎	◎	◎
	2			◎	◎	◎
	3			∠	●	●
	4				◎	◎
ホ	1	□		□	◎	◎
	2 ○	○	○	◎	◎	◎
	3 ○	○	○	◎	◎	◎
	4 △	□	□	△ ◎	◎	◎
ヘ	1			∠	∠	*
	2 □	□	◎	*	◎	◎
	3			◎	◎	◎
	4 () □ ○	○	◎	◎	◎	◎
	5 △	△	△ ◎	◎	◎	◎
	6 □	□	□	■	●	●
	7			■	◎	◎
	8 () ○ ○		○ ◎	◎	◎	◎
	9 □	□	□	◎	◎	□
ト	1 □	□	□	◎	◎	◎
	2 ○					
	3 □	□	□	◎	□	◎
	4 □	□	□	◎	◎	◎
チ	1	□	□		◎	◎
	2 □	□	□	□	◎	◎
	3 □	□	◎	◎	◎	◎
	4 △	△	△	*	*	*
	5	○	○	◎	◎	◎
リ	1					
	2 □	□	□	□	◎	◎
	3		○	◎	◎	○
	4 () ○ ◎	◎	◎	◎	◎	◎
ヌ	1 < > ○	○	< ∠ > ◎	◎	△ ◎	◎
	2		◎	◎	◎	◎
	3			∠	∠	∠
	4 ○	○	*	◎	●	●
ル	1	□	□	◎ ◎	◎	◎
	2 ○	○	○	◎	◎	◎
	3 () □ () □	◎	◎	◎	◎	◎
	4			∠	∠	∠
ヲ	1			∠	∠	∠
	2			◎	◎	●
	3		□	*	*	◎
	4 < > □			∠	∠	∠
	5 □	□	□	◎	*	*
	6			◎	◎	◎
	7			∠	∠	ψ

< > 古

() 稀

被調査者番号を○でかこんだものは被調査者が女性。

| ヨミキル (ぞんざい)

ψ ヨミキル (丁寧)

∠ ヨミキル (尊敬)

△ ヨミエル (ぞんざい)

▲ ヨミエル (丁寧)

▲ ヨミエル (尊敬)

△ ヨムイ (ぞんざい)

□ ヨムル (ぞんざい)

■ ヨムル (丁寧)

○ ヨメル (ぞんざい)

◎ ヨメル (丁寧)

● ヨメル (尊敬)

* その他

ヨムッデスカ・ヨムットデスカなど。

ヨメル (ぞんざい)

ヨメルカ・ヨメルカイ・ヨメルネ・ヨメルヤなど。

ヨメル (丁寧)

ヨメマスカ・ヨメマスカナ・ヨメルデスカ・ヨメモスカなど。

ヨメル (尊敬)

ヨメナッデスカ・ヨメナリマデスカなど。

- 各被調査者の場面差の内容をいくつかのタイプに分けて示すと次のとおりである (以下、矢印の左側は下位場面の語形、右側は上位場面の語形。なお、ここでは、ヨムルを俚言形、ヨメルを共通語形として処理した。*印は、やや問題もあるが、一応そのタイプと認めたものである)。

俚言形 (ぞんざい体) → 共通語形 (丁寧体または尊敬体) ……イ^{*}1・イ4・
ロ5・ロ6・ハ1・ハ5・ニ2・ニ4・ホ1・ホ4・ヘ2・ヘ3・ヘ5・
ヘ9・ト1・ト3・ト4・チ1・チ2・チ3・ヌ2・ル1・ル3・ヲ2・
ヲ3^{*}・ヲ5^{*}・ヲ6

俚言形 (ぞんざい体) → 俚言形 (丁寧体または尊敬体) ……イ3^{*}・ロ4・ヘ
1^{*}・ヌ3^{*}・ル4^{*}・ヲ1^{*}・ヲ4^{*}・ヲ7

共通語形 (ぞんざい体) → 共通語形 (丁寧体または尊敬体) ……ニ1^{*}・ホ2^{*}・
ホ3^{*}・ヌ4^{*}・ル2^{*}

俚言形 (ぞんざい体) → 俚言形 (丁寧体) → 共通語形 (丁寧体または尊敬体)
……イ2^{*}・イ5^{*}・ロ2^{*}・ニ3^{*}・ヘ6^{*}・ヘ7^{*}・リ2^{*}

俚言形 (ぞんざい体) → 共通語形 (ぞんざい体) → 共通語形 (丁寧体) ……
ロ3^{*}・ハ4^{*}・チ5^{*}

- リ1の被調査者は全場面でヨミキル (ぞんざい体) を用いており、ト2もそれに準ずる。しかし、下に示すように、実際には両者とも文末助詞による場面差が認められる。

リ1 ……ヨミキリカイ・ヨミキリケー (ABC), ヨミキリカナー (DEF)

ト2 ……ヨメルカイ・ヨミキルカイ・ヨミキルヤイ・ヨミキリヤ・ヨミキル
ナー (A), ヨミキルカイ (B), ヨミキルナ (CDEF)

グロットグラムでは文末助詞を省略して示してあるが、このような例は他の多くの被調査者について認められる。

例（ニ４）……ヨミキーヤ（ＡＢ），ヨミキンナ（ＣＤ），ヨメマスカ（ＥＦ）
 なお，疑問を表わす終助詞の場面差（待遇価）については，㊹「きのう，テレビを見たか」の項目を参照されたい。

- 地域差は目立たないが，ヨミキルは人吉寄りの地域（イロハ寄り）では下位場面に限定して用いられるのに対し，八代寄りの地域（ト以降，とくに地点ヲ）では上位場面を含む全場面で用いられる傾向がある。すなわち，ヨミキルの場面分布に一定の地域差が認められる。
- 参考文献３および４によれば，能力可能の場合，～キルは主として福岡・大分・熊本に，～エル・～ユルは主として佐賀・長崎に分布し，鹿児島全域・宮崎の一部に～ガナル（読む＝ヨミガナル）が見られる。グロットグラムで，八代寄りの地域でヨミキルが優勢であるのは，九州北部における～キルの優勢分布を反映しているものと見られる。可能動詞（ヨメル・ヨムルの類）は，九州ではわずかに散在するにすぎず，グロットグラムの上位場面を中心とする分布は，共通語形の侵入を示すものと考えられる。
- 「その他」としたもののうち，イ３ＥＦとヲ５ＥＦは「表現なし」（この場面でそんな質問はしない）であった。また，可能表現を用いず，「読む」の類を用いた被調査者として，イ４Ｄ（ヨミマスカ），ロ１Ｅ（ヨムデスカ），ヘ１Ｅ（ナンテヨミマスカ），ヘ２Ｄ（ヨムトデスカ），チ４ＤＥＦ（ヨミナハデスカ），ヲ４Ｃ（ヨムカナ）などがあり，これらはいずれも比較的上位の場面に見られるところから，「表現なし」とともに，相手の能力を直接問うことを避けた，一種の敬意表現ではないかと思われる。なお，ロ１Ｂは「ワカイヤー」，ロ１Ｃは「ワカモースカヤ」，ロ１Ｄは「ワカモースカ」，ロ１Ｆは「ワカリモースカ」であった。

②②歩きながら話そう——項目番号(10)・パターン〈II〉——

- 地域差が明瞭であり、人吉寄りの地域（地点イロハ寄り）に～カットシューが、八代寄りの地域（地点ヌルヲ寄り）に～カタデが分布する。共通語形の～ナガラは全域的に見られる。～カタガタは地域性がなく、ホとりの地点にわずかに見られる。

- 場面差は不明瞭であり、助詞部分については全場面で同一の語形を用いる傾向が強い。ただし、一部の被調査者は下位場面の俚言形（カットシュー・カタデ）を上位場面で共通語形のナガラに言いかえる傾向が認められる。

カットシュー→ナガラ（イ3・イ4・ロ2・ロ5・ロ6・ハ3・ニ3）

カタデ→ナガラ（ホ2・ヘ4・チ1・チ4・ヌ3・ル1・ル3・ヲ2・ヲ6・ヲ7）

なお、動詞部分については、下位場面のイクを上位場面でアルクに言いかえる傾向がある（イ4・ロ2・ロ6・ハ4・ニ3・ヘ4・ヘ8・チ1・チ4・ヌ3・ヲ3・ヲ5など）。

- 見出し語形のうち、イキナガラにはユキナガラを含めた。また、カタデと表示した語形のうち、地点ヲの内容はすべてカタデンであり、イクカタデのうち、ヌ3はすべてアユデイクカタジャ、アルキナガラのうち、ト3はすべてアユキナガラである。

- 「その他」としてまとめたものの内容。ロ1 C D E F（ミチミチ）・ハ1 D（イクトチュー）・ニ1 A（該当語形なし）・ニ1 E F（ハナシナガラ）・ニ3 A C D（イキピンニ）・ホ4 C（イキガケ）・ヘ1 C F（ユクユク）・ヘ4 D（ユキユキ）・ト2 B D E F（アルイテ）・ト2 C（アルイテデモ）・ヲ3 A（アユミアユミ）

②③雨が降っているから外に出ない——項目番号(6)・パターン〈II〉——

- 地域差が明瞭であり、人吉寄りの地域（地点イロハ寄り）にはデが多く分布し、八代寄りの地域（地点ヌルヲ寄り）にはケンが多く分布する。共通語形のカラは一定の地域性を示さず、全域的に散在する。ただし、地点トには全く見られず、地点ルとヲでは最上位場面にわずかに見られるのみである。

表 22 歩きながら話そう

	A	B	C	D	E	F
イ	1 △	△	△	△	△	△
	2 △	△	△	△	△	△
	3 △ (新)	△	△	△	△	△
	4 △	△	△	△	△	△
	5 △	△	△	△	△	△
ロ	1 △	△	*	*	*	*
	2 △	△	△	△	△	△
	3 △	△	△	△	△	△
	4 △	△	△	△	△	△
	5 △	△	△	△	△	△
	6 △	△	△	△	△	△
ハ	1 △	△	△	*	△	△
	2 △	△	△	△	△	△
	3 △	△	△	△	△	△
	4 △	△	△	△	△	△
	5 △	△	△	△	△	△
ニ	1 *	△	△	△	*	*
	2 △	△	△	△	△	△
	3 △	△	△	△	△	△
	4 △	△	△	△	△	△
ホ	1 △	△	△	△	△	△
	2 △	△	△	△	△	△
	3 △	△	△	△	△	△
	4 △	△	△	△	△	△
ヘ	1 △	△	△	*	△	*
	2 △	△	△	△	△	△
	3 △	△	△	△	△	△
	4 △	△	△	△	△	△
	5 △	△	△	△	△	△
	6 △	△	△	△	△	△
	7 △	△	△	△	△	△
	8 △	△	△	△	△	△
	9 △	△	△	△	△	△

	A	B	C	D	E	F
ト	1 ○	○	○	○	○	○
	2 ●	●	●	●	●	●
	3 △	△	△	△	△	△
	4 △	△	△	△	△	△
チ	1 ○	○	○	○	○	○
	2 △	△	△	△	△	△
	3 △	△	△	△	△	△
	4 ○	○	○	○	○	○
	5 △	△	△	△	△	△
リ	1 ○	○	○	○	○	○
	2 ●	●	●	●	●	●
	3 △	△	△	△	△	△
	4 △	△	△	△	△	△
ヌ	1 ●	●	●	●	●	●
	2 △	△	△	△	△	△
	3 ○	○	○	○	○	○
	4 △	△	△	△	△	△
ル	1 ○	○	○	○	○	○
	2 ○	○	○	○	○	○
	3 ○	○	○	○	○	○
	4 ○	○	○	○	○	○
ヲ	1 ○	○	○	○	○	○
	2 ○	○	○	○	○	○
	3 ○	○	○	○	○	○
	4 ○	○	○	○	○	○
	5 ○	○	○	○	○	○
	6 ○	○	○	○	○	○
	7 ○	○	○	○	○	○

() 稀

< > 古

[] 新

被調査者番号を○でかこんだものは
被調査者が女性。

△ イキカットシュー
▲ アユビカットシュー
○ イクカタデ
● アルクカタデ
△ イクカタガタ
○ アユミカタガ
タ
△ アルキカタガ
タ
△ イキナガラ
△ アルキナガラ
* その他

- 場面差はそれほど目立たないが、デは上位場面に進むにつれて減少し、カラは逆に増加する。ケンについては場面差がほとんど認められない（表参照）。

	A	B	C	D	E	F
デ	42	36	37	28	18	17
ケン	19	19	16	17	19	15
カラ	6	8	10	13	22	28

各語形の場面別出現度数

デの使用度はCとDとの差、およびDとEとの差が比較的大きく、A B C / D / E Fの傾向が認められる。カラはD E間の差が比較的大きく、A B C D / E Fの傾向が認められる。なお、全場面で同一の語形を用いた被調査者（すなわち場面差を全く示さなかった被調査者）が22名（全被調査者の36%）おり、この点は、①⑨②⑩②⑪②②および②④②⑤②⑥②⑦と著しく異なる、この項目の特色である。

- 場面間の切りかえについては、下位場面のデを上位場面でカラに言いかえた者が最も多い。ケンをカラに言いかえた者も数名ある（リ3・ル3・ヲ5・ヲ6など）。ケンは全場面を通して用いられる傾向が強く、この点でデやカラと文体的性格を異にする。一方、へ6やチ5などのように下位場面のデを上位場面でケンに言いかえたケースがあること、すなわち、俚言形1を俚言形2に言いかえた者があることが注目される（ト2・ト4・ヌ3などもそれに準ずる）。
- 参考文献3によって順接助詞「から」の分布を見ると、デは鹿児島全域のほか、宮崎西端・熊本南部などに、ケン（ケニ・ケンデ・ケーなどを含む）は熊本北部から福岡南部・佐賀・長崎などにかけて見られる。この分布とグロットグラムとを総合すると、熊本北部のケンは地方共通語的な性格を示しつつ熊本南部のデの地域に侵入しようとしているものと推定される。なお、カラは調査地域に隣接する宮崎南部に領域をもっている。このことから、グロットグラムに見られるカラは単なる共通語化ではなく、宮崎南部の方言形のカラ（共通語と語形が一致する方言形）の影響もあるものと考えられる。
- 「その他」の内容。イ4 A C（フルグタイガ・フリヨンネ）・イ4 B（フルグタイガ）・イ4 D（フリヨナー）・ニ4 D F（フッデスモンナー）・ホ3 E F（フッテイルノデ）・へ4 A（フンナラ）・ト4 C（フルモネ）・ヌ3 D（フリマスモンネ）・ヌ4 D E F（フッテマスシ）・ヲ3 D E（フットリマスケンデ）

表 23 雨が降っているから外に出ない

	A	B	C	D	E	F
イ	1					
②						
3				●	●	●
4	*	*	*	●	●	
⑤						
ロ	1				N	N
2						
3	●	●	●	●	●	●
4				●	●	●
5					●	●
6		●	●	●	●	●
ハ	1					
2 ●	●	●	●	●	●	●
3				●	●	
④ Δ	Δ	Δ	Δ	Δ	Δ	Δ
5						
ニ	1		●	●	●	●
2 (●) Δ	Δ	●	●	●	●	
3				●	●	
4				*		*
ホ	1					
2	●	●	●	●	●	
3					*	*
4						
ヘ	1 (●)				●	●
2						●
3 Δ	Δ	Δ	Δ	Δ	Δ	Δ
4 *	●	●	●	●	●	●
⑤					Δ	
6				Δ	Δ	Δ
⑦						●
8	●		●	●	●	●
9						

	A	B	C	D	E	F
ト	1					
2				[Δ]	[Δ]	[Δ]
3						
4	Δ		*		Δ	Δ
チ	1				●	●
2					●	●
3 Δ	Δ		●	●	●	
4						
5				Δ	Δ	Δ
リ	1					
2					●	●
3 Δ	Δ	●	●	●	●	●
4 ●	●	●	●	●	●	●
ヌ	1 Δ ●	Δ	Δ	Δ	●	●
2 Δ	Δ	Δ	Δ	Δ	Δ	●
3	Δ	Δ	Δ	*	Δ	Δ
4 ●	●	●	●	*	*	*
ル	1 Δ	Δ	Δ	Δ	Δ	Δ
2 Δ	Δ	Δ	Δ	Δ	Δ	Δ
3 Δ	Δ	Δ	Δ	Δ	Δ	●
4 Δ	Δ	Δ	Δ	Δ	Δ	Δ
ヲ	1 Δ	Δ	Δ	Δ	Δ	Δ
2 Δ	Δ	Δ	Δ	Δ	Δ	Δ
3 Δ	Δ	Δ	Δ	*	*	Δ
4 Δ	Δ	Δ	Δ	Δ	Δ	Δ
6 Δ	Δ	Δ	Δ	Δ	Δ	●
7	Δ	Δ	Δ	Δ	Δ	Δ

| デ N 無回答

Δ ケン * その他

● カラ

() 稀

[] 新

被調査者番号を○でかこんだものは

被調査者が女性。

⑭きのうテレビを見たか——項目番号(3)・パターン〈III〉——

- 場面差が明瞭であり、場面ABCには、主としてミタヤ・ミタナ・ミタカ・ミタカイ・ミタカナなどのぞんざい体が、DEFには、主としてミタデスカ・ミマシタカ・ミマシタデスカのような丁寧体とミナハッタカ（ミナツタカを含む）・ミナハッタデスカ（ミナツタデスカを含む）・ミナハリマシタカ（ミナリマシタカを含む）などの尊敬体が分布する。
- ミタヤとミタナは主として人吉寄りの地域に分布し、ミタカイとミタカナは八代寄りの地域に多く分布する。ミタカも八代寄りに比較的多い。
- ミタヤはA→B→Cの順に減少し、ミタナは逆に増加する。ミタカとミタカイも上位場面に進むにつれて減少の傾向が認められる(表参照)。また、同一被調査者がミタヤとミタナの両方を使用するとき、イ2を除いて、どの被調査者もミタナの方を、より上位の場面で

	A	B	C	D	E	F
ミタヤ	22	13	5	1	0	0
ミタナ	2	4	13	5	1	0
ミタカ	19	15	11	0	0	0
ミタカイ	23	17	19	0	1	0
ミタカナ	3	8	8	1	0	0
ミタデスカ	0	2	5	4	9	8
ミマシタカ	0	2	3	13	23	23
ミマシタデスカ	0	0	0	1	2	3
ミナハッタカ	1	0	4	23	11	9
ミナハッタデスカ	0	0	0	11	6	8
ミナハリマシタカ	0	0	0	4	4	3

各語形の場面別出現度数

用いている(イ2の被調査者は女性であり、場面Aは夫に対する表現であることに注意)。一方、ミタカイはミタカよりも上位の場面で用いられ(ト4・チ5・リ3・ヌ2・ヲ2), また、ミタカナはミタカイよりも上位の場面で用いられる傾向がある(ヘ2・ヘ9・ト3・チ4・リ2・ヌ2・ヲ4)。

- 方言(俚言)としての尊敬体(ミナハッタカ・ミナハッタデスカなど)は場面D(村の目上に対して)で最も多く用いられ、場面EF(よそ者に対して)では、共通語的な丁寧体(ミタデスカ・ミマシタカなど)が多用される。

- 「その他」の内容。イ1D(ミナンシタカ)・イ5全場面(ミタネー)・ロ1B~F(誤答)・ロ3A(ミタカネ)・ロ5CD(ミナンモシタカ)・ハ4ABC(ミタネ)・ニ3DE(ミナイタナー)・ホ1F(ミナサツタカ)・ヘ5D(ミナツタナー)

表 24 きのうテレビを見たか

	A	B	C	D	E	F
イ	1 ☐	☐	☐	*	☐	☐
②	☐	☐	☐	△	☐	△
3	☐	☐	☐	△	△	☐
4				△	☐	☐
⑤	*	*	*	*	*	*
ロ	1 ☐	*	*	*	*	*
2	☐	☐	☐	☐	☐	☐
3	*	☐	△	△	△	△
4	☐	☐	☐	△	☐	☐
5	☐	☐	(☐) *	*	☐	☐
6	☐	☐	☐	☐	☐	☐
ハ	1 ☐	☐	△	△	△	☐
2		☐		☐	☐	☐
3	☐	☐	☐	☐	☐	☐
④	*	*	*	△	☐	☐
5	☐	☐	☐	☐	☐	☐
ニ	1 ☐		☐	☐	☐	☐
2			☐	☐	☐	☐
3	☐	☐	☐	*	*	●
4	☐	☐	☐	☐	☐	☐
ホ	1 ☐	☐	☐	☐	☐	*
2	☐	☐	☐	☐	☐	☐
3	☐	☐	☐	☐	☐	☐
4	☐	☐	☐	☐	☐	☐
ヘ	1 ☐		△	△	△	△
2			☐	△	△	☐
3				△	△	△
4	☐		☐	△	☐	☐
⑤	☐	☐	☐	△	△	☐
6	☐	☐	☐	△	△	△
⑦	☐	☐	☐	△	△	△
8	☐			△	△	△
9	☐	☐	☐	☐	☐	☐

() 稀

< > 古

被調査者番号を○でかこんだものは
被調査者が女性。

	A	B	C	D	E	F
ト	1 ☐	☐	☐	△	△	△
2	☐	☐	☐	△	☐	☐
3	☐	☐	☐	△	△	☐
4			☐	△	☐	☐
チ	1			☐	☐	☐
2		☐	☐	☐	☐	☐
3	☐	☐	☐	☐	☐	☐
4	☐	☐	☐	△	△	△
5			☐	☐	☐	☐
リ	1 ☐	☐	☐	△	△	△
2		☐	☐	△	△	△
3		☐	☐	△	△	△
4	☐	☐	☐	☐	☐	☐
ヌ	1 ☐		☐	△	△	△
2		☐	☐	☐	☐	☐
3	☐	☐	☐	△	☐	△
4			☐	☐	☐	☐
ル	1 ☐	☐		☐	△	△
2	☐	☐	☐	△	☐	☐
3				△	△	△
4				△	△	△
ヲ	1 ☐	☐	☐	△	☐	△
2		△		☐	☐	☐
3	☐	☐	☐	☐	☐	☐
4	☐	☐	☐	☐	△	☐
5	☐		☐	☐	△	☐
6	☐	☐	☐	<△>	☐	☐
7	☐	☐	☐	△	△	○

☐ ミタヤ

☐ ミタナ

| ミタカ

☐ ミタカイ

☐ ミタカナ

☐ ミタデスカ

☐ ミマシタカ

△ ミナハツカ

△ ミナハツデスカ

▲ ミナハリマシタカ

☐ ミマシタデスカ

○ ミラレデスカ

◎ ミラレマシタカ

● ミラレマシタデスカ

☐ グランニナツデスカ

① グランニナリマシタカ

* その他

②⑤私はもう飽きた——項目番号(25)・パターン〈III〉——

- 場面差が顕著であり、場面ABCには、ホットシタ・ゾンブンシタ・アイタ・ヤータなどのぞんざい体、場面DEFにはアキタなどの丁寧体が多く分布する。ホットシタ・ゾンブンシタ・アイタ・ヤータを俚言形と見なせば、②④「この字が読めるか」と同様に、下位場面は主として俚言形のぞんざい体、上位場面は主として共通語形の丁寧体であると言える。なお、ここで「ぞんざい体」としたものは、言い切り(ホットシタ・ゾンブンシタなど)、および、～ネ～ゾ、～バイなどであり、「丁寧体」としたものは、～シマシタ(ナー・ヨ・バイ)、～シモシタ(ナー)、～シタデス(ナ・バイ)などである。
- 下位場面については地域差も明瞭であり、ホットシタは人吉寄りに、アキタ類(アイタ・ヤータ)は八代寄りに多く見られ、ゾンブンシタはその中間地域(地点ニホ付近)に分布する。上位場面については、八代寄りの地域ではアキタがきわめて優勢であるが、人吉寄りの地域ではアキタの勢力がやや小さく、DEFの場面でも、ホットシタ(イ1・イ2・イ3・イ4・ロ2・ロ4・ハ3・ハ4・ヘ1・ヘ3・ヘ4・チ4)やゾンブンシタ(ロ1・ロ6・ニ1・ニ2・ニ3・ホ3・ホ4・ヘ8)がかなり見られる。
- 場面差のタイプでは、俚言形(ぞんざい)→共通語形(丁寧)が最も多く、そのほか、俚言形(ぞんざい)→俚言形(丁寧)〈例、ロ4〉や、俚言形(ぞんざい)→俚言形(丁寧)→共通語形(丁寧)〈例、イ3〉も比較的多い。
- 「その他」の内容。イ1F(デキマセン)・イ4F(ツカレタ)・ロ1A(スカンゾー)・ロ1D(キライモース)・ロ1F(キライデスバイ)・ニ1EF(モーイヤデス)・ト2A(ゾンブンツカレタ)・ト2C(ツカレタモンネ)・ト2D(ツカレマシタモンナイ)・ト2EF(ツカレタモンナイ)

②⑥おまえはきのうどこに行ったか——項目番号(7)・パターン〈III〉——

- 他の項目と同様に、ABC/DEFの場面差が認められる。すなわち、場面ABCにはワレ・ワガ、ヌシ、ヤド、オマエが多く、DEFにはアータ、アナタが多く分布する。アンタはA～Fにまたがって分布するが、CとDに比較的多い。ワレ・ワガ、ヌシ、ヤド、オマエは、いずれも場面Aで多く、上

表 25 私はもう飽きた

	A	B	C	D	E	F
イ	1 ㊦	㊦	㊦	㊦	㊦	*
	2 ㊦	㊦	㊦	㊦	㊦	●
	3 ㊦	㊦	㊦	㊦	●	●
	4 ㊦	㊦	㊦	㊦	㊦	*
	5 ㊦	○	○	○	○	○
ロ	1 *	◎	㊦	*	㊦	*
	2 ㊦	㊦	㊦	㊦	㊦	●
	3 ○	○	●	●	●	●
	4 ㊦	㊦	㊦	㊦	㊦	㊦
	5 ㊦	㊦	㊦	㊦	◇	◇
	6 ㊦	㊦	㊦	㊦	㊦	●
ハ	1 ◇	◎	◎	◎	●	●
	2 ◇	◇	◇	●	●	◇
	3 ㊦	◎	㊦	◎	◎	●
	4 ㊦	○	㊦	㊦	●	●
	5 ㊦	◎	㊦	◎	●	●
ニ	1 ㊦	㊦	㊦	㊦	*	*
	2 ㊦	㊦	㊦	◇	●	◇
	3 ㊦	㊦	㊦	㊦	●	●
	4 ㊦	◇	◇	●	●	●
ホ	1 ◎	◎	◎	◎	●	●
	2 ㊦	㊦	◇	◇	†	†
	3 ㊦	㊦	㊦	㊦	●	●
	4 ㊦	◎	◎	㊦	㊦	●
ヘ	1 ○	○	○	㊦	㊦	㊦
	2 ◎	◎	◎	●	●	●
	3 ㊦	㊦	㊦	㊦	㊦	㊦
	4 ㊦	㊦	㊦	㊦	○	○
	5 ◇	◇	◇	●	●	●
	6 ◇	◇	◇	†	†	●
	7 ㊦	◎	◇	◇	●	●
	8 ㊦	◇	◇	㊦	†	●
	9 ○	○	○	●	●	●

	A	B	C	D	E	F
ト	1 ◎	◎	●	◎	●	†
	2 *	㊦	*	*	*	*
	3 ◎	◎	○ (◇)	◎	●	●
	4 ◇	◇	㊦	◇	●	●
チ	1 ◇	◇	◇	●	◇	●
	2 ◇	◇	◇	◇	●	●
	3 ◇	◇	●	◇	●	●
	4 ㊦	㊦	㊦	㊦	㊦	㊦
	5 ◇	◇	◇	●	●	●
リ	1 ◇	◇	◇	●	◇	●
	2 ㊦	◇	◇	●	●	●
	3 ◎	◇	◇	●	●	●
	4 ◇	●	◇	●	●	●
ヌ	1 ◇	○	◇	◇	●	●
	2 ◇	◇	●	●	●	●
	3 ◇ <◎>	◇ <◎>	◇	●	†	●
	4 ○	◇	○	●	●	●
ル	1 ◇ (◎)	◇	◇	●	●	●
	2 ◇	◎	◎	◎	●	●
	3 ◇	◎	◎	◇	●	●
	4 ◎	◎	◎	●	●	●
ヲ	1 ◎	◎	◎	●	●	●
	2 ◇	◇	◇	●	●	●
	3 ◇	●	◇	●	●	●
	4 ◎	◎	◎	●	●	●
	5 ◎	◎	◎	●	●	●
	6 ◎	◎	◎	●	●	●
	7 ◎	◎	◎	●	●	●

被調査者番号を○でかこんだものは
被調査者が女性。

- ㊦ ホントシタ (ぞんざい) † アイタ (丁寧)
 ㊦ ホットシタ (丁寧)
 ㊦ ゾンブンシタ (ぞんざい)
 ㊦ ゾンブンシタ (丁寧)
 ○ アキタ (ぞんざい)
 ● アキタ (丁寧)
 ◇ アイタ (ぞんざい)
- ◎ ヤータ (ぞんざい)
 * その他
 () 稀
 < > 古

位場面に進むにつれて減少する（表参照）。

- 下位場面では、それぞれの語形について一定の地域差が認められる。オマエは調査地域全域に見られるが、人吉寄りの地域に比較的多い。また、オマエは八代寄りの地域ではもっぱら下位場面でのみ用いられるが、人吉寄りの地域では上位場面でも使われる傾向がある（すなわち、場面分布に地域差が認められる）。ヌシは調査地域の両端に多く分布し、中間の地域には少ない（なお、ヌシは地点ルでとくに優勢であり、他の地点よりもやや上位の場面に使われる傾向がある）。ヤドは地点ヲに集中するほか、地点トも場面Aでのみ用いている。ワレ・ワガは調査地域の中間付近（地点ニホヘチリヌ）に見られるが、勢力は弱く、下位場面（AB）に限定して用いられる。

- アンタは調査地域全域に見られるが、八代寄りの地域では下位場面から上位場面までの広い地域に分布するのに対し、人吉寄りの地域では上位場面に限定して用いられる傾向がある。

		A	B	C	D	E	F
ワレ・ワガ		7	2	0	0	0	0
ヌ	シ	22	14	7	0	0	0
ヤ	ド	5	2	4	0	0	0
オマエ		37	36	28	9	4	3
アンタ		5	12	20	23	16	9
アータ		0	1	1	17	14	16
アナタ		0	0	4	16	25	32
オタク		0	0	0	0	3	3
キ	ミ	0	1	0	0	0	0
該当部分なし		0	1	0	1	1	0

各語形の場面別出現度数

4・ヘ2・ヘ3・ヘ9・ト3・ト4・チ1・リ1・リ3・ヌ1・ヌ2・ヲ6), アータはアンタよりも上位場面で(ニ2・ホ4・ヘ3・ヘ5・ヘ7・ト1・ヌ3・ヲ1)用いられ、ほとんど例外がない。そして、アナタは常に最上位の場面で用いられる。以上の事実から、調査地域全域を通じて、ワレ・ワガ>オマエ>アンタ>アータ>アナタの順で、右側の語形ほど待遇価が高く人吉寄りの地域ではヌシ>オマエの順であると判断される。なお、地点ヲでは、ヤドはヌシよりも待遇価が高い。

- オマエはヌシやワレ・ワガよりも上位の場面で使われる傾向が強い(イ1・イ3・ロ1・ロ3・ロ4・ロ5・ニ1・ニ2・ニ3・ホ1・リ1・リ3・ヌ1。ただしヌシに関しては八代寄りの地域で、チ1・チ4・ル1のようにオマエより上位の場面で用いたケースがある)。また、アンタはオマエよりも上位場面で(イ1・イ4・ロ2・ロ5・ニ2・ニ4・ホ1・ホ2・ホ3・ホ

表 26 おまえはきのうどこに行ったか

	A	B	C	D	E	F			
イ	1▲ ▲ ○ ○ ○	2 ○ ○ ○	3▲ () ○ ● ●	4 ○ ● ●	5				
ロ	1▲ ● ●	2 ○ ○ ● ●	3▲ ● ● ● ●	4▲ ▲	5▲ (▲) ○ ○	6 ● ● ● ●			
ハ	1 ● ● ● ●	2 ●	3 ○ ● ● ●	4 ○ ○ ○ ○ ● ● ● ●	5▲ ▲ ▲ ○ ○ ○ ○				
ニ	1㊦ ● ● ● ●	2▲ ○ ○ ○ ○	3㊦ ㊦ ○ ○ ~ ○ ~	4 ○ ○ ● ●					
ホ	1㊦ ○ ○ ○	2 ○ ● ● ● ●	3 ○ ● ● ● ●	4 ○ ○ ○ ○					
ヘ	1 ● ● ● ● ●	2 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	3 ○ ○ ○ ○ ~ ~ ~	4 ㊦ ● ● ● ●	5 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	6 ○ ○ ○ ○	7 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	8 ○ ○ ● ● ● ●	9 ○ ○ ○ ○ ● ● ● ●
ト	1㊦ ○ ○ ○ ○	2 ○ ○ ○ ○	3▲ ▲ ▲ ○ ○ ○ ○	4 ○ ○ ○ ○					
チ	1▲ ▲ ○ ○ ● ● ~ ● ~	2 ○ ○ ○ ○ ● ● ● ●	3▲ ▲ ○ ○ ● ● ● ●	4(▲)㊦() ○ ▲ ▲ ▲ ○	5▲ ▲ ○ ○ ● ● ● ●				
リ	1㊦ ○ ○ ○ ○	2▲ ▲ ○ ● ● ● ●	3㊦ ○ ○ ○ ○ ● ●	4 ● ● ● ●					
ヌ	1<㊦>○ < > ○ ○ ○ ○	2 ○ ○ ● ● ● ●	3▲ ▲ ○ ○ ○ ○ ○ ○	4 ㊦ ● ● ● ● ● ●					
ル	1▲ ▲ ▲ ▲ ● ● ● ● ●	2▲ ▲ ▲ ○ ○ ○ ○ ○	3▲ ▲ ▲ ● ○ ○ ● ●	4▲ ▲ ▲ ○ ● ● ● ●					
ヲ	1▲ ○ ㊦ ○ ○ ○ ○	2 ○ ○ ○ ○	3 ○ ○ ○ ○ ○	4▲ ㊦ N ㊦ N N ○ ○	5 ㊦ ㊦ ㊦ ○ ○ ○ ○	6▲ ㊦ ○ ○ ● ● ● ●	7 ㊦ ㊦ ㊦ ○ ○ ○ ○		

㊦	ワレ, ワガ	○	アンタ	㊦	キミ
▲	ヌシ	○	アータ	N	該当部
㊦	ヤド	●	アナタ		分なし

□ ワレ, ワガ ○ アンタ ㊦ キミ
 ▲ ヌシ ○ アータ N 該当部
 ㊦ ヤド ● アナタ 分なし
 | オマエ ~ オタク

() 稀

< > 古

被調査者番号を○でかこんだものは

被調査者が女性。

3.3 まとめ

以下に、第二次調査で得られた知見の概要を記す。ここでは第一次調査の結果との相違点を中心に述べる。

1. 同一地点における個人差が著しい。しかしながら、調査地域全体を通じて見ると、一定の地域差・場面差が認められる（第一次調査では被調査者が各地点1名であるから、この点について比較できない。しかし、上の事実は、第一次調査において、「地点間の差が著しかったが、調査地域全体を通じてみると一定の地域差・場面差が認められた」ことと並行的関係にある。語彙項目について第二次調査と同じ方法で調査を行えば、同様の結果が得られると予想される）。
2. どの形式をどの場面で用いるかについても個人差が著しいが、形式間の相対的待遇価には個人差が小さく、明確な一定の傾向が認められる。
3. 場面差の明瞭な項目では、すべてABC/DEF、すなわち、相手が対等以下か目上またはよそ者であるかによって表現を変える傾向が顕著である（これは待遇表現を中心とする項目として当然の結果と言えよう。第一次調査と設定場面が若干異なるのでそのまま比較できないが、第一次調査である程度認められたA/B間の差、すなわち相手が年下の若者かどうかによる差は、第二次調査ではそれほど大きくない。第二次調査ではCとDの間の差がきわめて大きく、この点で、場面差の程度が比較的なだらかであった第一次調査と相違する）。
4. ㉑「読めるか」、㉕「飽きた」のような項目では、場面ABCには俚言形のぞんざい体、DEFには共通語形の丁寧体もしくは尊敬体を用いる傾向が顕著であるが、俚言形（ぞんざい体）→俚言形（丁寧体）→共通語形（丁寧体または尊敬体）のような場面差のタイプも少なからず認められる。また、項目によっては、最下位の場面で待遇価の低い俚言形、中位場面で待遇価の高い俚言形、最上位の場面で待遇価の高い共通語形を用いたケースも多い（㉑「私」・㉕「おまえ」）。これらはいずれも、在来の方言における待遇表現体系の中に共通語が侵入した結果生まれた新しい体系と言える。

5. 語形が共通語と一致しているが用法が共通語と異なる形式の場合、その方言的用法は上位場面でもそのまま引きつがれる傾向がある（㊟「行くよ」）。

〔付記〕

この調査の中間報告として、これまでに次の研究発表を口頭で行なった。その際に多くの方がたから貴重な御意見を賜った。それらの御意見は本稿の中で生かした点が多い。一々お名まえは掲げることができないが、あらためて感謝申し上げる。

1. 「地域差と場面差——熊本県球磨川沿岸地域における——」（日本方言研究会第19回研究発表会，1974）（参考文献5）
2. 「地域差と場面差（表現法編）——熊本県球磨川沿岸地域における——」（国立国語研究所創立30周年記念研究発表会，1978）
3. 同上題目（都立大学方言学会第168回研究会，1980）

また、本稿の内容に関連する研究発表・論文として参考文献6～8がある。なお、この調査の内容・方法を紹介・引用し、方法論上の位置づけを行なった論文として参考文献9がある。

参 考 文 献

1. 国立国語研究所『日本言語地図』全6巻（1966～1974，大蔵省印刷局）
2. 秋山正次編・熊本方言研究会『熊本県言語地図集』（1969）
3. 九州方言学会編『九州方言の基礎的研究』（1969，風間書房）
4. 国立国語研究所『表現法の全国的調査研究——準備調査の結果による分布の概観——』（1979）
5. 佐藤亮一「地域差と場面差——熊本県球磨川沿岸地域における——」（『日本方言研究会第19回発表原稿集』1974）
6. 大川ますみ「岩手県雫石方言における地域差と場面差」（『日本方言研究会第18回発表原稿集』1974）
7. 三石泰子「待遇表現としての文の地理的分布——長野県飯山市・新潟県新井市地

方の場合——」(『国語学』109, 1977)

8. 佐藤茂・佐藤美和子・安部和江・加藤和夫「福井県武生市における方言の共通語化——場面差をめぐって——」(『国語学』122, 1980)
9. 江川清「地域社会の言語生活の変化・変遷」(『ことばと社会』1977, 三省堂)

(以上, 佐藤亮一執筆)

地域差と世代差と場面差

——八丈島における調査から——

1. 目的と調査の概要

1.1. 目 的

同じ内容のことを表わすのに、場面によって異なる語形を使ったりすること（場面差）があるのはよく知られている。同様に、言語を使用する人がどの世代に属しているかによる差（世代差）や、出身の地域による差（地域差）もある。この研究の主な目的は、これら3つの差を同時に調査し、3つの要因のからみ合いがどのような結果をもたらすかを明らかにするところにある。世代差とよく似たものに年齢差があるが、年齢差と地域差、地域差と場面差については先行研究があり、本書にも収められている。ここでは世代差を見るために同一家族の3世代（祖父・父・子）を調査対象とした。

フィールドは

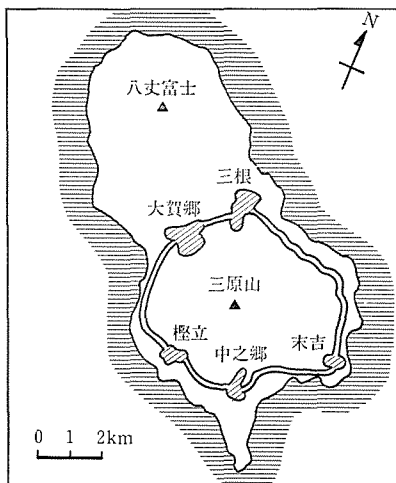
- (1) 共通語とはかなり異なる体系を持っており、共通語形と方言語形との区別がつけやすい。
- (2) その方言について既に研究が行なわれており、語彙についても文法についても情報が得やすい。
- (3) かなりはっきりした地域差が見られる。

等の点から、八丈島とすることにした。

1.2. 調査地域・調査時期・調査者・被調査者

フィールドである八丈島は5つの集落から成っており、この5つの集落は環

八丈島略図



状に並んでいる。道路の整備がされていなかった昔において、集落間の交通は、三根と大賀郷の間を除いては困難であった。三原山と八丈富士にはさまれた平地にある大賀郷と三根は坂下と呼ばれ、檜立・中之郷・末吉は坂上と呼ばれた。坂上と坂下との行き来は檜立と大賀郷の間の峠か、末吉と三根の間の峠を越えて行なわれたが、檜立と大賀郷の間に大坂トンネルが開通（1903～4）するまでは末吉と三根の間の道を利用することが多かったと言われている。

以上のような理由から、狭い島内で、集落間の言語差は意外に大きく、そのことは、この章でとりあげるグロットグラムのいくつかからも読みとることができる。

なお、坂下に代官所や港があり、古くから行政・経済の中心となっていたが、現在でも、飛行場や、役場があつて、その地位に変わりはない。

調査は1978年2月10日～14日に行なった。調査者は飯豊毅一（言語変化研究部長）、佐藤亮一（同部第一研究室長）、真田信治（同室研究員）、沢木幹栄（同）、白沢宏枝（同）の5人（所属は調査当時）である。

被調査者は、前述のように、同一家族の3世代ということが条件だったので、島の全中学校に依頼して、生え抜きの祖父と父を持つ男子中学生をさがしていただいた。従って、中学生の世代（若年層）の年齢は、ほぼ一定しているが、その父の世代（中年層）や祖父の世代（老年層）の年齢には、かなりの幅がある。また、各集落から5家族ずつということで数をそろえたので、同一家族の3世代という条件が満たせないこともあったが、その場合には、それぞれの世代に見合った生え抜きの被調査者を代わりにあてることにした。以下に被調査者の生年と調査者（略号、Iit－飯豊，Sat－佐藤，San－真田，Saw－沢木，Sir－白沢）を記す。同一家族の人は同じ行に祖父・父・子の順でまとめることにし

たが、もし同一家族でない場合は左端に*印をつけた。

祖 父			父			子		
生年	調査者		生年	調査者		生年	調査者	
三根								
平井光吉	明 39	Iit	平井一吉	昭 9	Sir	平井一行	昭 38	Sir
持丸庫太郎	明 38	Iit	持丸英一郎	昭 7	Sir	持丸芳英	昭 38	Iit
田代一男	明 40	Sat	田代常雄	昭 5	San	田代 至	昭 39	San
* 持丸喜久郎	明 36	Saw	浅沼昌雄	大 13	Saw	浅沼 健	昭 37	Saw
* 持丸真一郎	明 40	Sat	持丸玉男	昭 18	Sat	持丸 卓	昭 40	Sat
大賀郷								
奥山敏光	明 43	Iit	奥山章雄	昭 8	Sir	奥山 徹	昭 36	Iit
菊池 治	明 33	Saw	菊池恒治	昭 6	Sat	菊池正勝	昭 40	Sat
* 奥山郁郎	大 6	San	吉田威志	昭 7	San	吉田良司	昭 37	San
* 奥山久一	明 39	San	浅沼 滋	大 12	Sir	奥山正人	昭 38	Iit
* 菊池清武	明 39	Saw	菊池勇夫	大 11	Saw	葛馬仁道	昭 37	Sir
樫立								
峯元信市	明 34	Sir	峯元静穂	昭 3	Saw	峯元健一	昭 40	San
* 河崎規矩郎	明 29	Sat	山下保孝	昭 4	Iit	山下正保	昭 37	Iit
磯崎兼次	明 35	San	磯崎 巧	昭 6	Sat	磯崎 正	昭 36	Sir
奥山重明	明 38	San	奥山高正	昭 10	Sir	奥山正信	昭 40	Sat
森下勝衛	明 34	Saw	森下忠直	昭 8	Iit	森下敏清	昭 39	Saw
中之郷								
福田富一郎	明 41	Sat	福田 実	昭 11	Iit	福田英世	昭 38	Sat
大沢元四郎	明 39	Sat	大沢慧太郎	昭 3	San	大沢英史	昭 39	Sat
菊池喜代三郎	明 33	Sir	菊池展三	昭 4	San	菊池英紀	昭 39	San
奥山度泉	明 42	Saw	奥山樹毅	昭 7	Saw	奥山幸久	昭 40	San
佐々木弥三郎	明 30	Iit	佐々木正守	大 14	Iit	佐々木真理	昭 37	Iit
末吉								
菊池文雄	明 39	Iit	菊池利光	昭 6	San	菊池 照	昭 38	Saw
浅沼三千治	明 38	Sat	浅沼 博	昭 9	Iit	浅沼洋二	昭 41	San
* 冲山末喜	明 38	Sat	冲山尚昭	昭 2	Iit	奥山 武	昭 37	San
* 冲山慶喜	明 45	San	冲山慶孝	昭 17	Sat	玉置隆一	昭 40	Sir
* 浅沼一次	明 29	Sir	浅沼 正	大 12	Saw	内田克夫	昭 38	Saw

1.3. 調査項目・調査方法

調査項目は、語彙項目と文法項目とに分かれている。以下にその内容を記す。

031 以下は文法項目である。

001 (絵)これは何と言いますか。土の上をちょろちょろ走り回ります。色は黒くつやつや光っていて、鮮やかな青い線があります。水の中にははいりません。(とかげ)

- 002 (絵) これを何と言いますか。前足が草を刈るかまに似ています。(かまきり)
- 003 (絵) これを何と言いますか。いろいろ種類がありますが、ひっくるめた名前は何ですか。(蛙)
- 004 (絵) 魚の皮の上に並んでいるすきとおった薄い爪のようなもの、これを何と言いますか。(鱗)
- 005 (絵) にわたりの頭の上にある赤いもの、これを何と言いますか。(とさか)
- 006 (絵) ここ全体のことを何と言いますか。ここが痛むとか、重いとか言うことがあります……。 (頭)
- 007 (絵) これを何と言いますか。この、物を見るものです。(目)
- 008 (絵) まぶたのへりにおつとでできる小さなできものです。何と言いますか。よくうつるものですが、間もなくなおります。(ものもらい)
- 009 風が強く吹く日など目に何かはいることがあります。目に何がはいったと言いますか。(ごみ)
- 010 切手をはるときべろつとなめることがあります、そのときつける水のようなもののことを何と言いますか。(唾)
- 011 眠っていてぐうぐうと音をさせる人がいます。(まねる) こうすることをどうと言いますか。(いびきをかく)
- 012 体に黒いごまつぶくらの点がありますが、その点のことを何と言いますか。(ほくろ)
- 013 (絵) こういうふうには足を組んで座につくことをどうと言いますか。(あぐらをかく)
- 014 獣や鳥については「おす・めす」という区別があります。では人間については何と言いますか。(男・女)
- 015 (絵) 頭にかぶったり、腰に下げたりする、こういうものです。何と言いますか。(手拭)
- 016 (絵) 足にはく、こういうものです。何と言いますか。(ぞうり)
- 017 遊びのことですが、こどもたちが見つからないようにあちこちに隠れ、

鬼になったこどもがそれを見つける。そして見つかったこどもが次々に鬼になる。そのような遊びのことを何と言いますか。(かくれんぼ)

018 いらなくなったものを、ごみためへ持って行って、どうすると言いますか。(捨てる)

019 (絵) 田ではなく、大根や芋などを作る、こういう場所のことを何と言いますか。(畑)

020 (絵) これは何と言いますか。秋の終わりに取り入れます。茎はつるになって地面に広がります。(さつまいも)

021 (絵) これは何という草ですか。春、紫色の花をつけます。(すみれ)

022 (絵) これを何と言いますか。米などを入れる、わらで作ったものです。(俵)

023 地面がゆれることを何が起こると言いますか。(地震)

024 (絵) 二つの箱ですが、両方を比べて、(大きい方を指し)こちらの方が、(小さい方を指し)こちらよりもどうだと言いますか。(大きい)

025 (絵) それでは、(小さい方を指し)こちらは、(大きい方を指し)こちらよりもどうだと言いますか。(小さい)

026 (絵) 虹を見て、「ああキレイダ」と言いますか、「ああウツクシイ」と言いますか。それとも別の言い方をしますか。

027 あした、あさって、その次の日のことを何と言いますか。(明明後日)

028 では、さらにその次の日のことは何と言いますか。(明明明後日)

029 今年の次の年のことを何と言いますか。(来年)

030 あなたが朝早く道で近所の親しい友達に出会ったとします。あなたはどんなあいさつをしますか。

031 私は今日 役場に 行かなければならない。

032 私はきのう 役場に 行った。

033 私はきのう 役場に 行かなかった。

034 私も行くから いっしょに 行こう。

035 もしあなたが 行くなら 私も行きたい。

036 (海が荒れているのを見て) 舟で行かなくてよかった。

037 (海が静かなのを見て) 舟で行けばよかった。

038 あしたは雨が降るだろう。

039 あしたは雨が降らないだろう。

040 東京では雪が降ったそうだ。

041 それをください。

042 これを食べなさい。

043 何か書くものを 持って来い。

044 この柿は赤いけれど 食べられない。

045 そこに赤い柿がある。

046 あそこに人が泳いでいる。

047 おまえはあした家にいるか。

048 (「おまえはあした家にいるか」と聞かれて) いや いない。

049 これはおまえの傘か。

050 これは私の傘だ。

以上である。このほかに方言意識に関する項目があるが、ここでは省略する。また、009, 019, 025, 031, 039 は一日目か二日目で調査を打ち切りにした項目である。

実際の調査では調査員が被調査者の家に出向き、調査票に従って面接調査を行なった。

場面の設定のしかたは語彙項目と文法項目とで若干異なる。

語彙項目のときは「へいぜい使っていることば」という以外は何も限定せずに上記の質問文に従って質問を行なう。これを仮に「無限定の場面」とする。ここで共通語形しか得られなければ、事前に『日本言語地図』などの資料で調べておいた方言語形の方を発音してみせて、その語形を使わないかどうか確認する。普段方言語形の方を使っている調査の場でそれが出てきにくいことがあるのでこのようにしたのだが、逆に、他の集落で使っている語形を誘導してしまう危険もないわけではない。

次に、被調査者が若年層であれば、祖父に対してどのように言うかを聞き、そのあとに、父に対する言い方を聞く。被調査者が中年層の場合には、父(老

年層)と子(若年層), 老年層では子(中年層)と孫(若年層)に対してどのように言うかを聞くのである。

次に被調査者と同年代の親しい友達に対する言い方を聞き, 最後にクニ(東京)から来た外来者に対してどのように言うかを聞く。無限定の場面も入れて5つの場面における使い分けを調べることになる。

文法項目の場合は無限定の場面はなく, したがって誘導もない。その代わりに「友達」と「外来者」の間に「先生に対して」という場面がはいる。

2. 結果と考察

2.1. 語彙項目

調査票には語彙項目として、30項目あまりがあるが、その中から15項目の結果を表の形で提示し、説明を加える。

各項目について具体的な説明を行なう前に、全体的なことを述べておきたい。

まず場面としては、無限定、誘導、家族内の他の二世代に対するとき、友達に対するとき、外来者に対するときの6つがあるが、これらのうち、外来者に対する場面以外は、どの場面がより上位であるかは決めがたい。家族内の他の2世代に対する場面は、家族内のことでもあり、方言形が出やすいように思われるが、実際には老・中年層が若年層に対して方言語形を避けるという興味深い現象が見られた。このことについて被調査者からは「子供の前では教育上の配慮から方言を使わぬようにしている」などの内省があった。また、これはあくまでも比較の上の話だが、中年層は友人に対するときの方が、老年層に対してよりも方言語形を多く使うようである。これも、三世代同居（実際には同じ敷地内に隠居所を別に建てる人が多いようだが）の家庭で子供の前では方言を使わぬようにしているためかもしれない。

外来者に対する場面は方言語形の使用が最も少ない。この場面でも方言語形が多用されるのは共通語化が進んでいない数項目に限られる。

また、いくつかの項目では、古くからの方言語形とは思われないが、共通語形でもない語形が同場面で見れる。このような場合、その語形が地方共通語だと考えerとうまく説明がつくことが多い。

次に世代別の特徴を見て行くと、若年層では全場面において共通語形を答えることが多い。各表の解説では、若年層で誘導以外の全場面共通語化してい

でもとりたてて書かないことにする。また、老年層と中年層ではどちらが方言語形をより保っているかは決めがたいが、老年層よりは中年層の方言と共通語の切りかえの方がはっきりしているということは言えそうである。

『日本言語地図』と共通する項目では、『日本言語地図』に認められる地域差は、老・中年層でそのまま存在している。さらには、一集落あたりの被調査者数が多いために、『日本言語地図』で拾い上げることのできなかった方言語形が見出されることもある。

しかし、『日本言語地図』の調査時に比べれば今回の調査では方言語形の出方が多少鈍くなったように見える。

語彙項目の図は地域差という観点からは a) 語形による地域差のあるもの b) 音声の差異による地域差のあるもの c) 地域差の見られないもの の3つに分類される。各表の配列はこの順に従って行なう。

場面・世代による共通語使用の違いについては、d) 語彙項目の総合のところでもう一度述べることにしたい。

a) 語形による地域差の見られるもの

a. 1 かまきり

各表の見方についてまず説明する。次ページの表の左上隅を見ると、「三根」と書いた枠の下に5つの記号が並んでいる。これは三根の老年層の5人の被調査者が「無限定」という場面で答えた語形にひとつずつ対応している。ひとりの被調査者は6つの場面について回答を行なっているが、それは「無限定」から「外来者」までタテに並んでいる。老年層の下は中年層で、そのつぎが若年層となっているが、ひとつのタテの線に並んでいるのは同一家族であることが原則である。実際に同一家族かどうかを見るには、被調査者一覧を参照すればよい。たとえば、三根の左から見て1番目の家族は、被調査者一覧では三根の1番目のところに出ているので同一家族だということがわかる。語形の併用も多いが、その場合は第1答のすぐ右に2番目の語形を表わす記号をプロットする。この表で言うと、大賀郷の老年層の1番目の人は無限定の場面でカマキリとボーカツギの2つの語形を用いているということがわかる。

表 1 かまきり

× バッタメ
 ■ ゲンベーム ○ トッパメ
 △ ボーカツギ ・ カマキリ
 □ カセギメ | カマキリメ

世代	地点 場面	三 根	大賀郷	桎 立	中之郷	末 吉
老 年 層	無限定	○ ・ ・ ・	△ × ・ ・ ・	・ ・ ・ □ ・	■ ■ ■ ■ ■	・ ・ ・ ■ ■ ■
	誘 導	○	□ □	□	■	■ ■
	子 孫	○ ・ ・	△ ×	・ ・ ・ □ ・	■ ■ ■ ■ ■	・ ・ ・ ・ ・
	友 達	○ ・ ・ ○	△ □ ×	・ □ ・ □ ・	■ ■ ■ ■ ■	・ ■ ■ ■ ■
	外来者	・ ・ ・	・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ■ ■ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
中 年 層	無限定	・ × ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ △	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ × ■ ・
	誘 導	×	□	□	■ ■	■
	父 子	× ・ ・ ・	・ ・ ・ △ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ■	・ ・ × ■ ・
	友 達	× ・ ・ ・	・ ・ ・ △ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ■	・ ・ × ・ ・
	外来者	・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
若 年 層	無限定	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
	誘 導	■	□			
	祖 父	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
	父 子	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
	友 達	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
	外来者	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・

さて、この表を見ると、老・中年層にかなりはっきりした地域差があることがわかる。各集落に特徴的な語形を拾ってみると、三根トッパメ、大賀郷ボーカツギ、カセギメ、桎立カセギメ、中之郷・末吉ゲンベームとなる。ここで『日本言語地図』を見ると三根トッパメメ、大賀郷カセジメ、桎立シンキチメ、中之郷・末吉ゲンベームと、ほぼ同じ分布を見せている。この表だけからは桎立と大賀郷のカセギメがどちらから広がったかは決めがたいが『日本言語地図』をも参考にして考えるならば大賀郷から桎立に伝播したものと考えられる。

バッタメ、カマキリメは動物名につける接尾辞「メ」を共通語形につけて作った、いわば新方言とでもいうべき語である。これらを方言形に含めると、方言形を用いるのは中年層までということになる。老年層と中年層とでは老年層の方が方言語形の使用が多い。

- トンジン
 ● トンチャキ
 ● トンジャメ
 △ カシ
 ・ トサカ

表 2 とさか

世代	地点 場面	三 根	大賀郷	檜 立	中之郷	末 吉
老 年 層	無限定	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	△ ・ △ △ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
	誘 導		△ △	△ △	△ △ △	○ ○ ○ ○
	子	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	△ ・ △ △ △ ・	・ △ ・ ・ ・ △	・ ○ ・ ・ ・ ○
	孫	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	△ ・ △ △ △ ・	・ △ ・ ・ ・ △	・ ○ ・ ・ ・ ○
	友 達	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	△ △ △ △ △	・ △ △ ・ △ △	・ ○ ・ ・ ・ ○
中 年 層	無限定	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ △ △	・ ○ ・ ・ ・ ・
	誘 導	● ○	○ △	△ △ △	△ △ △ △ △	○ ○ ○ ○ ○
	父	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ △	・ ・ ・ ・ ・	△ ・ △ △ △	・ ○ ・ ・ ○ ・
	子	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ○ ・ ・ ・ ・
	友 達	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ △	・ ・ ・ ・ ・	△ ・ ・ ・ △	・ ○ ・ ・ ・ ・
若 年 層	無限定	・ ・ ・ ・ ・	・ ● ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
	誘 導					
	祖 父	・ ・ ・	・ ● ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
	父	・ ・ ・	・ ● ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
	友 達	・ ・ ・	・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
若 年 層	無限定	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
	誘 導					
	祖 父	・ ・ ・	・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
	父	・ ・ ・	・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
	友 達	・ ・ ・	・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
若 年 層	無限定	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
	誘 導					
	祖 父	・ ・ ・	・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
	父	・ ・ ・	・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
	友 達	・ ・ ・	・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・

a. 2 とさか

方言語形の使用が全般的に少ない。特に三根は誘導場面にしか方言語形が出ていない。ここで『日本言語地図』を見ると、三根・大賀郷トサカ、檜立・中之郷カシ、末吉トンジンとなっており、この表の分布はそれに非常に近い。大賀郷で方言語形が散発的に存在するが、これは誘導場面の後であることが多いので、むしろ誘導の結果、聞いたことがあるだけの語形を答えたものと解釈することも可能である。一方、大賀郷の若年層のひとりが無限定でトンチャキを回答しているがこれはトンジンの影響で生じた新語形と考えることもできる。末吉のトンジンが飛び火的に影響をおよぼしたのであろうか。

● ヌンメ
 ○ ノンメ
 ● ムンメ
 × メボシ
 | モライメ
 ・ モノモライ
 * デキモノ

表 3 ものもらい

世代	地点 場面	三 根	大賀郷	樫 立	中之郷	末 吉
老 年 層	無限定	● ● . . ●	. ● ● ●	. . .
	誘 導	● ● ● ●	● ●	● ● ●	● ● ○	● ● ●
	子	×	● ● ●
	孫	× ● ● ●
	友 達	● . . . ●	. ● . . ●	● ● ● ● ●
中 年 層	外來者	× ● . .	. ● ●
	無限定 * * . .
	誘 導	● ● ● ●	. ●	● ●	. ○ ● ●	● ● ●
	父	● . . . ●	. . ● .	. ● * . . .
	子 ● * . . .
若 年 層	友 達	● . . ● ● ● * . . .
	外來者 ● * . . .
	無限定
	誘 導					
	祖 父 * .
	父 * .
	友 達 * .
	外來者 * .

a. 3 ものもらい

老・中年層ではヌンメが目立つが、その使われ方は集落により大きな差がある。樫立ではヌンメはかなり濃く分布しているが末吉では誘導の場面にしか見られない。末吉で、モライメ、デキモノなど臨時的な語形が見られることもヌンメの勢力が弱いことと関係があろう。なお、モライメは、モノモライとヌンメの混交によるものとも考えることもできる。

三根のメボシは使用している被調査者は1人であるが、ヌンメとの間で使い分けがあるように見られるのがおもしろい。メボシは『日本言語地図』では、埼玉・山梨のほかに伊豆半島のつけ根と先端部に散発的に見られる語形である。この被調査者が島外のどこかで耳にした語形を共通語的に使ったのだろうか。

中之郷と大賀郷にムンメがあるが、これは地域性をもつものと考えてよからう。

表 4 明明明後日

□	シアサッテ	○	ヨッカゴ
◻	シガサッテ	・	ヤノサッテ
■	シノサッテ		ミョーミョーゴニチ、アサッテノツギノツギ
●	ヨアサッテ	*	ミョーゴニチなど (誤答)
◐	ヨンアサッテ		

世代	場面	地点				
		三 根	大賀郷	樫 立	中之郷	末 吉
老年層	無限定	□ ● ◻ □ □ □	◐ □ ◐ ◻ □ ●	● □ □ □ □ □	◻ ◐ ◐ ◻	◻ ・ ◻ ◻
	誘 導				◻ ◻ ◻ ◻	◻ ◻ ◻ ◻
	子	□ ◻ □ *	□ ◐ ◻ ●	● □ □ □ □ □	◻ ◻ ◐ ◻ ◻ ◻	◻ ・ ◻ ◻
	孫	□ ◻ □ *	□ ◐ ◻ ●	● □ □ □ □ □	◻ ◻ ◐ ◻ ◻ ◻	◻ ・ ◻ ◻
	友 達	□ ◻ □ *	□ ◐ ◻ ●	● □ □ □ □ □	◻ ◻ ◐ ◻ ◻ ◻	◻ ・ ◻ ◻
中年層	無限定	□ □ ◐ ◐ ◻	□ ◐ ■ □ □ □	◐ ◻ □ □ □ □	□ □ □ □ □ □	□ * ◻ ■
	誘 導					
	父	□ □ ◐ ◐ ◻	□ ◐ ◻ □ □ □	◐ ◻ □ □ □ □	□ □ □ □ □ □	□ * ◻ ■
	子	□ □ ◐ ◻ ◻	□ □ ■ □ □ □	◻ □ □ □ □ □	□ ◻ * ◻ ◻ ◻	□ * ◻ ■
	友 達	□ □ ◐ ◐ ◻	□ ◐ ◻ □ □ □	◐ ◻ □ □ □ □	□ □ □ □ □ □	□ * ◻ ■
若年層	無限定	□ □ ◐ ◻	■ □ □ □ □ □	□ □ □ □ □ □	□ □ ■ □ □ □	□ ◻ □ □
	誘 導	□	□			□ ◻ □ □
	祖 父	□ □ ◐ ◻	■ □ □ □ □ □	□ □ □ □ □ □	□ □ ■ □ □ □	□ ◻ □ □
	父	□ □ ◐ ◻	■ □ □ □ □ □	□ □ □ □ □ □	□ □ ■ □ □ □	□ ◻ □ □
	友 達	□ □ ◐ ◻	■ □ □ □ □ □	□ □ □ □ □ □	□ ■ □ □ □	□ ◻ □ □
若年層	無限定	□ □ ◐ ◻	■ □ □ □ □ □	□ □ □ □ □ □	□ ■ □ □ ◻	□ ◻ □ □
	誘 導					
	祖 父	□ □ ◐ ◻	■ □ □ □ □ □	□ □ □ □ □ □	□ □ ■ □ □ □	□ ◻ □ □
	父	□ □ ◐ ◻	■ □ □ □ □ □	□ □ □ □ □ □	□ □ ■ □ □ □	□ ◻ □ □
	友 達	□ □ ◐ ◻	■ □ □ □ □ □	□ □ □ □ □ □	□ ■ □ □ ◻	□ ◻ □ □

a. 4 明明明後日

中之郷と末吉はシガサッテ、他の集落ではシアサッテという分布が老年層において認められる。『日本言語地図』を見ると、はたして全く同様の分布を示している。

中之郷・末吉の中・若年層はシアサッテの使用が増えているが、これは共通語形をとり入れたか、ほかの3集落、特に三根と大賀郷の影響かのどちらかであろう。

ヨンアサッテと答えた被調査者のなかには、「明明後日がサンアサッテだからその次はヨンアサッテだ」と内省した人がいたが、シガサッテ、シアサッテのシを4と考えれば、サンアサッテ／シガサッテ・シアサッテの体系でも3-4という関係は成立する。

表 5 うろこ

地点							
世代	場面	三 根	大賀郷	樫 立	中之郷	末 吉	
老 年 層	無限定	▽ ● ○ ・ ▽ ▽ ▽	○ ▽ ● ○ ▽ ▽	・ ○ ・ ○ ○ ● ○	● ○ ▽ ○ ▽ ▽	○ ● ○ ▽ ▽ ▽ ▽	
	誘 導	▽ ○ ▽ ▽ ▽ ▽ ▽	○ ▽ ● ○ ▽ ▽	○ ○ ○ ○ ○ ○	● ○ ▽ △ ●	○ ● ○ ▽ ▽ ●	
	子	・ ○ ▽ ▽ ▽ ▽ ▽	○ ▽ ● ○ ▽ ▽	○ ○ ○ ○ ○ ○	● ○ ○ △ ○ ●	○ ○ ▽ ・ ○	
	孫	▽ ○ ▽ ▽ ▽ ▽ ▽	○ ▽ ● ○ ▽ ▽	○ ○ ○ ○ ○ ○	● ○ ▽ △ ●	○ ○ ▽ ▽ ○	
	友 達	・ ○ ・ ▽ ▽ ▽ ▽	○ ▽ ● ○ ・	・ ・ ○ ・ ○	・ ○ ・ ○ ・	○ ○ ○ ・ ○	
中 年 層	無限定	▽ ● ○ ○ ▽ ▽	▽ ▽ ▽ ▽ ▽ ▽	○ ● ○ ● ●	・ ▽ ・ ○ ● ・	▽ ● ● ▽ ・	
	誘 導	▽	▽ ▽ ▽ ▽ ▽ ▽	○	○ ▽ ○	▽	●
	父	▽ ● △ ○ ○ ▽ ▽	▽ ▽ ▽ ▽ ▽ ▽	○ ● ○ ● ● ○	▽ ○ ○ ● ○ ○	▽ ● ▽ ▽ ●	●
	子	▽ ○ ○ ○ ○ ▽ ▽	▽ ▽ ● ▽ ▽ ▽	○ ● ○ ● ● ○	・ ・ ○ ・ ○	・ ▽ ● ・ ・	・
	友 達	▽ ○ ○ ○ ○ ▽ ▽	▽ ▽ ○ ▽ ▽ ▽	○ ● ○ ● ● ○	▽ ○ ○ ● ○ ○	▽ ● ▽ ● ・ ●	・
若 年 層	無限定	○ ・ ・ ・	・ ・ ・ ▽ ・ ○	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ○ ○ ・ ・	
	誘 導	○ ● ○ ○ ○	▽ ●	○ ○ ○ ○	○	○ ○ ○	
	祖 父	● ・ ・ ・	・ ・ ・ ▽ ○	・ ・ ○ ・ ・	・ ○ ・ ・ ・	・ ○ ○ ・ ・	
	父	● ・ ・ ・	・ ・ ・ ▽ ○	・ ・ ○ ・ ・	・ ○ ・ ・ ・	・ ○ ○ ○ ・	
	友 達	● ・ ・ ・	・ ・ ・ ▽ ○	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ○ ○ ○ ・	
	外 来 者	● ・ ・ ・	・ ・ ・ ▽ ・	・ ・ ○ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ○ ○ ・ ・	

a. 5 うろこ

老・中年層では、同一集落内で、コケ、コケザ（コケジャ）、コケラの3つの方言語形が混在している。例外は樫立の老年層で、ここではほぼコケのみである。若年層でも方言形の使用はかなり残っている。

ここで『日本言語地図』を見ると、三根コケザ、大賀郷コケザ、樫立コケ、中之郷コケザ、末吉コケザ・コケ・コケラとなっており、よく符合する。数種の語形が混在する状況がずっと以前からのものであるかどうかを論じる前に注目しておきたいのは、老・中年層が外来者の場面で、コケ・コケラを多く使うという点である。これはむしろコケ・コケラが方言としてではなく、共通語としてとらえられているからではないだろうか。コケ・コケラは関東地方に広く分布しているが、これが八丈島に入って地方共通語として使われていると考えるのである。

表 6 さつまいも

● ジクモ (イモ)
 ⊖ ジギー
 ○ ジジー
 △ カンモ
 | サツマ
 ・ サツマイモ
 * イモ

世代	場面	地点	三 根	大賀郷	檜 立	中之郷	末 吉
老年層	無限定		△・△△△△△	△△△△△	・・△△△	⊖ ⊖⊖・	・ △ ・
	誘導		△△△△△△	△△△△△	●●△△	⊖△△⊖	△△△△
	子		△△△△△△	△△△△△			
	孫		△△△△△△	△△△△△			
	友達		△△△△△△	△△△△△			
中年層	無限定		△△ △△△△	△△△△	△・ ・	・ ・・⊖・	
	誘導		△△△△△△	△△△△	△△●○	⊖⊖⊖△	△△△△
	父		△△△△△△	△△△△	△ ○		
	子		△△△△△△	△△△△			
	友達		△△△△△△	△△△△	△ ○		
若年層	無限定		△・△*・△△	△△△△△	・・ ・	・・・・・	・ ・ ・
	誘導		△△△△△△	△△△△△△	△△△△	・・・・・	・ ・ ・
	祖父		△△・△△*△	△△△△△	・・ ・	・・・・・	・ ・ ・
	父		△△・△△*△	△△△△△	・・ ・	・・・・・	・ ・ ・
	友達		△△・△△*	△△△△△	・・ △・	・・・・・	・ ・ ・
若年層	無限定		△・△・△△	△△△△△△	・・ △・	・・・・・	・ ・ ・
	誘導		△・△・△△	△△△△△△	・・ △・	・・・・・	・ ・ ・
	祖父		△△・△△*△	△△△△△	・・ △・	・・・・・	・ ・ ・
	父		△△・△△*△	△△△△△	・・ △・	・・・・・	・ ・ ・
	友達		△△・△△*	△△△△△	・・ △・	・・・・・	・ ・ ・
若年層	無限定		△・△・△△	△△△△△△	・・ △・	・・・・・	・ ・ ・
	誘導		△・△・△△	△△△△△△	・・ △・	・・・・・	・ ・ ・
	祖父		△△・△△*△	△△△△△	・・ △・	・・・・・	・ ・ ・
	父		△△・△△*△	△△△△△	・・ △・	・・・・・	・ ・ ・
	友達		△△・△△*	△△△△△	・・ △・	・・・・・	・ ・ ・
若年層	無限定		△・△・△△	△△△△△△	・・ △・	・・・・・	・ ・ ・
	誘導		△・△・△△	△△△△△△	・・ △・	・・・・・	・ ・ ・
	祖父		△△・△△*△	△△△△△	・・ △・	・・・・・	・ ・ ・
	父		△△・△△*△	△△△△△	・・ △・	・・・・・	・ ・ ・
	友達		△△・△△*	△△△△△	・・ △・	・・・・・	・ ・ ・

a. 6 さつまいも

はっきりした地域差がある。カンモは坂下の2集落に濃く分布している。坂上ではサツマが強い勢力を持ち、檜立ではジクモとジギー、中之郷ではジギーが見られる。これは『日本言語地図』の調査結果ともほぼ一致している。カンモは坂上でも少しずつ使われているが、これは坂下から入ってきたのだろうか。坂下の老年層のカンモは「無限定」の第2答か「誘導」にしか現れないところから、使用語ではなく理解語を聞きだしたと見ることも可能であろう。サツマも全場面で使われる傾向があるが、坂下に分布していることや、友達にはカンモ、外来者にはサツマと切りかえることがあることから、地方共通語的なものと考えられよう。

世代差を見ると、若年層でも方言語形の使用がかなり根強いことがわかる。その意味では世代差はあまりない。

□ キャールメ ▲ ケーロメ
 ■ キャーロメ ▽ ケーラメ
 ● ギャーロメ ・ カエル
 △ ケールメ | カエルメ

表 7 蛙

世代	場面	地点	三 根	大賀郷	樫 立	中之郷	末 吉
老 年 層	無限定		□ ・ ・ ▲	・ ・ ・ △	・ ・ ・ ・ ・	□ □ ・ □	・ ・ ・ ・
	誘 導			▲ ■	■ ■		▽ □
	子		□ ・ ・	・ ・ ・	・ ・ ・ ・	□ □ □ □	・ ・ ・ ・
	孫		・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・	・ □ □ □	・ ・ ・ ・
	友 達		□ ・ ▲	・ ・ ・ △	・ ・ ・ ・	● □ □ □ □	・ ・ ・
中 年 層	外來者		・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・	・ ・ □	・ ・ ・ ・
	無限定		■ ・	・ ・ △	・ ・ □ ・	□ ・ □ □ ・	・
	誘 導			■	■	□ □ □	□ ■
	父		■	・ ・ ▲	・ ■ □ ・	□ □ □ □ □	
	子		・ ・	・ ・ ・ ・	・ □ ・	・ ・ ・ □ ・	・
若 年 層	友 達		■	・ ・ ▲	・ ■ □ ・	□ ・ ・ □ ・ □	・
	外來者		・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ □ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
	無限定		・ ・ ・ ・	・ △ ・ △ ・	・ ・ ・ ・	□ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・
	誘 導		▲	▲	□ □ ■	■	△ ▲ □ □ □
	祖 父		・ ・ ・ ・	・ △ ・ △ ・ ▲	・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・	△ ・ △ □ ・ ・
若 年 層	父		・ ・ ・ ・	・ △ ・ △ ・	・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・	△ ・ △ □ ・
	友 達		・ △ ・ ・ ・	・ △ ・ ・ ・ ▲	・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・	△ ▲ △ □ □
	外來者		・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・		

b) 音声による地域差の見られるもの

b. 1 蛙

この表の方言語形はすべて、カエルメの音声的な変種である。

『日本言語地図』は三根カエルメ、大賀郷ケールメ、樫立カエル、中之郷キャールメ、末吉カエルメとなっており、老・中年層はほぼ『日本言語地図』と一致する分布を示す。

大賀郷と樫立、末吉では老年層より中年層で方言形の使用が盛んである。若年層でも特に末吉と大賀郷で方言語形の使用が盛んである。樫立の場合は、『日本言語地図』での分布を考えあわせると、キャールメ・キャーロメは中年層が他集落からとりいれた語形のようにも見える。

末吉の若年層でケールメ、ケーロメという語形が現れるがこれは同じ集落の老・中年層にはない語形である。おそらく、坂下から入った語形であろう。

表 8 手拭い

世代	場面	地点	三 根	大賀郷	樫 立	中之郷	末 吉
老年層	無限定		・△・△▲・▲	・・・・・▲	・▲・・・▲	△・・△▲	△△・・
	誘 導		△	△ △ △	△ ▲ △		△ △
	子		・・▲・・	・△・・▲	・▲・・▲	△・△▲	・・・・△
	孫		・・▲・・	・△・・・	・▲・・▲	△・△▲	・・・・△
	友 達		△・▲・・▲	・△・・▲	・▲・・▲	△△△▲	・・・・△
	外来者		・・・・・	・△・・・	・・・・・	・・・・・	・・・・△
中年層	無限定		・▲・・・・ *	▲・△△▲	・・△・・	・・	・・△・▲
	誘 導		△ △ △		△ △ △		△
	父		▲・・△●△	▲△△▲・	・・△・・	・△	△・△■・
	子		・▲・△ △	・・・・▲・	・・△・・	・△	・△・・
	友 達		▲・△△●△	▲・△▲・	・・△・・	・△	△・△・
	外来者		・・・・ △	・・・・・	・・・・・	・△△	・△・
若年層	無限定		・・・・・	・・・・・	・・・・・	・・	△
	誘 導			△			△ △
	祖 父		・・・・・	・ ・・・	・・・・・	・・・・・	・△△△△
	父		・・・・・	・・・・・	・・・・・	・△△△△	
	友 達		・・・・・	・△・	・・・・・	・・・・・	△△△△
	外来者		・・・・・	・・・・・	・△・△・	・・△△△	

b. 2 手拭

老年層では、末吉がテネギーで、ほかの集落はテネゲー、テネギーの2語形共存、中年層では坂下のテネゲー、テネギーに対して坂上のテネギーとなっている。

ここで注目したいのは、末吉の若年層で、ここだけに、テネグイという新しい語形が見られ、しかも5人のうち3人が使用している。この集落の若年層でテネギーと共通語形のテネグイの混交によりテネグイという語形が発生したのであろう。

□ トーラ ○ ターラ
 △ トワラ ・ タワラ
 ▼ トアラ * コメドーラ

表 9 俵

世代	場面	地点	三 根	大賀郷	樫 立	中之郷	末 吉
老 年 層	無限定		□・□□* □ □	□□ □ □ □ □	□・▼▼△・▼	△△▼△▼	○ ○ ○ □ □ □
	誘 導			□	・		○ □ □ □ □ □
	子		・ ・ * ・ ・	□ □ □ □ □	□ ▼ △ △ ▼	△△▼△▼	・ ○ ○ □ □ □
	孫		・ ・ □ □ □ □	□ □ □ □ □	・ ▼ △ △ ▼	△ △ ▼ △ ▼	・ ○ □ □ □ □
	友 達		□ □ □ □ □ □	□ □ □ □ □	□ ▼ □ ▼	△ △ ▼ △ ▼	○ ○ □ □ □ □
中 年 層	無限定		□ □ □ □ □ □	□ □ □ □ □ □	□ □ □ □ □ □	▼ ・ △ ▼ △ ▼	○ ○ ○ □ □ □
	誘 導				・ ▼ ▼	▼	□ □ □ □
	父		□ □ □ □ □ □	□ □ □ □ □ □	・ □ □ □ □ □	▼ ▼ △ ▼ △ ▼	○ ○ ○ □ □ □
	子		□ □ □ □ □ □	□ □ □ □ □ □	・ □ □ □ □ □	・ □ □ ▼ □ □	・ □ □ □ □ □
	友 達		□ □ □ □ □ □	□ □ □ □ □ □	・ □ □ □ □ □	▼ ・ △ ▼ △ ▼	○ ○ □ □ □ □
若 年 層	無限定		・ □ □ □ □ □	・ □ □ □ □ □	・ □ □ □ □ □	・ □ □ □ □ □	・ ○ □ □ □ □
	誘 導		□				
	祖 父		・ □ □ □ □ □	・ □ □ □ □ □	・ □ □ □ □ □	・ □ □ □ □ □	・ □ □ □ □ □
	父		・ □ □ □ □ □	・ □ □ □ □ □	・ □ □ □ □ □	・ □ □ □ □ □	・ □ □ □ □ □
	友 達		・ □ □ □ □ □	・ □ □ □ □ □	・ □ □ □ □ □	・ □ □ □ □ □	・ □ □ □ □ □
	外来者		・ □ □ □ □ □	・ □ □ □ □ □	・ □ □ □ □ □	・ □ □ □ □ □	・ □ □ □ □ □

b. 3 俵

坂下のトーラに対して樫立・中之郷のトワラ・トアラ、末吉のターラと、老・中年層で、はっきりした地域差が見られる。

若年層では、ほとんど方言語形が見られない。これは近年、俵を身近に見ることが少なくなったこととも関連していよう。

「来年」で老・中年層で外来者に対して方言語形の使用が皆無だったのに対し、この項目では、4人の被調査者が外来者に対し方言語形を用いる。これは「来年」に比べ「俵」を表わす語形を用いる場面が限定されたものになるためかもしれない。

末吉と樫立に1人ずつ、坂下の語形を用いる被調査者がいるが、これは坂下の影響と見てよからう。

樫立の中年層が他地域と比べ共通語化されているのが目を引く。

表 10 来年

□ デアーネン
 □ デーネン
 ▲ ジャーネン
 ● リャーネン

○ レーネン
 ・ ライネン
 | ミョーネン

世代	地点 場面	三 根	大賀郷	樫 立	中之郷	末 吉
老年層	無限定	□ ・ □ □ □ □	・ □ ・ ・ □	▲・▲▲▲▲	■ ・ ■ □ □	・ ・ ・ □ ・ ・
	誘 導		□ □			□ □ □ □
	子 孫	□ ・ ・ ・ ・	・ □ □	▲ ・ ・ ▲・▲	■ ・ ■ ■ ■	・ ・ ・ ・ ・
	友 達	□ □ □ □ □	・ □ □	▲ ▲ ・ ▲・▲	■ ・ ■ ■ ■	・ □ ・ □ □
	外来者	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・	・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
中年層	無限定	・ □ ・ □ □	・ □ □ □ □	▲・▲▲▲	■ ・ ・ ■ □	・ □ □ □ □
	誘 導	□ □ □ □	□ □		▲	□ □ □ □
	父 子	□ ・ □ □ □	・ □ □ □ □	▲・▲▲・▲	■ ● ■ ■ ■	□ □ □ □ □
	友 達	□ □ □ □ □	・ □ □ □ □	▲ ▲ ▲ ▲	■ ・ ■ ■ ■	□ □ □ □ □
	外来者	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
若年層	無限定	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・ □
	誘 導	□	□	▲	●	□ □
	祖 父	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
	父 子	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
	友 達	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ □ ・ ・
	外来者	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・

b. 4 来年

坂下の2集落と末吉がデーネン、樫立がジャーネン、中之郷がデアーネンとはっきりした地域差が老年層と中年層で見られる。

レーネン・リャーネンはわずかしき回答がないことから、語頭の子音がrのものはむしろ共通語の影響で生じた語形とも考えられる。

若年層はほぼ共通語化しており、方言語形は主に誘導で見られる程度である。

非常によく似た分布を示すものに「美しい」(項目番号 026)があるが、ここでは「来年」を代表としてとりあげた。

「蛙」はkaeruのaeに対応する部分にバラエティーが見られたが、「来年」rainenのaiに対応する部分の分布とは違っている。aiとaeで非常に近い音なのにおもしろいことである。

○ オナゴ
 ⊖ オンナゴ
 ⊙ オンナゴメ
 ■ メナラベ
 ・ オンナ
 * ジョシ

表 11 女

世代	場面	地点				
		三 根	大賀郷	樫 立	中之郷	末 吉
老年層	無限定	○ ・ ⊖ ⊖ ⊖ ・	・ ・ ・ ・ ⊖	⊖ ⊖ ⊖ ・ ⊖	⊖ ・ ⊖ ⊖ ⊖ ⊖	・ ・ ・ ・ ⊖
	誘 導		⊖ ⊖ ⊖ ⊖			⊖ ⊖
	子	⊖ ⊖ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ⊖	・ ⊖ ⊖ ・ ⊖	⊖ ⊖ ⊖ ⊖ ⊖	・ ⊖ ・ ⊖ ⊖ ・
	孫	⊖ ・	・ ・ ・ ・ ・	⊖ ⊖ ・ ・ ・	⊖ ⊖ ⊖ ⊖ ⊖	・ ⊖ ・ ⊖ ・ ・
	友 達	⊖ ⊖ ⊖ ⊖ ⊖	・ ⊖ ⊖ ⊖ ⊖	⊖ ⊖ ⊖ ・ ⊖	⊖ ⊖ ⊖ ⊖ ⊖	⊖ ⊖ ⊖ ⊖ ⊖
中年層	無限定	⊖ ⊖ ・ ・ ・	⊖ ⊖ ⊖ ⊖ ⊖	・ ・ ⊖ ⊖ ⊖	・ ・ ⊖ ⊖ ⊖	・ ・ ・ ・ ⊖
	誘 導			・	⊖	⊖
	父	⊖ ⊖ ・ ・	⊖ ⊖ ⊖ ⊖ ・	⊖ ⊖ ⊖ ⊖ ⊖	⊖ ⊖ ⊖ ⊖ ⊖	⊖ ⊖ ⊖ ⊖ ⊖
	子	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ⊖ ⊖	・ ・ ・ ・ ⊖	・ ・ ・ ⊖
	友 達	○ ⊖ ⊖ ・	・ ・ ⊖ ⊖	⊖ ⊖ ⊖ ⊖ ⊖	⊖ ⊖ ⊖ ⊖ ⊖	⊖ ⊖ ⊖ ⊖ ⊖
若年層	無限定	・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
	誘 導	⊖ ⊖ ⊖ ⊖	⊖ ⊖ ⊖ ⊖	⊖ ⊖ ⊖	⊖ ⊖	⊖ ⊖ ⊖
	祖 父	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
	父	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
	友 達	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ⊖ ⊖	・ ・ ・ ・ ⊖	・ ・ ・ *	・ ・ ・ ・ ・
	無限定	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
	誘 導					
	祖 父	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
	父	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
	友 達	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
	外 来 者	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・

c) 地域差の見られないもの

c. 1 女

『日本言語地図』では全集落オンナゴであったが、この表にはそれ以外にオンナゴメ（メは動物名などの後につく接尾辞。「かまきり」の項参照）、メナラベ、オナゴが見られる。しかし、はっきりした地域差はない。

老・中年層は外来者に対してほとんどオンナゴメは使わない。それ以外の場面ではよく使っているので、比較的切りかえがうまく行なわれているということになる。

メナラベは樫立の中年層の1人が外来者に対する場面の第2答として回答したものである。メナラベは、本来「若い女」の意味だが、ここでは「外来者に対するサービスとして」使ったのであろうか。

●	ボーキャ	▲	デッカキャ
⊙	ボーケ	×	オーキャ
○	ボーイ		オッキナダラ
◊	ボーケ	∟	オッキー
◎	ボーバコ	・	オーキー
△	デカイ		

表 12 大きい

世代	場面	地点	三 根	大賀郷	桎 立	中之郷	末 吉
老年層	無限定		● ● ● ● ● ○	● ● ○ ○ ● ● ● ⊙	⊙ ⊙ ○ ● ● ●	● ● ⊙ ● ○ ● ○	● ● ● ● ● ⊙
	誘 導			●	●	●	●
	子		● ● ● ● ● ○	● ● ● ● ●	○ ○ ● ● ● ●	● ● ● ● ○ ●	● ● ● ● ● ⊙
	孫		● ● ● ● ● ○	● ● ● ● ●	⊙ ● ● ● ● ●	● ● ● ● ○ ●	● ● ● ● ●
	友 達		● ● ● ● ● ○	● ● ● ● ●	⊙ ⊙ ● ● ● ●	● ● ● ● ○ ●	● ● ● ● ● ⊙
中年層	無限定		○ ⊙ ● ● ● ●	⊙ ⊙ ⊙ ○ ● ○	● ● ○ ○ ● ○ ●	△ ● ● ● ●	○ ● ● ● ●
	誘 導			○	●	●	⊙
	父		○ ⊙ ● ● ● ●	⊙ ⊙ ⊙ ● ● ○	● ● ○ ○ ● ● ●	● ● ● ● ● ●	○ ⊙ ⊙ ⊙ ● ○ ●
	子		○ ⊙ △ ● ● ●	⊙ ⊙ ○ ● ● ●	● ● ○ ○ ● ● ●	● ● ● ● ● ●	○ ⊙ ⊙ ● ● ●
	友 達		○ ⊙ ● ● ● ●	⊙ ⊙ ○ ● ● ●	● ● ○ ○ ● ● ●	● ● ● ● ● ●	○ ⊙ ⊙ ● ● ● ●
若年層	無限定		● ● ○ △ ● ●	● ○ △ △ ○ ●	● ● ● △ ● △	△ △ ● ● ● ●	△ △ △ △ ● ○ △
	誘 導		●	● ○	● ○ ● ○ ○	○	● ● ● ● ● ⊙
	祖 父		● ○ ● ● ● ●	● ○ △ ∟ ○ ●	● ● ○ ● ● ● ●	● ● ○ ● ● ● ●	● ● ○ △ ● ●
	父		● ○ ● ● ● ●	● ○ △ ∟ ○ ●	● ● ● ● ● ● ●	● ● ○ ● ● ● ●	△ △ ○ △ ● ●
	友 達		● ● ○ △ ○ ●	● △ ○ △ ●	⊙ ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● △ ○ △ ● ●
若年層	無限定		● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●
	誘 導						
	祖 父		● ○ ● ● ● ●	● ○ △ ∟ ○ ●	● ● ○ ● ● ● ●	● ● ○ ● ● ● ●	● ● ○ △ ● ●
	父		● ○ ● ● ● ●	● ○ △ ∟ ○ ●	● ● ● ● ● ● ●	● ● ○ ● ● ● ●	△ △ ○ △ ● ●
	友 達		● ● ○ △ ○ ●	● △ ○ △ ●	⊙ ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● △ ○ △ ● ●
若年層	無限定		● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●
	誘 導						
	祖 父		● ○ ● ● ● ●	● ○ △ ∟ ○ ●	● ● ○ ● ● ● ●	● ● ○ ● ● ● ●	● ● ○ △ ● ●
	父		● ○ ● ● ● ●	● ○ △ ∟ ○ ●	● ● ● ● ● ● ●	● ● ○ ● ● ● ●	△ △ ○ △ ● ●
	友 達		● ● ○ △ ○ ●	● △ ○ △ ●	⊙ ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● △ ○ △ ● ●

c. 2 大きい

どの集落にもボーキャおよびボーケが見られるという点で地域差はない。

若年層は誘導の場面以外にはボーイ、デカイ、デッカキャを多く用いている。ボーイは方言語形ボーキャの語幹に共通語の活用語尾をつなげた語形、デッカキャはその反対に島外から入った語形デッカイの語幹に入丈方言の活用語尾をつけた語形である。ボーイは老・中年層でも使われているが、島の若い世代からそれより上の世代にひろがったものとする。活用語尾を共通語化する傾向は近年において生じたものと思われるからである。

デッカキャとボーイ・ボーケとの間に文体差のようなものがあってもおかしくはないが、この表のなかの分布状態からはよくわからない。

○ クスベ
 × ゴクラクマダラ
 ! ゴクラクハンテン
 ・ ホクロ

表 13 ほくろ

世代	場面	地点				
		三 根	大賀郷	檜 立	中之郷	末 吉
老年層	無限定	・ ○ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○
	誘 導	○	○ ○	○	○ ○	○ ○ ○ ○
	子	・ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○
	孫	・ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○
	友 達	○ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○
中年層	無限定	・ ○ ○ ○ ○	・ × ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○
	誘 導	○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	○	○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○
	父	○ ○ ○ ○ ○	○ × ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○
	子	・ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○
	友 達	○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○
若年層	無限定	・ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○
	誘 導	○				
	祖 父	・ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○
	父	・ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○
	友 達	・ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○
若年層	無限定	・ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○
	誘 導	○				
	祖 父	・ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○
	父	・ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○
	友 達	・ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○	・ ○ ○ ○ ○ ○

c. 3 ほくろ (小さいもの)

老・中年層で、外来者に対して方言形クスベを用いる被調査者が散見される。恐らく、方言形であるとの意識が薄いのであろう。しかし、若年層ではクスベはほとんど回答されていない。

大賀郷のゴクラクマダラ・ゴクラクハンテンは本来はすこし違うものを指すのかもしれない。

若年層はほとんどホクロであるので場面差は全くないが、老・中年層では、外来者と若年層に対しては方言語形を使わないという形で場面差がかなり見られる。

● ツブリ
■ テマー
▲ トンツベ
・ アタマ

表 14 頭

世代	場面	地点				
		三 根	大賀郷	檜 立	中之郷	末 吉
老 年 層	無限定	● ● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●
	誘 導	●	● ●	●		●
	子 孫	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●
	友 達	● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●
	外来者	● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●
中 年 層	無限定	● ▲ ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●
	誘 導	●	●	● ●	●	● ● ●
	父 子	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●
	友 達	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●
	外来者	● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●
若 年 層	無限定	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●
	誘 導	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	●	●	● ● ●
	祖 父	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●
	父 子	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●
	友 達	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●
	外来者	● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●

c. 4 頭

全域でツブリが用いられる。

外来者に対しては老・中年層はツブリを用いないし、若年層に対してもツブリをあまり用いない。場面差としてあげられるのはそれだけである。

末吉の若年層でテマーという語形を用いる被調査者が一人だけいるが、この語形が若年層で新たに発生したものか、あるいはもっと以前からあった語形かは決めがたい。併用にしか出てこないことから、近い意味分野を表わす語形が回答されたと考えることも可能である。あるいは、テマーは何らかの感情的なニュアンスの伴った語形かもしれない。

三根の中年層のトンツベのツベはツブリから来ているのであろう。

- サンアサッテ / ツギノツギノヒ
 ○ ミナサッテ | アシタアサッテ
 △ ヤノアサッテ * ミヨーゴニチ
 ◎ ミツカゴ ・ シアサッテ

表 15 明明後日

地点 世代 場面		三 根	大賀郷	樫 立	中之郷	末 吉
老 年 層	無限定	● ● ● ● ●	△ ● ● ● △ ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●
	誘 導		○			
	子	● ● ● ● *	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●
	孫	● ● ● ● *	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●
	友 達	● ● ● ● *	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●
中 年 層	外來者	● ◎ ● *	● ● ● ● ● ●	△ ・ * ●	● ● △ △ ・	● ● ● ● ● ●
	無限定	● ● ● ● ●	● ● ● ○ ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●
	誘 導					
	父	● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●
	子	● ● ● ● ● ◎	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● * ●	● ● ● ● ● ●
若 年 層	友 達	● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● * ●	● ● ● ● ● ●
	外來者	● ◎ ● ● ◎	● ◎ ● ● ●	● ● ● ● ● ●	* ● ● ● *	● ● ● ● ● ●
	無限定	● ● ● ● ●	● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●
	誘 導					
	祖 父	● ● ● ● ●	● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●
若 年 層	父	● ● ● ● ●	● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●
	友 達	● ● ● ● ●	● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●
	外來者	● ● ● ● ●	● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ●	● ● ● / ●

c. 5 明明後日

全世代で共通語化が進んでいないという点で特異な表である。

全集落の全場面にサンアサッテが大勢を占めている。おそらく、方言であるという意識がほとんどないのであろう。その証拠に、外来者に対してシアサッテを用いる人は中之郷の老年層の一人だけである。

サンアサッテとシガサッテとは3-4の関係になることは、「明明明後日」のところで述べた。

樫立と中之郷で、外来者に対する場面でヤノアサッテが回答されている。明明後日と明明明後日は東京ではシアサッテ／ヤノアサッテであるが、その周囲ではヤノアサッテ／シアサッテであることを考えると興味深い。ここでのヤノアサッテは関東方言を地方共通語として使ったものと考えるのである。

表 16 語彙の総合図

第一答が共通語形であった回数

・ 0～4回 ⊙ 9～12回

○ 5～8回 ● 13～17回

世代 \ 地点 場面		三 根	大賀郷	樫 立	中之郷	末 吉
老 年 層	無限定	○ ● ⊙ ○ ○	⊙ ⊙ ● ● ・	⊙ ○ ○ ・ ⊙	○ ○ ○ ⊙ ・	⊙ ⊙ ● ⊙ ○
	子	○ ⊙ ⊙ ● ●	⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ○	⊙ ○ ○ ・ ○	○ ○ ○ ・ ・	● ⊙ ● ⊙ ⊙
	孫	⊙ ⊙ ⊙ ● ●	● ⊙ ⊙ ⊙ ⊙	● ○ ⊙ ○ ⊙	○ ○ ○ ○ ○	● ⊙ ● ● ●
	友 達	・ ○ ○ ・ ⊙	○ ○ ○ ⊙ ・	○ ・ ⊙ ・ ○	○ ・ ・ ・ ・	⊙ ○ ⊙ ○ ⊙
中 年 層	外来者	● ● ● ● ●	● ● ⊙ ⊙ ●	● ● ⊙ ● ●	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●
	無限定	○ ○ ● ⊙ ⊙	○ ○ ○ ⊙ ⊙	⊙ ○ ○ ⊙ ⊙	⊙ ● ● ・ ○	⊙ ○ ・ ○ ●
	父	・ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ・ ⊙	○ ○ ・ ⊙ ⊙	○ ○ ○ ○ ・	○ ○ ○ ・ ●
	子	○ ○ ⊙ ⊙ ⊙	⊙ ⊙ ● ⊙ ⊙	● ○ ・ ● ⊙	● ● ● ⊙ ⊙	● ⊙ ○ ● ●
若 年 層	友 達	・ ・ ○ ○ ○	⊙ ⊙ ⊙ ・ ⊙	⊙ ○ ・ ● ⊙	○ ⊙ ⊙ ⊙ ○	○ ⊙ ○ ● ●
	外来者	⊙ ○ ● ● ●	● ● ● ● ●	⊙ ⊙ ● ● ●	● ● ● ● ●	● ⊙ ● ● ●
	無限定	● ● ● ● ⊙	○ ⊙ ● ⊙ ⊙	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●
	祖 父	● ○ ● ● ●	● ⊙ ● ● ●	● ● ● ● ●	⊙ ● ● ● ●	⊙ ● ⊙ ● ●
若 年 層	父	● ○ ● ● ●	● ⊙ ● ● ●	● ● ● ● ●	⊙ ● ● ● ●	⊙ ● ⊙ ● ●
	友 達	● ⊙ ● ● ⊙	● ⊙ ● ● ●	● ● ● ● ●	⊙ ● ● ● ●	⊙ ● ⊙ ● ●
	外来者	● ⊙ ● ● ●	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	⊙ ● ● ● ●	● ● ● ● ●

d) 語彙項目の総合（共通語形の使用頻度）

この表は各個人が、それぞれの場面で第1答を共通語形で回答した項目数の累計を示したものである。対象とした項目を項目番号であげると 002, 003, 005, 006, 007, 008, 010, 012, 014(「男」・「女」), 015, 016, 017, 018, 020, 021, 022 である。

地点別に見てみると、ほとんど差はない。ただ、中之郷の老年層が他地点の同世代に比べて共通語形の使用が少ないように見えるが、中年層、若年層では他の地点と差はなくなる。

場面別に見ると、老年層では、外来者＞孫＞子＞友達 という順番で共通語の使用が行なわれ、中年層では外来者＞子＞父＞友達 である。子の世代では外来者に対して共通語の使用が最も多く、それ以外の場面はほとんど同じであるが、友達に対する共通語使用が祖父に対してよりいくぶん少なめと見られないこともない。

世代別では、老年層と中年層が共通語の使用はほとんど同じか、中年層が少

し多いくらいだが、若年層は他の2世代よりずっと共通語使用が多い。

2.2. 文法項目

語彙項目と大きく違う点が2つある。ひとつは、共通語形と固有の方言語形とのあいだにいくつもの語形があることである。もうひとつは、待遇の要素が、強くなることである。

最初の点については、語彙項目の「大きい」を見ていただきたい。「大きい」は質問の仕方や、場面の設定の仕方から語彙項目として扱ったが、活用語尾にいくつかの変種が見られ、その意味からは文法項目に共通した性格を持っている。この項目で、固有の方言語形のボーキヤと共通語形のオーキー、デッカイの中間に位置するものとして、ボーイ、デッカキヤが現れた。このように文法項目では共通語形との混交形が生じやすい。これは特に「行かなかった」のように複数の要素の組み合わせによってできている表現の場合にいちじるしく、また多くの語形を生じさせることになる。

もうひとつの、待遇の要素というのは、対者に対する尊敬語、自分に対する謙譲語などが出てきやすいことを指す。これも語彙項目にはなかったことである。

文法項目では語彙項目と違って各集落間で固有の方言語形にはっきりした地域差が見られることはあまりない。

世代差という点では、上述の共通語形と固有の方言語形の混交による語形を若年層が多く用いる傾向があるために、若年層が共通語形のみを使い、上の世代と断絶が生じるということが少ない。

場面差としては、先生に対する場面が外来者に対する場面とともに、共通語形の使用が多いこと、家庭内であっても、中年層が老年層に対して敬語を使うことがあることなどがある。

ここでは、文法項目の一部をとりあげ、説明を加えることにしたい。

表 17 私はきのう役場に行かなかった

		<ul style="list-style-type: none"> ○ イキンジャラ ▽ イキンジャツ ○ イシナラ・イッテキンナラ ▲ イキンナツ・イキンナツラ △ イキンナクッタ・イキンナクッタラ ■ イキンナカラ □ イキンナカラ・イキンナカラ □ イキナクッタ ◎ イキータシンジャラ・イキータシンナラ ・ イカナクッタ * イキマセンデシ・イカナクッタデス (その他 				
世代	場面	三 根	大賀郷	樫 立	中之郷	末 吉
老年層	子	○ ○ ○ . . ○	○ . ▽ ○ .	○ ○ ○ ○ ○	○ (○ □ ○	○ . . ○
	孫	○ . . . ○	. . ▽ ○ .	. ○ ○ ○ .	○ (. □ ○	○ . . ○
	友達	○ ○ ○ . ○	○ . ▽ ○ .	○ ○ ○ ○ .	○ (○ □ ○	○ ○ ○ ○
	先生	* * * . ○	◎ . ▽ ◎ *	* ○ * * .	○ (* * ◎ *	* . * .
	外来者	* * * . *	* . . * *	* * * * .	* * * * *	* . * .
中年層	父	○ ○ ○ ○ ○	(○ ○ ○ □	. ○ ○ ■ ■	△ ■ □ □ □	(. ○ ○ ○ ○
	子	○ . ○ ○ .	(○ ○ .	. ○ ○ (. .	△ ■ . . □	(. ○ . .
	友達	○ ○ ○ ○ ○	(○ ○ ○ .	. ○ ○ (■ ■	△ ■ (□ □	(. ○ ○ ○ *
	先生	○ * ◎ ◎	* ○ △ *	. ○ ○ (■ ■	. △ . . *	* * ○ * *
	外来者	. * * * *	* * . *	* * * * .	. * . . *	* * * * *
若年層	祖父	. ▲ . ▲ .	. . △ △ .	. △ △ . . .	▲ △ (△ △
	父	△ ▲ . ▲ .	. . △ △ .	. △ △ . . .	▲ △ (△ △
	友達	△ (▲ . ▲ .	. . △ △ △	. △ △ . . .	▲ △ (△ △
	先生	. . . ▲ .	* * △ . *	* * △ . . *	▲ △ △ △ △
	外来者	. . . ▲ .	* * △ * *	* * △ . . *	(. ▲ . .

1. 私はきのう役場に行かなかった。

非常に多くの形式の見られる項目である。このうちで質問文に最も近い意味の固有の方言形はイキンジャラと考えられる。三根では中年層全員が使うことからイキンナラもそうかもしれない。

若年層で使われるイキンナツ(ラ)、イキンナクッタは上の2語形と共通語形イカナクッタとの混交によるものと考えられる。イキンナクッタは若年層で全地点に見られるほか、中年層でも大賀郷と中之郷で使用する人がある。この語形はどこか1地点で発生してそこから他の集落へ伝播したとすることもできるが、それぞれの地点で他とは独立に生じることも同じくらいあり得る。共通語化の際に一挙に共通語形を使わないで、このような混交による形を経てから共通語化するという傾向はなぜ生じるのか、それを知ることが今後の課題であろう。

- ヤクベー ▲ ヤクバシャン
 ● ヤクビャー □ ヤクバゲー
 ・ ヤクバエ | ヤクバニ
 △ ヤクバシマ * ヤクバ

表 18 私はきのう役場に行った

世代 \ 場面 \ 地点		三 根	大賀郷	樫 立	中之郷	末 吉
老 年 層	子	・ ○ ○	・ ・	● ・ ・ ○	* ● ● ● ●	・ ・ ○ ●
	孫	・ ○ ・	・ ・	● ・ ・	* ● ● ● ●	・ ・ ○ *
	友 達	・ ○ ○ ○ ○	・ ・ ・	● ・ ・	* ● ● ● ●	・ ・ ○ ● ・
	先 生	・ ○ ・ ○	・ ・ ・	● ・ ・	* ● ・ ●	・ ・ ・ * ・
	外来者	・ ・ ・ ・	・ ・ ・	・ ・ ・	・ ・ ・	・ ・ ・ ・
中 年 層	父	○ □ □ ・	□ ・ □ ○	・ ・ ・	● ● ●	・ ・ ・ ・ ・
	子	・ □ □ ・	・ ・ ・ ○	・ ・ ・	● ・ ●	・ ・ ・
	友 達	○ □ □ ・	・ □ ・ □ ○	・ ・ ・	・ ・ ●	・ ・ ・ ・
	先 生	・ □ □ ・	・ □ ・ □ ○	・ ・ ・	・ ・	・ ・ ・ ・
	外来者	・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・	・ ・ ・	・ ・	・ ・ ・ ・
若 年 層	祖 父	・ □	□	・ ・		△
	父	・ □		・ ・		△
	友 達	□		・ ・		▲
	先 生	□	□	・ ・		▲
	外来者	・		・ ・		

2. 私はきのう役場に行った。

老・中年層において支配的なのは、ヤクバエとそこから変化した、ヤクベー、ヤクビャーである。中之郷でヤクビャーが見られ、末吉、三根、大賀郷にヤクベーがあることは、「来年」でリャーネンが中之郷にあり、デーネンが末吉、三根、大賀郷にあることと平行した現象であるが、細部において完全に一致するわけではない。三根と大賀郷の中・若年層に見られるヤクバゲー、末吉の若年層に見られるヤクバシマ、ヤクバシャンは到達点ではなく、動作の行なわれる方向を示す語形が回答されたと考えられる。

この項目は助詞項目であり、混交による語形がないことがほかの文法項目とは異なる。

- イカラ
 □ イカララ
 ▲ イカーガ
 ▼ イコーガ
 △ イコージャ・イコアジャ
 ○ イキータシタラ
 ● イツタラ
 | イキマシタ・イッテキマシタ
 ・ イツタ・イッテキタ
 (その他

表 19 私はきのう役場に行った

世代	地点 場面	三 根	大賀郷	樫 立	中之郷	末 吉
老 年 層	子	■ □ ・ ■ ・ ▼	■ ・ ・ ○	(■ △ ・ ■	■ △ (■ ■	■ ■ □ ・
	孫	・ ・ ・ ・ ・	■ ・ ・ ○	(■ △ ・ ・	■ △ (■ ■	・ ・ ・ (・
	友 達	■ ・ ■ ▼ ▼	■ ・ ・ ○	(■ △ ■ ・	■ △ (■ ■	■ ■ ■ □ ・
	先 生	・ ○	■ ○ ・ ○	(■	・ △ ○	(
	外来者	・	■ ・ ・	(・	・	
中 年 層	父	・ ■ (■ ・	(((△	・ ■ ■ ■ ■	(■ ((■	(・ ▲ ■ (
	子	・ ・ (■ ・	・ ・ ・ ■	・ ■ ■ ■ ■	・ ■ (・ ■	(・ ▲ ・ ・
	友 達	・ ■ (■ ・	(▼ ((■	・ ■ ■ ■ ■	・ ■ ((■	(・ ▲ ■ ・
	先 生	・ (■ ・	(・ (・ ■	○ ■	・ ■ ・ ・ ・	・ ・ ▲ ・
	外来者	・ ・ ・ ・	・ ・ ・	・	・ ・ ・ ・	(・ ・
若 年 層	祖 父	・ ・ ・ ○ ・	・ ・ ○ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
	父	・ ・ ・ ○ ・	・ ・ ○ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
	友 達	○ ・ ・ ○ ・	・ ・ ○ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
	先 生	・ ・ ・ ○	・ ○ ・	・ ・ ・	・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
	外来者	・ ・ ・ ・	・ ○	・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・

3. 私はきのう役場に行った。

「行った」に一番近い意味を持つ方言形はイカラであり、これは老・中年層でかなりの勢力を持っている。また、丁寧体（謙讓体？）であるイキータシタラが先生に対する場面で現れ、外来者に対する場面では現れない。これは、外来者が「共通語を使う、親しくない相手」として意識されているのに対し、先生が「方言で話ができる、親しいが上位に待遇すべき相手」としてとらえられていることによる。

三根・大賀郷の若年層および大賀郷の老年層に見られるイツタラはイツタとイカラの混交によるものであろう。これ以外の方言形が若世代にないことが注目される。

表 20 東京では雪が降ったそうだと

- フラッテーヤ・フラッチージャ □ フッタッチーヤ
 ◎ フラーデーヤ □ フッタッテ
 ● フラッチーヤ・フラッチージャ ■ フタタンダッテ
 ● フラッチェーヤ ・ フッタソーダ・フッタソーデ
 / フラリゲナラ・フラリギーナラ (その他
 △ フッタカダラ

世代	場面	地点	三 根	大賀郷	樫 立	中之郷	末 吉
老 年 層	子		○ ○ ○ ((○ ・ ○ ○ ○	● / ○ ● ●	(○ ○ ・ ○ ◎	・ ・ (● ●
	孫		・ ○ ・ ((○ ・ ○ ○ ○	● / ○ ● ●	(○ ○ ・ ○ ◎	・ ・ (・ ●
	友 達		○ ○ ○ ((○ ・ ○ ○ ○	● / ○ ● ●	(○ ○ ・ ○ ◎	● ● (● ●
	先 生		・ ・ ・ ((・ ・ ○ ○ (● / ○ ● ●	(○ (・ ○ (・ ・ (・ ・
	外来者		・ ・ ・ ((・ ・ ・ ・ (● (・ ・ (・ ・ ・ ・ ・	・ ・ (・
中 年 層	父		○ ○ ○ ○ (○ ○ ○ (○	・ / ● ○ ●	○ ○ ○ ○ (● ・ ● ● ●
	子		○ ○ ○ ○ (○ ○ □ (○	・ / ● ・ ・	□ ○ ・ ・ ○	● ・ ● (・
	友 達		○ ○ ○ ○ (○ ○ ○ (○	・ / ● ○ ●	○ ○ ・ ○ ○	● ・ ● ● ・
	先 生		○ ○ ・ (○ (・ ○ ○ (○	・ / ● ○ ・	・ ○ ・ ・ ・	・ ・ ● ・ ・
	外来者		○ ・ ・ ・ (・ ・ ・ □ (・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
若 年 層	祖 父		(○ ・ ○ □	(■ ○ ○ ・	□ ・ ・ ■ □	● ・ ・ □ ・	△ ● □ □ ●
	父		(○ ・ ○ □	(■ ○ ○ ・	□ ・ ・ ■ □	● ・ ・ □ ・	△ ● □ □ ●
	友 達		(○ ■ ○ □	(■ ○ ○ ・	□ ・ (■ □	● ・ ・ □ ・	△ ● ● □ ●
	先 生		(・ ・ ○ □	(・ ○ ○ ・	□ ・ (■ □	■ ・ ・ □ ・	△ ● ● □ ・
	外来者		(・ ・ ・ □	・ ・ ○ ・ ・	□ ・ (・ □	・ ・ ・ ・ ・	△ ■ □ □ ・

4. 東京では雪が降ったそうだと。

「降ったそうだと」に一番近い意味を持つ固有の方言語形は三根と大賀郷と中之郷でフラッテーヤ、末吉でフラッチージャ、樫立でフラッチージャまたはフラッチェーヤであると思われる。これらは三根・大賀郷の若年層でもある程度の勢力を保っている。樫立に見られるフラリゲナラは「降ったらしい」に近い意味の語形であろう。若年層のフッタッテは、もちろん東京方言などの「フッタッテ」（降ったということだ）を移入した結果と見ることもできる。しかし、フラッテーヤという語形が既に存在したために、この語形が素直に受け入れられ、「降ってきたそうだと」という伝聞の意味をよりはっきり持つようになったと考えることは十分可能である。中世代でフッタッテを使う人は大賀郷と中之郷にひとりずついるが、自分の子と外来者に対してだけフッタッテを使うことから、この語形が共通語に近いものととらえられていることがわかる。

- アカケ
- アカーケ
- アカキヤ
- △ アカッポシケ
- ・ アカイ

表 21 赤い柿がある

世代	場面	地点	三 根	大賀郷	檜 立	中之郷	末 吉
老 年 層	子		● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●
	孫		・ ● ● ● ●	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●
	友 達		● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●
	先 生		・ ・ ・ ・ ・	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	・ ● ● ● ●	・ ・ ● ● ●
	外来者		・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ● ● ●	・ ● ● ● ●	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ● ● ●
中 年 層	父		● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	・ ● ○ ● ●	・ ・ ● ● ●
	子		● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	・ ● ● ● ●	・ ・ ● ● ●
	友 達		● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	・ ● ○ ● ●	・ ・ ● ● ●
	先 生		● ● ● ● ●	・ ● ● ● ●	● ● ● ● ●	・ ● ● ● ●	・ ・ ● ● ●
	外来者		● ● ● ● ●	・ ・ ● ● ●	・ ・ ● ● ●	・ ● ● ● ●	・ ・ ● ● ●
若 年 層	祖 父		・ ・ ● ● ●	・ ● ● ● ●	・ ● ● ● ●	・ ・ ● ● ●	● ● △ ● ●
	父		・ ・ ● ● ●	・ ● ● ● ●	・ ● ● ● ●	・ ・ ● ● ●	● ● △ ● ●
	友 達		・ ・ ● ● ●	● ● ● ● ●	・ ● ● ● ●	・ ・ ● ● ●	● ● △ ● ●
	先 生		・ ・ ● ● ●	・ ● ● ● ●	・ ● ● ● ●	・ ・ ● ● ●	● ● △ ● ●
	外来者		・ ・ ● ● ●	・ ● ● ● ●	・ ● ● ● ●	・ ・ ● ● ●	● ・ ● ● ●

5. 赤い柿がある。

文法項目としては非常に語形の種類の少ない表である。

若年層で共通語形が勢力が強いが、これは共通語形と固有の方言語形との混交による語形がないことと関係がありそうである。

場面差としては、老・中年層で先生、外来者に対する場面で共通語使用が多くなり、特に外来者に対してはほとんどアカケを使わなくなっているのが目立つ。

地域差として最も目立つのは末吉の若年層で祖父・父・友達に対する場面で全被調査者がアカケ、アカッポシケを回答していることである。中年層で末吉を含む坂上が坂下より方言語形が使われなくなっているのとは反対の現象である。末吉では若年層で方言語形が勢力を盛り返したように見えるのである。なおアカッポシケは「赤っぽい」に近い意味を持った語形と思われる。

2.3. まとめ

以上、語彙項目と文法項目について見てきた。

調査の目的は地域差，世代差，場面差を同時に見ることにあったが，それは達成できたであろうか。

まず地域差だが，これは老年層で差があれば中年層まではその差がひきつがれている。また世代差としては若年層が共通語使用の程度がはっきり異なるという点があげられる。老年層と中年層でははっきりした差はない。共通語化の問題については2.1. d 語彙項目の総合（253 ページ）を参照されたい。また，文法項目では，若年層で固有の方言語形と共通語形の混交によって生じた語形を用いるのが目についた。これは，中年層があまり用いないところから見て最近の発生であり，「新方言」と呼んでもよいものかとも思われるが，共通語形と固有の方言語形の間後に位置するものと考えられる。語彙項目ではこのような新方言的な語形が少ないために，固有の方言語形から一気に共通語形に乗りかえてしまうように見えるのである。実際には語彙項目と文法項目の共通語化の速度はそんなに違わないのだが，以上のような理由で語彙項目と文法項目に分布の上での差があるように見えてしまうのかもしれない。

場面差については，老・中年層が若年層に対して共通語形を使う傾向があるのがおもしろい。外来者に対して共通語形を使用する傾向があるのはもちろんのことである。

ところでこれらの3つの差のからみ合いについては判然としないところがある。一方の差がもう一方の差を何らかの形で投影しているという関係を予想したのだがそうはならなかった。

3. おわりに

設定した場面のなかに家庭内のものが含まれており、結果的に家庭内のコミュニケーションについてもふれることになった。興味深い話題と思われる。

なお、この研究についてはその一部を 1979 (昭和 54) 年の国立国語研究所創立 30 周年記念研究発表会において「八丈島の言語生活——世代差・場面差など」と題して発表を行なったことを付け加えておく。家庭内のコミュニケーションについては、参考文献 1 がある。

また、八丈島の末吉で全数調査を行なった報告としては参考文献 2 がある。

参 考 文 献

1. 黄鴻信「仙台市における親族関係と待遇表現——年齢別場面設定調査から——」
(『日本方言研究会第 37 回発表原稿集』, 1983)
2. 沖裕子「待遇表現における男女差——八丈島末吉洞輪沢集落の全員調査から」
(『日本方言研究会第 28 回発表原稿集』, 1979)
3. 国立国語研究所『八丈島の言語調査』(1950)
4. 飯豊毅一「八丈島方言の語法」(国立国語研究所『ことばの研究』, 1959)
5. 平山輝男『伊豆諸島方言の研究』(1965, 明治書院)
6. 大島一郎ほか『八丈島方言の研究』(1980, 東京都立大学国語学研究室)
7. 山本 清隆「八丈島方言における共通語化の一側面——存在表現アル・イルおよびアスペクト表現テアル・テイルをめぐる——」(『日本方言研究会第 39 回発表原稿集』, 1984)

(以上, 沢木幹栄執筆)

言語地図における意味の問題

——中国山地と瀬戸内海での調査から——

1. 目的と調査の概要

1.1. 目 的

この章では、『日本言語地図』の意味的背景について、いくつかの問題を検討する。もちろん“意味”といっても、言語地図に載せられた語形とそれと結びつく語義との関連について、基本的なことがらを考えようというのである。『日本言語地図』の多くの項目では、意味を一定にとり、それを表わす語形の変種を調査し地図化している。そのため語形についていろいろ論じられることはあっても、その論の基盤をなす意味の問題にはあまり注意が払われてこなかったと思われる。したがって、ここで一度そうした問題を考えておくことは、むだなことではなかろうと思うのである。

さて、具体的には以下に掲げるような点を検討してみたい。

- (1) 言語地図に示された語は、どれもその項目の意味条件と的確に対応するものばかりであろうか。
- (2) 同じ語形の分布する地域は、その語形と結びつく語義の範囲から見ても等質なのだろうか。
- (3) 言語地図上の各語の語義は、みな同じと言えるだろうか。もし違うならば、各語の分布領域の境界は語義を詳しく見ていった場合、どのような状態を呈するだろうか。

もちろん、言語地図について考えておかなければならない意味の問題は他にも多い。言語地理学にとっては、とりわけ解釈の段階に生ずる問題は重要であろう。しかし、ここではそうした言語地図の解釈に至ることはせず、上にあげ

たような言語地図が示す共時的な語の分布に潜む問題を考察してみようと思う。なお、これらの問題を明らかにするために対象としたのは、「せおう」「かつぐ」「もつ」などの支え持ち動作の意味分野である。

1.2. 調査地域・被調査者

次の2地域を調査地域として選んだ。地点はなるべく直線上に隣接，連続するようにとってある。

A地域……岡山県勝田郡勝央町岡から兵庫県揖保郡新宮町平野に至る姫新線沿いの地域，72地点。

B地域……岡山県笠岡市五軒屋から瀬戸内海を島づたいに横断し香川県善通寺市宮西に至る地域，59地点。

そのおよその位置と地点番号は，図1-1～3に示した通りである。これらの地域を選んだのは、『日本言語地図』に収められた支え持ち動作の地図において比較的分布が複雑であり，詳しく調べれば興味深い結果が得られるだろうと予

図 1-1 調査地域

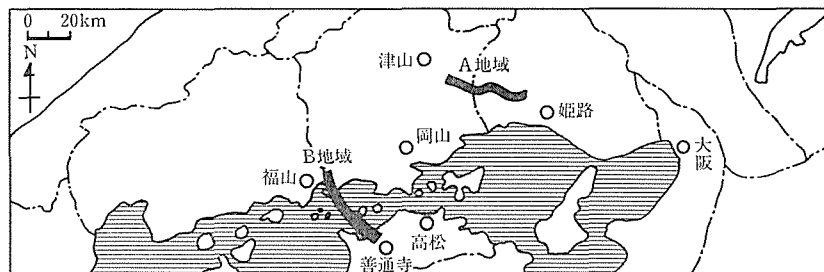


図 1-2 A地域調査地点

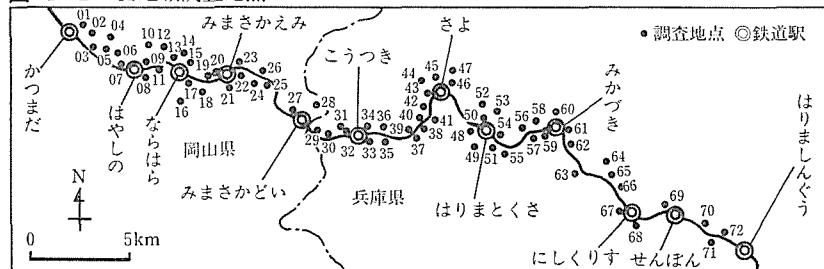
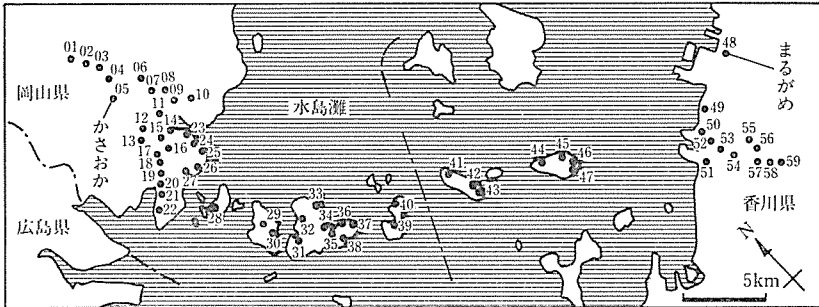


図 1-3 B地域調査地点



想したからである。

被調査者は、原則としてその土地生え抜きの60歳以上の男性で、各地点1人ずつである。最終的に調査の終了した地点と被調査者は以下の通りであった。生年の欄の明は明治を、大は大正を表わす。

調査地点・被調査者一覧

A地域

地点番号	調査地点	被調査者	性別	生年	調査者	地点番号	調査地点	被調査者	性別	生年	調査者
(岡山県勝田郡勝央町)						19	川北	安東イソノ	女	明 29	Hon
01	岡	富阪福次郎	男	明 17	Hon	20	今在家	宿野修一	男	明 27	Hon
02	岡(小中)	下山正雄	男	明 28	Hon	21	江見(南)	中川芳雄	男	明 43	Hon
03	黒土	田淵円平	男	明 28	Hon	22	江見	野村原太郎	男	明 22	Hon
(英田郡美作町)						23	川崎	真野恵作	男	明 25	Hon
04	片山	則本延夫	男	明 23	Hon	24	上福原	室井仲二郎	男	明 24	Miy
05	坪尻	綱山常四郎	男	明 43	Hon	25	竹田	古井滝三郎	男	明 40	Miy
06	講谷	綱沢いよ	男	明 35	Hon	26	山城	新田太郎	男	明 29	Miy
07	明見	水島亀雄	男	明 37	Tok	27	土居	太田武彦	男	明 32	Hon
08	沢	角 隆	男	明 26	Tok	28	蓮花寺	竹内恒四郎	男	明 22	Miy
09	豊国原	津田金一	男	明 22	Tok	(兵庫県佐用郡上月町)					
10	北山	西山真一	男	明 22	Tok	29	稗田	南馬新平	男	明 32	Tok
11	上土居	井上利賀	女	明 34	Tok	30	西大畑	越本みつゑ	女	大 2	Tok
12	橋原中	倉内勝衛	男	明 26	Miy	31	下谷	三浦市治	男	明 33	Hon
13	橋原上	横尾次男	男	明 39	Miy	32	力万	竹本庄一	男	明 32	Hon
14	神宿	東内与右衛門	男	明 18	Miy	33	中上月	福本幸之助	男	明 31	Tok
15	一の虬	丸山福次郎	男	明 30	Miy	34	上上月	浅野 隆	男	明 33	Hon
16	蔭福原	安藤 保	男	明 36	Miy	35	仁位	丸山よね	女	明 21	Tok
17	平福	武藤篤太郎	男	明 33	Miy	36	早瀬	横山輝雄	男	明 40	Hon
18	山口	溝口虎雄	男	明 22	Miy	(佐用町)					
(作楽町)						37	下山脇	衣畑重夫	男	明 40	Miy

地点番号	調査地点	被調査者	性別	生年	調査者	地点番号	調査地点	被調査者	性別	生年	調査者
38	上山脇	衣笠三郎	男	明 24	Miy	(三日月町)					
39	実盛	衣笠銀蔵	男	大 1	Miy	56	島脇	広瀬寿一	男	明 38	Miy
40	福原	小原熊太郎	男	明 27	Tok	57	久保	竹内武男	男	明 31	Miy
41	大坪	堀坂鹿太郎	男	明 16	Tok	58	新宿	春名政市	男	明 35	Miy
42	吉福	西坂三治	男	明 43	Tok	59	広山	服部健蔵	男	明 30	Hon
43	佐用	溝口泰三	男	明 37	Miy	60	徳平	竹本サト	女	明 38	Hon
44	上長尾	坂野京太郎	男	明 19	Tok	61	茶屋	飯田文一	男	明 29	Hon
45	長尾	池田幸治	男	明 32	Hon	62	三日月	大谷はなえ	女	明 37	Hon
46	大願寺	橋本宗市	男	明 34	Miy	(揖保郡新宮町)					
47	円応寺	福地正一	男	明 36	Miy	63	下筋原	井上さかゑ	女	明 37	Hon
(南光町)						64	時重	富井みつ	女	明 13	Tok
48	米田	内山清一	男	明 24	Tok	65	相坂	永井みね	女	明 31	Tok
49	如来田	巴藤兵衛	男	明 32	Tok	66	鍛冶屋	藤網光治	男	明 31	Tok
50	北山	塚崎芳孝	男	明 35	Hon	67	栗田	黒田卯平	男	明 29	Hon
51	安川	内山徳右衛門	男	明 18	Tok	68	田幸	山田シズエ	女	明 33	Hon
52	下徳久	竹内玉蔵	男	明 27	Hon	69	千本	熊橋円助	男	明 28	Hon
53	林崎	舟引勇市	男	明 31	Hon	70	能地	島津種市	男	明 34	Miy
54	土井	得平蔵三	男	明 33	Tok	71	大屋	溝口金治	男	明 36	Miy
55	宝蔵寺	竹内保夫	男	明 37	Miy	72	平野	村上藤治	男	明 21	Miy

B地域

(岡山県笠岡市)

01	五軒屋	中村茂吉	男	明 32	Sat	22	見崎	伊藤慶治	男	明 22	Tak
02	追分	小寺比佐恵	女	明 40	Sat	23	深方	角野妙一	男	明 31	Tak
03	蕎子	角田繁夫	男	明 31	Sat	24	古江	浜田福栄	女	明 33	Tak
04	田頭	田林初一	男	明 33	Sat	25	水落	仁井佐七	男	明 16	Tak
05	真入川	小原清子	女	明 34	Sat	26	鴨野	阪本岩太郎	男	明 25	Tak
06	富岡	〔三宅商店〕	女	明 39	Sai	27	外浦	平河 石	女	明 13	Tak
07	樋守	小林健一	男	明 36	Sai	(高島)					
08	小黒崎	仁科佐久太	男	明 37	Sai	28	高須	山本こふさ	女	明 26	Tak
09	名切	原田慎平	男	明 43	Sat	(白石島)					
10	土手尻	高戸石松	男	明 31	Sat	29	南大黒	中川長之助	男	明 21	Nom
11	横島	藤井広一	男	明 31	Sai	30	鳥の口	河田長蔵	男	明 20	Nom
12	片島(上)	大本優治	男	明 36	Sat	(北木島)					
13	片島	伊藤行男	男	明 41	Sai	31	金風呂	竹本竹一	男	明 23	Sat
(神島)						32	豊浦	中川キヌ	女	明 23	Sat
14	東村	池田秋一	男	明 37	Sai	33	楠	河田十三日	女	明 35	Sat
15	中村	尾崎 新	男	明 38	Sai	34	大浦	奥野定子	女	明 43	Tak
16	汁方	山本亀一	男	明 34	Sat	35	大浦	天野長市	男	明 33	Sat
17	福浦	柳本 品	男	明 31	Sat	36	長場	小谷和可松	男	明 21	Nom
18	福浦	柳本菊一	男	明 29	Sat	37	外浅海	井元しゅん	女	明 20	Tak
19	高	原田喜太郎	男	明 27	Sat	38	丸岩	山本庫助	男	明 34	Nom
20	高	池田平太郎	男	明 27	Sat	(真鍋島)					
21	寺間	小見山竹夫	男	明 42	Tak	39	本浦	山本いわ	女	明 23	Nom

地点番号	調査地点	被調査者	性別	生年	調査者	地点番号	調査地点	被調査者	性別	生年	調査者
40	岩坪	富田信市	男	明 43	Tak	50	堀町	川上マサノ	女	明 36	Sat
	(香川県仲多度郡多度津町佐柳島)					51	本村	村井貫一	男	明 29	Sat
41	長崎浦	浜口初次郎	男	明 19	Sat	52	青木北山	神原熊太郎	男	明 28	Nom
42	本浦	郡ジュン	女	明 22	Sat	53	青木北山	亀山小次郎	男	明 28	Sat
43	本浦	島田为一	男	明 35	Sat	54	青木	山倉輝樞	男	大 1	Sat
	(高見島)					55	笠屋	香川善三郎	男	明 29	Nom
44	板持	渡辺ちよ	女	明 33	Tak	56	三井	村井ヤスエ	女	明 33	Nom
45	浦	磯野マサ	女	明 26	Nom		(善通寺市)				
46	浜	浦田幸一	男	明 32	Sat	57	弘田下所	福本繁市	男	明 41	Tak
47	浜	中野マサノ	女	明 42	Sat	58	乾	中川音市	男	明 40	Tak
	(丸亀市)					59	宮西	大西勝重	男	明 37	Tak
48	富屋	近藤正清	男	明 28	Sai						
	(仲多度郡多度津町)										
49	堀江	塩入マサエ	女	明 32	Sat						

調査者は1.3.に述べるが、ここでは次の略号で示した。Nom-野元, Tok-徳川, Hon-本堂, Sat-佐藤, Tak-高田, Miy-宮島, Sai-斎賀。

1.3. 調査時期・調査者

調査時期は次の通りである。

A地域……1970(昭和45)年3月21日～29日

B地域……1970(昭和45)年3月22日～28日

調査には国立国語研究所の次のメンバーがあたった(所属は調査当時)。野元菊雄(第一研究部長), 徳川宗賢(同部方言語研究室長), 本堂寛(同室研究員), 佐藤亮一(同), 高田誠(同), 宮島達夫(第一研究部書きことば研究室員), 斎賀秀夫(第三研究部長)。

1.4. 調査項目

すでに述べたように, 対象とした意味分野は「せおう」「かつぐ」「もつ」など支え持ち動作を中心としたものである。『日本言語地図』では支え持ち動作に関して,

第1集 64 図 おんぶする（幼児を背負う）

65 図 しょう（包みを背負う）

66 図 かつぐ（材木を担ぐ）

67 図 かつぐ（天秤棒を担ぐ）

68 図 かつぐ（二人で担ぐ）

第6集 294 図 かつぐ（片方の肩で包みを担ぐ）

295 図 かつぐ（担ぐ）——66, 67, 68 図の総合図

の6項目7枚の地図が描かれているが、これらの項目に関連させ意味的に周囲に位置する動作を数多く調べることにした。つまり、以下の32項目である。なお、*印を付した項目は、『日本言語地図』の項目と同じものであることを示す。また、調査には支え持ち動作を描いた絵を用いたが、ここには掲げず文章で説明することにする。

● 64 図 おんぶする（幼児を背負う）に関連して

* ① 幼児を背負う

② 大人を背負う

①は64図と同項目であり、背負われるものが幼児である。これに対して大人、例えば病人などの場合ではどうかを②で調べた。

● 65 図 しょう（包みを背負う）に関連して

* ③ 両肩で風呂敷包みを背負う

④ 紐だけで籠を背負う

③は65図と同項目である。③では肩からまわした風呂敷包みの端を胸のところでしっかりとにぎりしめている場合を尋ねたが、④では風呂敷包みとほぼ同程度の大きさの籠を手はそえずに紐だけで、ちょうどランドセルのような格好に背負っている様子を聞いている。

● 294 図 かつぐ（片方の肩で包みを担ぐ）に関連して

* ⑤ 片方の肩で風呂敷包みを担ぐ

⑥ 片方の肩の前後に荷物を振り分けて担ぐ

⑤は294図の項目と同じである。⑥もやはり片方の肩のみを利用する場合だが、⑤のように肩の後ろへだけ荷物をたらすのではなく、荷物を紐などで結び

合わせて前後へ分けて担ぐケースである。

● 66 図 かつぐ（材木を担ぐ）に関連して

- * ⑦ 材木を担ぐ
- ⑧ 鋤を担ぐ
- ⑨ 鉄砲を担ぐ
- ⑩ 俵を肩にのせて担ぐ
- ⑪ 挟箱を担ぐ
- ⑫ 風呂敷包みを棒にさして担ぐ

まず、⑦は 66 図と同じ項目である。⑧～⑫は担ぐ品物を材木から「鋤」「鉄砲」「俵」「挟箱」「棒にさした風呂敷包み」と変えてみた。「鋤」「鉄砲」は材木よりも細く短く、また材木が地面と平行に担がれているのに対して斜めに担がれている。「俵」の場合には立体でありかなり重量感あふれるもので、両手をあげてしっかりおさえた状態を尋ねた。「挟箱」「棒にさした風呂敷包み」はともに棒に何かが付属しぶらさがっている場合だが、前者は固定、後者は未固定という違いがある。

● 67 図 かつぐ（天秤棒を担ぐ）に関連して

- * ⑬ 天秤棒を担ぐ

⑬は 67 図と同項目であり、これについては特に関連項目を設けなかった。ただし、先の⑪、⑫と次の⑭、⑮、⑯あたりが棒に物をぶらさげるという点で関係が認められよう。

● 68 図 かつぐ（二人で担ぐ）に関連して

- * ⑭ もっこを二人で担ぐ
- ⑮ 長持を二人で担ぐ
- ⑯ 駕籠を二人で担ぐ
- ⑰ 材木を二人で担ぐ
- ⑱ 葬式の輿を数人で担ぐ
- ⑲ 神輿を大勢で担ぐ

⑭～⑲は二人以上が支え持ち動作に関与する場合である。⑭は 68 図と同じ項目であり、もっこの代わりに棒にぶらさげるものを「長持」「駕籠」に変えたの

が⑮、⑯の項目である。また、⑰は何もぶらさがっていない材木を二人で担ぐ場合であり、材木という点では⑦に通じる。さらに⑱、⑲では担ぐものの重心が棒より上にある、つまり棒にのせて担ぐ場合であり、参加する人数も「葬式の輿」が二人以上、「神輿」が多数となっている。

●その他(1)

支え持ち動作に二人あるいはそれ以上の人数が参加するという点では⑭～⑲と共通するが、肩で担ぐのではなく、主に手を利用して持つ動作についても以下のような項目で調べてみた。

- ⑳ 戸板に怪我人を乗せて数人で持つ(担ぐ)
- ㉑ 棒に箱をぶらさげて二人で持つ
- ㉒ バケツを二人で持つ
- ㉓ 縄でしばった荷物を二人で持つ
- ㉔ 鑢^{かん}のついたたんすを二人で持つ
- ㉕ 机を二人で持つ
- ㉖ 火鉢を二人で抱え持つ
- ㉗ 箱を二人で抱え持つ

㉔については、手で支える他に肩に担ぐ地域もあるようなので、その違いについても留意した。もし担ぐということならば、先の⑱、⑲あたりの状態と類似性が認められる。㉔以下はすべて手を使って持つ場合であり、まず㉔は棒に物をぶらさげるという点で⑭と共通性が認められよう。㉒、㉓、㉔も直接品物を持つのではなく、取っ手ないし縄、鑢に手をかけ少しつるような状態になっている。これに対して、㉕は直接机に手をかけ、さらに㉖、㉗では品物を抱きかかえるようにして持つ場合である。

●その他(2)

- ㉘ 頭に物をのせる
- ㉙ 笠や帽子を頭にかぶる
- ㉚ 手拭を頭にかぶる
- ㉛ 風呂敷や新聞紙を頭にかぶる
- ㉜ 水を頭からかぶる

これらの項目は、㊸を除いて支え持ち動作ということからはかなりはずれるが、先の項目に共通語では使われるはずのカツグという語形が、これらの場合には方言として現れるのではないかと予想し、項目として設けることにした。つまり、共通語としてのカツグと方言としてのカツグの関係、あるいはカツグの多義性の範囲などを確認したかったのである。

以上は、支え持ち動作を表わす語彙を調べる言語項目であり、調査の中心をなすものである。この他、体のどこで支え持つとか、何人が参加するかなど動作そのものについて詳しく聞く項目や動作の有無についての項目も加えた。さらに、支え持ちに用いる道具や品物の情報も集めてきた。

1.5. 質問方法

被調査者に調査項目に合わせた絵を見せ、説明を加えながら動作を尋ねる質問法を主とした。また、それを助ける意味で調査者が身振りを加えることもあった。まれに地点によって道具や品物が異なると思われる場合（例えば「葬式の興」など）は、その点も聞いてきた。

この方法により、まず被調査者が現在使っている語を調査した。さらに、準備調査などの資料によって得られた複数の語形をあらかじめ用意しておき、誘導によって使用・理解などの回答を求めることにした。

2. 結果と考察

2.1. 調査結果

分析に入る前に、その資料となる調査結果を全体が概観できるように整理し、表1、表2として示した。両表とも縦軸に調査項目を、横軸に調査地点をとっている。調査項目は紙面の都合で番号のみをあげたので、その内容は1.4.を参照していただきたい。ここに掲げた語形は、被調査者が誘導なしに回答した使用語形であり、すべて凡例にあるような記号で表わした。なお、同じ語形が図上で固まるように工夫したため、項目の並べ方がかならずしも先に項目を説明した際の番号順ではないし、表1、表2では順番が異なる部分もあるので注意してほしい。

以下、はじめに述べた問題の考察に入るが、A地域とB地域を比較した場合、前者の方が結果が複雑で興味深い。そこでA地域の結果を主な対象とし、B地域の結果は補足的に用いてゆくことにしたい。

2.2. 調査項目と実際の語の意味

『日本言語地図』では、全国一律に同じ項目を一定の質問文に従って調査している。その場合、設定された項目の意味と的確に対応する意味をもつ語というのは、いつでも得られるものか疑問が湧く。

表1を見てみよう。『日本言語地図』と同じ項目を見てゆくと①、③ではほとんどの地点オウであり、被調査者もこれらの項目に対しては特に迷うことなくオウを回答しているものと考えられる。また⑦では地点64～67を境にカタグとカタゲルにきれいに分かれ、両側の地域ではそれぞれカタグとカタゲルがもつ

ばら回答されている。これに対して、⑬では西－カタグ、東－ニナウという明確な領域が認められるものの、中間にカタグとニナウが併用されたり交互に現れたりする地帯が広く存在する。似たような状況は⑭でも見られ、東のサシアウ地域から西のカエル地域に移行する間には、サシアウ・ニナウ・カタグの三者がまともりなく現れている。さらに⑮に至っては、カタグとカケル、ヒッカケルにややまともりがありそうな他は、11種の形式がばらばらに回答されている状態である。

このように、被調査者の回答がいわば不安定な状態を示す理由は何であろうか。この点について、まず一般的に考えると以下のような理由があげられる。

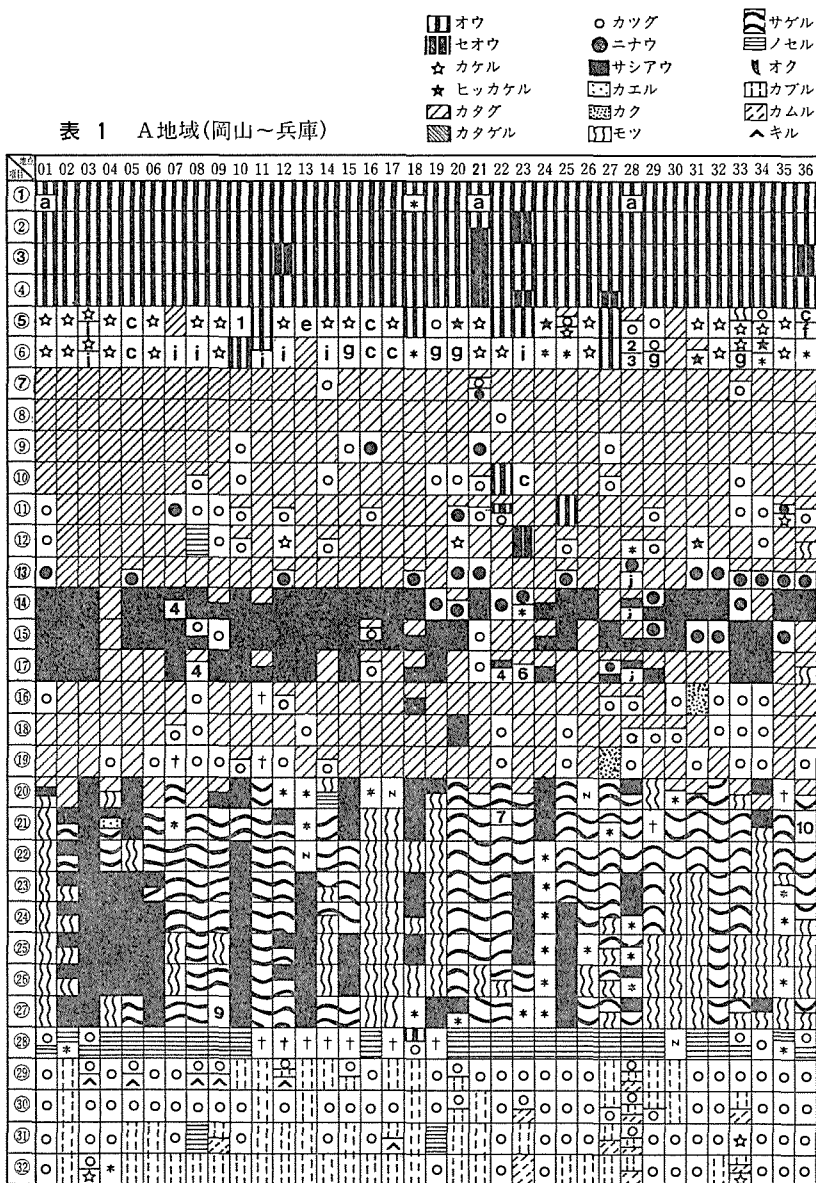
- (1) 分布の境界地帯である。
- (2) 共通語化がはげしい。
- (3) そういう動作の場面がないか少ない。
- (4) その項目が複数の語の重複意味領域にある。

(1)はその地域が2つの語形の接触地域にあたるため、被調査者は両語形の使用が可能であり、その結果併用回答となったり、被調査者によってはどちらか片方のみを回答する結果となる場合である。併用回答の際には、2つの語形の間に新古或使用頻度についての内省が得られることもある。

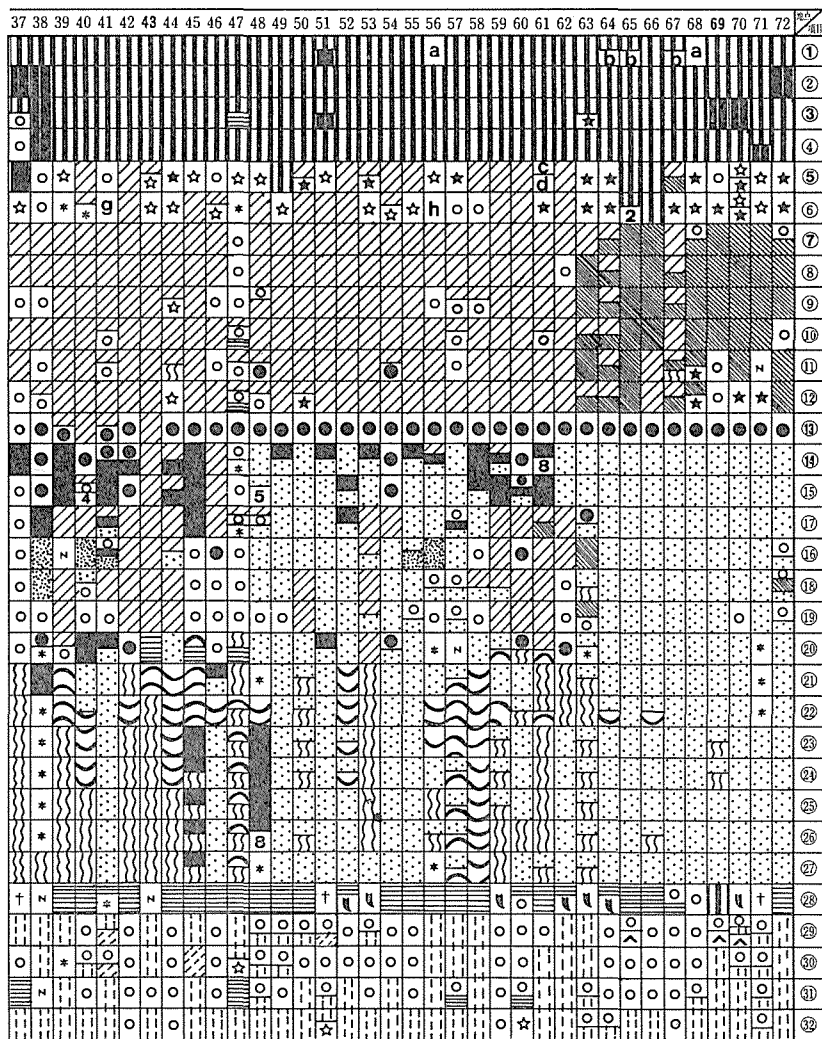
(2)の共通語化については、例えば都市を中心に放射が行なわれる場合など伝播する共通語に分布があれば(1)に準じて考えることができるが、一般に共通語は地域差とは無関係に空から降ったような侵入が見られることが多い。この場合も被調査者は方言形の他共通語形の使用も可能であるから、(1)と同様被調査者ごとに回答がまちまちになることがある。これら(1)(2)は、いずれもその地域固有の語形と、別の言語体系の語形とが交じり合うために引き起こされる不安定さと言うことができる。

これに対して、(3)(4)は調査項目自体に問題が含まれる場合である。まず(3)はその項目にあたる動作がその地域にはないか少なく、したがってそれを表わす形式も発達していない場合である。このような場合に、被調査者は近隣方言の語形や共通語などの理解語を答えたり、あるいは隣接意味にあたるいくつかの語形を答えたりして、結果的に回答が地点ごとにばらばらになってしまうこと

表 1 A地域(岡山～兵庫)



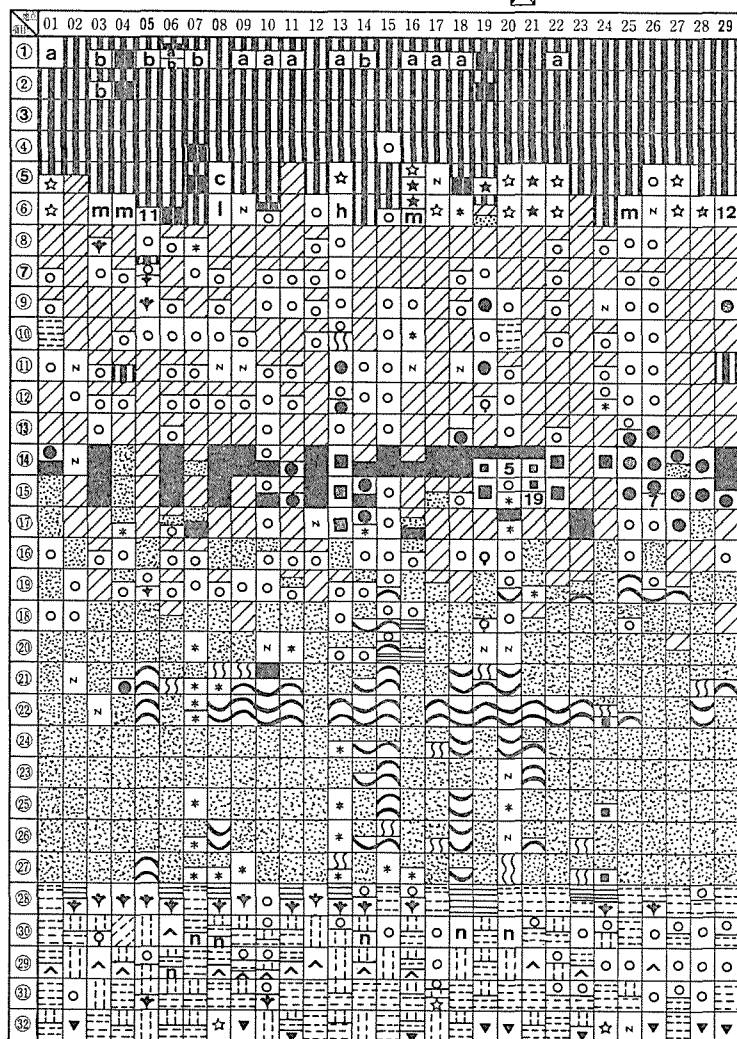
- | | | | |
|------------|-------------|--------------|------------|
| a オンパスル | g フリカケニスル | 3 フリカケニシテカタグ | 9 サシオーテサゲル |
| b オッパスル | h フリワケニスル | 4 サシオーテカタグ | 10 サシテサゲル |
| c フリカタグ | i ウチカケニスル | 5 サシアイデカタグ | * その他 |
| d フリカタゲル | j サシニスル | 6 サシデカタグ | † 名称なし |
| e フリカタギニスル | 1 カケテオウ | 7 サシオーテニナウ | N 無回答 |
| f フリカケル | 2 フリカケニシテオウ | 8 サシアイデモツ | |



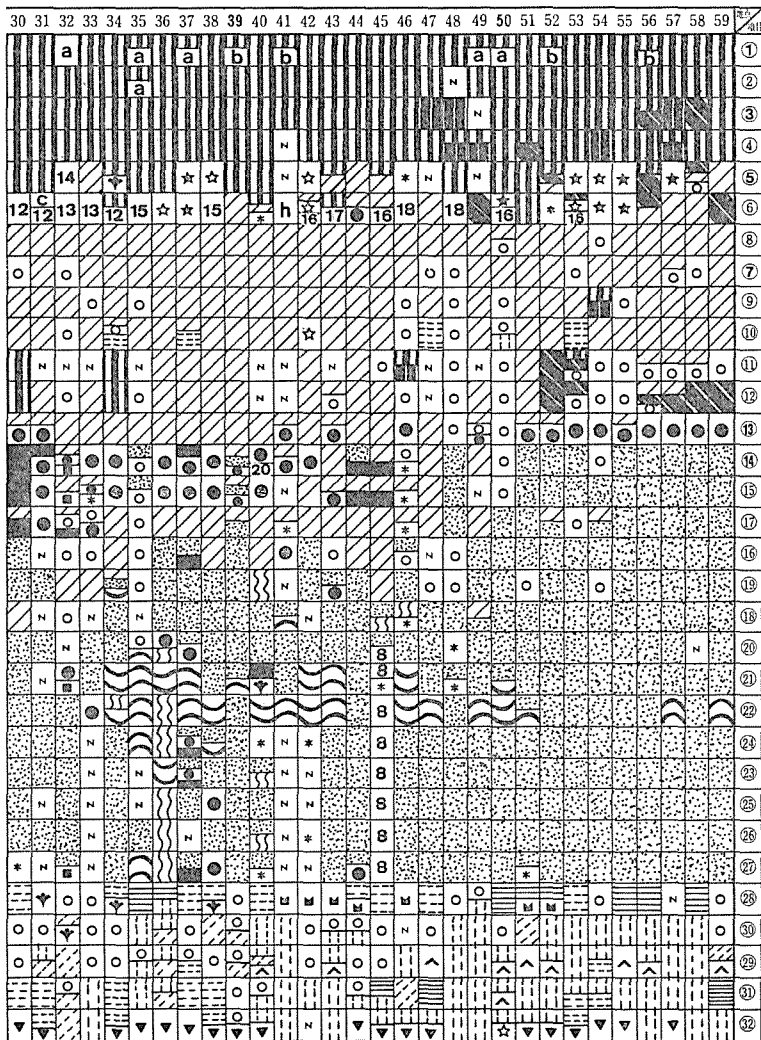
『日本言語地図』と同じ項目・地点は番号をゴシックにした。

- | | | |
|-------|------|------|
| オウ | カズク | ノセル |
| セオウ | ニナウ | カブル |
| コジョウ | サシアウ | カムル |
| カケル | サシナウ | カベル |
| ヒッカケル | カク | スケル |
| カタグ | モツ | イタダク |
| カツグ | サゲル | ヘル |

表 2 B地域(岡山～香川)



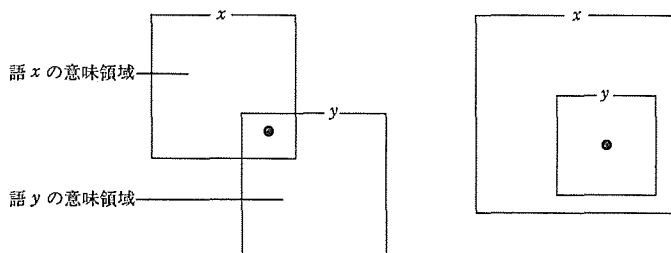
- | | | | |
|-----------|------------|-------------|------------|
| ▼ アビル | n ホーカプリスル | 13 ヤジキタニカタグ | 20 ニノーテカタグ |
| a オンブスル | 4 サシオーテカタグ | 14 フリワケテカタグ | * その他 |
| b オッパスル | 5 サシアイデカタグ | 15 フリワケニカケル | n 無回答 |
| c フリカタグ | 7 サシオーテニナウ | 16 フリワケニモツ | |
| h フリワケニスル | 8 サシアイデモツ | 17 フリワケテカタグ | |
| l フリワケル | 11 フリワケニオウ | 18 フリワケテカタグ | |
| m ウチカケル | 12 ヤジキタニオウ | 19 サシノーテカタグ | |



『日本語地図』と同じ項目・地点は番号をゴシックにした。

があると考えられる。

次に(4)にあげた複数語の重複意味領域にある項目というのは、例えば次の二つの図で言えばちょうど●印の位置にあるような項目である。この場合には、



語 x 、語 y のどちらを答えてもよいことになり、被調査者ごとに回答が異なったり、あるいは2語の併用が現れたりすることが考えられる。特に左の図のような場合には、語 x 、語 y のどちらによっても指示されうる項目ではあるが、逆にこの項目にあたる意味を専門に表わす語が存在しないという点で(3)の場合に近いとも言える。

さて、表1にもどって具体例で考えてみよう。まず、項目⑬の中ほどの地域でカタグとニナウが入り混じって回答されているのは、その地域が西のカタグと東のニナウの接触地帯にあたり、被調査者がどちらの語形も答える状態にあること、つまり先の(1)の事情が要因となっていることは間違いなからう。ただし、他の項目にも視野を広げると、その接触地帯ではニナウの意味が⑭⑮などにも拡散化していることがわかる。したがって、この地域のカタグ・ニナウ混在現象の背景には、単に被調査者が両語を知り、あるいは話すということだけでなく、両語の接触によってニナウが意味的に不安定な状態に陥っていることがあげられよう。これは、⑭の場合についてもあてはまることで、サシアウ・ニナウ・カタグ3語の混在現象には、サシアウとニナウの接触による意味の曖昧化がからんでいるのではないかと思われる。他にこの⑭については、“肩で支える”という点でカタグ、“二人で支える”という点でサシアウ、その両方の使用が可能であったという先の(4)の理由もあげるべきかもしれない。

以上の⑬、⑭の項目に比べて、⑤の場合には明らかに(4)の理由、つまりこの

項目が複数語の重複意味領域にあることが回答の不安定さをもたらしているものと考えられる。なお、(3)の要因、すなわち質問の動作の場面がないか少ないという理由には該当しないことは、こういう動作を当地域でするかどうかという質問に対して、ほとんどの被調査者が「する」と答えていることからわかる。

さて、今この項目に対して回答された14個の形式のうち、モツ、カケテオウの2つを除く12形式について、どのような意味条件のもとでその語が使われうるかを大まかに整理すると表3のようになると考えられる。縦の欄で同じわく内に入っている語は、文体差(方言と共通語)、地域差を除けば意味的にほぼ同義と認められるものをひとまとめにしたものである。そして、その語が使用される意味条件として積極的に働くと思われる要素の位置に○印をつけた。斜線の部分は、その条件と語の使用とは無関係であることを示す。なお、この表は今回の限られた調査項目から得られた結果に基づいているため、今後の調査によっては多少の修正が必要となるであろう。特に、フリカタグ以下の語については、この調査の項目だけでは十分にとらえきることができなかった。

表3

語 意味条件	支える場所		支えられる物体の性質			肩越しに 支える意識
	肩	背	重 量		柔軟性	
			重い	軽い		
オウ セオウ		○	○			
カタグ カタゲル カツグ	○		○			
カケル ヒッカケル	○			○	○	
フリカタグ フリカタゲル フリカタギニスル	○		○		○	○
フリカケル ウチカケニスル	○			○	○	○

さて、表3のような各語の使用される意味条件に照らし合わせて、⑤の「片

方の肩で風呂敷包みを背負う」という項目を分析してみると、まず、“支える場所”については、背と肩の両方が効いているのではないと思われる。つまり、用いた絵に描かれた荷物はそれほど大きなものではなく、背中にまわってはいれるが肩に重みがかかるといってもおかしくないような状態なのである。次に“支えられる物体の性質”のうち、“重量”については絵を見るかぎりそれほど重そうではないが、しかし曖昧さがつきまとう。“柔軟性”については風呂敷包みだから柔らかいものだが、オウからカツグまでは“柔軟性”について特に条件がないからこの場合も使用可能である。また、“肩越しに支えるという意識”が強く働くかどうかは、個人的な感じ方の違いに左右されることが大きいであろう。

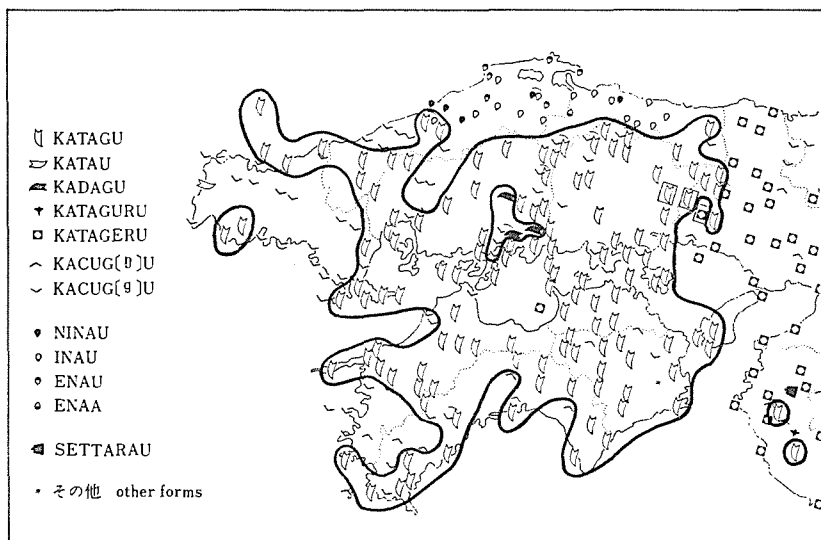
このように見てくると、「片方の肩で風呂敷包みを背負う」という項目に対しては、どの形式が回答されてもおかしくないことがわかる。したがって、この項目に対して多くの語が地理的にまとまりなく出現することになったのは、この項目がどの語の意味領域とも重なり合うような微妙な位置にあり、またこれを専門に表わす語も存在しなかったからだと考えられる。そこに被調査者自身の選択の余地も広がったのだと言えるであろう。なお、表3に取り上げなかったモツ、カケテオウについても同様の観点から説明可能である。モツは荷物がそう大きくないところから肩や背で支えるより手で支えるというところに被調査者の焦点があったのであり、カケテオウはカケルかオウか被調査者が迷った末の表現だったのではないと思われる。

以上のような事情で⑤の「片方の肩で風呂敷包みを背負う」という項目は、この地域においては分布の不鮮明な結果となった。これに比べて表2のB地域では多くオウが回答されており、A地域ほど不安定な状態にはない。しかし、ところどころでカケル・ヒッカケル・カタグも現れているから、今見てきたようなことがある程度B地域でも言える。また、同じ項目の『日本言語地図』第294図全体を見ても、カツグ・カタグ・カタゲルなどに一定の領域が見られるものの、カケルをはじめオウ・ショウなどと分布が交錯している。全国的にこの項目については、それと意味のポイントが一致するような語をもつ地域は少なく、意味領域の重なる複数の語が回答され地図化されてしまったのだと考えられる。

2.3. 語の意味の地域差

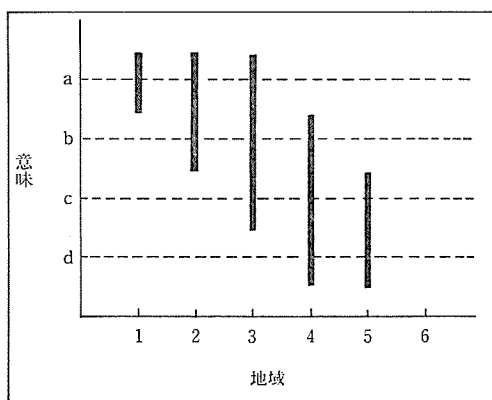
言語地図をながめると、そこには同じ語を用いるまとまった領域が浮かび上がってくる。それを普通、語 x の分布地域と呼んでいる。例えば『日本言語地図』第66図「材木を担ぐ」の中国・四国地方を見ると、カタグという語が広い分布地域を占めていることがわかる。図2-1は『日本言語地図』の同地方の抜粋であり、太い等語線で囲まれた部分がカタグの分布地域である。

図 2-1 かつぐ（材木を担ぐ）『日本言語地図』第66図抜粋



ところで、今「同じ語を用いる領域」とか「等語線」とかいう言い方をしたが、それは実は「材木を担ぐ」という一定の意味に対してカタグという同じ形態を使用する地域、ということにすぎないことを注意したい。つまり、厳密に同じ語が分布すると言い切るためには、語形の他にそれと結びつく語義もすべての地点で等しいことを明らかにしなければならない。ところが、図2-1を見ているかぎりではそれはわからない。図2-1だけでは、それぞれの地点のカタグがどんな意味的な広がりや背後に隠し持っているのか不明なのである。

もう少し抽象化してこの問題を考えてみよう。次の図は、参考文献1を参考に意味×地域のグロットグラムをきわめて単純化して描いたものである。図中、太線が形態 x と結びつく地点ごとの意味範囲を示しており、6の地点には形態



になり、地図上に現れる形態 x の分布地域は2～4ということになる。しかし、地点2においては形態 x はbの他aの意味とも結びつき、3ではa・cとも、4ではc・dとも結びついている。さらに、地図上には現れないが、aあるいはc・dの意味ならば形態 x を用いる1や5のような地点もある。したがって、上の図のような場合には各地点における形態 x の意味範囲は等しくなく、同じ語が使われているとも厳密には言えないことになるわけである。

図2-1に戻ろう。先に、カタグの意味範囲がすべての地点で同じかどうかはこの図だけでは不明だと述べたが、『日本言語地図』における他の支え持ち動作の地図ではどうであろうか。中国・四国地方にカタグが現れる第67, 68, 294図の一部を図2-2, 3, 4として次のページ以下に示してみた。これらの図を見て明らかな通り、カタグの分布地域はかならずしも一致しない。上に掲げた図で抽象的に考えたことと同じようなことが、現実には言えるのである。4枚の図を比較すれば、カタグの分布は図2-1の「材木を担ぐ」場合が最も広く、図2-2の「天秤棒を担ぐ」場合はそれに含まれ、さらに図2-3の「二人で担ぐ」場合がいちばん狭いようである。図2-4の「片方の肩で包みを担ぐ」ではカタグの分布は散漫であるが、ほぼ図2-1の地域に含まれている。このように、同じくカタグという形態を使用する地域でも、それが表わす意味範囲を確認すると、すべての地点で等しいというわけではけっしてないのである。

さて、この点をA地域(表1)について少し詳しく考察してみることにする。

x が存在しないこと、1～5には存在するがそれぞれ意味範囲が異なることを表わしている。さて、実際に言語地図を作るに際しては、ある一定の意味の断面を選び1～6までの地域を調査することになるが、もしbの断面が選ばれたとするならば2～4の地点で形態 x が回答されること

図 2-2 かつぐ (天秤棒を担ぐ) 『日本言語地図』第67図抜粋

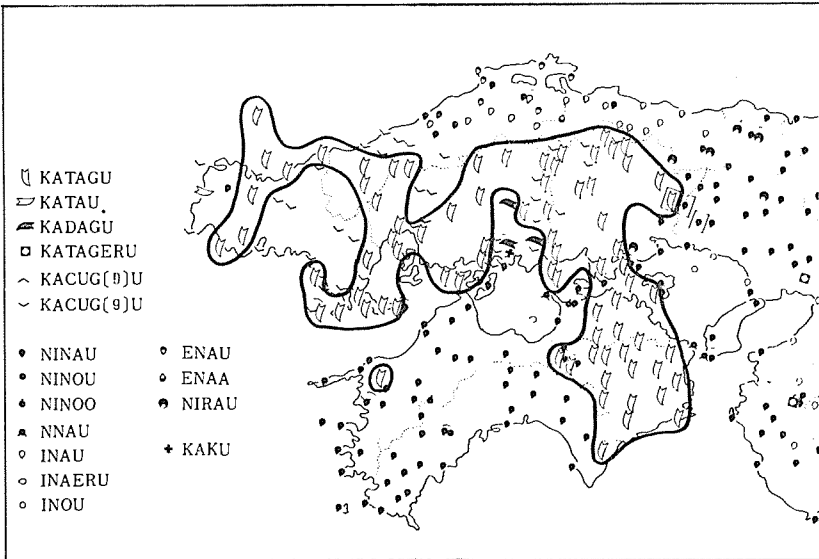


図 2-3 かつぐ (二人で担ぐ) 『日本言語地図』第68図抜粋

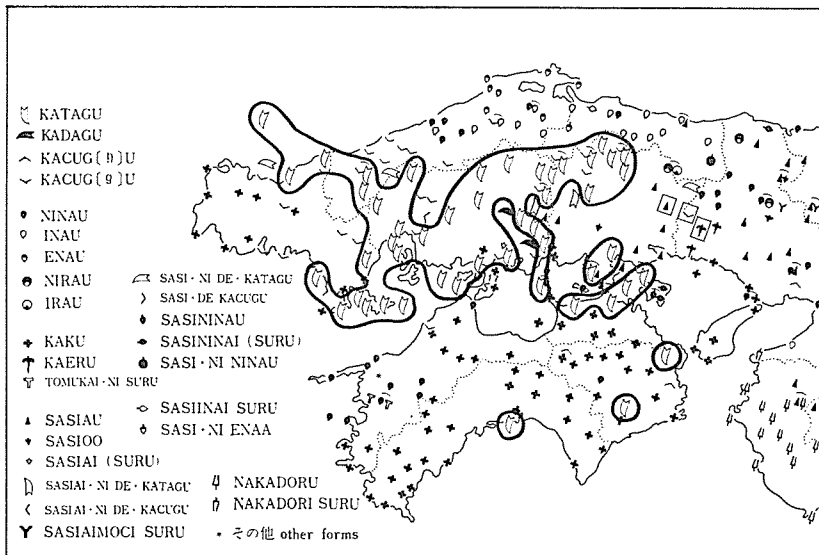
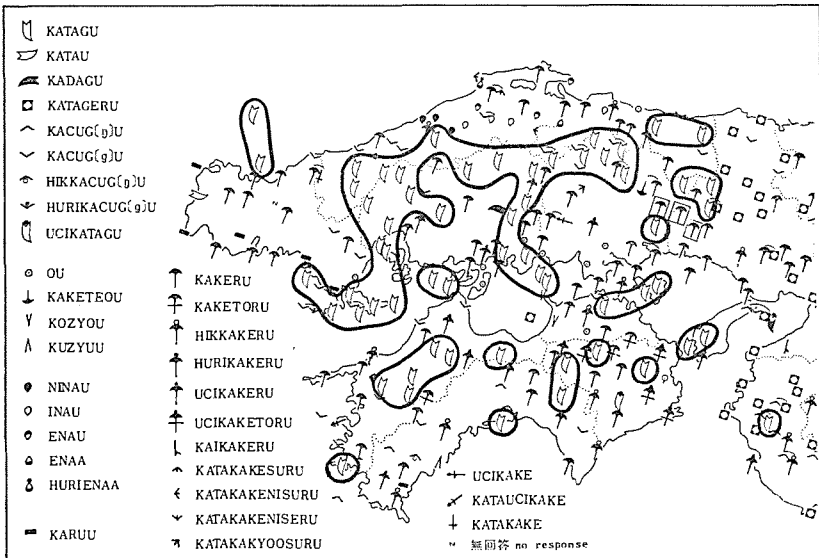


図 2-4 かつぐ (片方の肩で包を担ぐ) 『日本言語地図』第 294 図抜粋



まず、カタグについて地点と意味範囲との関係を把握すると、01～46 ぐらいまでの地域ではカタグの意味範囲は⑦～⑱であり、⑬～⑮、⑰との結びつきは地点によってまちまちな傾向がある。また、地点 47 以东 62 あたりまでは意味が⑦～⑫の範囲にせばまっており、逆に⑤⑥へ用法を拡大しているようである。地域的に孤立しているが、⑯～⑲あたりの用法とも結びつく 53, 59～61 のような地点もある。

次に、ニナウの場合は、18～42 の地点で用法⑬～⑮と結びつくが意味範囲がそれぞれ異なっている。これに対して、44～72 の地点では意味はほぼ⑬に限られ、それだけ安定している。

続いて、カエルの場合は、48～72 の地域で用法⑭～⑳と結びつくものの、地点によって欠ける用法が見られる。⑭～㉑全部を意味範囲としてもつのは 64 以东の地域である。また、地点 41, 46 では㉒～㉑あたりの意味とも結びついている。

最後にサシアウについて見てみる。サシアウは、地点 01～61 までの間で使用されており、⑭⑮⑰、㉒～㉑の用法と結びついている。ただし、地点ごとに意

味範囲は大きく異なり、また西から東へ徐々に縮小してゆく傾向を示している。

以上のように、同じ形態を用いる地域でも、その意味範囲に注目すると、すべてが等質的な地域とは言えないことがわかる。『日本言語地図』の場合には、ここで対象にしている支え持ち動作のように、いくつかの関連意味項目を設けたことによってある程度地点による意味範囲の違いを知ることができるが、しかしそれも部分的なものであることは以上の検討からも明らかである。したがって、言語地図を利用するときには、そこに現れた各語の分布領域はあくまでもその地図の項目、質問の意味条件における分布領域であることを認識し、周囲の意味にも注意を払う必要があるということになろう。

ところで、支え持ち動作の中でも③～⑩の肩を使う項目に現れたカツグには、被調査者の内省として、〈新しい〉とか〈上品である〉などの注記が加えられる地点が目立った。これはA地域におけるカツグが共通語として意識されていることを物語るものと考えられ、実際そのように説明する被調査者もいた。こうした点から、A地域においてカツグという語は方言として使用されているものではないと一瞬考えてしまうが、しかしそうではない。なぜならば、支え持ち動作という範疇からははずれるが、項目⑭～⑳のような頭に何かをかぶる動作についてはカツグが積極的に回答され、方言として日常語のレベルで使用されていることが明らかだからである。

また、カツグについては、B地域（表2）で肩に担ぐ項目の場合と頭にかぶる項目の場合とで地域差が認められる。つまり、表2によれば、カツグは01から26あたりの地域と、とんで46から59あたりの地域で、地点ごとにかかなりの差はあるが一応用法⑦～⑩の幅をもち、その間の27～45の地点では⑭～⑱の用法と結びつきやすいという相補的な分布が見られるのである。この相補的傾向については、当然何らかの歴史的理由が考えられるべきであるがそれはさておき、もし支え持ち動作に関連した項目だけを調査していたならば、地点01～26と46～59の間は、あたかもカツグの空白地帯であるかの観を与えてしまったことであろう。したがって、ある形態が表わす意味領域を知るには、実は一つの項目の隣接意味項目を精査するだけではすまず、範疇の異なる意味にまで視野を広げる必要があるということが言える。

2.4. 分布境界における語の意味の様相

一枚の言語地図においては、異なる語形同士の分布境界は比較的はっきりと現れる場合が多い。しかし、それはその言語地図が扱った一つの項目のみを見ているせいかもしれない。先の節で検討したように、同じ語形でさえ地点により意味範囲の違う場合があるわけだから、異なる語形同士ならばそれらと結びつく意味範囲の一致することはさらに少ないにちがいない。したがって、地点の間隔をせばめ、関連意味項目を増やして調査したら、それぞれの語形の分布境界は、一枚の地図に見るような単純なものではなく、もっと複雑な様相を呈することが予想される。以下では、異なる語形同士の分布境界を地理的・意味的にいわば顕微鏡で拡大してみた場合の実態について考察する。

(1) カタグとカタゲルの境界……まず、もう一度図2-1「かつぐ(材木を担ぐ)」を見てみよう。この図の中で、兵庫・岡山県境に記号を四角で囲んだ地点があるが、これがA地域の中に含まれる3地点であり、ちょうど21, 43, 69の地点にあたっている。さて、この図を見ると東にカタゲルが、西にカタグが分布し、その境界もかなり明確であると言える。そして、先の3地点はまさにその境目にあたっており、地点21, 43がカタグ、69がカタゲルとなっている。

これを表1で見えてみると、この項目に対応する項目⑦では、地点64以東でカタゲルが使用されるが、63以西にはまったく現れない。また、カツグを別に考えると、カタグとカタゲルが併用ないしは交互に現れる地域が64～67とひじょうに狭く、63以西はカタグの単用、68以東はカタゲルの単用となっている。したがって、地点密度を濃くしても、カタグとカタゲルの境界は図2-1で見たごとく明確なものであることに変わりはないと言える。

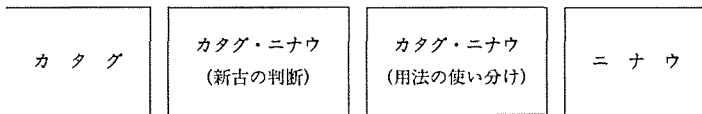
それでは、意味範囲まで視野に入れた場合、カタグ、カタゲルの境界はどうであろうか。結論から言って、表1を見てわかる通り、やはり両者の境目は明瞭と言えるのである。つまり、カタゲルが使用される項目⑧～⑫でのカタグとの接触状況は、ほぼ項目⑦の場合と同様である。項目⑬～⑮あたりでもカタグとカタゲルの回答が見られるが、境界はほぼ同じところに引かれるようである。このように、地点密度と項目を細かくとって観察してみても、ある語から別の語への移行が断絶的に行なわれている場合もあると言える。

なお、このカタグ・カタゲル間の断絶的な移行の要因としては、両者が形態的に類似し、また接触地域では意味範囲もほぼ等しいところから交替が容易であったことがまず考えられよう。また、地理的に見て、62～70のあたりは地形がけわしく集落がまばらで、言語境界線が引かれやすい地域であったことも関係があると思われる。

(2) カタグとニナウの境界……次に図2-2「かつぐ（天秤棒を担ぐ）」では、A地域がちょうど西のカタグと東のニナウの境界地帯にあたっており、地点21がカタグ、43・69がニナウとなっている。この場合もカタグとニナウの境目はひじょうに明らかであるが、これを表1で見てみよう。

表1において、『日本言語地図』の項目に対応するのは⑬の項目であるが、そこに現れた回答を見てゆくと確かに西側がカタグ、東側がニナウとなっている。しかし、その境界はかならずしも明確とは言えない。すなわち、カタグとニナウが併用されたりあるいは交互に現れたりするという混在地帯が、地点18～43あたりの比較的広い地域に存在し、17以西においてもややその傾向が見られるからである。

さて、この項目⑬のカタグとニナウについて、被調査者の加えた注記に注目してみると、両語形の混在地域で新古や意味の使い分けに関する情報が得られている。そして、この情報にも地域差があるようで、04～19あたりではカタグを古くニナウを新しいとする新古の差が、30～36あたりの地域では後に述べるような用法の違いが意識されている。これを抽象化して示せば、下図のように



⑭

←……………ニナウの侵入……………⑮

なるであろう。新古の判断などからみてカタグの地域へ東からニナウが侵入しているものと解釈されるが、その侵入の最前線ではカタグとの新古が意識され、侵入からしばらく経過した地域では用法を分担することでカタグの意味に食い込み・共存し、さらに時間が経った地域ではカタグを排除し、ニナウ一色になっ

てしまうという変化の経過がわかって興味深い。

ところで、カタグとニナウの間に用法の区別が聞かれたのは、30・33・35・36の4地点である。これらの地点においては、誘導による回答も含めてカタグとニナウの両者を使用し、同じ「天秤棒を担ぐ」場合でも、天秤にのせる品物の種類や重さで用法を分担させている。その具体的な内容は下の表にあげた通りであるが、30・33・35が水・肥・柴などの具体的事物で、36が重量という抽象的な概念で違いを答えている。ただし、具体的事物の場合、必ずしも3つの地点で共通の区別が行なわれているとは限らず、その使い分けが不安定でニナウ

地点	カタグ	ニナウ
30	水・水肥・柴	堆肥・柴
33	堆肥・柴	水
35	水以外	水
36	重いもの	軽いもの

の単用に至る臨時的な状態であることをうかがわせる。それにしても、こうしたカタグとニナウが用法を分担し共存しているような地帯は、『日本言語地図』の網目からは抜け落ちてしまい、上のような細かな地点密度ではじめて存在が明らかになったと言えよう。

言えよう。

それでは、地点密度に加え、関連意味項目に視野を広げた場合に、カタグとニナウの境界地帯はどのような様相を呈しているだろうか。まず、地点44以東の地域では、ニナウは他の用法にまたがる地点もあるが、ほとんど⑬の用法のみに使用されている。これに対して、地点19～42の地域では、ニナウの意味は項目⑬の他⑭・⑮へまたがったり、時にはずれこんでいる地点が目立つ。全体的には44以東に比べて意味領域が拡大しているが、しかし地点ごとにその様子はかなりまちまちである。したがって、これらの地点でのニナウの意味領域は不安定な状態にあり、拡大というよりは拡散化していると言った方が適切と考えられる。ニナウは先にも述べたように、東から西へ進出している新しい語形と推定されるが、その先端にあたる部分の用法がまだ完全に定まっていないのだと思われる。この19～42の地域で、ニナウの意味が今後44以東のように⑬のみにしぼられ安定してくるのか、あるいは⑬～⑮という幅を完全に獲得してゆくのかは興味深い問題である。

さて、そのような拡散化した状態でニナウが接触しているのはカタグのみで

はなく、サシアウもそうである。サシアウの意味範囲は⑭～⑳の間であり、⑬を中心とするニナウとは地点 44 以東で重ならないのであるが、19～42 の地域ではサシアウの意味も不安定であり、サシアウの担っていた意味範囲にニナウが侵入しつつ、混沌とした状況を作り出していることがわかる。あるいはニナウとサシアウの接触自体が、地点 19～42 における両語の意味の不安定さをもたらした要因なのかもしれない。またこの地域は地理的には先のカタグ・カタゲルの境界ほどけわしい地形ではなく、地点相互の交流が比較的行なわれやすかったこともニナウ、サシアウの混乱状況と関係あるかと思う。

(3) サシアウとカエルの境界……図 2-3 「かつぐ (二人で担ぐ)」では、A 地域に属する地点が西からサシアウ、カツグ、カエルとなっており、3 地点とも異なった回答を行なっている。また、それぞれが広い領域をもつというわけではなく、すぐ近くにはカタグやニナウの分布も見えている。

この図 2-3 に対応するのは、表 1 においては⑭の項目である。この列を西から東へ見てゆくと、01～18 の地域ではほとんどサシアウのみが使用されている。そして、19～47 あたりの地域ではサシアウの他にニナウ、カタグも用いられ、複雑な状況を示している。さらに、48 以東の地域になると突然カエルが優勢となり、特に 62 以東はカエル専用地域となっている。これらの状況をふたたび図 2-3 と対比してみると、西のサシアウ、東のカエルの専用地帯は『日本語地図』の網目でもとらえられている。ところが、その中間に位置するサシアウ・ニナウ・カタグ混在地帯の存在については、こうした細かな地点密度の調査によってはじめて知ることができたと言える。図 2-3 では、この地域にカツグが報告されているが、それはこの中間地帯の実態を代表しているとはいえない。あるいはカツグを回答した被調査者は、サシアウ・ニナウ・カタグ 3 語の混乱を回避しようとする意識から共通語を答えてしまったのかもしれない。

他の項目に視野を広げてみても、サシアウとカエルとは直接接触することはなく、中間に緩衝地帯が存在する。まず、項目⑮の状況は⑭の場合とほぼ等しく、サシアウ・ニナウ・カタグの 3 者が中間地帯で混在している。ただし、ニナウの交じる地域が⑭より狭く、さらに⑰の場合にはほとんどニナウが姿を見せていない。次に項目⑳～㉓では、サシアウは地点 02～06 に固まった地域が存

在するもののそれほど優勢でなく、カエルとの間にサゲル・モツを使用する広い地域が見られる。また、項目⑬⑭⑮ではサシアウがほとんど使用されていないが、カエルの方はそれらの3つの用法も意味領域としてもつという違いがある。

ところで、サシアウがこうしたまばらな回答のされ方をする背景には、この語の意味と調査項目の間に問題があったのではないかと思われる。つまり、サシアウの使用される⑭⑮⑰, ⑳～㉓の項目に共通する点は、いずれも二人で支え持ち動作を行なうという点であり、したがってサシアウの意味の中心は支え持つ格好よりも二人という人数にあると推測される。これに対して、カタグやサゲル・モツは、何人でそれを行なうかということには無関係であり、支え持ち動作そのものの形態に意味の中心があるものと考えられる。つまり、⑭⑮⑰, ⑳～㉓の項目はサシアウとカタグ・サゲル・モツにとってはちょうど重複意味領域に入る項目だったのである。そのため、被調査者によっては、質問の中の二人でという点を重視してサシアウを答える人もいれば、支え持つ形態に注目してカタグ・サゲル・モツを回答する人もいたと考えられる。そうした語による意味の中心の違いと、被調査者の質問への対処の仕方の差が、表1のサシアウの出現にはっきりしないまだら模様を残す一因となったと推定される。

以上、異なる語同士の分布境界が、地点・意味ともに詳しく調査したときにどのような状態を呈するのか検討を加えてきた。その結果、いくら微細に観察しても両語の分布境界が明確な場合もある一方、『日本言語地図』でははっきりした境界が引けるにもかかわらず、複雑で連続的な接触状況を示す場合も見られた。『日本言語地図』の地点密度と項目数ではとらえきれない実態を把握できたわけだが、逆に『日本言語地図』が呈示する分布境界を両語の境界として単純に受けとめることには十分留意が必要だと言えよう。

3. おわりに

3.1. 研究の経緯

この検証調査の結果については、1970(昭和45)年3月の調査直後、5月の国語学会(於・日本女子大学)で、本堂寛、徳川宗賢、佐藤亮一、高田誠の4名が「意味と地域差——美作・播磨国境地域の方言から——」という題目のもとに発表を行なっている。その後、国語学会での発表の内容に新たな考察を加えたものを、本堂寛が論文として公表した。参考文献2がそれであり、その目次のみを示せば以下の通りである。

1. 調査の内容および方法
2. 調査結果の資料
3. 語形式の意味範囲と地域差との関連
4. 意味の構造と地域差との関連
5. 形式と意味内容との結びつき方の安定度
6. 標準語形の入り込み方と地域差との関連
7. 形式と意味内容との通時的関連

この検証調査が意図し、知りたいと思ったことがらは、ほぼここに網羅されており、したがってこのテーマの結果は他のテーマに先立って一応報告が済んだというかたちになっている。それにもかかわらず、この検証調査について、ここでふたたびとりあげた理由は大きく分けて二つある。

一つは、調査結果の全貌を示そうとしたことである。本堂論文は10項目の意味内容について分析しているが、ここでは調査した32項目すべての結果を報告した。また、調査は岡山・兵庫県境地域の他、岡山・香川間の瀬戸内地域でも行なっており、その結果も合わせて明らかにしようと考えたのである(ただし、

結果自体は前者が興味深く、分析も前者中心になった)。

もう一つは、本堂論文でとりあげられた問題点の一部を、さらに掘り下げて考察したかったことである。今回の報告の2-2が本堂の第5章と、今回の2-3が本堂の第3章と、今回の2-4が本堂の第3・4章と関わる。検証という主旨からして、はじめにも述べた通り、言語地図のもつ基本的な意味の問題を扱うことに意を注いだのである。

3.2. その後の発展と今後の課題

語の意味の地域差や語と語の接触地帯における意味の状況などを詳しく調査しようとした研究は、この検証調査以降はほとんど見当たらないと言ってよい。いくらかでも関連のある研究をあげると、まず方法・観点の面で意味×地域というグロットグラムを作成したもので、項目数・地点数ともこの報告とは問題にならないほど少ないが、参考文献3の姿勢と風の名称についての報告、参考文献4の推量表現についての報告、参考文献5の格助詞についての報告などがある。また、意味の違いによる語の分布状況を言語地図で分析したものには、参考文献6のミテルという語についての考察がある。次に、内容面で複数の支え持ち動作の言語地図を総合的に解釈した研究として、参考文献7～9などをあげることができよう。なお、この検証調査のような方向が発展しなかった理由の一つに、同じく意味を対象にすえた研究でも、1970年代以降、方言語彙体系の分析をめざす記述的研究が活発になり、その分意味の地理的変異を詳細に明らかにしようとする言語地理学的発想に立つ研究は影をひそめてしまったということが考えられる。支え持ち動作という意味分野を扱ったものでも、最近参考文献10～14など語彙体系の分析やさらにその比較をねらった研究が目立つ。

さて、今後は方言分布上問題となる地域でこうしたグロットグラムを作成し、語の意味の地域差と、語と語の接触がもたらす意味の状況などについて詳しい分析をつみかさねてゆく必要がある。その結果を、言語地図の解釈に役立てることも考えてみなければならない。分野としては、抽象的な概念や意味範囲を

把握しにくい事物・現象を扱うべきであり、『日本言語地図』内では、例えば「大きい」「太い」「粗い」などの大きさの表現、「塩味がうすい」「しおからい」「かしい」などの味の表現、「いくつ」「いくら」などの分量・程度を尋ねる表現、「すわる」「あぐらをかく」などの姿勢の呼び方、「あごのとがった部分」「あご全体」などの身体部位の呼び方といった意味分野に興味深い結果が期待できそうである。さらに、そうした各地における実態の解明を土台にして、語彙論・意味論上の法則性を見出してゆくことも一つの発展方向と考えられる。

参 考 文 献

1. 徳川宗賢「方言の地理的分布——特に分布の内容について——」(大石初太郎・上村幸雄編『方言と標準語——日本語方言学概説』1975, 筑摩書房)
2. 本堂寛「語形式と意味との結びつき——美作・播磨国境地域の方言から——」(日本方言研究会・柴田武編『日本方言の語彙』1978, 三省堂)
3. 加藤正信・佐藤和之・小林隆「宮城県北地方の方言調査報告」(『日本文化研究所研究報告』別巻第19集, 1982)
4. 佐藤喜代治・加藤正信「青森県東南部・岩手県西北部地方の言語調査報告」(『日本文化研究所研究報告』別巻第12集, 1975)
5. 加藤正信・小林隆・遠藤仁「山形県最上地方の方言調査報告」(『日本文化研究所研究報告』別巻第20集, 1983)
6. 高橋顕志・川合由美「中・四国における俚言の意味とその分布——「ミテル」を中心に——」(『日本方言研究会第32回発表原稿集』1981)
7. 佐藤茂「カツグをめぐる——福井県足羽郡美山町の言語調査から——」(『福井大学教育学部紀要第I部 人文科学国語学・国文学・中国学編』第24号, 1974)
8. 本堂寛「語の意味差と地理的分布——「かつぐ」をめぐる——」(『佐藤喜代治教授退官記念国語学論集』1976, 桜楓社)
9. 川本栄一郎「石川・富山両県における「かつぐ」の方言分布とその歴史」(『金沢大学教育学部 社会科学人文科学編』第29号, 1981)

10. 平山輝男編『全国方言基礎語彙の研究序説』(1979, 明治書院)
11. 平山輝男他『周辺地域方言基礎語彙の研究——奈良県十津川方言を中心として——』(1979, 国学院大学日本文化研究所)
12. 野林正路「語よりも語の重なりが意味を区別する(一)~(三)」(『日本語学』1-1・2, 2-1, 1983~84)
13. 高橋顕志「四国諸方言における支持動詞カクについて——語彙による比較方言学の試み——」(『都大論究』第14号, 1977)
14. 高橋顕志「方言語彙の比較——語彙による比較方言学の確立をめざして——」(『現代方言学の課題』1984, 明治書院)

(以上, 小林 隆執筆)

同一被調査者の10年後の再調査

——九州各地における調査から——

1. 目的と調査の概要

1.1 目 的

『日本言語地図』は一定の項目（意味内容）についての方言形（土地の人どうしがくつろいだ場で話し合うときに使われる語）を採集して地図化したものである。厳密に言えば、そのような方言形（標準語形と一致するものを含む）を採集しようとして調査した結果の記録である。言うまでもないことであるが、調査は一定の時間的制約の下に行なわれるから、すべての質問項目について被調査者から完全な回答を引き出すことは困難である。あるべきはずの方言形が出ずに、あらたまった場面で使われる共通語形・標準語形のみが回答されたり、複数の方言形があるのにその一方しか回答されなかったり、さらには、質問項目とは意味の違うものや、よその土地のことばが混入することも想定される。もちろん、明らかに誤りであると思われるものや、十分な回答ではないと思われるものについては、その場で再質問を行なって訂正されることも多いが完全は期しがたい。

この調査は、「同一の被調査者に対して、一定の年月を置いて同じ質問をする」と結果がどう変わるかを明らかにし、結果が相違した事例について、その要因を考察することを目的とした。したがって、2回の調査結果の間に相違が認められた場合、それが、上に述べたような調査の不備による場合のほかに、その年月の間に被調査者自身のことばが変化した場合を含んでいることに注意しなければならない。

1.2 調査者・調査時期

再調査は、1960(昭和35)年に調査した九州各地の19地点(19人の被調査者)について、10年後の1970(昭和45)年に実施した。調査の担当者は、1960年度については当時の担当地方研究員および当時の国立国語研究所員であり、1970年度については当時の国立国語研究所員である。調査の担当者を下記に掲げておく(所属は調査当時)。

1960年度

地方研究員：秋山正次(熊本大学助教授)、糸井寛一(大分大学助教授)、岩本実(宮崎大学助教授)、小野志真男(佐賀大学教授)、上村孝二(鹿児島大学教授)

国立国語研究所員：柴田武(方言言語研究室長)、野元菊雄(同室研究員)、上村幸雄(同)

1970年度(いずれも国立国語研究所員)

徳川宗賢(方言言語研究室長)、本堂寛(同室研究員)、佐藤亮一(同)、高田誠(同)

1.3 調査項目

調査項目は1960年度に『日本言語地図』作成のために調査した項目のすべて(244項目)であるが、ここでは、そのうちの235項目を考察の対象とする。なお、考察の対象から除外した項目は、「コケの意味」(項目番号077, 以下、括弧内の数字はすべて項目番号)、「ヤマまたはハヤシの意味」(137)、「ハヤシの意味」(139)、「モリの意味」(140)、「『家屋』に当たる方言形の意味」(245)、「『あそこは子供が多い○○だ』と言うときの○○に当たる方言形」(246)、「ウオを使うか」(255)、「サカナを使うか」(256)、「米櫃」(177)の9項目であるが、最後の「米櫃」を除く項目は、いずれも調査票におけるその直前の項目との関係で答える(または質問しなくともよい)ものであり、2回の調査の一致・不一致について一定の基準を立てることが困難であった。また、「米櫃」については、ブリキカン、カミノフクロ、タワラ、カマス等々、多様の語形が記録され

ており、それらが「米櫃」に当たる語形か否かを判断することが困難なケースが多かったので除外した。

1.4 調査地点・被調査者

次に、地点番号(方言調査基礎図のシステムによる)、調査地点名、被調査者の生年、調査者名、調査現場における同席者の有無を以下に示す。

調査地点・被調査者一覧

地点番号	調 査 地 点	被調査者	生年	調 査 者			同席者
				1960 年度	1970 年度	'60 '70	
7322.21	福岡県粕屋郡篠栗町中町	藤 太熊	明 33	Uem	Sat.	無	有
7353.03	〃 八女郡矢部村大字北矢部	栗原信吾	明 33	Uem	Hon	無	無
7239.24	佐賀県東松浦郡玄海町牟形	寺田吉松	明 38	Sib	Tak	有	無
7330.31	〃 〃 浜崎玉島町浜崎東区	森 正夫	明 35	Ono	Sat	有	有
7218.26	長崎県杵臼郡ノ浦町里触	山口麻太郎	明 24	Sib	Sat	無	無
7361.82	〃 南高来郡国見町多比良馬場	太田清三郎	明 25	Sib	Tok	有	無
7364.34	熊本県阿蘇郡一の宮町大字宮地	田島軍記	明 34	Aki	Hon	有	無
7373.92	〃 上益城郡甲佐町大字上早川	田上末雄	明 22	Aki	Tok	有	無
7392.33	〃 八代市日奈久竹ノ内町	西村政喜	明 20	AKi	Tok	有	有
8300.25	〃 天草郡河浦町宮野河内	池田源市	明 27	Uem	Tok	無	無
8303.13	〃 球磨郡相良村大字四浦	山田 需	明 30	Uem	Tak	無	無
7326.41	大分県西国東郡真玉町大字黒土	佐当伝十郎	明 34	Nom	Tok	有	無
7326.69	〃 東国東郡国東町安国寺	栗林森作	明 25	Ito	Tok	有	無
7356.70	〃 大野郡大野町大字田中	足立 勇	明 31	Nom	Hon	無	無
7394.85	宮崎県東臼杵郡椎葉村大字大河内	椎場伝三郎	明 33	Nom	Tak	無	無
8324.26	〃 西諸県郡野尻町大字紙屋	迫田 勇	明 29	Iwa	Hon	有	有
8325.03	宮崎県東諸県郡国富町本庄	井戸川常男	明 34	Iwa	Sat	無	無
8335.11	〃 宮崎県田野町甲黒草	横山年行	明 30	Nom	Sat	有	有
8393.69	鹿児島県西之表市西表	日高慶慈	明 30	Kam	Hon	有	無

調査者は次の略号で記した。

Aki-秋山, Ito-糸井, Iwa-岩本, Ono-小野, Kam-上村(孝二), Sib-柴田, Nom-野元, Uem-上村(幸雄), Tok-徳川, Hon-本堂, Sat-佐藤, Tak-高田。

この研究は本堂寛が中心となって企画した。本堂が他機関に転出後、白沢宏枝が調査結果の整理・集計を行なった。その資料に基づいて佐藤亮一が資料を分析し、本稿を執筆した。

なお、この研究について、佐藤・白沢の両名が「日本方言研究会第36回研究

発表会」(1983年5月、於・京大会館)において、「同一話者の10年後の再調査」の題名の下に口頭発表を行なった。その席で、多数の方がたより貴重な御意見を賜わった。記して感謝する。

1.5 調査方法

再調査では第1回調査(1960年)のときと同じ調査票(付図を含む)を用い、それに、あらかじめ最初の調査時の結果をすべて記入しておいた。調査は調査票に基づいて淡々と進め、はじめの調査結果との間に相違が認められた場合でも、それについての質問はすぐには行なわず、調査票の最後まで進んだのち、再び最初の項目に戻り、第1回調査で記録されている語形が再調査で回答されなかった項目について再質問(その語形を示して使用の有無を質問)することとした。その際、第1回調査で記録されている語形が標準語形である場合にも、その語形についての再質問を行なうこととしたはずであるが、この点に関しては、調査者間でやや統一を欠く面があった。調査結果の分析にあたって、この点に注意することが必要である。

2. 結果と考察

2.1 調査結果の事例

ここでは、1960 年度の調査結果を㊤, 1970 年度の調査結果を㊦の符号で示す。㊤㊦の間にどのような一致・不一致が認められるかという観点から、結果を下記の数種のパターンに分類した。それぞれのパターンごとにいくつかの事例を掲げる。以下、「」内は項目名、6桁の数字は地点番号、(誘)はその語形が当初は回答されず、再質問でその語形を示して誘導したところ、「使う」と答えたことを示す。〈〉内は被調査者による付加的説明、《》内は調査者による説明、語形の左肩につけた^{1), 2)}…は回答された順序、①②③……は事例の通し番号である。

(1) ㊤㊦がほぼ、あるいは完全に一致するもの。

- ① ㊤ binta ㊦ binta (「頬」8300.25)
- ② ㊤ 使う ㊦ 使う (「オドロクを“目が覚める”の意味で使うか」7392.33)
- ③ ㊤ 無回答 ㊦ 無回答 (「あさっての翌々日」8303.13)
- ④ ㊤ ¹⁾ ho:, ²⁾ ho: tan ㊦ ¹⁾ ho:, ²⁾ ho: tan 〈今〉(「頬」7326.69)
- ⑤ ㊤ ɕɛ bi ㊦ ɕɛ bi (「蛇」8303.13)
- ⑥ ㊤ フータン ㊦ Φu: tan (「頬」7330.31)
- ⑦ ㊤ Φu: tan ㊦ Φu: tan (同上 7394.85)
- ⑧ ㊤ nameku ʒi ㊦ namekud ʒi (「なめくじ」8335.11)
- ⑨ ㊤ giri giri ㊦ giri ʋiri (「旋毛」8300.25)
- ⑩ ㊤ ʔbiki ㊦ biki (「蛙」7239.24)
- ⑪ ㊤ gjænnoko ㊦ gjɛnnoko (「おたまじゃくし」8303.13)

- ⑫ ①¹⁾ doŋgaragattʃin, ²⁾ ɕu:ɕu:dondon ③¹⁾ doŋgaragattʃin,
²⁾ (誘) ɕu:ɕu:dondon (「肩車」7353.03)

上記のうち、①②③は④⑤が完全に一致するもの、④は注記部分以外は完全に一致するもの、⑤⑥は表記法の違いで音声の実質に差はないと思われるもの、⑦～⑪は一応異なる音声を表わしているように見えるが④⑤間の差はきわめてわずかであり、調査者の聞き取りの違いも勘案すれば④⑤間に実質的には有意の差はない可能性が強いもの、⑫は再質問(誘導質問)の結果④⑤が一致したものである。これらの事例は(1)のパターンとして処理した。

- (2) ④⑤間に音声的差異、またはそれに準ずるわずかな語形的差異のみが認められるもの。

- ⑬ ④ ɕebi ⑤ hebi (「蛇」8300.25)
 ⑭ ④ ikutu ⑤ ikutsu (「いくつ」7364.34)
 ⑮ ④ nioi ⑤ niɕe: <nioi は上品な言い方> (「芳香」8393.69)
 ⑯ ④ a:me ⑤ ame: <a:me は変だ> (「甘い」7326.41)
 ⑰ ④ kosobaɪ ⑤ kosobai: (「くすぐったい」7326.41)
 ⑱ ④ tampere ⑤ tamppopo (「たんぽぽ」7394.85)
 ⑲ ④ uma ⑤ mma (「馬」8325.03)
 ⑳ ④ kojibi ⑤ kojubi (「小指」7326.41)
 ㉑ ④ uroko ⑤¹⁾ uruko, ²⁾ uroko <上品> (「鱗」8393.69)
 ㉒ ④ kosowaika ⑤ kotʃowaika (「くすぐったい」7361.82)
 ㉓ ④ uso:ju: ⑤ usoju: (「うそをつく」7326.69)

上記のうち、⑬⑭⑮は④⑤の違いが方言の音声的特徴の有無にかかわるもの、すなわち狭義の音声的変種と認められるもの、⑯以下は語形変種とも言えるもので、⑯⑰は音の長短の違い、⑱は促音の有無、⑲は um- と mm の違い、⑳㉑は母音の違い、㉒は子音の違い、㉓は助詞「を」の有無(この項目は助詞部分が注目点ではないので、ここに含めた)である。この種の事例は(2)のパターンとして処理した。

- (3) ①②のいずれか（あるいは①②の両方）で複数の語形が回答されており、その一部が一致するが、一部に音声差以上の差異、すなわち、上記の(1)(2)を越える差異の認められるもの。

(3-1) ②に共通語形が現れるもの。

- ②④ ① tsura ② ¹⁾ tsura, ²⁾ kao <新> (「顔」 7218.26)

(3-2) ①の共通語形が②で消えるもの。

- ②⑤ ① ¹⁾ シモヤケ, ²⁾ シモバレ ② {imobare (「しもやけ」 7373.92)

(3-3) ②に新たな俚言形が現れるもの。

- ②⑥ ① hojake ② hog uro <少し新> と hojake <古> (「瘡」 8325.03)

- ②⑦ ① atama ② ¹⁾ atama, ²⁾ binta (「頭」 8325.03)

- ②⑧ ① kare: ② ¹⁾ karaka, ²⁾ (誘) kare: (「<唐辛子の味が> からい」 7364.34)

- ②⑨ ① {ioamaka ② ¹⁾ amaka, ²⁾ {ioamaka (「<塩味が> うすい」 7218.26)

(3-4) ①の俚言形が②で消えるもの。

- ③⑩ ① ¹⁾ ira <古, 多>, ²⁾ uroko ② uroko <ira とは言わない> (「鱗」 7356.70)

- ③⑪ ① ¹⁾ kagato<新>, ²⁾ ado₃iri, ³⁾ ado<とも言う> ② ¹⁾ kagato<新>, ²⁾ ado₃iri <ado とは言わぬ> (「かかと」 8335.11)

- ③⑫ ① ¹⁾ okkene:, ²⁾ Φut^wi: <両方同じように使う> ② okkene<フトイはしゃれたことば。自分は使わぬ> (「大きい」 8325.03)

(3-5) その他 (3-1 ~ 3-4 の組み合わせなど)。

- ③⑬ ① ¹⁾ bakkun, ²⁾ bakudo ② ¹⁾ kaeru, ²⁾ bakkun<古> <bakudo とは言わぬ> (「蛙」 7326.69)

- ③⑭ ① ¹⁾ komenuka, ²⁾ nuka ② ¹⁾ t{ozunuka <古>, ²⁾ komenuka (「糠」 7364.34)

- ③⑮ ① ¹⁾ momenito, ²⁾ ito <ふつうは ito と言う> ② momenito (「木綿糸」 8335.11)

- ③⑯ ① ta ② ¹⁾ ta, ²⁾ tambo (「田」 7356.70)

③⑬は再調査で俚言形の bakudo が消えて新たに共通語形が回答されたもので、3-1 と 3-4 の組み合わせ、③⑭は共通語形の nuka が消えて新たな俚言

形 tʃozunuka が回答されたもので、3-2と3-3の組み合わせである。また、㊸は再調査で消えた ito を共通語形、俚言形のいずれと認定すべきが困難であったため、「その他」とした。㊹は ta と tambo のいずれも共通語形と認められるが、(3-1)の「新たに共通語形が現れる」ものとは別タイプと考えて「その他」に分類した。

(4) ㊸と㊹の間に一致する語形(回答)がないもの。

(4-1) ㊸が俚言形、㊹が共通語形のもの。

㊸ ㊸ oni ㊹ onigokko <oni とは言わぬ> (「鬼ごっこ」7326.69)

㊸ ㊸ kururu ㊹ jaru <kururu とは言わぬ> (「<煙草を1本>やる」8393.69)

(4-2) ㊸が共通語形、㊹が俚言形のもの。

㊸ ㊸ katatsumuri ㊹ mamekuji <katatsumuri は標準語> (「かたつむり」8325.03)

㊸ ㊸ 言わない ㊹ 言う <ふつうは hoka. しかし、ニワとも言う> (「家の前の仕事をニワと言うか」8335.11)

(4-3) ㊸と異なる俚言形が㊹に現れるもの。

㊸ ㊸ soge ㊹ k^wi <soge は今のことばで自分は使わぬ> (「とげ=裂片」8324.26)

㊸ ㊸ sumire ㊹ sumiire (「すみれ」7394.85)

㊸ ㊸ ¹⁾ kusurijubi, ²⁾ beēsa:ʃi 《beēsa:ʃi は同席者の誘導による》
㊹ bentsukejubi (「薬指」7239.24)

(4-4) その他(4-1~4-3のいずれにも該当しないもの)。

㊸ ㊸ 無回答 <米作をしていないので> ㊹ {okujo: と kuijo: と ʃikajo mai
<上品> (「飯米」8393.69)

㊸ ㊸ mido:ʃe ㊹ 無回答 <mido:ʃe は聞いたことがない> (「みずおち」7356.70)

㊸ ㊸ ʃuri ㊹ ʃurisen (「釣り銭」7356.70)

㊸ ㊸ さつまいもが多い。 ㊹ 里芋 (「イモと言えは何の芋か」7356.70)

㊸ ㊸ 曲がり角、入口など。 ㊹ 路地の曲がり角にある家。また、入口をカド

グチと言う。(「カドとはどんな場所か」7330.31)

④⑤は④ ⑤のいずれかが無回答のもの, ④⑥は④ ⑥のいずれも共通語形と認められるもの, ④⑦ ④⑧は意味を問う項目, ④⑨は④ ⑥の内容が大きく離れてはいないが, 意味・用法にずれが認められるので「その他」とした。

以上の(1)～(4-4)の出現率(それぞれのパターンを示す項目数の項目総数に対する百分率)を表1に示す。

表1

地点 \ パターン	1	2	3-1	3-2	3-3	3-4	3-5	4-1	4-2	4-3	4-4	計
7322.21	67.4	5.5	5.1	0.4	9.3	0.8	6.4	0.8	1.3	1.3	1.7	100
7353.03	66.5	8.9	5.9	0	5.9	3.0	4.2	3.0	0.8	0.8	0.8	100
7239.24	77.5	5.1	3.4	0.4	2.5	1.7	3.8	1.3	1.7	0.8	1.7	100
7330.31	64.0	8.1	5.9	0	4.2	3.0	5.1	1.7	0.4	4.6	3.0	100
7218.26	62.7	6.4	13.1	0	9.3	1.3	1.7	1.3	0.8	0.8	1.7	100
7361.82	65.3	18.2	5.9	0	4.7	1.3	2.1	0	0	0.4	2.1	100
7364.34	61.0	10.2	3.8	1.3	10.6	2.1	5.1	0.8	1.3	2.1	1.7	100
7373.92	60.6	11.9	3.0	3.4	3.4	5.5	6.8	0	0.8	1.3	3.4	100
7392.33	61.4	12.7	2.5	3.0	3.8	3.8	3.8	2.1	2.1	2.1	2.5	100
8300.25	64.4	18.6	2.1	0.8	5.5	0.8	2.1	0.4	0	3.0	2.1	100
8303.13	74.2	7.6	3.0	0.4	4.2	1.3	2.5	1.3	0.8	1.7	3.0	100
7326.41	58.1	15.7	5.1	1.3	10.2	0.8	5.5	0.8	0.4	1.7	0.4	100
7326.69	70.8	6.8	4.2	0.4	5.1	2.1	5.5	1.3	0.4	1.3	1.3	100
7356.70	59.7	7.2	4.2	0	9.3	3.8	4.2	0.8	1.3	3.4	5.9	100
7394.85	60.2	14.0	8.1	1.7	4.7	1.7	2.9	0.4	0.8	2.5	3.0	100
8324.26	58.5	13.1	5.5	0.4	10.6	0.4	4.7	0.8	0.8	2.5	2.5	100
8325.03	59.7	16.5	2.1	0.4	6.8	1.7	2.1	1.7	1.7	4.7	1.7	100
8335.11	62.3	11.9	2.5	1.3	6.4	3.4	3.8	0.4	0.8	2.5	4.7	100
8393.69	61.9	8.9	6.8	0	9.7	0.4	3.4	2.1	0.4	2.1	4.2	100
平均	64.0	10.9	4.9	0.8	6.6	2.0	4.0	1.1	0.9	2.1	2.5	100

2.2. 調査結果の分析

次に、各パターンのうち、④⑤の間に音声差以上の差異の認められる(3)以下の事例を中心として、その要因を考察し、要因別にいくつかの事例をあげて考察の結果を記す。

〔Ⅰ〕調査地点における俚言形の衰退が結果に反映しているのではないかと考えられるもの。

④⑤ ④¹⁾ katotsumori <上品>, ²⁾ dendemmuji と iekarui <稀>

⑤¹⁾ katotumori, ²⁾ (誘) dendemmuji <このごろの言い方>, <iekarui は使わぬ> (「かたつむり」7356.70 <3-4>) (< >内は分類パターン。以下同じ)

考察：『日本言語地図』236図を見ると、イエカルイは調査地点付近に5地点見られるが、勢力は弱く、カタツムリやデンデンムシの勢力に押されて衰退しつつある様相がうかがえる。④の時点ですでに「稀」にしか使用されなかったイエカルイが⑤でついに消滅したと言えよう。

⑤⑥ ⑤¹⁾ ナメクジ <古>, ²⁾ デンデンムシ <新>, ³⁾ カタツムツ <新>

⑥¹⁾ namekuji (話者はあとで使用を否定。しかし正しいのではないか),

²⁾ katatsumut (「かたつむり」7373.92<3-5>)

参考：この地点の「なめくじ」の項目の回答。

④ナメクジとハダカナメクジ ⑥ namekuji <ハダカナメクジとは言わない> <3-4>

考察：『日本言語地図』ではこの地点付近にナメクジやマメクジが勢力をもっているが、④の時点で衰退気味であることは、インフォーマントが「古」と説明したことからもうかがえる。「かたつむり」の意のナメクジが衰えたために、「なめくじ」を⑥の時点でハダカナメクジと呼ぶ必要がなくなったと考えられる。

- ⑤① ㊤ akka ㊤ aka <相手に質問する場合には akka と言う> (「赤い」8393. 69<4-4>)

考察：『日本言語地図』で、この地域（種子島）の「赤い」はすべて AKKA である。㊤におけるインフォーマントの説明の真意は明確でないが、調査者が akka を口にして（そのときにどんなアクセントで発音したかも問題になろうが）誘導したにもかかわらず、それを「赤い」の意味と認めなかったことは、やはりこの地域における akka の衰退の反映であろう。なお、㊤の aka は名詞形であり、「赤い」に当たる形容詞形ではないが、この項目の質問文「（赤紙をさし）こんな色の紙だったら、どんなと言いますか」の回答に当たるものとして『日本言語地図』にも採用（記載）されている（九州では熊本などに AKKA などと併用で分布がある）。この aka を共通語形と認めれば、akka → aka は<4-1>とすべきであるが、この項目の共通語形はアカイであるとして、このケースは<4-4>（その他）に分類した。

- ⑤② ㊤ nebikikaku ㊤ ibikiokaku <ネビキカクとは言わぬ。聞いたこともない> (「いびきをかく」8335.11<4-1>)

考察：『日本言語地図』によれば、九州ではイビキ〜が主流であり、ネビキ〜はきわめて散発的にしか見られない。したがって、ネビキ〜は㊤の時点で衰退寸前の弱小語形であり、10年後の㊤では被調査者の脳裏からも消えてしまったのではないと思われる。調査地点・被調査者一覧によれば、この地点での調査には調査者・被調査者以外の第三者が同席しており、㊤の時点で被調査者が「聞いたこともない」と強く否定しているところを見ると、㊤のネビキ〜は同席者の発言によるものではないかと疑われるが、調査票にその記録はない（同席者の発言に誘導された語形はその旨注記するようにマニュアルに指示がある）。

- ⑤③ ㊤ ¹¹h₂ebi<古?>, ²¹クチナワ<古> ㊤ ¹¹h₂ebi~çebi, ²¹(誘)kutʃinawa<?>
 (種名にシラグチナワというのがいて肯定した) (「蛇」7373. 92)

<1>

考察：④ ⑥がおおまかには一致しているケースである。しかし、④ではクチナワが誘導なしに回答されたが、⑥では誘導した結果の回答で、しかも複合形以外では使うかどうか自信がないという。『日本言語地図』のこの地点はクチナワの分布域の周辺部にあり、そのこともあってクチナワの衰退が早まり、それが結果に反映していると思われる。

〔Ⅱ〕⑧で新たな俚言形が回答されるが、この俚言形は④の時点でも被調査者が所有（使用）していた可能性のあるもの。

⑤④ ④ tategami <いいことば> ⑧¹⁾ tategami <上品>, ²⁾ ko:ne (「た てがみ」 7326.41<3-3>)

考察：九州の大部分では、この地点付近を含めてタテガミとコーネが混在している（この地点の周辺はほとんどコーネである）。この 7326.41 でも、被調査者を含めて、大部分の人がタテガミとコーネの両形を、何らかの用法差（意味差・文体差など）を伴いつつ使用しているのではないかと思われる。④の時点では、たまたまそのうちの一方しか回答されなかったのであらう。④の tategami に「いいことば」の注記があるのは、被調査者がタテガミを共通語形と意識しており、「そのほかに何か方言形があったはずだが思い出せない」という気持ちがあったことを意味するのではないだろうか。

⑤⑤ ④ dʒisin ⑧¹⁾ nae (gaitta) <極古>, ²⁾ ʒiʃin (gaitta) (「地震」 7326.41 <3-3>)

考察：この地点の周囲はすべてジシンとナエの併用地点である。古形ナエは主として九州東部に分布しており、新形ジシンの侵略を受けつつあるものと推定される。おそらく被調査者（に限らずこの地域の人達）はナエは子供のころに使用した語形であり、調査時点（1960年）ごろにはほとんど使用する機会がなかったものと思われる。④のときには思い出せなかった

昔のことは㊦で想起したものであろう。

㊥ ㊦ ku:ri ㊧¹⁾ ku:ri, ²⁾ itagane <古> (「氷」7218.26<3-3>)

考察：『日本言語地図』では、この地点（杵岐郡郷ノ浦町里触）の隣の地点7218.16（同町田触）がイタガネである。おそらく、この地域ではイタガネはクーリより古い語形であり、7218.26の被調査者は㊦の時点ではイタガネを（昔使ったことのあることばとして）脳裏に保存していたが思い出せなかったのであろう。

〔Ⅲ〕㊦の時点では隣接地域に分布していた（あるいはその地点の若年層などに侵入しつつあった）俚言形が、その後（㊧の時点までに）その地点に侵入した（あるいは老年層にも使われるようになった）可能性のあるもの。

㊦ ㊧{imojake ㊨¹⁾{imojake <古>, ²⁾ jukijake <新> (「しもやけ」7326.41<3-3>)

考察：『日本言語地図』ではユキヤケは山陰や愛媛の一部（より東）に分布し、九州では、上記地点よりやや西の7324.96にシモヤケと併用で見られるにすぎない（図1）。jukijakeを「新」とする被調査者の意識をよりどころにすれば、九州北部には、中国地方、あるいは愛媛西部からユキヤケが侵入しつつあることがうかがわれる。そうであるとすれば、7326.41の被調査者は㊦の時点ではユキヤケを用いていなかったことも考えられる。もっとも、7326.41（大分県西国東郡真玉町）も7324.96（同県下毛郡本耶馬溪村）も比較的辺境の地であって、ユキヤケの本拠地により近く、より都市的である福岡県北部や大分市付近などを飛び越えて、新しい語形の先兵隊が伝播してくるかという疑問も生じる。jukijakeを「新」とする被調査者の意識とは矛盾するが、大分県の2地点から採集されたユキヤケが残存である可能性も留保しておく必要があろう（もし残存であれば、九州北部には、かつてユキヤケが広く分布していたことになろう）。残存であるか

侵入であるかについては、この地点付近の各年齢層多数について「しもやけ」の項目を調査してみれば有力な手がかりが得られるだろう（進出であれば、より若年の層でユキヤケの使用が増えるはずである）。

㉔ ④¹⁾ mamuʃi <多>, ²⁾ ɕirakutʃi <mamuʃi と ɕirakutʃi のどちらが古いかわからぬ>

㉕ ④¹⁾ mamuʃi <古>, ²⁾ mahebi, ³⁾ (誘) ɕirakutʃi <少> (「まむし」8303.13<3-3>)

考察：この地点はマムシとヒラクチの接触地域であり、マヘビはやや東の宮崎県に広く分布する(図2)。mamuʃi を mahebi よりも古いとする被調査者の意識をよりどころにすれば、㉕で新たに現れた mahebi は宮崎県から侵入したもので、④の時点では被調査者が使用していなかった可能性が高い。マムシとヒラクチは熊本県南部で衝突しているが、被調査者の注では、④の時点でもヒラクチの方が使用度が少なく、㉕では誘導の結果出てくる状態であるから、上記の地点ではヒラクチの衰退の傾向がうかがえる(189ページの「まむし」のグロットグラム参照)。

図 1

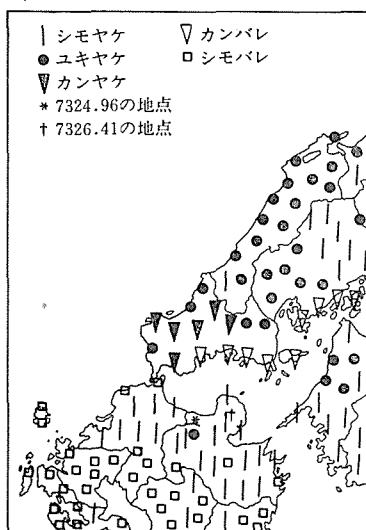
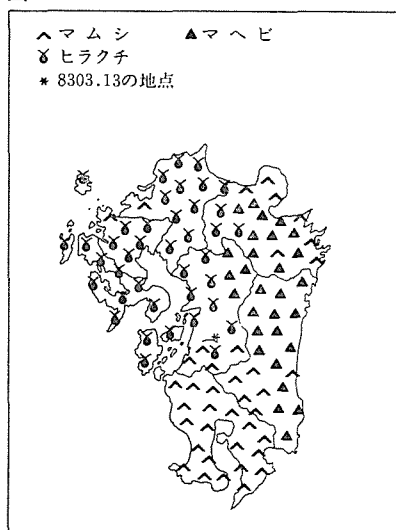


図 2



〔IV〕㊸で新たに現れた俚言形が、㊴以後にその地点付近で生まれた可能性も考えられるもの。

㊸ ㊴¹⁾ kamakiri ㊸¹⁾ kamakiri<新>, ²⁾ kamakirigitt{o<古> (「かまきり」7322.21<3-3>)

考察：この地点の周辺はカマキリとカマキッチョであり、カマキリギッチョは見当たらない。カマキリギッチョは両形の混交により、この地点付近で新たに生まれた可能性が強い。ただし、被調査者はカマキリギッチョを「古」としている。あるいはカマキリギッチョは被調査者が古形カマキッチョを忘れかけており、その場で作り出した臨時的な語形（一種の誤答）かもしれない。その語形が個人的・臨時的なものか、それとも方言形と認めうるものかについては、現地で多数の者について調査してみないと判断できない。

㊸ ㊴ mamekuzi ㊸¹⁾ namekuzi<多>, ²⁾ menakuzi, ³⁾ (誘) mamekuzi
(「なめくじ」8324.26<3-5>)

考察：この地点の周辺は、マメクジ、ナメクジ、マメクシ、ナメクシなどであり、『日本言語地図』にメナクジの語形は見当たらない。この menakuzi は namekuzi の音位転倒により（その背景として mamekuzi の語頭の m-の影響も考えられる）、この地点付近で生まれた可能性が強い。このメナクジも、㊸のカマキリギッチョと同様に個人的なものである可能性もあるが、㊸の場合と違って、namekuzi と対比しつつ答えているから、その場限りの臨時的なものではなからう。なお、この地点は鹿児島県側のマメクジと宮崎県側のナメクジとの境界地帯であるが、㊴でマメクジのみが回答され、㊸の第一答がナメクジで、それに「多く使う」との注が付いた点については、この地域における両語形の勢力の交替が感じられる。

〔V〕被調査者が、㊴の時点では使わなかった（または使う度合いが小さかった）共通語形または地方共通語形を、㊸の時点で使うようになった可能

性も考えられるもの。

㊦で新たに共通語形や地方共通語形が回答された事例（〈3-1〉や〈4-1〉など）の中にはその可能性のあるものが含まれている。ただし、その中には、㊤で共通語形を所有（使用）していたにもかかわらず、調査の場でそれが回答されなかったにすぎないものが、かなり含まれているであろうことに注意しなければならない（一般に方言の調査では、俚言形が回答されればそれで満足し、そのほかに共通語形を使用するかどうかはチェックしないことが多い。この点は日本言語地図作成のための調査でも同様であると考えられる）。なお、次の事例は㊦で地方共通語形が現れるケースである。

㉑ ㊤ アド ㉒¹⁾ kagato, ²⁾ ado （「かかと」7392.33〈3-3〉）

考察：㊦に新たに俚言形 kagato（共通語形は kakato）が現れるが、このカガトは西日本共通語的性格をもつ語形であることが、『日本言語地図』の分布その他からわかっている。『日本言語地図』の場合カガトは他の俚言形（キビスやアドなど）の中にまじって西日本に広く分布しており、その分布模様は全国共通語形（標準語形）に特徴的に見られる「空からばらまかれたような」分布である。西日本各地ではカガトを共通語的意識で（上位場面などで）使用していると思われ、これについては実証的な調査資料もある（参考文献3）。九州でも上記の地点を含む北西部を中心にカガトが他の語形（アドやキビシャなど）の中に散在しており、上の地点の被調査者は㊤の時点でもカガトを保有していた可能性もある。しかし、一方、この項目では7392.33のほかにも㊦で新たにカガトが回答された地点が4地点（7326.41, 7326.69, 7373.92, 8303.13）見られ、このことは、九州各地で地方共通語化が進みつつあることが上記の㊤㊦の違いに反映しているとする根拠になりうる。

〔VI〕被調査者自身が使わない他人のことばが混入した疑いのあるもの。

- ⑥② ㊤使う ㊦使わない《何度質問しても被調査者は昔からアカルカと言うと答える。一方、同席した被調査者の妻は「アカカと言うような気がする」と発言》（「アカイを“明るい”の意味で使うか」7330.31<4-1>）
- ⑥③ ㊤オヒトツ ㊦ damma<オヒトツとは今初めて聞いた。オヒトツとは言わぬ>（「お手玉」7330.31<4-3>）
- ⑥④ ㊤オヒトツスル ㊦ tedama《同席した被調査者の妻はオヒトツ》（「お手玉遊び」7330.31<4-3>）

考察：⑥② ⑥③ ⑥④ の例は同一地点（7330.31）で、㊤㊦いずれのときも被調査者の妻が調査の場に同席している。㊦の調査者は筆者であるが、筆者の記憶では、この同席者は調査の場でしばしば口を出し、被調査者が答える前に同席者が語形を口にしてしまい、しかも被調査者は、妻の口にした語形を「自分は使わない」と否定することはあまりなかった（あまり口を出さぬよう、筆者が被調査者の妻にお願いした記憶がある）。この妻は、調査地点（佐賀県東松浦郡浜崎玉島町）に隣接する東松浦郡呼子町の出身者であるが、状況から推して㊤における回答は ⑥② ⑥③ ⑥④ のいずれも同席者のことばを反映している可能性が強い。なお、『日本言語地図』との関連で見ると、「アカイを“明るい”の意味で使うか」の図では、呼子町を含めて「使う」が主流であり、7330.31の地点を「使わない」に訂正すると、九州ではむしろ例外となる（ただし、この地点の隣の7239.29は「使わない」である）。「お手玉」の地図では、7330.31に隣接してオタマやダマが分布するから、㊦の damma はこれらとつながることになる。オヒトツは上記の地点から遠く離れた福岡北部や長崎に見られ、佐賀県では上記地点のみ、呼子町はオテダマである。しかしオヒトツは九州を含めて全国的に点不在し散在の傾向があり、語形の性格から見ても、これは上記地点や呼子町付近に他の語形にまじって潜在している可能性が強い。

- ⑥⑤ ㊤¹⁾jekisuru, ²⁾kozuku ㊦jekisuru <kozuku は昔から自分は使わぬ。ここの土地の人の一部が使う>（「せきをする」7218.26<3-4>）

考察：この地点では㊤㊦とも同席者はいないので（調査地点・被調査者一

覧参照), ㉔ ㉕ ㉖ の場合のように同席者のことばが混入することはない。この地点の隣の地点(沓岐郡郷ノ浦町永田触)もコズクであり, ㉔ における「ここの土地の人の一部が使う」という被調査者の説明は事実であろう。この地点(沓岐郡郷ノ浦町里触)の被調査者は『沓岐島方言集』の著者の山口麻太郎氏であり, そのこともあって, ㉔ の調査では, 被調査者が使用するか否かにかかわらず, その地点のことばを広く採集したのではない。すなわち, ㉔ ㉕ の違いは調査者の調査態度の違いによるものではないかと思われる。ただし, ㉔ の調査票に, コズクを被調査者が使わぬ旨の注記はない。

以上, 被調査者以外のことばが混入した疑いのある例をあげたが, 次に示すように, 自分が使う(使った)かどうかについての被調査者の内省については, 慎重に判断しなければならない場合があると考えられる。

- ㉔ ㉔ memorai ㉕ memora <memorai はよそのことば> (「ものもらい」7326.69<4-3>)

考察: 『日本言語地図』を見ると, この地点の周辺にはメモライが密に分布し, メモラはその外側にある(図3)。この分布から判断すると, ㉔ の時点の memorai はやはり被調査者自身の語であり, ㉕ の時点の被調査者の発言は, 10年後には memorai を捨てて memora を使うようになったことを意味すると解すべきかもしれない。

- ㉔ ㉔ meibo ㉕ menebuto <meibo は聞いたことはある。上品なことば> (「ものもらい」8325.03<4-3>)

考察: メイボはこの地点の周辺に密に分布し, メネブトはかなり離れた地域に散在する(図3)。これについても㉔と同様の解釈が考えられる。

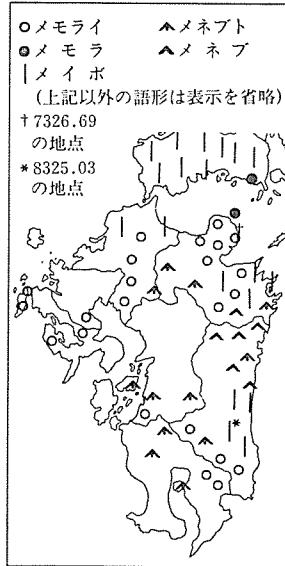
〔Ⅶ〕隣接意味分野の語の混入が疑われるもの。

⑥⑧ ① atama, ② miken <古> ③ atama 図 3

<mikenとは言わない>

(「頭」7356.70<3-4>)

考察：『日本言語地図』を見るとミケンはこの地点だけで、ほかには全国のどこにもない。やはり、これは「眉間」であって、頭部全体の呼称を求めるこの項目の語形としてはふさわしくないと考えられる。おそらく、調査者が額のあたり（または前頭部）をさしつつ質問したために出た語形であろう（調査票の付図は後頭部である）（図4）。



⑥⑨ ④ zo:name ⑤ ge: roko <zo:name はほかの人が使うのを聞いたことがある> (「おたまじゃくし」7364.34<4-3>)

考察：『日本言語地図』を見ると、ゾーナメは全国でこの地点だけである。一方、参考文献1によれば目高の意味のゾーナメは調査地点を含む広い地域（熊本・宮崎両県）に分布する。したがって、④のゾーナメは目高の意味の俚言形が混入した可能性が強い。もっとも、同一の語形が、連続する地域で「おたまじゃくし」の意味になったり「目高」の意味になったりすることがある（参考文献2）から、上記地点のゾーナメがおたまじゃくしの意味でないと断言するためには、現地で詳しい調査を行なう必要がある。

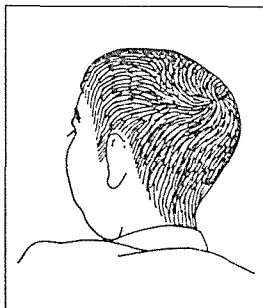
⑦⑩ ⑥ nakajibi ⑦ bensa:i <nakajibi とは言わぬ> (「中指」7356.70<4-2>)

⑦⑪ ⑥ bensa:i ⑧ 無回答 <bensa:i とは言わぬ> (「薬指」7356.70<4-4>)

考察：⑥と同様に、⑧は被調査者の誤解とも言える回答であるが、⑦⑩と⑦⑪との間に一貫性があり、誤解したまま自信をもって答えている点が面白い。

⑦② ㊦ ofadoʃi ㊦¹⁾ midzuotoʃi, ²⁾ midzootoʃi 図 4

〈ofadoʃi は聞いたことがない〉, (しばら
く考えて) 〈肋骨の一番下を ofihadzuʃi と言
う〉
(「みずおち」 8335.11<4-3>)



考察：『日本言語地図』でオシャドシはこの地点だけにしかない。一方、オシハズシはこの地点の北および南の、かなり離れた2地点に認められ、いずれもほかの語形（ミゾオテとミゾオチ）と併用で散在する（ほかにオテサガリが1地点見られる）。㊦における被調査者の説明から推して、オシハズシは「みずおち」（鳩尾）の意味を認めうるかどうか、すれすれの性格のものであろう（おそらく、「肋骨の一番下」の意味のオシハズシは、この地域に密に分布しているであろう）。そして、㊦で記録され、『日本言語地図』に登載されているオシャドシは、オシハズシの聞き誤りである可能性が強い。

⑦③ ㊦ kaʃikomaru ㊦ suwaru<kaʃikomaru は恐縮する状態>（「正座する」 8393.69<4-1>）

考察：カシコマルの主要分布域は中国地方以東であり、九州では北部に数地点散在するのみ、上記地点（種子島）は全くの飛び地である（なお、種子島では、キンキンスルが3地点に、キチントスワル、オチャントスワルがそれぞれ1地点ずつ見られる）。したがって、上記地点のカシコマルは「恐縮しつつ正座する」の意味であり、中国地方以東に一定の領域をもって分布するカシコマルとは多少意味・用法を異にするのではないと思われる（ちなみに、東京地方の大部分はカシコマルであるが、ここでは「恐縮する」の意味はかならずしも含んでいないらしい。東京のバスの中で、座席にすわりこんでいるおばあさんに、運転手が「あぶないから、かしこまらないで下さい」と注意するのを耳にしたことがある）。上記地点のカシコマルをこの項目の回答として不適切なものとするかどうかは、⑦②のオシハズ

シと同様に微妙なところと言えよう。

〔Ⅷ〕 ④⑤の間に意味の変化が認められるもの。

- ⑦④ ④コ (▼) ブ ⑤¹⁾ ko▼bu~kobu (小さい蜘蛛), ²⁾ kumo (大きい蜘蛛)
 (「蜘蛛」7373.92<4-3>)

考察：この地点は九州南部のコブと北部のクモとの接触地域であり、北部のクモがコブの領域に侵入した結果、両形の間に意味の分担が生じたものと考えられる(類例として、「地震」の項目で、九州のナエの地域にジシンが侵入し、多くの地点で、ジシンは「大きいもの」、ナエは「小さいもの」をさすようになった事例がある。参考文献6)。

- ⑦⑤ ④ koke ⑤¹⁾ fuke <ちょっとこすると出てくるもの>, ²⁾ koke <3日も4日も洗わないときに出てくるもの> (「垢」8393.69<3-3>)

- ⑦⑥ ④fuke ⑥ atamanofuke (「ふけ」8393.69<4-4>)

考察：『日本言語地図』では、九州で、コケは主として「垢」の意味で分布するが、一部の地点では「ふけ」の図にも見られる(両者の分布は相補的ではあるが、一部の地点では「垢」も「ふけ」もコケになっている)。ただし、フケは「垢」の意味では一地点も現れず、その点、⑦⑤の⑥は特殊な例である。上記地点は種子島であるが、『日本言語地図』では、種子島の「垢」は3地点ともコケであるのに対し、隣の屋久島では、コケは「ふけ」の意味である。すなわち、調査地域を含む九州各地では「垢」と「ふけ」の区別が曖昧になる傾向があり、そのような事情が背景にあって、⑦⑤の⑥のように、本来は「ふけ」の意味のフケが「垢」の意味領域を侵したと考えられる。その結果、在来のコケとの間に意味の分担が生じ、また、「ふけ」の表現もアタマノフケと変化せざるをえなかった。なお、意味の分担を生じる際に、コケが「こびりついた垢？」の方を分担したことは、コケの本質的な意味(コケは東日本では「うろこ」の意味でも使われる)を考えると納得のいく変化で興味深い。

- ⑦①¹⁾ giriboʃi, ²⁾ girigiri ⑧giriboʃi <girigiri は素直でないことを言う>
 (「つむじ(旋毛)」7353. 03<3-4>)

考察：『日本言語地図』の「つむじ」の図を見ると、ギリギリはこの地域に広く分布する。一方、ギリボシは全国で上記の地点にしか見られない。ギリボシという「旋毛」を表わす適切な表現を得て、ギリボシが⑧の時点で有力形に昇格し、ギリギリは特殊な意味分野に追いやられたものであろうか。

- ⑦①¹⁾ hoguro <黒いもの>, ²⁾ hojake <赤いもの> ⑧¹⁾ aza, ²⁾ (誘)
 hoguro <点のようなもの>, ³⁾ hojake <たれ下がっているもの> (「あざ」7326.69<3-5>)

考察：この地点の「ほくろ」は大小ともに、④⑧とも aza である。すなわち、④の時点では「あざ」と「ほくろ」の区別が認められたのに、⑧ではその区別が曖昧になったことになる。この地域（九州北部）では、地点により、ホグロ（またはホクロ）やアザが「ほくろ」の意味になったり「あざ」の意味になったりする。その不安定さが⑧で「あざ」と「ほくろ」の区別をなくし、また、ホグロとホヤケの意味を変化（特殊化）させたものであろう。なお、⑧のホグロの「点のようなもの」は、果たして「あざ」の範囲に入るのかどうか不明である。あるいは、むしろ「ほくろ」に近いものをさしているのかもしれない。この点は④のホグロの「黒いもの」についても同様である。

2.3. まとめ

以上の事例から、④⑧の間に差異が生じた理由については、次のような要因が考えられたことになる。

- 1) 被調査者が複数の語形を所有（使用）しており、④または⑧においてその一部しか回答されなかった（事例⑤④, ⑤⑤, ⑤⑥。そのほか<3-1><3-3><4-3>などの中には、このケースに当たるものが多数含まれ

ていると考えられる。要因別の集計は困難であるが、㉔㉕間に差異の見られる事例の大半はこのケースに属するものと思われる。

- 2) 調査結果の中に、調査の目的からはずれた誤った回答が混入した。
 - 2-1) 同一地点の他の被調査者、または、他の地域・地点の被調査者が使用し、被調査者自身は使用しない語形を回答した(事例⑥②⑥③⑥④⑥⑤)。
 - 2-2) 隣接意味分野の語形を誤って回答した(事例⑥⑧⑥⑨⑦⑩。あるいは⑦②⑦③も)。
 - 2-3) 語形の聞き取り(記録)に誤りがあった(事例⑦②)。
- 3) 被調査者が使用する語の意味の広がりによれがあり、それが結果の差に反映した(事例⑦⑧)。
- 4) 地域のことば、または、被調査者自身のことばが10年の間に変化した。
 - 4-1) 昔は使わなかった(あるいは使う度合いが小さかった)共通語形や地方共通語形を使用するようになった(事例⑥⑩⑥⑪)。そのほか、〈3-1〉や〈4-1〉などの中に、このケースに当たるものが含まれている。
 - 4-2) 昔は使わなかった俚言形を使用するようになった(事例⑤⑦⑤⑧⑤⑨⑥⑩⑥⑥⑥⑦)。
 - 4-3) 昔使った俚言形を使用しなくなった(事例④⑨⑤⑩⑥⑪⑤⑫⑥⑬⑥⑭⑥⑮⑥⑯)。
 - 4-4) 使用する語形の意味範囲に変化が生じた(事例⑦④⑦⑤⑦⑦)。

なお、㉔㉕が一致する度合いは項目によって差があるが、(1)の、㉔㉕がほぼ、あるいは完全に一致するもの、および、(2)の音声の差異のみが認められるものの二つを一致と見た場合、調査地点のすべて(19地点)で㉔㉕が一致したのは次の31項目である(*は音声の差異も認められず19地点のすべてで㉔㉕が完全に一致した項目)。

「*貸す」「*カッテクルの意味」「*ニワの意味」「*カドの意味」「*綿」「*糸」「*米」「*ケチダの意味」「もらう」「借りる」「あさって」「牛」「七日」「耳」「口」「人差し指」「男」「女」「たんぼぼ」「甘い」「九日」「親指」「小指」「今日」「とうもろこし」「雪」「昨日」「馬」「唐辛子」「蠅」「一昨日」

上に見られるように、語形をあげて特定の意味で使うかどうかを問う yes・no 項目、あるいは、九州地方で分布がきわめて単純な項目である。

一方、一致度が小さい項目についてみると、最も一致度が小さいのは(19地

点のうち) 5地点しか一致しなかったものであり, 7地点一致までの項目をあげると次のとおりである。

「せきれいの鳴き声」(5地点一致。この項目は地図化されていない), 「川のごみ」 「かたつむり」(以上は6地点一致), 「雷が落ちる」 「稲光」 「鬼ごっこ」 「かかと」 「あざ」(以上は7地点一致)

これらは, 九州地方で, 語形の種類がきわめて多く分布が複雑であるか, あるいは, 語形は少数でも, それらが錯綜して分布しているものである。すなわち, 分布が複雑な項目では, 同一地点(被調査者)に複数の語形があることが多く, 一回限りの調査ではその一部しか回答されない率が高いと言えよう。

さて, 表2に示したように, (1)の㉔㉕がほぼ一致する率(項目総数に対する一致項目数の割合)の19地点の平均値は64.0%である。また, (2)の音声的差異のみが認められるものの平均値は10.9%である。つまり, 音声差以上の差異, すなわち㉔㉕の間に語形的な差が認められた項目の割合は地点平均約25%ということになる。調査項目総数は235であるから, 各地点平均で約60項目に語形の差が認められたことになる。このうち, (3-1)や(3-2)のように共通語形のみがかかわる事例を除き, ㉔の俚言形が㉕で否定されたり, ㉕で新たな俚言形が回答された事例について見ると, 地点平均約13%, 項目数にして約30項目になる。

すなわち, この30項目については, 同一被調査者に対する調査の回数を1回ではなく2回以上にしたり, 同席者の発言や別の意味のことばが誤って混入することのないように慎重な調査をすれば, より完全な回答を得られる可能性が強い(ものを多く含む)と言える。

しかし, 現実には, この13%の誤差はいわば調査の宿命であって, われわれはこのような誤差が存在することを前提として言語地図を見るべきであると思う。たとえば, 俚言形Aが密に分布しているときに2, 3の共通語形が散在しているときには, その地点に俚言形Aが隠れているかもしれないとか, 語形Aの分布領域の中に語形Bがわずかに点在しているときには, 隣接意味分野の語形が混入したのではないかと, 一応疑ってみるべきだというようなことである。とくに, 地図上に1地点しか見られないいわゆる孤例について, これに重要な

意味をもたせて言語地図を解釈することは危険であろう。すなわち、言語地図は、あくまでも分布という観点で利用すべき言語資料であることを忘れてはならない。

一方、言語地理学的な調査ではなく、1地点の記述的研究のような場合には、十分に時間をかけて調査するとか、複数の被調査者に当たって回答の異同を確かめるなどの配慮がとくに必要であると考えられる。

参 考 文 献

1. 辛川十歩・柴田武『メダカ乃方言』（1980, 未央社）
2. 柴田武「オタマジャクシの言語地理学」（『国語学』53, 1963）
3. 佐藤亮一ほか「地域差と場面差——熊本県球磨川沿岸地域における——」（『日本方言研究会第19回発表原稿集』1974）
4. 本堂寛「同一個人のアクセントの変化」（『言語生活』284, 1975）
5. 柴田武・石川恵美子「糸魚川方言の20年間」（『日本方言研究会第24回発表原稿集』1977）
6. 野元菊雄「ことばの誕生と変化」の中の「地震——意味の分担」（徳川宗賢編『日本の方言地図』1979, 中央公論社）

（以上、佐藤亮一・白沢宏枝執筆）

語アクセントの地域差と個人差

——南予地方での事例研究から——

1. 目的と調査の概要

1.1. 目 的

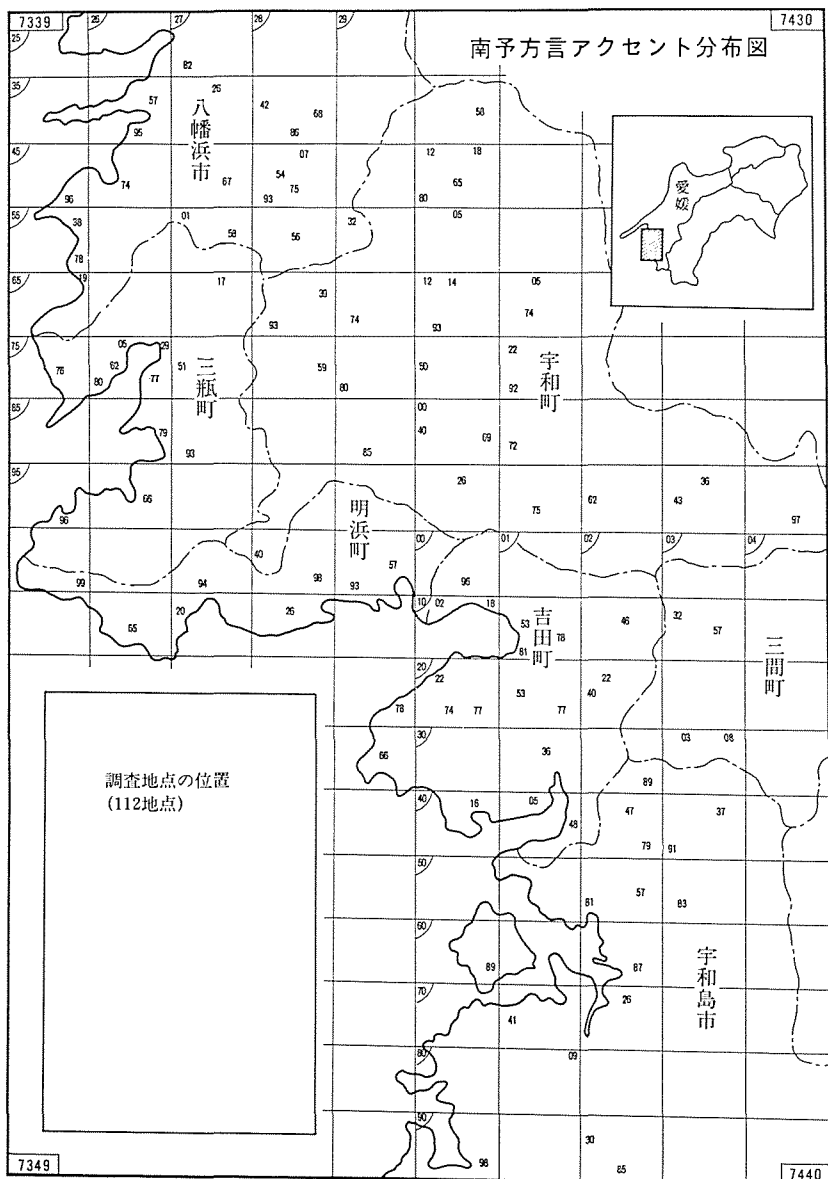
『日本言語地図』で取り上げられた項目の多くは語彙事象を対象としたものであった。その検証調査の一環としてアクセント事象の分布を取り上げることが意外と受けとられるかもしれない。しかし、ここでアクセント事象をあえて扱う理由は、主として、次のようなところにある。

まず、語彙の分布だけではなく、音韻、アクセント項目を対象とする将来の本格的な言語地理学的調査にむけての問題点をさぐる。そして、言語地理学が体系の要素しか扱いえないとする批判に答えて、最初からアクセントの部分体系の分布を取り上げ、各語アクセントの分布状況との関連の中でその解釈を試みる。

フィールドは、さまざまなアクセント体系が隣接して存在すると報告されている(参考文献1, 2など)愛媛県西南部のいわゆる南予地方の一地域である。ここで、具体的に明らかにしたかったのは、

- (1) まず、アクセント体系の分布実態に関してである。当地域には、どのようなアクセント体系が地理的にどのような分布を形成しているのか。それぞれの体系は一本の境界線でもって区画されうるものなのか。その間に緩衝地帯はあるのかないのか。
- (2) また、同じアクセント型の中においても、所属語彙に出入りがあるかどうか。あるとすればそこにはどのような地理的な傾向性が見出されるか。
- (3) 異なった体系が交錯する地帯では、個人差や個人の中での発話ごとの“ゆ

図1. 調査地点の位置 (112地点)



れ” がどの程度に存在し、どのような様相を呈しているのか。

- (4) そして、特に異なったアクセント型が接触する地点において、具体的なアクセントの相に関して、両者の中間的な微妙なピッチ相が観察されうるかどうか。

などの点である。なお、本稿では、対象項目を2拍語の場合にしぼって考察を加えることにする。

1.2. 調査地域・被調査者

1.2.1. 1973(昭和48)年調査について

宇和島市から松山市にかけての地域で予備的な調査を1972年10月24日～26日に行ない、本調査のフィールドを、宇和島市～八幡浜市の範囲112地点(図1参照)と決定した。本調査の期間は1973年2月14日～21日である。調査者は、徳川宗賢(第一研究部方言言語研究室長)、本堂 寛(同室主任研究官)、佐藤亮一(同室研究員)、高田 誠(同)、の4名(所属は調査当時)であった。

被調査者は各地点1名の生え抜きの中学生(昭和32～35年生まれ)とし、下記のそれぞれの中学校で、各校長先生、国語科主任の先生に協力を依頼して、条件に適する生徒を推薦していただいた。

宇和島市立城北中学校	明浜町立明浜西中学校
〃 城南中学校	三瓶町立三瓶東中学校
〃 城東中学校	〃 三瓶北中学校
吉田町立吉田中学校	〃 三瓶南中学校
三間町立三間中学校	八幡浜市立八代中学校
宇和町立宇和中学校	〃 双岩中学校
明浜町立明浜東中学校	〃 真穴中学校

調査地点・被調査者一覧

地点番号	地点	被調査者	性別・所属校	生年	調査者
[7440] (宇和島市)					
32.89	奥高串	中元 正利	男・城北	昭 35	Sat
42.47	徳森	森 和正	男・城北	昭 32	Tak
42.79	家藤	門多 伸治	男・城北	昭 34	Sat
43.37	上光満	三瀬 百合	女・城北	昭 32	Tak
43.91	稲荷	日和佐富美彦	男・城北	昭 33	Tak
52.57	申生田	森田 裕子	女・城北	昭 32	Sat
52.81	大浦	大塚 武司	男・城北	昭 32	Sat
53.83	柿原	三津田 香	女・城北	昭 34	Tak
60.89	本九島	宮本ひとみ	女・城南	昭 33	Tok
62.87	新町	佐々木朝子	女・城南	昭 32	Tok
71.41	白浜	田村やえみ	女・城南	昭 33	Tok
72.26	御殿町	宮田 新介	男・城南	昭 32	Tok
81.09	寄松	田中 恵子	女・城東	昭 34	Hon
90.98	千代浦	宮下 一洋	男・城東	昭 34	Hon
92.30	石丸	三浦 淑美	女・城東	昭 34	Hon
92.85	阿瀬部	稲葉 謙二	男・城東	昭 34	Hon
[7349] (北宇和郡吉田町)					
29.78	惣代	山口 裕子	女・吉田	昭 34	Sat
39.66	中浦	川上 金彦	男・吉田	昭 33	Hon
[7440]					
00.96	宮之浦	木下まゆみ	女・吉田	昭 34	Hon
10.02	深浦	高田 豊志	男・吉田	昭 33	Tok
10.18	与村井	清家 素子	女・吉田	昭 33	Tak
11.53	奥	延永 芳則	男・吉田	昭 33	Hon
11.78	中之谷	毛利 幸枝	女・吉田	昭 34	Hon
11.81	先新浜	坂本 久子	女・吉田	昭 33	Hon
12.46	大河内	薬師寺扶美	女・吉田	昭 33	Tak
20.22	筋	木夏まゆみ	女・吉田	昭 33	Tok
20.74	檢校谷	大奥いづみ	女・吉田	昭 34	Hon
20.77	東蓮寺	清家美弥子	女・吉田	昭 33	Tak
21.53	鳥首	清家 須美	女・吉田	昭 35	Tok
21.77	医王寺下	赤松 健次	男・吉田	昭 33	Sat
22.22	中組	清家 成二	男・吉田	昭 33	Hon
22.40	下白井谷	谷本まゆみ	女・吉田	昭 35	Tok
31.36	大工町	大町 増美	女・吉田	昭 34	Sat
40.16	立目	平田ひふみ	女・吉田	昭 33	Tak
41.05	鶴間	松浦 康仁	男・吉田	昭 33	Hon
41.48	知永	伊藤 栄枝	女・吉田	昭 33	Sat
(北宇和郡三間町)					
13.32	則	古谷 富美	女・三間	昭 34	Tok
13.57	大藤	田中 秀喜	男・三間	昭 33	Tok
33.03	是能	二宮 町子	女・三間	昭 33	Tok
33.08	宮野下	高月 伸一	男・三間	昭 34	Tok

地点番号	地点	被調査者	性別・所属校	生年	調査者
[7339] (東宇和郡宇和町)					
68.39	岩木	清家 加代	女・宇和	昭 33	Tak
68.93	郷内	片山 慎二	男・宇和	昭 33	Tok
69.74	内小原	萩尾 博司	男・宇和	昭 34	Sat
78.59	西山田	新田美智子	女・宇和	昭 34	Tak
79.80	山田	中嶋 唯雄	男・宇和	昭 33	Tak
89.85	野田	河野 淳	男・宇和	昭 34	Sat
[7349]					
08.40	仁土	今泉 ふみ	女・宇和	昭 33	Tak
[7430]					
30.58	正信	佐々木 勝	男・宇和	昭 33	Sat
40.12	河内	清水 洋子	女・宇和	昭 33	Tok
40.18	信里	堀本利由子	女・宇和	昭 34	Tak
40.65	町	清家 峰男	男・宇和	昭 33	Tak
40.80	岡山	松岡美奈子	女・宇和	昭 34	Tok
50.05	瀬戸	門多 美鈴	女・宇和	昭 34	Hon
60.12	田苗	福井 文子	女・宇和	昭 34	Tok
60.14	真土	牧野 浩一	男・宇和	昭 33	Hon
60.93	下坂戸	田村 康隆	男・宇和	昭 33	Tak
61.05	田野中	和気 安博	男・宇和	昭 33	Sat
61.74	常定寺	大塚 健二	男・宇和	昭 33	Sat
70.50	永長	一柳 茂子	女・宇和	昭 33	Tak
71.22	新城	上甲まさみ	女・宇和	昭 34	Tok
71.92	明石	松浦 加奈	女・宇和	昭 34	Sat
80.00	久枝	細川 善男	男・宇和	昭 34	Sat
80.40	別所	竹中 久恵	女・宇和	昭 33	Hon
80.69	鬼窪	山本 健二	男・宇和	昭 33	Hon
81.72	穂生上	上甲 基喜	男・宇和	昭 34	Hon
90.26	伊賀上	松本 信之	男・宇和	昭 33	Hon
91.75	下組	松本 雅年	男・宇和	昭 33	Tok
92.62	下川	三好 香澄	女・宇和	昭 33	Sat
93.36	四道	兵頭美知代	女・宇和	昭 34	Sat
93.43	岡山	兵頭 康次	男・宇和	昭 33	Tok
94.97	板が谷	佐藤 稔二	男・宇和	昭 34	Sat
[7349] (東宇和郡明浜町)					
05.99	田之浜	中西奈津美	女・明浜西	昭 35	Tak
07.94	高山	浜田 増人	男・明浜西	昭 35	Tak
08.98	枝浦	三好あおい	女・明浜東	昭 32	Sat
09.57	脇	中村 淳子	女・明浜東	昭 33	Sat
09.93	渡江	酒井美千代	女・明浜東	昭 32	Sat
16.65	岩井	高間 染香	女・明浜西	昭 34	Tak
17.20	宮野浦	中村 素嗣	男・明浜西	昭 34	Tak
18.26	本浦	宇都宮敏美	女・明浜東	昭 32	Sat
[7339] (西宇和郡三瓶町)					

地点番号	地点	被調査者	性別・所属校	生年	調査者	地点番号	地点	被調査者	性別・所属校	生年	調査者
67.17	和泉	井上 信治	男・三瓶東 昭 34	Hon		38.42	牛名	脇水 鈴子	女・八代 昭 33	Tak	
75.76	周木	浅岡みつよ	女・三瓶北 昭 33	Sat		38.68	矢野畑	窪田 勝彦	男・双岩 昭 33	Sat	
76.05	垣生	曾我 巧	男・三瓶北 昭 33	Sat		38.86	日之地	菊池 功一	男・双岩 昭 34	Tok	
76.29	朝立	菊池 茂守	男・三瓶東 昭 34	Hon		45.96	大釜	片山多喜子	女・双岩 昭 33	Tok	
76.62	二及	磯崎 清光	男・三瓶北 昭 34	Sat		46.74	川名津	和田 幸正	男・八代 昭 33	Hon	
76.77	有網代	宮本みゆき	女・三瓶東 昭 33	Hon		47.67	布喜川	井上美智子	女・八代 昭 34	Tak	
76.80	長早	大橋 泰子	女・三瓶北 昭 35	Sat		48.07	午地	井上 光江	女・双岩 昭 33	Tok	
77.51	津布理	石見 恵美	女・三瓶東 昭 32	Hon		48.54	水の元	井上 晴司	男・双岩 昭 32	Tok	
86.79	蔵貫浦	三好 房子	女・三瓶南 昭 33	Tak		48.75	若山	中井 誠	男・双岩 昭 33	Sat	
87.93	蔵貫村	河野 泰正	男・三瓶南 昭 33	Tak		48.93	岡野地	菊地 直美	女・双岩 昭 34	Tok	
95.96	下泊	藤井いく子	女・三瓶南 昭 33	Tak		55.38	真網代	岡良 文人	男・真穴 昭 33	Tok	
96.66	皆江	岩村右左司	男・三瓶南 昭 34	Tak		55.78	小網代	奥田 雅子	女・真穴 昭 33	Tok	
	(八幡浜市)					57.01	横平	撰津 恵子	女・八代 昭 33	Hon	
27.82	新町	森内 緑	女・八代 昭 33	Hon		57.58	谷	菊地 仁志	男・双岩 昭 33	Sat	
36.57	舌間	大石 真三	男・八代 昭 34	Tak		58.56	東	井上美穂子	女・双岩 昭 33	Sat	
36.95	合田	浜田 佐智	女・八代 昭 33	Hon		59.32	鳥越	菅 生一	男・宇和 昭 34	Tok	
37.26	徳雲坊	穂積 晴彦	男・八代 昭 33	Tak		65.19	穴井	井上 紀美	女・真穴 昭 33	Tok	

(ゴシックの地点番号は 1975 年の集中調査でも対象にした地点。調査者の略称は Tok=徳川, Hon=本堂, Sat=佐藤, Tak=高田)

1.2.2. 1975 (昭和 50) 年調査について

1973 年調査で明らかにされた各アクセント体系のそれぞれの領域から、代表地点 12 か所（上掲「調査地点・被調査者一覧」参照）を選び、各 9 名ずつの被調査者を対象に調査を実施した。期間は 9 月 8 日～19 日である。被調査者は、前回同様、生え抜きの中学生（昭和 35～38 年生まれ）で、当地の各中学校にお願いして選定していただいた。また、そのほかにそれぞれの地点の老年層各 1 名を対象としての補充的な調査も行なった。調査者は、佐藤亮一（言語変化研究部第一研究室長）、真田信治（同室研究員）、杉戸清樹（言語行動研究部第一研究室研究員）のほか、調査協力者として参加した下野雅昭（東北大学大学院生）の 4 名（所属は調査当時）である。なお、ここでは、本稿で取り扱う地点のもののみを掲げる。

地点番号	地点	被調査者	性別・所属校	生年	調査者
7440 (宇和島市旧市内)					
62.87	新町	岩永 妙	女・城南	昭36	Sat
	御幸町	浅田三千代	女・城南	昭37	Sug
	御幸町	山田 芳生	男・城南	昭35	Sug
	丸の内	武田 薫	女・城南	昭37	Sug
	榊形町	兵頭 美紀	女・城南	昭37	San
	榊形町	渡辺 誠	男・城南	昭38	Sat
	恵美須町	来留島陽子	女・城南	昭36	San
	恵美須町	石崎 裕子	女・城南	昭36	San
	寿町	岡村 厚志	男・城南	昭36	Sat
7440 (吉田町旧町内)					
31.36	裡町	清家 千鶴	女・吉田	昭36	San
	西小路	河野あづき	女・吉田	昭37	Sat
	元町	川村智栄美	女・吉田	昭36	Sat
	元町	鉢 長大	男・吉田	昭37	Sim
	元町	松川 宏生	男・吉田	昭36	Sug
	魚棚	芝 恭仁	男・吉田	昭36	Sug
	東小路	清家 邦弘	男・吉田	昭36	Sug
	東小路	稲垣三季子	女・吉田	昭36	Sug
	本町	加賀山容子	女・吉田	昭36	Sug
7440 (三間町宮野下地区)					
33.08	宮野下	土居季代美	女・三間	昭35	Sug
	宮野下	松本みどり	女・三間	昭36	Sug
	宮野下	赤松 甲一	男・三間	昭38	Sug
	宮野下	善家 清美	女・三間	昭36	San
	宮野下	二宮 芳継	男・三間	昭35	San
	宮野下	兵頭 正伸	男・三間	昭38	San
	宮野下	黒田 高司	男・三間	昭35	Sat
	宮野下	佐藤 明	男・三間	昭37	Sat
	宮野下	芝 琴美	女・三間	昭37	Sat
7430 (宇和町久枝地区)					

地点番号	地点	被調査者	性別・所属校	生年	調査者
80.00	久枝	松山 紀彦	男・宇和	昭36	Sat
	久枝	富永 昌代	女・宇和	昭37	Sat
	久枝	加賀山紀子	女・宇和	昭37	Sat
	久枝	松山 美鈴	女・宇和	昭37	Sat
	久枝	佐々木雅弘	男・宇和	昭37	San
	久枝	大竹 幸代	女・宇和	昭36	San
	久枝	松山ひろ子	女・宇和	昭36	San
	卯之町	中村浩一郎	男・宇和	昭37	Sat
	卯之町	門田 美恵	女・宇和	昭36	Sat
7349 (明浜町高山地区)					
07.94	高山	菅沼真之助	男・明浜西	昭35	Sim
	高山	公受 伸之	男・明浜西	昭37	Sim
	高山	宇都宮佳代	女・明浜西	昭35	Sug
	高山	川上とき子	女・明浜西	昭35	Sug
	高山	鬼生田覚蔵	男・明浜西	昭36	San
	高山	益田 志保	女・明浜西	昭36	San
	高山	山本和佳子	女・明浜西	昭37	San
	高山	松田 譲二	男・明浜西	昭36	Sat
	高山	中広伊勢男	男・明浜西	昭35	Sat
7339 (八幡浜市旧市内)					
27.82	新町	菊地 美枝	女・八代	昭38	Sat
	矢野町	矢野 和美	女・八代	昭35	San
	大黒町	河野 都	女・八代	昭36	San
	大黒町	山本 由紀	女・八代	昭35	San
	大黒町	松代 宏美	女・八代	昭35	Sat
	大黒町	菊地 聖	男・八代	昭35	Sat
	下道	川本 浩美	女・八代	昭35	Sim
	新川通	森田 美穂	女・八代	昭38	Sim
	広瀬	永田 浩	男・八代	昭36	Sim

(調査者の略称はSat-佐藤, San-真田, Sug-杉戸, Sim-下野)

1.3. 調査項目・調査方法

調査は、調査者が各中学校に被調査者を訪ね、校内の一室で直接対話（発話収録）する形で行なった。

調査票の形式は1973年調査と1975年調査とで若干異なるが、ここでは、1975年調査で使用した面接調査票のうち、本稿での分析の対象にする部分について

の項目を示す。

○これから、あなたがふだん話するとき使っている、ことばの調子、ことばの高低^{たかひく}をうかがいます。ふだん話するときの調子で次のことばや文句を言ってみてください。〈順次リスト（絵）提示〉

- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| 1 鼻 ^{はな} 、鼻がたかい | 21 鳥 ^{とり} 、鳥がとぶ |
| 2 旗 ^{はた} 、旗があがる | 22 歌 ^{うた} 、歌がうまい |
| 3 花 ^{はな} 、花がさく | 23 池 ^{いけ} 、池がおおる |
| 4 肩 ^{かた} 、肩がいたむ | 24 糸 ^{いと} 、糸がきれる |
| 5 鶴 ^{つる} 、鶴がとぶ | 25 蜘蛛 ^{くも} 、蜘蛛がいる |
| 6 桃 ^{もも} 、桃がなる | 26 柿 ^{かき} 、柿がおちる |
| 7 川 ^{かわ} 、川がながれる | 27 夏 ^{なつ} 、夏がくる |
| 8 山 ^{やま} 、山がみえる | 28 雲 ^{くも} 、雲がきれる |
| 9 傘 ^{かさ} 、傘がない | 29 針 ^{はり} 、針がうごく |
| 10 窓 ^{まど} 、窓がひろい | 30 春 ^{はる} 、春がくる |
| 11 風 ^{かぜ} 、風がつよい | 31 水 ^{みず} 、水がのみたい |
| 12 音 ^{おと} 、音がきこえる | 32 冬 ^{ふゆ} 、冬がくる |
| 13 耳 ^{みみ} 、耳がながい | 33 足 ^{あし} 、足がつよい |
| 14 息 ^{いき} 、息がくるしい | 34 松 ^{まつ} 、松がある |
| 15 汗 ^{あせ} 、汗がながれる | 35 秋 ^{あき} 、秋がくる |
| 16 枝 ^{えだ} 、枝がおれる | 36 牛 ^{うし} 、牛がなく |
| 17 石 ^{いし} 、石がある | 37 雪 ^{ゆき} 、雪がふる |
| 18 色 ^{いろ} 、色がうすい | 38 犬 ^{いぬ} 、犬がはしる |
| 19 空 ^{そら} 、空があおい | 39 海 ^{うみ} 、海があれる |
| 20 雨 ^{あめ} 、雨がふる | 40 猿 ^{さる} 、猿がいる |

今と同じことばや文句ですが、はじめからもう一度言ってみてください。

〈順次リスト（絵）提示〉

同 上

恐れ入りますが、もう一度だけはじめから言ってみてください。これで

しまいですから。〈順次リスト（絵）提示〉

同 上

以上のように、それぞれの項目について、三度ずつ発話してもらったわけである。途中いわゆる棒読みになったと思われる場合にはその都度ふだん話するときの調子で言うよう注意し、改めて発話してもらうことにした。その過程、および今回は記述を割愛したが、アクセントの弁別意識をめぐっての調査過程などはすべてテープに収録されている。

2. 考察と結果

2.1. 資料の作成・資料の性格

被調査者の発話を収録したテープは真田が1人で全部の聴き取りを行ない、記入用紙に各項目の各回の発話ごとのアクセントを記入した。その際の仕様は、例えば、次のようである。

カゼ	カゼガ	カサ	カサガ
カゼ	カゼガ	カサ	カサガ
カゼ	カゼガ	カサ	カサガ

聴き取り、記入に当たっては、それぞれの項目の問題の名詞（＋助詞ガ）部分のアクセントだけに注意し、後続の動詞、形容詞の部分のアクセントは無視した。なお、聴き取りを行なうのを1人に限ったのは、アクセント判定の基準をできるだけ一定に保とうとしたからである。聴き取りの初期の段階で複数の者が同時に聴き取って、その個人差をみるテストなども試みたが、その結果ではかなりのばらつきが認められた。やはり、ややかたよりはあるにしても、1人の基準で通す方が一定した判定ができると考えるのである。ただし、現実には、1人では判定に迷うような箇所がいくつかあった。最終的には真田の判断によったが、厳密に再点検すれば、若干の聴き取りの誤りもあるかと思われる。そのことについておことわりをしておきたい。

なお、以下の記述では、聴き取った音相を二段階の相対的な高低に整理した形で示す。

2.2. 代表5地点におけるアクセント相

対象地域の2拍語に関するアクセントの種々相を総合した結果、以下に示すような5つのパターンを帰納することができた。

この各パターンに、その主たる使用地域の名を与えて、それぞれ、

(ア) 宇和島式アクセント

(イ) 吉田町式アクセント

(ウ) 八幡浜式アクセント

(エ) 明浜町式アクセント

(オ) 宇和町式アクセント

と呼ぶことにする。

次に、それぞれのアクセント相について解説しよう。

(ア) 宇和島式アクセント

ここでは、宇和島市旧市内での被調査者（昭和36年生まれ・女性）から得た資料を代表として掲げる（表1）。

表中、発話順の1, 2, 3はそれぞれ、第1～3発話を表わす。また、I～Vの語類の別ごとにそれぞれの標準音相（ここでは頻度数の最も多い音相のことを指す）を示した。

このアクセント体系は、型の上でも、また、各型に所属する語彙についても、標準語としての東京アクセントの場合と同様である。特に第III類に属する「雲」のアクセント形が他の語群と異なって頭高の形〔 $\bar{O}O \sim \bar{O}O \triangleright$ 〕になっていることが注目されよう。この語は東京や広島などのアクセントでも例外となっているもので、その連関が極めて興味深いのである。

(イ) 吉田町式アクセント

ここでは、北宇和郡吉田町宮之浦での被調査者（昭和36年生まれ・女性）から得た資料を代表として掲げる（表2）。

表2の図表化の手順は上の表1の場合と同様である。

このアクセントでは、第I類に属する語の相は上掲の(ア)宇和島式とほぼ同じであるが、第I類以外の語群はいずれもその相を異にしている。すなわち、第II～V類に属する語は、語単独の場合にはすべて頭高〔 $\bar{O}O$ 〕で発音される

表 1. 宇和島式アクセント (宇和島市旧市内, 昭 36 生・女)

語類 発音順		I			II			III			IV			V	
1		ハナ	ハナガ		ハタ	ハタガ		ハナ	ハナガ		カタ	カタガ		ツル	ツルガ
2	鼻	ハナ	ハナガ	旗	ハタ	ハタガ	花	ハナ	ハナガ	肩	カタ	カタガ	鶴	ツル	ツルガ
3		ハナ	ハナガ		ハタ	ハタガ		ハナ	ハナガ		カタ	カタガ		ツル	ツルガ
1		モモ	モモガ		カワ	カワガ		ヤマ	ヤマガ		カサ	カサガ		マド	マドガ
2	桃	モモ	モモガ	川	カワ	カワガ	山	ヤマ	ヤマガ	傘	カサ	カサガ	窓	マド	マドガ
3		モモ	モモガ		カワ	カワガ		ヤマ	ヤマガ		カサ	カサガ		マド	マドガ
1		カゼ	カゼガ		オト	オトガ		ミミ	ミミガ		イキ	イキガ		アセ	アセガ
2	風	カゼ	カゼガ	音	オト	オトガ	耳	ミミ	ミミガ	息	イキ	イキガ	汗	アセ	アセガ
3		カゼ	カゼガ		オト	オトガ		ミミ	ミミガ		イキ	イキガ		アセ	アセガ
1		エダ	エダガ		イシ	イシガ		イロ	イロガ		ソラ	ソラガ		アメ	アメガ
2	枝	エダ	エダガ	石	イシ	イシガ	色	イロ	イロガ	空	ソラ	ソラガ	雨	アメ	アメガ
3		エダ	エダガ		イシ	イシガ		イロ	イロガ		ソラ	ソラガ		アメ	アメガ
1		トリ	トリガ		ウタ	ウタガ		イケ	イケガ		イト	イトガ		クモ	クモガ
2	鳥	トリ	トリガ	歌	ウタ	ウタガ	池	イケ	イケガ	糸	イト	イトガ	蜘蛛	クモ	クモガ
3		トリ	トリガ		ウタ	ウタガ		イケ	イケガ		イト	イトガ		クモ	クモガ
1		カキ	カキガ		ナツ	ナツガ		クモ	クモガ		ハリ	ハリガ		ハル	ハルガ
2	柿	カキ	カキガ	夏	ナツ	ナツガ	雲	クモ	クモガ	針	ハリ	ハリガ	春	ハル	ハルガ
3		カキ	カキガ		ナツ	ナツガ		クモ	クモガ		ハリ	ハリガ		ハル	ハルガ
1		ミズ	ミズガ		フユ	フユガ		アシ	アシガ		マツ	マツガ		アキ	アキガ
2	水	ミズ	ミズガ	冬	フユ	フユガ	足	アシ	アシガ	松	マツ	マツガ	秋	アキ	アキガ
3		ミズ	ミズガ		フユ	フユガ		アシ	アシガ		マツ	マツガ		アキ	アキガ
1		ウシ	ウシガ		ユキ	ユキガ		イヌ	イヌガ		ウミ	ウミガ		サル	サルガ
2	牛	ウシ	ウシガ	雪	ユキ	ユキガ	犬	イヌ	イヌガ	海	ウミ	ウミガ	猿	サル	サルガ
3		ウシ	ウシガ		ユキ	ユキガ		イヌ	イヌガ		ウミ	ウミガ		サル	サルガ
	*	〇〇	〇〇▷	*	〇〇	〇〇▷	*	〇〇	〇〇▷	*	〇〇	〇〇▷	*	〇〇	〇〇▷

* 標準音相 (各類の中で頻度数の最も多い音相)

表 2. 吉田町式アクセント (吉田町宮之浦, 昭 36 生・女)

国語 発語順	I			II			III			IV			V		
1		ハナ	ハナガ		ハタ	ハタガ		ハナ	ハナガ		カタ	カタガ		ツル	ツルガ
2	鼻	ハナ	ハナガ	旗	ハタ	ハタガ	花	ハナ	ハナガ	肩	カタ	カタガ	鶴	ツル	ツルガ
3		ハナ	ハナガ		ハタ	ハタガ		ハナ	ハナガ		カタ	カタガ		ツル	ツルガ
1		モモ	モモガ		カワ	カワガ		ヤマ	ヤマガ		カサ	カサガ		マド	マドガ
2	桃	モモ	モモガ	川	カワ	カワガ	山	ヤマ	ヤマガ	傘	カサ	カサガ	窓	マド	マドガ
3		モモ	モモガ		カワ	カワガ		ヤマ	ヤマガ		カサ	カサガ		マド	マドガ
1		カゼ	カゼガ		オト	オトガ		ミミ	ミミガ		イキ	イキガ		アセ	アセガ
2	風	カゼ	カゼガ	音	オト	オトガ	耳	ミミ	ミミガ	息	イキ	イキガ	汗	アセ	アセガ
3		カゼ	カゼガ		オト	オトガ		ミミ	ミミガ		イキ	イキガ		アセ	アセガ
1		エダ	エダガ		イシ	イシガ		イロ	イロガ		ソラ	ソラガ		アメ	アメガ
2	枝	エダ	エダガ	石	イシ	イシガ	色	イロ	イロガ	空	ソラ	ソラガ	雨	アメ	アメガ
3		エダ	エダガ		イシ	イシガ		イロ	イロガ		ソラ	ソラガ		アメ	アメガ
1		トリ	トリガ		ウタ	ウタガ		イケ	イケガ		イト	イトガ	蜘蛛	クモ	クモガ
2	鳥	トリ	トリガ	歌	ウタ	ウタガ	池	イケ	イケガ	糸	イト	イトガ		クモ	クモガ
3		トリ	トリガ		ウタ	ウタガ		イケ	イケガ		イト	イトガ		クモ	クモガ
1		カキ	カキガ		ナツ	ナツガ		クモ	クモガ		ハリ	ハリガ		ハル	ハルガ
2	柿	カキ	カキガ	夏	ナツ	ナツガ	雲	クモ	クモガ	針	ハリ	ハリガ	春	ハル	ハルガ
3		カキ	カキガ		ナツ	ナツガ		クモ	クモガ		ハリ	ハリガ		ハル	ハルガ
1		ミズ	ミズガ		フユ	フユガ		アシ	アシガ		マツ	マツガ		アキ	アキガ
2	水	ミズ	ミズガ	冬	フユ	フユガ	足	アシ	アシガ	松	マツ	マツガ	秋	アキ	アキガ
3		ミズ	ミズガ		フユ	フユガ		アシ	アシガ		マツ	マツガ		アキ	アキガ
1		ウシ	ウシガ		ユキ	ユキガ		イヌ	イヌガ		ウミ	ウミガ		サル	サルガ
2	牛	ウシ	ウシガ	雪	ユキ	ユキガ	犬	イヌ	イヌガ	海	ウミ	ウミガ	猿	サル	サルガ
3		ウシ	ウシガ		ユキ	ユキガ		イヌ	イヌガ		ウミ	ウミガ		サル	サルガ
*		〇〇	〇〇▷	*	〇〇	〇〇▷	*	〇〇	〇〇▷	*	〇〇	〇〇▷	*	〇〇	〇〇▷

* 標準音相 (各類の中で頻度数の最も多い音相)

が、助詞が付加した形式の場合にはすべて中高〔 $\circ\bar{o}\triangleright$ 〕に形を変えて発音されるという特徴が認められる。なお、どの類にも第1～3の発話間で若干の“ゆれ”を示す語が存在することも指摘しておきたい。

(ウ) 八幡浜式アクセント

ここでは、八幡浜市旧市内での被調査者（昭和35年生まれ・女性）から得た資料を代表として掲げる（表3）。

図表化の手順は表1、表2の場合と同様である。

このアクセントで注目されるのは、大部分の語において、語単独の相と助詞を付けた場合の相とが形を変えることである。すなわち、語単独の形が〔 $\bar{o}\circ$ 〕であれば、助詞を付けた形は〔 $\circ\bar{o}\triangleright$ 〕に、また、前者が〔 $\circ\bar{o}$ 〕であれば、後者は〔 $\circ\circ\triangleright$ 〕のように、いずれも高い部分が1拍ずつずれるのである。これは、いわゆる“N型アクセント”の相である。

なお、第IV類に属する語は、かなりの“ゆれ”を見せつつも多くのものが第I類と同じ〔 $\circ\bar{o}\sim\circ\circ\triangleright$ 〕形を示し、第II・III類および第V類の主形〔 $\bar{o}\circ\sim\circ\bar{o}\triangleright$ 〕と対立していることが認められる。従来、このアクセントがいわゆる京阪式アクセントに準ずるものとして分類されてきたのは、主としてこの第IV類と第V類における対立の存在を根拠としてのことと考えられる。

(エ) 明浜町式アクセント

ここでは、東宇和郡明浜町高山での被調査者（昭和35年生まれ・女性）から得た資料を代表として掲げる（表4）。

図表化の手順は表1～3の場合と同様である。

このアクセントの特徴は、第II・III類に属する語について、語単独の場合に拍内下降の相（2拍目で上がり、拍の途中で下がる形）が認められることである。すなわち、例えば、「花」は〔 $\circ\bar{o}\sim\circ\bar{o}\triangleright$ 〕のように発音される。ただし、この第II・III類の語には頭高形のものも存在する。一方、第I類および第IV・V類に属する語は高い部分を1拍ずらす〔 $\circ\bar{o}\sim\circ\circ\triangleright$ 〕形にほぼ統合して第II・III類の語群と対立している。なお、この〔 $\circ\bar{o}\sim\circ\circ\triangleright$ 〕形は、先に見た八幡浜式アクセントでの第I・IV類における主形と一致するものである。

(オ) 宇和町式アクセント

表 3. 八幡浜式アクセント (八幡浜市旧市内, 昭 35 生・女)

発語順	語類	I		II		III		IV		V	
1		ハナ	ハナガ	ハタ	ハタガ	ハナ	ハナガ	カタ	カタガ	ツル	ツルガ
2	鼻	ハナ	ハナガ	旗	ハタ	花	ハナ	肩	カタ	鶴	ツルガ
3		ハナ	ハナガ		ハタ		ハナ		カタ		ツルガ
1		モモ	モモガ		カワ		ヤマ		カサ		マド
2	桃	モモ	モモガ	川	カワ	山	ヤマ	傘	カサ	窓	マド
3		モモ	モモガ		カワ		ヤマ		カサ		マド
1		カゼ	カゼガ		オト		ミミ		イキ		アセ
2	風	カゼ	カゼガ	音	オト	耳	ミミ	息	イキ	汗	アセ
3		カゼ	カゼガ		オト		ミミ		イキ		アセ
1		エダ	エダガ		イシ		イロ		ソラ		アメ
2	枝	エダ	エダガ	石	イシ	色	イロ	空	ソラ	雨	アメ
3		エダ	エダガ		イシ		イロ		ソラ		アメ
1		トリ	トリガ		ウタ		イケ		イト		クモ
2	鳥	トリ	トリガ	歌	ウタ	池	イケ	糸	イト	蜘蛛	クモ
3		トリ	トリガ		ウタ		イケ		イト		クモ
1		カキ	カキガ		ナツ		クモ		ハリ		ハル
2	柿	カキ	カキガ	夏	ナツ	雲	クモ	針	ハリ	春	ハル
3		カキ	カキガ		ナツ		クモ		ハリ		ハル
1		ミズ	ミズガ		フユ		アシ		マツ		アキ
2	水	ミズ	ミズガ	冬	フユ	足	アシ	松	マツ	秋	アキ
3		ミズ	ミズガ		フユ		アシ		マツ		アキ
1		ウシ	ウシガ		ユキ		イヌ		ウミ		サル
2	牛	ウシ	ウシガ	雪	ユキ	犬	イヌ	海	ウミ	猿	サル
3		ウシ	ウシガ		ユキ		イヌ		ウミ		サル
*		〇〇	〇〇▷	*		〇〇	〇〇▷	*		〇〇	〇〇▷

* 標準音相 (各語の中で頻度数の最も多い音相)

表 4. 明浜町式アクセント (明浜町高山, 昭 35 生・女)

語類 発話順	I			II			III			IV			V		
1		ハナ	ハナガ		ハタ	ハタガ		ハチ	ハチガ		カタ	カタガ		ツル	ツルガ
2	鼻	ハナ	ハナガ	旗	ハタ	ハタガ	花	ハチ	ハチガ	肩	カタ	カタガ	鶴	ツル	ツルガ
3		ハナ	ハナガ		ハタ	ハタガ		ハチ	ハチガ		カタ	カタガ		ツル	ツルガ
1		モモ	モモガ		カワ	カワガ		ヤマ	ヤマガ		カサ	カサガ		マド	マドガ
2	桃	モモ	モモガ	川	カワ	カワガ	山	ヤマ	ヤマガ	傘	カサ	カサガ	窓	マド	マドガ
3		モモ	モモガ		カワ	カワガ		ヤマ	ヤマガ		カサ	カサガ		マド	マドガ
1		カゼ	カゼガ		オト	オトガ		ミミ	ミミガ		イキ	イキガ		アセ	アセガ
2	風	カゼ	カゼガ	音	オト	オトガ	耳	ミミ	ミミガ	息	イキ	イキガ	汗	アセ	アセガ
3		カゼ	カゼガ		オト	オトガ		ミミ	ミミガ		イキ	イキガ		アセ	アセガ
1		エダ	エダガ		イシ	イシガ		イロ	イロガ		ソラ	ソラガ		アメ	アメガ
2	枝	エダ	エダガ	石	イシ	イシガ	色	イロ	イロガ	空	ソラ	ソラガ	雨	アメ	アメガ
3		エダ	エダガ		イシ	イシガ		イロ	イロガ		ソラ	ソラガ		アメ	アメガ
1		トリ	トリガ		ウタ	ウタガ		イケ	イケガ		イト	イトガ	蜘蛛	クモ	クモガ
2	鳥	トリ	トリガ	歌	ウタ	ウタガ	池	イケ	イケガ	糸	イト	イトガ		クモ	クモガ
3		トリ	トリガ		ウタ	ウタガ		イケ	イケガ		イト	イトガ		クモ	クモガ
1		カキ	カキガ		ナツ	ナツガ		クモ	クモガ		ハリ	ハリガ		ハル	ハルガ
2	柿	カキ	カキガ	夏	ナツ	ナツガ	雲	クモ	クモガ	針	ハリ	ハリガ	春	ハル	ハルガ
3		カキ	カキガ		ナツ	ナツガ		クモ	クモガ		ハリ	ハリガ		ハル	ハルガ
1		ミズ	ミズガ		フユ	フユガ		アシ	アシガ		マツ	マツガ		アキ	アキガ
2	水	ミズ	ミズガ	冬	フユ	フユガ	足	アシ	アシガ	松	マツ	マツガ	秋	アキ	アキガ
3		ミズ	ミズガ		フユ	フユガ		アシ	アシガ		マツ	マツガ		アキ	アキガ
1		ウシ	ウシガ		ユキ	ユキガ		イヌ	イヌガ		ウミ	ウミガ		サル	サルガ
2	牛	ウシ	ウシガ	雪	ユキ	ユキガ	犬	イヌ	イヌガ	海	ウミ	ウミガ	猿	サル	サルガ
3		ウシ	ウシガ		ユキ	ユキガ		イヌ	イヌガ		ウミ	ウミガ		サル	サルガ
*			〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	*			〇〇	〇〇	〇〇	*		
			〇〇	〇〇	〇〇	〇〇									

* 標準音相 (各類の中で頻度数の最も多い音相)

表 5. 宇和町式アクセント (宇和町河内, 昭 36 生・女)

語類 発語順	I			II			III			IV			V		
1	鼻	ハナ	ハナガ	旗	ハタ	ハタガ	花	ハナ	ハナガ	肩	カタ	カタガ	鶴	ツル	ツルガ
2		ハナ	ハナガ		ハタ	ハタガ		ハナ	ハナガ		カタ	カタガ		ツル	ツルガ
3		ハナ	ハナガ		ハタ	ハタガ		ハナ	ハナガ		カタ	カタガ		ツル	ツルガ
1	桃	モモ	モモガ	川	カワ	カワガ	山	ヤマ	ヤマガ	傘	カサ	カサガ	窓	マド	マドガ
2		モモ	モモガ		カワ	カワガ		ヤマ	ヤマガ		カサ	カサガ		マド	マドガ
3		モモ	モモガ		カワ	カワガ		ヤマ	ヤマガ		カサ	カサガ		マド	マドガ
1	風	カゼ	カゼガ	音	オト	オトガ	耳	ミミ	ミミガ	息	イキ	イキガ	汗	アセ	アセガ
2		カゼ	カゼガ		オト	オトガ		ミミ	ミミガ		イキ	イキガ		アセ	アセガ
3		カゼ	カゼガ		オト	オトガ		ミミ	ミミガ		イキ	イキガ		アセ	アセガ
1	枝	エダ	エダガ	石	イシ	イシガ	色	イロ	イロガ	空	ソラ	ソラガ	雨	アメ	アメガ
2		エダ	エダガ		イシ	イシガ		イロ	イロガ		ソラ	ソラガ		アメ	アメガ
3		エダ	エダガ		イシ	イシガ		イロ	イロガ		ソラ	ソラガ		アメ	アメガ
1	鳥	トリ	トリガ	歌	ウタ	ウタガ	池	イケ	イケガ	糸	イト	イトガ	蜘蛛	クモ	クモガ
2		トリ	トリガ		ウタ	ウタガ		イケ	イケガ		イト	イトガ		クモ	クモガ
3		トリ	トリガ		ウタ	ウタガ		イケ	イケガ		イト	イトガ		クモ	クモガ
1	柿	カキ	カキガ	夏	ナツ	ナツガ	雲	クモ	クモガ	針	ハリ	ハリガ	春	ハル	ハルガ
2		カキ	カキガ		ナツ	ナツガ		クモ	クモガ		ハリ	ハリガ		ハル	ハルガ
3		カキ	カキガ		ナツ	ナツガ		クモ	クモガ		ハリ	ハリガ		ハル	ハルガ
1	水	ミズ	ミズガ	冬	フユ	フユガ	足	アシ	アシガ	松	マツ	マツガ	秋	アキ	アキガ
2		ミズ	ミズガ		フユ	フユガ		アシ	アシガ		マツ	マツガ		アキ	アキガ
3		ミズ	ミズガ		フユ	フユガ		アシ	アシガ		マツ	マツガ		アキ	アキガ
1	牛	ウシ	ウシガ	雪	ユキ	ユキガ	犬	イヌ	イヌガ	海	ウミ	ウミガ	猿	サル	サルガ
2		ウシ	ウシガ		ユキ	ユキガ		イヌ	イヌガ		ウミ	ウミガ		サル	サルガ
3		ウシ	ウシガ		ユキ	ユキガ		イヌ	イヌガ		ウミ	ウミガ		サル	サルガ
*		〇〇	〇〇▷	*		〇〇	〇〇▷	*		〇〇	〇〇▷	*		〇〇	〇〇▷

* 標準音相 (各類の中で頻度数の最も多い音相)

ここでは、東宇和郡宇和町河内での被調査者（昭和 36 年生まれ・女性）から得た資料を代表として掲げる（表 5）。

図表化の手順は先の各表の場合と同様である。

このアクセントには類による区別がほとんど存在しない。どの類に属する語であってもほぼ一律に〔 $\bar{o}o \sim o\bar{o}\triangleright$ 〕の形をとって、いわゆる“一型アクセント”の相を示している。なお、被調査者は意図を持ってこの〔 $\bar{o}o \sim o\bar{o}\triangleright$ 〕形を表出させているわけではないようである。高低に関する弁別意識もかなり曖昧である。

2.3. アクセント型と「類」の統合パターン

上述の代表的な 5 種のアクセント相について、「類」の統合の仕方、およびそれぞれの標準アクセント型（ここでは助詞を付加した場合における頻度の最も高い型）をまとめると表 6 のようになる。

まず、(ア)宇和島式について。このアクセントには、 $oo\triangleright$ 、 $o\bar{o}\triangleright$ 、 $\bar{o}o\triangleright$ の三つの型がある。そして、「類」の統合に関しては、次のように、第Ⅱ・Ⅲ類と第Ⅳ・Ⅴ類とがそれぞれに統合している。

I / Ⅱ・Ⅲ /

Ⅳ・Ⅴ

……(ア)

このアクセントが分布する地点は、宇和島市中央部および吉田町、宇和町の一部などである（図 2）。

次に、(イ)吉田町式、(ウ)

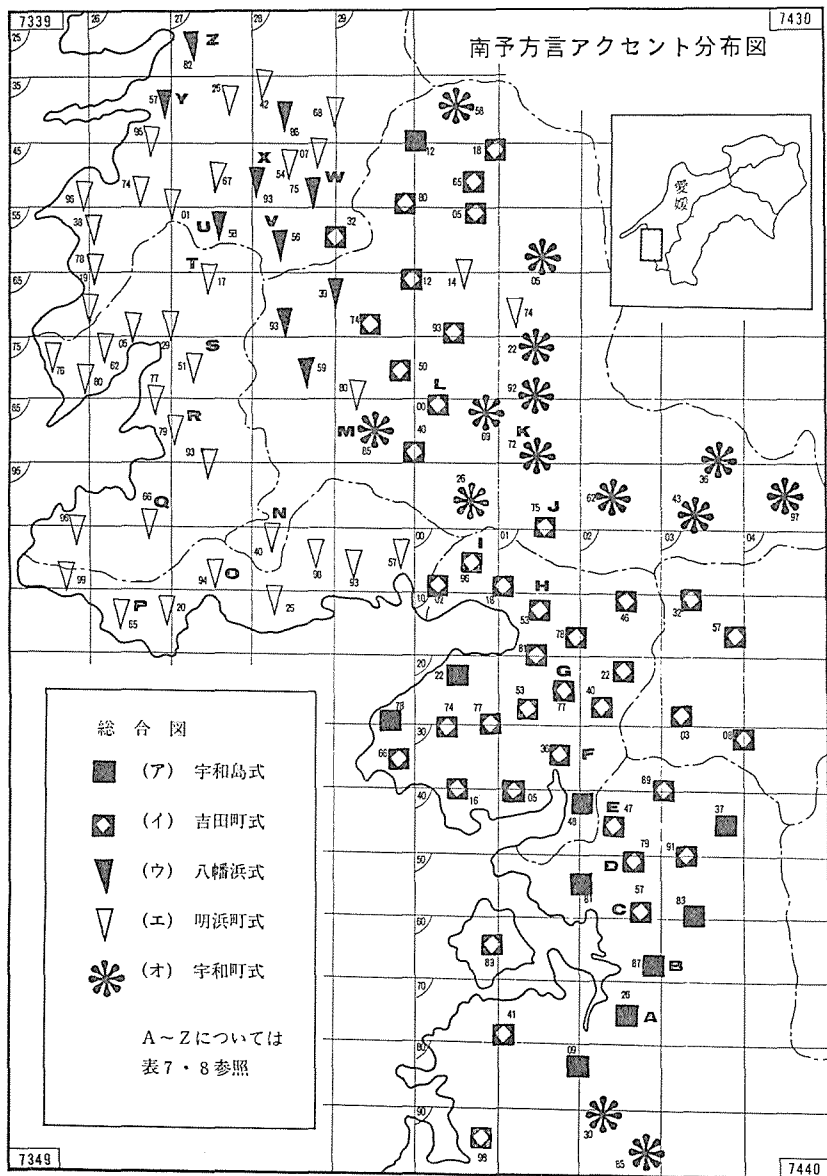
八幡浜式、および(エ)明浜町式について。これらのアクセントでは、いずれも $oo\triangleright$ と $o\bar{o}\triangleright$ の二型が主たる型となっている。「類」の統合に関しては、それぞれ、

表 6. アクセント型と「類」の統合概念図

類 式	I	IV	V	II	III
(ア)	$oo\triangleright$	$\bar{o}o\triangleright$		$oo\bar{o}\triangleright$	
(イ)	$oo\triangleright$		$oo\bar{o}\triangleright$		
(ウ)	$oo\triangleright$		$oo\bar{o}\triangleright$		
(エ)		$oo\triangleright$		$oo\bar{o}\triangleright$	
(オ)			$oo\bar{o}\triangleright$		

注) アクセント型はそれぞれにおける標準的型を示す。

図2. 総合図



I / II・III・IV・V…………(イ)

I・IV / II・III・V…………(ウ)

I・IV・V / II・III…………(エ)

となっており、(イ)の分布する地点は、吉田町を中心として、隣接の三間町、宇和島市の一部、宇和町の一部などである。また、(ウ)が分布する地点は、八幡浜市の一部および八幡浜市に隣接する宇和町の一部である。そして、(エ)が分布する地点は、明浜町と三瓶町の全域および八幡浜市の一部などである（いずれも図2を参照）。

最後に、(オ)宇和町式について。このアクセントは、前述したように、型が一つしかない。このアクセントパターンが分布する地点は宇和町に集中しているが、宇和島市の南部にも若干存在していることが注目される（図2）。

2.4. アクセントの系譜関係

さて、「類」の統合の有様および各式の地理的分布の状況から、その新古関係を推定してみよう。

まず、地理的に接触する(ア)式と(イ)式に関しては、前者がとび離れて分布しているのに対して、後者は比較的連続した分布域を形成している。後者の新しさが推測される。「類」の統合の点からみても、一旦統合したII・III・IV・Vから、再度II・IIIとIV・Vとが分離することは考えにくいのであるから、やはり後者の新しさを指摘することができよう。

そして、(オ)式は(イ)式がさらに変化したもの、すなわち取り残されていたIまでもがII・III・IV・Vにひっぱられた結果の姿と考えられる。この推定は、両式の地理的分布の様相からも支持されるところである。

次に(ウ)式であるが、その領域は狭く、(エ)式の分布域の中に北方からくいこむような状況を呈している。しかし、「類」の統合の仕方からみた場合、(エ)式が(ウ)式に変化したと考えることはできない。統合したI・IV・VからVだけが分離したとするのは不都合だからである。一方また統合したII・III・VからVだけが分離したとすることも不都合である。したがって、両式の祖として

は、次のような形式を考える必要があるように思われる。

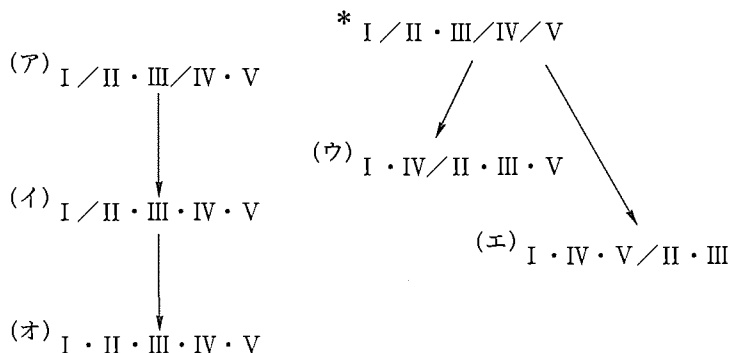
$$* \text{ I } / \text{ II } \cdot \text{ III } / \text{ IV } / \text{ V }$$

実は、この形式は当地の北方、松山市周辺などに現存するものである。その連関が興味深い。

ところで、(エ)式については(ア)式からの変化の流れを推定することも理論的に不可能ではない。しかし、具体的な音相や地理的分布の状況から判断し、やはり(ウ)式と姉妹にする方が妥当のように思われる。

なお、(エ)式、(ウ)式ともに(オ)式へと変化する素地をもっていることを指摘しておきたい。

以上をまとめて、推定した各式の系譜関係の概略を示すと、次のようになる。



2.5. 地理的差異を示す語群のアクセント分布図——“ゆれ”と音相——

前掲表6によれば、第Ⅱ・Ⅲ類に属する語は各地ともに○◇型で一致しており、地点差はない（もちろん、表6はあくまで概略を示したものである。個別に見れば、第Ⅱ・Ⅲ類に属する語にもかなりの出入りがある。その様相については表7、表8などを参照していただきたい）。そこで、以下、地点差のある第Ⅰ類および第Ⅳ・Ⅴ類に属する語群を対象として、それぞれの語の具体的な音相の地理的な分布状況を見ることにしよう。

表 7. アクセントの地点差 (宇和島市～宇和町)

I				IV				V				II				III				類								
ハ	モ	カ	エ	ミ	ウ	カ	イ	ソ	ハ	ワ	ツ	ア	ア	ハ	サ	カ	オ	イ	ウ	フ	ユ	ハ	ミ	イ	ク	アイ	語 例	
ナ	モ	ゼ	グ	リ	キ	ズ	サ	ラ	リ	ツ	ル	ド	セ	キ	タ	ワ	シ	タ	ツ	ユ	ナ	ミ	ロ	ケ	メ	タ		地 点
ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	A
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	字
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	B
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	C
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	D
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	E
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	F
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	G
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	H
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	I
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	J
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	K
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	L
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	M
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ</								

$$\begin{array}{cccccc} \text{●} & [\overline{\text{○}} \text{○} \blacktriangleright] & \text{○} & [\text{○} \overline{\text{○}} \blacktriangleright] & \text{!} & [\text{○} \text{○} \blacktriangleright] \\ \text{●} & [\overline{\text{○}} \text{○} \blacktriangleright] & \text{!} & [\text{○} \overline{\text{○}} \blacktriangleright] & \text{?} & [\text{○} \text{○} \blacktriangleright] \end{array}$$

末尾に掲げた図3～26は、各語についての、発話ごとのパロールとしてのアクセント相を示したものである（各地点とも左から順に第1～3発話での相）。

これら24語の地理的分布を見ると、厳密には、1語として完全に一致するものはないが、大局的には、それぞれの「類」ごとにほぼ似かよった分布模様を示すことを見てとることができる。

発話間の“ゆれ”に関して、ある語の場合に“ゆれ”が多く、ある語の場合に“ゆれ”が少ない、といったような語による極端な差異は認められないようである。ただし、地理的分布の面から見ると、いくつかの興味深い現象を観察することができる。

まず、その第一点は、異なった型の交錯する地域において、特に発話間の“ゆれ”がはげしい（型が不安定になっている）ということである。第二点としては、異なった音形が接触する地域で、微妙なピッチ相の存在が認められるということである。すなわち、特に第Ⅰ類の語群において、 $[\circ\overline{\circ}\triangleright]$ と $[\circ\circ\triangleright]$ との緩衝地帯である明浜町の東部地域に、ピッチ差のない $[\circ\circ\triangleright]$ が集中して分布するという事実がある。また、第Ⅳ・Ⅴ類の語群において、 $[\overline{\circ}\circ\triangleright]$ と $[\circ\overline{\circ}\triangleright]$ との接触地帯に、両形の間隔的な形 $[\overline{\circ}\circ\triangleright]$ が点在している。そして、第三点は、型の判定に迷うようなこの $[\overline{\circ}\circ\triangleright]$ 形が、特に宇和町や宇和島市の南部など、型区別がないアクセント体系の地域において多く認められるということである。

2.6. アクセント移行の実態

ところで、図3～26の各語アクセントの分布図において見られる異なった型の接触地帯での発話間の“ゆれ”（型の不安定性）や型の判定に迷うような微妙な音相の存在などは、先の図2のような総合図においては捨象せざるを得ないもので、見えてはこないものであった。いわゆる“アクセントの移行性分布”（参考文献3）の様相は、あくまで個々の語アクセントの音相の分布の総合の上に把握されうるものである。

そこで、再度図2に目を向け、各式に認定したそれぞれの地点において、個々

の語アクセントがどのような音相を示しているかをまとめて見ることにしたい。

なお、すべての地点を対象とするスペースはここにはないので、一応、便宜的に宇和島市中心部から吉田町を経て宇和町中心部に至る線上の地点A～M、および宇和町から明浜町、三瓶町を経て八幡浜市中心部に至る線上の地点N～Zの計26地点(図2参照)を取り上げ、それぞれでの各語アクセントの音相(上から順に第1～3発話での相)を一括して掲げることとする。

まず、表7について見よう。

このうちのAとBは先の図2において(ア)宇和島式と認定した地点である。また、C～JおよびLは(イ)吉田町式と認定した地点である。そして、K、Mは(オ)宇和町式と認定した地点である。

先にアクセントの系譜関係と地理的分布の状況から、

(ア)→(イ)→(オ)

の流れを推定したが、この表によって、まず第IV・V類の語が、

$\bar{o}o\triangleright > (\bar{o}\bar{o}\triangleright) > o\bar{o}\triangleright$

と漸次に移行している過程、そしてさらに、残された第I類の語が、

$o\bar{o}\triangleright > o\bar{o}\triangleright$

と変化して、第II・III・IV・V類に統合していつている過程をはっきりと見てとることができる。

次に、表8について見よう。

このうちのN～Tは先の図2において(エ)明浜町式と認定した地点である。一方、U～Zは(ウ)八幡浜式と認定した地点である。先に、系譜上から、両式は間接的には繋がっても直接的な先後関係にはないのではないかと推定したが、ここにおいても、両式の対立と接触の様相はつぶさに把握することができるというのは、アクセント移行の方向ははっきりとはうかがうことができないのである。

ところで、両式の差異はいつに第V類の語の所属にかかっている。表8によれば、この第V類の語群の、特に八幡浜市あたりでの型は不安定でかなりに錯

綜した状況にあることがわかる。八幡浜市あたりにおける第Ⅴ類の語の〔○○▷〕形については、あるいは当地に影響を与えている、北方の文化的中心地、松山市などのアクセントからの借用を考えるべきかもしれない。

なお、個別的なことではあるが、第Ⅱ・Ⅲ類に属する語のうちの「冬」「耳」「犬」に関して、明浜町、三瓶町などの一部地点で安定した頭高の形〔○○▷〕が観察されることに留意したい。これらの語は他の語とくらべて音声上その他の共通性を持っているわけではない。これがもし第Ⅱ・Ⅲ類の固有の形に繋がるものと認められればアクセントの系譜上からは興味深いのであるが、今の段階ではその点を明らかにすることができない。

2.7. アクセントの個人差とその地点差

先に個々の語のアクセント相の分布を見ることによって、異なった体系が交錯する地帯では、アクセント型が不安定になることが多いということを指摘してきた。しかし、その資料はあくまで1地点1人の被調査者を対象としてのものであって、それがどの程度にその地点を代表しているものかについてはわからないのであった。特に異なった体系の接触地点では個人的な“ゆれ”も激しいのではないかと予想されるが、一つの地点の内部での個人差の状況はどのようなものなのであろうか。

以下に、いくつかの地点で、属性を同じくする複数の被調査者を対象として実施した1975年調査の結果の一部を報告し、個人的な“ゆれ”の実態とその地点ごとの相違について検討することにしよう。

まず、表9を見ていただきたい。表9は、先に(ア)宇和島式と認定した宇和島市旧市内(7440. 62. 87)における個人差の実態である。なお、この地点は図2および表7でのB地点に対応する。表7では、このうちの被調査者①のアクセントが掲げてある。いくつかの語で発話ごとの“ゆれ”について若干の個人差が観察されるものの、大局的に見れば、この地のアクセントは比較的安定した様相を呈していることが指摘されよう。

次に、表10は、先に(イ)吉田町式と認定した吉田町旧町内(7440. 31. 36)

表 9. 宇和島市旧市内（＝地点B）での個人差

[illegible]

①～⑩ 被調査者

における個人差の実態である。この地点は図2および表7でのF地点で、表7に掲げたのは被調査者①のアクセントである。かなりの個人差が観察される。被調査者⑧⑨⑩などは①と同じ(イ)式と認められるが、④⑤などはむしろ明瞭な(ア)宇和島式アクセントの相を示しているのである。個人の中でも発話ごとの“ゆれ”が多く、型が不安定である。この地点は地理的に見ても、(ア)式と(イ)式とが交錯する地帯に位置している(図2参照)が、このような地点ではその内部の個人差もまた著しいという予測が検証されたわけである。

表11も、やはり(イ)吉田町式と認定した三間町宮野下地区(7440. 33. 08)における個人差の実態である。個人によって、また語によって発話ごとの“ゆれ”がかなり目立つものの、前の表10との比較の上からすれば、この地点のアクセント相は比較的安定していると言うことができよう。地理的分布の上からもこの地点周辺は(イ)式が広く勢力を張っているところである。

さて、表12に注目していただきたい。表12は、宇和町久枝地区(7430. 80. 00)における個人差の実態である。個人ごとの、また発話ごとの“ゆれ”がまことに著しい。この地点は図2および表7でのL地点で、異なった体系がふきだまりのように錯綜して存在する地帯に位置している。なお、表7では被調査者①の(イ)吉田町式と認定したアクセントを掲げてあるが、この表12によれば、被調査者①のアクセント相は、当地点を代表するどころか、まったくの少数派であることがわかる。被調査者⑤⑥などは(ア)宇和島式アクセントの相を示すが、一方で②⑩などは、まさに一型的な(オ)宇和町式アクセントの相を示している。一つの地区において、3種のアクセントがまさに混在しているわけである。なお、これらの被調査者はいずれも当地区の生え抜きである。また、両親の出身地などもこれらに直接の関連はないようである。先に、「類」の統合の仕方および地理的分布の様相から、これら3種のアクセントの歴史的順序を、

(ア) → (イ) → (オ)

と推定したが、その変化過程におけるそれぞれの段階の型が、この地にすべてパックされた形で存在していることがことさらに興味深い。

ところで、ここでもっとも古い型の残存と認められる(ア)宇和島式をめぐっ

表 10. 吉田町旧町内(=地点F)での個人差

I				IV				V				II				III													
ハナ	カモ	エリ	カキ	カミ	ウシ	カサ	イキ	ソラ	ハリ	マツ	ウミ	ツル	マド	アメ	クモ	ハル	サル	ハク	カワ	オシ	ウタ	フエ	ユキ	ヤマ	ミロ	イケ	クモ	アシ	イヌ
(鳥)	(鳥)	(鳥)	(鳥)	(水)	(水)	(鳥)	(鳥)	(鳥)	(鳥)	(鳥)	(鳥)	(鳥)	(鳥)	(鳥)	(蜘蛛)	(春)	(秋)	(鳥)	(鳥)	(山)	(鳥)	(冬)	(鳥)	(山)	(鳥)	(鳥)	(鳥)	(鳥)	(鳥)
↑	○	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			

● [○○▷]
 ○ [○○▷]

○ [○○▷]
 ↑ [○○▷]

↑ [○○▷]
 ↓ [○○▷]

①~⑩ 被調査者

I				IV				V				II				III								
ハナ	モゼ	エトリ	カキ	ウシ	カサ	カイ	ソト	ハツ	マミ	ツマ	アド	クモ	アル	サル	ハク	オシ	ウツ	フユ	ユナ	ヤマ	ミロ	イク	アシ	イヌ
(熊)	(鹿)	(猿)	(鳥)	(牛)	(豚)	(金)	(虫)	(野)	(池)	(草)	(花)	(蜘蛛)	(草)	(猿)	(山)	(石)	(歌)	(冬)	(花)	(山)	(耳)	(池)	(虫)	(大)
ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	ガ
○	○	○	△	○	○	○	○	○	○	○	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
†	†	†	△	†	†	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
†	†	†	†	†	†	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○									

ては若干留意しておかなくてはならないことがある。それは、この(ア)式が、いわゆる標準語アクセントと同じ型であることについてである。ここに現れている(ア)式の中には標準語化によって成立したものもまじっているのではない。実はこの点については当該資料だけでは弁別的手段がないわけである。しかしながら、先の表8などの場合を見ると、標準語の影響はあまり認められないようである。したがって、この地点だけに標準語からの特に強い影響があったとすることは不自然であろう。なお、調査時での主観的な印象からしても、当地区の被調査者にはまだアクセントに関するはっきりとした規範意識が存在しないようであったことを付け加えておきたい。


表13は、先に(エ)明浜町式と認定した明浜町高山地区(7349, 07, 94)における個人差の実態である。この地点は図2および表8での○地点で、表8で掲げたのは被調査者①のアクセントである。被調査者の③や⑩は発話ごとの“ゆれ”が激しい人物であるが、これらの被調査者をのぞけば、この地のアクセントは比較的安定していると言える。第Ⅱ・Ⅲ類に属する「冬」「耳」「犬」の3語が頭高形で安定していることについては先述した。第Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ類での〔○○▷〕〔○○▷〕〔○○▷〕はそれぞれ／○○▷／の異音と認めるべきもののようである。なお、第Ⅴ類の「春」「秋」「猿」に関しては、発話ごとの“ゆれ”を示しつつも、多くの被調査者が頭高形に発音する傾向性が認められる。これは表8においてもすでにうかがわれたことである。

最後に、表14は、先に(ウ)八幡浜式と認定した八幡浜市旧市内(7339, 27, 82)における個人差の実態である。この地点は図2および表8におけるZ地点で、表8では被調査者①のアクセントが掲げてある。①には第Ⅰ・Ⅳ類にピッチ差のない〔○○▷〕形が多く現れているが、これはこの被調査者特有の傾向のようである。この地点で注目されるのは、第Ⅴ類の語群の音形についてである。被調査者①②などの場合は〔○○▷〕形が多く、第Ⅱ・Ⅲ類と統合しているのであるが、全体として見れば、そのようなパターンを持つ人は少数派で、〔○○▷〕形と〔○○▷〕形とが錯綜しつつも、どちらかと言えば〔○○▷〕形をとって第Ⅰ・Ⅳ類と統合している場合が多いのである。これはすなわち(エ)明浜町式のパターンであり、ここに(ウ)八幡浜式の不安定性が指摘されるので

● $[\overline{OO}\triangleright]$ ○ $[\overline{OO}\triangleright]$! $[\overline{OO}\triangleright]$ ①～⑩ 被調査者
● $[\overline{OO}\triangleright]$ | $[\overline{OO}\triangleright]$ / $[\overline{OO}\triangleright]$

表 14. 八幡浜市旧市内 (=地点 Z) での個人差

[illegible]

 $[\overline{\bigcirc\bigcirc}\triangleright]$
 $[\overline{\bigcirc\bigcirc}\triangleright]$

$$\begin{array}{c} \bigcirc \\ | \end{array} \quad \begin{array}{c} [\overline{\bigcirc\bigcirc\triangleright}] \\ [\overline{\bigcirc\bigcirc\triangleright}] \end{array}$$

1 [○○▷]
7 [○○▷]

ある。なお、被調査者④と⑨、特に⑨が突出して(ア)宇和島式、すなわち東京式アクセントの型を示しているが、これについては、その現れ方から推して、標準語の影響を考えざるを得ないようである。この点をめぐっては、さらに多くの資料を集めた段階で後日また改めて検討する機会をもちたいと思う。

3. 今後の課題

以上、各種のアクセント型が接触する愛媛県の南予地方での2拍語アクセントを対象として、地域差との関わりにおける個人差および個人の中での発話ごとの“ゆれ”をめぐっての状況を見てきた。

“ゆれ”は一般には言語の変化過程において生じるものと考えられるが、本稿では、この地のアクセントの系譜について「類」の統合関係などから推しての一つの解釈を示し考察を加えた。1975年調査ではその変化過程を世代差の面からも確認するべく、各地点1名ずつの老年層被調査者の発話も記録したのであった。しかし、いずれにおいても、若年層の場合と比較しての明瞭な違いは見られなかったので、本稿にはその記述を割愛した。が、この結果は老年層の被調査者の数が少ないせいであるかもしれない。今後の検討が必要である。

また、アクセント変化の方向に関しては、一方で、いわゆる標準語化という強い磁力が存在するという点をたえず考慮に入れておかななくてはならないであろう。

調査を実施した時期からすでに10年の歳月が流れた。当地の被調査者達は、いずれも今や立派な社会人として元気に活躍しているはずである。彼らはその後、彼らのアクセントをどのように変容させたであろうか。できればその追跡事例調査を試みてみたいものである。いずれにしても、アクセント変容記述のモデル研究として、当地のアクセントを対象とした新たな調査が早急に計画されるべき時期にきていることを述べて本稿の結びとする。

参 考 文 献

1. 杉山正世『愛媛方言におけるアクセントの調査報告書』(1954)
2. 平山輝男『日本語音調の研究』(1957, 明治書院)
3. 山口幸洋「アクセントにおける移行性分布の解釈」(『国語学』130, 1982)
4. 金田一春彦「アクセントの分布と変遷」(『岩波講座日本語 11 方言』1977, 岩波書店)
5. W・A・グロータース「千葉県アクセントの言語地理学的研究」(『日本の方言地理学のために』1976, 平凡社)
6. 稲垣滋子「言語地理学的方法によるアクセントの研究」(『方言研究の問題点』1970, 明治書院)
7. 徳川宗賢・本堂 寛・佐藤亮一・高田 誠「語アクセントの地理的分布をめぐって」(『日本方言研究会第16回発表原稿集』1973)

(以上, 真田信治執筆)

図3. 鼻が<I類>

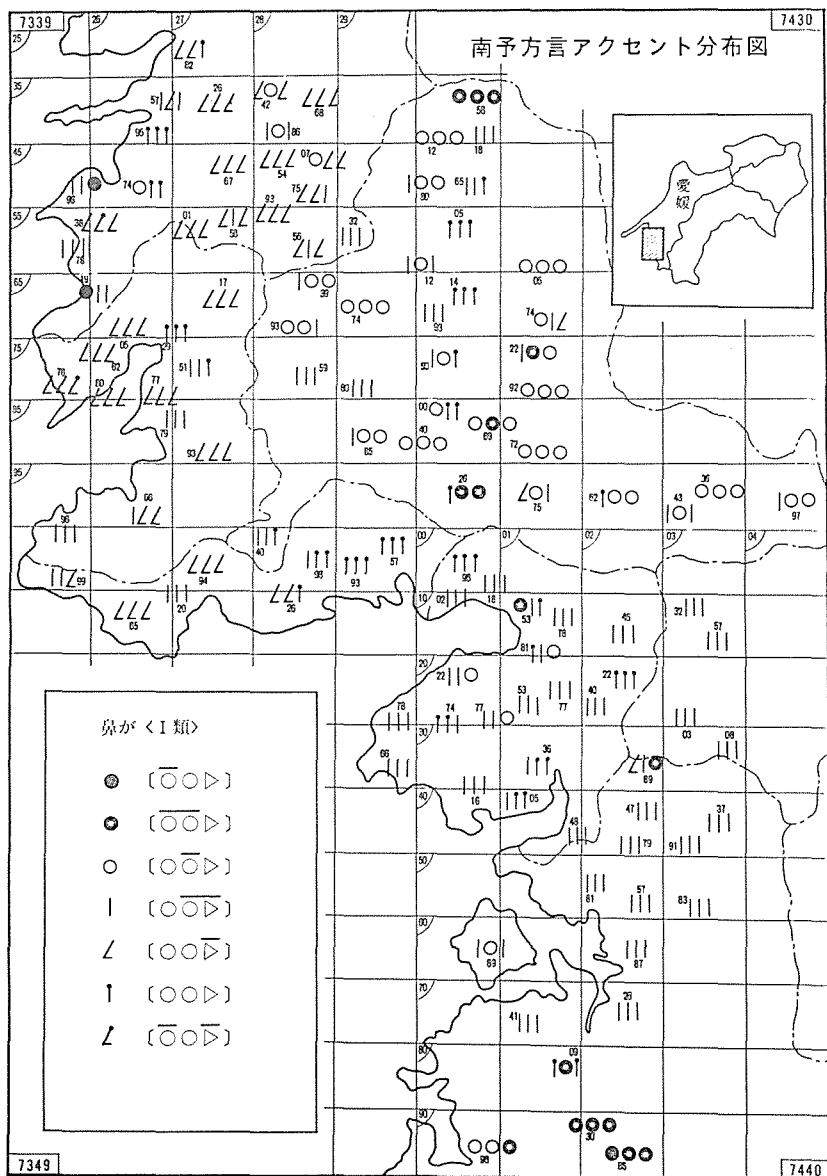


図4. 桃が<I類>

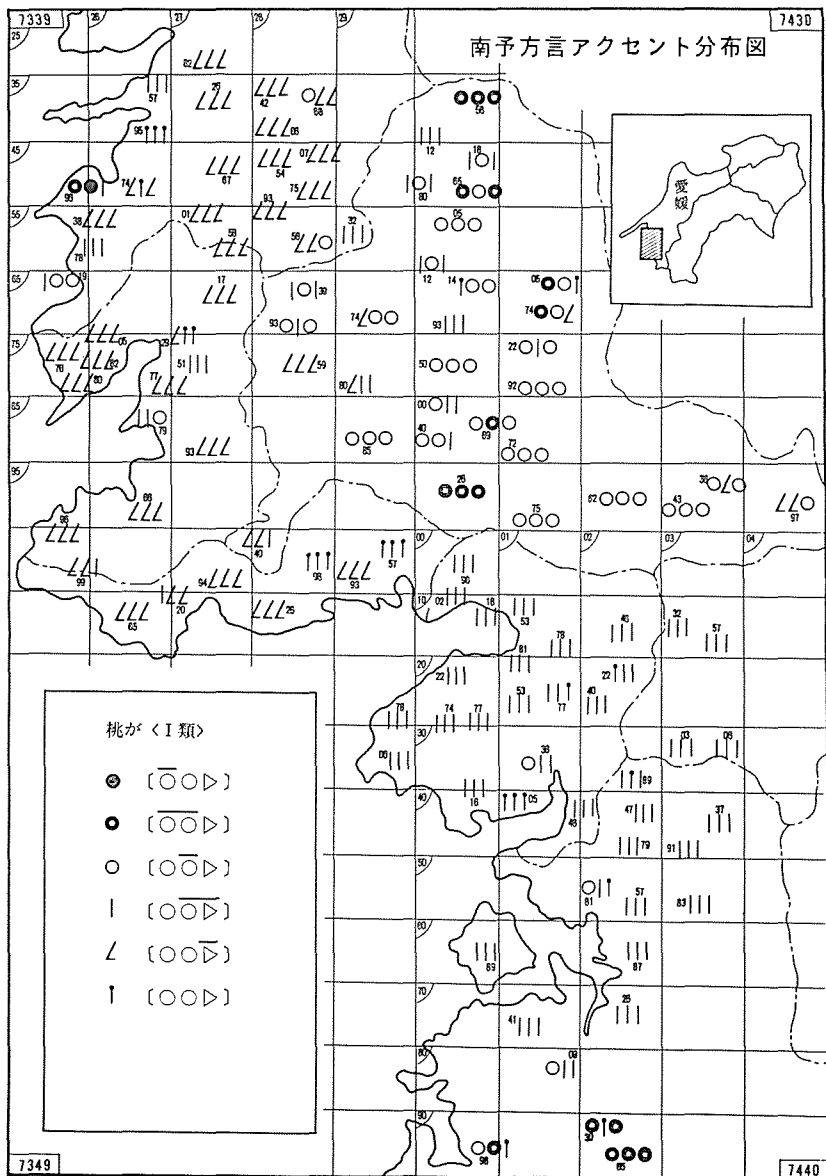


図5. 風が<I類>

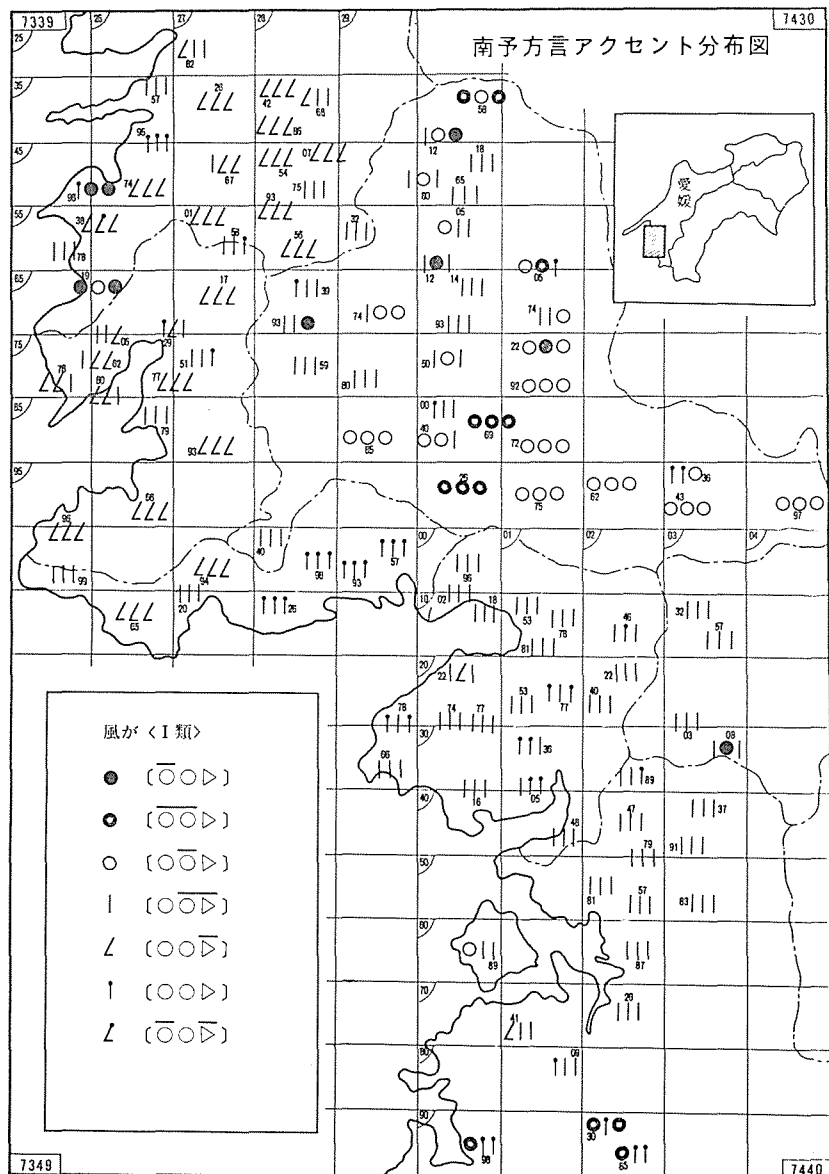


図6. 枝かゝ<I類>

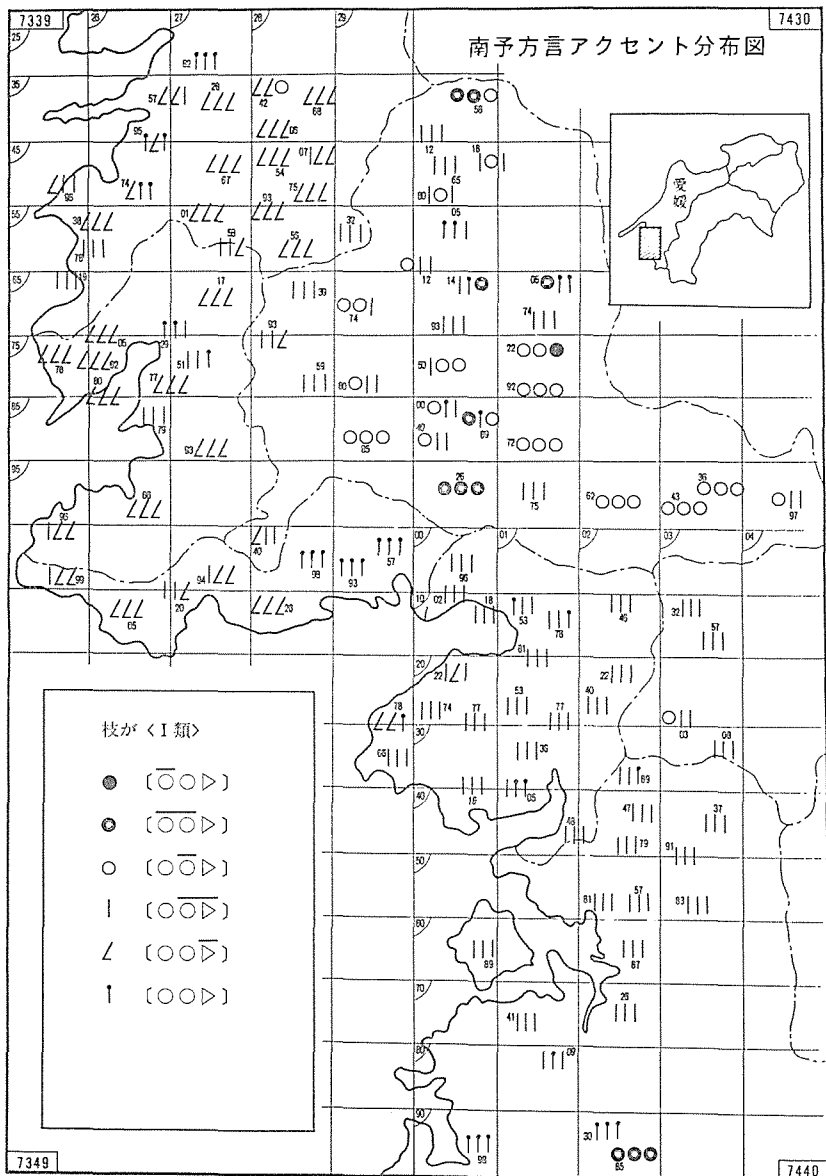


図7. 鳥が<I類>

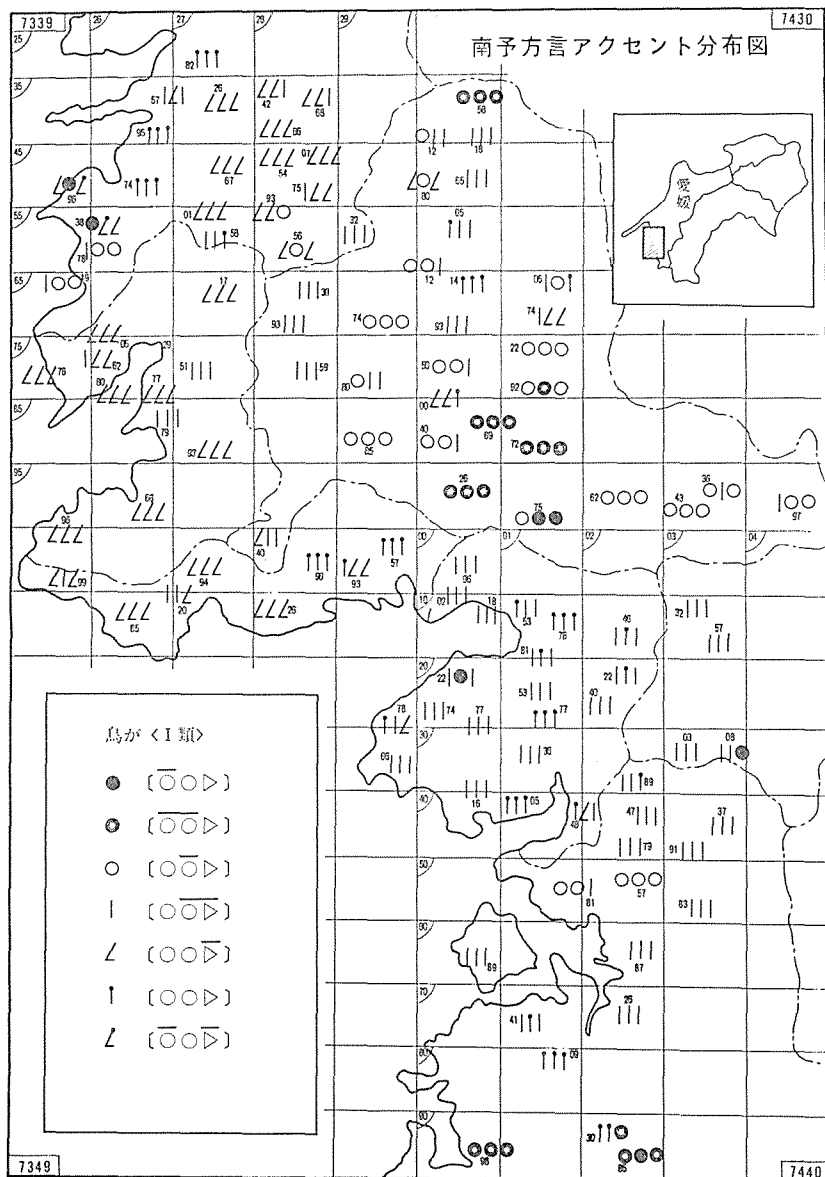


図8. 柿が<I類>

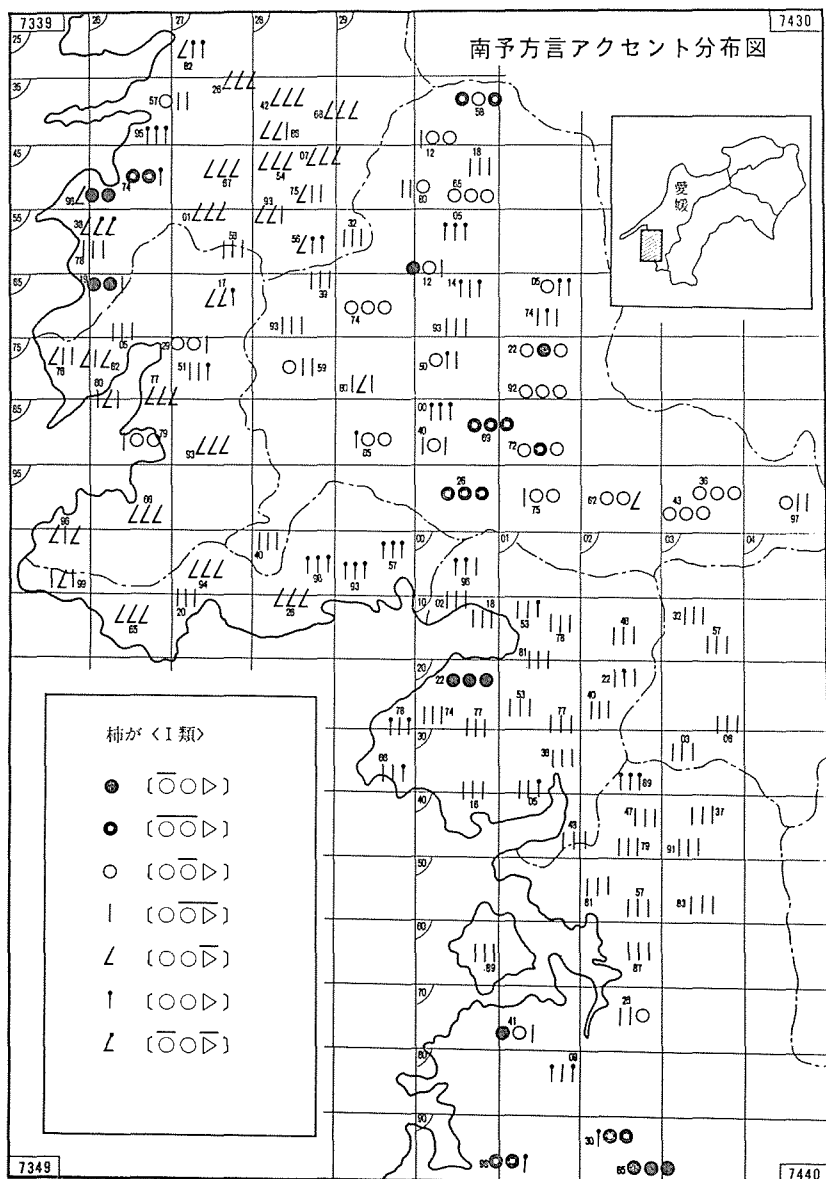


図9. 水が<I類>

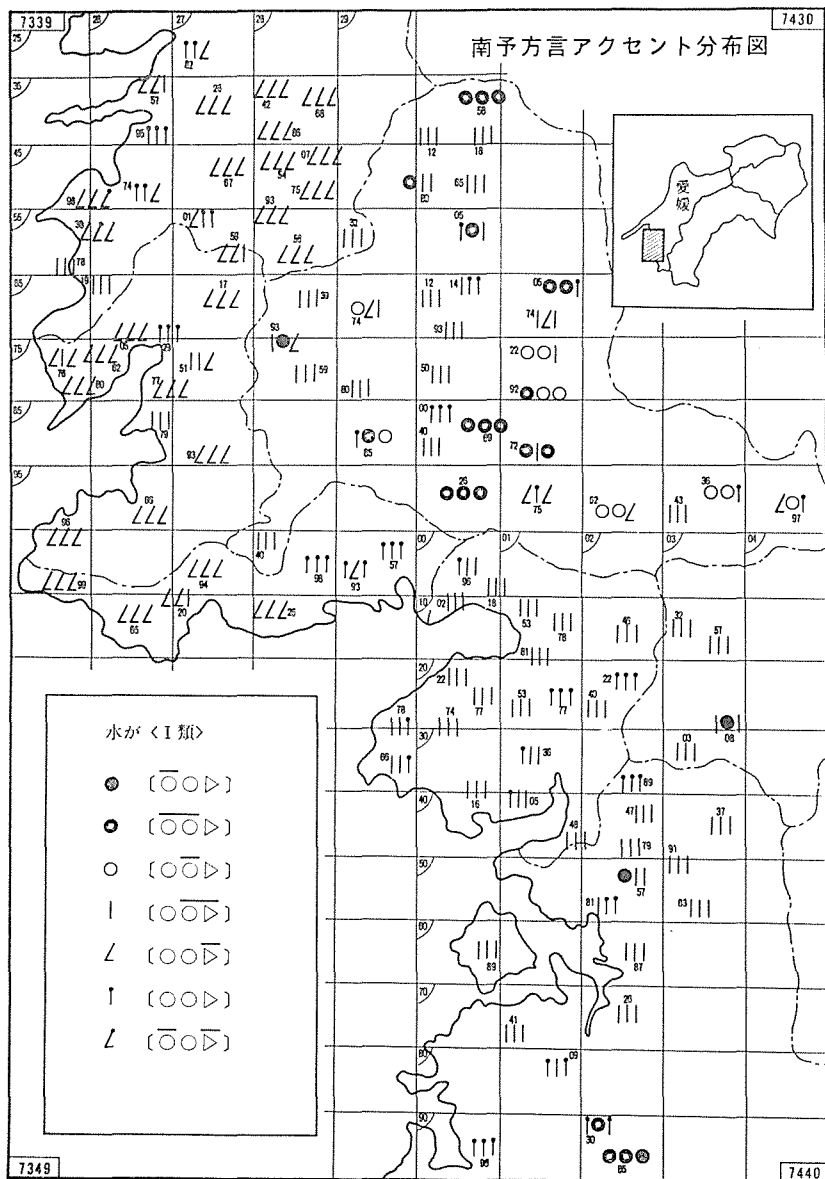


図10. 牛がくI類>

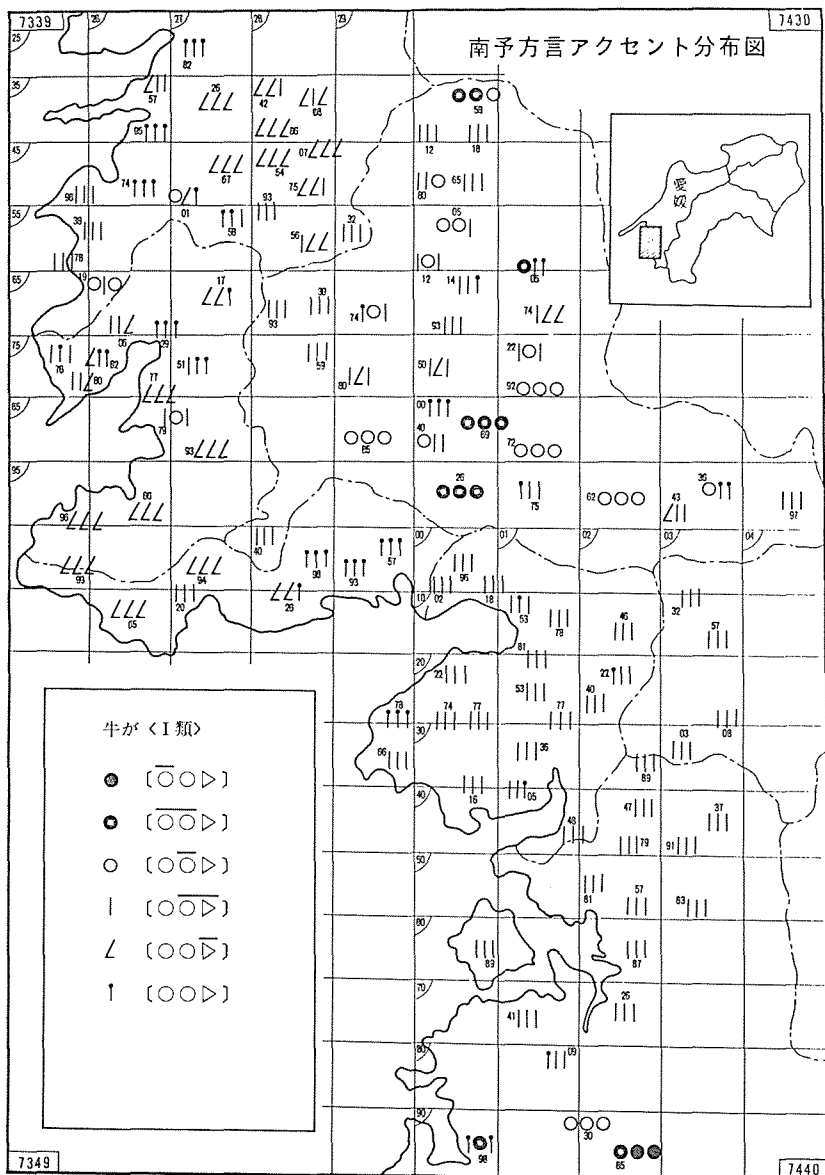
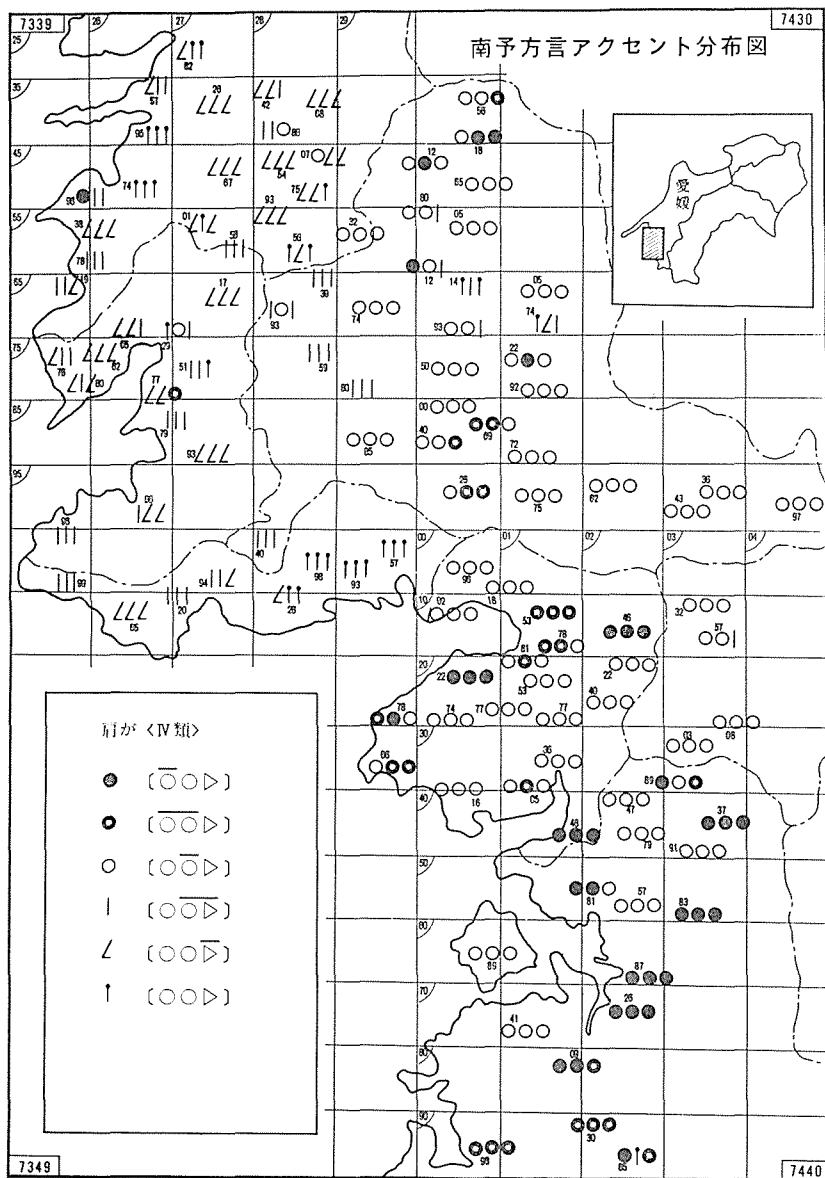


図11. 肩が<IV類>



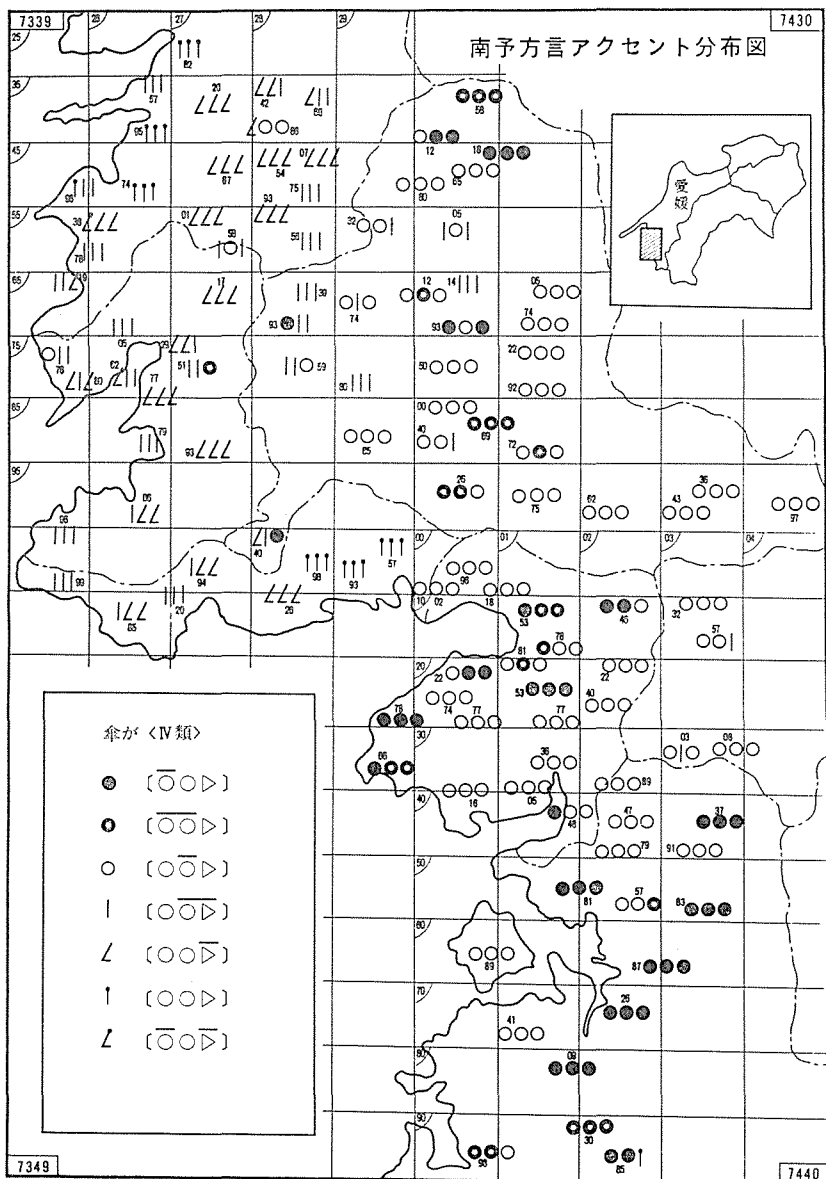


図13. 息が<Ⅳ類>

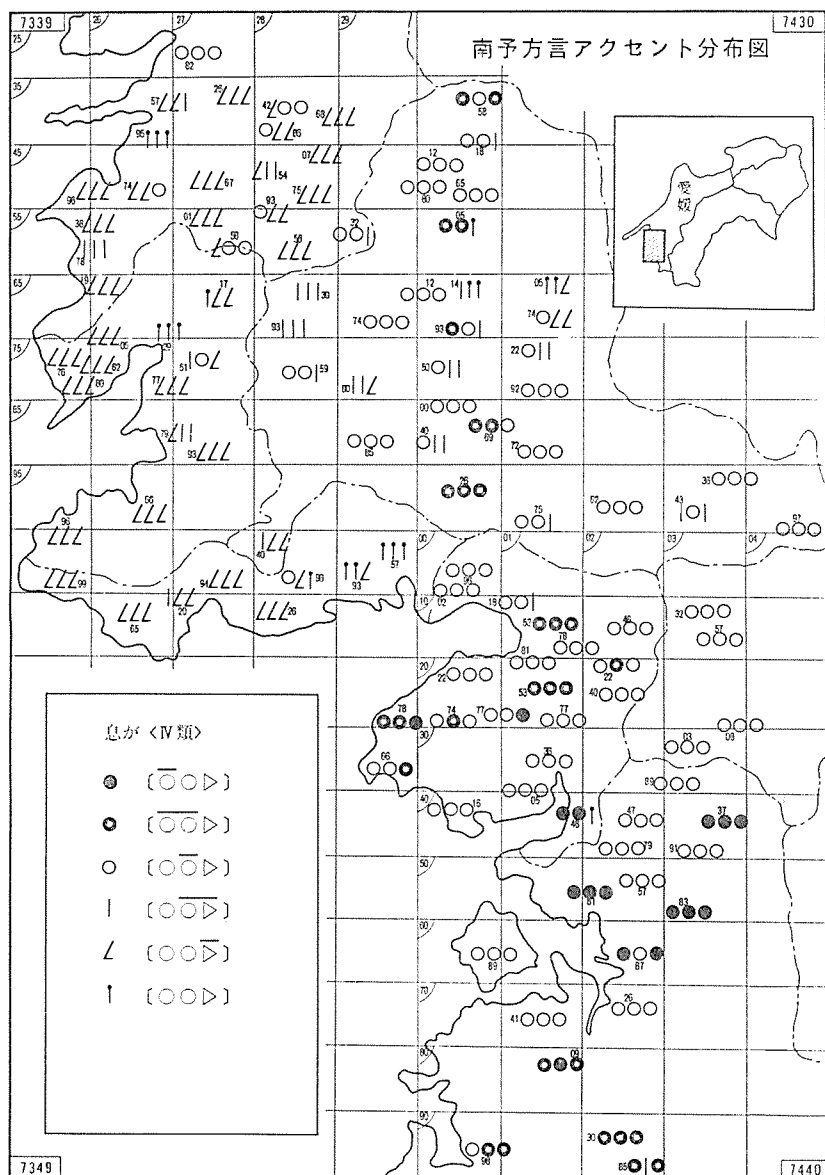


図14. 空が〈Ⅳ類〉

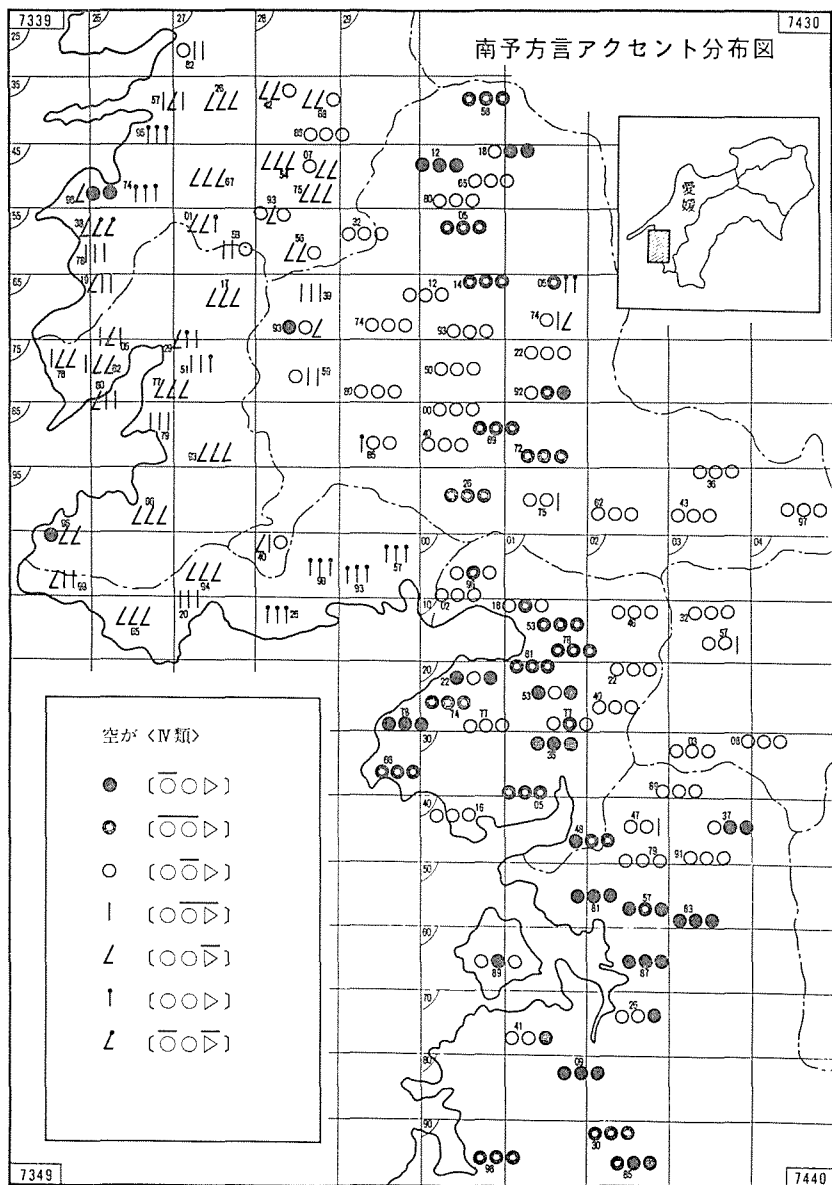


図15. 糸が<Ⅳ類>

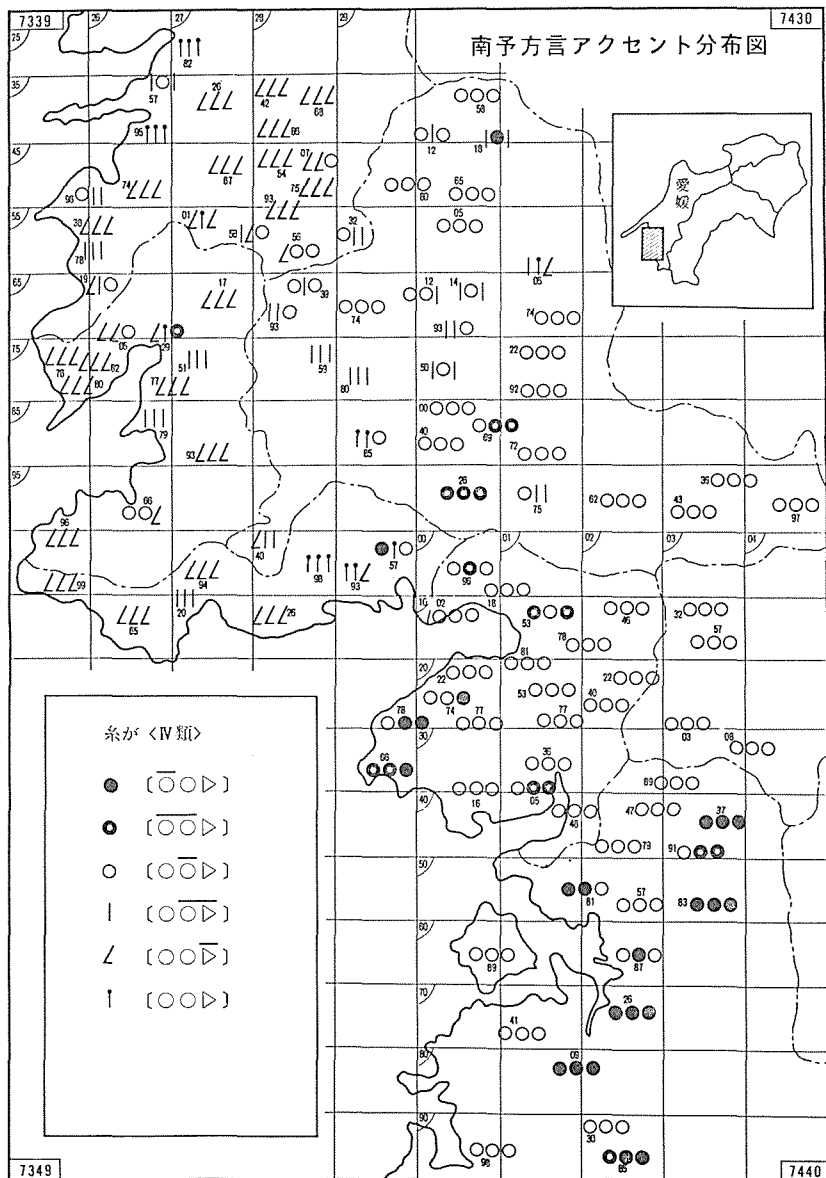


図16. 針が<IV類>

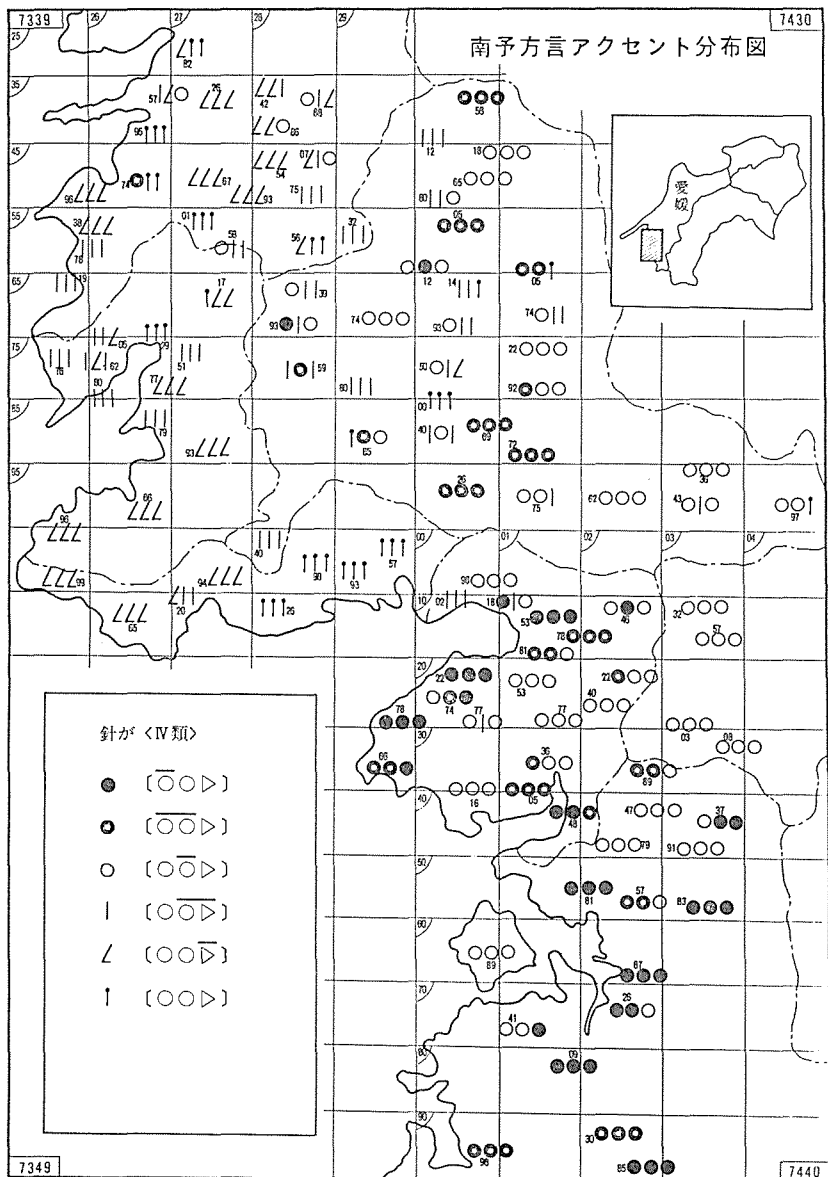


図17. 松が<Ⅳ類>

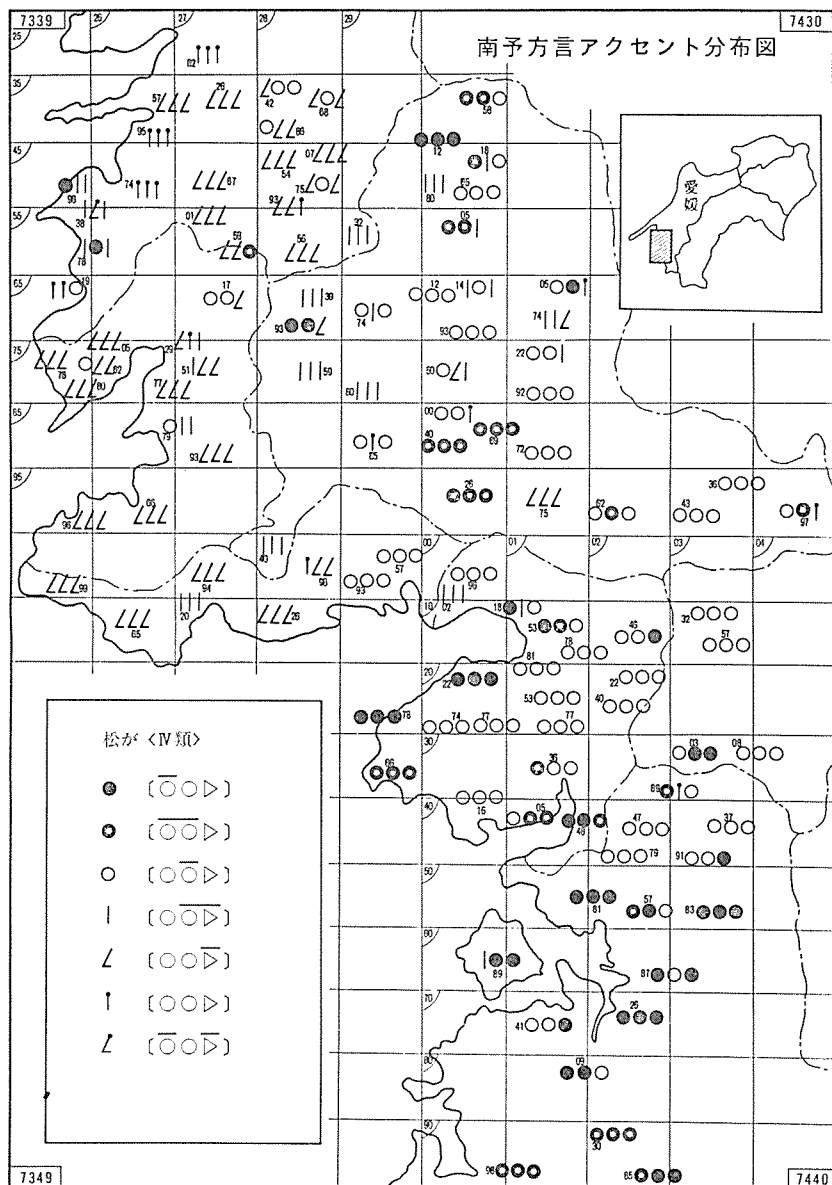


図18. 海が<Ⅳ類>

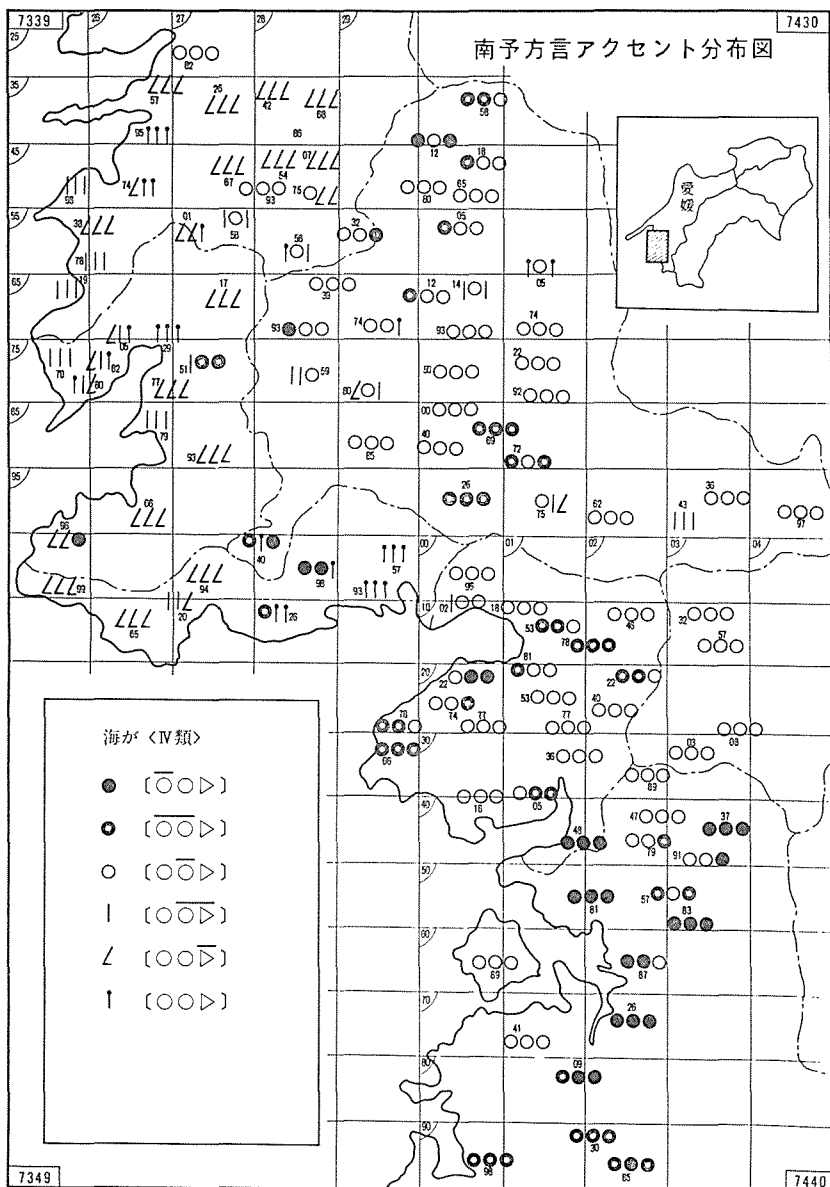
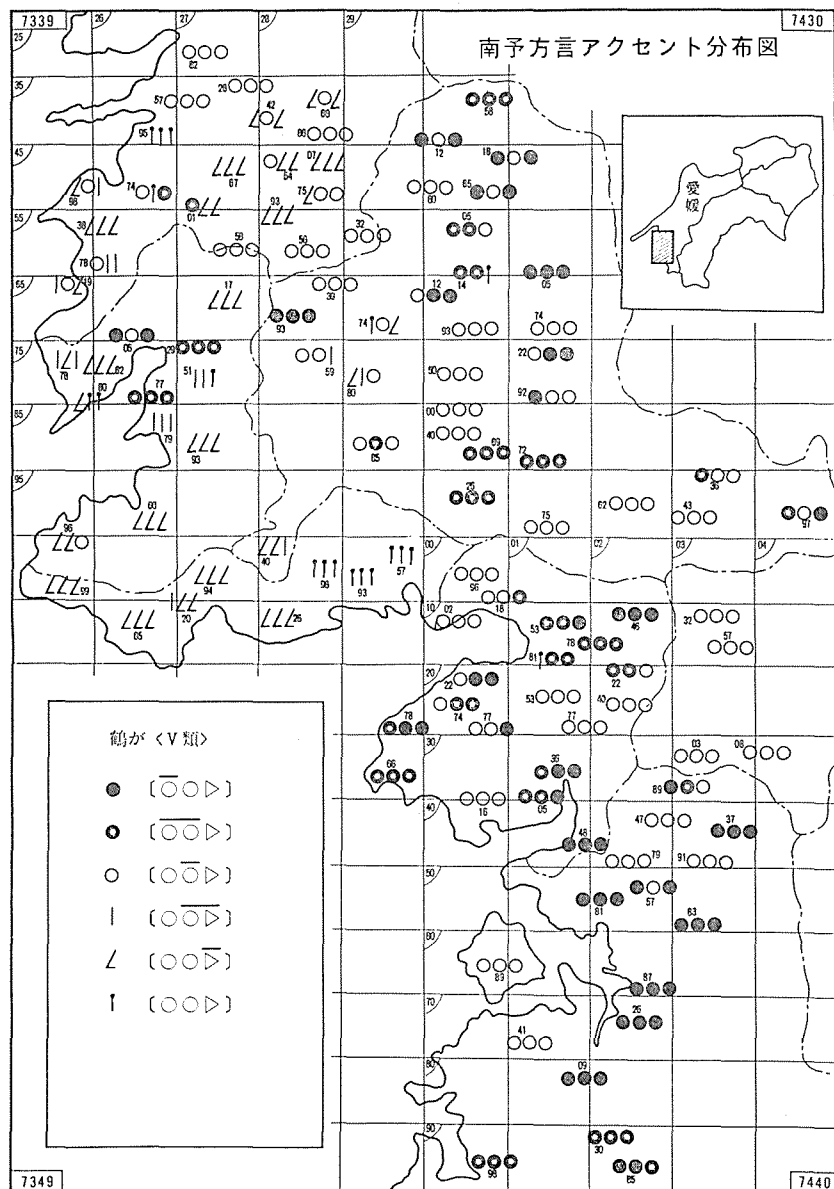


図19. 鶴が<V類>



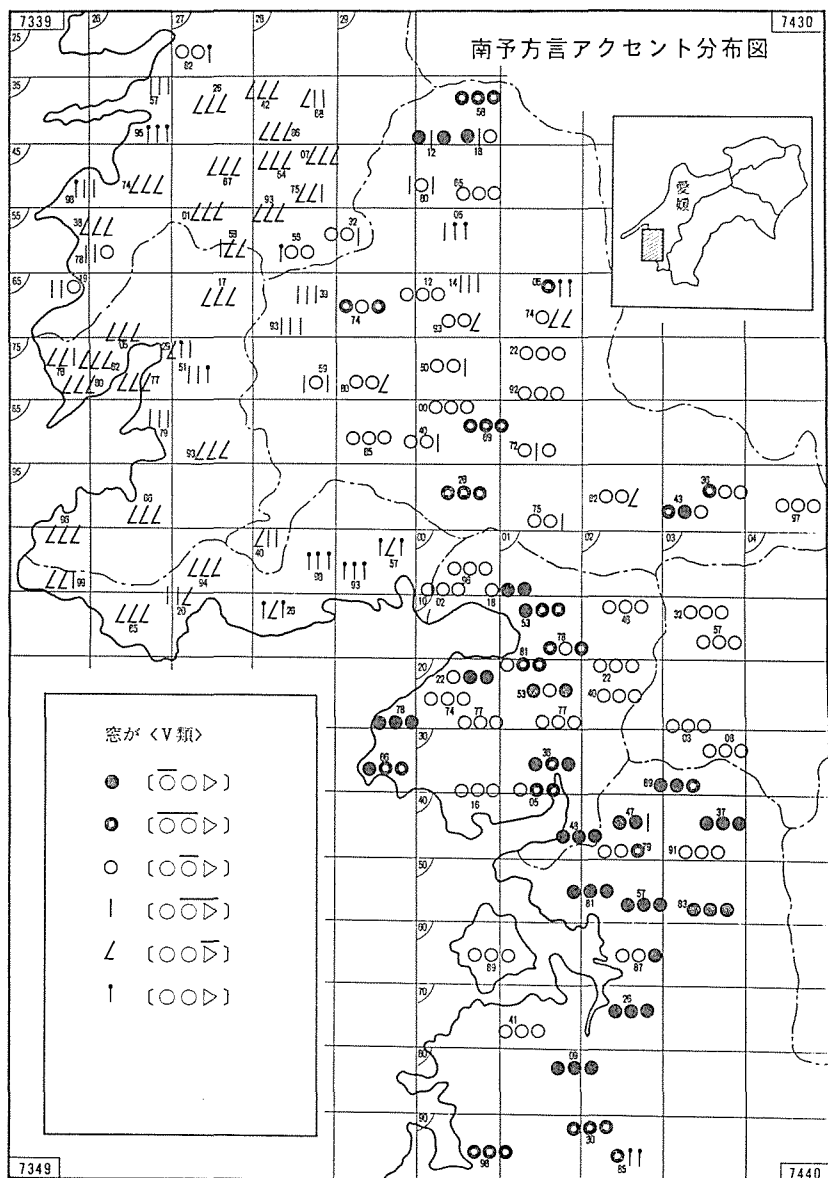


図21. 汗が<V類>

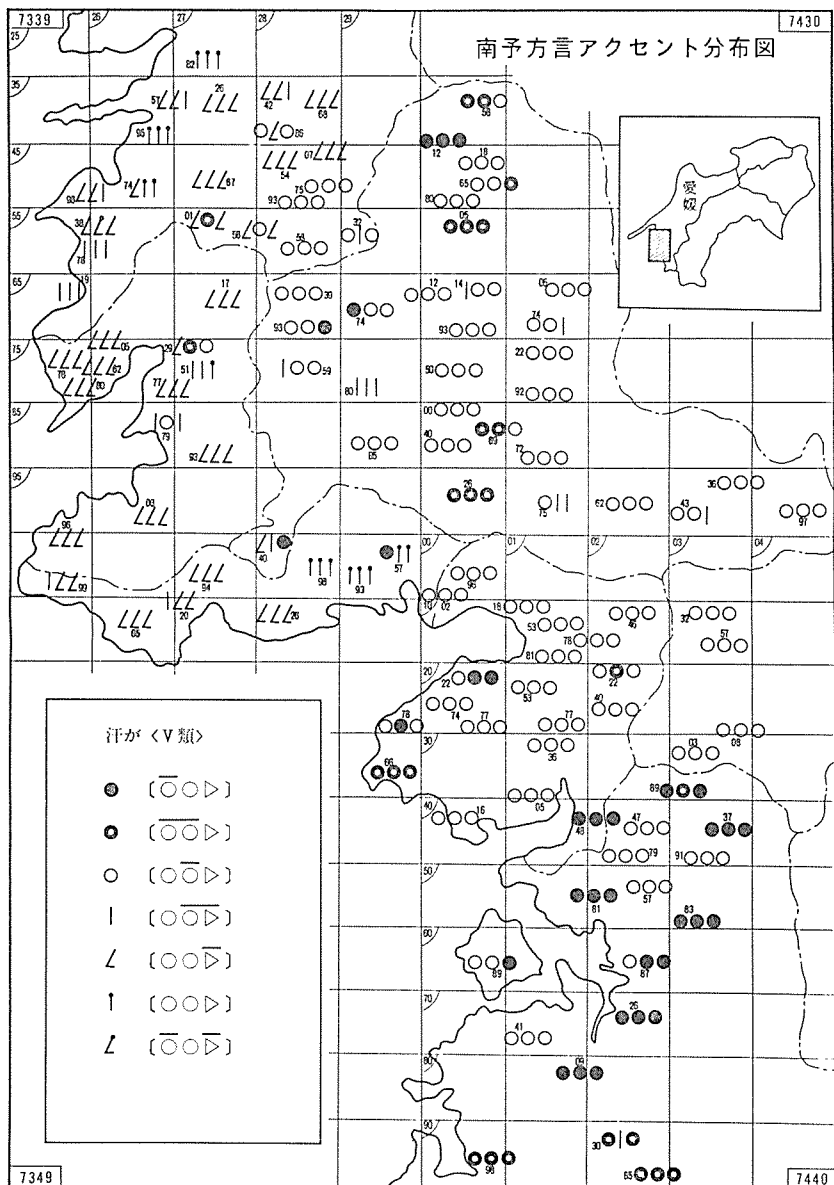


図22. 雨が<V類>

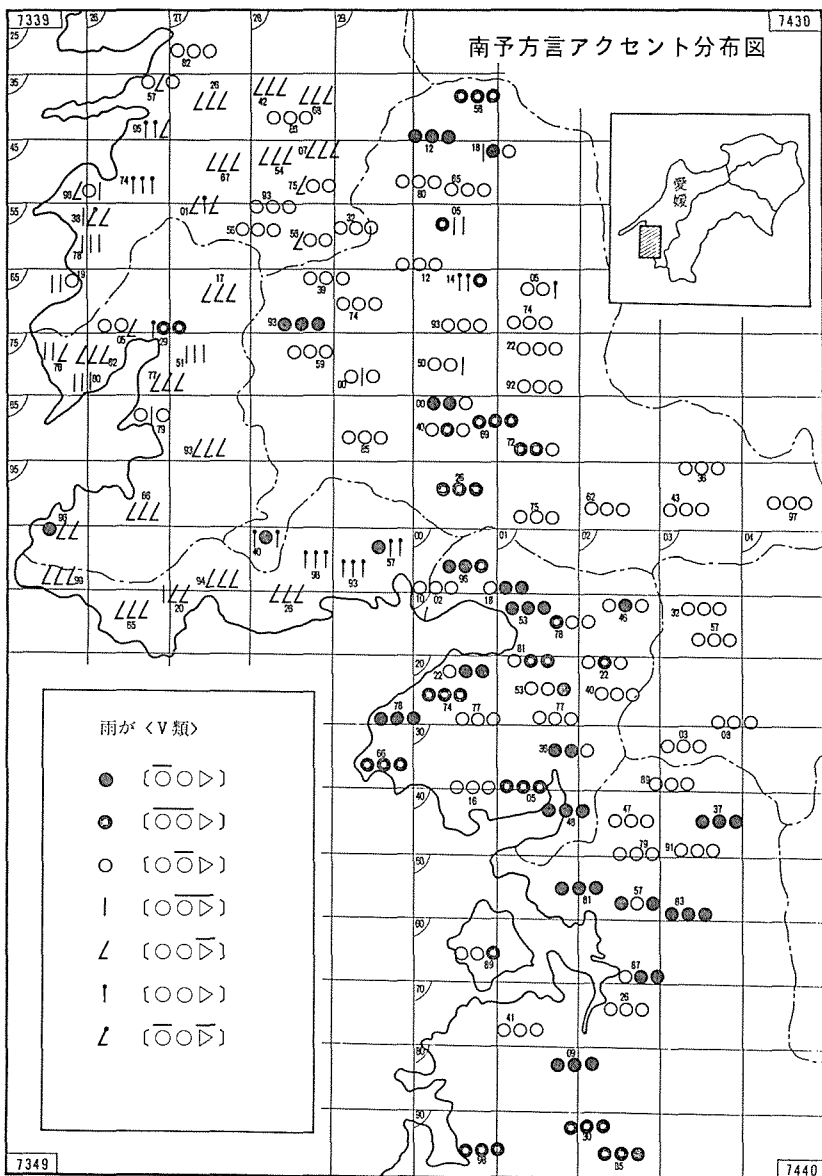


図23. 蜘蛛カ<V類>

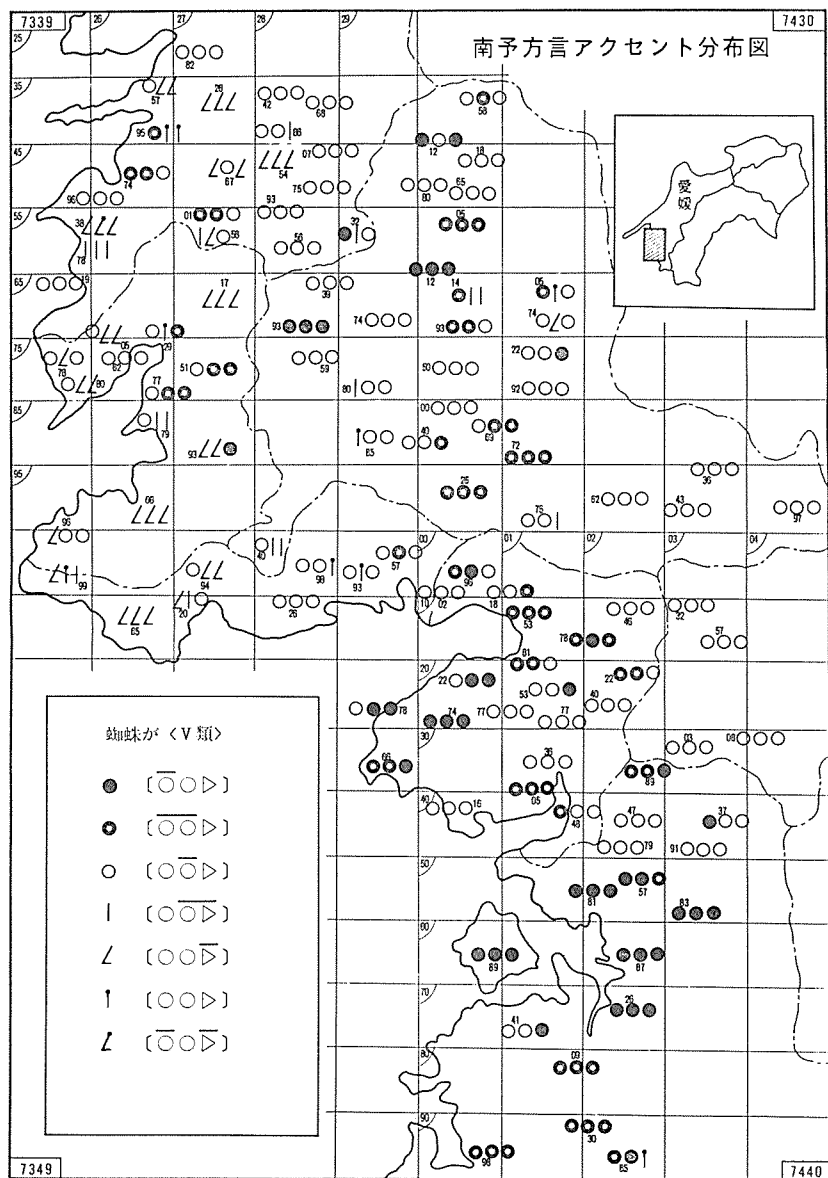


図24. 春が <V類>

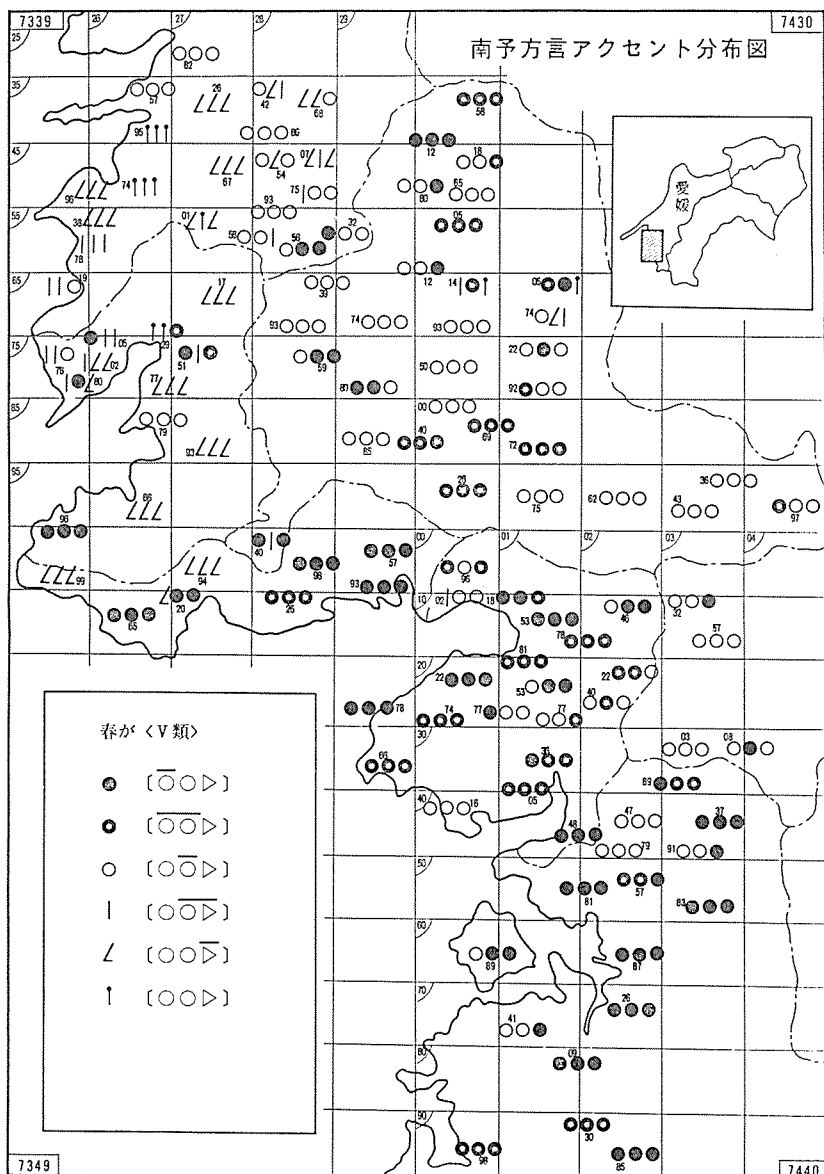
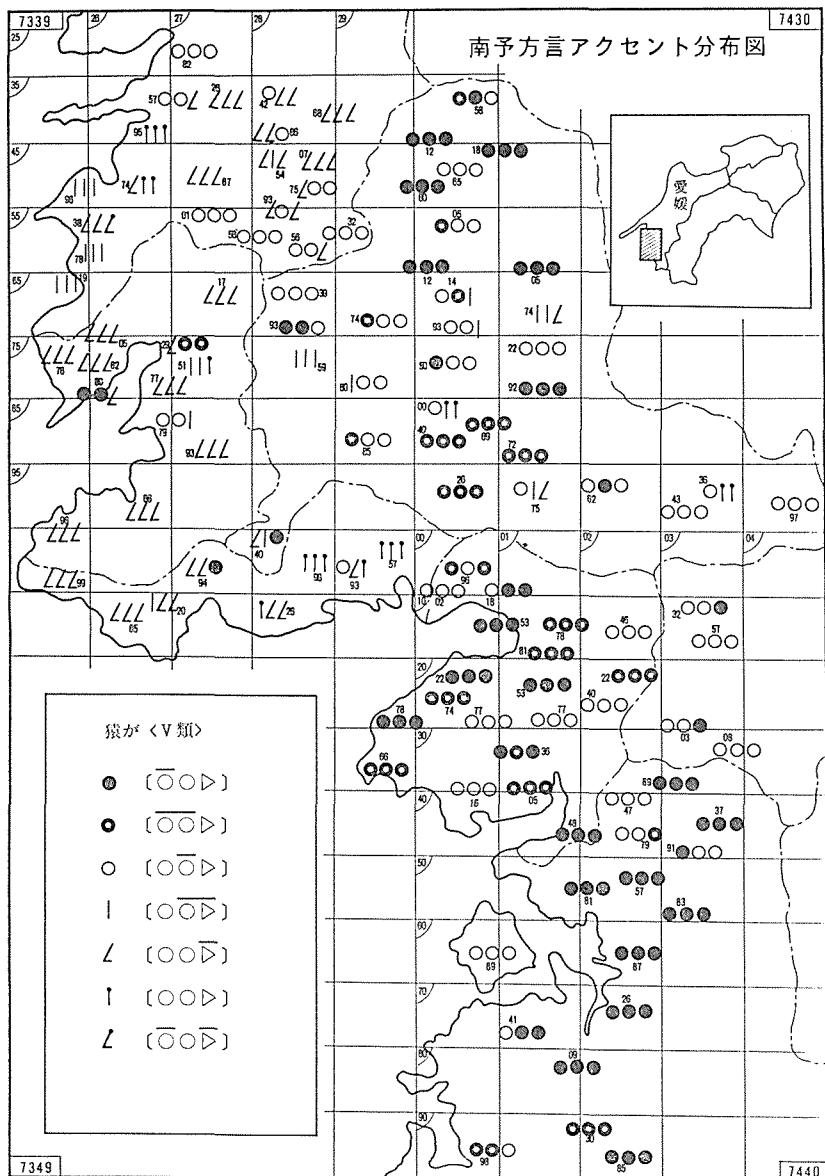


図26. 猿が <V類>



Summary

Introduction

The Linguistic Atlas of Japan (LAJ), based on a survey done from 1957 to 1965, was published in six volumes (1966-1975; revised edition 1980-1985). It contains 300 maps, mostly of lexical items gathered in 2400 localities under the following constraints: one male informant, born before 1903, raised and residing without interruption (or with an interruption of less than three years) in the locality, speaking to a contemporary in the familiar style; all questions were done by the indirect method.

The maps reflect the variety of dialect usage but could not reflect all the varieties in the existing dialects. Therefore the bureau responsible for the undertaking (in the National Institute for Japanese Linguistic Research) organized small-scale surveys to inquire into the reliability of the LAJ materials. This was done by introducing modifications in the survey's methods in order to catch other dialect variants. The findings are summarized in the following pages.

Variations according to the number of informants and the survey's methods (a survey done in Kōchi city)

Considering the restraints that governed the LAJ survey, is the material gathered under such conditions truly representative of the local language? The survey of 55 informants done in Kōchi in 1965 was meant to test this assumption.

The main results are:

1. for the LAJ professor Doi (Shigetoshi) had interviews with one informant; our test survey done under the same restraints but based on 10 informants revealed a 89% concordance.
2. ten informants were chosen for each of the following categories:
 - A. age and sex as for the LAJ survey, but with a history of longer absence from the locality
 - B. age and residence as for the LAJ survey but with female informants
 - C. residence and sex as for the LAJ survey but born between 1914 and 1918
 - D. residence and sex as for the LAJ survey but born between 1951 and 1953The B group was found to be the nearest to the LAJ results, followed by A, C and D in that order.

3. Whereas the LAJ kept to indirect questioning, this time we suggested through leading questions the dialect forms; in another test, the standard was given and translation in dialect was elicited. No marked variants from the LAJ were found.

Although limited to the Kōchi area, this test survey justifies the reliability of the LAJ material.

Variations according to age inside one locality and the influence of the geographical distribution

(a survey done in the vicinity of Utsunomiya city)

The aim of the survey was to ascertain the influence of the age factor on either side of a set of isoglosses. In a farming community outside the city of Utsunomiya (110 kms north of Tokyo, Tochigi Prefecture), 57 male and female informants were chosen from each age group: the oldest was 90 at the time and the youngest 15 (1968).

The problems of language shift we wished to study were the following:

1. a nearby dialect form in expansion has not yet entered the language of the community.
2. some precursory signs of this expansion are already discernible.
3. these precursory signs are affecting one generation of speakers, for instance the younger generation.
4. if the new form has superseded the older one, did the latter leave some relict forms?

Twenty-two items were chosen which had their isoglosses in the vicinity.

The following questions were asked:

1. Do you know the word?
2. Have you always used it?
3. Did you use it in the past but have you stopped using it?
4. Have you started to using it recently?

The results are shown on the tables pages 55–87.

Variations according to age and locality

(a survey done in the Hayakawa valley, Itoigawa city, Niigata Prefecture)

The aim of this test survey was to elucidate the variations in space and time. The LAJ maps are drawn to show the local dialect areas, but inside each surveyed locality several dialectal variations are supposed to co-exist.

The test survey of 1969 was done in 27 localities along the length of the

Hayakawa valley. For each locality, one informant was chosen within each ten year's bracket: 10,20,30,...90; a total of 274 local informants, male or female were interrogated. Forty lexical items were chosen for which some variations were expected.

The results are:

1. items for which the age factor rather than the geographical factor has a predominant influence: figures 1 to 7
2. items for which the geographical factor rather than the age factor has the greatest influence: figures 8 to 14
3. items for which both factors are at work: figures 15 to 30
4. besides the age and the space factors, new variations of local origin appeared: figures 31 to 32
5. where several varieties co-exist, rather than age or space, several distinct patterns appear: figure 33

Further remarks:

- a) although the dialect distribution varies greatly, no important influence of the standard language could be observed.
- b) besides the influences coming from outside and entering the valley from the river mouth, some changes arise in the central area (former village administration area).
- c) besides the case of the new dialectal forms originated in the valley, there was also interaction between several lexical types which produced a lexical differentiation rather than the disappearance of one of the lexical types.
- d) the geographical distribution of lexical types seldom shows a diagonal pattern.

We feel that further investigation is required to determine the relationship between the nature of the lexical items and their geographical patterns.

Variations in space (diatopic) and in situation (diaphasic)

(surveys done along the Kumagawa river in Kumamoto Prefecture)

The LAJ survey asked for the linguistic form used with family or intimate friends. The test surveys done in Kumamoto chose aged informants; for each LAJ item, in addition to the informal speech form they were asked to use such an item in a formal situation. We wanted to know the influence of the change of situation on the map distribution and on the map interpretation.

The main results are:

1. for many items, the formal situation produced the standard language.

2. the rate of standard language use differs according to items.
3. in a formal situation, the informants tended to use not the Tokyo standard but the standard of an earlier period, namely the Kyoto-Osaka standard prevalent before 1867.
4. the dialect form used in the cultural centre of the area often became the formal language form used in a neighboring area.
5. lexical types in formal speech situations were found to be informal types of some limited area; on the LAJ maps many of these types were found to have a large distribution.
6. Lexical items in different situations: variations are greater when speaking to hearers from outside the area. In the case of interlocutory forms, the differences in social standing between speakers was the main cause for the variations.
7. the use of interlocutory forms in concrete situations, differs widely according to informants, but each informant had a fixed norm for each situation.

Variations according to locality, to age and to situation

(a survey done on Hachijōshima island, 290 kms. south of Tokyo)

The survey was done in 1978 and its aim was to ascertain the influence of three factors: age, place and situation. In each of the five main villages of the island, five families were chosen where grandfather, father and son were living together. The questionnaire contained lexical and syntactic items. The following situation were set up:

1. addressing the two other members of the family
2. addressing an intimate friend
3. addressing a school teacher
4. addressing a person from outside the island

The main results were:

1. the geographical factor is clearly at work in the case of the two older generations; the use of the standard language among the younger generation obliterates this factor, although the degree of standard use differs according to locality.
2. the language of the older generations shows little influence of the standard.
3. when speaking with people from outside the island the prevalent language is the standard. There is also a clear tendency with the older generation to avoid the dialect when speaking to the children.
4. In the case of the syntactic items, the children's generation shows interferences

between the standard and the dialect, giving rise to new formations.

The lexical field of the LAJ items

(a survey done in central west Japan)

The maps of the LAJ show the lexical varieties for one word; this word is supposed to have only one meaning, and the linguistic analysis centers around the lexical changes seen on the map. To check the lexical contents of some of the items a special survey was done in 1970. Two areas were chosen: one in the mountains between Hyôgo and Okayama Prefectures, one along the coast of the Inland Sea. We chose 70 localities strung along one valley; in each locality one old male informant was questioned.

The LAJ survey contained six items, each expressing a different shade or aspect of the meaning of "to carry". The maps are: 64:to carry a baby; 65:to carry a bundle on one's back; 294:to carry a bundle on a single shoulder; 66:to carry a log on one shoulder; 67: to carry a bundle on both ends of a pole; 68: to carry a bundle suspended on a pole between two people.

In the new survey the lexical field "to carry" was further divided into 32 different concepts, describing all possible ways of "carrying" something. The results are shown on a glottogram in which the various words are ranged. We can draw the following conclusions:

1. the answers registered on the LAJ maps show a degree of confusion; the reason is now clear: placed before a rather narrow number of choices within a large lexical field, each informant made a choice that did not always hit the centre of the lexical field.
2. the same dialect form is found to have a narrower or larger lexical field depending on different areas; the LAJ therefore presents distributions areas which have to be interpreted by means of the related lexical forms.
3. although the LAJ maps allow the tracing of clear word boundaries, in fact, the multiple relationship in the lexical field proves how risky it is to draw conclusions from these boundaries.

The same informant ten years later

(a Kyûshû survey)

The customary dialect survey tries to elicit answers from one informant within a restricted period of time; it is not always possible to obtain equally satisfactory answers on all items. In this test survey the informant of the LAJ survey was again interrogated after an interval of ten years to find out whether

changes had occurred and why. Nineteen informants in the Kyûshû survey of 1960 were visited in 1970 and were once again asked all the items from the first survey.

The results were: completely identical lexical answers were obtained in 64% of the lexical items, yet among these lexically identical answers there were phonetic fluctuations in 10.9% of the cases; 25.1% of the lexical divergences were mostly due to the use of the standard language. Dialectal forms that differed from the earlier survey were found in 10 % of all items; in addition in 3% of the cases, the informant claimed that he had never used the dialect word supposedly given by him ten years earlier. The cause of such phenomena when further analyzed seemed to be:

- a) the dialect form had withered in the meantime
- b) the informant had given a wrong answer during the first survey
- c) a dialect form from a neighboring region had entered the informant's area
- d) a new dialect form had developed
- e) the answer attributed to him ten years earlier had actually been given by the informant's wife or another person; this should have been noted in the first survey's protocol
- f) the first answer was lexically near in meaning to the second answer
- g) the first answer had a wider lexical range

Geographical and individual tone variations

(a survey done in the southwest of Ehime Prefecture)

The survey's aim: to elucidate the problem of dialect tone patterns with a view toward a future geographical study. In view of an oft voiced criticism that geographical studies of the tone systems are too much centered on the "elements" of the system, we aim to tackle the distribution of the systems in a structural approach.

The southwest of Ehime Prefecture was reported to have several contiguous tone systems; our surveys done in 1973 and 1975 brought the following results.

1. the different tone systems are not separated by a clear boundary but are characterized by a transition area.
2. In the area where the tone systems meet, the speakers show individual differences and the speech of each speaker shows fluctuations.
3. in the localities where words with different tones meet, one observes a tone pattern in which elements of both systems are interwoven.

索引

- (1) 見出しは、内容がうかがえるよう比較的長めに立てた。
- (2) 見出しは、単純に五十音順に並べるのではなく、内容的に関連するもの
をなるべく一箇所にまとめるようにした。例えば、「東京式アクセント」と
「京阪式アクセント」は、“(東京式)アクセント”“(京阪式)アクセント”と
して、共に“アクセント”の位置に載せてある。
- (3) 見出しは、本文の表記とかならずしも一致させてはいない。本文の記述
を内容的にまとめて登録したり、形式を統一したりしたためである。

あ 行		
(東京式) アクセント	330, 354	新しい語の採用を拒んでいる人 …… 89
(京阪式) アクセント	333	新しい語を取り入れた人 …… 89
(一型) アクセント	337	(地域独自の) 新しい表現 …… 147
(標準語) アクセント	351	新しい方言形の発生 …… 138, 142
(明浜町式) アクセント	333	移住 …… 38
(宇和島式) アクセント	330	一地点の言語変化 …… 89
(宇和町式) アクセント	333	「糸魚川調査」 …… 96
(八幡浜式) アクセント	333	(実際の語の) 意味 …… 272
(吉田町式) アクセント	330	(設定された項目の) 意味 …… 272
(安定した) アクセント	347, 351	(範疇の異なる) 意味 …… 285
(不安定な) アクセント	343, 347	意味の曖昧化 …… 278
アクセントに関するはっきりとした		意味の区別の曖昧化 …… 315, 316
規範意識	351	(別の) 意味の語の混入 …… 318
アクセントの移行性分布	343	(接触地帯における) 意味の状況 …… 292
アクセントの系譜関係	340, 344, 347, 355	意味のずれ …… 303
アクセントの部分体系の分布	321	意味のずれによるしみ出し …… 176
アクセントの弁別意識をめぐっての		意味の断面 …… 282
調査過程	328	意味の地域差 …… 281, 292
アクセント移行の方向	344	意味の違いによる語の分布状況 …… 292
アクセント事象の分布	321	(質問項目とは) 意味の違う語 …… 295
(パロールとしての) アクセント相	343	(語による) 意味の中心の違い …… 280, 290
アクセント変容記述のモデル研究	355	意味の使い分けに関する情報 …… 287
新しい語形の先兵隊	307	意味の使い分けの不安定で臨時的な 状態 …… 288
		意味の特殊化 …… 316
		意味の広がりゆれ …… 317

意味の不安定さ …………… 278, 289
 意味の変化 …………… 315
 (『日本言語地図』の項目にあたる)
 意味を専門に表わす語 …………… 278
 (関連) 意味項目 …………… 285, 286, 288
 (隣接) 意味項目 …………… 273, 285
 (各語の使用される) 意味条件 …… 279
 (地図の項目, 質問の) 意味条件
 …………… 263, 285
 (『日本言語地図』の項目の)
 意味的に周囲に位置する動作 … 268
 意味範囲の限定 …………… 2
 (地点による) 意味範囲の違い
 …………… 282, 285
 意味範囲の変化 …………… 317
 (特殊な) 意味分野 …………… 316
 (隣接) 意味分野 …… 58, 125, 176,
 251, 317, 318
 (隣接) 意味分野の語の混入 …… 312
 意味用法の分担 …… 143, 145, 147,
 287, 315
 意味用法の分割・分担の争い …… 145
 (複数語の重複) 意味領域
 …………… 273, 278, 279
 (重複) 意味領域に入る項目 … 280, 290
 意味領域の拡大 …………… 284, 288
 意味領域の拡散化 …………… 278, 288
 意味領域の重なる複数の語 …… 280
 (語の) 入れ替え …………… 89
 親の出身地のことば …………… 45
 音位転倒 …………… 309

か 行

(下流方向からの) 外的影響 …… 147
 回答の不安定な状態 …………… 273
 外来者の使ったことば …………… 45
 (語形間の) 葛藤 …… 96, 111, 128,
 137, 145, 146
 家庭内のコミュニケーション …… 261
 過渡的語形 …………… 117

可能動詞 (ヨメル・ヨムルの類) …… 215
 関西方言 …………… 170
 緩衝地帯 …………… 289, 321, 343
 聞き取り (記録) の誤り …………… 317
 (『日本言語地図』が提示する) 境界
 …………… 290
 境界線 …………… 287, 321
 境界地帯 …………… 61, 263, 273,
 287, 288, 309
 共存 …………… 67, 130
 (同義語の) 共存 …………… 145
 (第二次) 共通語 …………… 111
 (地方) 共通語 …… 170, 172, 218,
 242, 243, 252, 309, 317
 (西日本) 共通語 …… 170, 172, 202,
 310
 共通語の勢力 …………… 36, 186
 共通語の方言訳 …………… 14
 共通語を使う親しくない相手 …… 257
 (外来者に対する) 共通語使用 …… 253
 (場面・世代による) 共通語使用
 の違い …………… 237
 共通語的意識 …………… 310
 共通語的表現 …… 36, 130, 136, 170
 共通語化 …… 36, 124, 146, 166, 184,
 188, 192, 202, 218, 236, 246,
 247, 252, 255, 260, 273
 (地方) 共通語化 …………… 203, 310
 共通語化の速度 …………… 260
 (活用語尾を) 共通語化する傾向 … 249
 共通語形と語形が一致する方言形
 …………… 202, 218
 共通語形の使用頻度 …………… 253
 共通語形の翻訳 …………… 40
 (あらたまった場面で使われる)
 共通語形・標準語形 …………… 295
 『熊本県言語地図集』 …………… 159
 (意味×地域の) グロットグラム ……
 281, 292
 (年齢×地域の) グロットグラム … 154

(場面×地域の) グロットグラム	164, 207
言語形成期	1, 9, 27
言語地層学の比喩	154
(構造) 言語地理学	6
(社会) 言語地理学	6
言語地理学が体系の要素しか扱いえないとする批判	321
言語の関心	38
謙讓語	254
(古い表現と新しい表現の) 交替	98, 113, 138, 309
(じわじわとした) 交替	61
(分布の) 後退	58
高低に関する弁別意識	337
(被調査者の) 誤解	313
国立国語研究所地方研究員	10
	50, 296
語形変化の芽	142
語源	184
語源意識	124, 139, 180
個人差	226, 321, 345, 355
誤答の混入	309, 317
異なった年齢層別の複数の言語地図の対照	91
個別的, 臨時的な回答	115, 309
孤立的語形	38
混交	255, 256, 257
(共通語形との) 混交	245, 254, 259, 260
混在	109, 112, 134, 139, 143, 178, 188, 242, 278, 306
混在分布	196
混在地帯	176, 287, 289

さ 行

(音声的) 差異	300, 317
(語形的) 差異	300, 318
(分布の) 最前線	68, 83
(異なった体系が) 錯綜して存在する	

地帯	321, 345, 347
錯綜分布	137, 158, 172, 178, 184, 188, 198, 318
支え持ち動作という範疇	285
支え持ち動作の言語地図を総合的に解釈した研究	292
散在	61, 64, 86, 215, 216, 311, 312, 318
残存	56, 63, 68, 70, 76, 80, 82, 88, 307, 347
散発語形	36
「知っているか」	52
質問順序	205
(被調査者の) 質問への対処の仕方	290
質問方法	10, 205
(なぞなぞ式) 質問法	9, 13, 20, 21, 40, 43, 45, 46, 97, 123, 135
(翻訳式) 質問法	11, 14, 43, 45, 46
(誘導式) 質問法	13, 43
(語の) 死滅の姿	154
(席次に関する) 社会制約のゆるみ	133
自由回答	97
使用語	98, 109, 121, 128, 133, 135, 137, 140, 162, 271, 272
使用地域	126
上位概念の語形	174
衝突	308
消滅寸前の語	56, 186
「知らない」	98, 99, 109, 121
新形	105, 106, 109, 112, 239
新古に関する意識の乱れ	190
新古の差	287
新古の情報	67
(上位場面への) 侵入	166, 188, 198, 200

(下位場面への共通語形の) 侵入	188, 202, 203
(共通語形の) 侵入	116, 124, 192, 215
(関西方言形の) 侵入	170, 202
(空から降ったような) 侵入	273
(鼻音の) 侵入	122
(若い層への新しい) 侵入	66
新方言	238, 260
世代差	229, 243, 260
(複雑で連続的な) 接触状況	290
接触地域	273, 278, 287, 308, 315, 323, 343, 345
全集落調査(シラミツブシ)	93
全数調査	261
尊敬語	254
尊敬体	212, 214, 220, 226
ぞんざい体	212, 214, 220, 222, 226

た 行

待遇価	224, 226
待遇価の高い形式	208
待遇価の高い共通語形	176, 226
待遇価の高い俚言形	226
待遇価の低い共通語形	176
待遇価の低い語形	176
待遇価の低い俚言形	226
待遇の要素	254
対立	64, 124, 344
多義性の範囲	271
(後部要素の) 脱落	184
男女の差	28, 54
(語の) 誕生の姿	154
地域差が顕著にあらわれ、場面差が目立たない項目	165, 207
地域差と年齢差が連動的に現れる項目	96, 113
地域差と年齢差の交差	137
地域差の軸と年齢差の軸との組み合わせ	

わせ	92
(音声による) 地域差の見られるもの	237, 244
(語形による) 地域差の見られるもの	237
地域差の見られないもの	237, 248
地域的中心地の影響力	147
地図収載語形と非収載語形	25
(細かな) 地点密度	288, 289
(『日本言語地図』の) 地点密度の網目	288, 289
調査態度の違い	312
地理的・場面的分布状況	180
地理的分布の濃さ	74
丁寧体	212, 214, 220, 222, 257
(共通語形の) 丁寧体	212, 222, 226
(共通語的な) 丁寧体	220
点在	311
伝播	80, 122, 238, 273
同一家族の3世代	229
等語線	47, 58, 61, 89, 90, 105, 112, 124, 138, 147, 281
同席者の発言	305, 318
特定地点における各年齢層別調査	91
特定年齢層についての地理的分布調査	91
『土佐言葉』	12
『土佐方言集』	12
『土佐方言の研究』	12
飛火のように伝わった新しい勢力	80
(新しい形との) 取り替え	60
(全年齢層における一せい) 取り替え	61

な 行

内省	54, 285
(知っているという) 内省	56
(新古や頻度についての) 内省	273
(古いことばという) 内省	57

（昔は使わなかったという）内省 …	79
『日本語地図の検証調査』 ……	2
『日本語地図作成のための調査』 ……	9, 10, 12, 21
『日本語地図』の作成のための調査項目 ……	96, 159, 267, 296
『日本語地図作成のための調査票』 ……	1, 12
年齢差 ……	49
年齢差と地域差が連動していないもの ……	98
農村対市街地 ……	26
は 行	
話し相手の違い ……	91
（あらたまった）場面 ……	157
	158, 162
（くつろいだ）場面 ……	158, 162
（上位の）場面 ……	157, 158, 162
（下位の）場面 ……	158, 162
（質問の動作の）場面 ……	279
（使用）場面 ……	62
（設定）場面 ……	176, 204, 226, 261
（調査対象）場面 ……	162, 204
（日常の方言的）場面 ……	174
（『日本語地図』で対象とした）場面 ……	157
場面によることばの使い分け ……	92
	157, 202
場面差 ……	91, 165,
	166, 168, 170, 172, 174,
	178, 180, 184, 188, 194,
	198, 200, 202, 208, 210,
	212, 214, 216, 218, 220,
	222, 226, 229, 251, 254,
	259, 260
（疑問をあらわす終助詞の）場面差 ……	215
（文末助詞による）場面差 ……	214
場面差の明瞭な項目 ……	226

場面差と地域差の両方が認められる項目 ……	165, 207
場面差が顕著にあらわれ、地域差が目立たない項目 ……	164, 207
場面設定のしかた ……	234
場面分布 ……	172, 188, 190,
	196, 202, 215
（共通語形の）場面分布 ……	192
（俚言語と共通語形との）場面分布 ……	182
ばらつき語形 ……	38
（非）鼻音の進展状況 ……	124
鼻音の退縮状況 ……	122, 124
（1地点1人の）被調査者 ……	9
被調査者の学歴 ……	28
被調査者の在外歴 ……	1, 11, 12,
	27, 28, 40
被調査者の条件 ……	1, 9, 11, 27
被調査者の条件からはみ出る人達 …	9
被調査者の性別 ……	11, 27, 40
被調査者の属性 ……	91
被調査者の年齢 ……	11, 27, 38, 47
被調査者の年齢、性別、階層の統一 ……	91
被調査者以外のことばの混入 ……	310,
	312
微妙なピッチ相 ……	323, 343
標準語の影響 ……	351
標準語化 ……	351, 355
標準語形 ……	74, 78, 79, 81, 310
文化的中心地で使われている俚言形 ……	178, 202
文化的中心地のアクセントからの借用 ……	345
文体差 ……	2, 279, 306
文体的価値 ……	180
文体的性格 ……	218
（相補的）分布 ……	72, 126,
	186, 285, 315
（空からばらまかれたような）分布	

併存	310
併用	56
併用処理	38, 57, 65, 67, 79, 109, 136, 158, 168, 194, 237, 251, 273, 278, 306
(ことばの使用者の属性にかかわる)	21
変異相	91
(複数の) 変異相を関連づけつつ	
捉えようとする研究	91
(単一の) 変異相をできるだけ純粋な形でとりだそうとする研究	91
方言形であるとの意識	250
方言世界というものの多彩さ	143
方言で話ができる, 親しいが上位に	
待遇すべき相手	257
方言伝播のプロセス	202
(都市中心の) 放射	273

ま 行

「昔から知っている」	52
「昔は使ったが今は使わない」	52
「昔は使わなかったが今は使う」	52
無名状態	115, 133, 134
面接による聞き取り調査	52, 97
物の非存在	130

や 行

優勢語形	21, 25, 36
誘導	40, 43, 45, 46, 100, 103, 118, 120, 121, 123, 129, 234, 235, 236, 239, 247, 271, 272, 288, 299, 300, 305, 308
誘導の場面	239, 249
誘導使用	98, 99, 103, 109, 114, 121, 124, 126, 127, 128, 129, 135, 137, 139, 143
ゆれ	343, 355
(意味の広がり)のゆれ	317

(個人的な) ゆれ	345, 355
(発話ごとの) ゆれ	321, 343, 345, 351, 355
予想語形	12, 13, 40, 43, 52
「予想語形を聞いたことがある」	40
「予想語形を使う」	40
「予想語形を全く知らない」	40
よその土地のことば	295

ら 行

理解語	98, 99, 103, 109, 114, 121, 124, 126, 128, 129, 131, 133, 135, 137, 140, 143, 271, 273
理解語の分布	139
「理解するが使わない」	121
臨時的な語形	309
類義的別語	145
「類」の統合の有り様	339

わ 行

話題の違い	91
-------	----

国立国語研究所報告 84

方言の諸相

『日本言語地図』検証調査報告

昭和 60 年 3 月

国立国語研究所

東京都北区西が丘 3 丁目 9 番 14 号

電話 (03) 900-3 1 1 1 (代表)

N.D.C. 分類番号 818

本書の市販品発行所

〒101 東京都千代田区三崎町 2 丁目 22 番 14 号

(03) 230-9 4 1 2

株式会社 三省堂

国立国語研究所の 《社会言語学研究》報告書概要

○八丈島の言語調査（報告 1, 1950 年）

創立後、最初の共通語化の調査。共通語化の程度は共通語使用場面の量に比例することが示されている。

○言語生活の実態（報告 2, 1951 年）

福島県白河市で行なった共通語化の調査。日本での社会言語学的調査研究の先駆として注目されている。学歴、生育地、両親の出身地の 3 要因が共通語化に強く関与する等の結果が得られた。

○地域社会の言語生活（報告 5, 1953 年。報告 52, 1974 年）

山形県鶴岡市における約 20 年を隔てた 2 度の共通語化調査。2 回の調査から、共通語化の要因は時勢により異なること、共通語化には 4 つの段階が考えられる等が明らかになった。

○敬語と敬語意識（報告 11, 1957 年。報告 77, 1983 年）

上記同様、同一地域社会（愛知県岡崎市）で約 20 年を隔てて行なった調査。敬語使用の判断基準は 2 回の調査でほとんど変わらなかった。使い分けに関しては、現在の方がうまくなった等のことが明らかになった。

○共通語化の過程（報告 27, 1965 年）

北海道入植者を対象に行なわれた世代差の調査。語彙は 1・2 世間で、文法や音韻は 2・3 世間で、共通語化の程度に落差がある等が指摘された。

○待遇表現の実態（報告 41, 1971 年）

鳥根県松江市の 1 家庭での 24 時間録音調査に基づく。日常会話における待遇表現の表れ方には、会話の種類・機能・話題が関与することを、話しことば資料の電子計算機処理を通じて解明する。

○言語使用の変遷(1)（報告 53, 1974 年）

福島県北部の農・山村での調査。年齢と学歴の 2 要因が共通語化に強く関与し、音声・語彙は共通語化しやすいが、文法は比較的方言形式が残しやすい等の結果が得られている。

○大都市の言語生活 —— 分析編 —— （報告 70-1, 1981 年）

東京・大阪での大規模な調査。調査は、語彙・文法・アクセント・敬語などの言語的側面のほか、住民意識・ふるさと意識など多岐にわたる。「見ラレル」より「見レル」という語形が優勢であることをはじめとして、大都市住民の言語状況について多くの知見を示す。

○大都市の言語生活 —— 資料編 —— （報告 70-2, 1981 年）

上記の「分析編」では繁雑を避けて示さなかった各種統計結果を網羅する。

○企業の中の敬語（報告 73, 1982 年）

日立製作所・日鉄建材という一般企業の従業員各層が、日常の勤務生活の中で敬語をどう意識し、どう使っているかを解明しようとした調査。敬語行動に関わる要因を、職階を軸としつつ在社歴・職種など種々の観点から分析する。

○言語行動における日独比較（報告 80, 1984 年）

日本とドイツ、それに在日外国人の三者間における言語行動の相違について、対照言語学的に比較分析を試みた報告書。さまざまな生活場面における、それぞれの違いを実施調査によって明らかにしていく。

